静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第 45 集

東　野　遺　跡　Ⅱ

第二東名 No. 143 地点
旧石器時代～縄文時代草創期編

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

長泉町－13
（第１分冊）

２０１４

中日本高速道路株式会社東京支社
静岡県埋蔵文化財センター

序

東野遺跡は世界文化遺産となった富士山の南東側にある愛鷹山東南麓に位置しています。この愛鷹山麓は旧石器時代の遺跡が多く確認され、特に東南麓には旧石器時代から縄文時代を中心として、大規模な遺跡が多く確認されています。

東野遺跡の発掘調査報告書の２冊目である本書では、複数冊に分けて旧石器時代から縄文時代草創期までの遺構や遺物に関する報告を行います。旧石器時代の遺物は、上部ローム層の最下部である第Ⅶ黒色帯からも確認されており、これは日本の旧石器時代遺跡の中でも、最も古い段階にあたると考えられています。本遺跡に隣接する富士石遺跡（第二東名No.142地点）からも、同時期の古い遺物が確認されており、この地域が３万年以上も前の古い時代から、積極的に活用されていたことがうかがえます。

また、愛鷹・箱根西麓地域の特色である旧石器時代の土坑群も確認されました。この土坑群は、陥穴として使用されたと考えられています。これまで確認されていた土坑群は、尾根を横断して、列状に配置されている例がほとんどでしたが、本遺跡で確認された土坑群は、谷部に沿って列状に配置されています。これまで確認されていた例とは、異なる意図があったと考えられ、当該地域の旧石器時代の生活を解明する上で、活用が期待されます。本遺跡の資料は静岡県だけでなく、旧石器時代・縄文時代を研究する上で、非常に重要な意味を持つと考えられます。

本書が、研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、中日本高速道路株式会社東京支社ほか、各関係機関の御援助、御理解をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2014年３月

静岡県埋蔵文化財センター所長

勝　田　順　也

例　言

1　本書は静岡県駿東郡長泉町東野字八分平269－2他に所在する東野遺跡（第二東名No.143地点・CR35地点）の発掘調査報告書である。平成24年度に『東野遺跡Ⅰ（縄文時代以降編・CR35地点編）』を刊行した。本報告書は東野遺跡報告書の２冊目にあたり、『東野遺跡Ⅱ』として旧石器時代～縄文時代草創期の遺構・遺物を所収する。第Ⅰ文化層である第Ⅶ黒色帯から第Ⅷ文化層である休場層直下黒色帯については第１章として第１分冊に、第Ⅸ文化層である休場層から富士黒土層中の縄文時代草創期に該当する石器群は第２章・第３章として第２分冊で扱う。

2　調査は第二東名高速道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、中日本高速道路株式会社（旧日本道路公団静岡建設局）の委託を受け、静岡県教育委員会文化財保護課（旧静岡県教育委員会文化課）の指導のもと、長泉町教育委員会の協力を得て、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施し、平成23年度以降は、静岡県埋蔵文化財センターが同研究所の業務を引き継いで実施した。

3　東野遺跡の確認調査・本調査の期間は『東野遺跡Ⅰ』に掲載した。資料整理の期間は以下のとおりである。

資料整理・本報告書作成　　平成22年４月～平成26年３月

4　現地調査体制は『東野遺跡Ⅰ』に掲載した。平成22年度から平成25年度までの資料整理体制は以下のとおりである。

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

平成22年度（資料整理）

所長兼常務理事　石田　彰	次長兼総務課長　松村　享	専門監兼事業係長　稲葉保幸
総務係長　瀧みやこ	調査課長　中鉢賢治	調査第一係長　勝又直人
調査第二係長　岩本　貴	調査第三係長　溝口彰啓	調査第四係長　富樫孝志
常勤嘱託員　中村雄紀		

静岡県埋蔵文化財センター

平成23年度（資料整理）

所長　勝田順也	次長兼総務課長　八木利眞	主幹兼事業係長　村松弘文
総務係長　瀧みやこ	調査課長　中鉢賢治	調査第一係長　富樫孝志
調査第二係長　溝口彰啓	常勤嘱託員　柴田亮平	

平成24年度（資料整理）

所長　勝田順也	次長兼総務課長　八木利眞	調査課長　中鉢賢治
主幹兼事業係長　前田雅人	総務係長　瀧みやこ	調査第一係長　富樫孝志
調査第二係長　溝口彰啓	常勤嘱託員　田中萌子	

平成25年度（資料整理）

所長　勝田順也	次長兼総務課長　南谷高久	調査課長　中鉢賢治
主幹兼事業係長　前田雅人	主幹兼総務係長　大坪淳子	
調査第一係長　及川　司	第二係長　溝口彰啓	主査　勝又直人

5　本書の執筆は柴田亮平が担当し、勝又直人が加筆・修正した。

6　本書の編集は静岡県埋蔵文化財センターが行った。

7　出土黒曜石の原産地分析は、独立行政法人沼津工業高等専門学校名誉教授望月明彦氏に委託した。遺跡内で確認された焼土の分析調査をパリノ・サーヴェイ株式会社へ委託した。炭化物の年代測定と

樹種同定を株式会社パレオ・ラボに委託した。これらの分析結果は附編に掲載した。

調査で実施した委託事項および委託先は、下記のとおりである。

掘削業務

確認調査その１	丸勇建設株式会社
確認調査その２	丸勇建設株式会社
本調査Ⅰ期	拓和産業株式会社
本調査Ⅱ期	丸勇建設株式会社
本調査Ⅲ期	株式会社小俣組
本調査Ⅳ期	株式会社集組（平成16年度）
	株式会社河西建設（平成17年度）
本調査Ⅴ期	三星建設工業株式会社

測量・遺構実測業務

確認調査その１	株式会社シン技術コンサル
確認調査その２	株式会社シン技術コンサル
本調査Ⅰ期	株式会社シン技術コンサル
本調査Ⅱ期	株式会社シン技術コンサル
本調査Ⅲ期	株式会社シン技術コンサル
本調査Ⅳ期	株式会社シン技術コンサル
本調査Ⅴ期	株式会社東京航業研究所

空中写真撮影は株式会社シン技術コンサルに委託した。

遺物の洗浄・注記作業の一部について株式会社関道建設に委託した。

作業の迅速化を図るため、株式会社ラングに石器実測業務の一部を委託した。

整理作業・保存処理業務委託は平成23年度以降、株式会社パソナに委託した。

8　発掘調査及び整理作業では、以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。

池谷信之・稲田孝司・海部陽介・小崎　晋・笹原千賀子・笹原芳郎・鈴木敏中・高尾好之・高橋　豊・堤　隆・西井幸雄・廣瀬高文・前嶋秀張（五十音順・敬称略）

9　発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

凡　例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

1　本書で用いた遺構・遺物などの位置を表す座標は、すべて平面直角座標第Ⅷ系を用いた国土座標、日本測地系（改正前）を基準とした。

2　調査区の方眼設定は、上記の国土座標を基準に設定した。（X＝－92730.000，Y＝34850.000）を原点（A，0）とし、南から北方向へA～AN、西から東方向へ0～30までの10m方眼を設定し、グリッドと称した。そしてグリッドの呼称は、南西角に該当する交点名を冠した。例えば（AK，21）が南西角交点であった場合は、「AK－21グリッド」となる。

3　整理作業の過程において、現地調査時に付与されたテストピットの名称を、そのテストピットが位置するグリッドの呼称を冠した名称に修正した。例えばAK－21グリッド内にあるテストピットは、「AK－21テストピット」となる。

4　出土遺物は、出土位置を記録した上で取り上げ、この通し番号を遺物番号とした。また、表採・撹乱など出土位置不明の遺物は、30,000番台の遺物番号を任意の順で付与した。

5　遺構図、遺物実測図の縮尺は、それぞれにスケールを付した。

6　色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帳』(農林水産省技術会議事務局監修1992) を使用した。

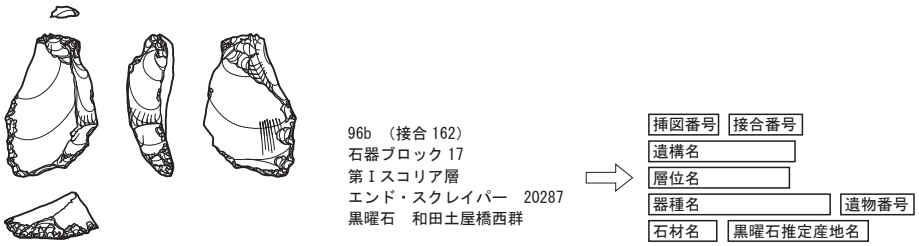
7　土層名・略号は、第１章第１節の土層模式図（第１図）に表示した名称を用いる。

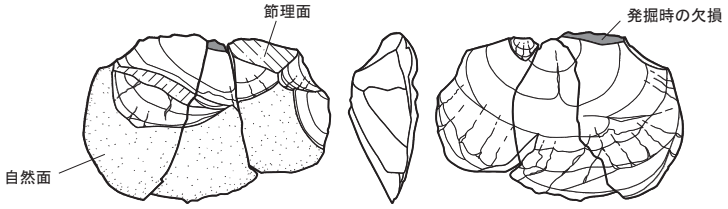
8　遺構番号は礫群・土坑等については○号礫群・○号土坑、石器ブロック・炭化物集中等については石器ブロック○・炭化物集中○としている。

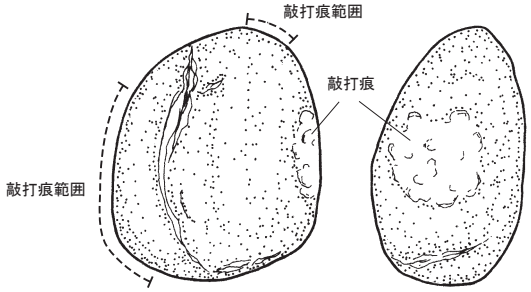
9　礫群と配石の差は、それらを構成する礫の重量による。3000ｇ以上は配石としている。

10　挿図中の記載記号・事項の凡例は以下のとおりである。また石器一覧表中の計測は、実測図の置き方に準じ、以下の方法で行った。

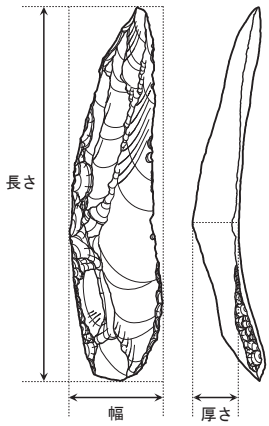
＜遺物実測図凡例＞







＜石器の計測方法＞



目　次

〔第１分冊〕

序／例言／凡例

第１章　旧石器時代（休場層直下黒色帯以下）

第１節　資料の整理・分類について …… 1
第２節　第Ⅰ文化層 …… 3
第３節　第Ⅱ文化層 …… 6
第４節　第Ⅲ文化層 …… 9
第５節　第Ⅳ文化層 …… 27
第６節　第Ⅴ文化層 …… 44
第７節　第Ⅵ文化層 …… 50
第８節　第Ⅶ文化層 …… 73
第９節　第Ⅷ文化層 …… 168

抄録／奥付

〔第２分冊〕

第２章　旧石器時代（休場層）

第１節　第Ⅸ文化層 …… 1
第２節　第Ⅹ文化層 …… 133
第３節　休場層の土坑 …… 147

第３章　縄文時代草創期 …… 149

第４章　まとめ

第１節　旧石器時代 …… 160
第２節　縄文時代草創期 …… 170

附編

第二東名東野遺跡出土黒曜石産地推定結果（沼津工業高等専門学校名誉教授　望月明彦）…… 175
No.143地点遺跡BBⅠ層検出焼土の分析　（パリノ・サーヴェイ株式会社）…… 209
東野遺跡（第二東名№143地点）出土遺物の放射性炭素年代測定
（株式会社パレオ・ラボ　AMS年代測定グループ）‥ 217
東野遺跡（第二東名No.143地点）出土炭化材の樹種同定
（株式会社パレオ・ラボ　黒沼保子）…… 228

附表

石器一覧表 …… 237
礫一覧表 …… 294

写真図版

抄録／奥付

挿図目次

第１図　基本土層模式図……‥ 2
第２図　第Ⅰ文化層中央谷部炭化物集中１
遺構図……‥ 3
第３図　第Ⅰ文化層調査範囲及び遺構配置・
遺物分布図……‥ 4
第４図　第Ⅰ文化層南尾根炭化物集中２
遺構図……‥ 5
第５図　第Ⅰ文化層北尾根出土石器実測図‥ 5
第６図　第Ⅱ文化層遺物分布図…… 7
第７図　第Ⅱ文化層南尾根・南西谷部
出土石器実測図……‥ 8
第８図　第Ⅲ文化層遺構配置・遺物分布図‥10
第９図　第Ⅲ文化層南尾根・南西谷部
遺構配置・遺物分布図……11
第10図　第Ⅲ文化層土坑遺構図（１）……12
第11図　第Ⅲ文化層土坑遺構図（２）……13
第12図　第Ⅲ文化層土坑遺構図（３）……14
第13図　第Ⅲ文化層土坑遺構図（４）……15
第14図　第Ⅲ文化層土坑遺構図（５）……16
第15図　第Ⅲ文化層土坑遺構図（６）……17
第16図　第Ⅲ文化層土坑遺構図（７）……18
第17図　第Ⅲ文化層土坑遺構図（８）……19
第18図　第Ⅲ文化層土坑遺構図（９）……20
第19図　第Ⅲ文化層中央尾根炭化物集中
遺構図（１）……‥22
第20図　第Ⅲ文化層南尾根炭化物集中
遺構図（２）……‥24
第21図　第Ⅲ文化層南尾根炭化物集中
遺構図（３）……‥25
第22図　第Ⅲ文化層南尾根・南西谷部
出土石器実測図……‥26
第23図　第Ⅳ文化層遺構配置図・遺物分布図
……28
第24図　第Ⅳ文化層北尾根石器ブロック１
遺構図……29
第25図　第Ⅳ文化層北尾根出土石器実測図（１）
……30
第26図　第Ⅳ文化層北尾根出土石器実測図（２）
……31
第27図　第Ⅳ文化層北尾根出土石器実測図（３）
……32
第28図　第Ⅳ文化層北尾根出土石器実測図（４）
……33
第29図　第Ⅳ文化層北尾根出土石器実測図（５）
……35
第30図　第Ⅳ文化層中央尾根石器ブロック２
遺構図（１）……‥37
第31図　第Ⅳ文化層中央尾根石器ブロック２
遺構図（２）……‥38
第32図　第Ⅳ文化層中央尾根出土石器
実測図（１）……‥39
第33図　第Ⅳ文化層中央尾根出土石器
実測図（２）……‥40
第34図　第Ⅳ文化層南尾根炭化物集中15
遺構図……41
第35図　第Ⅳ文化層南尾根出土石器実測図‥42
第36図　第Ⅳ文化層南西谷部出土石器実測図
……43
第37図　第Ⅴ文化層北尾根出土石器実測図‥44
第38図　第Ⅴ文化層遺構配置図・遺物分布図

……45
第39図　第Ⅴ文化層中央尾根炭化物集中16
遺構図……46
第40図　第Ⅴ文化層中央尾根出土石器実測図
……46
第41図　第Ⅴ文化層南尾根炭化物集中17
遺構図……47
第42図　第Ⅴ文化層南西谷部出土石器
実測図（１）……48
第43図　第Ⅴ文化層南西谷部出土石器
実測図（２）……49
第44図　第Ⅵ文化層遺構配置図……51
第45図　第Ⅵ文化層遺物分布図……52
第46図　第Ⅵ文化層中央尾根石器ブロック３、
１号配石遺構図（１）……54
第47図　第Ⅵ文化層中央尾根石器ブロック３、
１号配石遺構図（２）……55
第48図　第Ⅵ文化層中央尾根石器ブロック４
遺構図……56
第49図　第Ⅵ文化層中央尾根石器ブロック５
遺構図……57
第50図　第Ⅵ文化層中央尾根石器ブロック６、
１号礫群遺構図……58
第51図　第Ⅵ文化層中央尾根石器ブロック７
遺構図……59
第52図　第Ⅵ文化層中央尾根石器ブロック８
遺構図……60
第53図　第Ⅵ文化層中央尾根２号礫群
遺構図……62
第54図　第Ⅵ文化層中央尾根炭化物集中18
遺構図……63
第55図　第Ⅵ文化層中央尾根炭化物集中19
遺構図……64
第56図　第Ⅵ文化層中央尾根31号土坑
遺構図……65
第57図　第Ⅵ文化層中央尾根出土石器
実測図（１）……68
第58図　第Ⅵ文化層中央尾根出土石器
実測図（２）……69
第59図　第Ⅵ文化層中央尾根出土石器
実測図（３）……70
第60図　第Ⅵ文化層中央尾根出土石器
実測図（４）……71
第61図　第Ⅵ文化層中央尾根出土石器
実測図（５）……72
第62図　第Ⅶ文化層遺構配置図……74
第63図　第Ⅶ文化層遺物分布図……75
第64図　第Ⅶ文化層北尾根遺物分布図……76
第65図　第Ⅶ文化層北尾根出土石器実測図‥77
第66図　第Ⅶ文化層南尾根遺構配置図……78
第67図　第Ⅶ文化層南尾根石器ブロック９
遺構図……80
第68図　第Ⅶ文化層南尾根３号礫群、
炭化物集中20遺構図……81
第69図　第Ⅶ文化層南尾根３号礫群
石器分布図……82
第70図　第Ⅶ文化層南尾根
炭化物集中21・22遺構図……83
第71図　第Ⅶ文化層南尾根遺構外出土遺物
分布図……85
第72図　第Ⅶ文化層南尾根出土石器
実測図（１）……86
第73図　第Ⅶ文化層南尾根出土石器
実測図（２）……87
第74図　第Ⅶ文化層南西谷部遺構配置図‥‥88
第75図　第Ⅶ文化層南西谷部
遺構配置拡大図……89
第76図　第Ⅶ文化層南西谷部石器ブロック10、
４号礫群、炭化物集中23遺構図‥‥91
第77図　第Ⅶ文化層南西谷部石器ブロック10
遺構図……91
第78図　第Ⅶ文化層南西谷部石器ブロック11、
５～７号礫群、３～６号配石、
炭化物集中24遺構図……92
第79図　第Ⅶ文化層南西谷部石器ブロック11
遺構図……93
第80図　第Ⅶ文化層南西谷部石器ブロック12、
８～10号礫群、７～９号配石、
炭化物集中25遺構図……94
第81図　第Ⅶ文化層南西谷部石器ブロック12
遺構図（１）……95
第82図　第Ⅶ文化層南西谷部石器ブロック12

遺構図（２）……96
第83図　第Ⅶ文化層南西谷部石器ブロック13、11号礫群遺構図……97
第84図　第Ⅶ文化層南西谷部石器ブロック13遺構図……97
第85図　第Ⅶ文化層南西谷部石器ブロック14、19号礫群、11号配石、炭化物集中27遺構図……101
第86図　第Ⅶ文化層南西谷部石器ブロック14遺構図……101
第87図　第Ⅶ文化層南西谷部石器ブロック15、20～24号礫群、12号配石、炭化物集中28遺構図……102
第88図　第Ⅶ文化層南西谷部石器ブロック15遺構図……103
第89図　第Ⅶ文化層南西谷部石器ブロック16・17、25～47号礫群、14～26号配石、炭化物集中29～32遺構図……104・105
第90図　第Ⅶ文化層南西谷部石器ブロック16、25号礫群遺構図（１）……106・107
第91図　第Ⅶ文化層南西谷部石器ブロック16、25号礫群遺構図（２）……108・109
第92図　第Ⅶ文化層南西谷部石器ブロック17遺構図（１）……110・111
第93図　第Ⅶ文化層南西谷部石器ブロック17遺構図（２）……112・113
第94図　第Ⅶ文化層南西谷部４号礫群、炭化物集中23遺構図……114
第95図　第Ⅶ文化層南西谷部５～７号礫群、３～６号配石、炭化物集中24遺構図……115
第96図　第Ⅶ文化層南西谷部接合関係図…117
第97図　第Ⅶ文化層南西谷部８～10号礫群、７～９号配石、炭化物集中25遺構図……119
第98図　第Ⅶ文化層南西谷部11号礫群遺構図……120
第99図　第Ⅶ文化層南西谷部12・13号礫群、10号配石、炭化物集中26遺構図……122・123
第100図　第Ⅶ文化層南西谷部13号礫群石器分布図……124
第101図　第Ⅶ文化層南西谷部14～17号礫群遺構図……125
第102図　第Ⅶ文化層南西谷部18号礫群遺構図……126
第103図　第Ⅶ文化層南西谷部19号礫群、11号配石、炭化物集中27遺構図……126
第104図　第Ⅶ文化層南西谷部20～24号礫群、12号配石、炭化物集中28遺構図……128
第105図　第Ⅶ文化層南西谷部25・26号礫群、13号配石、炭化物集中29・30遺構図……130・131
第106図　第Ⅶ文化層南西谷部27～43号礫群、14～24号配石、炭化物集中31遺構図……132・133
第107図　第Ⅶ文化層南西谷部44～47号礫群、25・26号配石、炭化物集中32遺構図……138・139
第108図　第Ⅶ文化層南西谷部13～26号配石、炭化物集中29～32遺構図…140・141
第109図　第Ⅶ文化層南西谷部遺構外出土遺物器種別分布図……144
第110図　第Ⅶ文化層南西谷部遺構外出土遺物石材別分布図……145
第111図　第Ⅶ文化層南西谷部出土石器実測図（１）……147
第112図　第Ⅶ文化層南西谷部出土石器実測図（２）……148
第113図　第Ⅶ文化層南西谷部出土石器実測図（３）……150
第114図　第Ⅶ文化層南西谷部出土石器実測図（４）……151
第115図　第Ⅶ文化層南西谷部出土石器実測図（５）……152
第116図　第Ⅶ文化層南西谷部出土石器実測図（６）……153
第117図　第Ⅶ文化層南西谷部出土石器実測図（７）……154

第118図　第Ⅶ文化層南西谷部出土石器
実測図（８）……155
第119図　第Ⅶ文化層南西谷部出土石器
実測図（９）……156
第120図　第Ⅶ文化層南西谷部出土石器
実測図（10）……158
第121図　第Ⅶ文化層南西谷部出土石器
実測図（11）……159
第122図　第Ⅶ文化層南西谷部出土石器
実測図（12）……160
第123図　第Ⅶ文化層南西谷部出土石器
実測図（13）……161
第124図　第Ⅶ文化層南西谷部出土石器
実測図（14）……162
第125図　第Ⅶ文化層南西谷部出土石器
実測図（15）……163
第126図　第Ⅶ文化層南西谷部出土石器
実測図（16）……164
第127図　第Ⅶ文化層南西谷部出土石器
実測図（17）……165
第128図　第Ⅶ文化層南西谷部出土石器
実測図（18）……166
第129図　第Ⅶ文化層南西谷部出土石器
実測図（19）……167
第130図　第Ⅷ文化層遺構配置図・遺物分布図
……169
第131図　第Ⅷ文化層南尾根（南部）～南西谷部
遺構配置図……170・171
第132図　第Ⅷ文化層南尾根（南部）～南西谷部
接合関係図……172・173
第133図　第Ⅷ文化層北尾根・中央尾根
出土石器実測図……174
第134図　第Ⅷ文化層北尾根～中央谷部
遺物分布図……175
第135図　第Ⅷ文化層南尾根（南部）東側
遺構配置図……177
第136図　第Ⅷ文化層南尾根（南部）西側
遺構配置図……178
第137図　第Ⅷ文化層南尾根石器ブロック18、
54～62号礫群、28・29号配石遺構図
……180
第138図　第Ⅷ文化層南尾根石器ブロック18
遺構図……181
第139図　第Ⅷ文化層南尾根石器ブロック19、
69～73号礫群遺構図……182
第140図　第Ⅷ文化層南尾根石器ブロック19
遺構図……183
第141図　第Ⅷ文化層南尾根石器ブロック20、
85～92号礫群遺構図……184
第142図　第Ⅷ文化層南尾根石器ブロック20
遺構図……185
第143図　第Ⅷ文化層南尾根石器ブロック21、
93～95号礫群遺構図……186
第144図　第Ⅷ文化層南尾根石器ブロック21
遺構図……187
第145図　第Ⅷ文化層南尾根石器ブロック22、
96～107号礫群、32号配石、
炭化物集中33・34遺構図……188
第146図　第Ⅷ文化層南尾根石器ブロック22
遺構図……189
第147図　第Ⅷ文化層南尾根石器ブロック23、
112～114号礫群、炭化物集中34・35
遺構図……190
第148図　第Ⅷ文化層南尾根石器ブロック23
遺構図……191
第149図　第Ⅷ文化層南尾根石器ブロック24、
125～133号礫群、炭化物集中36
遺構図……192
第150図　第Ⅷ文化層南尾根石器ブロック24
遺構図……193
第151図　第Ⅷ文化層南尾根48号礫群遺構図
……197
第152図　第Ⅷ文化層南尾根49～51号礫群
遺構図……198
第153図　第Ⅷ文化層南尾根52・53号礫群
遺構図……199
第154図　第Ⅷ文化層南尾根54～62号礫群、
28・29号配石遺構図……200
第155図　第Ⅷ文化層南尾根63・64号礫群
遺構図……201
第156図　第Ⅷ文化層南尾根65～68号礫群
遺構図……203

第157図　第Ⅷ文化層南尾根69～73号礫群
遺構図……205
第158図　第Ⅷ文化層南尾根74～76号礫群
遺構図……207
第159図　第Ⅷ文化層南尾根77～80号礫群、
30号配石遺構図……208
第160図　第Ⅷ文化層南尾根81・82号礫群
遺構図……210
第161図　第Ⅷ文化層南尾根83・84号礫群、
31号配石遺構図……211
第162図　第Ⅷ文化層南尾根85～92号礫群
遺構図……213
第163図　第Ⅷ文化層南尾根93～95号礫群
遺構図……215
第164図　第Ⅷ文化層南尾根96～107号礫群、
32号配石、炭化物集中33・34
遺構図……217
第165図　第Ⅷ文化層南尾根108～111号礫群、
炭化物集中34遺構図……219
第166図　第Ⅷ文化層南尾根112～114号礫群、
炭化物集中34・35遺構図……221
第167図　第Ⅷ文化層南尾根115・116・
122～124・134・135号礫群、
炭化物集中35遺構図……223
第168図　第Ⅷ文化層南尾根117～121号礫群、
炭化物集中35遺構図……224
第169図　第Ⅷ文化層南尾根125～133号礫群、
炭化物集中36遺構図……227
第170図　第Ⅷ文化層南尾根136～138号礫群、
炭化物集中36遺構図……229
第171図　第Ⅷ文化層南尾根139号礫群遺構図
……230
第172図　第Ⅷ文化層南尾根140～143号礫群
遺構図……231
第173図　第Ⅷ文化層南尾根出土石器
実測図（１）……233
第174図　第Ⅷ文化層南尾根～南西谷部
遺構外出土石器器種別分布図
……234
第175図　第Ⅷ文化層南尾根～南西谷部
遺構外出土石器石材別分布図
……235
第176図　第Ⅷ文化層南尾根出土石器
実測図（２）……237
第177図　第Ⅷ文化層南尾根出土石器
実測図（３）……238
第178図　第Ⅷ文化層南尾根出土石器
実測図（４）……239
第179図　第Ⅷ文化層南尾根出土石器
実測図（５）……240
第180図　第Ⅷ文化層南尾根出土石器
実測図（６）……241
第181図　第Ⅷ文化層南尾根出土石器
実測図（７）……242
第182図　第Ⅷ文化層南西谷部（北部）
遺構配置図……243
第183図　第Ⅷ文化層南西谷部（南部）
遺構配置図……244
第184図　第Ⅷ文化層南西谷部石器ブロック25、
144～150号礫群、33号配石遺構図
……248
第185図　第Ⅷ文化層南西谷部石器ブロック25
遺構図（１）……249
第186図　第Ⅷ文化層南西谷部石器ブロック25
遺構図（２）……250
第187図　第Ⅷ文化層南西谷部石器ブロック26、
151～158号礫群、34～36号配石、
炭化物集中37・38遺構図……251
第188図　第Ⅷ文化層南西谷部石器ブロック26
遺構図（１）……252
第189図　第Ⅷ文化層南西谷部石器ブロック26
遺構図（２）……253
第190図　第Ⅷ文化層南西谷部石器ブロック27、
161・167～171号礫群、
38～44号配石、炭化物集中39
遺構図……254・255
第191図　第Ⅷ文化層南西谷部石器ブロック27
遺構図（１）……256・257
第192図　第Ⅷ文化層南西谷部石器ブロック27
遺構図（２）……258・259
第193図　第Ⅷ文化層南西谷部石器ブロック28、
172～181号礫群、炭化物集中40

遺構図……260・261
第194図　第Ⅷ文化層南西谷部石器ブロック28
遺構図（１）……262・263
第195図　第Ⅷ文化層南西谷部石器ブロック28
遺構図（２）……264・265
第196図　第Ⅷ文化層南西谷部
144～150号礫群、33号配石
遺構図……269
第197図　第Ⅷ文化層南西谷部
151～158号礫群、34～36号配石、
炭化物集中37・38遺構図……271
第198図　第Ⅷ文化層南西谷部159・160号礫群
遺構図……273
第199図　第Ⅷ文化層南西谷部162～166号礫群、
37号配石遺構図……275
第200図　第Ⅷ文化層南西谷部161・
167～171号礫群、38～44号配石、
炭化物集中39遺構図……278・279
第201図　第Ⅷ文化層南西谷部
172～181号礫群、
炭化物集中40遺構図……280・281
第202図　第Ⅷ文化層南西谷部
出土石器実測図（１）……290
第203図　第Ⅷ文化層南西谷部
出土石器実測図（２）……291
第204図　第Ⅷ文化層南西谷部
出土石器実測図（３）……292
第205図　第Ⅷ文化層南西谷部
出土石器実測図（４）……293
第206図　第Ⅷ文化層南西谷部
出土石器実測図（５）……294
第207図　第Ⅷ文化層南西谷部
出土石器実測図（６）……295
第208図　第Ⅷ文化層南西谷部
出土石器実測図（７）……296
第209図　第Ⅷ文化層南西谷部
出土石器実測図（８）……297
第210図　第Ⅷ文化層南西谷部
出土石器実測図（９）……298
第211図　第Ⅷ文化層南西谷部
出土石器実測図（10）……299
第212図　第Ⅷ文化層南西谷部
出土石器実測図（11）……300
第213図　第Ⅷ文化層南西谷部
出土石器実測図（12）……301
第214図　第Ⅷ文化層南西谷部
出土石器実測図（13）……302
第215図　第Ⅷ文化層南西谷部
出土石器実測図（14）……303
第216図　第Ⅷ文化層南西谷部
出土石器実測図（15）……304
第217図　第Ⅷ文化層南西谷部
出土石器実測図（16）……305
第218図　第Ⅷ文化層南西谷部
出土石器実測図（17）……306
第219図　第Ⅷ文化層南西谷部
出土石器実測図（18）……307
第220図　第Ⅷ文化層南西谷部
出土石器実測図（19）……308
第221図　第Ⅷ文化層南西谷部
出土石器実測図（20）……309
第222図　第Ⅷ文化層南西谷部
出土石器実測図（21）……310
第223図　第Ⅷ文化層南西谷部
出土石器実測図（22）……311

挿表目次

第１表　文化層別遺構一覧表……１
第２表　文化層別器種組成表……１
第３表　第Ⅱ文化層石器組成表……６
第４表　第Ⅲ文化層石器組成表……９
第５表　第Ⅲ文化層土坑一覧表……21
第６表　第Ⅳ文化層石器組成表……27
第７表　第Ⅳ文化層石器ブロック１
石器組成表……27

第８表　第Ⅳ文化層中央尾根石器組成表‥‥36
第９表　第Ⅳ文化層石器ブロック２
　　　　石器組成表‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥37
第10表　第Ⅳ文化層南尾根石器組成表‥‥‥41
第11表　第Ⅳ文化層南西谷部石器組成表‥‥43
第12表　第Ⅴ文化層石器組成表‥‥‥‥‥‥44
第13表　第Ⅴ文化層中央尾根石器組成表‥‥46
第14表　第Ⅴ文化層南尾根石器組成表‥‥‥47
第15表　第Ⅴ文化層南西谷部石器組成表‥‥47
第16表　第Ⅵ文化層石器組成表‥‥‥‥‥‥50
第17表　第Ⅵ文化層石器ブロック３～８
　　　　石器組成表‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥53
第18表　第Ⅵ文化層中央尾根礫群一覧表‥‥62
第19表　第Ⅶ文化層石器組成表‥‥‥‥‥‥73
第20表　第Ⅶ文化層北尾根石器組成表‥‥‥77
第21表　第Ⅶ文化層南尾根石器組成表‥‥‥78
第22表　第Ⅶ文化層石器ブロック９
　　　　石器組成表‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥79
第23表　第Ⅶ文化層南尾根礫群一覧表‥‥‥79
第24表　第Ⅶ文化層南西谷部石器組成表‥‥87
第25表　第Ⅶ文化層石器ブロック10
　　　　石器組成表‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥90
第26表　第Ⅶ文化層石器ブロック11
　　　　石器組成表‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥92
第27表　第Ⅶ文化層石器ブロック12
　　　　石器組成表‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥95
第28表　第Ⅶ文化層石器ブロック13
　　　　石器組成表‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥96
第29表　第Ⅶ文化層石器ブロック14～17
　　　　石器組成表‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥100
第30表　第Ⅶ文化層南西谷部４～47号礫群
　　　　一覧表‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥116
第31表　第Ⅷ文化層石器組成表‥‥‥‥‥168
第32表　第Ⅷ文化層北尾根・中央尾根・
　　　　中央谷部石器組成表‥‥‥‥‥‥175
第33表　第Ⅷ文化層南尾根石器組成表‥‥176
第34表　第Ⅷ文化層石器ブロック18～24
　　　　石器組成表‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥179
第35表　第Ⅷ文化層南尾根礫群一覧表
　　　　‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥195・196
第36表　第Ⅷ文化層南尾根遺構外出土石器
　　　　組成表‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥233
第37表　第Ⅷ文化層南西谷部石器組成表‥243
第38表　第Ⅷ文化層石器ブロック25～28
　　　　石器組成表‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥246
第39表　第Ⅷ文化層南西谷部礫群一覧表‥267
第40表　第Ⅷ文化層南西谷部遺構外出土石器
　　　　組成表‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥284

第１章　旧石器時代（休場層直下黒色帯以下）

第１節　資料の整理・分類について

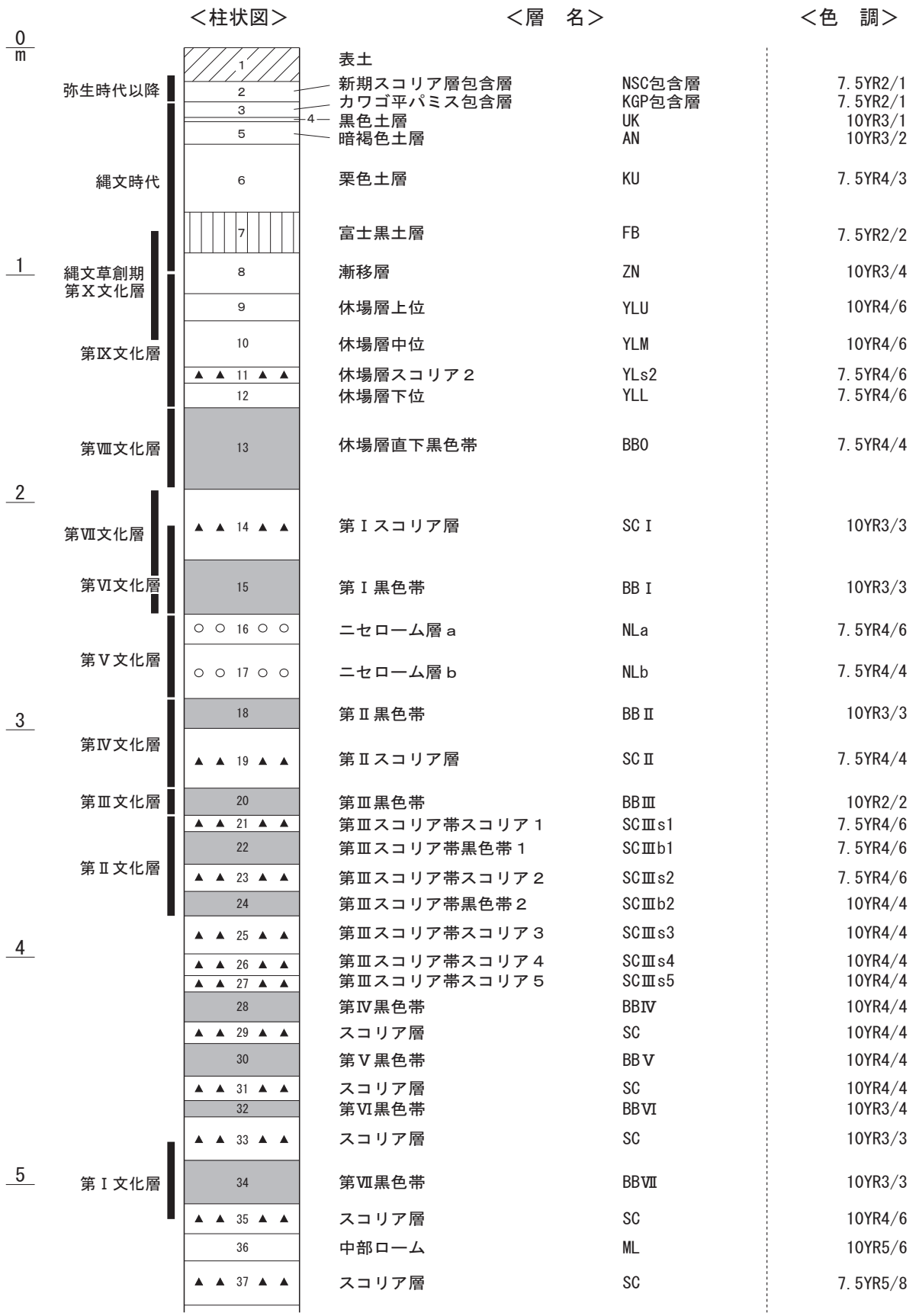
日本の更新世は「旧石器時代」、「先土器時代」、「岩宿時代」等の略称が研究者の時代概念や立場によって、統一されずに学会内で相互に認識した形で使用されている。その中から本書では「旧石器時代」の呼称を用いる。その最大の理由は、愛鷹・箱根山麓の研究において前記の呼称を使用することが多いためである。これらの呼称間の差異は時代性によるため、大筋で読み替えは可能である。また愛鷹・箱根編年（旧石器時代）は、特に断りのない場合は（笹原　2005）を基準とすることにする。なお第１・２表に文化層毎の遺構・遺物数を集成し、文化層と基本土層の関係を第１図に示す。

第１表　文化層別 遺構一覧表

	第Ⅰ文化層	第Ⅱ文化層	第Ⅲ文化層	第Ⅳ文化層	第Ⅴ文化層	第Ⅵ文化層	第Ⅶ文化層	第Ⅷ文化層	第Ⅸ文化層	第Ⅹ文化層	休場層	縄文時代草創期	計
石器ブロック				2		6	9	11	11	1			40
礫群						2	45	134	24	1			206
配石						1	26	17	10				54
炭化物集中	2		12	1	2	2	13	8					40
土坑			30			1					5		36

第２表　文化層別 器種組成表

	第Ⅰ文化層	第Ⅱ文化層	第Ⅲ文化層	第Ⅳ文化層	第Ⅴ文化層	第Ⅵ文化層	第Ⅶ文化層	第Ⅷ文化層	第Ⅸ文化層	第Ⅹ文化層	縄文時代草創期	計
ナイフ形石器				1	2	2	27	19	166			217
角錐状石器							1	2	6			9
有舌尖頭器											42	42
尖頭器								1	56		14	71
細石核										7		7
細石刃										235		235
ラウンド・スクレイパー						2	9	8	1			20
エンド・スクレイパー						7	23	19	13			62
サイドスクレイパー				1		2	16	15	19	1		54
ノッチド・スクレイパー							7	8	23			38
ドリル								1	2			3
グレイバー									1			1
楔形石器				1		7	21	1	9	1		40
石刃		1		2	5	2	21	21	105			157
微細な剥離痕を有する剥片		1	1	2		13	30	22	56	11		136
石核	1		1	4	1	4	8	67	47	1		134
剥片類		3	4	107	6	284	1629	1046	1196	234		4509
原石				2				1	2			5
礫器									2			2
敲石				2			2	4	4	1		13
砥石									1			1
台石							1	1				2
計	1	5	6	122	14	323	1795	1236	1709	491	56	5758



＊ 基本層序の詳細については「東野遺跡Ⅰ」を参照。

第１図　基本土層模式図

第２節　第Ｉ文化層

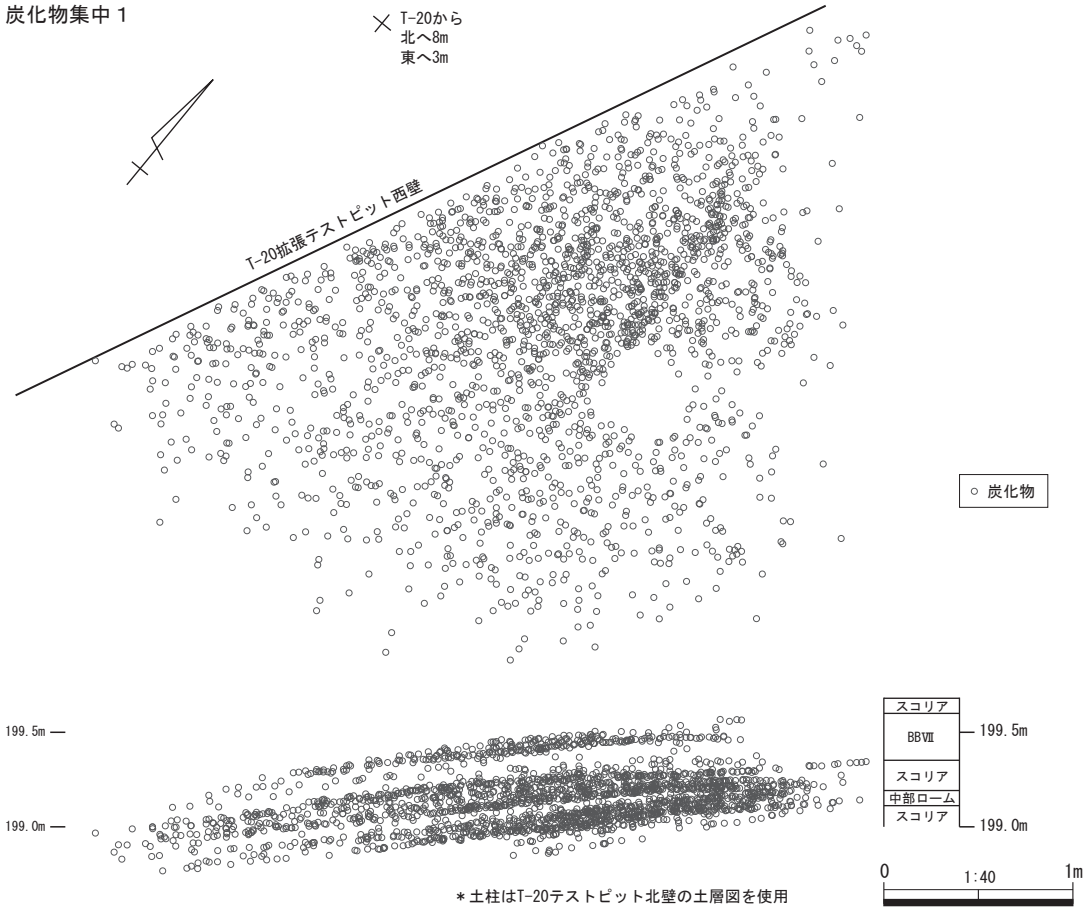
第Ⅶ黒色帯とその前後のスコリア層で確認された遺構、遺物の一群を、第Ｉ文化層とした。遺物は石器１点、礫２点が出土した。遺構は炭化物集中が２ヶ所確認された。石器と２ヶ所の炭化物集中は、距離に大きな隔たりがあるため、同時期性については判然としない。

また、中部ローム層上面から２点の礫が確認されたことも、本節で合わせて報告しておく。

１　遺構

炭化物集中１（第２図）

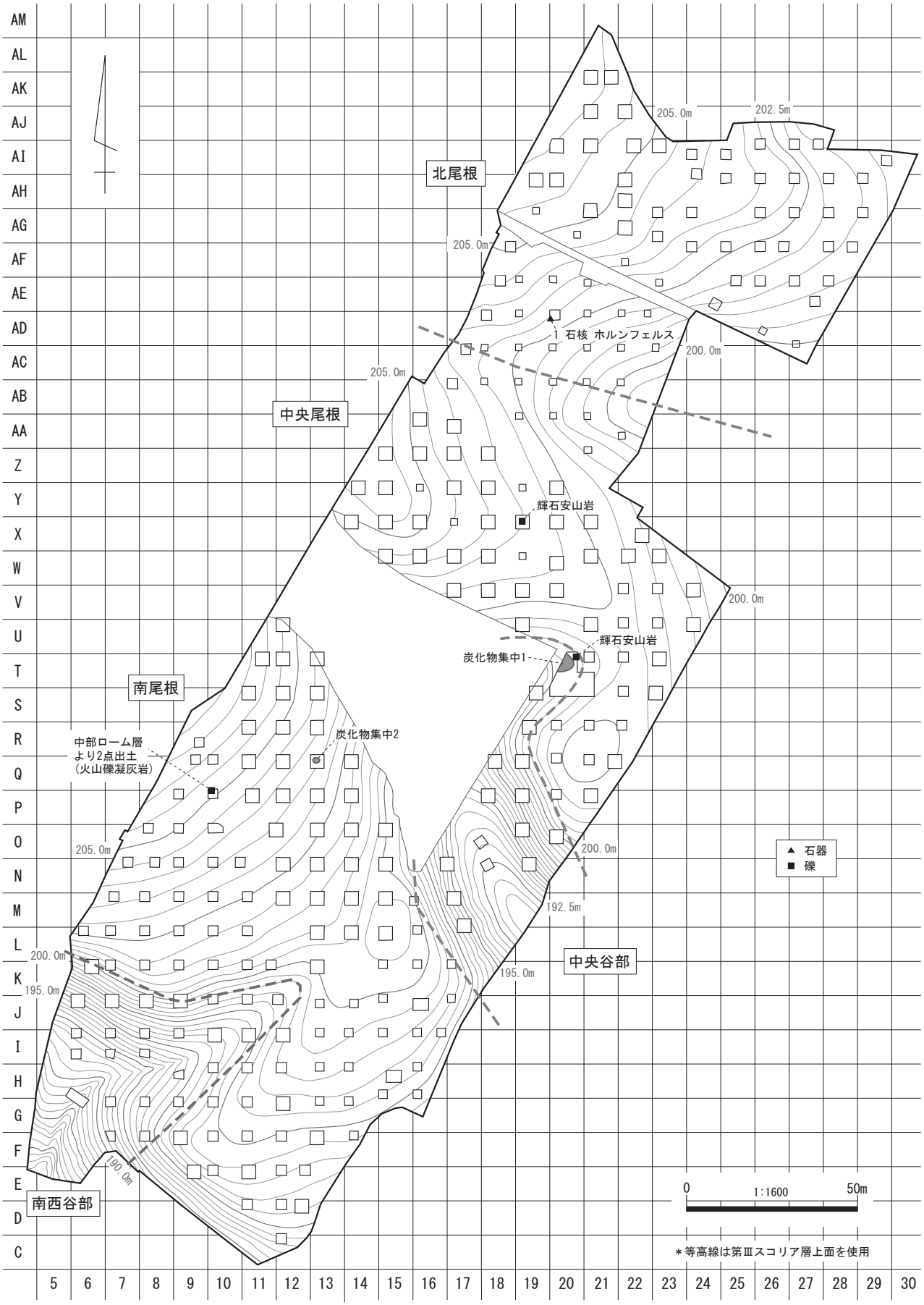
中央谷部のＴ－20グリッドから検出された。長さ4.5m、幅2.8mの範囲に、2,221点の炭化物が密集して分布している。中部ローム～第Ⅶ黒色帯にかけて、上下に幅をもって分布している。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。付近は、北東から南西にかけて下る谷頭にかかる傾斜地である。



第２図　第Ｉ文化層　中央谷部 炭化物集中１ 遺構図

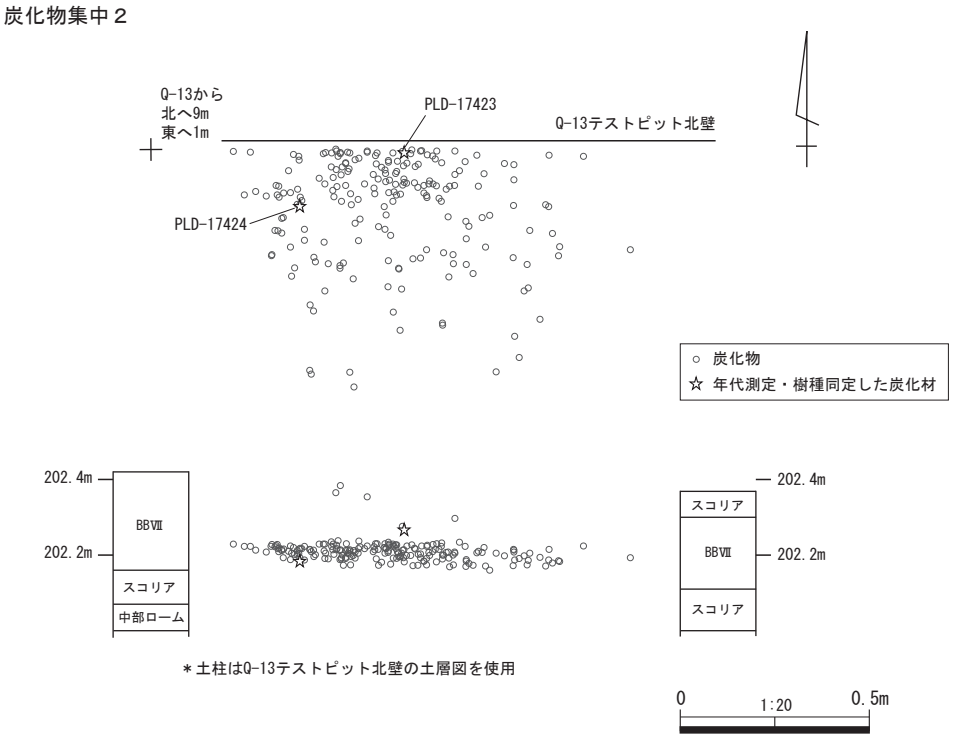
炭化物集中２（第４図）

南尾根のＱ－13グリッドから検出された。テストピットの壁際であったため正確な範囲は不明だが、長さ1.1m、幅0.8mの範囲に、192点の炭化物が密集して分布している。第Ⅶ黒色帯～スコリアにかけて、多少の浮き上がりはあるが、第Ⅶ黒色帯の下部が検出面である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。付近は、北西から南東にかけて下る傾斜地である。



第３図　第Ⅰ文化層　調査範囲及び遺構配置・遺物分布図

また、出土した炭化物のうち２点の炭化材について、放射性炭素年代測定（AMS法）を行った結果、31,730±120yrBP（PLD－17423）、31,260±120yrBP（PLD－17424）の^{14}C年代値が確認された（第２分冊附編を参照）。

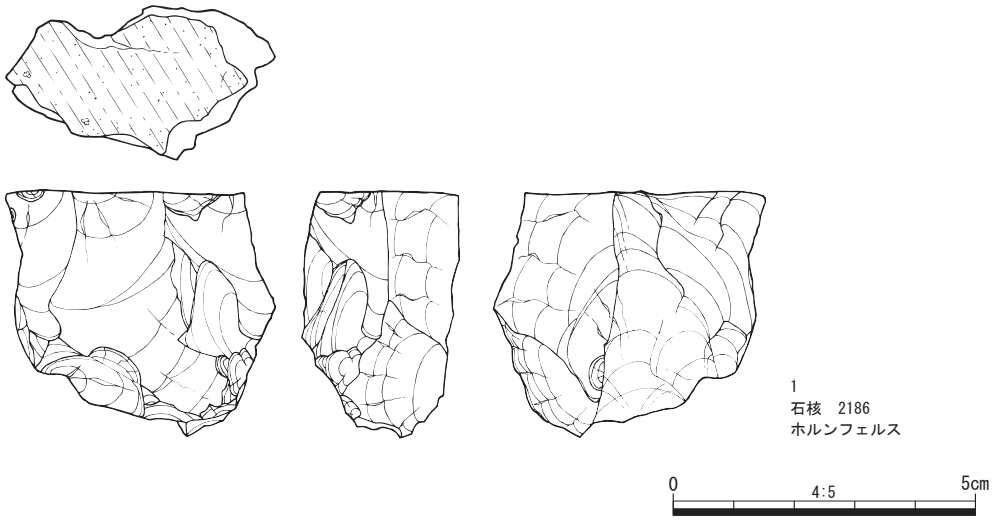


第４図　第Ⅰ文化層　南尾根 炭化物集中２ 遺構図

２　遺物

石核（第５図１　写真図版２）

石器は、北尾根から石核が１点出土したのみであった。節理面を打面として、不定形な縦長剥片を剥離している。下部には調整のような小さい剥離が施されており、打面転移を行っていた可能性も考えられる。また、下部左側の縁辺には若干の潰れが確認できる。石材はホルンフェルスである。



第５図　第Ⅰ文化層　北尾根 出土石器実測図

第３節　第Ⅱ文化層

第Ⅲスコリア帯黒色帯２～第Ⅲスコリア帯スコリア１で確認された遺物の一群を、第Ⅱ文化層とした。遺構は確認されなかった。遺物は石器が５点、礫が１点出土した。うち４点が、I－10グリッド付近で比較的まとまった分布を見せるが、その他については出土地点が離れており、同時期性については判然としない。

第３表　第Ⅱ文化層 石器組成表

		石刃	微細な剥離痕を有する剥片	剥片類	計
黒曜石	天城柏峠群			1	1
	蓼科冷山群		1		1
ホルンフェルス		1		2	3
計		1	1	3	5

１　遺物

５点の石器は、全て単独での出土であり、剥片剥離を行った様子は確認できなかった。内訳は石刃が１点、微細な剥離痕を有する剥片が１点、剥片類が３点である。石材は黒曜石２点（天城柏峠群１点、蓼科冷山群１点）、ホルンフェルス３点である。

微細な剥離痕を有する剥片（第７図２　写真図版２）

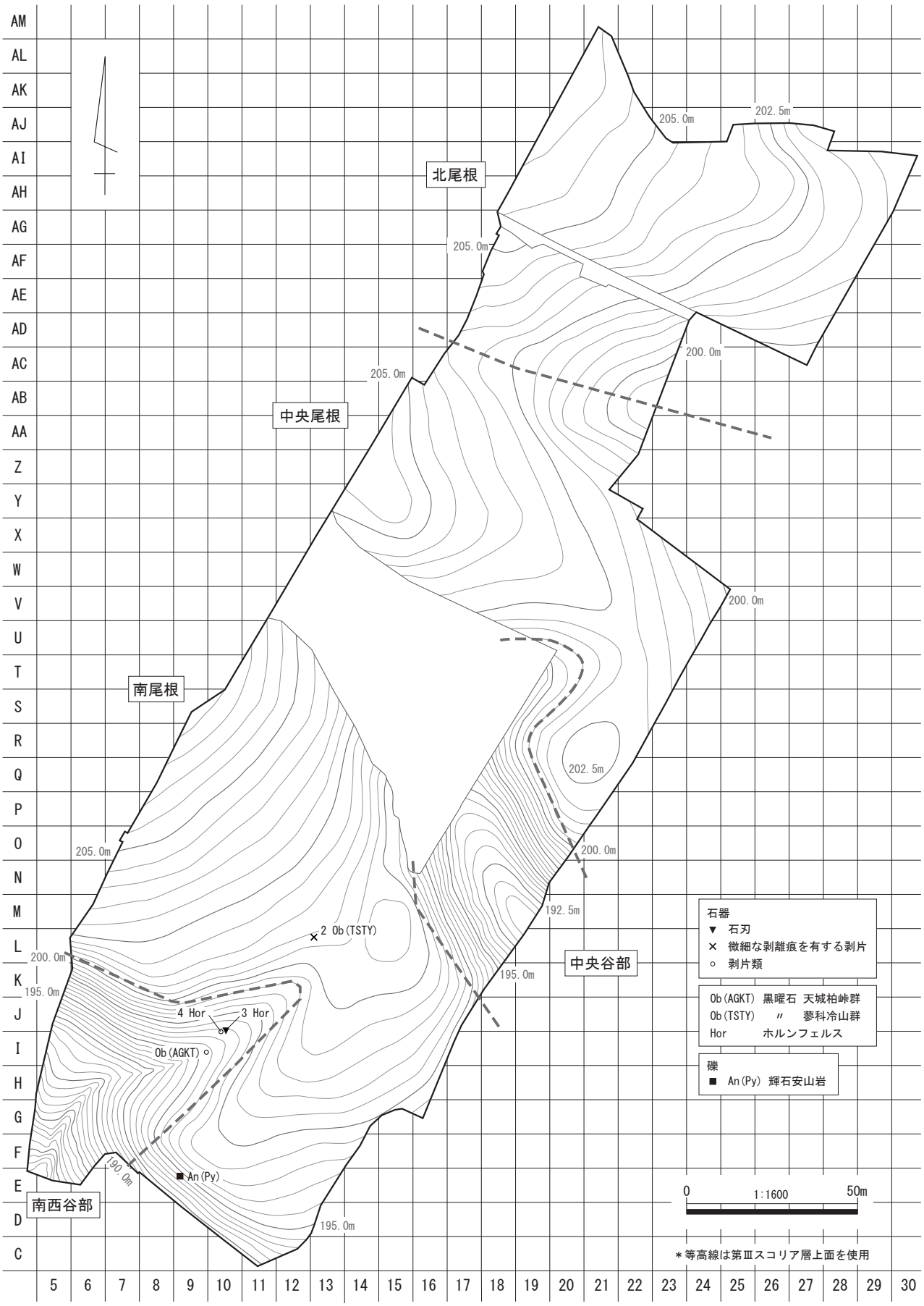
南尾根から出土した。やや寸詰まり気味の横長剥片を素材としており、末端部と左側縁部に微細な剥離痕が確認できる。特に末端部にはやや大きめの剥離が連続しており、刃部と捉えることも可能である。素材剥片の打面の作出は、大きく２回の剥離で行われている。背面には同方向からの連続した剥離が見て取れる。石材は黒曜石（蓼科冷山群）である。

石刃（第７図３　写真図版２）

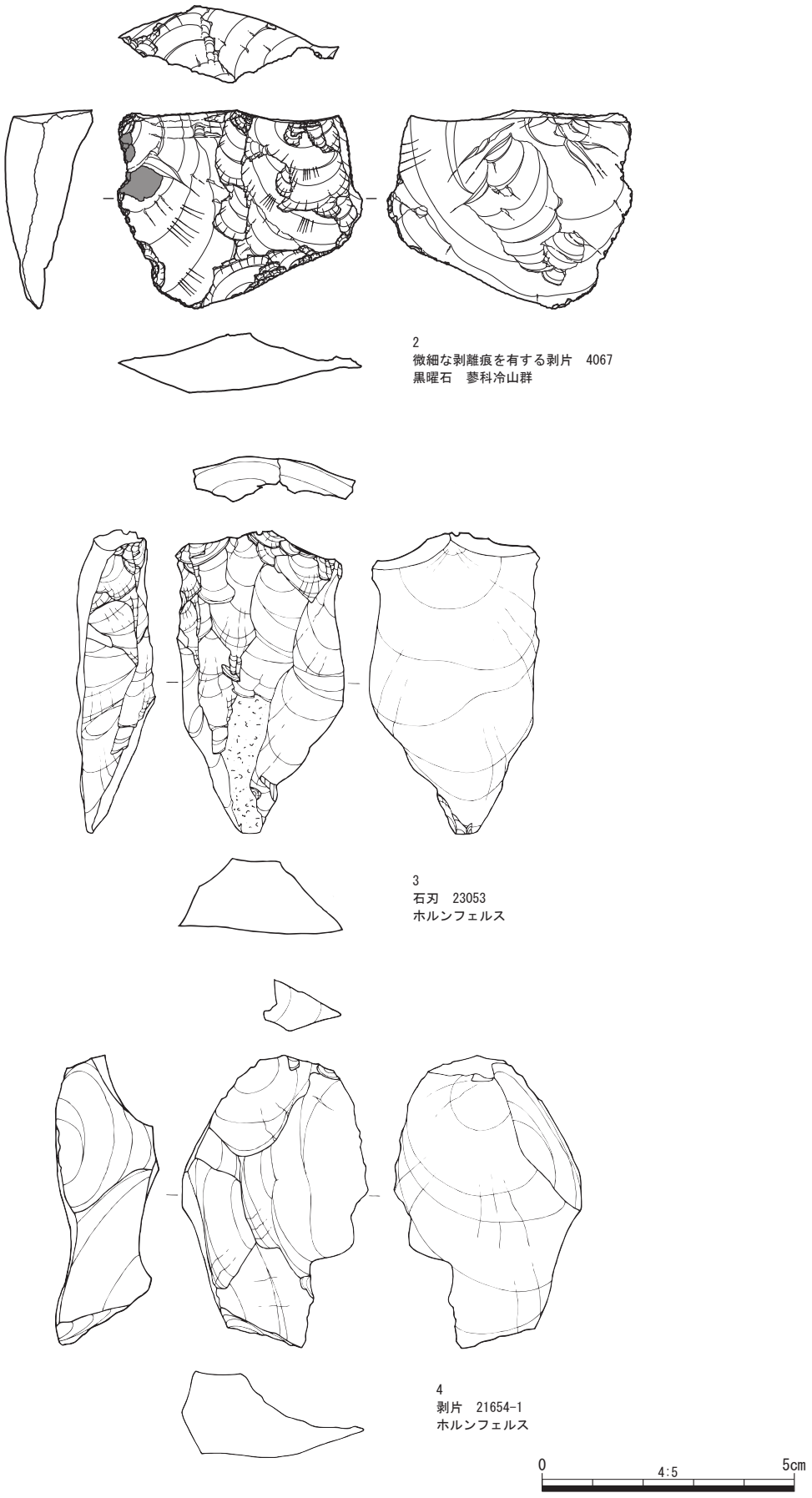
南西谷部から出土した。打面の作出は、大きく２回の剥離で行われている。背面には同方向からの連続した剥離が見て取れる。やや厚みを持った資料であり、特に左縁辺は作業面を大きく取り込んでしまっている。そのため作業面再生剥片であった可能性も考えられる。石材はホルンフェルスである。

剥片（第７図４　写真図版２）

南西谷部から出土した。やや歪んだ縦長剥片である。左縁辺は、石核を大きく巻き込む形で剥離されており、非常に厚みを持った資料となっている。打面の作出は１回の剥離で行われている。石材はホルンフェルスである。



第６図　第Ⅱ文化層　遺物分布図



第７図　第Ⅱ文化層　南尾根・南西谷部 出土石器実測図

第４節　第Ⅲ文化層

第Ⅲ黒色帯で確認された遺構、遺物の一群を第Ⅲ文化層とした。遺構は、土坑が30基、炭化物集中が12ヶ所検出された。遺物は、石器が６点、礫が５点出土した。また、炭化物が大量に検出された（第８図）。

第４表　第Ⅲ文化層 石器組成表

		微細な剥離痕を有する剥片	石核	剥片類	計
黒曜石	天城柏峠群	1			1
ホルンフェルス				2	2
ガラス質黒色安山岩			1	2	3
計		1	1	4	6

１　遺構

（１）土坑（第９～18図）

確認された土坑の大半は、第Ⅲ黒色帯の下面で検出された。土坑の掘込面は、覆土から推測するに、第Ⅲ黒色帯の下部～中部にかけてが大半と推測される。しかし、明確な事例は確認できず、遺物との関係については判然としない。断面形は、バケツ形もしくはラッパ形を呈する。ラッパ形のものは壁面が崩落した状態であり、本来は壁面が垂直に近い形で上がっていたと推測される。開口部は1.2～2.0m前後であるが、底面の大きさや崩落の可能性を考えると、1.5m前後で統一されていたと推測される。また底面は、第Ⅶ黒色帯を突き抜けて、中部ロームまで達している例が大半である。深さは1.5m弱の例が多いが、掘込面が検出面より上層であったと仮定すると、1.6～1.7m前後であったことが推測される。

以上の様に、構築時期・形状ともに統一性が確認できることから、一連の遺構群であると考えられる。この土坑群はいくつかの列状の配置が確認され、３通りの配置列に分類した（第９図）。

１群：１～６号土坑（第10・11図）

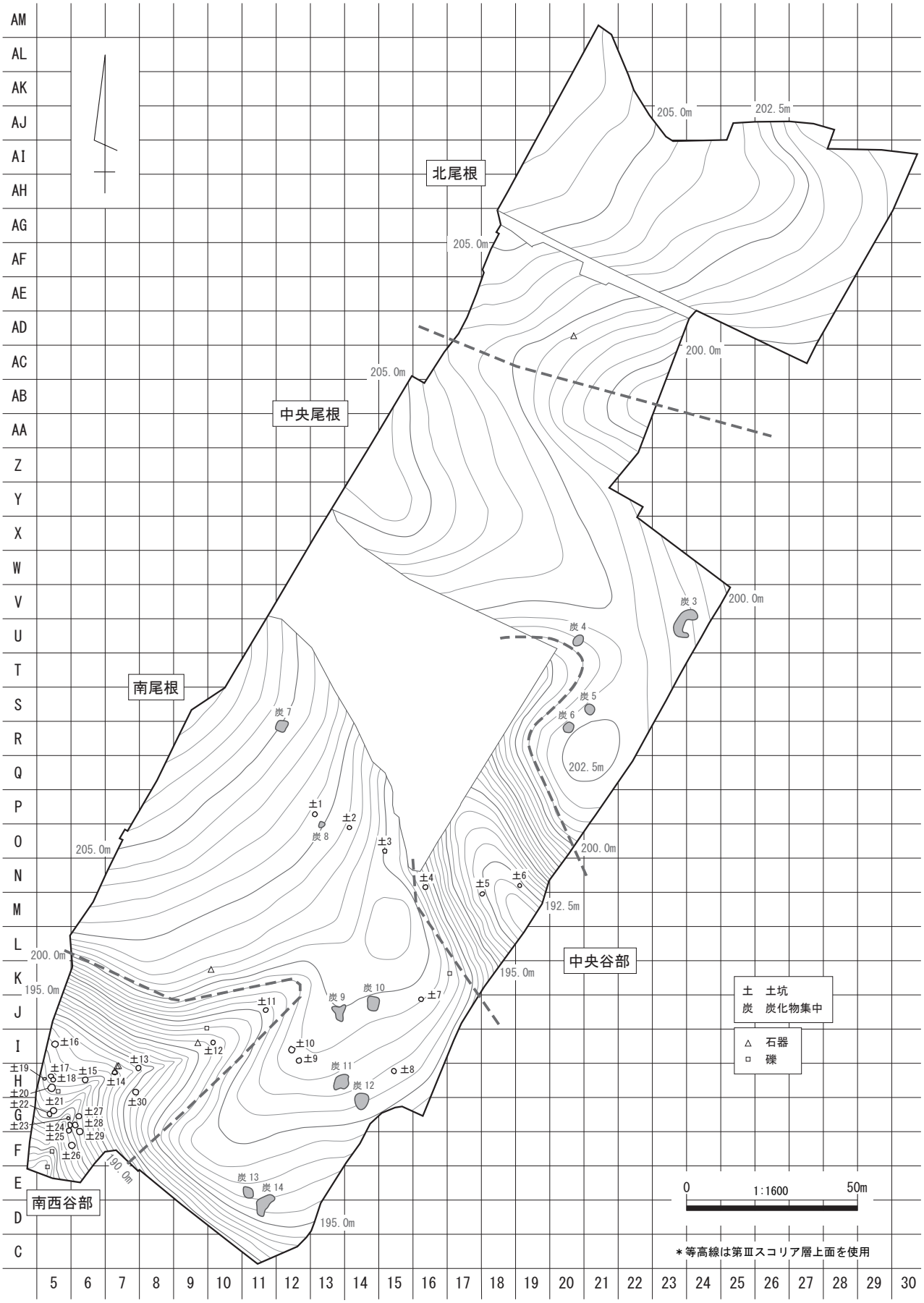
南尾根の北側から、等高線に直行して南東方向へ下り、中央谷部に達している土坑列である。中央谷部に差し掛かったところで、列は東に方向を変えている。中央谷部では、谷の下りはじめと終わりにのみ、土坑が配置されている。列の一番端にあたる６号土坑は、谷の北東側の下り終わりに配置されており、その先の中央尾根にまで、土坑列が伸びていた可能性も考えられる。

２群：７～10号土坑（第11・12図）

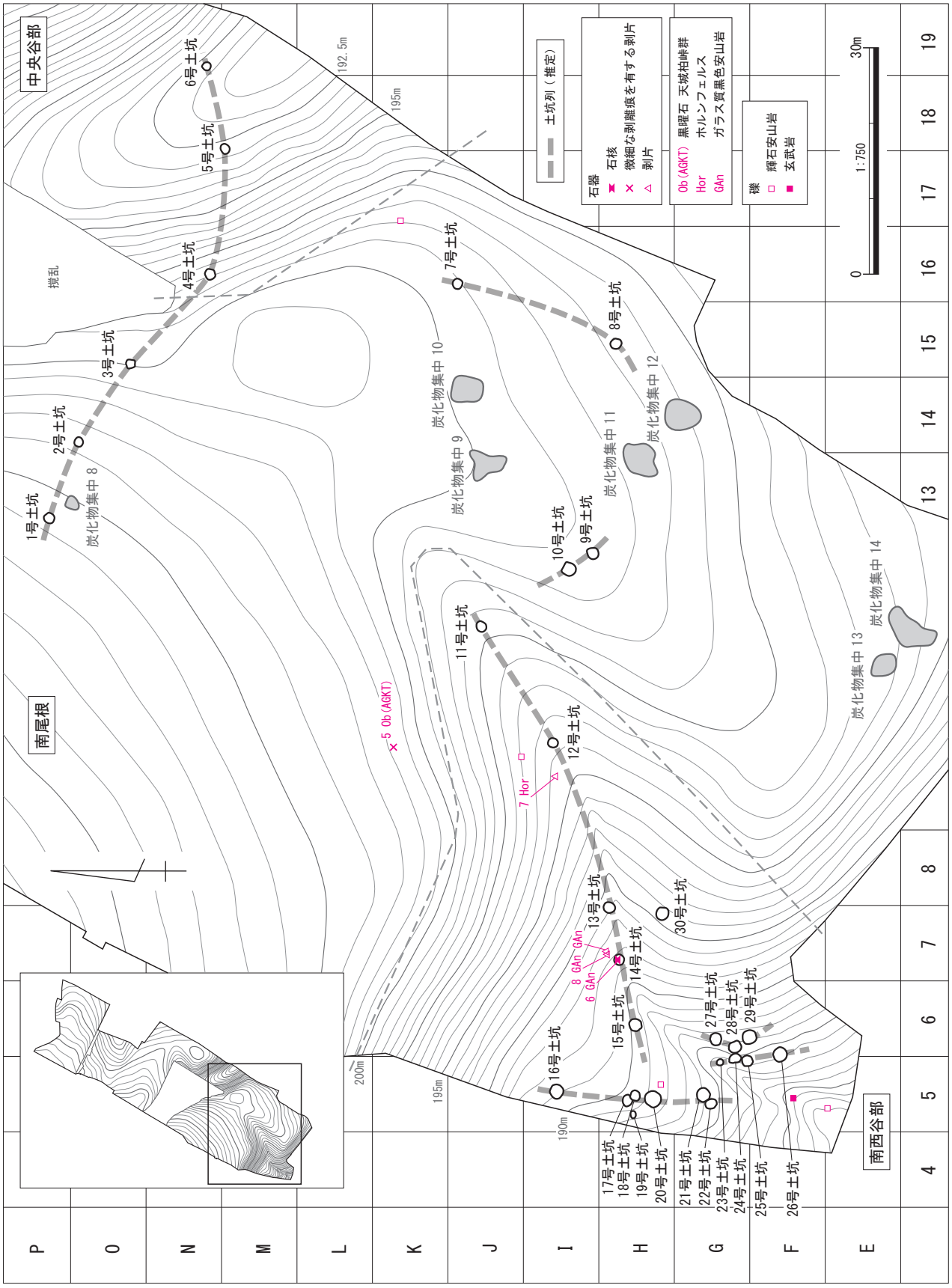
南尾根の南側に配置されている。９・10号土坑は近接しているが、７・８号および８・９号土坑の距離は20～30m隔てており、一連の遺構として捉えられるか判然としない。７→８→９→10号土坑の順に、等高線に沿うような形でU字に配置されていた可能性、あるいは３群につながる可能性も考えられる。

３群：11～30号土坑（第13～18図）

南西谷部に沿って配置されている。11～15号土坑は谷の始まりから配置されており、明確に谷に沿ったプランがうかがえる。また西側にも、南方向に、等高線に直行するように16～22号土坑が配置されているが、近接した土坑も見られ、列状であるかは判然としない。また、南側の23～29号土坑は、狭い範囲に密集しており、列状の配置とは異なった目的があった可能性も考えられる。また、３群では、１、２群に比べて深さのある例が確認されている。谷部という立地上、平坦面よりも深さが必要であったのか、あるいは谷部の方が、残存率が良好であった可能性もある。

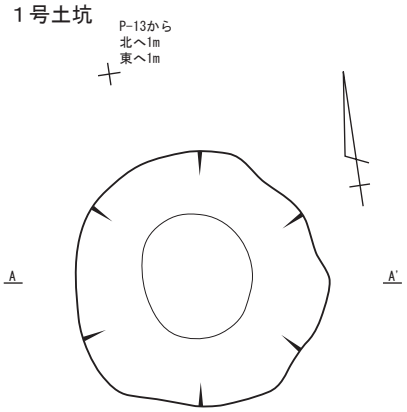


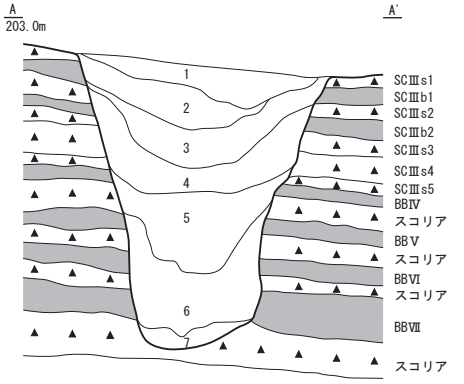
第８図　第Ⅲ文化層　遺構配置・遺物分布図



第９図　第Ⅲ文化層　南尾根・南西谷部 遺構配置・遺物分布図

１号土坑

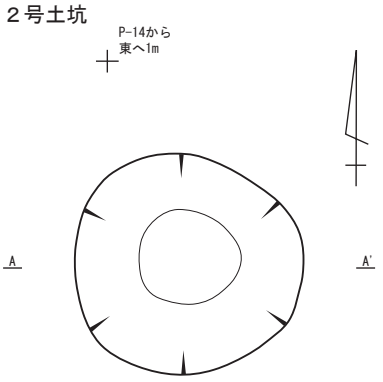


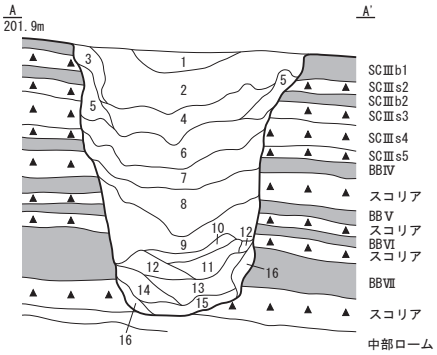


１号土坑
1 暗褐色土 BBⅢ主体。赤褐色スコリアを多量に含む。径1mm未満の橙色スコリアを含む。炭化物をごく少量含む。
2 1に類似。粒径大の赤褐色スコリアを多量に含む。
3 暗褐色土 BBⅢ主体。径2～5mmの赤褐色スコリアを多量に含む。同径の黒褐色スコリアをごく少量、暗褐色スコリアを少量含む。
4 褐色土 BBⅢ以下の層の混土。赤褐色スコリアは更に増え、径5～20mmの黒褐色スコリアと粒径大の暗褐色スコリアを含む。
5 褐色土 SCⅢ主体。上層よりも粒径大のスコリアが増える。
6 5に類似するが、赤褐色・黒褐色スコリアの量が減る。
7 暗褐色土 水成質ローム。黒褐色土粒子・粒を含む。鉄分が酸化し帯状に赤化している。

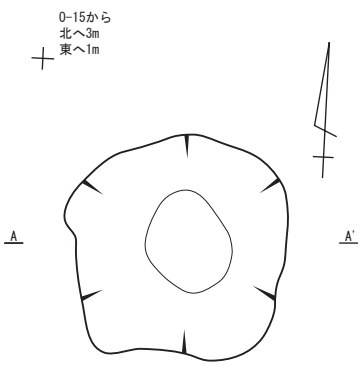
２号土坑
1 暗褐色土 SCⅡ相当。炭化物をごく少量含む。
2 暗褐色土 BBⅢ主体。赤褐色・暗褐色スコリアを含む。
3 2に類似。径2～5mmの赤褐色スコリアを含む。
4 2に類似するが、粒径大の赤褐色・暗褐色スコリアを多量に含むようになる。
5 2に類似するが、暗褐色スコリアは殆ど含まない。
6 褐色土 SCⅢ主体。径2～8mmの赤褐色スコリアを多量に含む。黒褐色土粒子を含む。
7 褐色土 径2～20mmの暗褐色スコリアを含む。
8 褐色土 覆土中、最もスコリアの量が多い。赤褐色スコリアを含み、暗褐色スコリアを多量に含む。SCⅢs2ブロックを含む。
9 8に類似するが、暗褐色スコリアの量は減り、SCⅢs2ブロックを含まない。
10 暗褐色土 BBⅢ以下の層の混土。赤褐色・暗褐色スコリアを含む。
11 暗褐色土 黒褐色土粒子を多量に含む。
12 11に類似するが、褐色味が強くなる。
13 暗褐色土 ローム質土。粒径大の赤褐色スコリアを多量に含み、黒褐色土粒子・ブロックを含む。
14 暗褐色土 ローム質土。暗褐色スコリアを含み、SCⅢs4ブロックを少量含む。
15 暗褐色土 水成質ローム。鉄分が酸化し帯状に赤化している。赤褐色スコリアと黒褐色土粒子を含む。
16 暗褐色土 ローム質土。全体的にスコリア量が少ない。

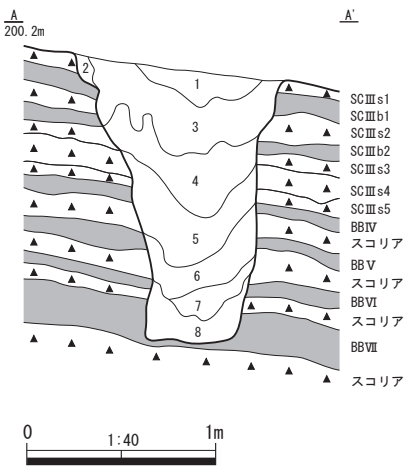
２号土坑





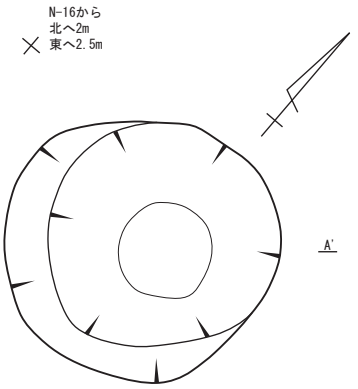
３号土坑

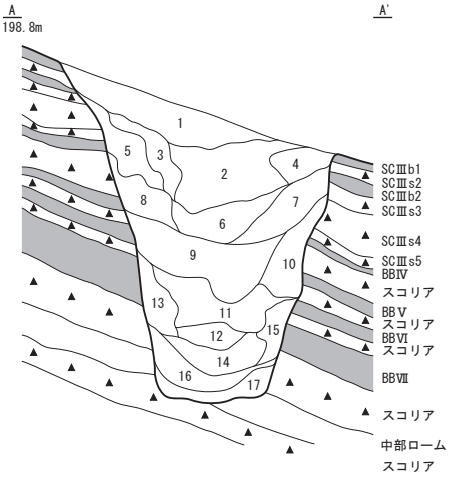




３号土坑
1 暗褐色土 SCⅡ相当。炭化物をごく少量含む。
2 褐色土 SCⅢs1相当の崩落土。
3 暗褐色土 BBⅢ主体。径2～8mmの赤褐色スコリア、粒径小の暗褐色スコリアを含む。
4 褐色土 SCⅢ主体。赤褐色スコリアを多量に、径3～8mmの暗褐色スコリアを少量含む。
5 褐色土 赤褐色・暗褐色スコリアを含む。径2～20mmの黒褐色スコリアを含む。
6 5に類似。SCⅢs4相当のスコリアをブロック状に含み、覆土中最もスコリアの量が増える。
7 褐色土 赤褐色スコリアを含み、粒径大の暗褐色・黒褐色スコリアを少量含む。
8 褐色土 ローム質土。スコリア量が減り、黒褐色土粒子を含む。

４号土坑

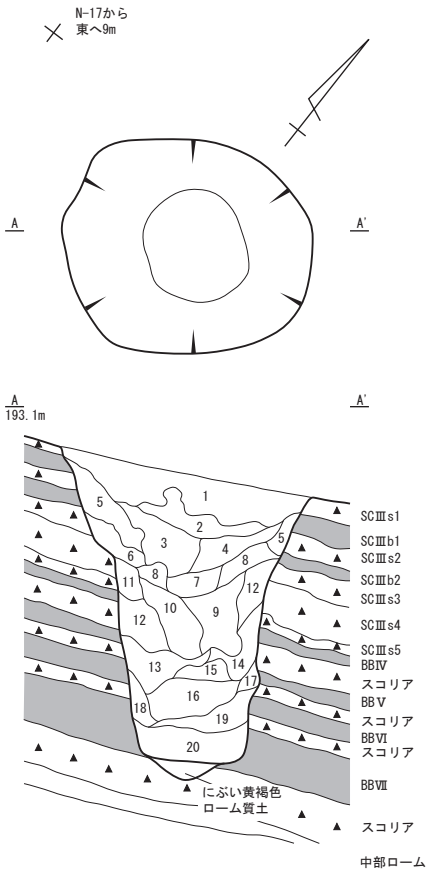




４号土坑
1 暗褐色土 BBⅢ主体。赤褐色スコリアを含む。
2 1に類似。SCⅢs2相当のブロックを含む。
3 2に類似。粒径大の暗褐色スコリアを含む。
4 褐色土 SCⅢ主体。SCⅢs2ブロックを少量含む。
5 暗褐色土 BBⅢ以下の層の混土。
6 2に類似。SCⅢs2ブロックの量が増える。
7 4に類似するが、SCⅢs2ブロックを含まなくなる。
8 5に類似するが、黒褐色土粒子を多量に含む。
9 暗褐色土 粒径大の赤褐色・暗褐色スコリアを多量に含み、SCⅢs2ブロックを含む。
10 9に類似するが、黒褐色土粒子を含む。
11 褐色土 BBⅣ下層の土にSCⅢs4ブロックを含む。
12 11に類似。SCⅢs4ブロックは含まない。
13 11に類似。全体的にスコリアの量が減る。
14 褐色土 スコリア含有量が減り、BBⅣ下層の土に黒褐色土と褐色土ブロックを含む。
15 13に類似するが、黒味が強くスコリア量が減る。
16 暗褐色土 ローム質土になる。
17 16に類似するが、黒褐色土ブロックを含む。

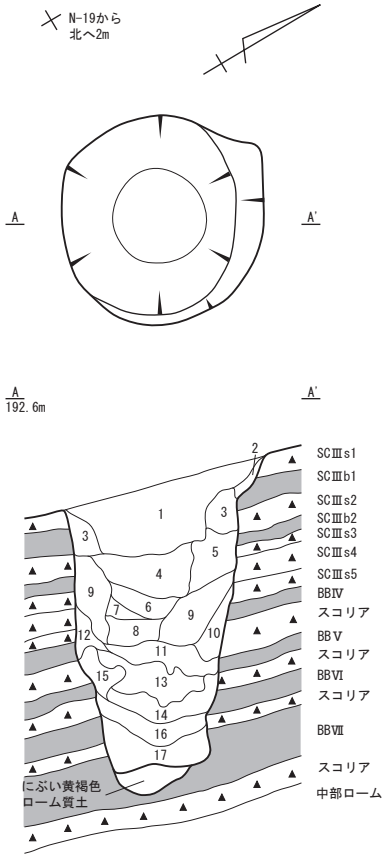
第10図　第Ⅲ文化層　土坑遺構図（１）

５号土坑



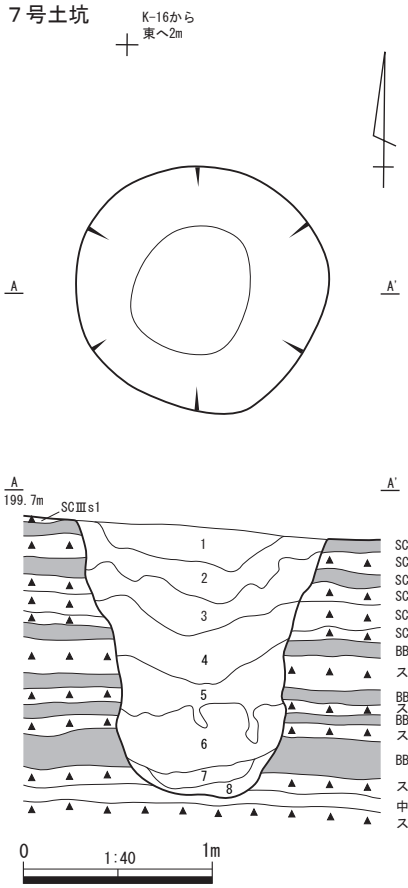
５号土坑
1 暗褐色土 BBⅢ主体。赤褐色スコリアを含む。
2 暗褐色土 BBⅢ主体。SCⅢs4ブロックを含む。
3 2に類似するが、赤褐色スコリアの量が増える。
4 暗褐色土 SCⅢ相当の褐色土を多量に含む。
5 暗褐色土 黒褐色土粒子をパッチ状に含む。
6 暗褐色土 SCⅢs4ブロックを含む。
7 6に類似するが、褐色味が強くなる。
8 3に類似するが、SCⅢs4ブロックを含まない。
9 暗褐色土 黒褐色土粒子を多量に含み、黒味が強い。
10 暗褐色土 粒径大の暗褐色スコリアを含む。
11 褐色土 SCⅢ主体。全体的にスコリア量は少ない。
12 褐色土 SCⅢ主体。SCⅢs2～s4のブロックを含む。
13 褐色土 BBⅣ下層の土に赤褐色スコリアを含む。
14 褐色土 粒径大の暗褐色スコリアを含む。
15 14に類似するが、黒味が強くスコリア量が減る。
16 暗褐色土 ローム質土になる。
17 暗褐色土 BBⅣ以下相当の崩落土。
18 17に類似するが、スコリア量は若干増える。
19 暗褐色土 ローム質土。BBⅣ下層のスコリアと黒褐色土・褐色土ブロックを含む。
20 暗褐色土 ローム質土。SCⅢs4ブロックを多量に含む。

６号土坑



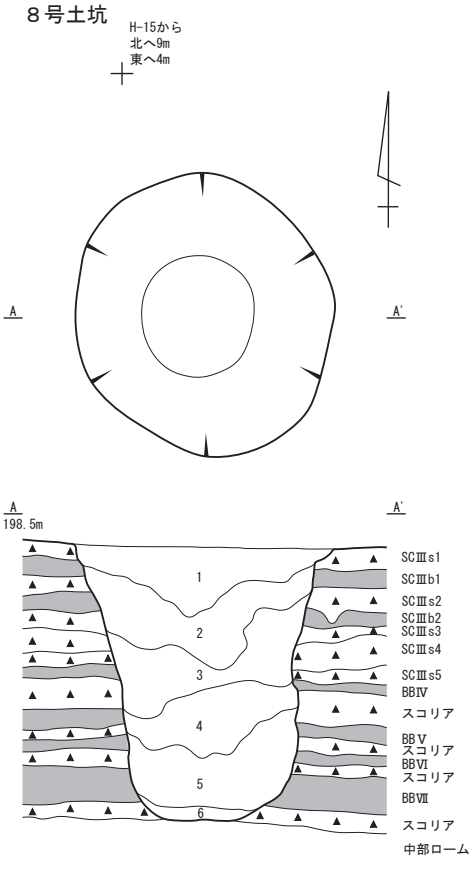
６号土坑
1 暗褐色土 BBⅢ主体。粒径小の赤褐色スコリアを含む。
2 褐色土 SCⅢs1の崩落土。
3 暗褐色土 BBⅢ主体。赤褐色スコリアを多量に含む。
4 暗褐色土 BBⅢ以下の層の混土。粒径大のにぶい赤褐色スコリアを多量に含む。
5 3に類似するが、粒径大の暗褐色スコリアを少量含む。
6 暗褐色土 粒径大の赤褐色・暗褐色スコリアが増える。
7 6に類似するが、褐色味がありスコリアの量が減る。
8 褐色土 SCⅢ主体。黒褐色土粒を少量含む。
9 褐色土 赤褐色・にぶい赤褐色・暗褐色スコリアを含む。
10 9に類似。SCⅢs4ブロックを少量含む。
11 褐色土 粒径大のスコリアの量が増える。
12 褐色土 SCⅢs4の崩落土。
13 灰褐色土 水成質ローム。鉄分が酸化し部分的に赤化している。SCⅢs4ブロックを少量含む。
14 灰褐色土 水成質ローム。鉄分が酸化し、周縁部が赤化している。黒褐色土をブロックを含む。
15 褐色土 SCⅢ主体。BBⅣ下層のスコリアを含む。
16 暗褐色土 SCⅢs4ブロックと黒褐色土ブロックを含む。
17 褐色土 SCⅢs4ブロックを多量に含み、ブロック内に空洞がある。

７号土坑



７号土坑
1 暗褐色土 BBⅢ主体。赤褐色スコリアを多量に含み、暗褐色スコリアを含む。炭化物をごく少量含む。
2 1に類似するが、赤褐色スコリアの量が減る。
3 暗褐色土 BBⅢ以下の層の混土。赤褐色スコリアは多量になり、粒径大の暗褐色スコリアが増える。黒褐色土粒子を少量含む。
4 褐色土 SCⅢ主体。発泡性の赤褐色スコリアを多量に含み、径1～10mmの暗褐色スコリアを含む。SCⅢs4相当のスコリアを少量含む。
5 4に類似するが、SCⅢs4のスコリアは含まない。
6 褐灰色土 ローム質土。黒味と粘性が強くなる。全体的にスコリアが少なく、粒径小のスコリアが大半を占める。
7 褐色土 ローム質土。粒径小の赤褐色・黒褐色スコリアを多量に含み、SCⅢs4相当のスコリアを含む。
8 7に類似するが、スコリアの量は減る。

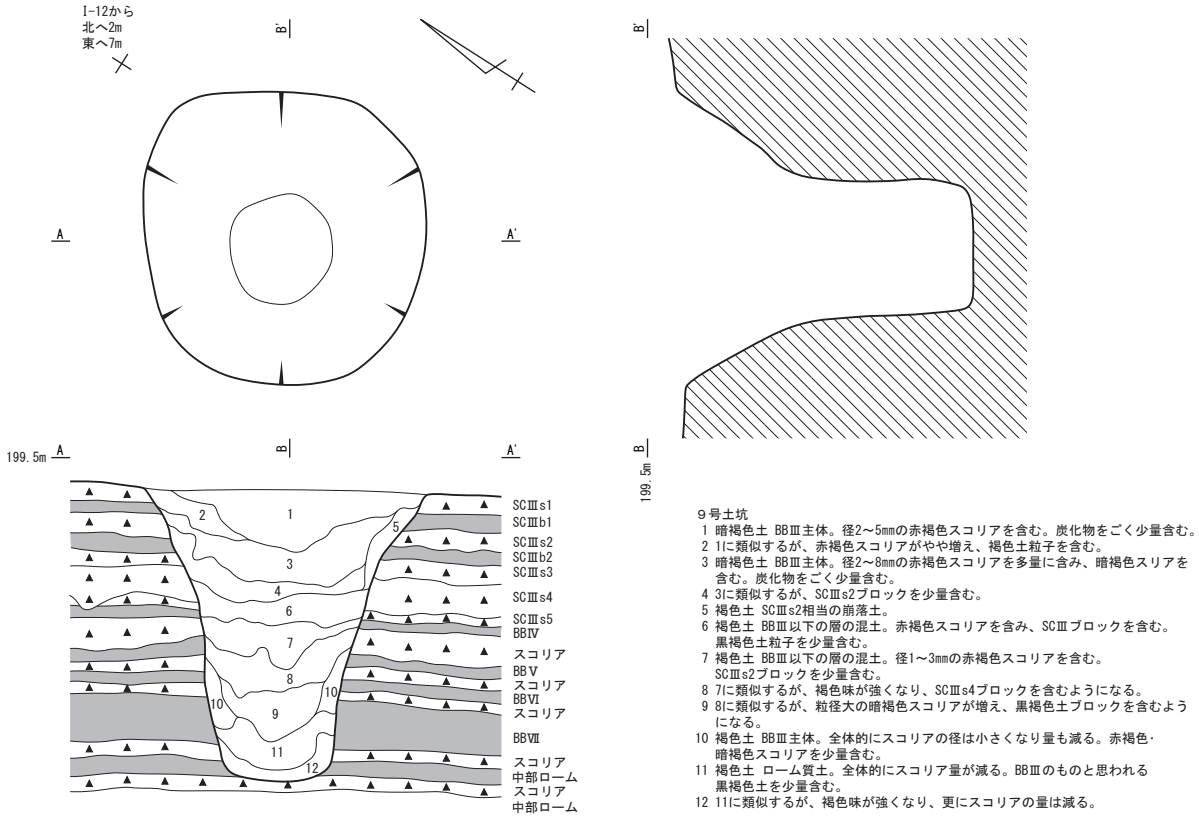
８号土坑



８号土坑
1 暗褐色土 BBⅢ主体。赤褐色スコリアを多量に含み、暗褐色スコリアを含む。炭化物をごく少量含む。
2 1に類似するが、赤褐色スコリアの量が減り、暗褐色スコリアの量が増える。
3 暗褐色土 BBⅢ以下の層の混土。粒径大の赤褐色・暗褐色スコリアを含む。
4 褐色土 SCⅢ主体。赤褐色スコリアを含み、暗褐色スコリアを多量に含む。SCⅢs4相当のスコリアをごく少量含む。
5 4に類似するが、SCⅢs4相当のスコリアは含まない。
6 褐色土 ローム質土。粒径小の赤褐色・黒褐色スコリアを多量に含み、同径の暗褐色スコリアを含む。

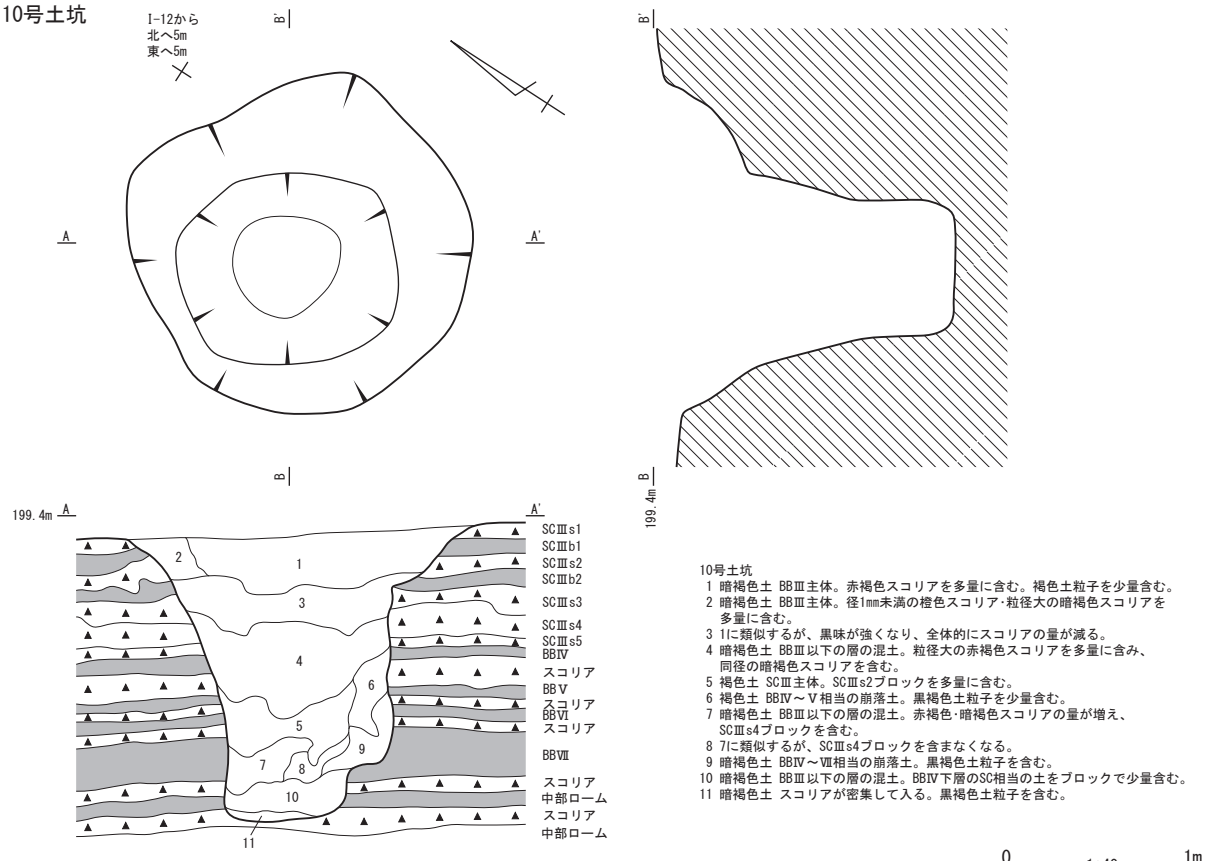
第11図　第Ⅲ文化層　土坑遺構図（２）

９号土坑



９号土坑
1 暗褐色土 BBⅢ主体。径2～5mmの赤褐色スコリアを含む。炭化物をごく少量含む。
2 1に類似するが、赤褐色スコリアがやや増え、褐色土粒子を含む。
3 暗褐色土 BBⅢ主体。径2～8mmの赤褐色スコリアを多量に含み、暗褐色スリアを含む。炭化物をごく少量含む。
4 3に類似するが、SCⅢs2ブロックを少量含む。
5 褐色土 SCⅢs2相当の崩落土。
6 褐色土 BBⅢ以下の層の混土。赤褐色スコリアを含み、SCⅢブロックを含む。黒褐色土粒子を少量含む。
7 褐色土 BBⅢ以下の層の混土。径1～3mmの赤褐色スコリアを含む。SCⅢs2ブロックを少量含む。
8 7に類似するが、褐色味が強くなり、SCⅢs4ブロックを含むようになる。
9 8に類似するが、粒径大の暗褐色スコリアが増え、黒褐色土ブロックを含むようになる。
10 褐色土 BBⅢ主体。全体的にスコリアの径は小さくなり量も減る。赤褐色・暗褐色スコリアを少量含む。
11 褐色土 ローム質土。全体的にスコリア量が減る。BBⅢのものと思われる黒褐色土を少量含む。
12 11に類似するが、褐色味が強くなり、更にスコリアの量は減る。

10号土坑

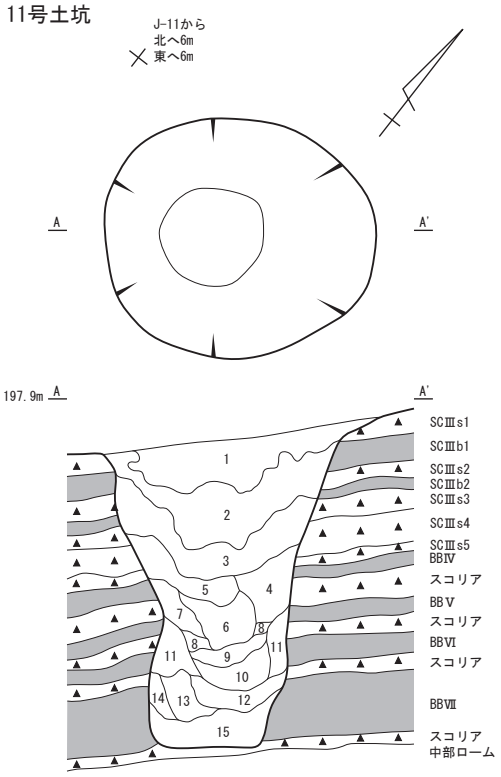


10号土坑
1 暗褐色土 BBⅢ主体。赤褐色スコリアを多量に含む。褐色土粒子を少量含む。
2 暗褐色土 BBⅢ主体。径1mm未満の橙色スコリア・粒径大の暗褐色スコリアを多量に含む。
3 1に類似するが、黒味が強くなり、全体的にスコリアの量が減る。
4 暗褐色土 BBⅢ以下の層の混土。粒径大の赤褐色スコリアを多量に含み、同径の暗褐色スコリアを含む。
5 褐色土 SCⅢ主体。SCⅢs2ブロックを多量に含む。
6 褐色土 BBⅣ～Ⅴ相当の崩落土。黒褐色土粒子を少量含む。
7 暗褐色土 BBⅢ以下の層の混土。赤褐色・暗褐色スコリアの量が増え、SCⅢs4ブロックを含む。
8 7に類似するが、SCⅢs4ブロックを含まなくなる。
9 暗褐色土 BBⅣ～Ⅶ相当の崩落土。黒褐色土粒子を含む。
10 暗褐色土 BBⅢ以下の層の混土。BBⅣ下層のSC相当の土をブロックで少量含む。
11 暗褐色土 スコリアが密集して入る。黒褐色土粒子を含む。

0　1:40　1m

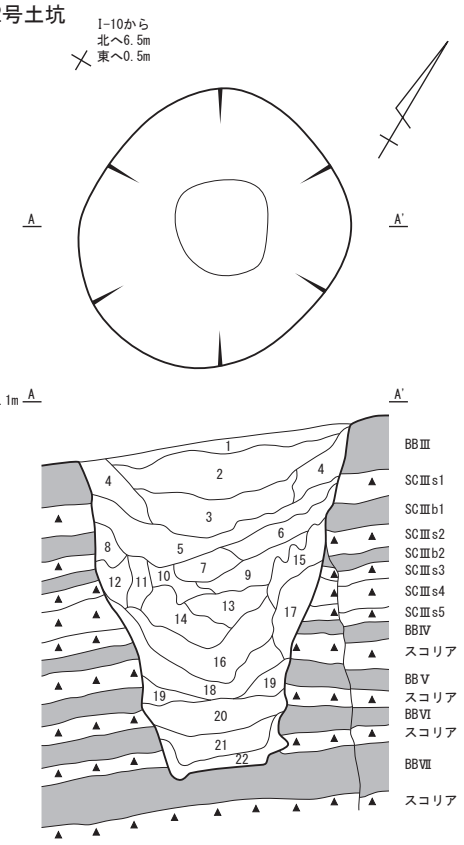
第12図　第Ⅲ文化層　土坑遺構図（３）

11号土坑



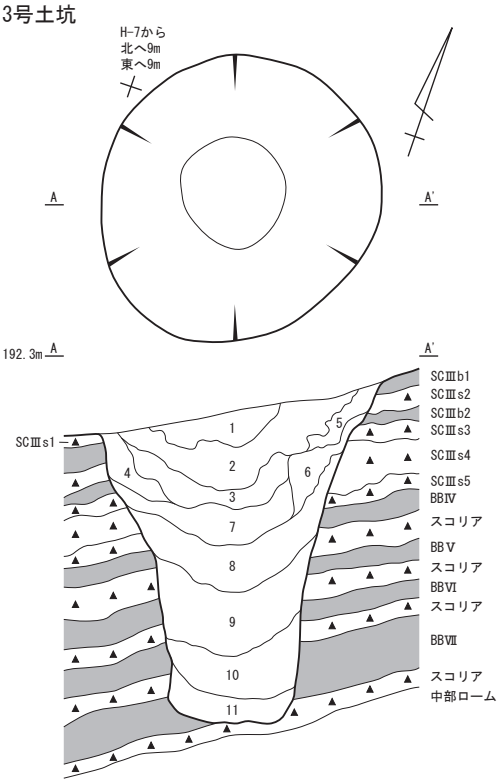
11号土坑
1 暗褐色土 BBⅢ主体。赤褐色スコリアを含む。炭化物と褐色土のブロックを少量含む。
2 暗褐色土 赤褐色スコリアを多量と、暗褐色スコリアを含む。SCⅢs2ブロックを少量含む。
3 暗褐色土 BBⅢ以下の層の混土。スコリアの量が増える。
4 褐色土 SCⅢ主体。SCⅢs2ブロックを含む。
5 褐色土 SCⅢ主体。SCⅢs4ブロックを含む。
6 5に類似するが、SCⅢs4のスコリアの量が減る。
7 褐色土 SCⅢ主体。SCⅢs4ブロックを少量含む。
8 4に類似するが、暗褐色･暗赤褐色スコリアを含む。
9 6に類似するが、黒褐色土粒子を含む。
10 褐色土 スコリア量が減り、ローム質土になる。
11 褐色土 SCⅢ主体。BBⅣ下層のスコリアを少量含む。
12 灰褐色土 水成質ローム。上位に鉄分が酸化し、周縁部が赤化している。スコリアの量は少ない。
13 12に類似。よく締まり硬質。粒径大の赤褐色･褐色スコリアを含む。
14 11に類似するが、褐色味が強い。
15 灰褐色土 水成質ローム。黒褐色土粒を多量に含む。下部は鉄分が酸化してる。

12号土坑



12号土坑
1 暗褐色土 SCⅡ相当。黒褐色土を含む。
2 暗褐色土 BBⅢ主体。炭化物を含む。
3 暗褐色土 SCⅢs2ブロックを多量に含み、にぶい赤褐色スコリアを含む。
4 暗褐色土 BBⅢ主体。褐色土ブロックを含む。
5 4に類似するが、赤褐色スコリアを含む。
6 暗褐色土 BBⅢ主体。暗褐色スコリアを含む。
7 6に類似するが、スコリアの量が増える。
8 暗褐色土 壁の崩落土。
9 暗褐色土 粒径大の赤褐色スコリアが増える。
10 暗褐色土 粒径小のスコリアを含む。
11 暗褐色土 BBⅢ以下の層の混土。
12 8に類似するが、黒味が強い。
13 暗褐色土 SCⅢs4ブロックを含む。
14 褐色土 SCⅢs2ブロックを含む。
15 褐色土 SCⅢs2ブロックを少量含む。
16 褐色土 SCⅢ主体。赤褐色スコリアを含み、暗褐色スコリアを多量に含む。
17 褐色土 SCⅢs2～s4相当の崩落土。
18 16に類似。黒褐色土粒子を少量含む。
19 18に類似するが、スコリアの量が減る。
20 褐灰色土 水成質ローム。鉄分が酸化し、周縁部が赤化している。
21 褐色土 ローム質土。BBⅣ下層のスコリアをブロック状に含む。
22 21に類似するが、褐色味が強くなり、スコリアの量も減る。

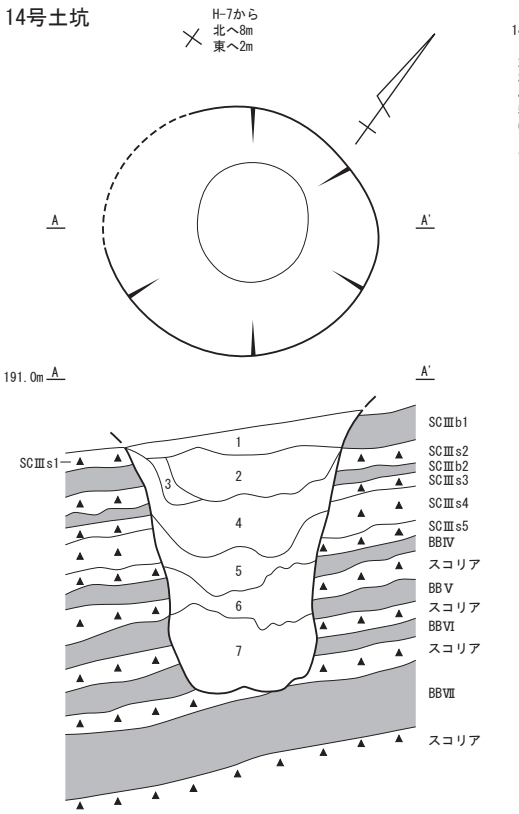
13号土坑



13号土坑
1 暗褐色土 BBⅢ以下の層の混土。SCⅢs2ブロックを含む。炭化物を少量含む。
2 1に類似するが、粒径大のスコリアを含む。
3 暗褐色土 BBⅢ以下の層の混土。赤褐色･にぶい赤褐色スコリアを含む。
4 暗褐色土 BBⅢ主体。赤褐色スコリアを含み、褐色土ブロックを多量に含む。
5 暗褐色土 褐色土ブロックを含む。
6 褐色土 SCⅢ主体。スコリアの量は多く、SCⅢs4ブロックを含む。
7 褐色土 全体的にスコリアの量が減る。
8 褐色土 SCⅢ主体。SCⅢs4ブロックを含むようになる。
9 8に類似するが、暗褐色･黒褐色スコリアの量が増え、黒褐色土粒子を含む。
10 暗褐色土 スコリアの量が減り、ローム質土になる。黒褐色土ブロックを含む。
11 10に類似するが、褐色味が強くなり、SCⅢs4ブロックを含む。

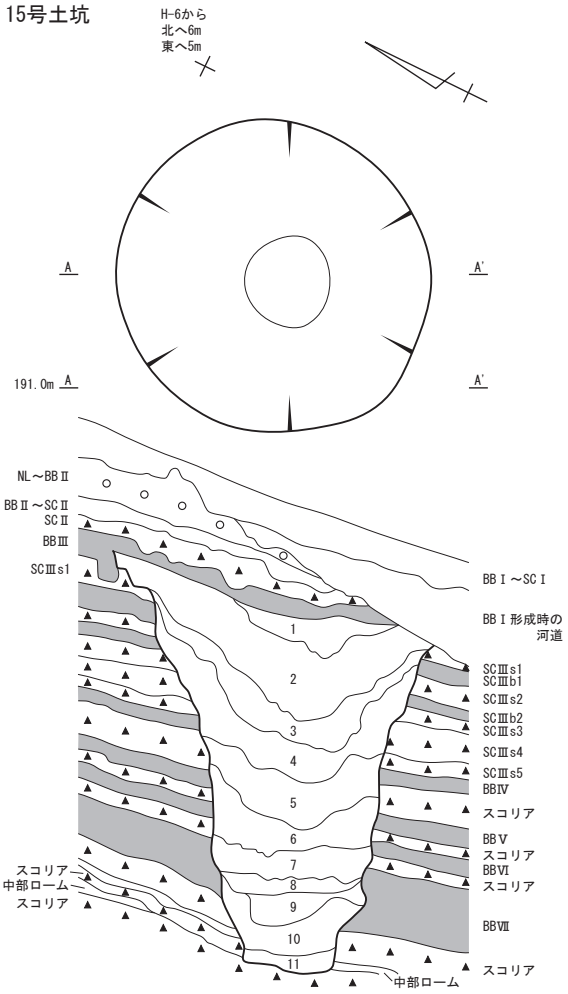
第13図　第Ⅲ文化層　土坑遺構図（４）

14号土坑



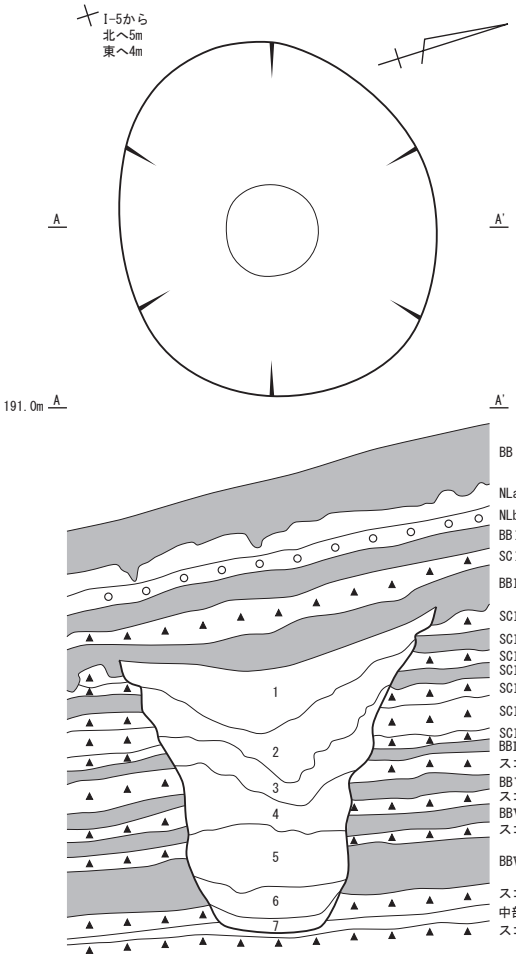
14号土坑
1 暗褐色土 BBⅢ以下の層の混土。SCⅢs2ブロックを含む。
2 1に類似するが、暗褐色スコリアを含む。SCⅢs2ブロックは含まなくなる。
3 暗褐色土 赤褐色スコリアを含む。
4 褐色土 SCⅢ主体。赤褐色･暗赤褐色を含み、SCⅢs2ブロックを少量含む。
5 4に類似するが、褐色味が強くなる。
6 褐色土 粒径大の暗褐色スコリアとSCⅢs4ブロックを含み、覆土中最も
スコリアの量が多くなる。
7 褐灰色土 水成質ローム。鉄分が酸化し、周縁部が赤化してる。
下位に暗褐色スコリアを多量に含む。

15号土坑



15号土坑
1 暗褐色土 BBⅢ主体。赤褐色スコリアを含む。
2 1に類似するが、粘性が強く、炭化物を少量含む。
3 暗褐色土 BBⅢ以下の層の混土。SCⅢs2ブロックを少量含む。
4 褐色土 SCⅢ主体。暗褐色スコリアを含む。SCⅢs2のスコリアを多量に含む。
5 褐色土 SCⅢ主体。下位にSCⅢs4ブロックを含むようになる。
6 5に類似するが、SCⅢs4ブロックで含まなくなる。
7 褐色土 水成質ローム。堆水により脱色し灰色味をおびる。
鉄分が酸化し、部分的に赤化している。スコリア量は少ない。
8 褐色土 SCⅢ主体。スコリア量が増える。
9 褐色土 SCⅢ主体。SCⅢs4ブロックを多量に含む。
10 暗褐色土 ローム質土。黒味が強く、最もスコリア量が少ない。
11 10に類似するが、赤褐色･暗褐色スコリアを少量含む。

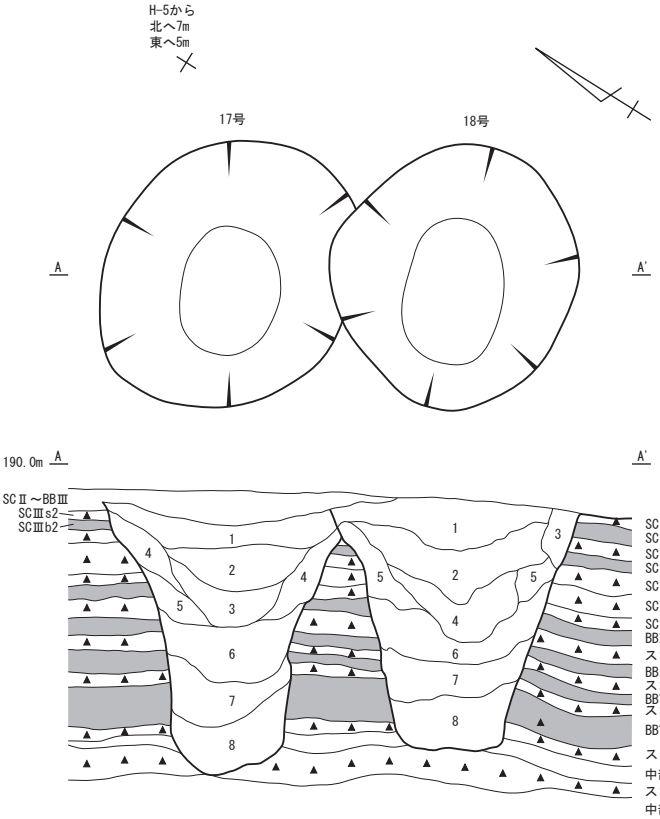
16号土坑



16号土坑
1 暗褐色土 BBⅢ主体。赤褐色スコリアを含み、炭化物を少量含む。
2 暗褐色土 BBⅢ以下の層の混土。SCⅢブロックを含む。
3 2に類似するが、全体的にスコリア量が増える。
4 褐色土 SCⅢ主体。赤褐色･暗褐色･黒褐色スコリアを含む。
5 暗褐色土 水成質ローム。鉄分が酸化し部分的に赤化してる。黒褐色土ブロックを多量に含む。
6 5に類似するが、粘性が強くなる。SCⅢs4ブロックと褐色土を含む。
7 暗褐色土 暗褐色･黒褐色スコリアを多量に含む。黒褐色土ブロックを含む。

第14図　第Ⅲ文化層　土坑遺構図（５）

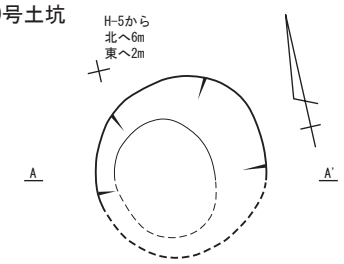
17・18号土坑

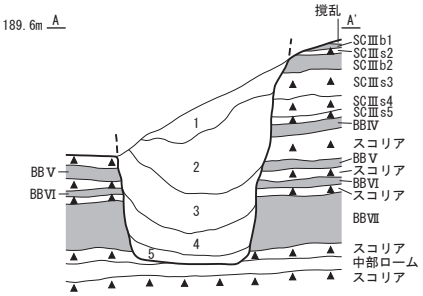


17号土坑
1 暗褐色土 BBⅢ主体。赤褐色スコリアを含む。炭化物をごく少量含む。
2 暗褐色土 BBⅢ以下の層の混土。赤褐色スコリアと粒径大の暗褐色スコリアを含む。
3 2に類似するが、赤褐色スコリアの量が増え、黒褐色スコリアを少量含む。
4 暗褐色土 SCⅢs2～s4相当のブロックを含む。
5 褐色土 SCⅢs4ブロックを含む。
6 褐色土 SCⅢ主体。赤褐色･暗褐色･黒褐色スコリアを含み、SCⅢs4ブロックを多量に含む。
黒褐色土粒子･ブロックを含むようになる。
7 暗褐色土 水成質ローム。全体的にスコリアの量が減る。
鉄分が酸化し幅5mm位の帯状に赤化している。
8 暗褐色土 ローム質土。粒径大の暗褐色スコリアを多量に、褐色土ブロックを少量含む。

18号土坑
1 暗褐色土 BBⅢ主体。赤褐色スコリアを含み、暗褐色スコリアを少量、橙色スコリアをごく少量含む。炭化物をごく少量含む。
2 1に類似するが、暗褐色スコリアの量が増え、褐色土ブロックをパッチ状に少量含む。
3 暗褐色土 BBⅢの崩落土。褐色土ブロックをごく少量含む。
4 暗褐色土 BBⅢ以下の層の混土。赤褐色スコリアを含み、黒色スコリアとSCⅢブロックを少量含む。
5 暗褐色土 SCⅢs4ブロックを含む。
6 褐色土 SCⅢ主体。赤褐色スコリアを含み、暗赤褐色･暗褐色スコリアを少量含む。SCⅢs4ブロックを含む。
7 6に類似するが、粒径大の暗褐色スコリアが増える。
8 暗褐色土 SCⅢ主体。上層よりスコリア量が減る。

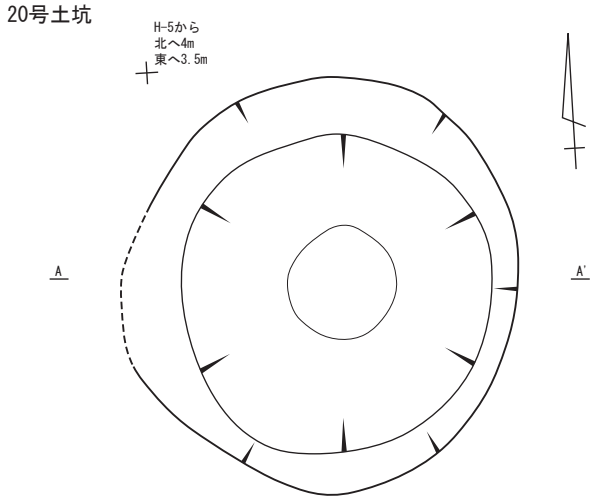
19号土坑

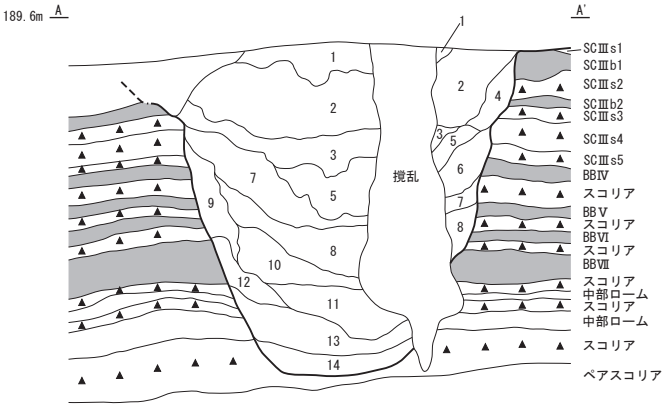




19号土坑
1 暗褐色土 BBⅢ主体。発泡性の赤褐色スコリアを含む。
2 暗褐色土 BBⅢ主体。粒径大の暗褐色スコリアと、SCⅢs1～s2相当のブロックを含む。
3 暗褐色土 BBⅢ主体。赤褐色スコリアを含み、暗褐色スコリアを多量に含む。覆土中最硬質。
4 暗褐色土 BBⅢ主体。赤褐色･にぶい赤褐色･暗赤褐色スコリアとSCⅢs4ブロックを含む。
5 暗褐色土 全体的にスコリアの量が減り、ローム質土になる。

20号土坑

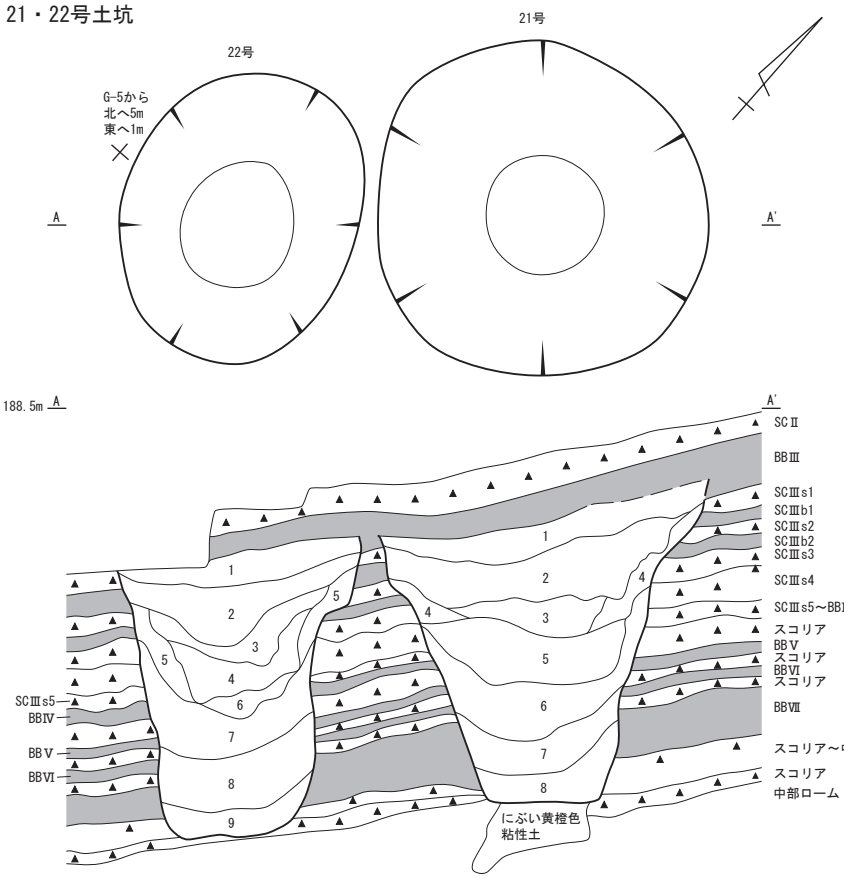




20号土坑
1 暗褐色土 SCⅡ相当。径5～8mmの暗褐色スコリアを少量含む。
2 暗褐色土 BBⅢ主体。赤褐色スコリアを含み、炭化物をごく少量含む。
3 暗褐色土 BBⅢ以下の層の混土。SCⅢs2ブロックを少量含む。
4 2に類似するが、SCⅢs2のブロックの量が増える。
5 暗褐色土 BBⅢ主体。粒径大の暗褐色スコリアと褐色土粒子を少量含む。
6 暗褐色土 SCⅢs2ブロックを多量に含む。
7 暗褐色土 BBⅢ主体。赤褐色･粒径大の暗褐色スコリアを含む。
8 暗褐色土 BBⅢ以下の層の混土。赤褐色スコリア、SCⅢs4のブロックを多量に含む。粒径大の暗褐色スコリアを少量含む。
9 褐色土 SCⅢ主体。SCⅢs2ブロックを少量含む。
10 褐色土 SCⅢ主体。赤褐色スコリアを多量に含み、暗褐色スコリアとSCⅢs2ブロックを含む。
11 褐色土 径10mmを超す赤褐色･暗褐色スコリアと、SCⅢs4ブロックを多量に含む。径5～15mmの炭化物を少量含む。
12 褐色土 ローム質土。赤褐色スコリアを少量含む。
13 褐色土 ローム質土。粒径大の赤褐色･暗褐色スコリアを含む。
14 13に類似するが、スコリアの量は覆土中最も少なくなる。

第15図　第Ⅲ文化層　土坑遺構図（６）

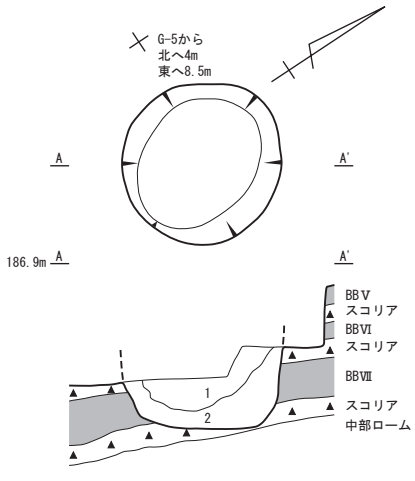
21・22号土坑



21号土坑
1 暗褐色土 BBⅢ主体。径1mm未満の橙色スコリアを少量含む。炭化物をごく少量含む。
2 暗褐色土 BBⅢ主体。径2～3mmの赤褐色スコリアを含み、粒径大の暗褐色スコリアを少量含む。
3 暗褐色土 BBⅢ以下の層の混土。SCⅢs4ブロックを少量含む。
4 褐色土 SCⅢs2ブロックを含む。
5 褐色土 SCⅢ主体。赤褐色スコリアを多量に含み、粒径大の暗褐色スコリア・SCⅢs4ブロックを含む。
6 5に類似するが、SCⅢs4ブロックの量が増える。黒褐色土粒子を少量含む。
7 褐色土 SCⅢ主体。赤褐色・暗褐色・SCⅢs4ブロックを含む。黒褐色土粒子を含む。
8 暗褐色土 SCⅢ主体。赤褐色スコリアを含み、暗褐色スコリア・SCⅢs4ブロックを少量含む。黒褐色土粒子を多量に含む。

22号土坑
1 暗褐色土 BBⅢ主体。径1mm未満の橙色スコリアをごく少量含む。炭化物をごく少量含む。
2 暗褐色土 発泡性の赤褐色スコリアを多量に含む。下位にSCⅢブロックを多量に含む。
3 暗褐色土 BBⅢ以下の層の混土。赤褐色・暗褐色・橙色スコリアを少量含む。
4 暗褐色土 粒径小の赤褐色・暗褐色スコリアを含む。
5 褐色土 SCⅢs2ブロックを含む。
6 褐色土 SCⅢ主体。赤褐色スコリアを含み、暗褐色スコリアを少量含む。SCⅢs4ブロックを少量含む。
7 褐色土 SCⅢ主体。赤褐色スコリアを多量に、粒径大の暗褐色スコリア・SCⅢs4ブロックを含む。黒褐色土粒子を含む。
8 暗褐色土 BBⅢ主体。赤褐色スコリアを含み、粒径大の暗褐色スコリア・SCⅢs4ブロックを少量含む。
9 8に類似するが、暗褐色スコリアとSCⅢs4ブロックの量が減る。

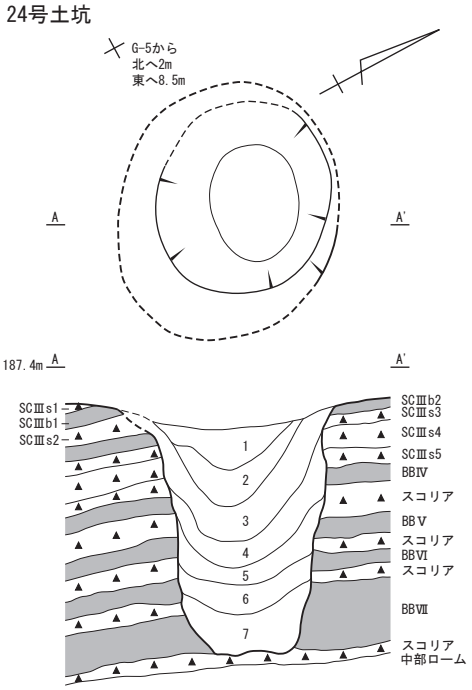
23号土坑



23号土坑
1 褐色土 SCⅢ主体。粒径小の赤褐色・暗褐色スコリアを含む。黒褐色土粒子をごく少量含む。
2 1に類似するが、赤褐色スコリアの量が減り、粒径大の暗褐色スコリアを少量含むようになる。

24号土坑
1 暗褐色土 BBⅢ以下の層の混土。発泡性の赤褐色スコリアを含む。炭化物をごく少量含む。
2 暗褐色土 発泡性の赤褐色スコリアを多量に含み、SCⅢs4ブロックを含む。
3 褐色土 SCⅢ主体。SCⅢs4ブロックを多量に含む。黒褐色土粒子を含む。
4 褐色土 粒径大の暗褐色・黒色スコリアを含む。黒褐色土粒子を少量含む。
5 4に類似するが、スコリアの量が減り、暗赤褐色スコリアを少量含むようになる。
6 褐色土 SCⅢ主体。赤褐色・暗褐色スコリアを少量含む。黒褐色土ブロックを含む。
7 褐色土 水成質ローム。赤褐色・暗褐色・黒褐色土粒子を少量含む。鉄分が酸化し、幅10mm位の帯状に赤化している。

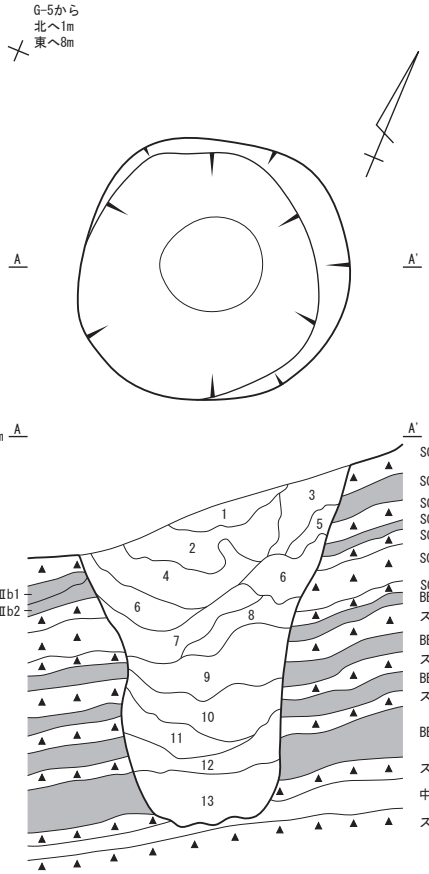
24号土坑



0　1:40　1m

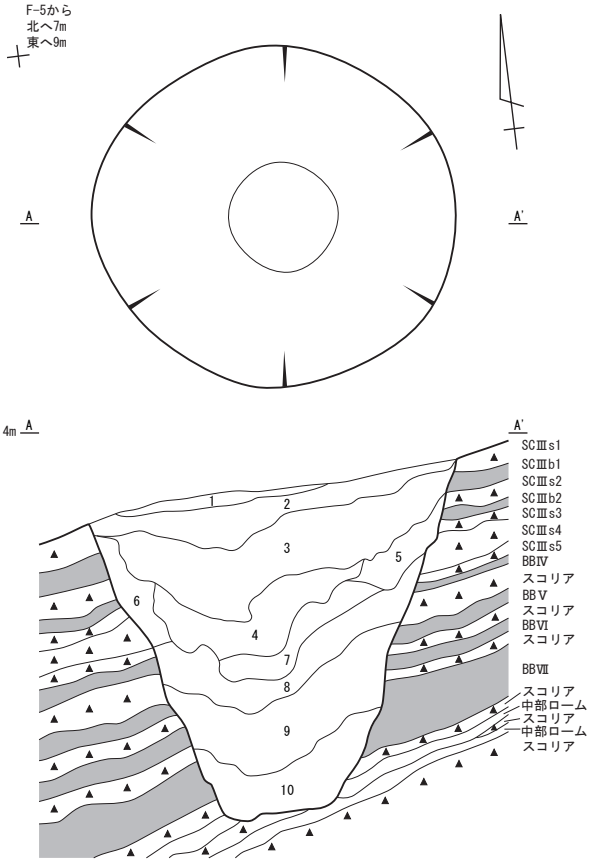
第16図　第Ⅲ文化層　土坑遺構図（７）

25号土坑



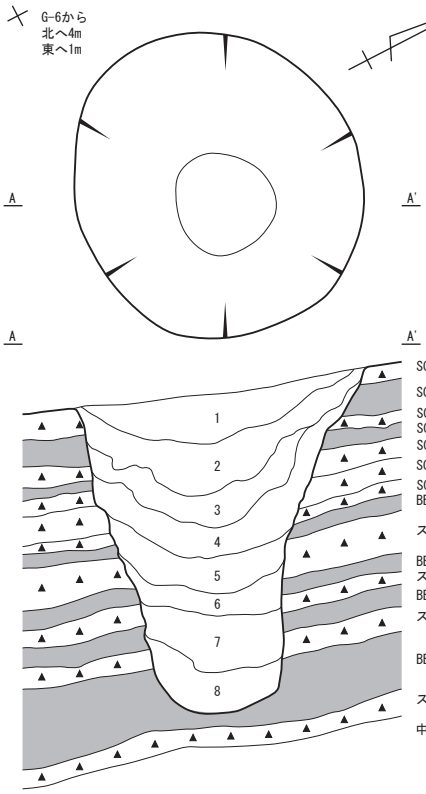
25号土坑
1 暗褐色土 BBⅢ主体。下位に径1～5mmの赤褐色スコリアを含む。
2 1に類似するが、SCⅢブロックを少量含む。
3 暗褐色土 BBⅢ主体。暗褐色スコリアを含む。炭化物をごく少量含む。
4 暗褐色土 BBⅢ以下の層の混土。SCⅢs2～s4相当のブロックを多量に含む。
5 暗褐色土 SCⅢs1相当のブロックを含む。
6 暗褐色土 赤褐色･暗褐色スコリア･SCⅢs2相当のブロックを含む。
7 暗褐色土 赤褐色･暗褐色スコリアを多量に含み、SCⅢs4ブロックを少量含む。
8 7に類似するが、スコリアの量が減る。
9 褐色土 赤褐色･暗褐色スコリアを含み、SCⅢs4のブロックを多量に含む。
10 9に類似するが、黒味が強くなる。
11 褐色土 暗褐色スコリアを含む。
12 11に類似するが、暗褐色スコリアの量が減る。
13 暗褐色土 水成質ローム。スコリアの量は減り、黒褐色土ブロックを含む。
鉄分が酸化し、幅10mm位の帯状に赤化している。

26号土坑



26号土坑
1 暗褐色土 SCⅡ相当。暗褐色スコリアを少量含み、炭化物をごく少量含む。
2 暗褐色土 BBⅢ主体。発泡性の赤褐色スコリアを含む。
3 2に類似するが、暗褐色スコリアを含む。炭化物を含む。
4 暗褐色土 BBⅢ以下の層の混土。SCⅢブロックを少量含む。
5 4に類似するが、SCⅢ相当のブロックを含む。
6 褐色土 SCⅢs2ブロックを多量に含む。
7 褐色土 SCⅢ主体。赤褐色･粒径大の暗褐色スコリアを含む。
8 褐色土 SCⅢ主体。SCⅢs2～s4相当のブロックを含む。
9 8に類似するが、SCⅢs2～s4相当のブロックは減り、暗赤褐色スコリアを含むようになる。
10 褐色土 全体的にスコリアの量が減る。鉄分が酸化し部分的に赤化している。

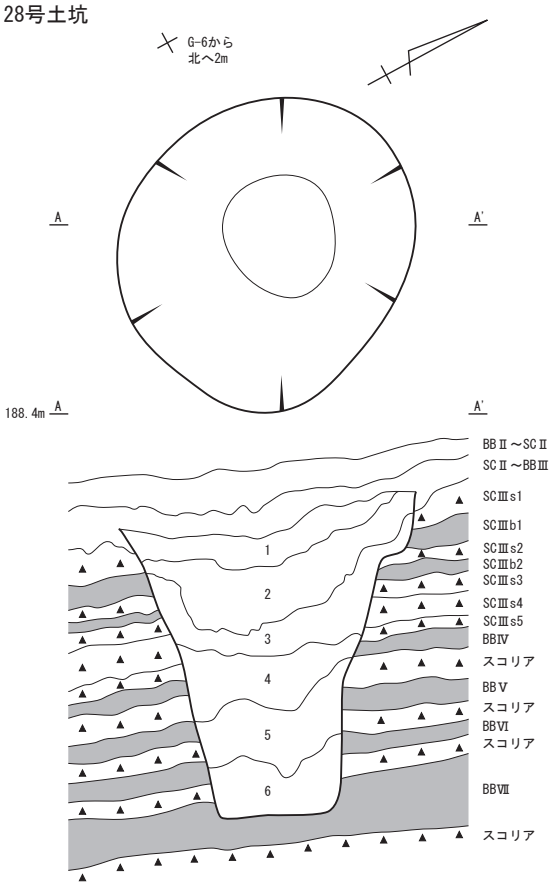
27号土坑



27号土坑
1 暗褐色土 BBⅢ主体。径1mm未満の橙色スコリアをごく少量含む。炭化物を少量含む。
2 暗褐色土 BBⅢ以下の層の混土。発泡性の赤褐色スコリアを含む。
粒径大の暗褐色スコリアを少量含む。
3 暗褐色土 赤褐色スコリアを多量に含み、SCⅢブロックを少量含む。
4 褐色土 SCⅢ主体。赤褐色スコリアを多量に含み、暗褐色スコリア･SCⅢs2～s4相当の
ブロックを含む。
5 4に類似するが、褐色味が強くなり、粒径大の暗褐色スコリアの量が増える。
SCⅢs2ブロックは含まなくなる。
6 褐色土 ローム質土。粒径小の赤褐色スコリアを少量含み、粒径大の暗褐色スコリアを
含む。
7 褐灰色土 水成質ローム。赤褐色･粒径大の暗褐色スコリアを含む。
鉄分が酸化し、下位に幅20mm位の帯状に赤化している。
8 褐色土 ローム質土。赤褐色･暗褐色スコリア･SCⅢs4ブロックを含む。

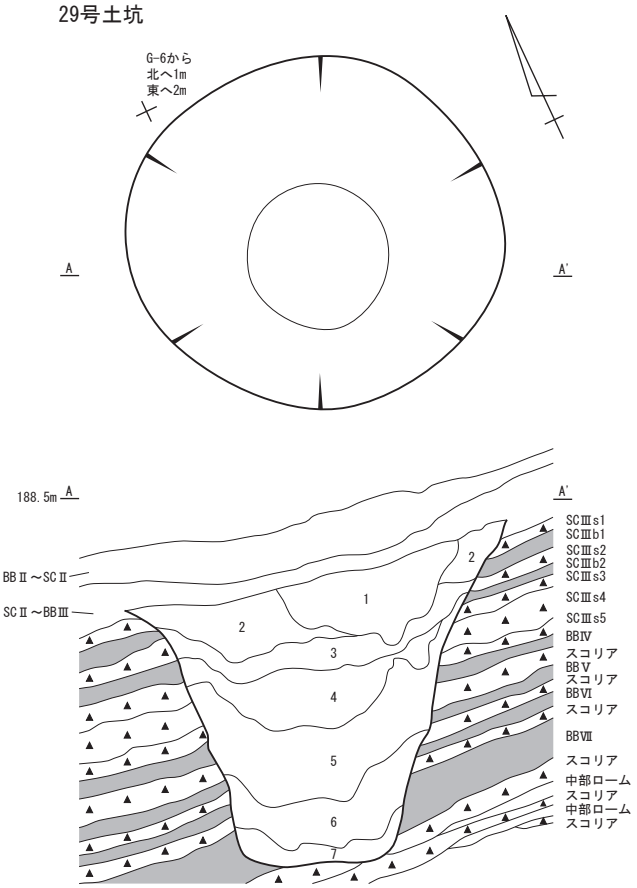
第17図　第Ⅲ文化層　土坑遺構図（８）

28号土坑



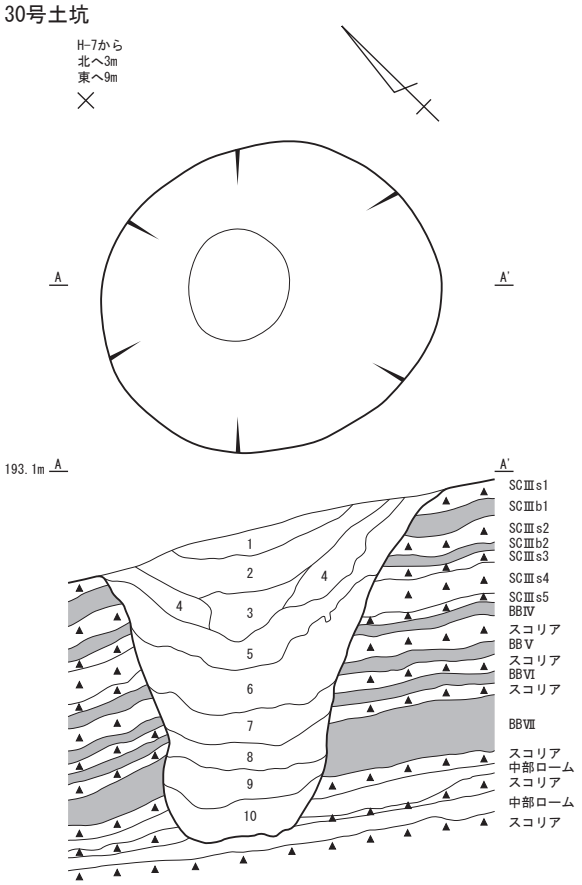
28号土坑
1 暗褐色土 BBⅢ主体。下位に赤褐色スコリアを含む。
2 暗褐色土 BBⅢ以下の層の混土。赤褐色スコリアを含む。
粒径大の暗褐色スコリアを少量、炭化物をごく少量含む。
3 2に類似するが、赤褐色･暗褐色スコリアの量が増える。SCⅢs2ブロックを含む。
4 褐色土 SCⅢ主体。赤褐色スコリアを多量に含み、粒径大の暗褐色スコリアを含む。SCⅢs4ブロックを少量含む。
5 褐色土 SCⅢ主体。赤褐色スコリア･SCⅢs4ブロックを含み、粒径大の暗褐色スコリアを多量に含む。
6 5に類似するが、全体的にスコリア量が減り、黒褐色土粒子を含む。

29号土坑



29号土坑
1 暗褐色土 BBⅢ主体。径1～2㎜の発泡性の赤褐色スコリアを含む。
2 1に類似するが、発泡性の赤褐色スコリアの量が多くなる。炭化物を少量含む。
3 暗褐色土 BBⅢ以下の層の混土。赤褐色スコリアを含み、粒径大の暗褐色スコリアを少量含む。炭化物を含む。
4 3に類似するが、暗褐色スコリアの量は増え、SCⅢ相当のブロックを少量含む。
5 褐色土 SCⅢ主体。赤褐色スコリアを多量に含み、粒径大の暗褐色スコリアを含む。黒褐色土粒子を少量含む。
6 褐色土 赤褐色スコリアを少量含み、粒径大の暗褐色スコリアを多量に含む。SCⅢ相当のブロックを含む。黒褐色土粒子を含む。
7 褐色土 全体的にスコリア量が減り、覆土中最硬質になる。黒褐色土粒子を多量に含む。

30号土坑



30号土坑
1 暗褐色土 BBⅢ主体。赤褐色スコリアを含む。
2 暗褐色土 BBⅢ以下の層の混土。赤褐色スコリアを含み、SCⅢブロックを少量含む。
3 暗褐色土 赤褐色スコリアを多量に含み、SCⅢs2ブロックを含む。炭化物を少量含む。
4 暗褐色土 黒味が強く、赤褐色･暗褐色スコリアの量が減る。
5 暗褐色土 BBⅢ以下の層の混土。下位に粒径大のスコリアが増え、SCⅢs2ブロックを少量含む。
6 褐色土 赤褐色･暗褐色スコリアを含み、SCⅢs4ブロックを含むようになる。
7 6に類似するが、暗褐色スコリアの量が増える。
8 7に類似するが、SCⅢs4ブロックを多量に含むようになる。
9 暗褐色土 SCⅢ主体。赤褐色スコリアと黒褐色土ブロックを含む。
10 暗褐色土 SCⅢ主体。全体的にスコリア量が減り、固くよく締まる。ローム質土になる。

第18図　第Ⅲ文化層　土坑遺構図（９）

第５表　第Ⅲ文化層 土坑一覧表

土坑番号	地区	グリッド	検出面	口径（m）	底経（m）	深さ（m）	配置列
１号	南尾根	P-13	SCⅢs1	1.32	0.60	1.48	１群
２号	南尾根	O-14	SCⅢb1	1.20	0.56	1.40	１群
３号	南尾根	O-15	SCⅢs1	1.12	0.54	1.44	１群
４号	中央谷部	N-16	SCⅢb1	1.24	0.50	1.52	１群
５号	中央谷部	M～N-17～18	SCⅢs1	1.32	0.56	1.52	１群
６号	中央谷部	N-19	SCⅢs1	1.04	0.50	1.48	１群
７号	南尾根	J-16	SCⅢs1	1.36	0.64	1.40	２群
８号	南尾根	H-15	SCⅢs1	1.50	0.60	1.44	２群
９号	南尾根	I-12	SCⅢs1	1.48	0.54	1.54	２群
10号	南尾根	I-12	SCⅢs1	1.16	0.56	1.50	２群
11号	南西谷部	J-11	SCⅢs1	1.26	0.52	1.70	３群
12号	南西谷部	I-10	BBⅢ	1.44	0.50	1.74	３群
13号	南西谷部	H-7～8	SCⅢs1	1.48	0.56	1.64	３群
14号	南西谷部	H-7	SCⅢs1	1.32	0.62	1.38	３群
15号	南西谷部	H-6	BBⅢ	1.68	0.44	1.88	３群
16号	南西谷部	I-5	SCⅢb1	1.68	0.48	1.40	３群
17号	南西谷部	H-5	SCⅢs1	1.40	0.76	1.52	３群
18号	南西谷部	H-5	BBⅢ～SCⅡ	1.42	0.68	1.36	３群
19号	南西谷部	H-5	BBⅢ～SCⅡ	0.90	0.54	0.82	３群
20号	南西谷部	H-5	SCⅢs1	1.64	0.58	1.76	３群
21号	南西谷部	G-5	BBⅢ	1.28	0.60	1.48	３群
22号	南西谷部	G-5	BBⅢ	1.74	0.62	1.46	３群
23号	南西谷部	G-6	SCⅢs1	1.52	0.52	1.68	３群
24号	南西谷部	F～G-6	BBⅢ～SCⅡ	2.00	0.74	1.48	３群
25号	南西谷部	F～G-6	SCⅢs1	1.28	0.54	1.66	３群
26号	南西谷部	F-5～6	SCⅢs1	1.92	0.60	1.68	３群
27号	南西谷部	G-6	BBⅢ～SCⅡ	1.56	0.60	1.54	３群
28号	南西谷部	G-5	SCⅢs1	0.92	0.48	1.20	３群
29号	南西谷部	G-5	BBⅣ	0.84	0.64	0.40	３群
30号	南西谷部	H-7	SCⅢs1	1.60	0.60	1.60	３群

（２）炭化物集中（第19～21図）

尾根を違えて12ヶ所が検出されており、中央尾根に２ヶ所（炭化物集中３・４）、中央尾根南部に２ヶ所（炭化物集中５・６）、南尾根に４ヶ所（炭化物集中７～10）、南尾根南部に４ヶ所（炭化物集中11～14）である。出土のピークは、第Ⅲ黒色帯下底付近（炭化物集中３・４・９～14）と中部～上部付近（炭化物集中５～８）が存在する。遺物や土坑との関係が不明瞭なため、同一文化層として取り扱うが、時期が異なる可能性が高いことは明記しておく。

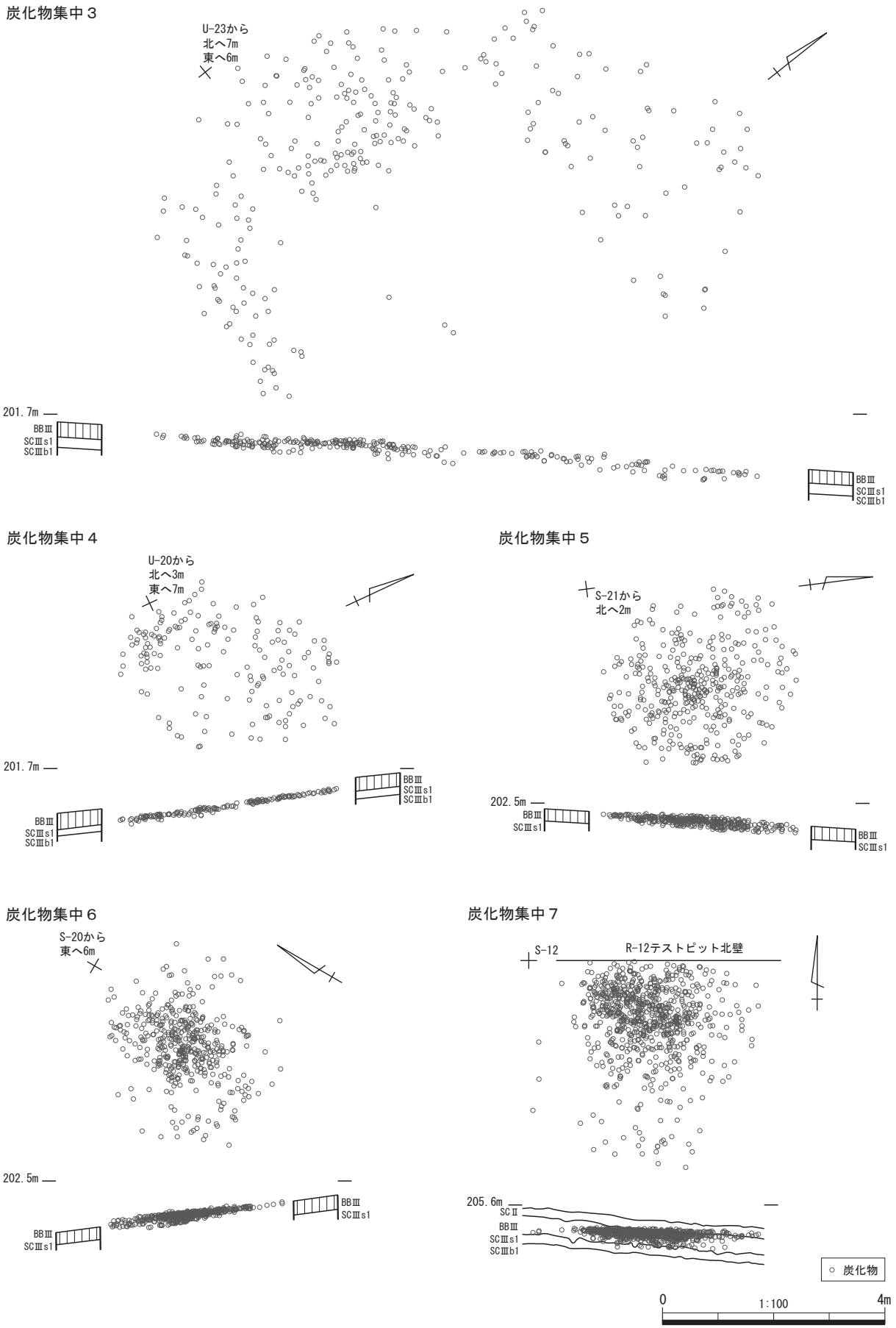
いずれの炭化物集中も、分布範囲の土壌には、赤化などの変化は確認できなかった。

炭化物集中３（第19図）

中央尾根のU～V－23～24グリッドから検出された。長さ11m、幅6.5mの範囲から、280点を超える炭化物が検出された。半月状に分布している。出土のピークは第Ⅲ黒色帯の下部である。付近は、西から東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。

炭化物集中４（第19図）

中央尾根のU－20グリッドから検出された。長さ４m、幅３mの範囲に、160点を超える炭化物が、集中して分布している。出土のピークは第Ⅲ黒色帯の下底である。付近は、北から南側の谷部にかけて下る、丘陵部の際である。



第19図　第Ⅲ文化層　中央尾根 炭化物集中 遺構図（１）

炭化物集中５（第19図）

中央尾根のＳ－21グリッドから検出された。直径3.6mの範囲に、380点を超える炭化物が、密集して分布している。出土のピークは第Ⅲ黒色帯の中部～上部付近であるが、上下に多少の幅を持って分布している。付近は、南に張り出した丘陵部だが、すぐ西側は谷部となっている。炭化物集中６が南西側５ｍに位置している。

炭化物集中６（第19図）

中央尾根のＲ－20グリッドから検出された。直径3.8mの範囲に、440点を超える炭化物が、密集して分布している。出土のピークは第Ⅲ黒色帯の中部～上部付近であるが、上下に多少の幅を持って分布している。付近は、南に張り出した丘陵部だが、すぐ西側は谷部となっている。炭化物集中５が北東側５ｍに位置している。

炭化物集中７（第19図）

南尾根のＲ－12グリッド、テストピット内から検出された。直径４ｍの範囲に、700点を超える炭化物が、密集して分布している。遺構の北側はテストピットの壁面により切られている。出土のピークは、第Ⅲ黒色帯の中部～上部付近であるが、第Ⅲスコリア帯スコリア１～第Ⅱスコリア層にかけて上下に幅を持って分布している。付近は、北西から南東にかけて下る傾斜地である。

炭化物集中８（第20図）

南尾根のＯ～Ｐ－13グリッドから検出された。長さ２ｍ、幅1.5mの範囲に、50点を超える炭化物が集中して分布している。出土のピークは、第Ⅲ黒色帯の上部付近であるが、上下に幅を持って分布している。付近は、北西から南東にかけて下る傾斜地である。近くに１・２号土坑が位置するが、関係は不明である。

炭化物集中９（第20図）

南尾根のＪ－13～14グリッドから検出された。長さ６ｍ、幅５ｍの範囲に、390点を超える炭化物が、集中して分布している。出土のピークは第Ⅲ黒色帯の下底である。付近は、北から南にかけて、緩やかに下る丘陵部である。炭化物集中10が東側７ｍに位置している。

炭化物集中10（第20図）

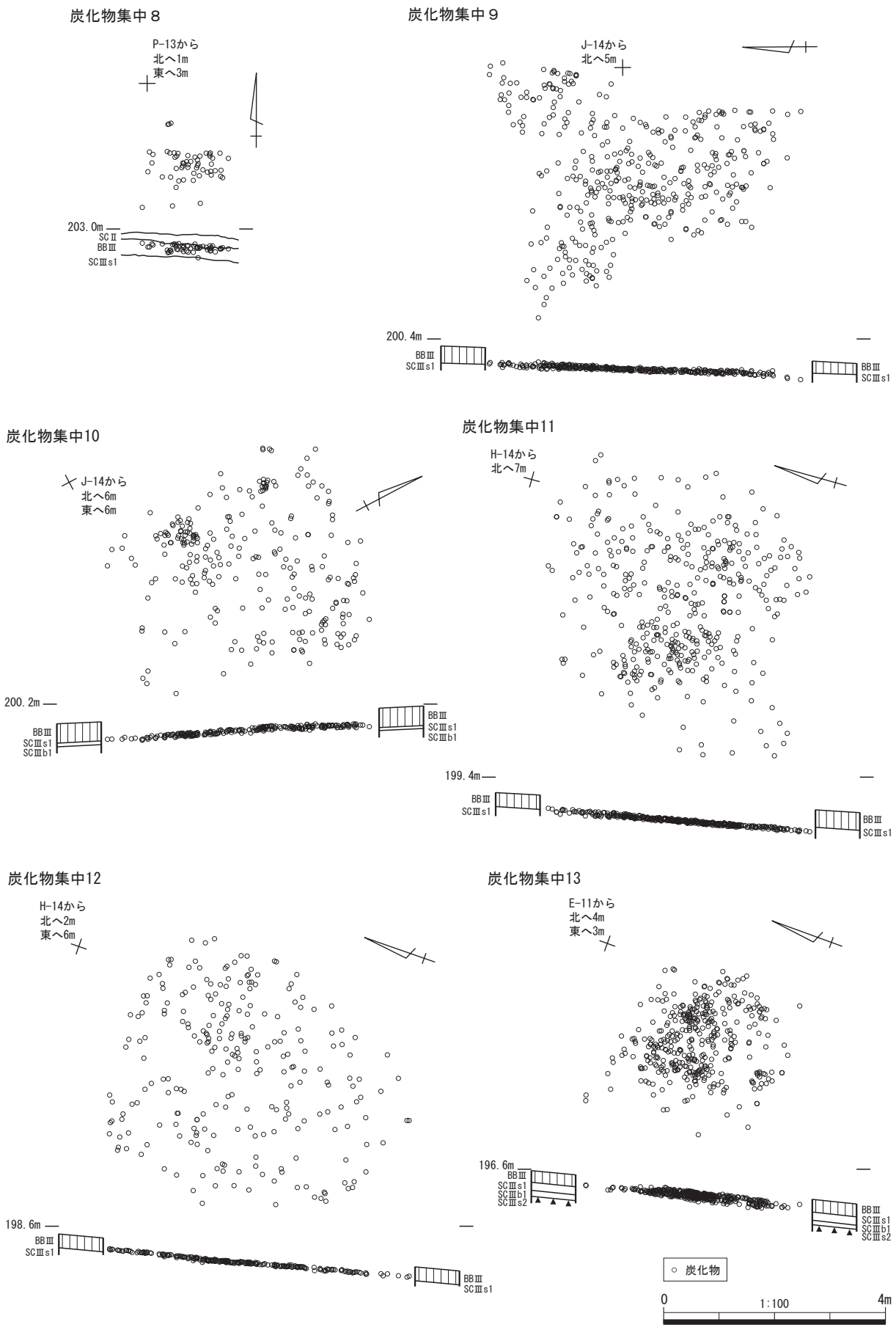
南尾根のＪ－14グリッドから検出された。直径５ｍの範囲に、250点を超える炭化物が、集中して分布している。出土のピークは第Ⅲ黒色帯の下底である。付近は、北から南にかけて、緩やかに下る丘陵部である。炭化物集中９が西側７ｍに位置している。

炭化物集中11（第20図）

南尾根南部のＨ－13～14グリッドから検出された。長さ6.5m、幅５ｍの範囲に、400点を超える炭化物が、密集して分布している。出土のピークは第Ⅲ黒色帯の下底である。付近は、北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。炭化物集中12が南東側４ｍに位置している。

炭化物集中12（第20図）

南尾根南部のＨ～Ｇ－14グリッドから検出された。直径５ｍの範囲に、240点を超える炭化物が、集中



第20図　第Ⅲ文化層　南尾根 炭化物集中 遺構図（２）

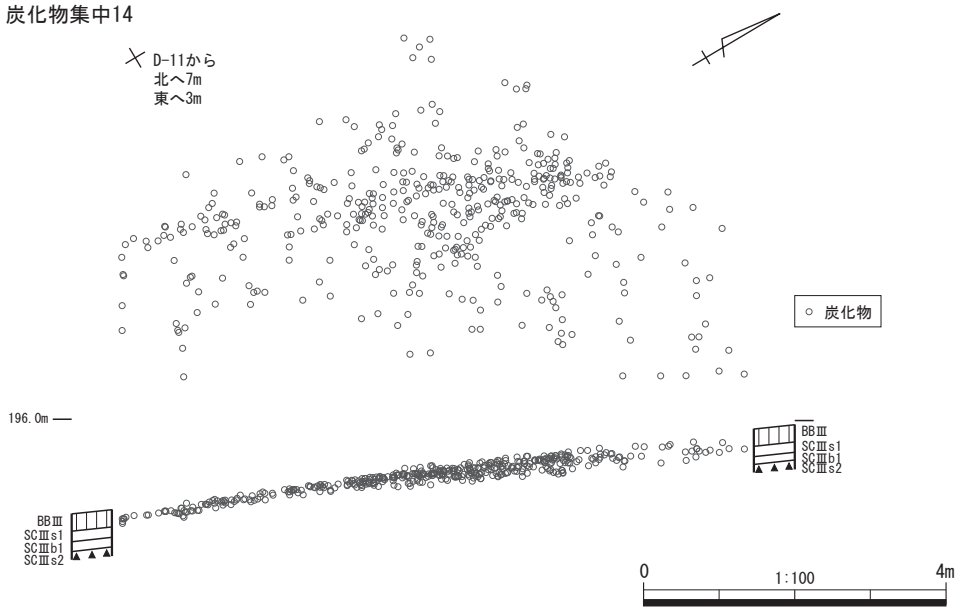
して分布している。出土のピークは第Ⅲ黒色帯の下底である。付近は、北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。炭化物集中11が北西側４ｍに位置している。

炭化物集中13（第20図）

南尾根南部のＥ－11グリッドから検出された。直径3.5mの範囲に、430点を超える炭化物が、密集して分布している。出土のピークは第Ⅲ黒色帯の下部であるが、第Ⅲスコリア帯スコリア１～第Ⅲ黒色帯にかけて、上下に多少の幅を持っている。付近は、北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。炭化物集中14が東側２ｍに位置している。

炭化物集中14（第21図）

南尾根南部のＤ～Ｅ－11グリッドから検出された。長さ８ｍ、幅５ｍの範囲に、390点を超える炭化物が、集中して分布している。出土のピークは第Ⅲ黒色帯の下部であるが、第Ⅲスコリア帯スコリア１～第Ⅲ黒色帯にかけて、上下に多少の幅を持っている。付近は、北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。炭化物集中13が西側２ｍに位置している。



第21図　第Ⅲ文化層　南尾根 炭化物集中 遺構図（３）

２　遺物

石器は６点が出土した。大半が谷部に沿って配置されている土坑群付近から出土しているが、前述したとおり、土坑群との関連は不明である。内訳は、微細な剥離痕を有する剥片が１点、石核１点、剥片類が４点である。石材は黒曜石（天城柏峠群）１点、ホルンフェルス２点、ガラス質黒色安山岩３点である。

微細な剥離痕を有する剥片（第22図５　写真図版２）

５は不定形な幅広剥片である。末端部と左側縁の一部に微細な剥離痕が確認できる。背面には石核の作業面と思しき剥離が複数確認できるため、作業面再生剥片であった可能性も考えられる。打点部は失われている。石材は黒曜石（天城柏峠群）である。

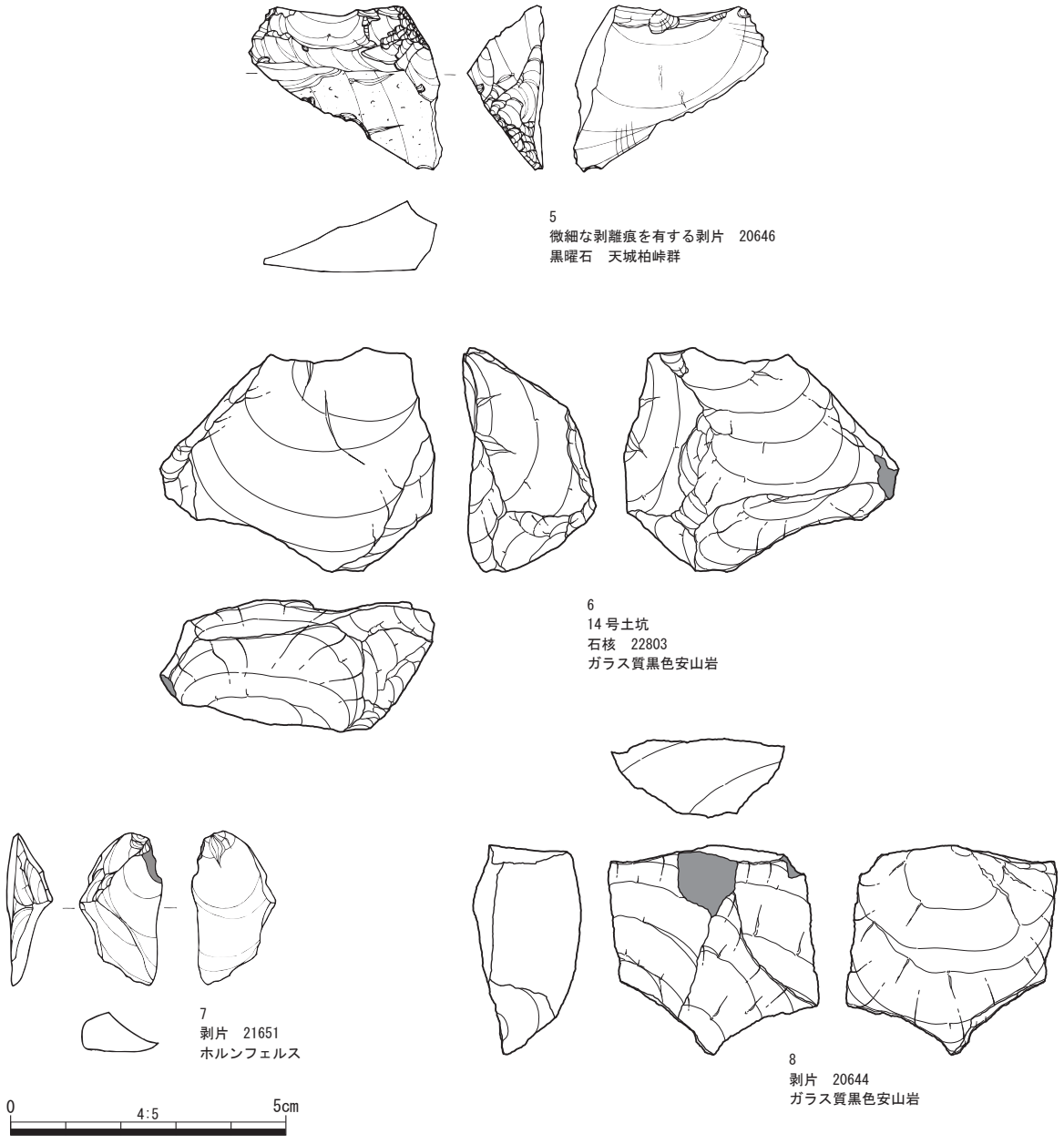
石核（第22図６）

６は板状の剥片を素材とした石核である。やや求心状の剥離を行っている。明確な作業面は正面のみで、残りは折断に近い打点を持たない剥離面である。幅広剥片を剥離していたと考えられる。14号土坑の検出面直上から出土している。石材はガラス質黒色安山岩である。８と同一母岩と考えられる。

剥片類（第22図７・８　写真図版２）

７は縦長剥片である。背面には石核の作業面と思しき剥離が確認できる。打面は極小であり、風化も激しいため判然としない。石材はホルンフェルスである。

８は幅広剥片である。長幅比が１：１に近く、厚みを持っている。打面の作出は１回の剥離で行われている。石材はガラス質黒色安山岩である。６と同一母岩と考えられる。



第22図　第Ⅲ文化層　南尾根・南西谷部 出土石器実測図

第５節　第Ⅳ文化層

第Ⅱスコリア層～第Ⅱ黒色帯で確認された遺構、遺物の一群を、第Ⅳ文化層とした。遺構は、石器ブロックが２ヶ所、炭化物集中が１ヶ所検出された。遺物は、石器が122点、礫が17点出土した。なお、出土が集中している地点が離れているため、尾根毎に報告を行った。

第６表　第Ⅳ文化層 石器組成表

		ナイフ形石器	サイド・スクレイパー	楔形石器	石刃	微細な剥離痕を有する剥片	石核	剥片類	敲石	原石	計
黒曜石	天城柏峠群	1						1			2
	箱根畑宿群									2	2
	諏訪星ヶ台群					1					1
	蓼科冷山群				1						1
	和田鷹山群			1							1
ホルンフェルス					1		3	90			94
ガラス質黒色安山岩							1	11			12
細粒安山岩								5			5
硬質細粒凝灰岩			1			1					2
中粒砂岩									2		2
計		1	1	1	2	2	4	107	2	2	122

１　北尾根

石器ブロックが１ヶ所検出されたのみである。出土した石器は、全てこの遺構からであり、礫は出土しなかった。

（１）遺構

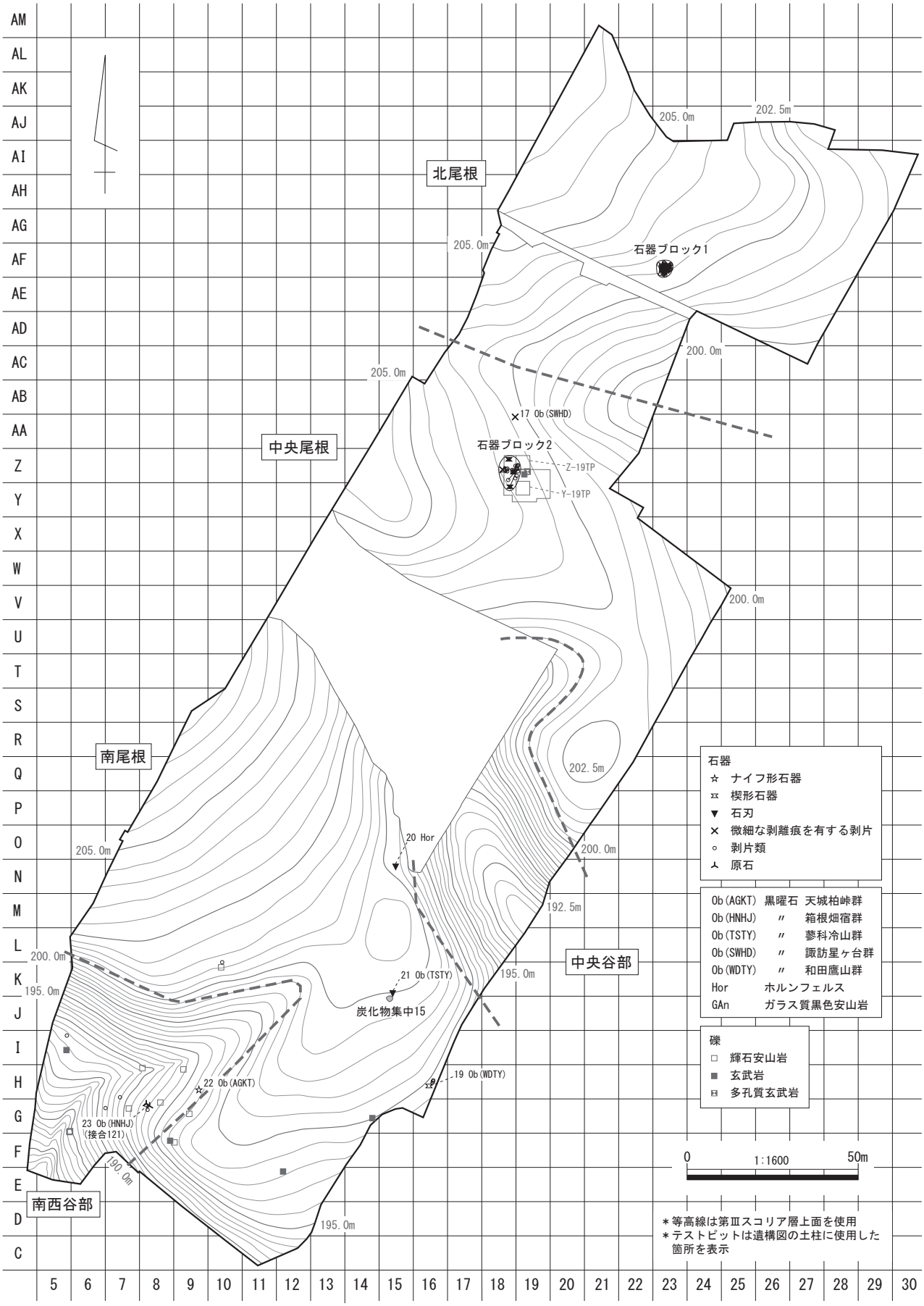
石器ブロック１（第24図）

AF－23グリッドから検出された。南北方向1.5m、東西方向1.4mの範囲に、82点の石器が集中して分布している。出土のピークは、第Ⅱ黒色帯の中部～上部付近であるが、第Ⅲ黒色帯～第Ⅱ黒色帯にかけて上下に多少の幅を持って出土している。敲石が２点出土しているが、その出土層位も第Ⅱ黒色帯の中部～上部付近である。付近は、北西から南東方向へ緩やかに下る傾斜地である。

82点のうち２点の敲石を除いて、すべてホルンフェルスである。これらの中にTool類は確認できず、石核と剥片類のみである。石核、剥片類は接合するものが多く、中でも第25～28図９・10のように、原礫の１／２程度の大きさまで復元可能な資料も確認できる。そのため、原礫もしくはそれに近い状態で持ち込み、剥片剥離を行い、敲石と剥片を置いて立ち去ったと推測され、比較的短期間の滞在であった可能性が高い。

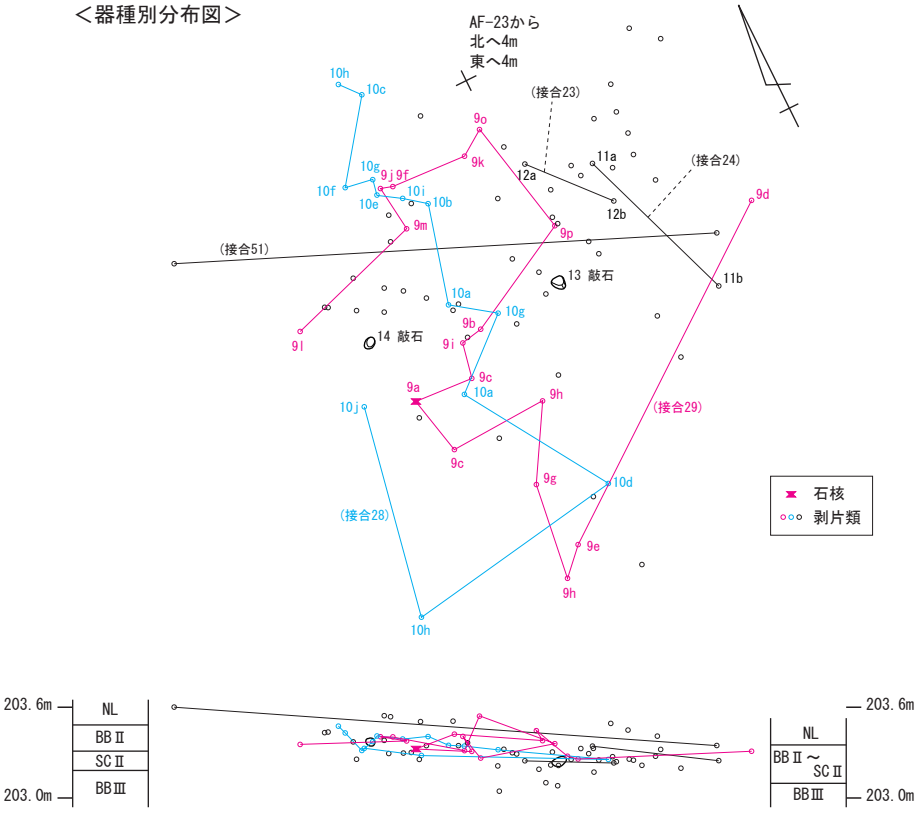
第７表　第Ⅳ文化層 石器ブロック１ 石器組成表

	石核	剥片類	敲石	計
ホルンフェルス	1	79		80
中粒砂岩			2	2
計	1	79	2	82

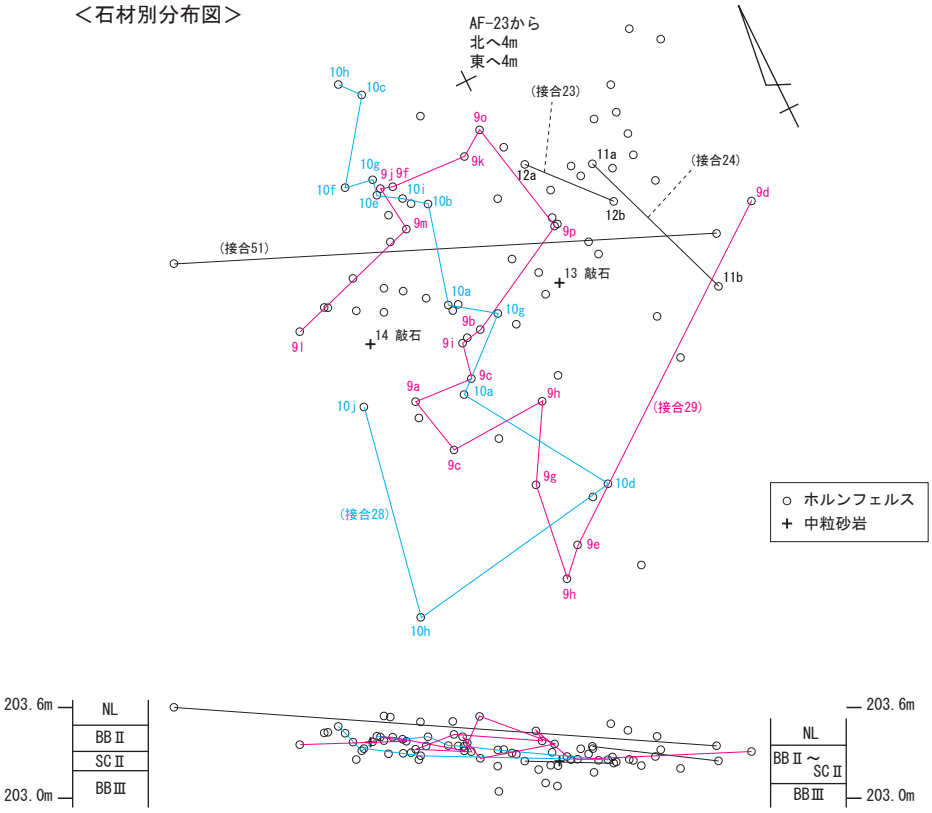


第23図　第Ⅳ文化層　遺構配置図・遺物分布図

石器ブロック１
＜器種別分布図＞



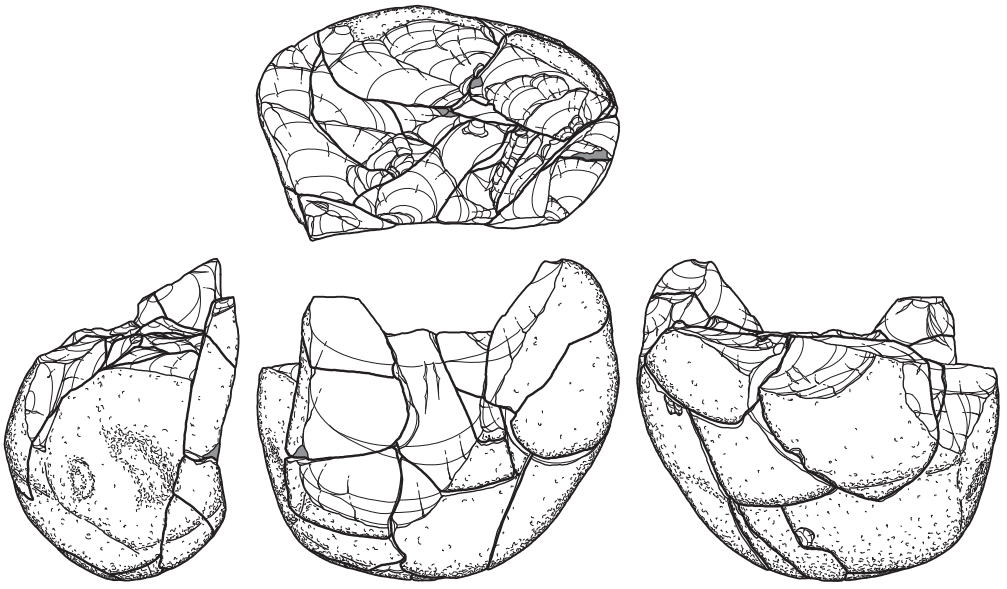
＜石材別分布図＞



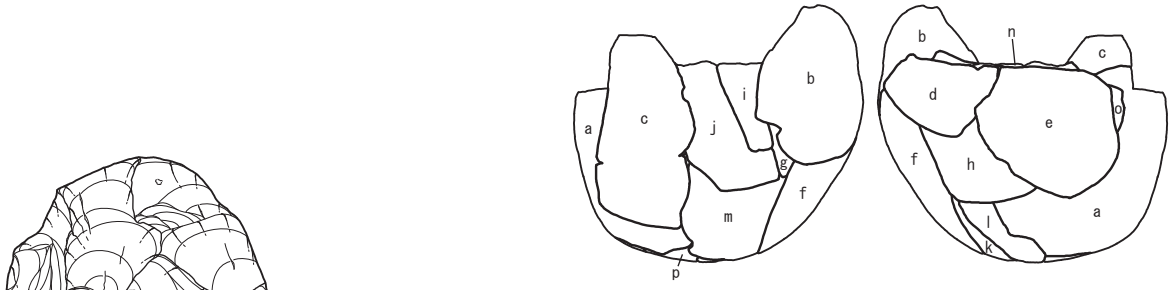
＊土柱はⅤ期のテストピット４北壁の土層図を使用

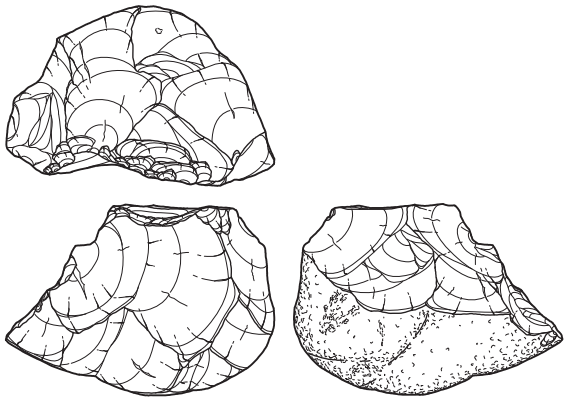
0　1:50　2m

第24図　第Ⅳ文化層　北尾根 石器ブロック１ 遺構図

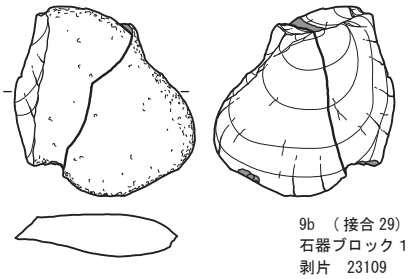


9 （接合 29）
石器ブロック１
接合資料
ホルンフェルス

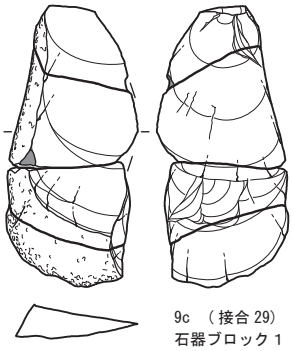




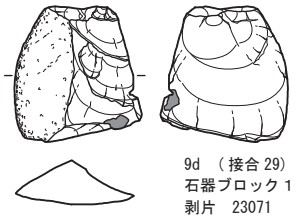
9a （接合 29）
石器ブロック１
石核　23082
ホルンフェルス



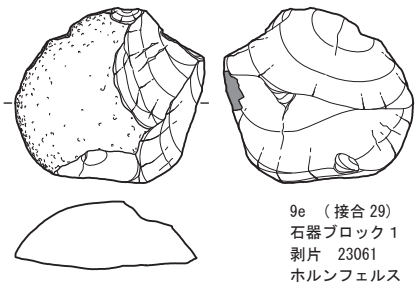
9b （接合 29）
石器ブロック１
剥片　23109
ホルンフェルス



9c （接合 29）
石器ブロック１
剥片　23066+23080
ホルンフェルス

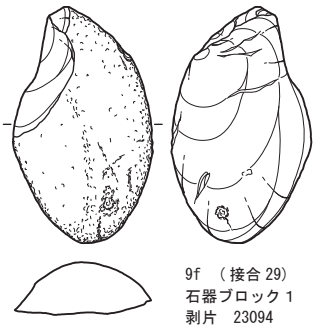


9d （接合 29）
石器ブロック１
剥片　23071
ホルンフェルス

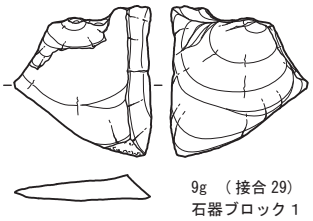


9e （接合 29）
石器ブロック１
剥片　23061
ホルンフェルス

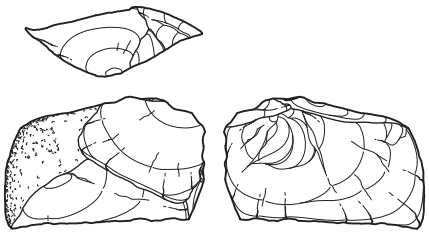
第25図　第Ⅳ文化層　北尾根 出土石器実測図（１）



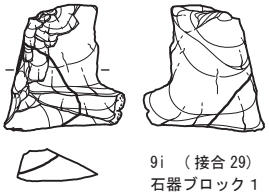
9f （接合 29）
石器ブロック１
剥片　23094
ホルンフェルス



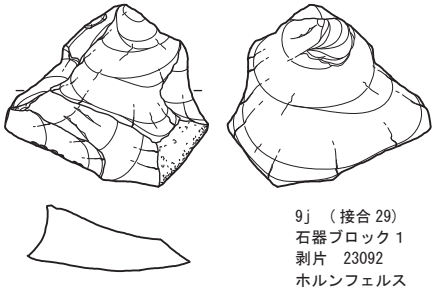
9g （接合 29）
石器ブロック１
剥片　23063
ホルンフェルス



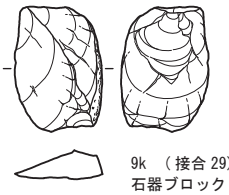
9h （接合 29）
石器ブロック１
剥片　23060
ホルンフェルス



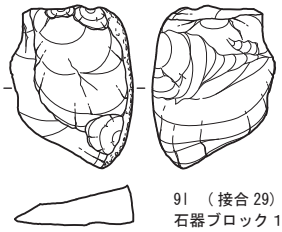
9i （接合 29）
石器ブロック１
剥片　23084
ホルンフェルス



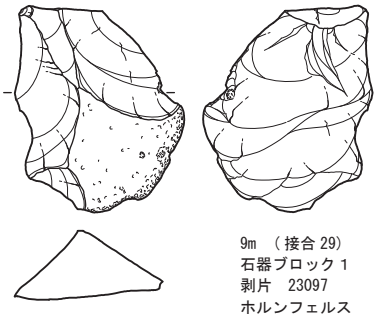
9j （接合 29）
石器ブロック１
剥片　23092
ホルンフェルス



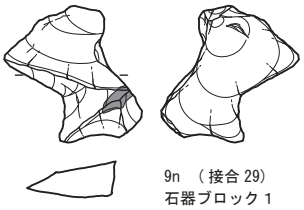
9k （接合 29）
石器ブロック１
剥片　23116
ホルンフェルス



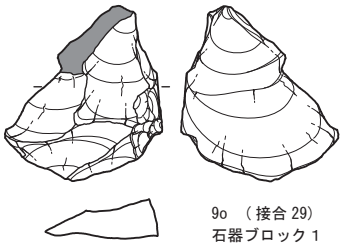
9l （接合 29）
石器ブロック１
剥片　23113
ホルンフェルス



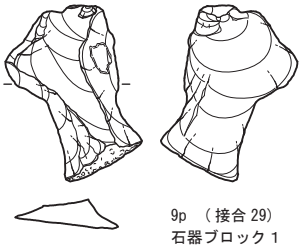
9m （接合 29）
石器ブロック１
剥片　23097
ホルンフェルス



9n （接合 29）
石器ブロック１
剥片　23067
ホルンフェルス

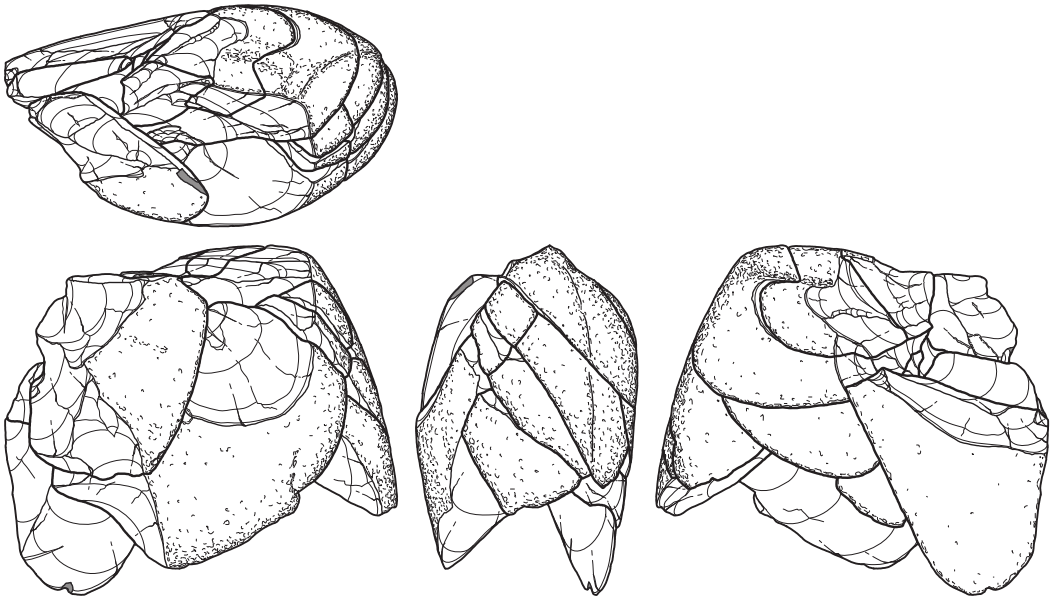


9o （接合 29）
石器ブロック１
剥片　23098
ホルンフェルス

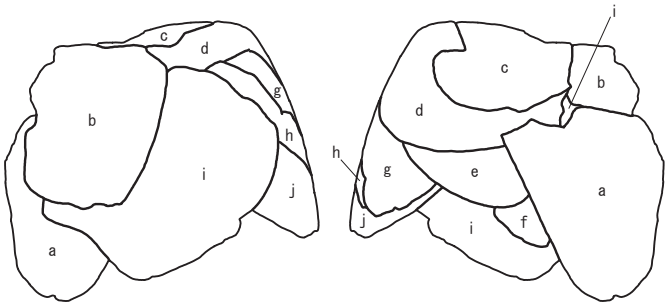


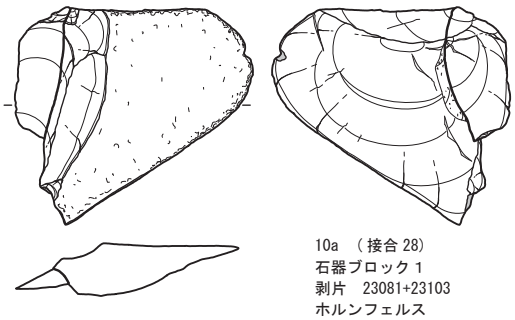
9p （接合 29）
石器ブロック１
剥片　23076
ホルンフェルス

第26図　第Ⅳ文化層　北尾根 出土石器実測図（２）

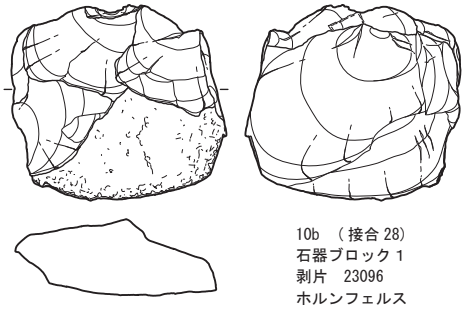


10 （接合 28）
石器ブロック１
接合資料
ホルンフェルス

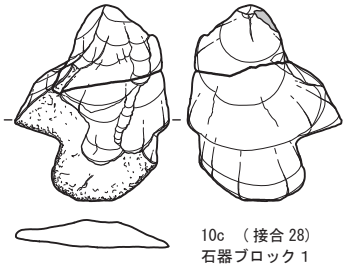




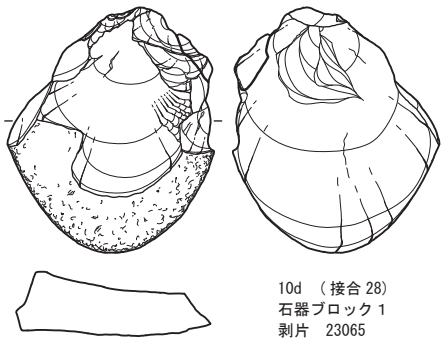
10a （接合 28）
石器ブロック１
剥片　23081+23103
ホルンフェルス



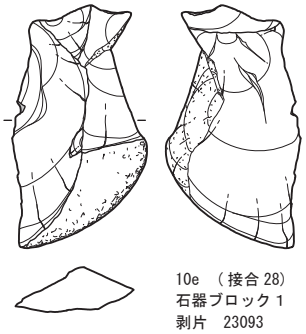
10b （接合 28）
石器ブロック１
剥片　23096
ホルンフェルス



10c （接合 28）
石器ブロック１
剥片　23130
ホルンフェルス



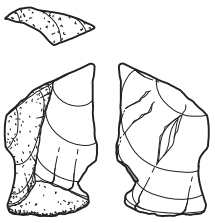
10d （接合 28）
石器ブロック１
剥片　23065
ホルンフェルス



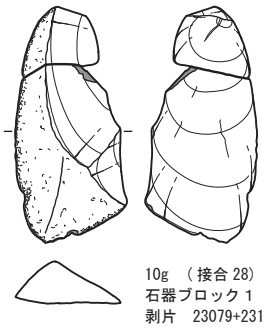
10e （接合 28）
石器ブロック１
剥片　23093
ホルンフェルス

0　1:2　5cm

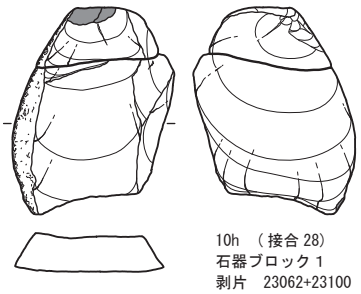
第27図　第Ⅳ文化層　北尾根 出土石器実測図（３）



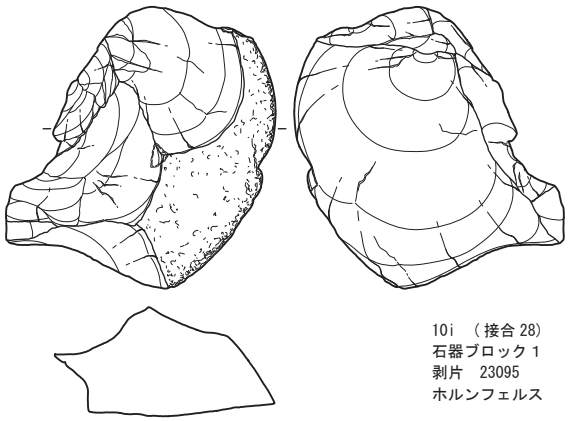
10f　（接合 28）
石器ブロック１
剥片　23091
ホルンフェルス



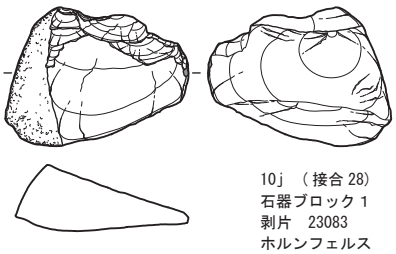
10g　（接合 28）
石器ブロック１
剥片　23079+23115
ホルンフェルス



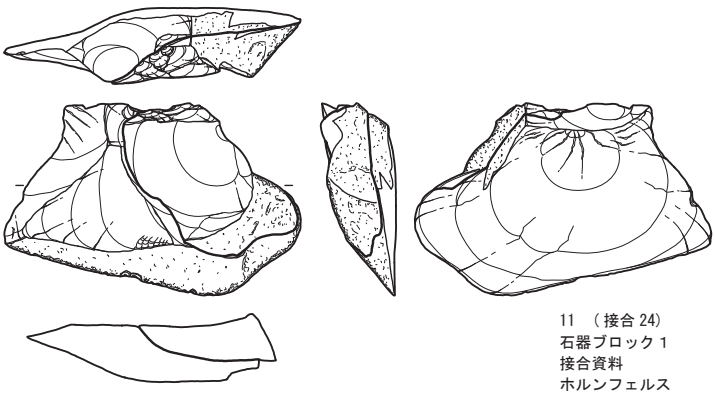
10h　（接合 28）
石器ブロック１
剥片　23062+23100
ホルンフェルス



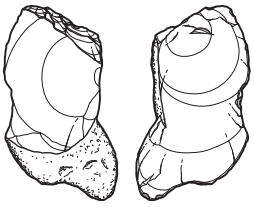
10i　（接合 28）
石器ブロック１
剥片　23095
ホルンフェルス



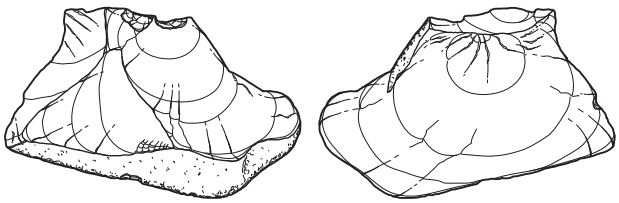
10j　（接合 28）
石器ブロック１
剥片　23083
ホルンフェルス



11　（接合 24）
石器ブロック１
接合資料
ホルンフェルス



11a　（接合 24）
石器ブロック１
剥片　23074
ホルンフェルス



11b　（接合 24）
石器ブロック１
剥片　23069
ホルンフェルス

第28図　第Ⅳ文化層　北尾根 出土石器実測図（４）

（２）遺物

石器は、全て石器ブロック１からの出土である。内訳は、石核が１点、剥片類が79点、敲石が２点である。石材はホルンフェルス80点、中粒砂岩２点である。

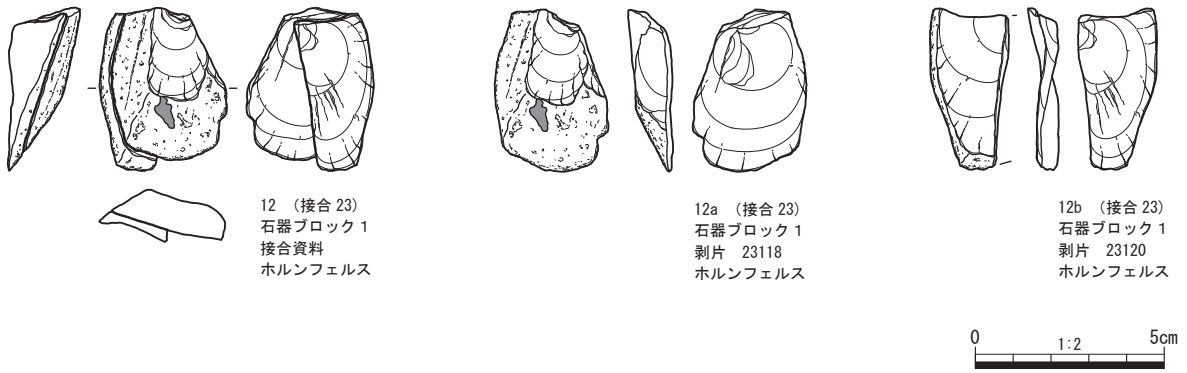
接合資料（第25～29図９～12　写真図版２）

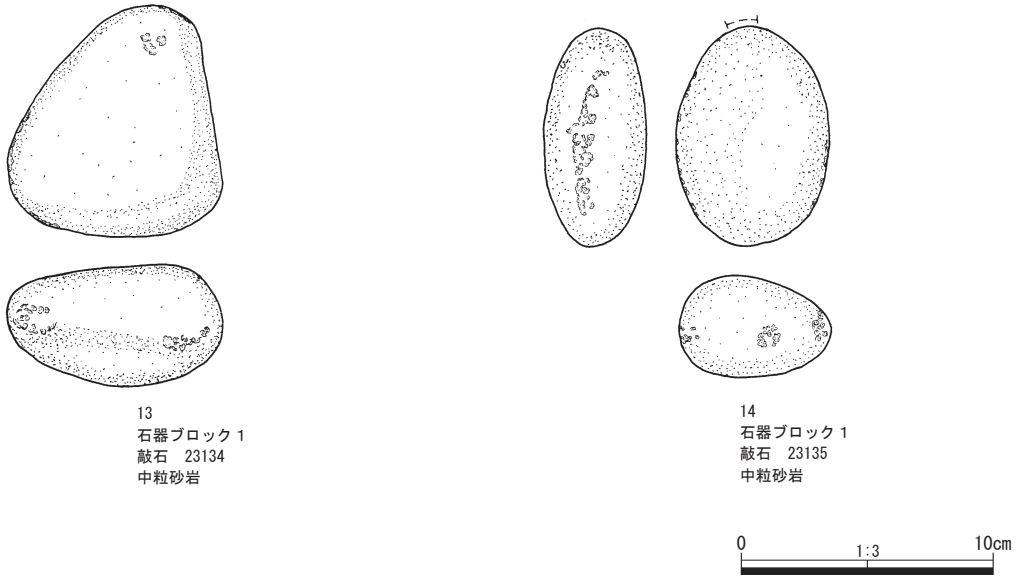
９は石核を含む接合資料である。石材はホルンフェルスである。拳大の円礫を素材として、90°の打面転移を繰り返した交互剥離を行っている。交互剥離を何度か行ったのち、平坦な広い剥離面を打面として、９b，cを剥離している。他にも２、３回の剥離を同一打面で行っているが、遺物は確認できなかった。今度は９bを剥離した際の面を打面に、９dを剥離している。その際の衝撃で、９eも同時に剥離してしまっている。次は９dを剥離した際の面を打面に、９f，gを剥離している。次は９fを剥離した際の面を打面に、９hを剥離している。ここで剥離されたのは、唯一の横長剥片である。次は９hを剥離した際の面を打面に、９i～mを剥離している。打面転移をせずに剥離を行った回数は、これが最多である。次に９l，mを剥離した際の面を打面に、９n，oを剥離している。最後に９oを剥離した際の面を打面に、９pを剥離している。剥離された剥片を見ると、不定形な縦長剥片や幅広剥片が多い。偶発的に９cのような石刃状の剥片が剥離されることもあるが、３～５cm程度の長さを目的としていたようである。交互剥離を繰り返したのは、この長さを確保するためであった可能性も考えられる。また剥離された剥片には、微細な剥離痕や二次加工などは確認できなかった。接合状態を見ると素材礫の約１／２が欠けている。今回図示した剥片以前に剥離された剥片は遺跡内では確認できなかった。遺跡外に持ち去ったか、あるいは本遺跡へ運ばれたときに、すでに素材礫が約１／２の状態となっており、剥片剥離を行った剥片がそのまま残されたと考えられる。

10は剥片の接合資料である。拳大の円礫を素材として、90°の打面転移を繰り返した交互剥離を行っている。石材はホルンフェルスである。交互剥離を何度か行ったのち、平坦な広い剥離面を打面として10aを剥離している。今度は10aを剥離した際の面を打面に、10bを剥離している。次は10bを剥離した際の面を打面に、10c～eを剥離している。10eを剥離した際の衝撃で、10fも同時に剥離してしまっている。次は打面を横にずらして、10g，hを剥離している。次は10hを剥離した際の面を打面に、10iを剥離している。次に10iを剥離した際の面を打面に、10jを剥離している。なお、この際には頭部調整を行っている。剥離された剥片を見ると、不定形な縦長剥片や幅広剥片が多い。９に比べて剥片が少し大きいが、これは素材となった礫の大きさに左右されている可能性も考えられる。また剥離された剥片には、微細な剥離痕や二次加工などは確認できなかった。接合状態を見ると、素材礫の１／２以上が欠けている。今回図示した剥片以前に剥離された剥片、図示した剥片以後に剥離された剥片・石核は、遺跡内では確認できなかった。遺跡外に持ち去ったか、図示した剥片剥離以外には、遺跡内で作業を行わなかったと考えられる。

11は剥片の接合資料である。11aは不定形な縦長剥片、11bは横長剥片であり、11a，bの順に剥離されている。11aを剥離する際には入念な頭部調整が施されているが、11bには確認できない。背面には同方向からの剥離が確認できる。石材はホルンフェルスである。

12は剥片の接合資料である。２点とも幅広な縦長剥片であり、12a，bの順に剥離されている。12bは右半部が折損している。石材はホルンフェルスである。





第29図　第Ⅳ文化層　北尾根 出土石器実測図（５）

敲石（第29図13・14　写真図版２）

13は亜円礫を素材とした敲石である。変則的な三角形に近い形状をしており、その端部を中心に敲打痕が確認できる。石材は中粒砂岩である。

14は円礫を素材とした敲石である。両端と側面部に、敲打痕が確認できる。左側面部の敲打痕は、特に顕著である。石材は中粒砂岩である。

２　中央尾根

遺構は、石器ブロックが１ヶ所検出された。遺物は、石器が25点、礫が３点出土した。

第８表　第Ⅳ文化層 中央尾根 石器組成表

		サイド・スクレイパー	微細な剥離痕を有する剥片	石核	剥片類	計
黒曜石	天城柏峠群				1	1
	諏訪星ヶ台群		1			1
ホルンフェルス				2	3	5
ガラス質黒色安山岩				1	10	11
細粒安山岩					5	5
硬質細粒凝灰岩		1	1			2
計		1	2	3	19	25

（１）遺構

石器ブロック２（第30・31図）

Ｙ－18～Ｚ－19グリッドから検出された。南北方向８ｍ、東西方向4.5ｍの範囲に、石器24点、炭化物２点が分布している。第Ⅱ黒色帯～ニセローム層にかけて、上下に幅を持って出土しているが、出土のピークは第Ⅱ黒色帯の上部付近である。付近は西から東へ緩やかに下る傾斜地である。

石器群の内訳は、サイド・スクレイパーが１点、微細な剥離痕を有する剥片が１点、石核が３点、剥片類が19点である。石材は、黒曜石（天城柏峠群）１点、ホルンフェルス５点、ガラス質黒色安山岩11点、細粒安山岩５点、硬質細粒凝灰岩２点である。これらの内、ホルンフェルスは石核と剥片類との接合が確認された。ガラス質黒色安山岩と細粒安山岩は、石核との接合は確認できなかったが、同一母岩と考えられる資料が出土しており、剥片剥離を行っていた可能性が推測される。一方、同一母岩と考えられるものの、硬質細粒凝灰岩はサイド・スクレイパーと微細な剥離痕を有する剥片であり、製品状態で持ち込まれたと考えられる。

また、出土した炭化物のうち炭化材１点について、放射性炭素年代測定（AMS法）を行った結果、26,120±80yrBP（PLD－17425）の^{14}C年代値が確認された（詳細は第２分冊附編を参照）。

（２）遺物

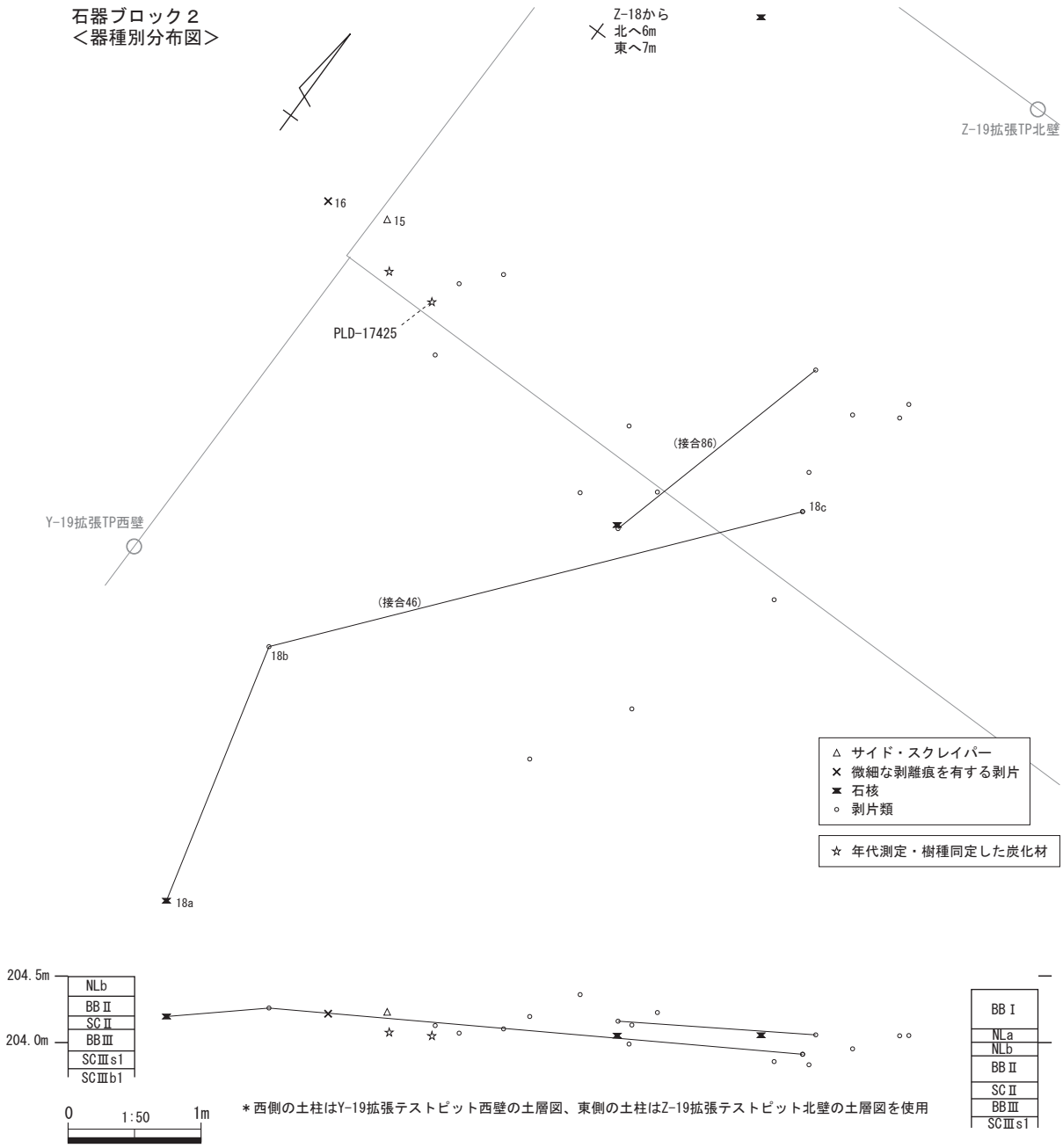
１点を除き、すべて石器ブロック２からの出土である。遺構外からは、微細な剥離痕を有する剥片１点が出土している。石材は黒曜石（諏訪星ヶ台群）である。

サイド・スクレイパー（第32図15　写真図版３）

両極打法で剥離した縦長剥片を素材としている。左側縁に連続した加工を施して、刃部としている。刃部の加工は、ややノッチ状にも捉えられる。背面、腹面の両方に、両極剥離の痕跡が残っていることから、楔形石器に分類される可能性も考えられる。石材は硬質細粒凝灰岩であり、16と同一母岩であると考えられる。

微細な剥離痕を有する剥片（第32図16・17　写真図版３）

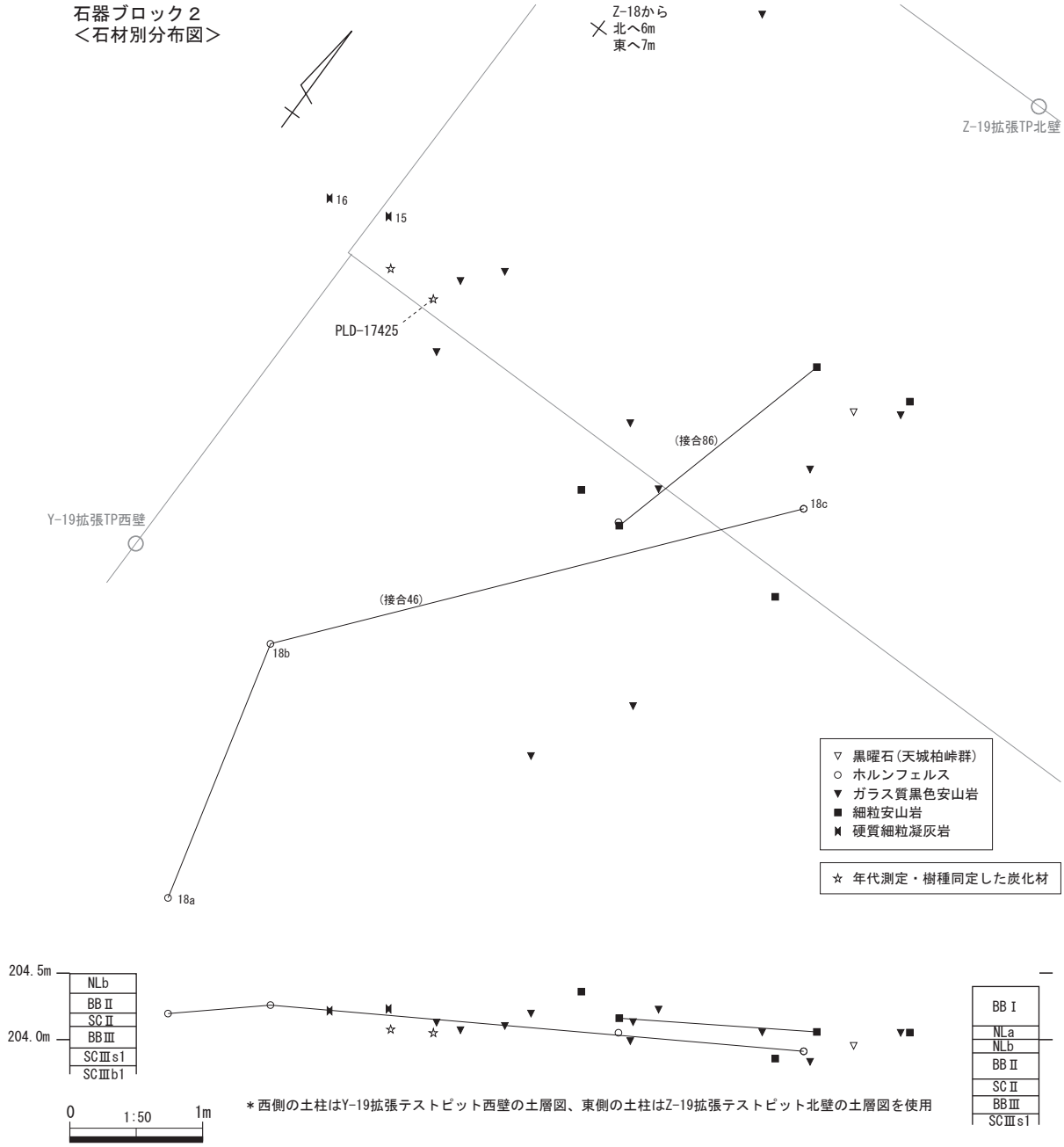
16は剥片の腹面右側縁に、数枚の微細な剥離痕が確認できる。器体は下半部が折損しており、全体形



第30図　第Ⅳ文化層　中央尾根 石器ブロック２ 遺構図（１）

第９表　第Ⅳ文化層 石器ブロック２ 石器組成表

		サイド・スクレイパー	微細な剥離痕を有する剥片	石核	剥片類	計
黒曜石	天城柏峠群				1	1
ホルンフェルス				2	3	5
ガラス質黒色安山岩				1	10	11
細粒安山岩					5	5
硬質細粒凝灰岩		1	1			2
計		1	1	3	19	24



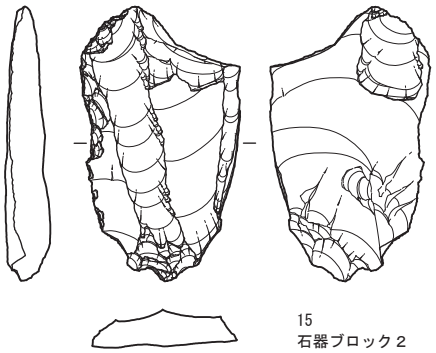
第31図　第Ⅳ文化層　中央尾根 石器ブロック２ 遺構図（２）

状は不明である。石材は硬質細粒凝灰岩であり、15と同一母岩であると考えられる。

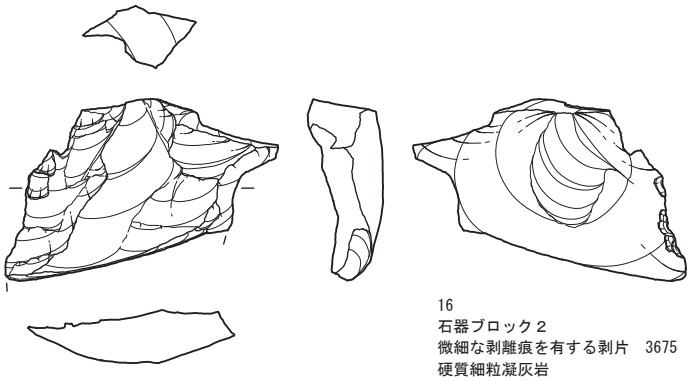
17は幅広な縦長剥片の左側縁を中心に、微細な剥離痕が確認できる。剥離痕は背面側よりも、腹面側に顕著に確認できる。石材は黒曜石（諏訪星ヶ台群）である。遺構外からの出土である。

接合資料（第33図18　写真図版３）

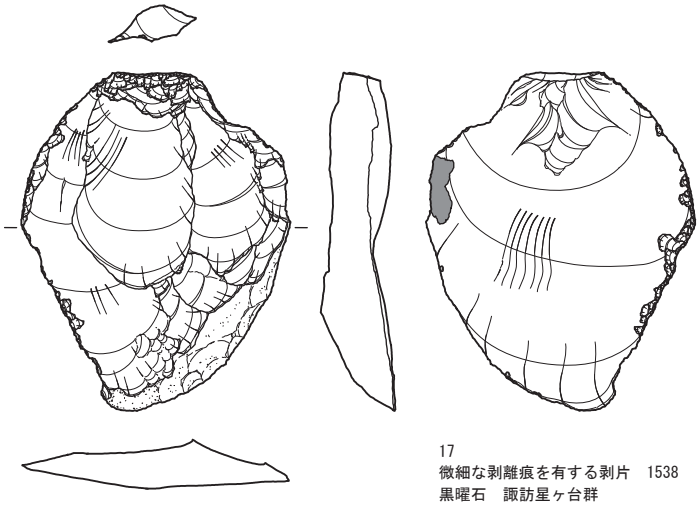
18は石核を有するホルンフェルスの接合資料である。18aは石核である。90°の打面転移を繰り返して剥片剥離を行っている。打面の調整は入念に行わず、作業面をそのまま打面としている。18bのような大型の縦長剥片を剥離することもあるが、大半は長さ２～３cmの小型の幅広な剥片を剥離している。



15
石器ブロック２
サイド・スクレイパー　3497
硬質細粒凝灰岩



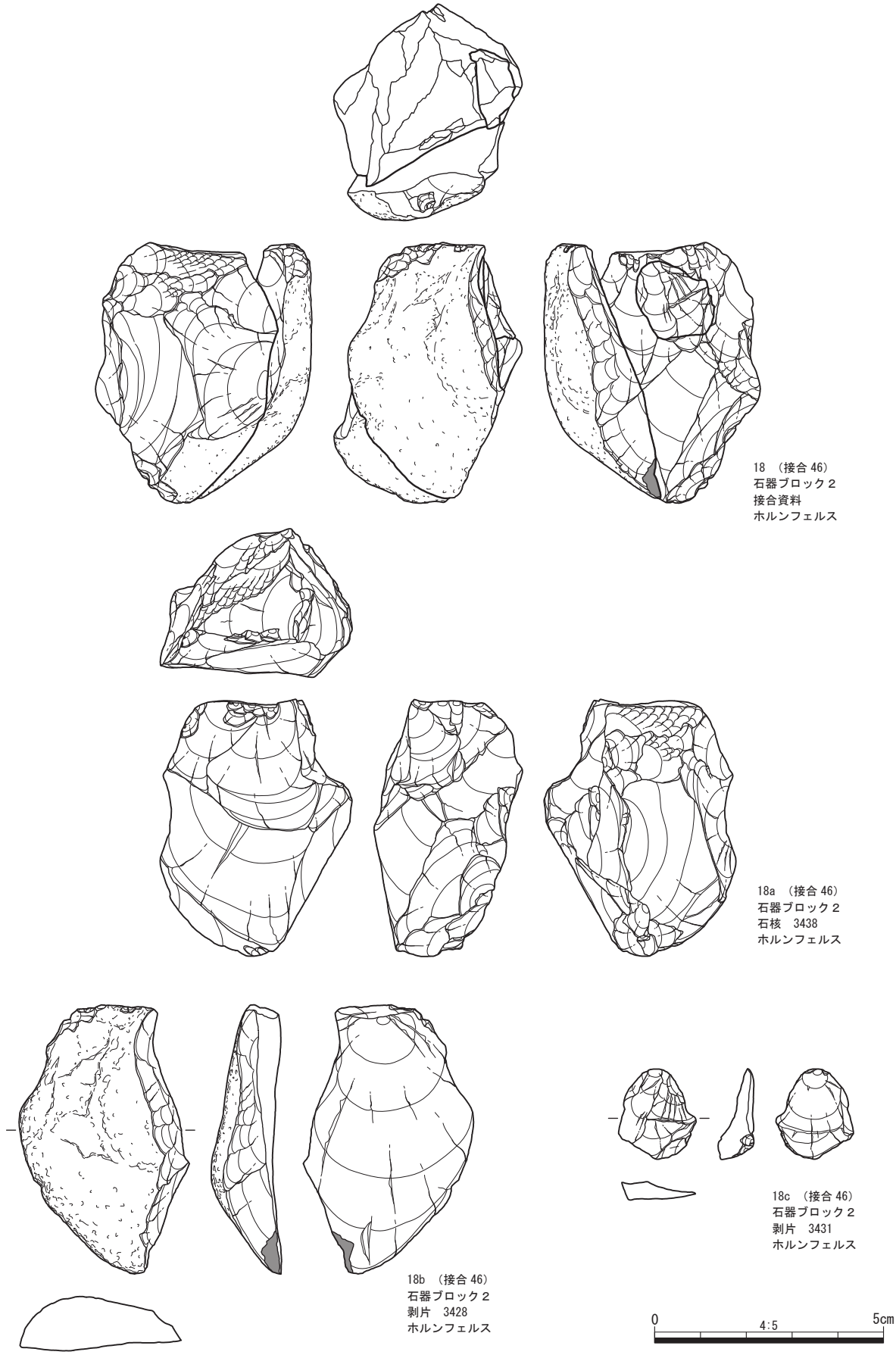
16
石器ブロック２
微細な剥離痕を有する剥片　3675
硬質細粒凝灰岩



17
微細な剥離痕を有する剥片　1538
黒曜石　諏訪星ヶ台群

0　4:5　5cm

第32図　第Ⅳ文化層　中央尾根 出土石器実測図（１）



第33図　第Ⅳ文化層　中央尾根 出土石器実測図（２）

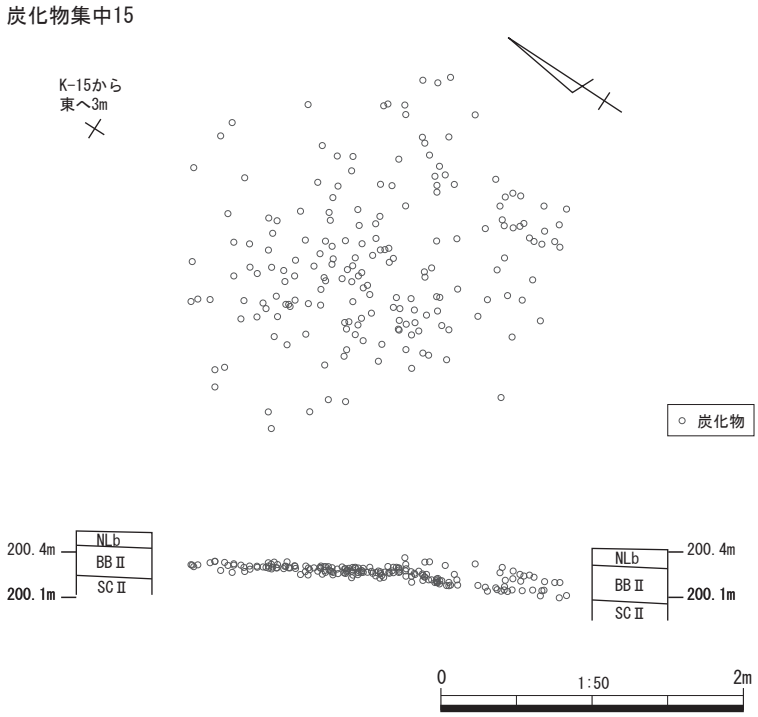
３　南尾根

遺構は、炭化物集中が１ヶ所検出された。遺物は、石器が７点、礫が６点出土した。

（１）遺構

炭化物集中15（第34図）

南尾根のJ－15グリッドから検出された。直径2.7mの範囲に、180点を超える炭化物が集中して分布している。上下に幅を持って分布しているが、出土のピークは第Ⅱ黒色帯の中部付近である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。付近は、北から南に緩やかに下る傾斜地である。



第34図　第Ⅳ文化層　南尾根 炭化物集中15 遺構図

（２）遺物

石器群の内訳は、楔形石器が１点、石刃が２点、剥片類が４点である。石材は、黒曜石２点（蓼科冷山群１点、和田鷹山群１点）、ホルンフェルス５点である。

楔形石器（第35図19　写真図版３）

器体の上下両端に、細かい剥離痕と潰れが明確に確認できる。また裏面の大半は、使用時の衝撃で無くなってしまっており、大きな剥離が確認できる。さらに、正面左下と裏面右側縁にも、細かい剥離痕と潰れが確認でき、方向を変えて使用されたことが窺える。石材は黒曜石（和田鷹山群）、出土層位は第Ⅱスコリア層である。

第10表　第Ⅳ文化層 南尾根 石器組成表

		楔形石器	石刃	剥片類	計
黒曜石	蓼科冷山群		1		1
	和田鷹山群	1			1
ホルンフェルス			1	4	5
計		1	2	4	7

石刃（第35図20・21　写真図版３）

20は第Ⅱスコリア層から出土した。背面には、同一方向の剥離を繰り返しているのが見て取れる。打面に細かな調整は施されていない。石材はホルンフェルスである。

21は第Ⅱ黒色帯から出土した。背面には、同一方向の剥離を繰り返しているのが見て取れる。転礫面を打面としている。石材は黒曜石（蓼科冷山群）である。

第35図　第Ⅳ文化層　南尾根 出土石器実測図

４　南西谷部

遺構は検出されなかった。遺物は石器が８点、礫が６点出土した。

（１）遺物

石器群の内訳は、ナイフ形石器が１点、剥片類が５点、原石が２点である。石材は、黒曜石３点（天城柏峠群１点、箱根畑宿群２点）、ホルンフェルス４点、ガラス質黒色安山岩１点である。

ナイフ形石器（第36図22　写真図版３）

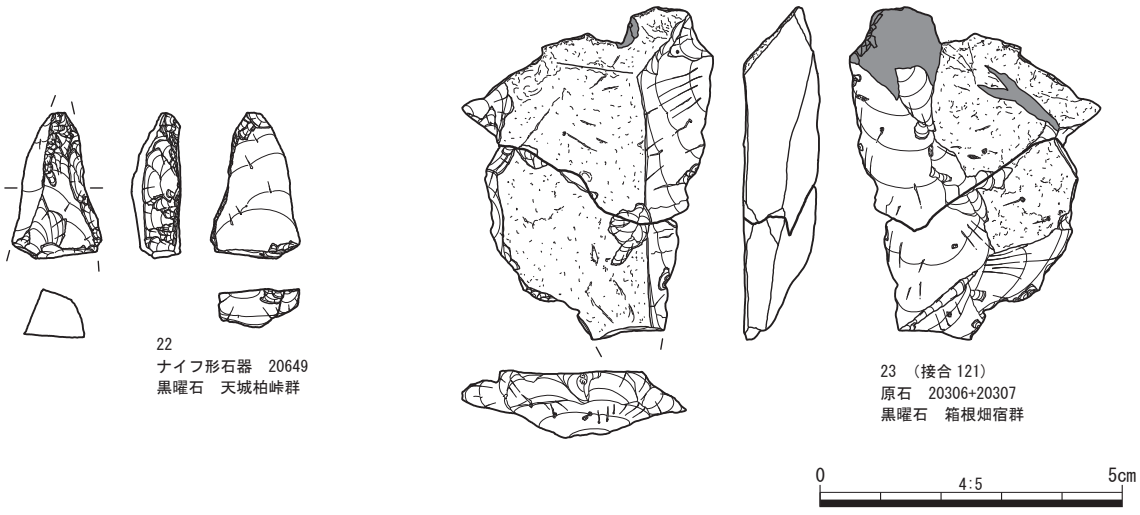
厚みを持った縦長剥片を素材としており、末端側を先端としている。右側縁にブランティングを施し、左側縁を刃部としている。しかし前述の通り、素材剥片が厚みを持っているため、刃部も箇所によっては90°近い急斜度になっている。先端と下部を折損しており、全体形状は不明である。石材は黒曜石（天城柏峠群）、出土層位は第Ⅱ黒色帯である。

第11表　第Ⅳ文化層 南西谷部 石器組成表

		ナイフ形石器	剥片類	原石	計
黒曜石	天城柏峠群	1			1
	箱根畑宿群			2	2
ホルンフェルス			4		4
ガラス質黒色安山岩			1		1
計		1	5	2	8

接合資料（第36図23　写真図版３）

剥離面は存在するが、打面を作出するなどの意図的な剥離は確認できなかったため、原石と判断した。遺跡内に持ち込まれた後、未加工のまま放置されたと考えられる。石材は黒曜石（箱根畑宿群）、出土層位は第Ⅱ黒色帯である。



第36図　第Ⅳ文化層　南西谷部 出土石器実測図

第６節　第Ⅴ文化層

ニセローム層で確認された遺構、遺物の一群を第Ⅴ文化層とした。遺構は、炭化物集中が２ヶ所検出された。遺物は、石器が14点、礫が８点出土した。遺物の大半は単品で出土し、石器群としては貧弱である。なお、遺構、遺物が確認されている地点が離れているため、尾根毎に報告を行った。

第12表　第Ⅴ文化層 石器組成表

		ナイフ形石器	石刃	石核	剥片類	計
黒曜石	天城柏峠群				1	1
	箱根畑宿群		4			4
	蓼科冷山群	1				1
	分析不可等				1	1
ホルンフェルス		1			2	3
ガラス質黒色安山岩			1	1	2	4
計		2	5	1	6	14

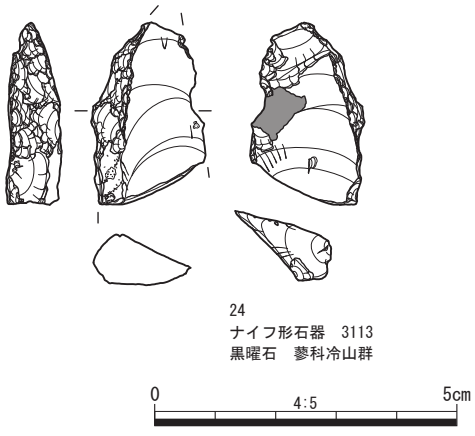
１　北尾根

遺構は検出されず、石器が１点出土したのみである。

（１）遺物

ナイフ形石器（第37図24　写真図版３）

厚みを持った縦長剥片を素材としており、末端側を先端としている。左側縁にブランティングを施しており、ブランティングは対向剥離を行っている。刃部には使用時の衝撃痕と推測される剥離が確認できる。先端と下半部を折損しており、全体形状は不明である。石材は黒曜石（蓼科冷山群）である。



第37図　第Ⅴ文化層　北尾根 出土石器実測図

２　中央尾根

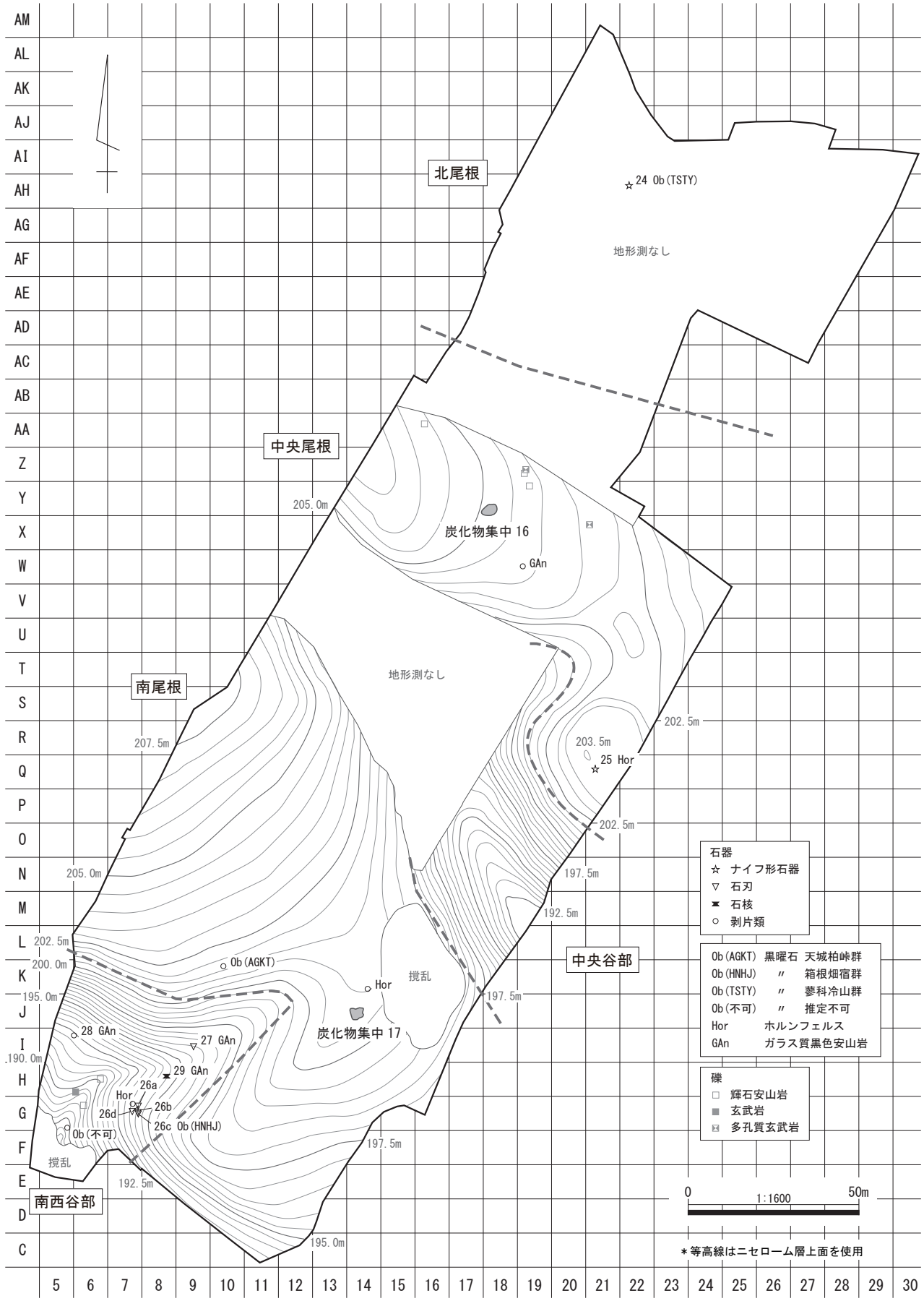
遺構は炭化物集中が１ヶ所検出された。遺物は石器が２点、礫が５点出土した。

（１）遺構

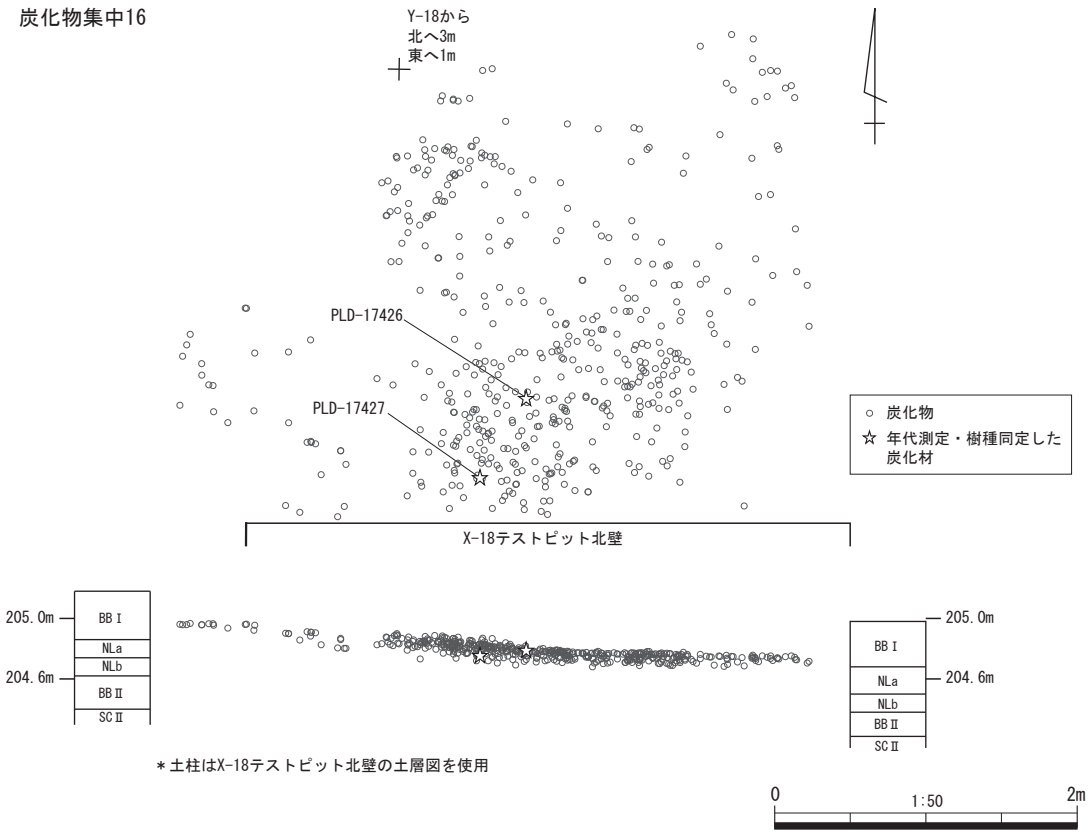
炭化物集中16（第39図）

Ｙ－17～18グリッドから検出された。長さ4.6m、幅3.4mの範囲に、470点を超える炭化物が、集中して分布している。上下に多少の幅を持って分布しているが、出土のピークはニセローム層の上面である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。付近は、西から東に緩やかに下る傾斜地である。

また、出土した炭化物のうち２点の炭化材について、放射性炭素年代測定（AMS法）を行った結果、24,920±80yrBP（PLD－17426）、25,000±80yrBP（PLD－17427）の^{14}C年代値が確認された（詳細は第２分冊附編を参照）。



第38図　第Ⅴ文化層　遺構配置図・遺物分布図



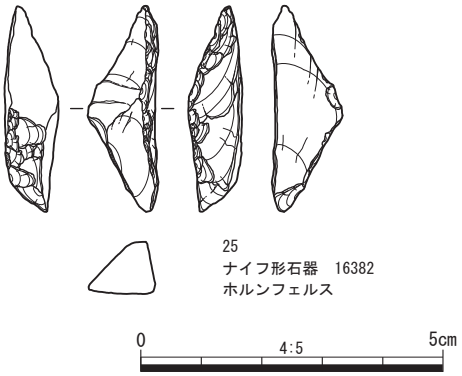
第39図　第Ⅴ文化層　中央尾根 炭化物集中16 遺構図

（２）遺物

石器は、ナイフ形石器が１点、剥片類が１点出土した。石材は、ホルンフェルス１点、ガラス質黒色安山岩１点である。

第13表　第Ⅴ文化層 中央尾根 石器組成表

	ナイフ形石器	剥片類	計
ホルンフェルス	1		1
ガラス質黒色安山岩		1	1
計	1	1	2



第40図　第Ⅴ文化層　中央尾根 出土石器実測図

ナイフ形石器（第40図25　写真図版３）

厚みを持った縦長剥片を素材としており、末端側を先端としている。右側縁と左側縁の基部にブランティングを施して、やや切出状に近い刃部を作り出している。左側縁のブランティングは、素材剥片の腹面側から、右側縁のそれは背面側から施しており、錯交剥離となっている。３cm前後の比較的小型の資料である。石材はホルンフェルスである。

3　南尾根

遺構は炭化物集中が１ヶ所検出された。遺物は石器が２点出土した。

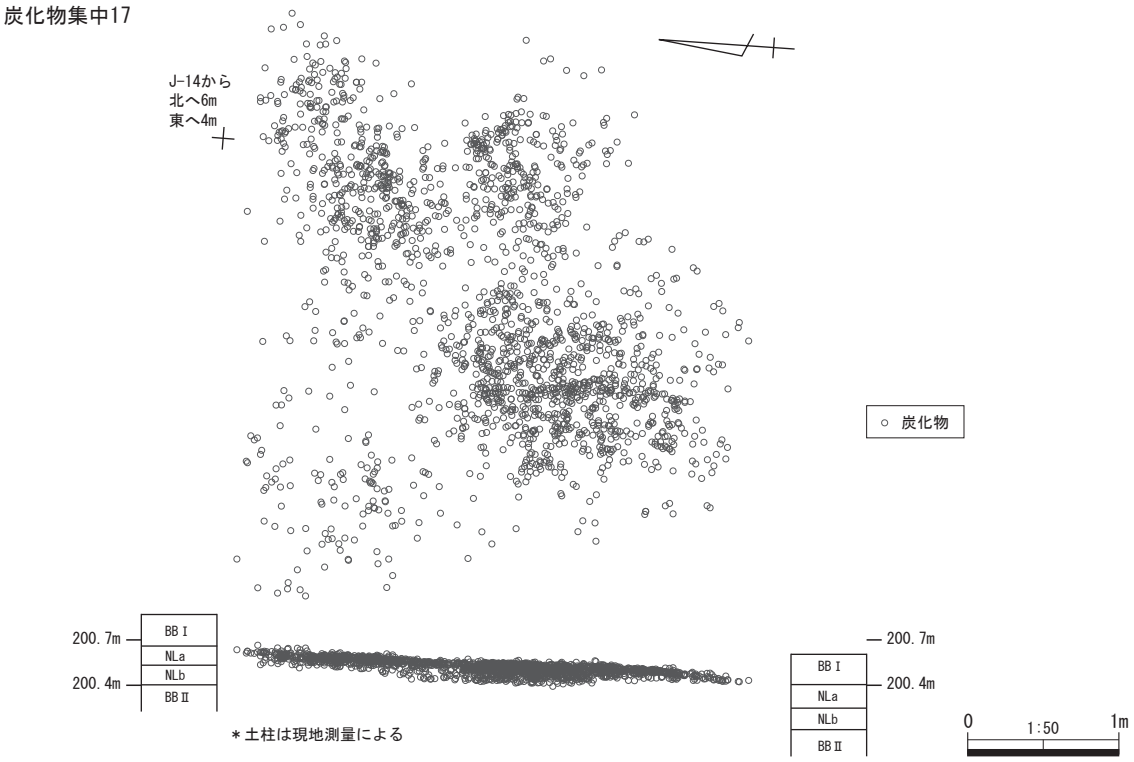
第14表　第Ⅴ文化層
南尾根　石器組成表

		剥片類	計
黒曜石	天城柏峠群	1	1
ホルンフェルス		1	1
計		2	2

（１）遺構

炭化物集中17（第41図）

Ｊ－14グリッドから検出された。長さ4.4m、幅3.9mの範囲に、1,900点を超える炭化物が、密集して分布している。出土のピークは、ニセローム層の上面である。分布範囲の土壌に、赤化などの変化は確認できなかった。付近は、北から南に緩やかに下る傾斜地である。



第41図　第Ⅴ文化層　南尾根 炭化物集中17 遺構図

（２）遺物

石器は、剥片類が２点である。石材は、黒曜石１点（天城柏峠群）、ホルンフェルス１点である。

4　南西谷部

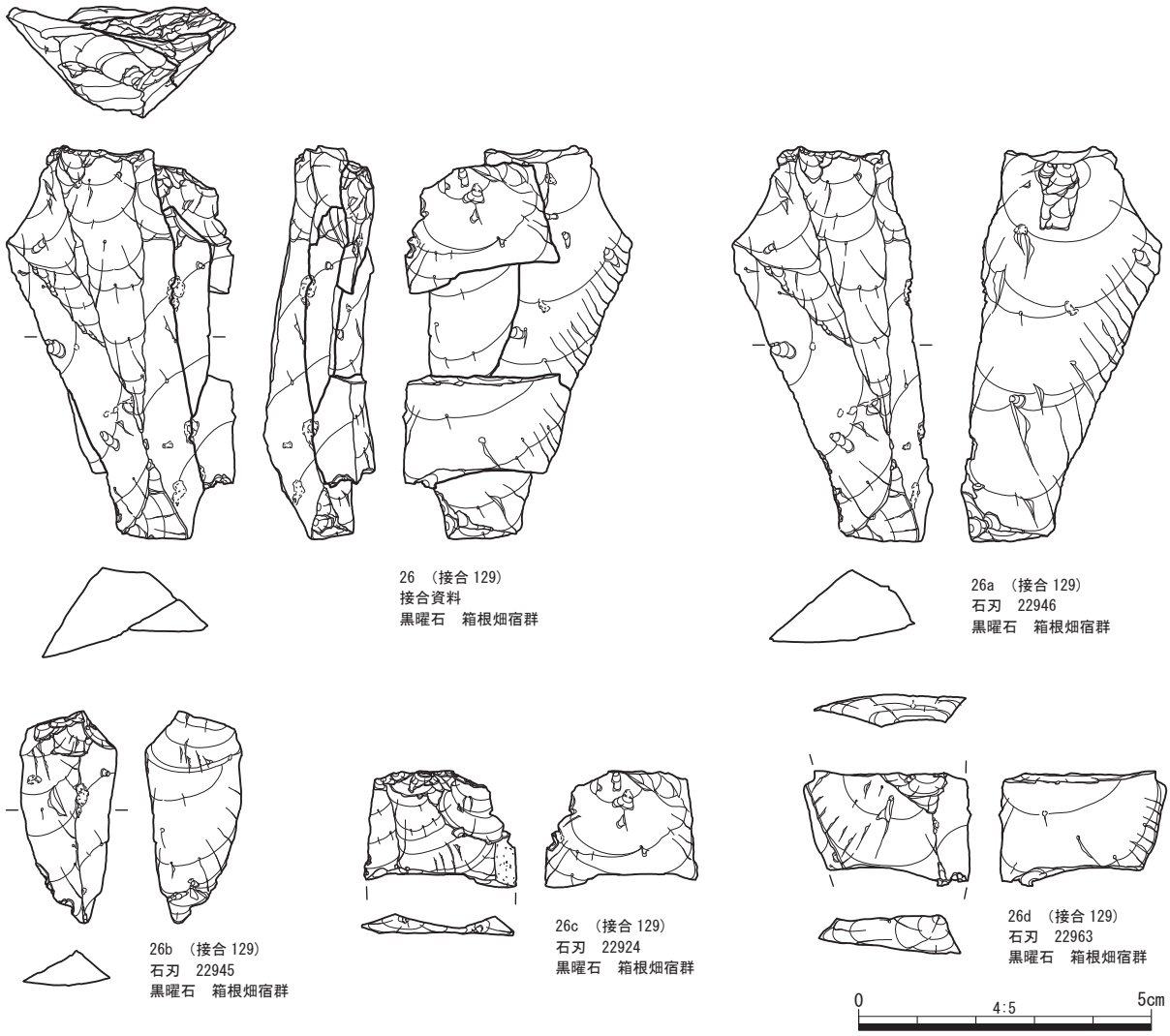
遺構は検出されなかった。遺物は、石器が９点、礫が３点出土した。

第15表　第Ⅴ文化層 南西谷部 石器組成表

		石刃	石核	剥片類	計
黒曜石	箱根畑宿群	4			4
	分析不可等			1	1
ホルンフェルス				1	1
ガラス質黒色安山岩		1	1	1	3
計		5	1	3	9

（１）遺物

石器群の内訳は、石刃が５点、石核が１点、剥片類が３点である。石材は、黒曜石５点（箱根畑宿群４点、推定不可１点）、ホルンフェルス１点、ガラス質黒色安山岩３点である。



第42図　第Ⅴ文化層　南西谷部 出土石器実測図（１）

接合資料（第42図26　写真図版３）

26は石刃の接合資料である。３枚の石刃が接合しており、同一方向からの剥離を繰り返していたことが窺える。26bは偶発的に小型の石刃が剥がれてしまっているが、比較的大型の資料を剥離している。打面は一回の大きな剥離で作出したのち、細かな頭部調整を行っている。26c，dは同一の石刃であるが、中央部が折損しており存在しない。石材は黒曜石（箱根畑宿群）である

石刃（第43図27　写真図版３）

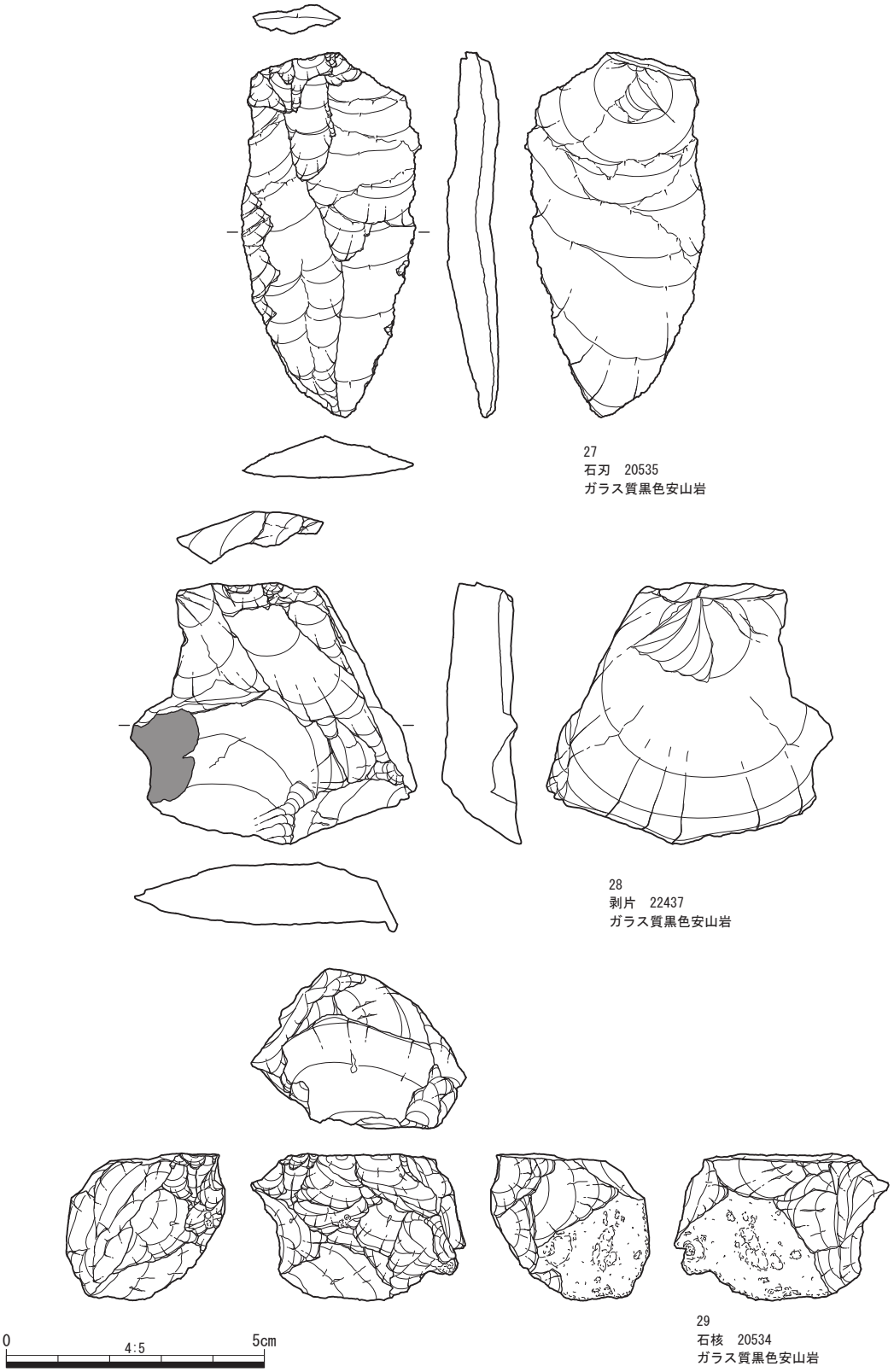
27は大型の石刃である。背面には、同一方向の剥離を繰り返しているのが見て取れる。打面は大きく一回で作出している。石材はガラス質黒色安山岩である。

剥片（第43図28　写真図版３）

28は大型の幅広剥片である。打面は、同一方向からの数回の剥離で作出している。石材はガラス質黒色安山岩である。

石核（第43図29　写真図版３）

29は、90°の打面転移を繰り返して剥片剥離を行っており、サイコロ状に近い石核となっている。打面の調整は、入念には行われていない。大半は長さ１cm程度の小型の幅広な剥片を剥離している。



第43図　第Ⅴ文化層　南西谷部 出土石器実測図（２）

第７節　第VI文化層

第Ｉ黒色帯を出土のピークとして、第Ｉ黒色帯～第Ｉスコリア層で確認された遺構、遺物の一群を第VI文化層とした。出土は中央尾根からのみである。遺構は、石器ブロックが６ヶ所、礫群が２基、配石が１基、炭化物集中が２ヶ所、土坑が１基検出された。遺物は、石器が323点、礫が49点出土した。

第16表　第VI文化層 石器組成表

		ナイフ形石器	ラウンド・スクレイパー	エンド・スクレイパー	サイド・スクレイパー	楔形石器	石刃	微細な剥離痕を有する剥片	石核	剥片類	計
黒曜石	天城柏峠群		2	7	1	7		8		101	126
	箱根畑宿群				1						1
	諏訪星ヶ台群	1									1
	和田土屋橋北群								1		1
	分析不可等							1		96	97
ホルンフェルス		1					2	4	3	84	94
ガラス質黒色安山岩										1	1
水晶										1	1
輝石安山岩										1	1
計		2	2	7	2	7	2	13	4	284	323

１　中央尾根

（１）遺構

遺構の中には検出面に差があるものが認められたが、接合関係や遺物の内容を考慮し、同一の文化層であると判断した。

ア　石器ブロック

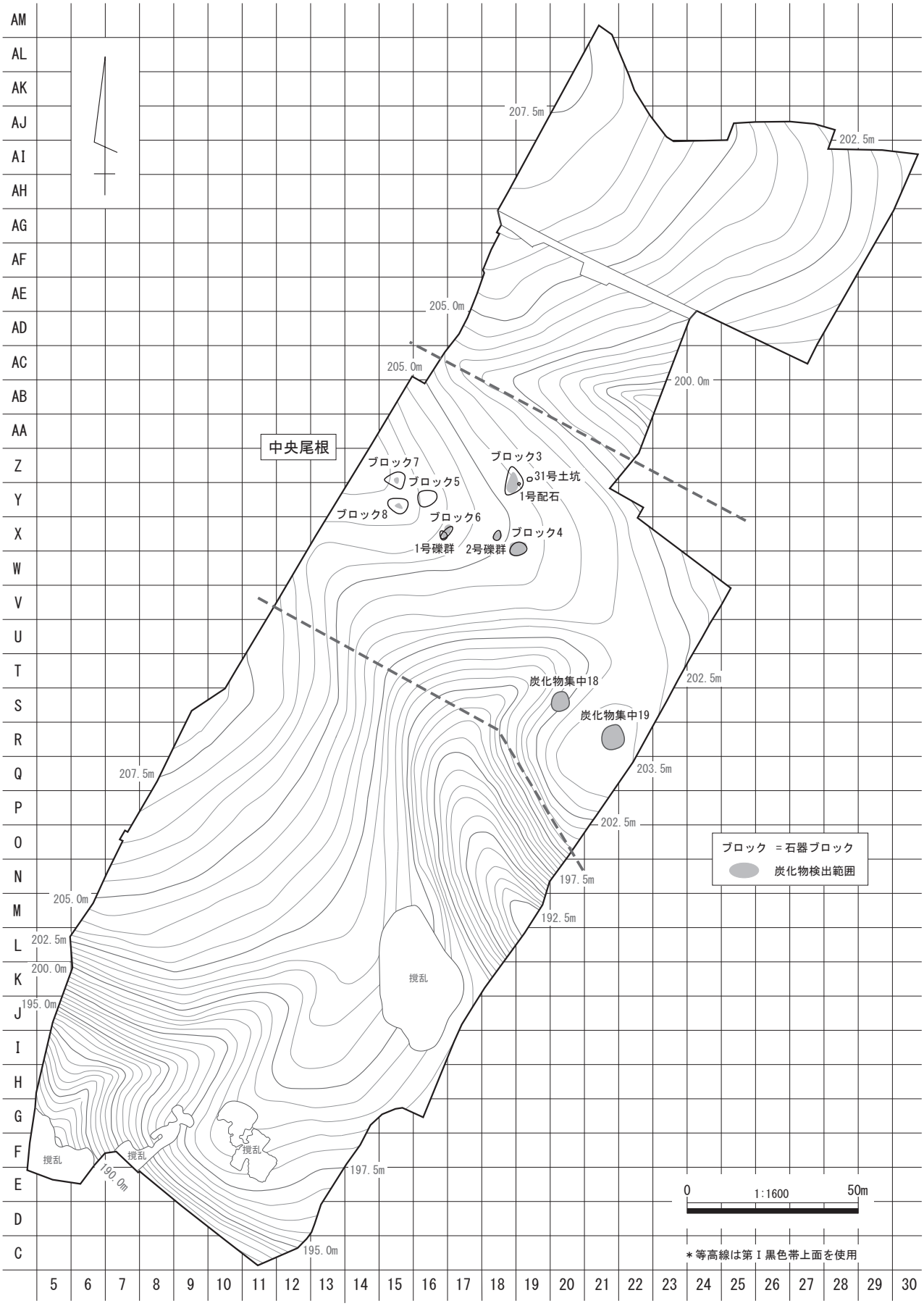
石器ブロック３（第46・47図）

Ｙ－18～Ｚ－19グリッドから検出された。南北方向７ｍ、東西方向3.4ｍの範囲に、17点の石器が散漫に分布している。第Ｉ黒色帯～第Ｉスコリア層にかけて、上下に幅を持って分布しているが、出土のピークは第Ｉ黒色帯の下部である。付近は、西から東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。石器ブロックと重複して、１号配石および炭化物集中が検出された。

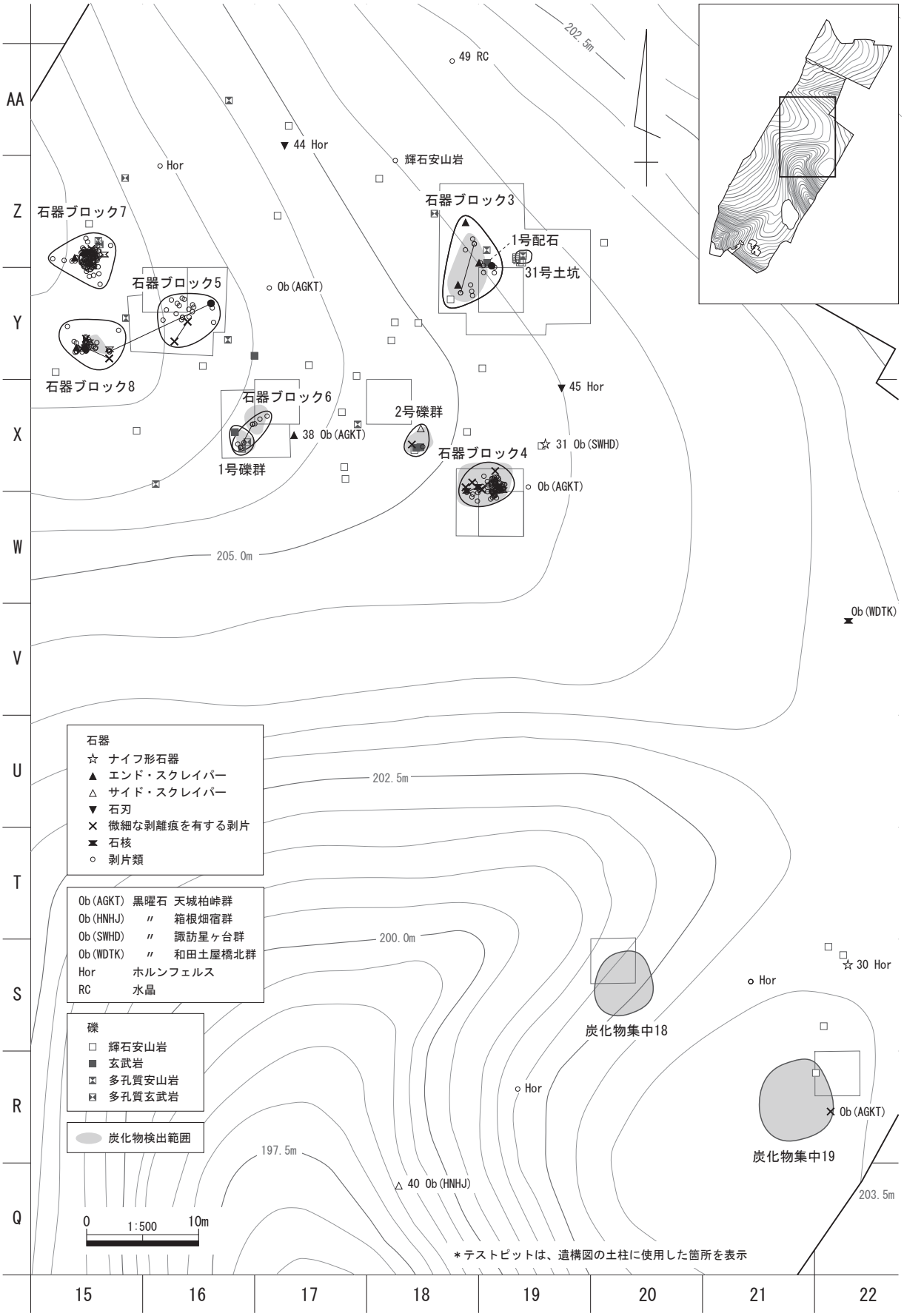
石器群は、ラウンド・スクレイパー１点、エンド・スクレイパー３点、剥片類13点である。石材は、黒曜石14点（天城柏峠群11点、分析不可等３点）、ホルンフェルス３点である。分析不可等の黒曜石は、肉眼鑑定から、全て天城柏峠群であることが推測される。黒曜石の小型の剥片が大半であり、４点のスクレイパーの素材となった剥片も、同程度の大きさである。

また、ブロックの東側に、台石として使用された可能性がある１号配石が検出されている。

さらに、40点以上の炭化物が重複して分布しているが、土壌に赤化などの変化は確認できなかった。出土した炭化物のうち炭化材１点について、放射性炭素年代測定（AMS法）を行った結果、23,940±80yrBP（PLD－17428）の^{14}C年代値が確認された（詳細は第２分冊附編を参照）。



第44図　第Ⅵ文化層　遺構配置図



第45図　第Ⅵ文化層　遺物分布図

第17表　第Ⅵ文化層 石器ブロック３～８ 石器組成表

石器ブロック３

		ラウンド・スクレイパー	エンド・スクレイパー	剥片類	計
黒曜石	天城柏峠群	1	3	7	11
	分析不可等			3	3
ホルンフェルス				3	3
計		1	3	13	17

石器ブロック４

		楔形石器	微細な剥離痕を有する剥片	石核	剥片類	計
黒曜石	天城柏峠群	1	2		13	16
	分析不可等				12	12
ホルンフェルス			3	3	54	60
計		1	5	3	79	88

石器ブロック５

		ラウンド・スクレイパー	微細な剥離痕を有する剥片	剥片類	計
黒曜石	天城柏峠群	1	2	6	9
	分析不可等			1	1
ホルンフェルス				11	11
計		1	2	18	21

石器ブロック６

		剥片類
黒曜石	天城柏峠群	2
ホルンフェルス		5
計		7

石器ブロック７

		エンド・スクレイパー	楔形石器	微細な剥離痕を有する剥片	剥片類	計
黒曜石	天城柏峠群	2	3	1	43	49
	分析不可等				64	64
ホルンフェルス					4	4
ガラス質黒色安山岩					1	1
計		2	3	1	112	118

石器ブロック８

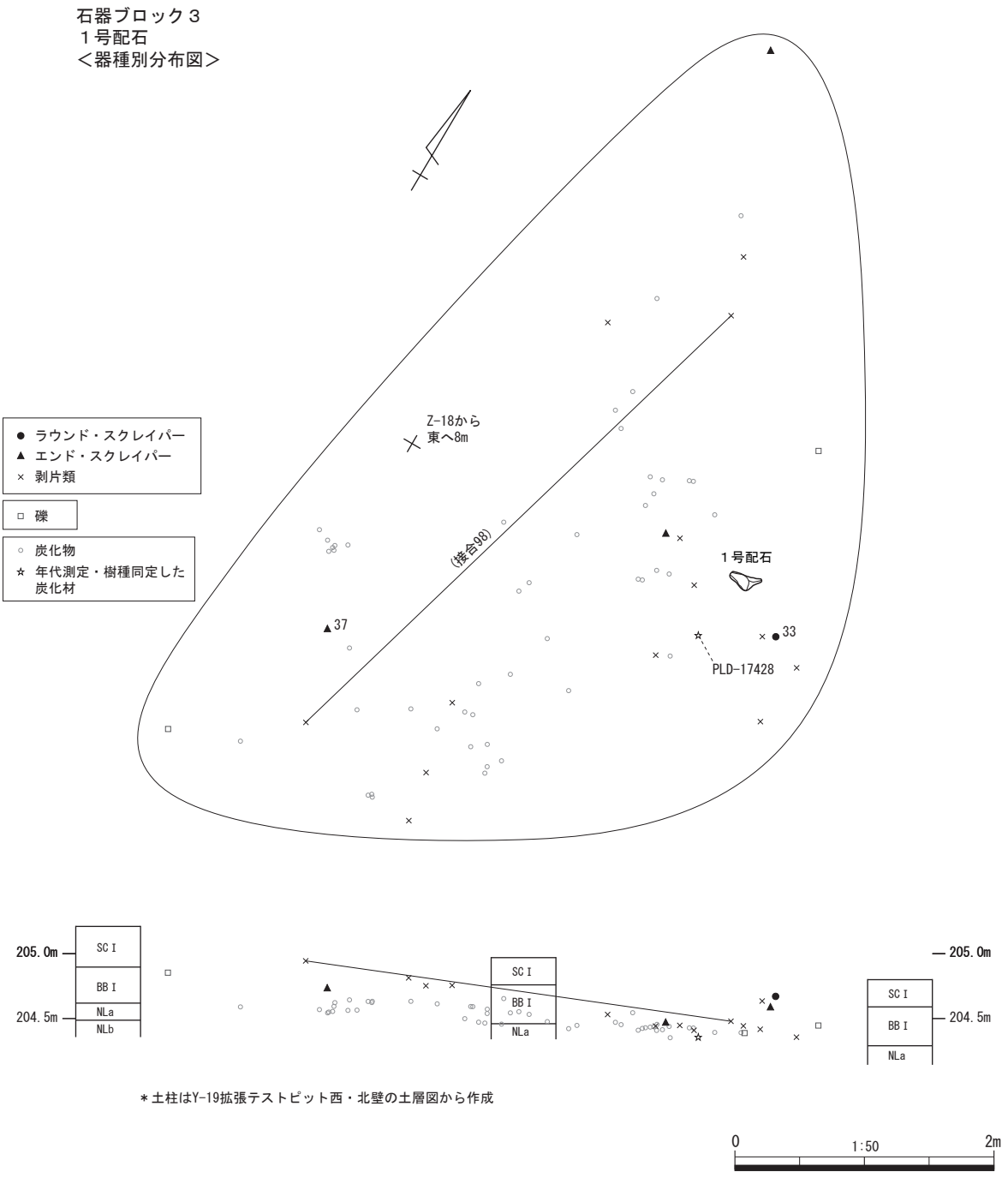
		エンド・スクレイパー	楔形石器	微細な剥離痕を有する剥片	剥片類	計
黒曜石	天城柏峠群	1	3	3	29	36
	分析不可等				16	16
計		1	3	3	45	52

石器ブロック４（第48図）

W～X－18～19グリッドから検出された。東西方向3.5m、南北方向2.5mの範囲に、88点の石器が集中して分布している。第Ⅰ黒色帯～第Ⅰスコリア層にかけて、上下に幅を持って分布しているが、出土のピークは第Ⅰ黒色帯の下部である。付近は、北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。石器ブロックと重複して、炭化物集中が検出された。

石器群は、楔形石器１点、微細な剥離痕を有する剥片５点、石核３点、剥片類79点である。石材は、黒曜石28点（天城柏峠群16点、分析不可等12点）、ホルンフェルス60点である。分析不可等の黒曜石も、肉眼鑑定から、全て天城柏峠群であることが推測される。大半が極小の砕片であり、両極剥離を行った際に散ったブランクと考えられる。

また、ホルンフェルスで剥片剥離を行っていたと考えられ、本文化層の中で、ホルンフェルスの割合が一番大きい石器ブロックである。石核を含む接合資料が複数確認できる。幅広剥片を目的にしていた



第46図　第Ⅵ文化層　中央尾根 石器ブロック３、１号配石 遺構図（１）

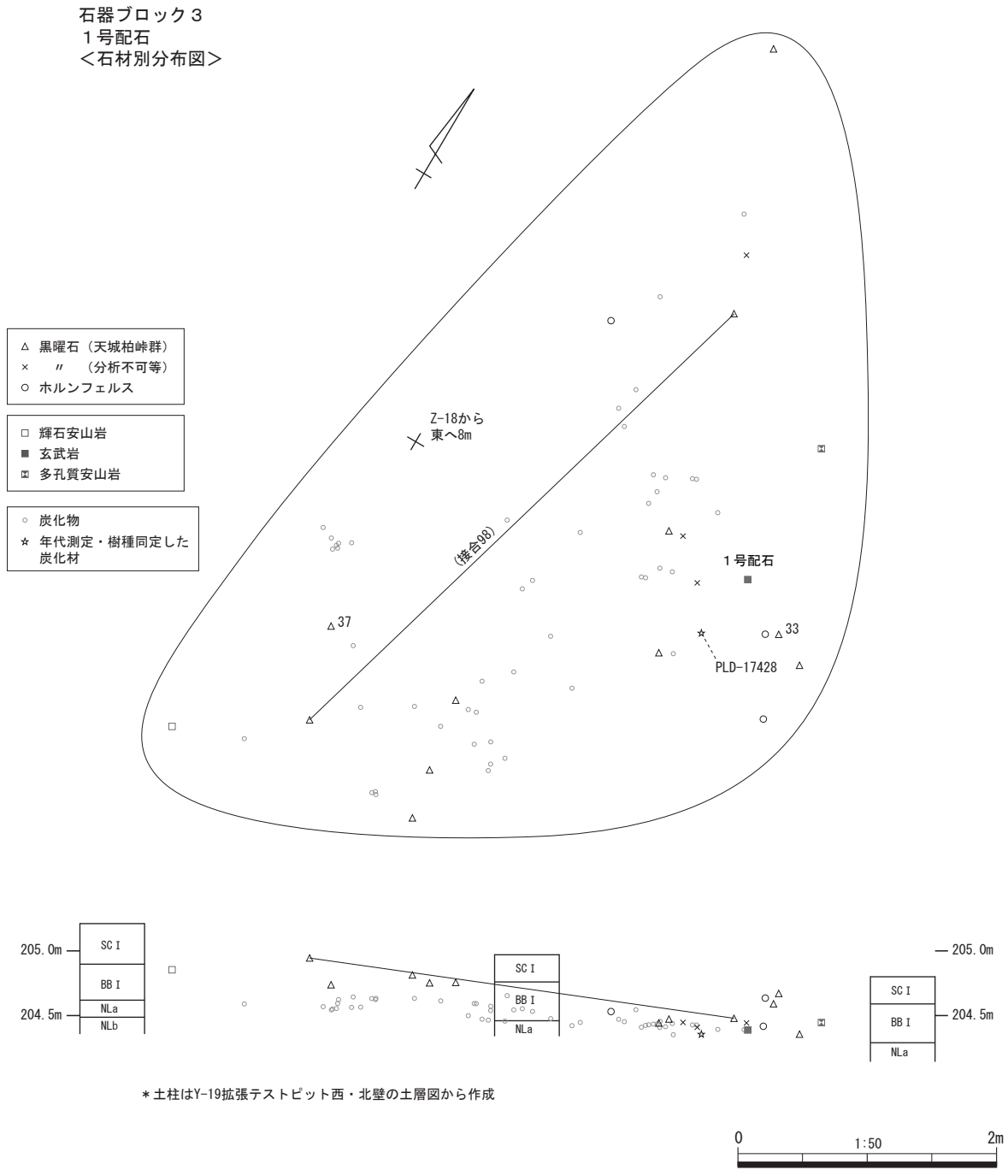
と考えられ、ブロック内から多く出土している。

200点以上の炭化物が重複して分布しているが、土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石器ブロック５（第49図）

Ｙ－16グリッドから検出された。北東～南西方向4.7m、北西～南東方向4.1mの範囲に、21点の石器が分布している。上下に多少の幅を持って分布しているが、出土のピークは第Ｉ黒色帯の下部である。付近は、北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。

石器群は、ラウンド・スクレイパー１点、微細な剥離痕を有する剥片２点、剥片類18点である。



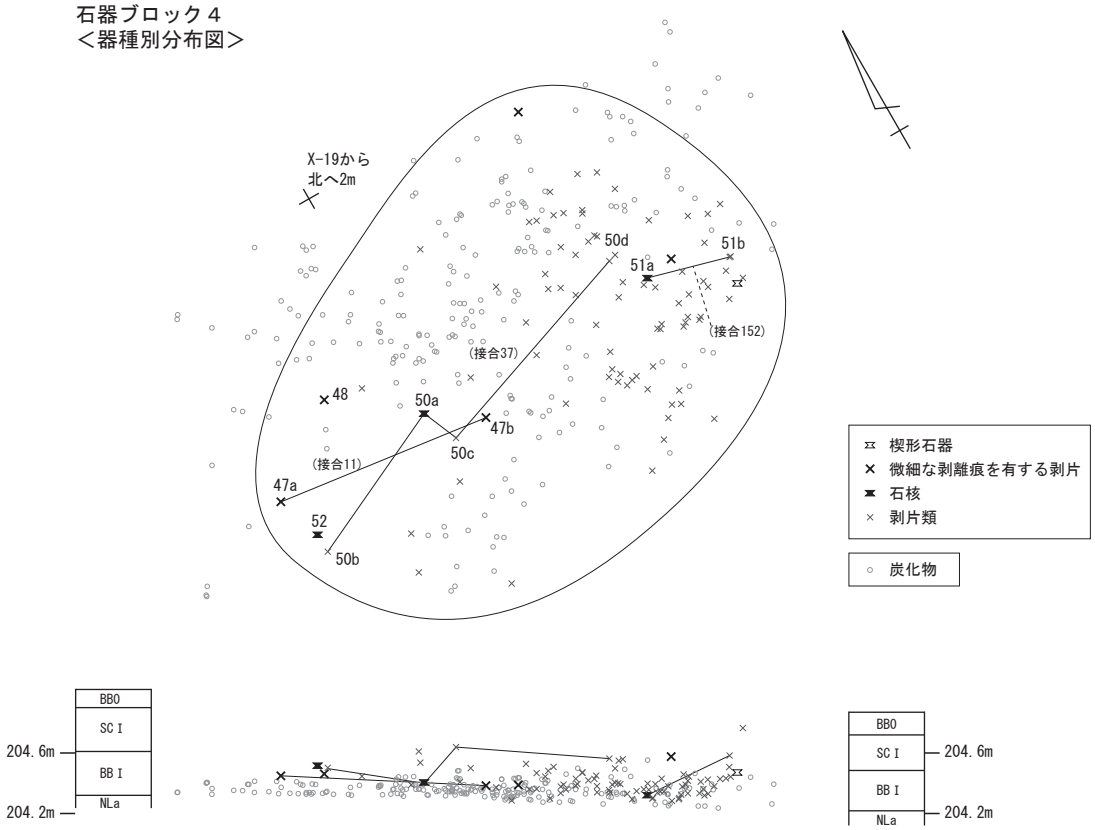
第47図　第Ⅵ文化層　中央尾根 石器ブロック３、１号配石 遺構図（２）

石材は、黒曜石10点（天城柏峠群９点、分析不可等１点）、ホルンフェルス11点である。分析不可等の黒曜石も、肉眼鑑定から、天城柏峠群であることが推測される。黒曜石は小型の剥片が中心であり、両極打法で剥離されている。ラウンド・スクレイパーは、西方向に約10m離れた石器ブロック８から出土した剥片と接合した。製品に加工する前に、同一の作業面で剥離された剥片である。ホルンフェルスは、幅広剥片や砕片が出土しているが、接合関係は確認されなかった。

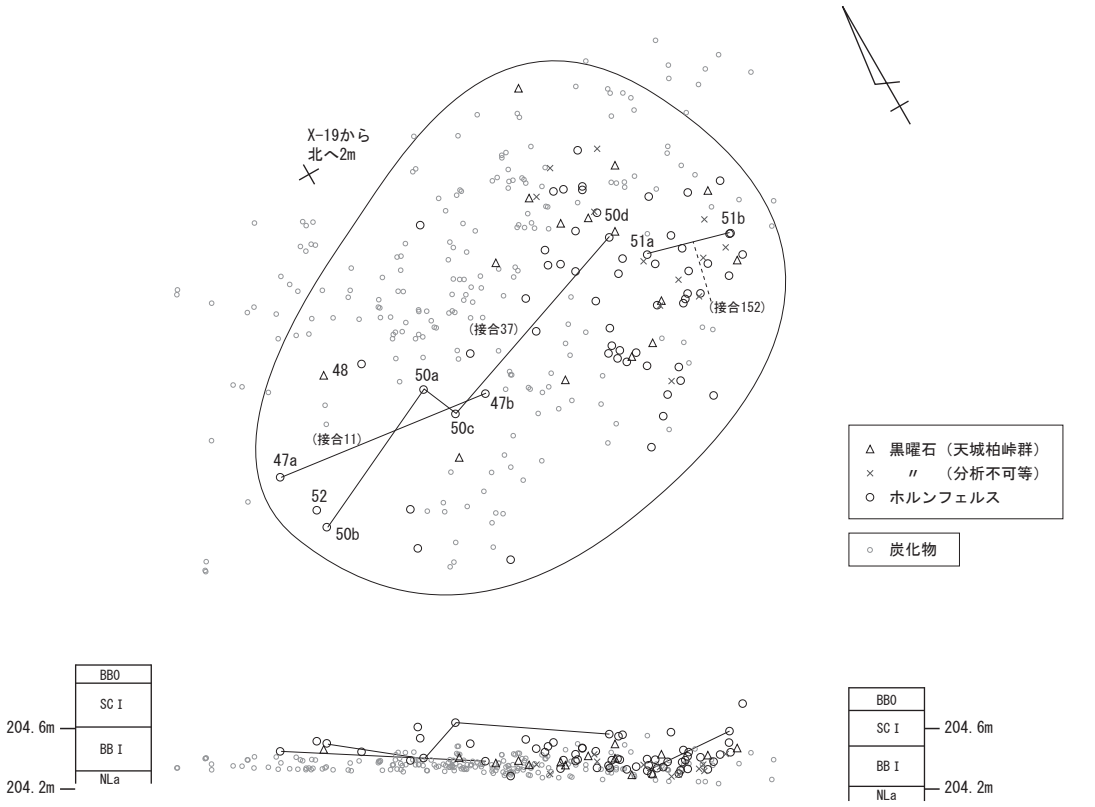
石器ブロック６（第50図）

X－16～17グリッドから検出された。北東～南西方向3.7m、北西～南東方向0.5mの範囲に、７点の

石器ブロック４
＜器種別分布図＞



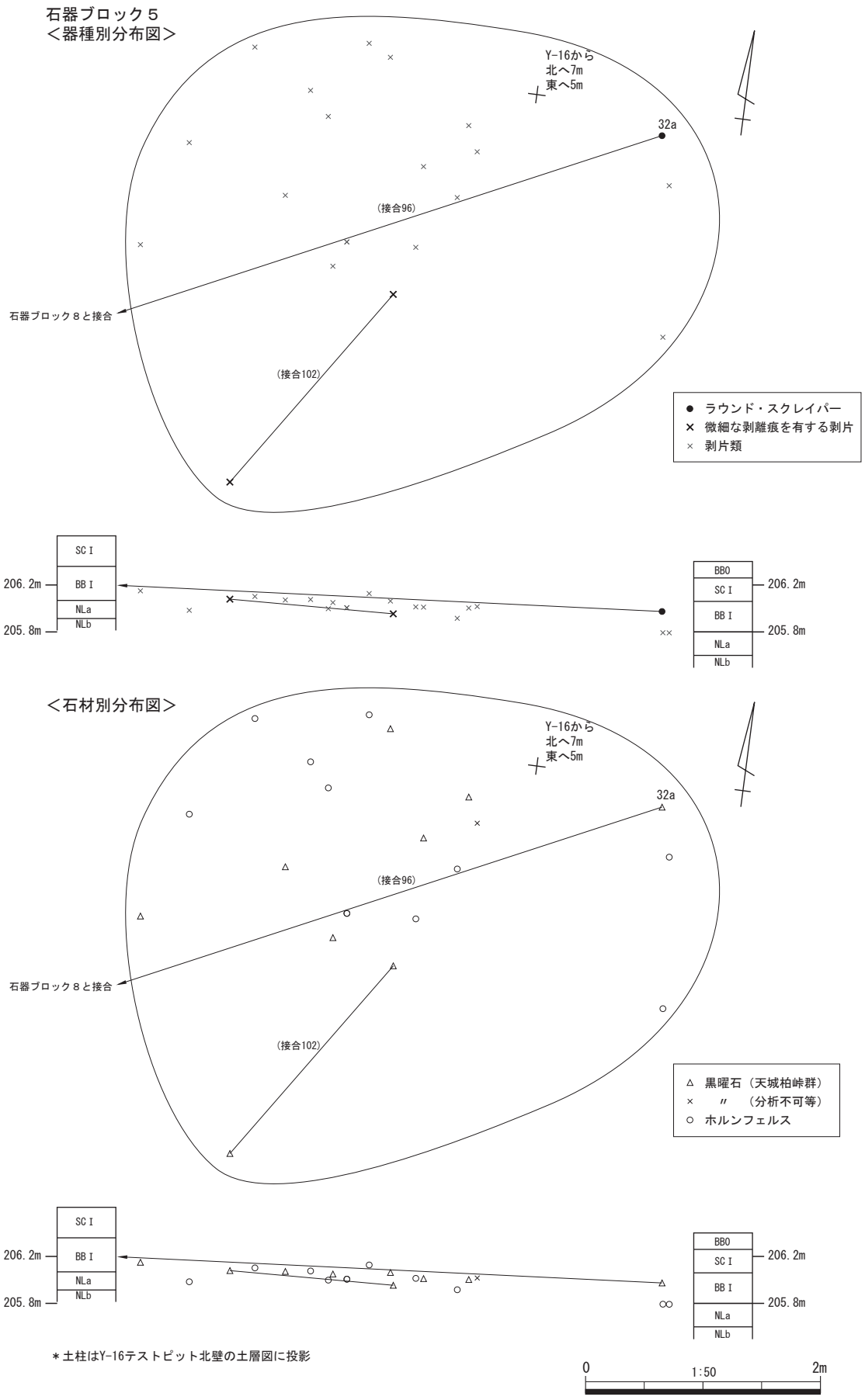
＜石材別分布図＞



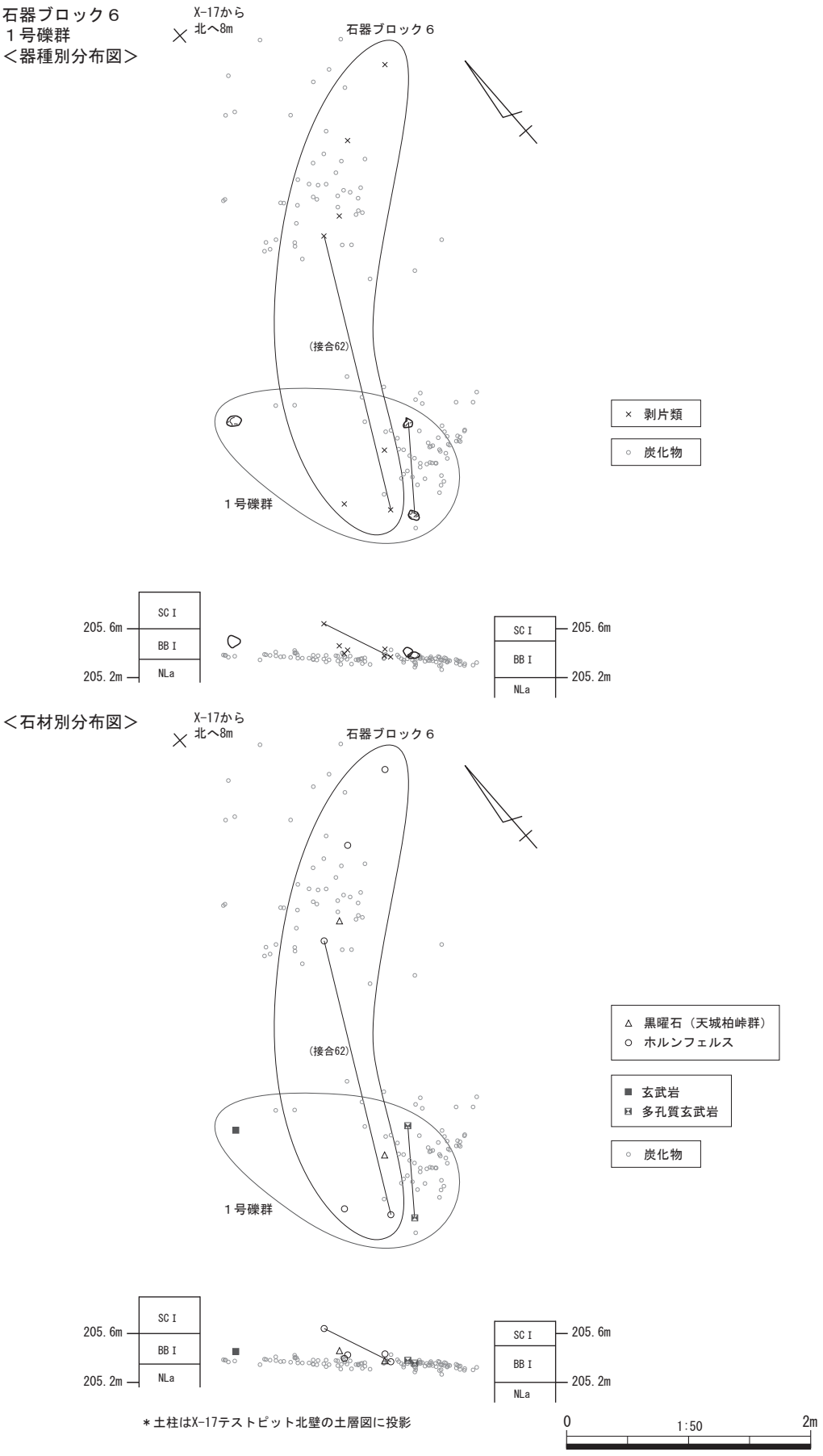
＊土柱はW-19拡張テストピット北壁の土層図を使用

0　1:50　2m

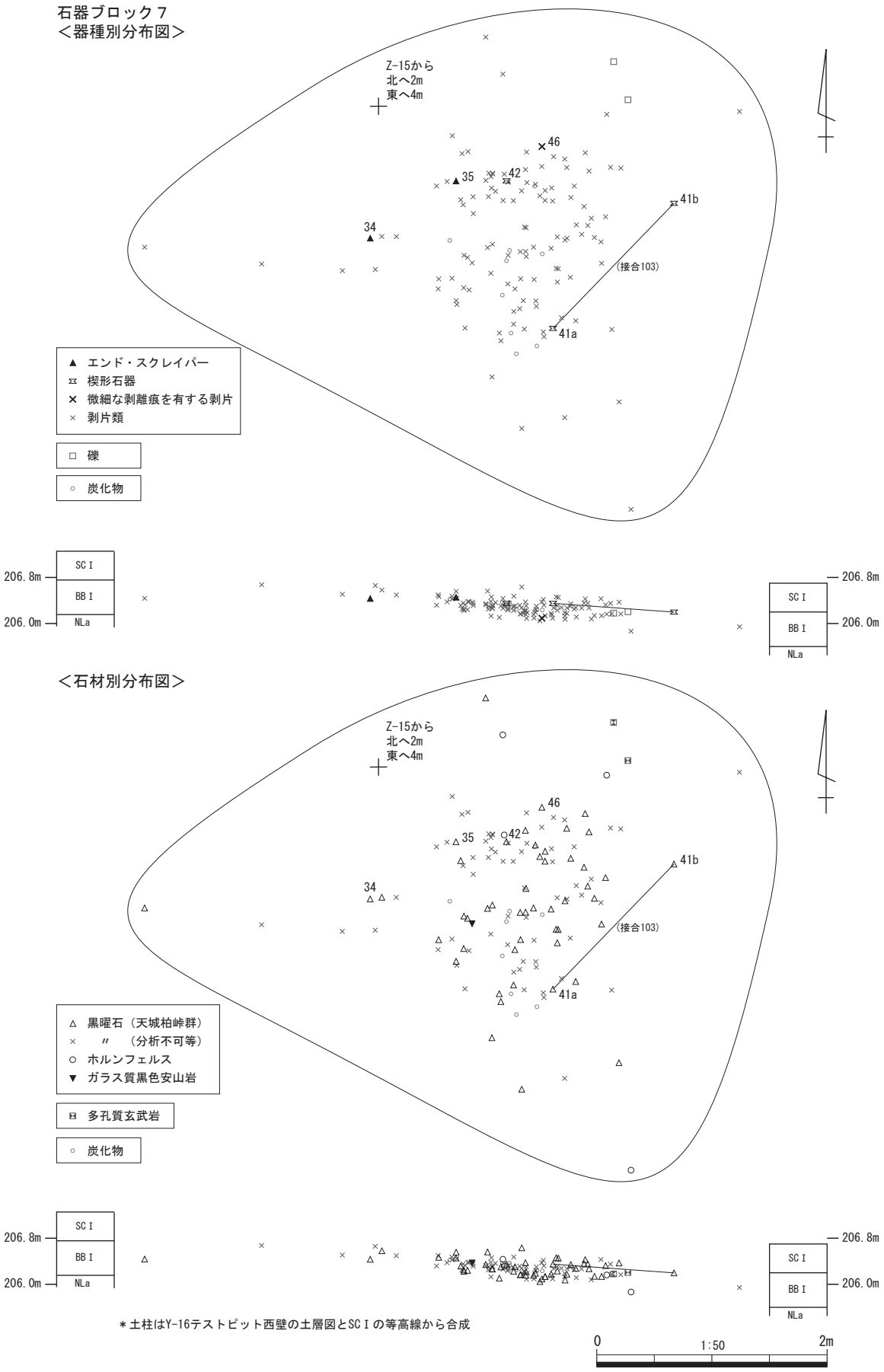
第48図　第Ⅵ文化層　中央尾根 石器ブロック４ 遺構図



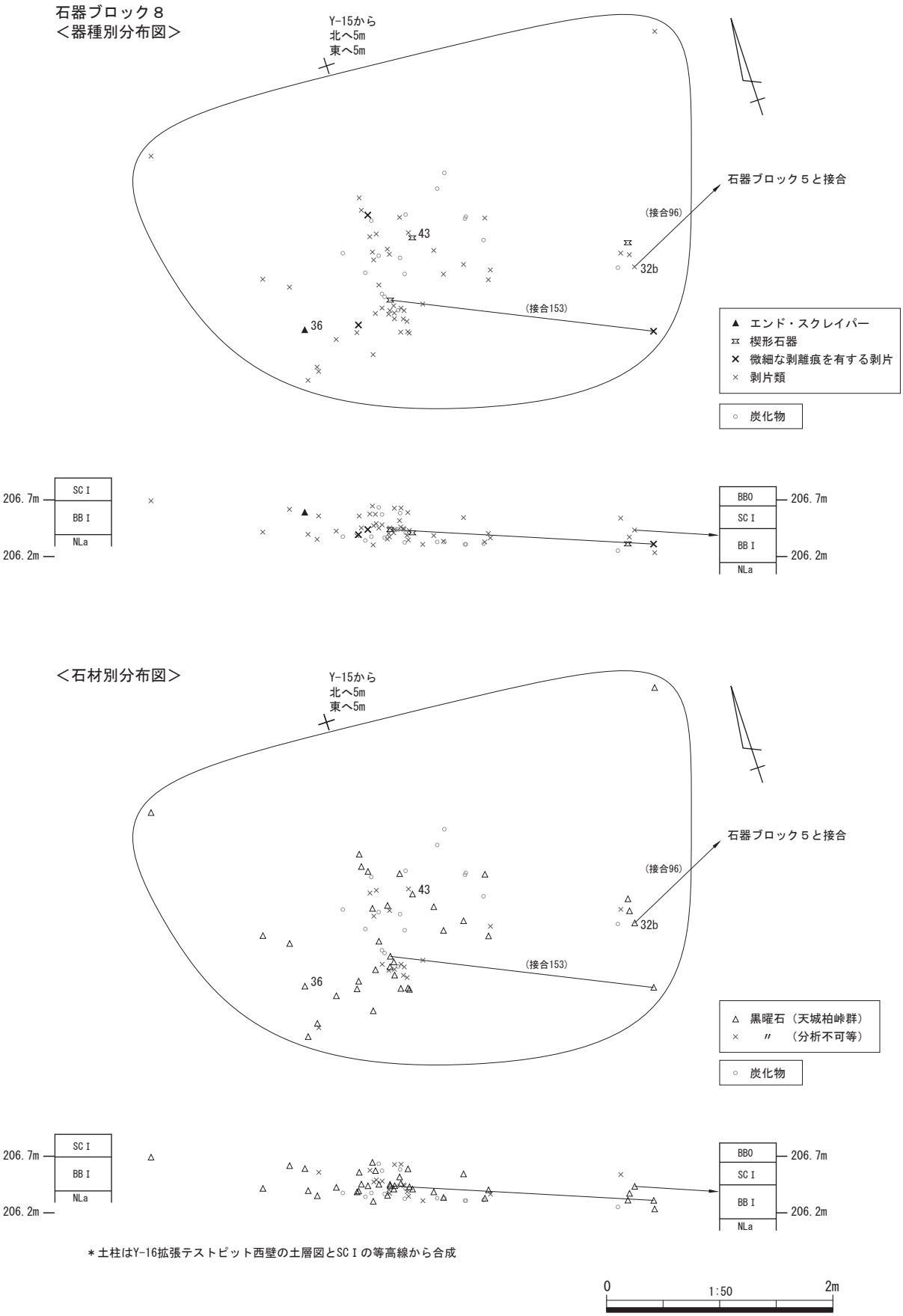
第49図　第VI文化層　中央尾根 石器ブロック５ 遺構図



第50図　第Ⅵ文化層　中央尾根 石器ブロック６、１号礫群 遺構図



第51図　第VI文化層　中央尾根 石器ブロック７ 遺構図



第52図　第Ⅵ文化層　中央尾根 石器ブロック８ 遺構図

石器が、帯状に散在して分布している。第Ⅰ黒色帯～第Ⅰスコリア層にかけて、上下に多少の幅を持って分布しているが、出土のピークは第Ⅰ黒色帯の中部である。付近は、北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。

石器群はすべて剥片類である。石材は、黒曜石２点（天城柏峠群）、ホルンフェルス５点である。ホルンフェルスはすべて石刃状の縦長剥片である。２点は接合しているが、遺構内で剥離したものであるかは不明である。黒曜石は２点とも小型の剥片である。

１号礫群と重複している。また、付近からは100点以上の炭化物が出土しているが、土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石器ブロック７（第51図）

Y～Z－15グリッドから検出された。東西方向5.3m、南北方向4.3mの範囲に、118点の石器が密集して分布している。第Ⅰ黒色帯～第Ⅰスコリア層にかけて、上下に幅を持って分布しているが、出土のピークは第Ⅰ黒色帯の上部である。付近は、北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。

石器群は、エンド・スクレイパー２点、楔形石器３点、微細な剥離痕を有する剥片１点、剥片類112点である。石材は、黒曜石113点（天城柏峠群49点、分析不可等64点）、ホルンフェルス４点、ガラス質黒色安山岩１点である。分析不可等の黒曜石も、肉眼鑑定から天城柏峠群であることが推測される。黒曜石は大半が極小の砕片であり、両極剥離を行った際に散ったブランクと考えられる。

９点の炭化物が重複して分布しているが、土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石器ブロック８（第52図）

Y－15グリッドから検出された。東西方向4.7m、南北方向3.9mの範囲に、52点の石器が密集して分布している。第Ⅰ黒色帯～第Ⅰスコリア層にかけて、上下に幅を持って分布しているが、出土のピークは第Ⅰ黒色帯の中部である。付近は、北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。

石器群は、エンド・スクレイパー１点、楔形石器３点、微細な剥離痕を有する剥片３点、剥片類45点である。石材はすべて黒曜石であり、天城柏峠群36点、分析不可等16点である。分析不可等の黒曜石も、肉眼鑑定から、天城柏峠群であることが推測される。小形の剥片や極小の砕片が多く、これらは両極剥離を行った際に散ったブランクと考えられる。楔形石器も３点出土しており、遺構内で両極剥離を積極的に行っていたと考えられる。また、約10mの距離を隔てた石器ブロック５との接合関係が確認されている。

10点を超える炭化物が重複して分布しているが、土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

イ　礫群

１号礫群（第50図）

X－16グリッドから検出された。石器ブロック６と重複して検出されている。出土は第Ⅰ黒色帯の中部である。南北方向1.7m、東西方向0.7mの範囲に、３点の礫が散漫に分布している。付近は、北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。

石材は、玄武岩１点、多孔質玄武岩２点（接合）であり、非常に小規模で貧弱である。

60点を超える炭化物が重複して検出されたが、土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

２号礫群（第53図）

Ｘ－18グリッドから検出された。東西方向0.6m、南北方向0.3mの範囲に、３点の礫が分布している。出土は第Ⅰ黒色帯の中部である。付近は、北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。

石材は、輝石安山岩１点、玄武岩２点であり、非常に小規模で貧弱である。

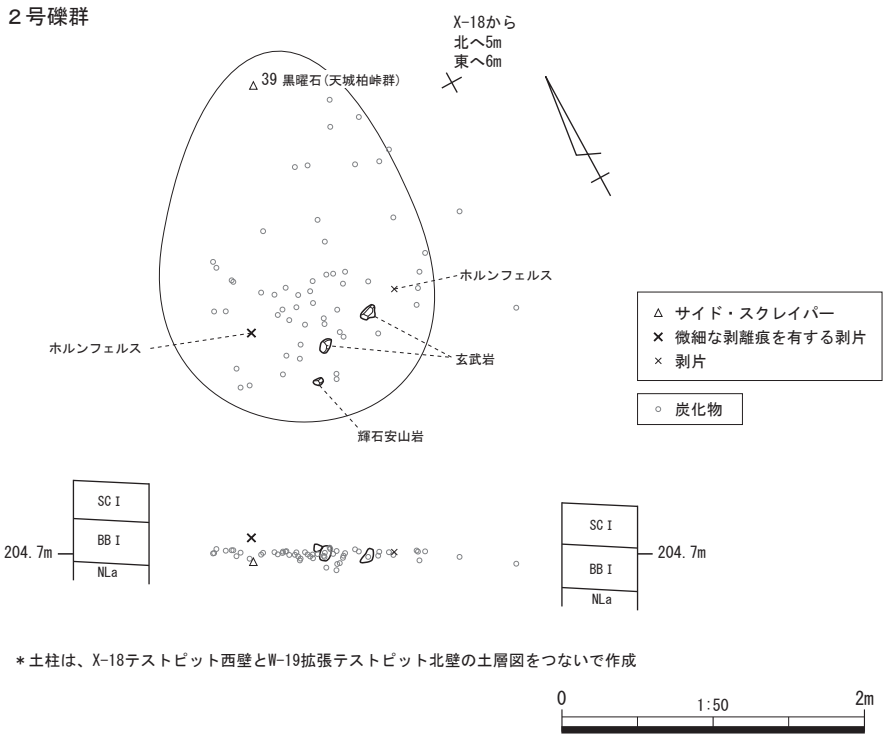
50点以上の炭化物が重複して検出されたが、土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

また、３点の石器が重複して出土している。内訳は、サイド・スクレイパー１点、微細な剥離痕を有する剥片１点、剥片類１点である。石材は、黒曜石天城柏峠群１点、ホルンフェルス２点であった。

第18表　第Ⅵ文化層 中央尾根 礫群一覧表

礫群番号	グリッド	検出層位	構成礫数	接合礫数	接合後個体数	石材				重複する			赤化率%	赤化状態		
										遺構番号	遺物					
						輝石安山岩	多孔質安山岩	玄武岩	多孔質玄武岩	石器ブロック	石器（点数）	炭化物		A	B	C
１号	X-15	BB Ⅰ	3	1	2			1	2	6		○	100	1		2
２号	X-18	BB Ⅰ	3	—	3	1		2			3	○	100	2	1	

赤化状態　Ａ－赤化　完形　　Ｂ－赤化　破損礫　割面も赤化　　Ｃ－赤化　破損礫　割面は非赤化



第53図　第Ⅵ文化層　中央尾根 ２号礫群 遺構図

ウ　配石

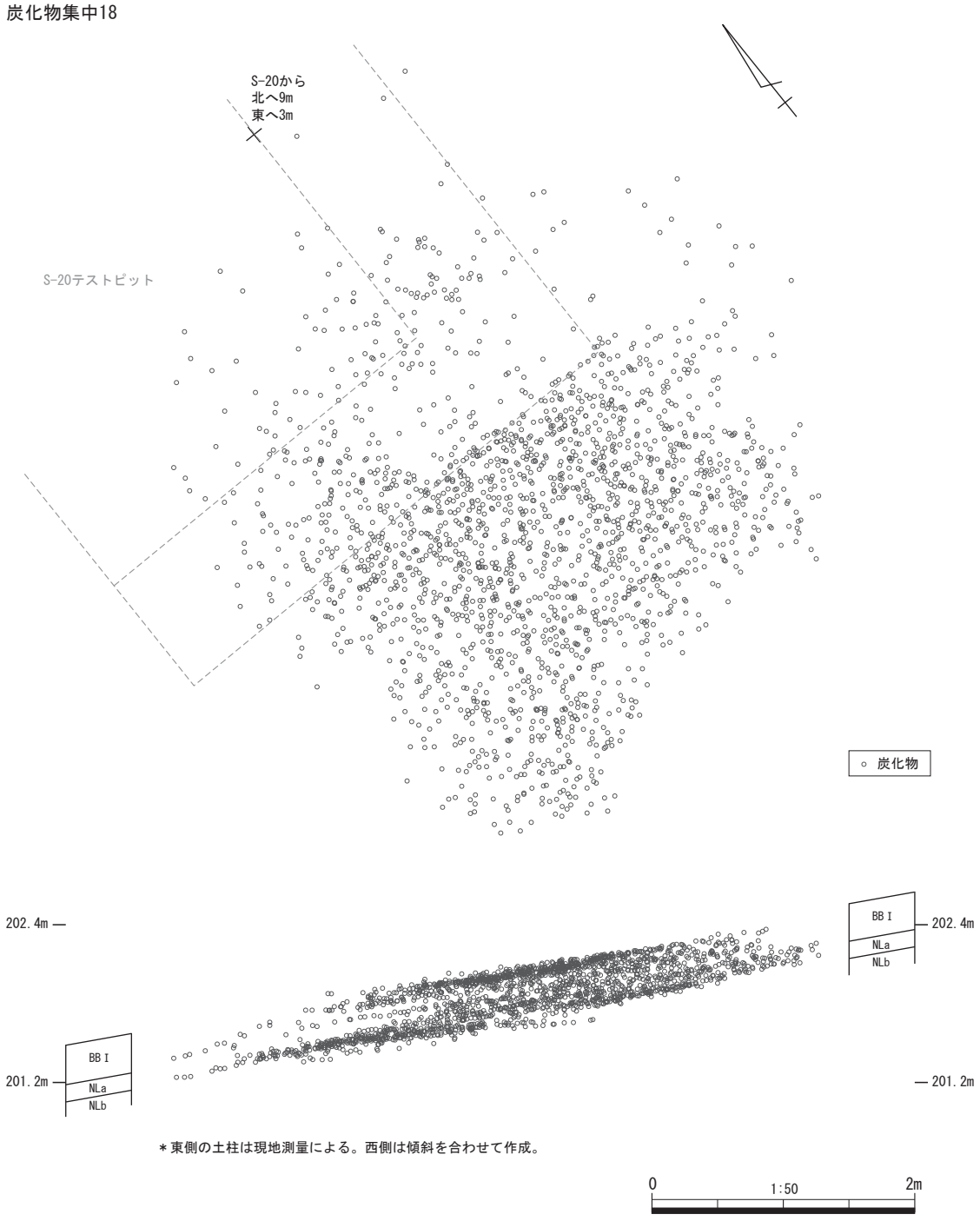
１号配石（第46・47図）

Ｚ－19グリッドから検出された。石器ブロック３と重複し、当該ブロックの石器の分布が比較的集中している東側に位置する。出土したのは6,000gを超える大型の礫で、石器ブロックの中で台石として用いられた可能性も考えられる。石材は玄武岩である。

エ　炭化物集中

炭化物集中18（第54図）

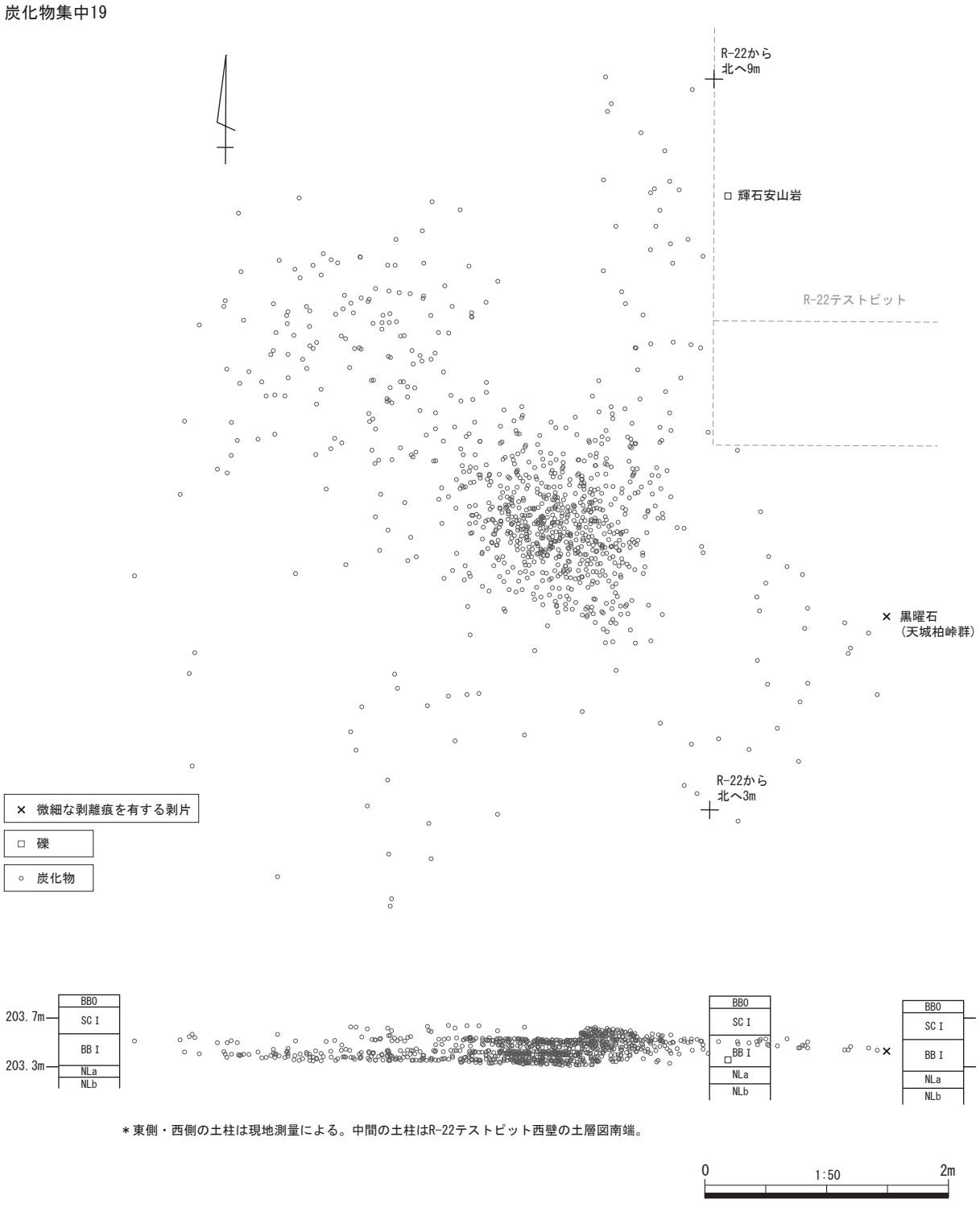
Ｓ－20グリッドから検出された。直径約5.5mの範囲に、1,900点を超える炭化物が、密集して分布している。ニセローム層～第Ⅰ黒色帯にかけて、上下に幅を持って分布しており、複数の文化層の資料が混在していると推測される。なお、検出範囲の北側は、テストピットにより大半が削平されている。付近は、東から西にかけて、緩やかに下る丘陵部の際であり、すぐ西側は谷部となっている。分布範囲の土壌に、赤化などの変化は確認できなかった。



第54図　第VI文化層　中央尾根 炭化物集中18 遺構図

炭化物集中19（第55図）

Ｒ－21～22グリッドから検出された。直径約７ｍの範囲に、960点を超える炭化物が、中央の密集部から放射状に広がり分布している。第Ⅰ黒色帯～第Ⅰスコリア層にかけて、上下に幅を持って分布している。付近は、平坦な丘陵地のほぼ中央である。分布範囲の土壌に、赤化などの変化は確認できなかった。



第55図　第Ⅵ文化層　中央尾根 炭化物集中19 遺構図

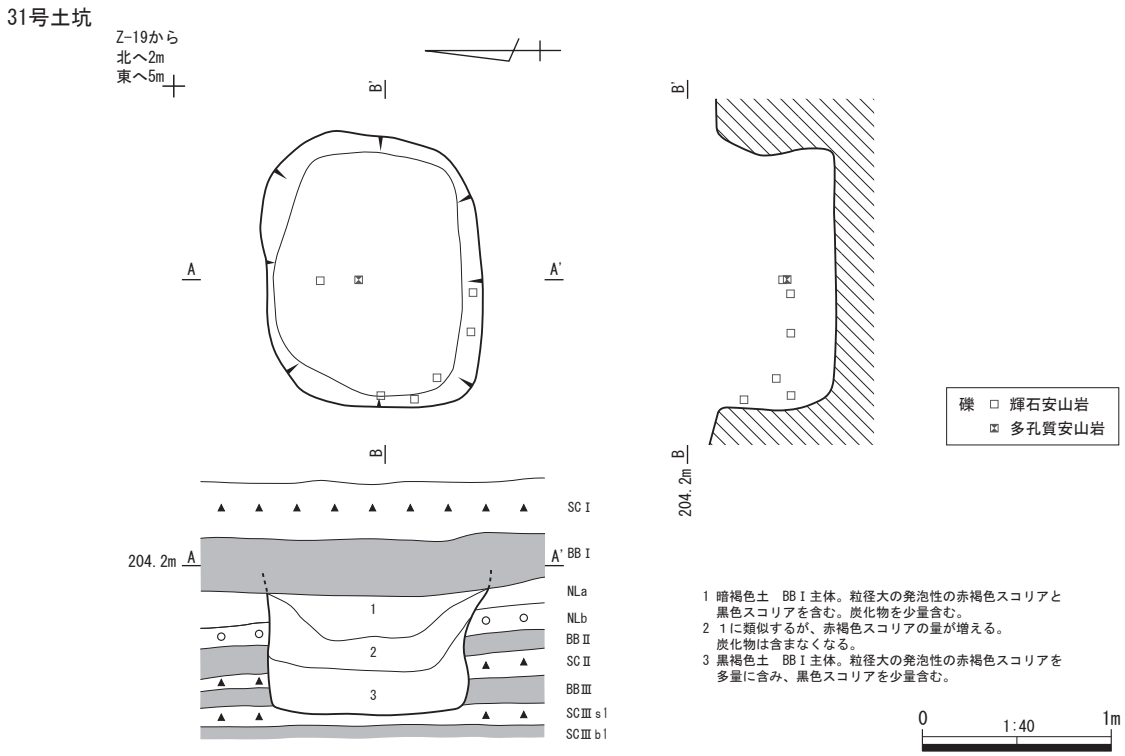
オ　土坑

31号土坑（第56図）

Ｚ－19グリッドのテストピット壁際から検出された。掘込面は判然とせず不明であるが、土層断面図と覆土から判断すると、第Ｉ黒色帯の上部であると推測される。底面は、第Ⅲスコリア帯スコリア１まで掘り込まれている。付近は、西から東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。

平面形状は、長軸1.4m、短軸1.2mの長方形を呈する。壁面はほぼ垂直に降りており、底面形状もほぼ同じである。検出面からの深さは0.6mである。覆土から７点の礫が出土した。

西方向に約２ｍの距離を隔てて、石器ブロック３が確認されているが、関係は不明である。



第56図　第VI文化層　中央尾根 31号土坑 遺構図

（２）遺物

石器群の内訳は、ナイフ形石器が２点、ラウンド・スクレイパー２点、エンド・スクレイパー７点、サイド・スクレイパー２点、楔形石器７点、石刃２点、微細な剥離痕を有する剥片13点、石核４点、剥片類284点である。石材は、黒曜石226点（天城柏峠群126点、箱根畑宿群１点、諏訪星ヶ台群１点、和田土屋橋北群１点、分析不可等97点）、ホルンフェルス94点、ガラス質黒色安山岩１点、水晶１点、輝石安山岩１点である。

ナイフ形石器（第57図30・31　写真図版３）

30は、大型のホルンフェルス製石刃を素材とした、二側縁加工のナイフ形石器である。ブランティングは、右側縁と、左側縁基部に行っている。素材剥片の打点側を先端としており、右側縁のブランティングによって打点部は除去されている。また、左側縁基部のブランティングは、ややノッチ状を呈する。

31は、石刃を素材とした、二側縁加工のナイフ形石器である。ブランティングは、右側縁と、左側縁の基部に施されている。素材剥片の打点側を先端としており、右側縁のブランティングによって打点部

は除去されている。基部付近のブランティングは、両側縁とも、素材腹面に施された平坦剥離に近い加工で代用されている。石材は黒曜石（諏訪星ヶ台群）である。

ラウンド・スクレイパー（第57図32・33　写真図版３）

石材は、いずれも黒曜石（天城柏峠群）である。

32は、ラウンド・スクレイパーと剥片の接合資料である。両者は連続して剥離されており、32b，aの順となっている。製品となっている32aに比べて32bは小型であり、調整剥片であった可能性も考えられる。また、32aは石器ブロック５から、32bは石器ブロック８から、それぞれ出土した。32aは、厚みを持った剥片を素材としたラウンド・スクレイパーである。右側縁から下縁、左側縁まで縁辺の大半を加工して、刃部としている。刃部が非常に厚くなっている。また、下縁の加工は、両側縁に比べてやや抉れており、再加工を行った可能性も考えられる。32bは長幅比が１：１程度の幅広剥片である。転礫面を打面として、剥離されている。

33は、上部を折損しており、素材は縦長剥片であったと推測される。素材剥片の末端部から、左側縁に連続した剥離を施して刃部としている。石器ブロック３から出土した。

エンド・スクレイパー（第57図34～38　写真図版３）

石材は、すべて黒曜石（天城柏峠群）である。

34は、上部を折損しており、縦長剥片を素材としていると推測される。素材剥片の末端左側に、厚みを持った加工を連続して施し、刃部としている。刃部の左側は折損しているため、どの程度の長さがあったかは不明である。石器ブロック７から出土した。

35は、縦長剥片を素材としている。素材剥片を横位に用いて、左側縁に厚みを持った加工を連続して施し、刃部としている。刃部の加工は、ノッチ状を呈する。器体の右端は、折損している。石器ブロック７から出土した。

36は、厚みを持った幅広剥片を素材としている。素材剥片の末端部に、厚みを持った加工を連続して施し、刃部としている。石器ブロック８から出土した。

37は、縦長剥片を素材としている。素材剥片の末端部に、加工を連続して施し、刃部としている。石器ブロック３から出土した。

38は、楔形石器を転用しており、器体には両極剥離を行った際の潰れが残存している。両極剥離を行った縁辺を90°回転させて、そこに厚みを持った加工を連続して施し、刃部としている。

サイド・スクレイパー（第58図39・40　写真図版３）

39は、幅広剥片を素材としている。素材剥片の左側縁に、連続した加工を施して、刃部としている。器体の末端部は欠損している。欠損している末端部は厚みを有するため、エンド・スクレイパーのような刃部が存在した可能性もある。２号礫群の範囲内から出土した。石材は黒曜石（天城柏峠群）である。

40は、縦長剥片を素材としている。素材剥片の、右側縁の上部と下部に連続した加工を施して、刃部としている。左側縁にも平坦剥離に近い剥離痕が確認できるが、加工であるかどうかは判然としない。上部と末端部を折損しているため、器体の全体形状は不明である。また、刃部も折損しているため、刃部の全体形状も不明である。石材は黒曜石（箱根畑宿群）である。

楔形石器（第58図41～43　写真図版４）

石材は、すべて黒曜石（天城柏峠群）である。

41は、剥離の衝撃で41a，bに分かれている。接合面は両面ともポジティブに近くなっており、両極剥離を行った際の特徴が顕著に確認できる。縁辺には微細な剥離痕が確認できる。２点とも石器ブロック７から出土した。

42は、上下両端から剥離を行っており、上端は剥離の衝撃で失われている。下端には明確な潰れが確認できる。側面にはエンド・スクレイパーの刃部のような加工が確認でき、転用した可能性も考えられる。石器ブロック７から出土した。

43は、上下から剥離を行っており、両端には明確な潰れが確認できる。細長い形状をしている。石器ブロック８から出土した。

石刃（第58図44・45　写真図版４）

石材は、いずれもホルンフェルスである。

44の背面からは、同一方向の剥離を繰り返しているのが見て取れる。上下両端を折損しており、大きさなどは確認できないが、45より小型の資料であると推測される。

45は、長さ９cm近くの比較的大型の資料である。背面からは、同一方向の剥離を繰り返しているのが見て取れる。打面に細かな調整は施されていない。

微細な剥離痕を有する剥片（第58～59図46～48　写真図版４）

46は縦長剥片であり、両側縁に微細な剥離痕が確認できる。剥離痕は背面、腹面の両方に確認できるが、特に背面側に強く確認できる。石器ブロック７から出土した。石材は黒曜石（天城柏峠群）である。

47は幅広剥片の接合資料である。剥離は47a，bの順で行われている。打面に細かな調整は施されていない。２点とも打点部を除去するように、剥離痕が確認できる。また、47bは右側縁を折損している。背面を見る限り、同程度の大きさの幅広剥片を剥離していたようである。２点とも、石器ブロック４から出土した。石材はホルンフェルスである。

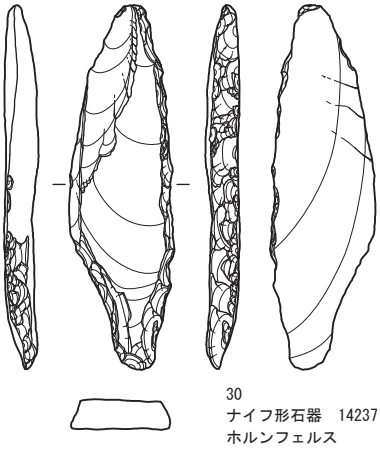
48は幅広剥片であり、右側縁に微細な剥離痕が確認できる。剥離痕は背面、腹面の両方に確認できるが、特に背面側に強く確認できる。末端部に厚みを持っており、背面に石核の作業面がはっきりと確認できることから、作業面再生剥片、もしくは打面再生剥片であった可能性も考えられる。石器ブロック４から出土した。石材は黒曜石（天城柏峠群）である。

剥片類（第59図49　写真図版４）

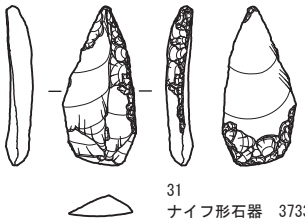
49は水晶製の縦長剥片である。上半部は折損している。

石核（第60・61図50～52　写真図版４）

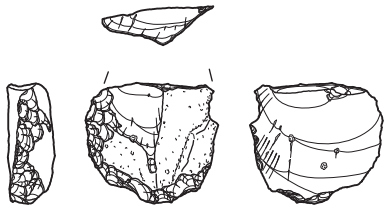
50～52は、石核と剥片の接合資料である。90°の打面転移を繰り返しながら、剥片剥離を行っている。打面は、転移する前の作業面をそのまま用いており、細かな打面調整は行われていない。50・51・52の順に、打面転移の回数が少なくなっていく。縦長剥片を剥離している面が多いが、石刃の様に幅は一定ではなく、幅広剥片も多く剥離されている。偶発的に50bのような石刃状の剥片が剥離されることもあるが、基本的には幅広剥片を目的としていたと考えられる。３点とも、石核・剥片ともに、石器ブロック４から出土している。しかし、原石に復元できるまでには接合しないことから、外に持ち出された剥片も存在すると考えられる。石材は、すべてホルンフェルスである。



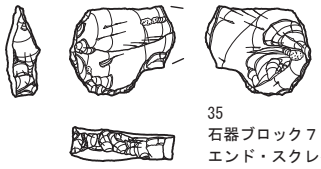
30
ナイフ形石器　14237
ホルンフェルス



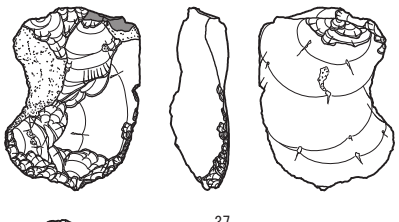
31
ナイフ形石器　3733
黒曜石　諏訪星ヶ台群



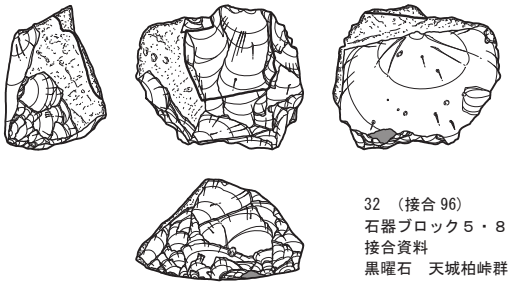
33
石器ブロック３
ラウンド・スクレイパー　3312
黒曜石　天城柏峠群



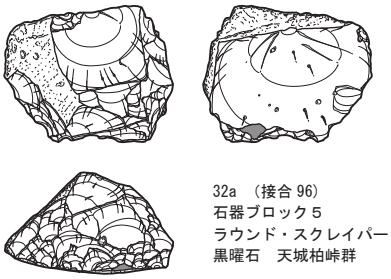
35
石器ブロック７
エンド・スクレイパー　3569
黒曜石　天城柏峠群



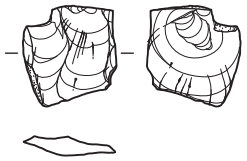
37
石器ブロック３
エンド・スクレイパー　3362
黒曜石　天城柏峠群



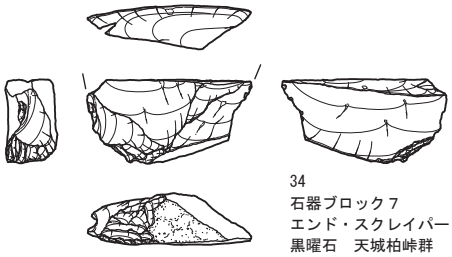
32　（接合 96）
石器ブロック５・８
接合資料
黒曜石　天城柏峠群



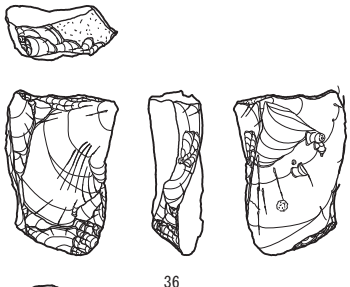
32a　（接合 96）
石器ブロック５
ラウンド・スクレイパー　3395
黒曜石　天城柏峠群



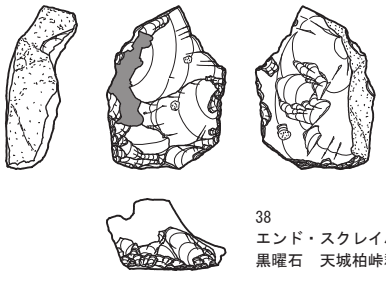
32b　（接合 96）
石器ブロック８
剥片　3580
黒曜石　天城柏峠群



34
石器ブロック７
エンド・スクレイパー　3656
黒曜石　天城柏峠群

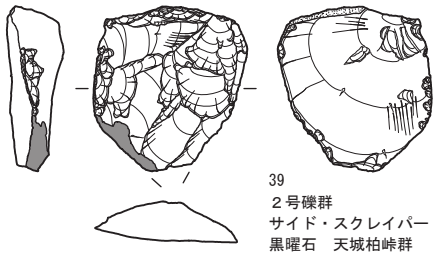


36
石器ブロック８
エンド・スクレイパー　3516
黒曜石　天城柏峠群

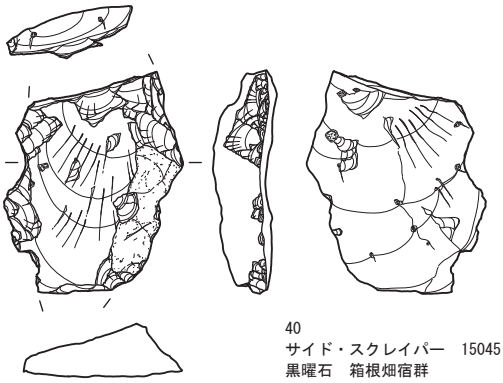


38
エンド・スクレイパー　3685
黒曜石　天城柏峠群

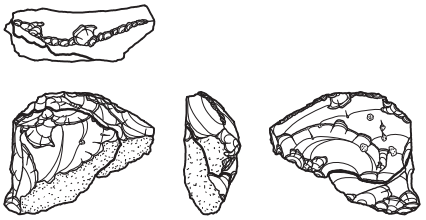
第57図　第Ⅵ文化層　中央尾根 出土石器実測図（１）



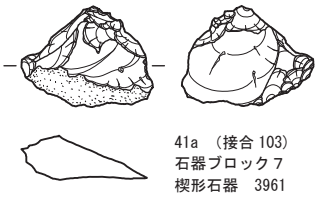
39
２号礫群
サイド・スクレイパー　3719
黒曜石　天城柏峠群



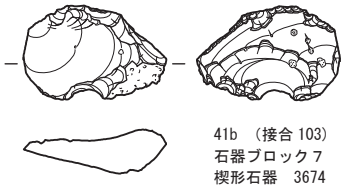
40
サイド・スクレイパー　15045
黒曜石　箱根畑宿群



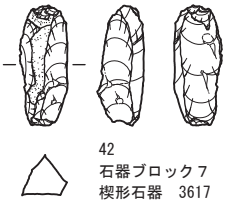
41　（接合 103）
石器ブロック７
楔形石器
黒曜石　天城柏峠群



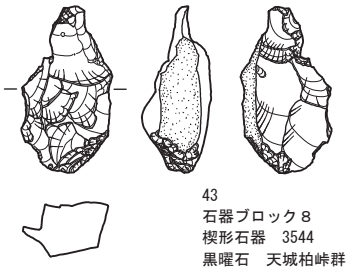
41a　（接合 103）
石器ブロック７
楔形石器　3961
黒曜石　天城柏峠群



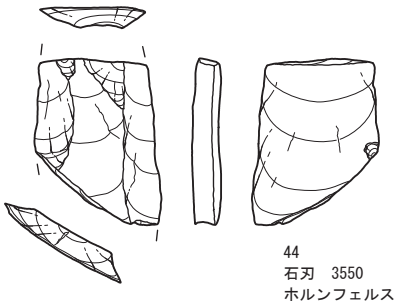
41b　（接合 103）
石器ブロック７
楔形石器　3674
黒曜石　天城柏峠群



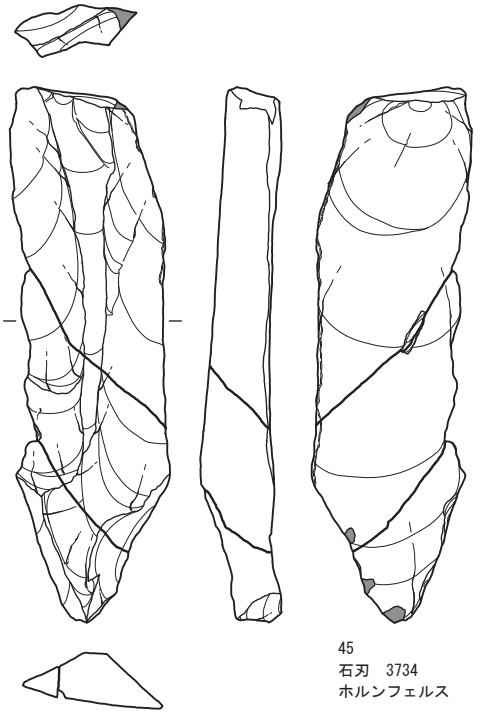
42
石器ブロック７
楔形石器　3617
黒曜石　天城柏峠群



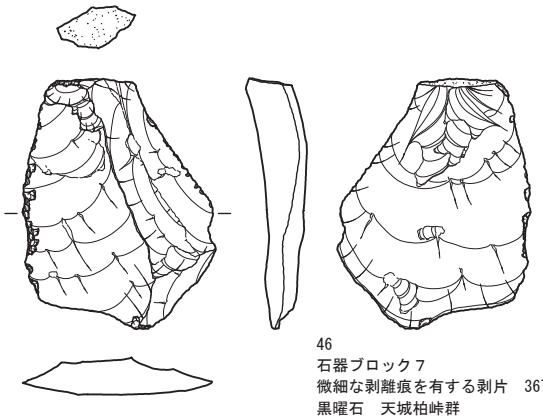
43
石器ブロック８
楔形石器　3544
黒曜石　天城柏峠群



44
石刃　3550
ホルンフェルス

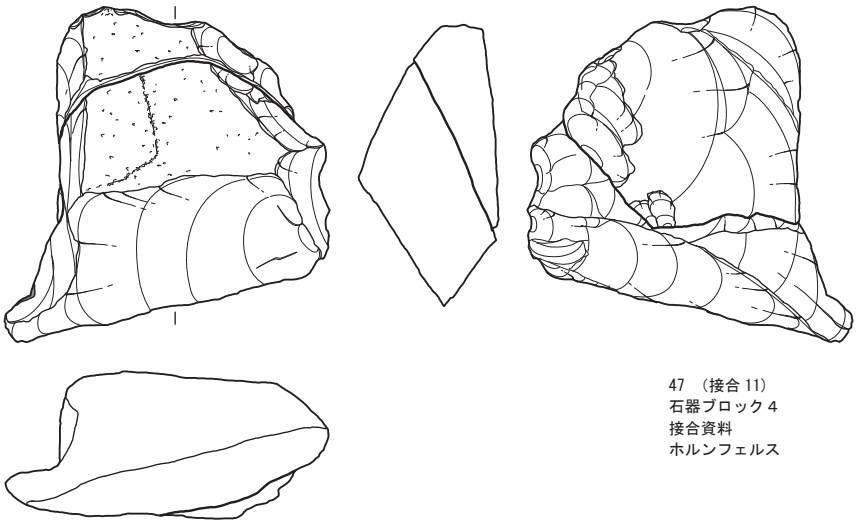


45
石刃　3734
ホルンフェルス

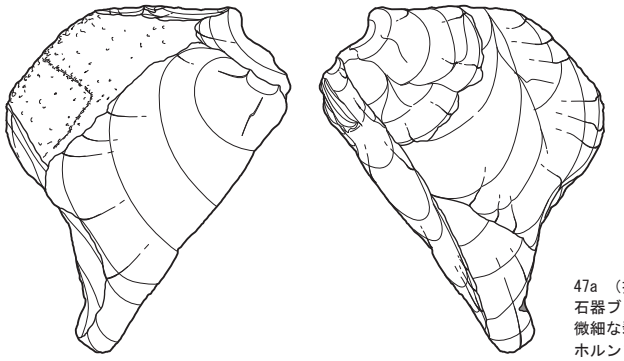


46
石器ブロック７
微細な剥離痕を有する剥片　3678
黒曜石　天城柏峠群

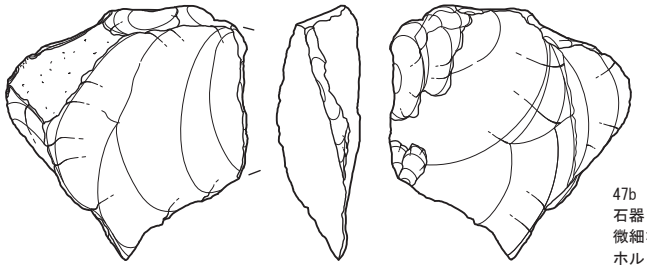
第58図　第VI文化層　中央尾根 出土石器実測図（２）



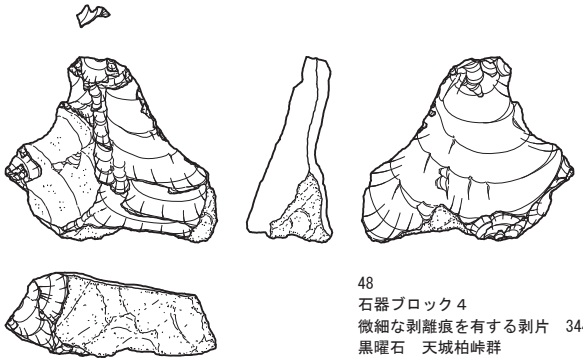
47 （接合 11）
石器ブロック４
接合資料
ホルンフェルス



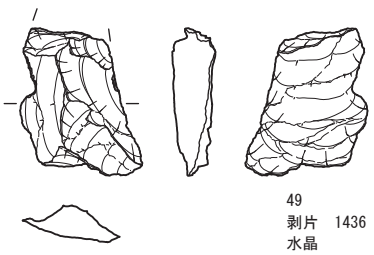
47a （接合 11）
石器ブロック４
微細な剥離痕を有する剥片　3410
ホルンフェルス



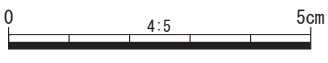
47b （接合 11）
石器ブロック４
微細な剥離痕を有する剥片　3441
ホルンフェルス



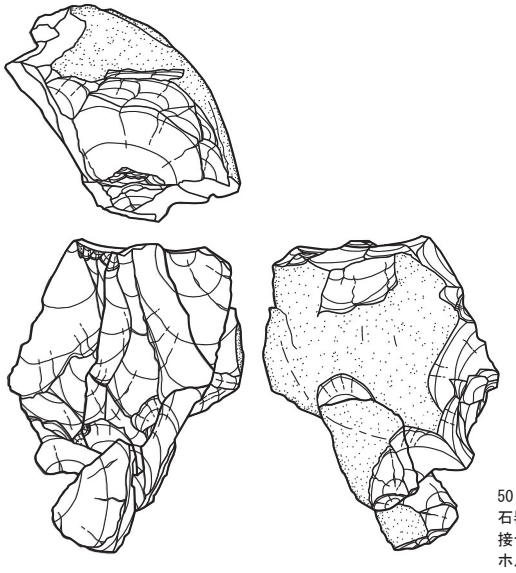
48
石器ブロック４
微細な剥離痕を有する剥片　3444
黒曜石　天城柏峠群



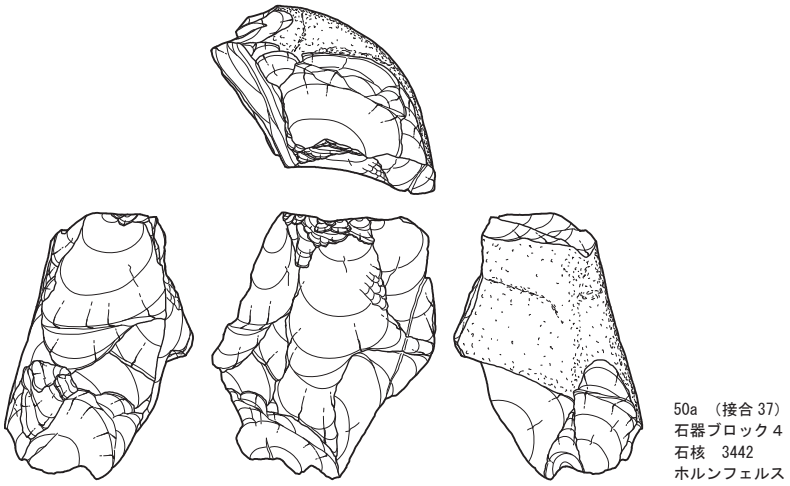
49
剥片　1436
水晶



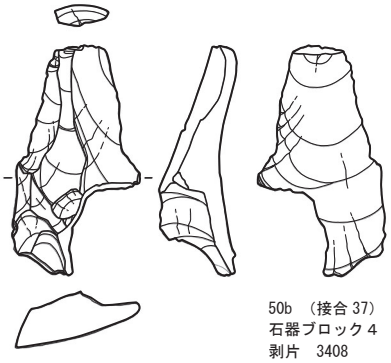
第59図　第Ⅵ文化層　中央尾根 出土石器実測図（３）



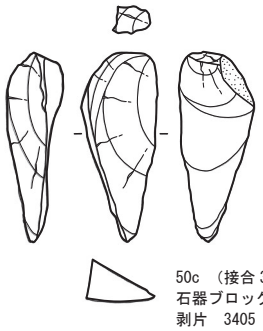
50　（接合 37）
石器ブロック４
接合資料
ホルンフェルス



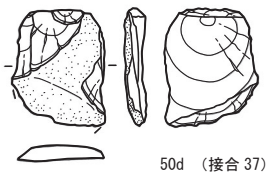
50a　（接合 37）
石器ブロック４
石核　3442
ホルンフェルス



50b　（接合 37）
石器ブロック４
剥片　3408
ホルンフェルス

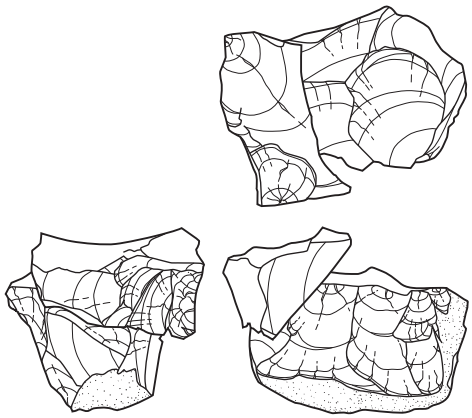


50c　（接合 37）
石器ブロック４
剥片　3405
ホルンフェルス

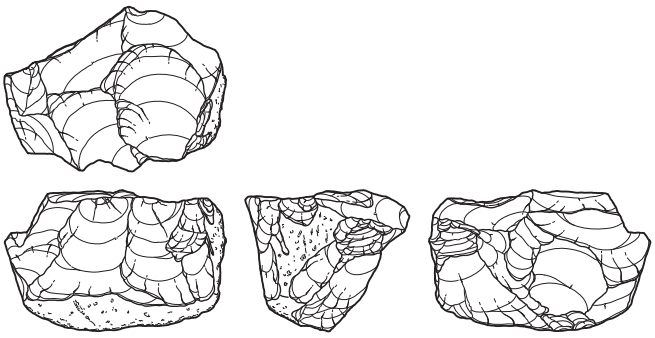


50d　（接合 37）
石器ブロック４
剥片　3402
ホルンフェルス

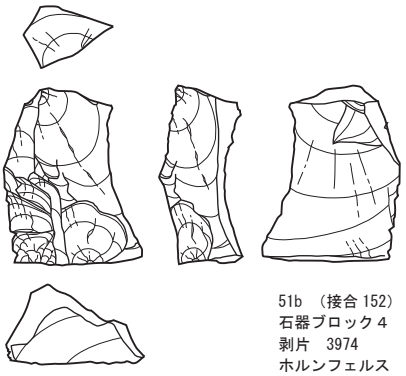
第60図　第VI文化層　中央尾根 出土石器実測図（４）



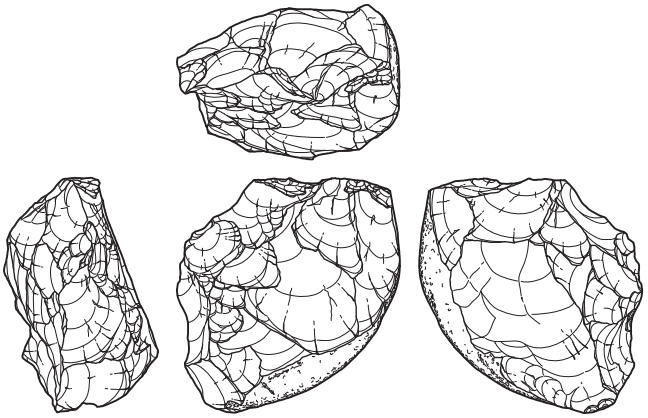
51　（接合 152）
石器ブロック４
接合資料
ホルンフェルス



51a　（接合 152）
石器ブロック４
石核　4015
ホルンフェルス



51b　（接合 152）
石器ブロック４
剥片　3974
ホルンフェルス



52
石器ブロック４
石核　3407
ホルンフェルス

第61図　第Ⅵ文化層　中央尾根 出土石器実測図（５）

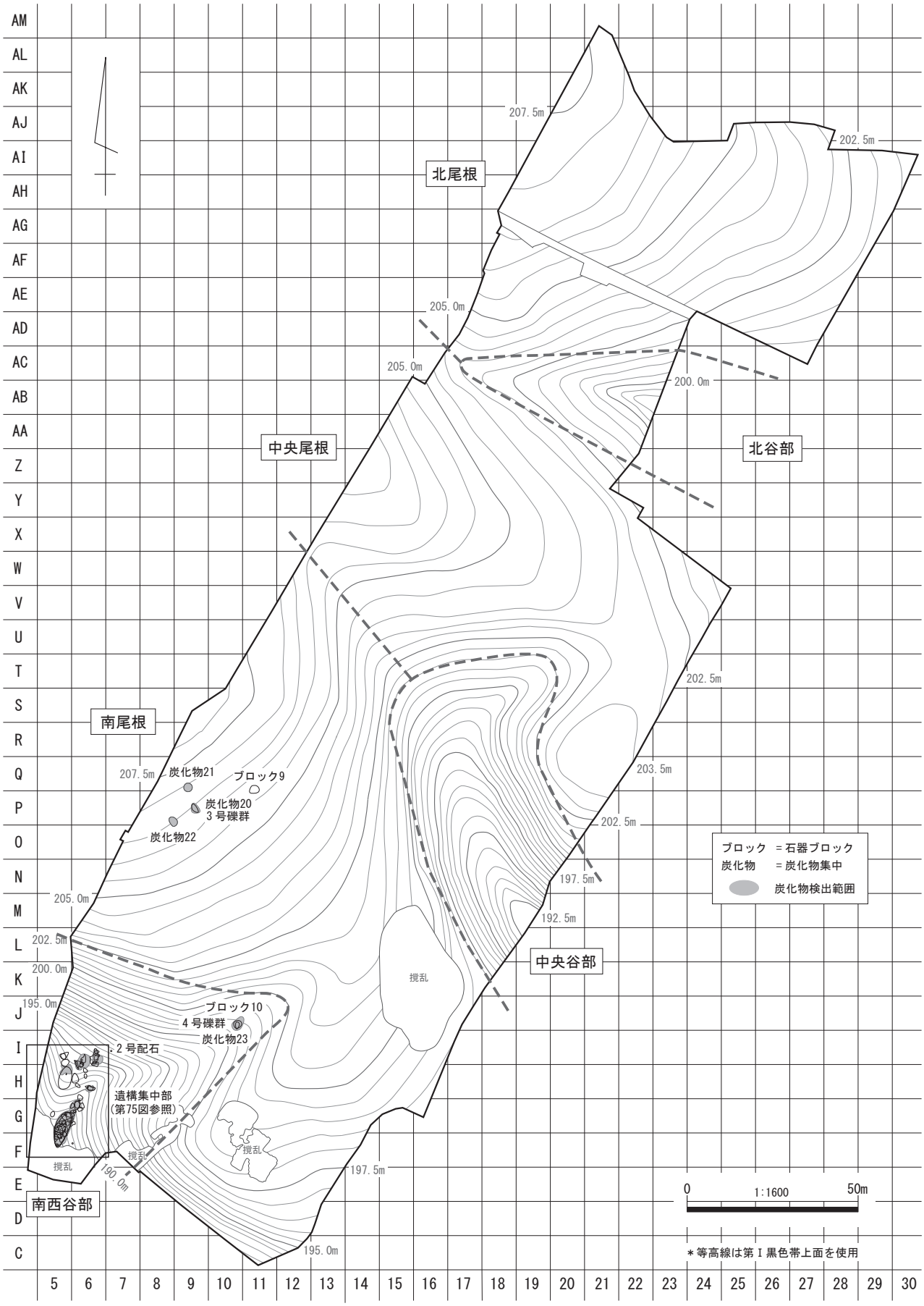
第８節　第Ⅶ文化層

第Ⅰ黒色帯上部～第Ⅰスコリア層で確認された遺構、遺物の一群を第Ⅶ文化層とした。遺構は、石器ブロックが９ヶ所、礫群が45基、配石が26基、炭化物集中が13ヶ所検出された。遺物は、石器が1,795点、礫が1,520点出土した。また、大量の炭化物が出土した。

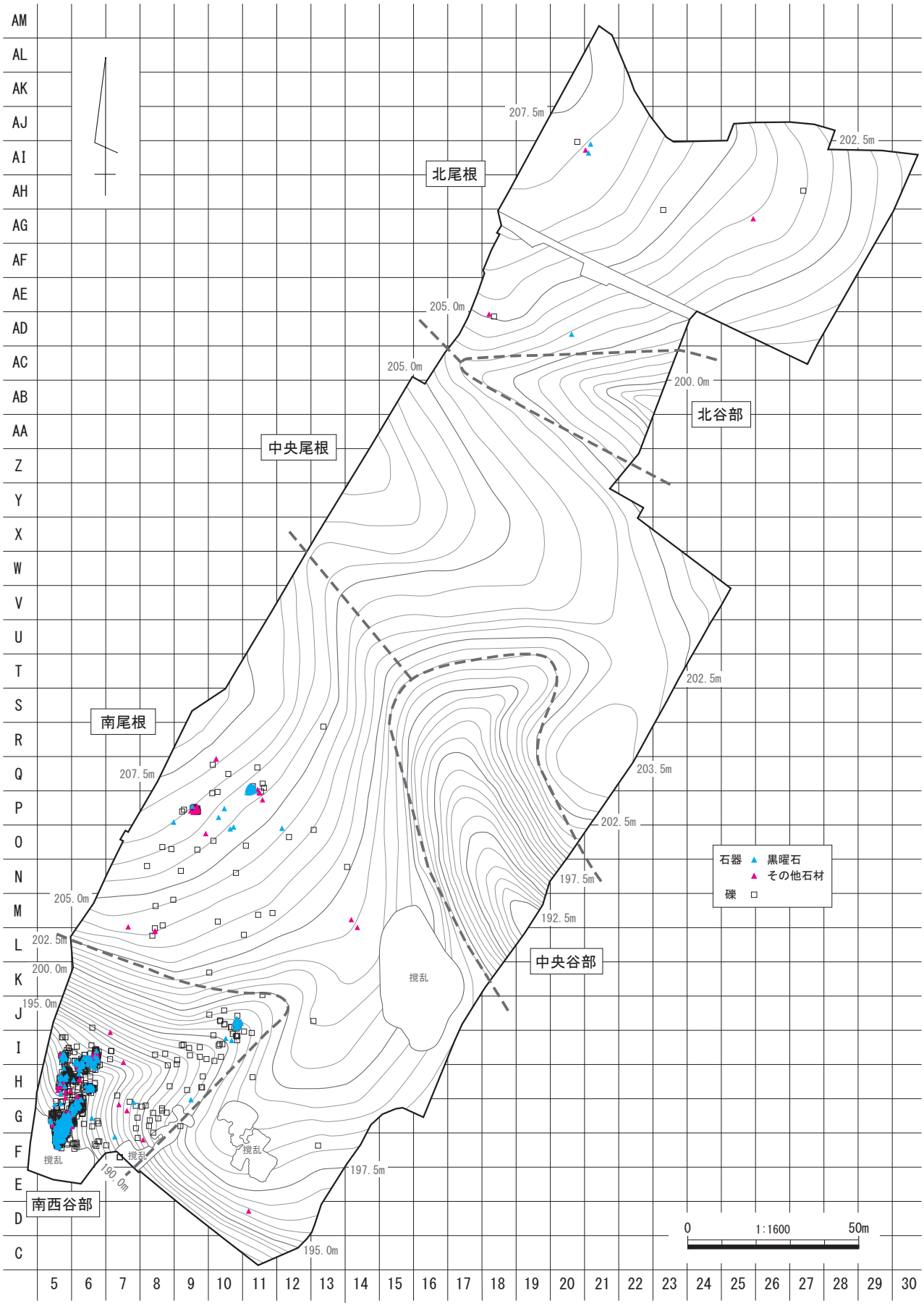
なお、北尾根の第Ⅰ黒色帯～第Ⅰスコリア層から出土した遺物については、全て本節で報告を行った。また、南西谷部の谷底からは、第Ⅰ黒色帯下部～第Ⅰスコリア層下部で、検出層位が明確に異なる石器ブロック、礫群、配石などが確認された。しかし、平面上重複して検出されており、両者から出土した石器の接合関係も複数認められたため、明確な分離は困難であった。そのため、文化層が異なる可能性は認識しながら、本節でまとめて報告を行った。

第19表　第Ⅶ文化層 石器組成表

		ナイフ形石器	角錐状石器	ラウンド・スクレイパー	エンド・スクレイパー	サイド・スクレイパー	ノッチド・スクレイパー	楔形石器	石刃	微細な剥離痕を有する剥片	石核	剥片類	敲石	台石	計
黒曜石	天城柏峠群	7		4	9	1	2	16		12	6	257			314
	箱根畑宿群	3		1	4	3		3		3		119			136
	諏訪星ヶ台群	1		2						1		6			10
	蓼科冷山群	2		1	1	1						11			16
	和田鷹山群									2		3			5
	和田土屋橋北群											1			1
	和田土屋橋西群			1	2			1		3		13			20
	和田土屋橋南群											2			2
	和田高松沢群											2			2
	未分析等	1			2			1		3		1091			1098
ホルンフェルス		11	1		2	9	5		20	4	1	91			144
ガラス質黒色安山岩		2			3	1				2	1	28			37
チャート												1			1
チャート（赤色）						1									1
珪質頁岩									1			2			3
赤玉石（碧玉）												2			2
輝石安山岩														1	1
玄武岩													2		2
計		27	1	9	23	16	7	21	21	30	8	1629	2	1	1795



第62図　第Ⅶ文化層　遺構配置図



第63図　第Ⅶ文化層　遺物分布図

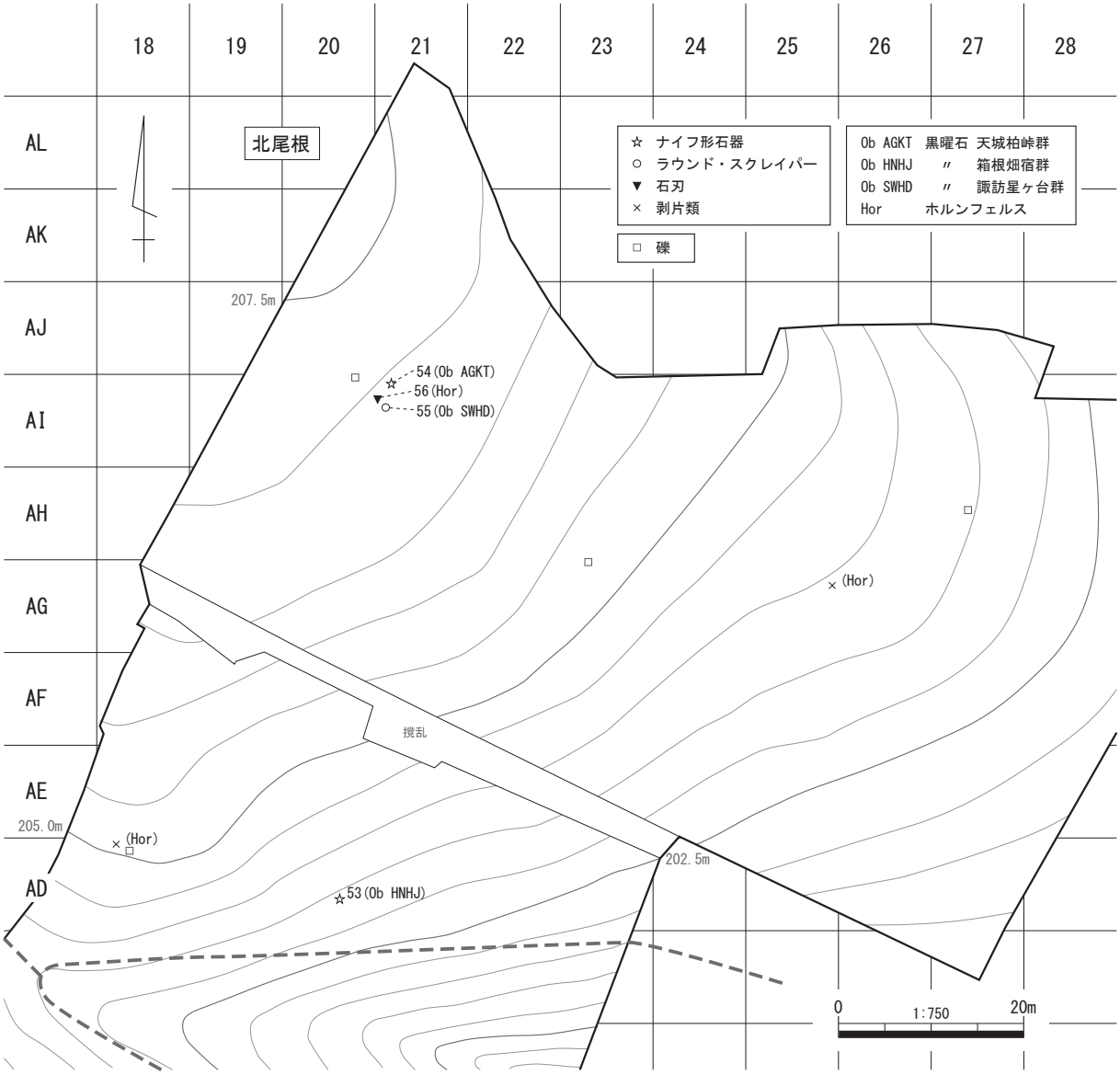
１　北尾根

石器が６点、礫が４点出土したのみであり、遺構は検出されなかった。

（１）遺物

石器群の内訳は、ナイフ形石器２点、ラウンド・スクレイパー１点、石刃１点、剥片類が２点である。いずれも単品の資料であった。石材は、黒曜石３点（天城柏峠群１点、箱根畑宿群１点、諏訪星ヶ台１点）、ホルンフェルス３点である。

遺物は尾根沿いに散発的に出土し、幾つかの資料が北谷部への傾斜面にて出土している。北谷部へは北から南へ傾斜するため、尾根上からの流れ込みか。



第64図　第Ⅶ文化層　北尾根 遺物分布図

ナイフ形石器（第65図53・54　写真図版４）

53は、横長剥片を横位に用いている。左側縁と、右側縁の基部にブランティングを施している。長さ4.5cm程度のやや大型の資料である。石材は黒曜石（箱根畑宿群）である。

54は、縦長剥片を素材としており、末端側を先端としている。両側縁にブランティングが確認できるが、刃部と基部を折損しているため、全体形状は不明である。石材は黒曜石（天城柏峠群）である。

ラウンド・スクレイパー（第65図55　写真図版４）

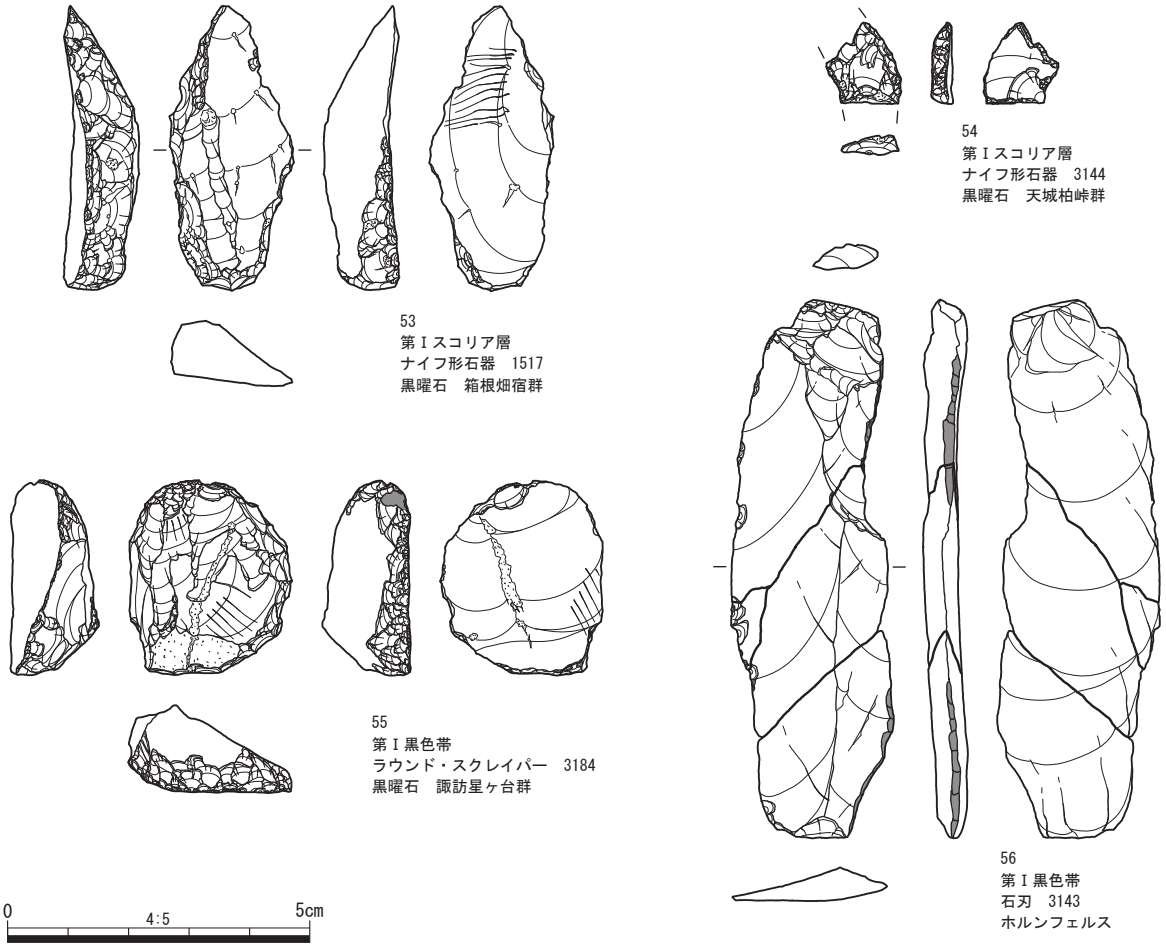
55は、素材剥片の周縁に加工を施して刃部としている。左側縁の一部には、未加工の縁辺が残されている。石材は黒曜石（諏訪星ヶ台群）である。

石刃（第65図56　写真図版４）

56は大型の石刃である。背面には、同一方向の剥離を繰り返しているのが見て取れる。打面に細かな調整は施されていない。末端部では、主要剥離面が背面側まで入り込んでしまっている。左側縁に微細な剥離痕が確認できる。石材はホルンフェルスである。

第20表　第Ⅶ文化層 北尾根 石器組成表

		ナイフ形石器	ラウンド・スクレイパー	石刃	剥片類	計
黒曜石	天城柏峠群	1				1
	箱根畑宿群	1				1
	諏訪星ヶ台群		1			1
ホルンフェルス				1	2	3
計		2	1	1	2	6



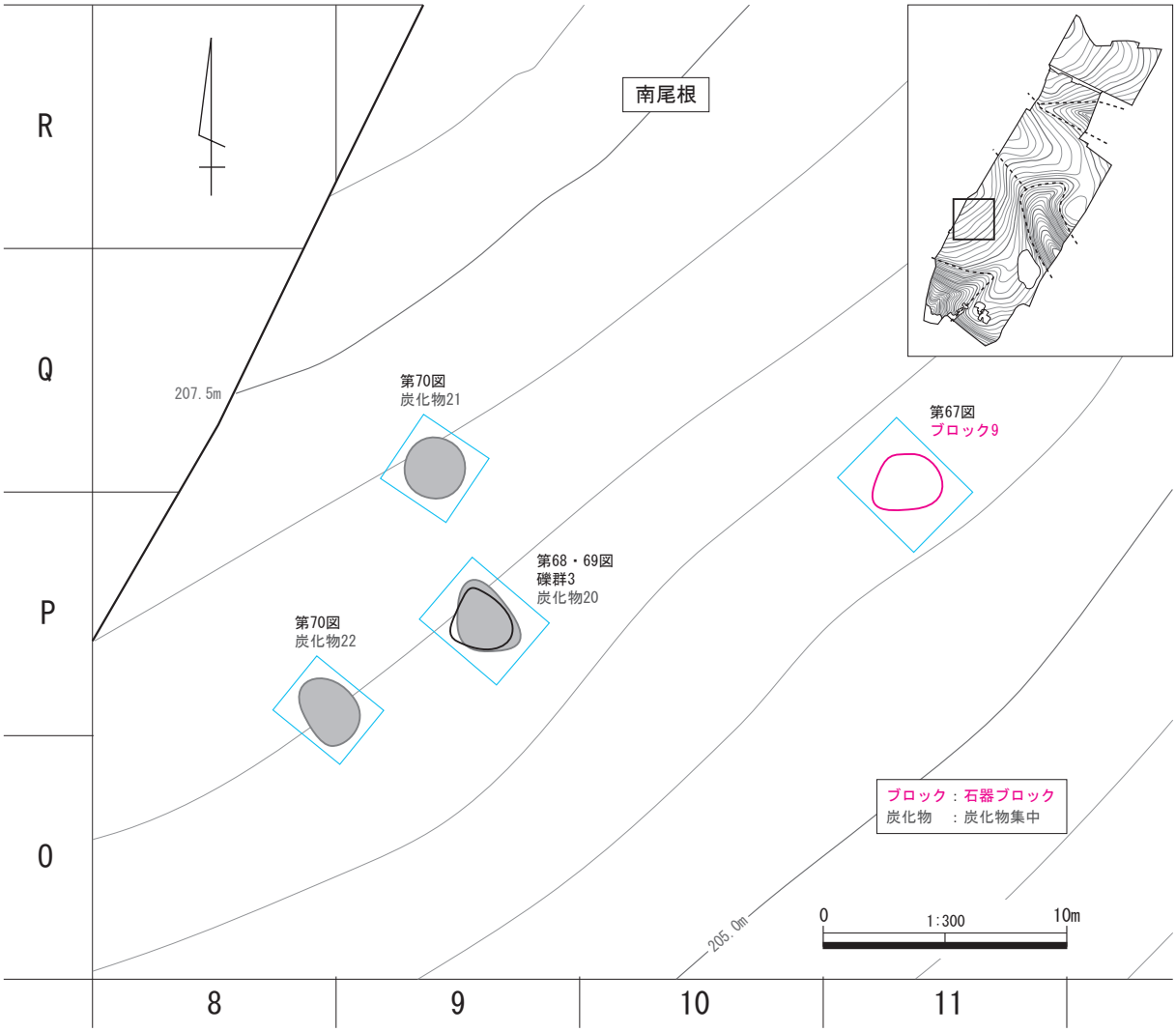
第65図　第Ⅶ文化層　北尾根 出土石器実測図

２　南尾根

遺構は、北西部の斜面から、石器ブロックが１ヶ所、礫群が１基、炭化物集中が３ヶ所検出された。遺物は、石器が83点、礫が64点出土した。

第21表　第Ⅶ文化層 南尾根 石器組成表

		ナイフ形石器	エンド・スクレイパー	ノッチド・スクレイパー	石刃	微細な剥離痕を有する剥片	石核	剥片類	敲石	計
黒曜石	天城柏峠群	4		1		2	1	25		33
	蓼科冷山群		1							1
	分析不可等					1		9		10
ホルンフェルス					1			33		34
ガラス質黒色安山岩		1	1							2
チャート								1		1
珪質頁岩								1		1
玄武岩									1	1
計		5	2	1	1	3	1	69	1	83



第66図　第Ⅶ文化層　南尾根 遺構配置図

（１）遺構

ア　石器ブロック

石器ブロック９（第67図）

Ｐ～Ｑ－11グリッドから検出された。北東～南西方向2.8m、北西～南東方向２ｍの範囲に、37点の石器が集中して分布している。第Ⅰ黒色帯～休場層直下黒色帯にかけて、上下に大きな幅を持って分布している。付近は、北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。

石器群は、ナイフ形石器２点、微細な剥離痕を有する剥片３点、石核１点、剥片類31点である。石材は黒曜石37点（天城柏峠群27点、分析不可等10点）である。分析不可等の黒曜石も、肉眼鑑定から全て天城柏峠群であることが推測される。黒曜石の砕片が大半であり、なんらかの作業を行った際のブランクだと推測される。

第22表　第Ⅶ文化層 石器ブロック９ 石器組成表

		ナイフ形石器	微細な剥離痕を有する剥片	石核	剥片類	計
黒曜石	天城柏峠群	2	2	1	22	27
	分析不可等		1		9	10
計		2	3	1	31	37

イ　礫群

３号礫群（第68・69図）

Ｐ－９グリッドから検出された。北西～南東方向2.5m、北東～南西方向1.2mの範囲に、26点の礫が分布している。主な出土層位は第Ⅰスコリア層の下部である。付近は、北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。炭化物集中20と重複して検出されたが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認することができなかった。

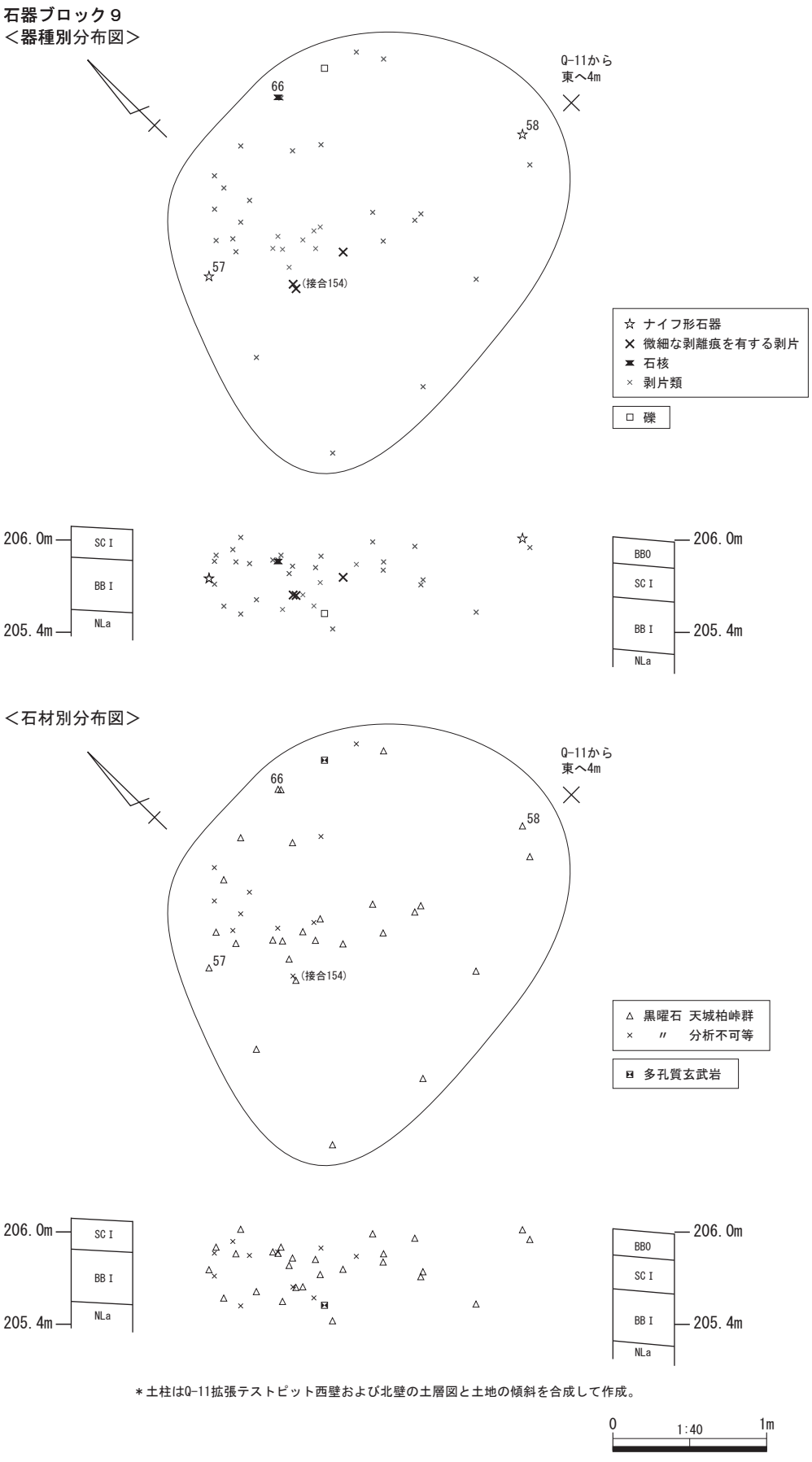
石材は輝石安山岩22点、玄武岩２点、多孔質玄武岩２点である。この内16点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は16点となった。

また、礫群と重複して27点の石器が出土した。石材は、黒曜石（天城柏峠群）１点、ホルンフェルス25点、珪質頁岩１点である。ホルンフェルスの石刃１点を除き、全て剥片類であった。出土した石器に被熱の痕跡は確認できなかった。

第23表　第Ⅶ文化層 南尾根 礫群一覧表

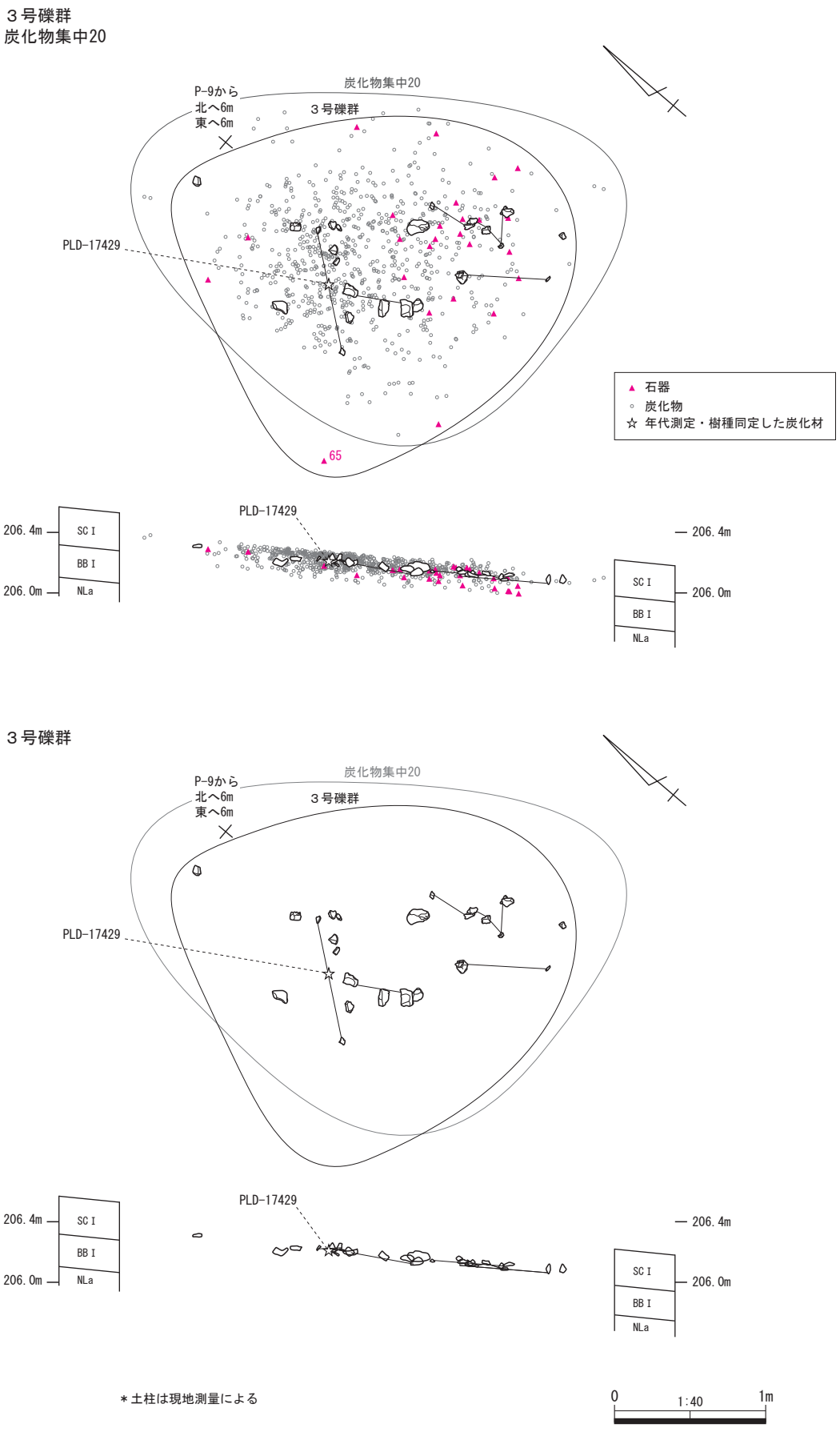
礫群番号	グリッド	検出層位	構成礫数	接合礫数	接合後個体数	石材				重複する					赤化率%	赤化状態		
										遺構番号			遺物					
						輝石安山岩	多孔質安山岩	玄武岩	多孔質玄武岩	石器ブロック	配石	炭化物集中	石器（点数）	炭化物		A	B	C
３号	P-9	SCⅠ下部	26	16	16	22		2	2			20	27		100	2	21	3

赤化状態　A－赤化　完形　　B－赤化　破損礫　割面も赤化　　C－赤化　破損礫　割面は非赤化



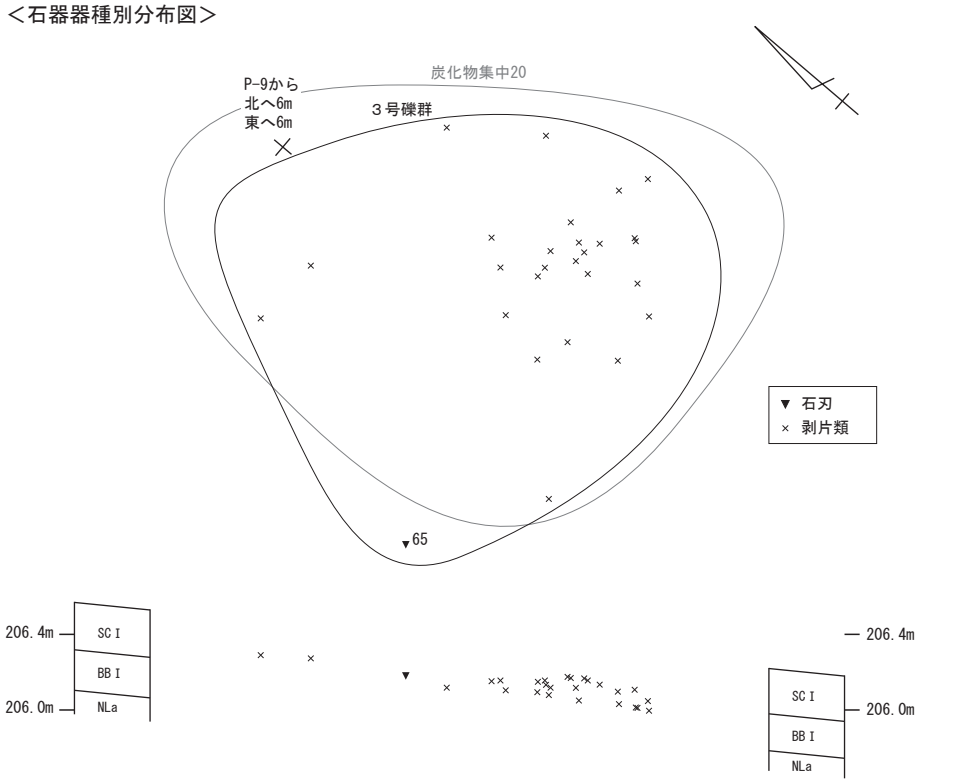
＊土柱はQ-11拡張テストピット西壁および北壁の土層図と土地の傾斜を合成して作成。

第67図　第Ⅶ文化層　南尾根 石器ブロック９ 遺構図

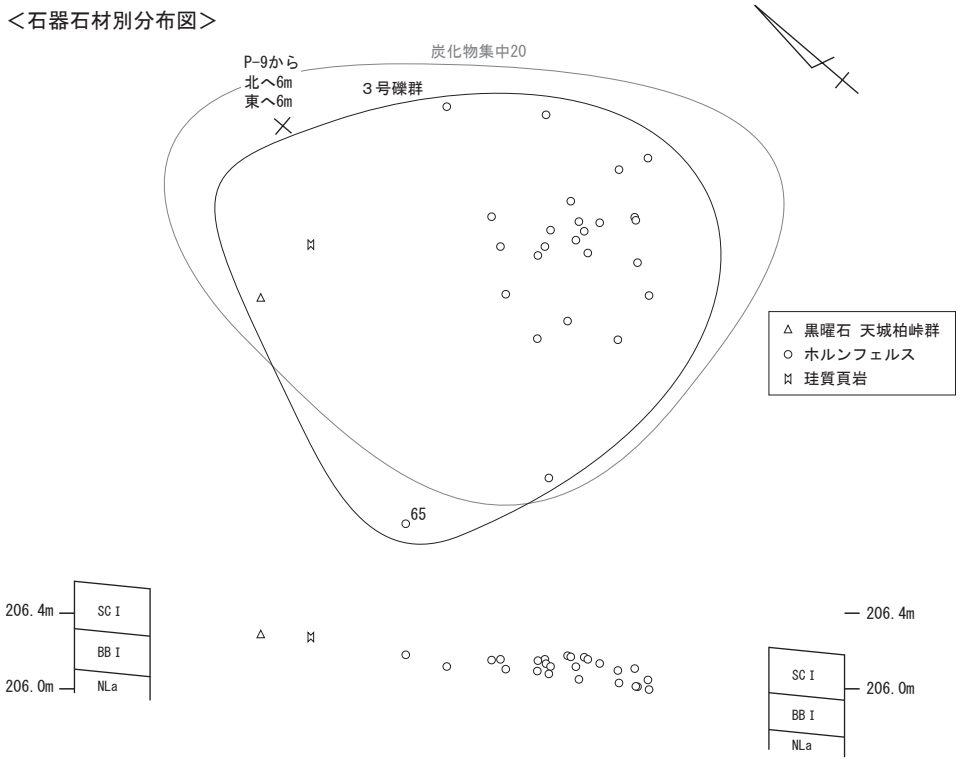


第68図　第Ⅶ文化層　南尾根　３号礫群、炭化物集中20 遺構図

３号礫群
＜石器器種別分布図＞



＜石器石材別分布図＞



＊土柱は現地測量による

0　1:40　1m

第69図　第Ⅶ文化層　南尾根 ３号礫群 石器分布図

ウ　炭化物集中

炭化物集中20（第68図）

Ｐ－９グリッドから検出された。直径３ｍの範囲に、730点を超える炭化物が、密集して分布している。第Ⅰ黒色帯～第Ⅰスコリア層にかけて、上下に多少の幅を持って分布しているが、出土のピークは第Ⅰスコリア層の下部である。付近は、北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。３号礫群と重複して検出された。

出土した炭化物のうち炭化材１点について、放射性炭素年代測定（AMS法）を行った。その結果、23,670±70yrBP（PLD－17429）の^{14}C年代値が確認された（詳細は第２分冊附編を参照）。

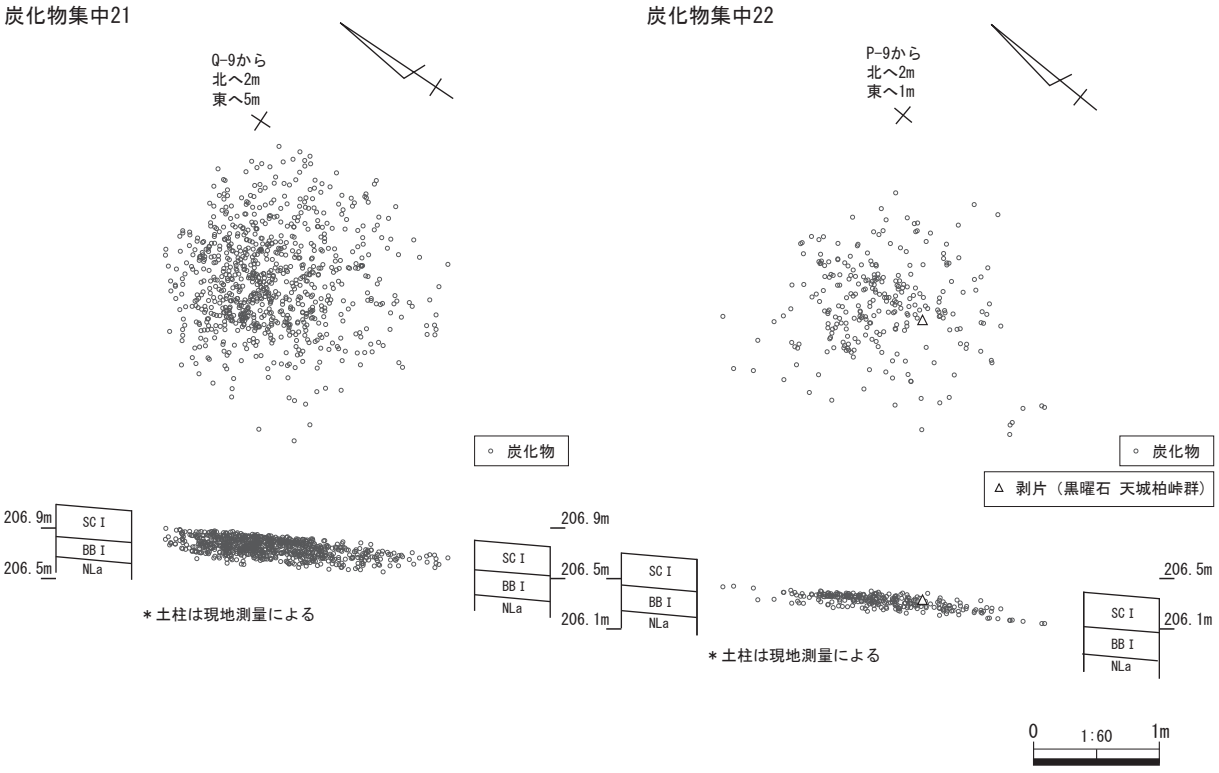
炭化物集中21（第70図）

Ｐ～Ｑ－９グリッドから検出された。直径2.3mの範囲に、830点を超える炭化物が、密集して分布している。第Ⅰ黒色帯～第Ⅰスコリア層にかけて、上下に多少の幅を持って分布している。付近は、北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

炭化物集中22（第70図）

Ｏ～Ｐ－８～９グリッドから検出された。直径2.5mの範囲に、270点を超える炭化物が、密集して分布している。上下に多少の幅を持って分布しているが、出土のピークは第Ⅰスコリア層の下部である。付近は、北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

また、炭化物集中と重複して、黒曜石（天城柏峠群）の剥片が１点出土した。



第70図　第Ⅶ文化層　南尾根 炭化物集中21・22 遺構図

（２）遺物

石器群の内訳は、ナイフ形石器が５点、エンド・スクレイパーが２点、ノッチド・スクレイパーが１点、石刃が１点、微細な剥離痕を有する剥片３点、石核が１点、剥片類が69点、敲石が１点である。石材は、黒曜石44点（天城柏峠群33点、蓼科冷山群１点、分析不可等10点）、ホルンフェルス34点、ガラス質黒色安山岩２点、チャート１点、珪質頁岩１点、玄武岩１点である。

ナイフ形石器（第72図57～61　写真図版４）

57は先端部である。素材剥片を縦位に用いており、左側縁に粗い剥離を施して、右側縁を刃部としている。下部を折損しているため、全体形状は不明である。石材は黒曜石（天城柏峠群）である。

58は基部である。側面、裏面のほぼ全てが、加工や折断によって失われているため、素材剥片は不明である。両側縁に、ブランティングを施している。上部は折損しているが、その後、裏面に平坦剥離のような、何らかの二次加工を施している。全体形状は不明だが、他のナイフ形石器と比べて細身であり、厚さを有していることが窺える。石材は黒曜石（天城柏峠群）である。

59は、切出状の刃部を有するナイフ形石器である。横長剥片を横位に用いており、両側縁にブランティングを施して、切出状の刃部を作出している。素材剥片の打点部は、ブランティングによって除去されている。刃部には微細な剥離痕が認められる。石材は黒曜石（天城柏峠群）である。

60は、二側縁加工のナイフ形石器である。素材剥片を斜位に用いており、右側縁と、左側縁の基部側にブランティングを施す。素材剥片の打点部は、ブランティングによって除去されている。刃部には微細な剥離痕が認められる。先端部は欠損している。石材はガラス質黒色安山岩である。

61は、一側縁加工のナイフ形石器である。縦長剥片を縦位に用いており、打点部側を先端に置いている。左側縁の全てにブランティングを施しており、右側縁を刃部としている。先端が折損しているため詳細は不明だが、打点部はブランティングによって除去されていると推測される。基部には、腹面側に平坦剥離を施している。石材は黒曜石（天城柏峠群）である。

エンド・スクレイパー（第72図62・63　写真図版４）

62は小型の資料である。素材剥片の打点部を除去するように加工を施して、刃部としている。右半部を折損している。石材は黒曜石（蓼科冷山群）である。

63は縦長剥片の切断された末端部に再加工を施し、左側縁にかけて刃部を作出している。石材はガラス質黒色安山岩である。

ノッチド・スクレイパー（第72図64　写真図版４）

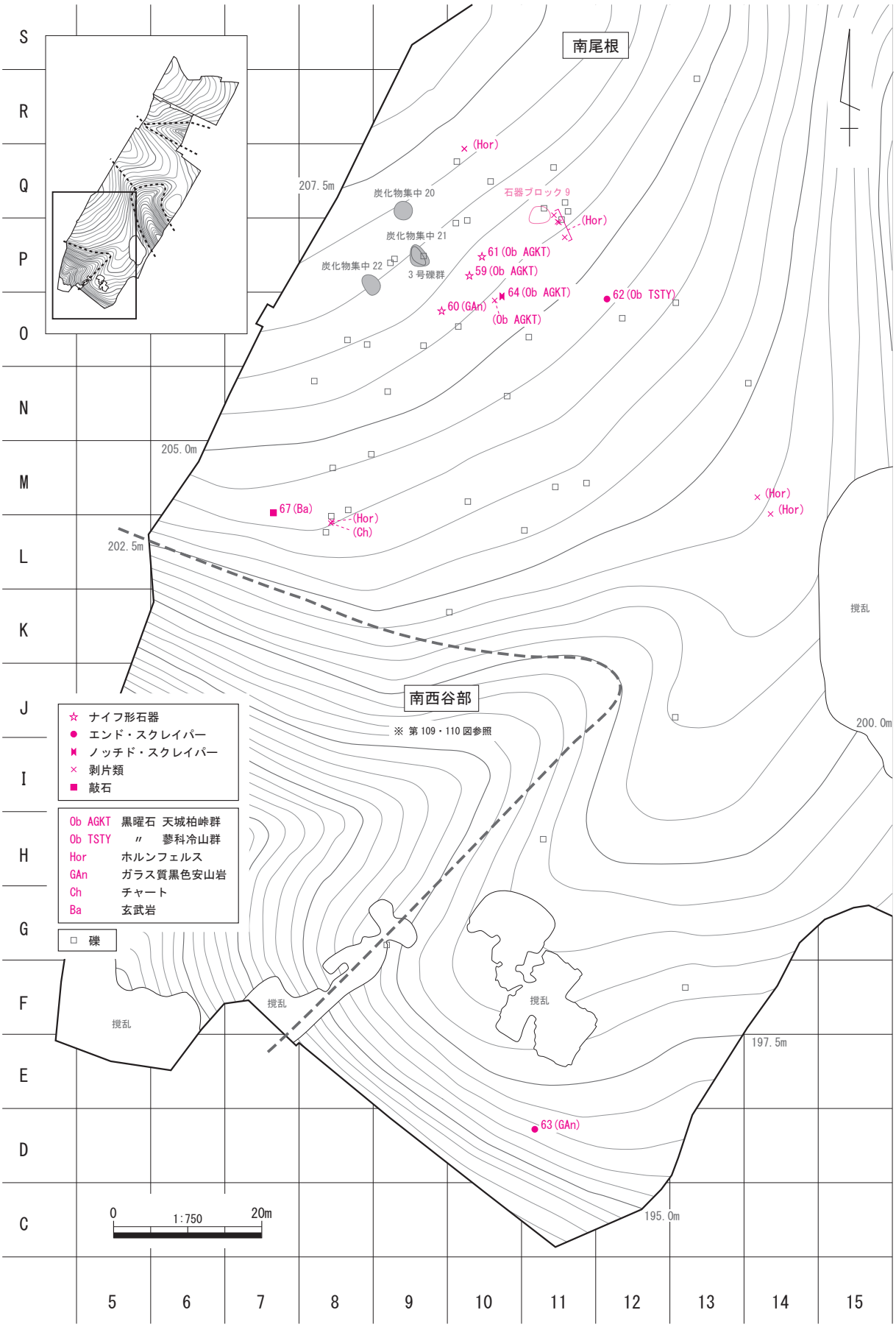
64は縦長剥片を素材としている。素材剥片を縦位に用いており、左側縁に粗い加工を施して、刃部としている。右側縁には、微細な剥離痕が認められる。石材は黒曜石（天城柏峠群）である。

石刃（第72図65　写真図版４）

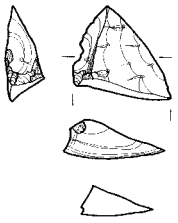
65は大型の石刃である。背面には、同一方向の剥離を繰り返しているのが見て取れる。打面に細かな調整は施されていない。器体は捻じれており、やや軸が歪んでいる。石材はホルンフェルスである。

石核（第72図66　写真図版４）

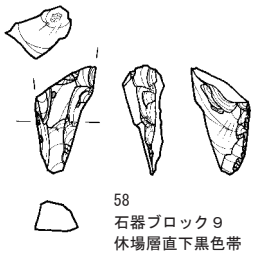
66は、石器ブロック９から出土した小型の石核である。一部が折断されており、全体形状などは不明である。打面調整は行われず、作業面も一枚しか確認できない。剥離された剥片は、幅２cm程の横長剥



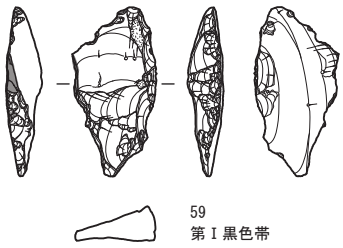
第71図　第Ⅶ文化層　南尾根 遺構外出土 遺物分布図



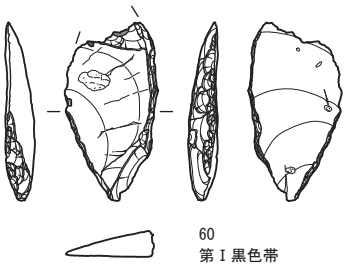
57
石器ブロック９
第Ⅰスコリア層
ナイフ形石器　3779
黒曜石　天城柏峠群



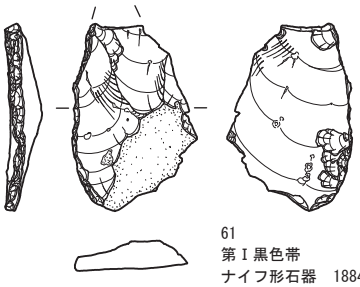
58
石器ブロック９
休場層直下黒色帯
ナイフ形石器　3757
黒曜石　天城柏峠群



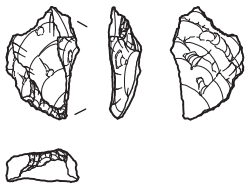
59
第Ⅰ黒色帯
ナイフ形石器　18849
黒曜石　天城柏峠群



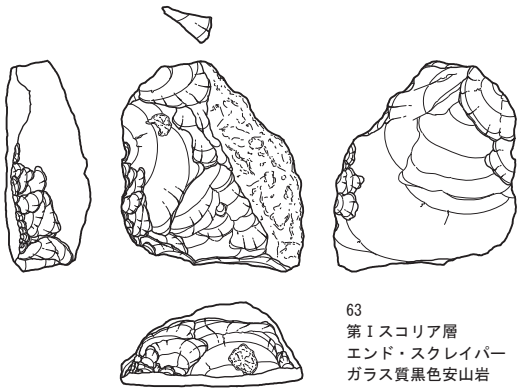
60
第Ⅰ黒色帯
ナイフ形石器　18851
ガラス質黒色安山岩



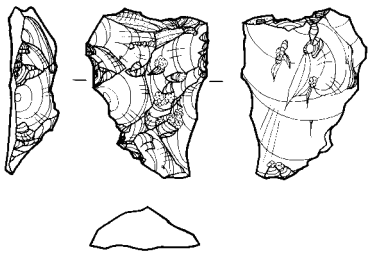
61
第Ⅰ黒色帯
ナイフ形石器　18848
黒曜石　天城柏峠群



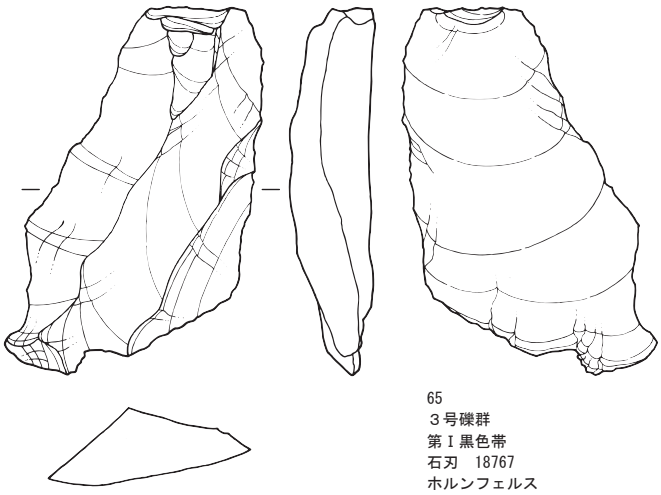
62
第Ⅰスコリア層
エンド・スクレイパー　3915
黒曜石　蓼科冷山群



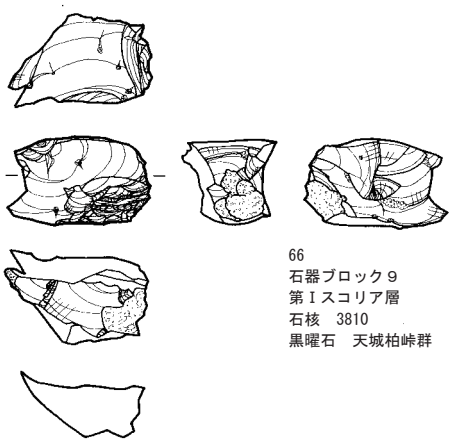
63
第Ⅰスコリア層
エンド・スクレイパー　16956
ガラス質黒色安山岩



64
第Ⅰ黒色帯
ノッチド・スクレイパー　18850
黒曜石　天城柏峠群



65
３号礫群
第Ⅰ黒色帯
石刃　18767
ホルンフェルス



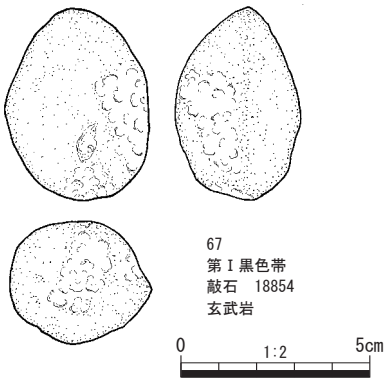
66
石器ブロック９
第Ⅰスコリア層
石核　3810
黒曜石　天城柏峠群

第72図　第Ⅶ文化層　南尾根 出土石器実測図（１）

片である。これは、石器ブロック内から出土している剥片に比べると、若干大きい。石材は黒曜石（天城柏峠群）である。

敲石（第73図67　写真図版４）

67は小型の敲石である。下面と右側面に敲打痕が確認できるが、風化のため明確ではない。右側面は断面形がアーモンド状に突起しているが、これが使用の結果であるかは不明である。赤化などの、明確な被熱の痕跡は確認できなかった。石材は玄武岩である。



第73図　第Ⅶ文化層　南尾根 出土石器実測図（２）

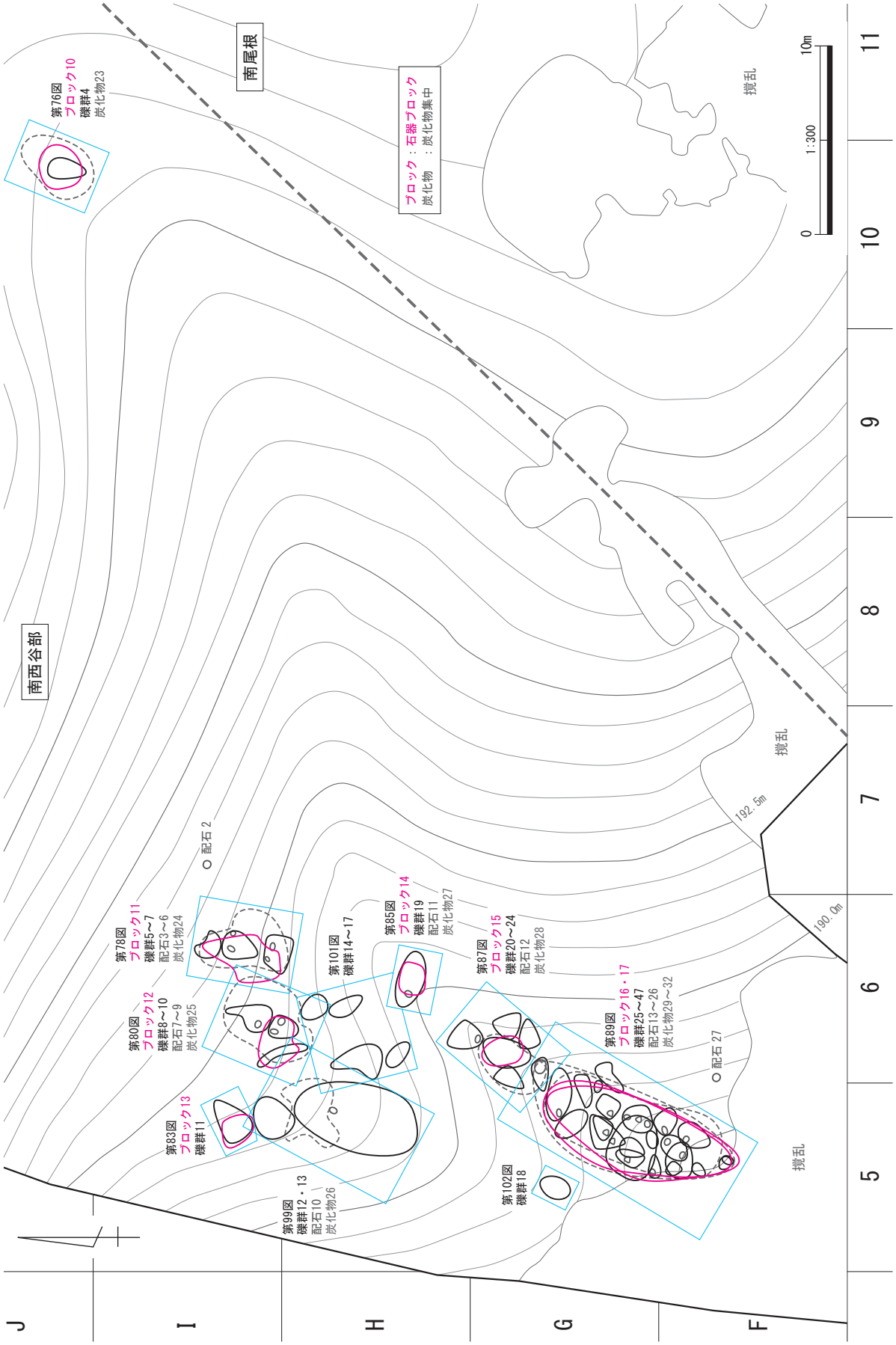
３　南西谷部

先述したとおり、南西谷部では、第Ⅰ黒色帯下部～第Ⅰスコリア層下部で、検出層位が明確に異なる遺構が確認されている。しかし、平面上、重複して検出されている遺構も多く、また両者から出土した石器の接合関係も複数認められたため、明確な分離は困難であった。そのため文化層が異なる可能性は認識しながら、一括して報告を行った。

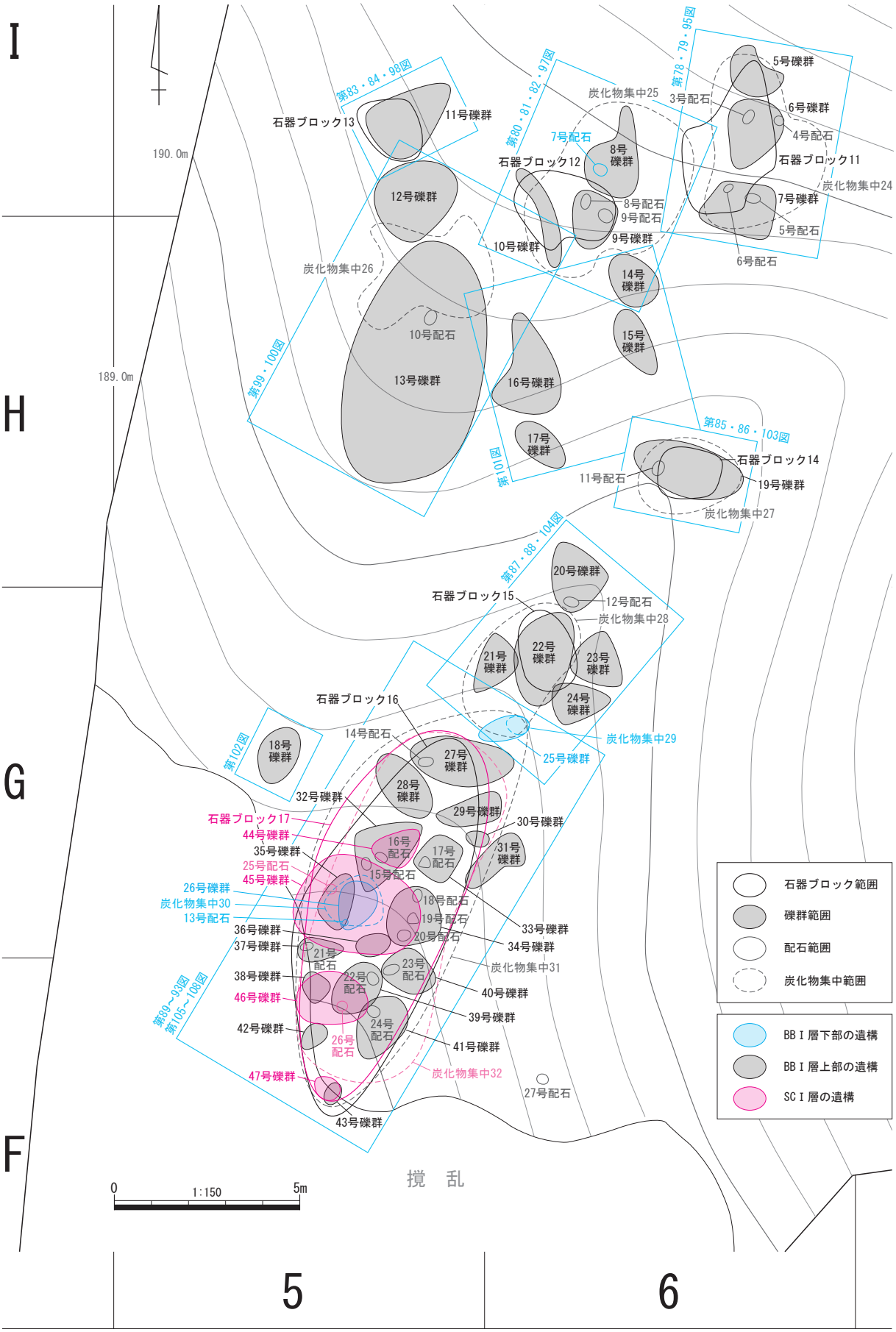
遺構は、石器ブロックが８ヶ所、礫群が44基、配石が26基、炭化物集中が10ヶ所検出された。遺物は、石器が1,706点、礫が1,452点出土した。

第24表　第Ⅶ文化層 南西谷部 石器組成表

		ナイフ形石器	角錐状石器	ラウンド・スクレイパー	エンド・スクレイパー	サイド・スクレイパー	ノッチド・スクレイパー	楔形石器	石刃	微細な剥離痕を有する剥片	石核	剥片類	敲石	台石	計
黒曜石	天城柏峠群	2		4	9	1	1	16		10	5	232			280
	箱根畑宿群	2		1	4	3		3		3		119			135
	諏訪星ヶ台群	1		1						1		6			9
	蓼科冷山群	2		1		1						11			15
	和田鷹山群									2		3			5
	和田土屋橋北群											1			1
	和田土屋橋西群			1	2			1		3		13			20
	和田土屋橋南群											2			2
	和田高松沢群											2			2
	未分析等	1			2			1		2		1082			1088
ホルンフェルス		11	1		2	9	5		18	4	1	56			107
ガラス質黒色安山岩		1			2	1				2	1	28			35
チャート（赤色）						1									1
珪質頁岩									1			1			2
赤玉石（碧玉）												2			2
輝石安山岩														1	1
玄武岩													1		1
計		20	1	8	21	16	6	21	19	27	7	1558	1	1	1706



第74図　第Ⅶ文化層　南西谷部 遺構配置図



第75図　第Ⅶ文化層　南西谷部 遺構配置拡大図

（１）遺構

ア　石器ブロック

石器ブロック10（第76・77図）

Ｊ－10グリッドから検出された。北東～南西方向2.3m、北西～南東方向２ｍの範囲に、45点の石器が集中して分布している。第Ⅰ黒色帯～第Ⅰスコリア層にかけて、上下に多少の幅を持って分布しているが、出土のピークは第Ⅰスコリア層の下部である。付近は、北東から南西に向かう、谷部の下り始めである。また、４号礫群と炭化物集中23が重複して検出された。

石器群は、ナイフ形石器１点、角錐状石器１点、サイド・スクレイパー１点、ノッチド・スクレイパー１点、微細な剥離痕を有する剥片２点、石核１点、剥片類38点である。石材は、黒曜石38点（天城柏峠群８点、箱根畑宿群３点、和田土屋橋西群２点、未分析25点）、ホルンフェルス６点、ガラス質黒色安山岩が１点である。黒曜石は小型の剥片や砕片が大半であった。未分析の砕片も、肉眼鑑定から天城柏峠群であると推測され、大半が同一産地の黒曜石であったと考えられる。これらは両極剥離を行った際のブランクだと推測される。ホルンフェルス、ガラス質黒色安山岩の製品は全て単品の資料であった。

第25表　第Ⅶ文化層 石器ブロック10 石器組成表

		ナイフ形石器	角錐状石器	サイド・スクレイパー	ノッチド・スクレイパー	微細な剥離痕を有する剥片	石核	剥片類	計
黒曜石	天城柏峠群					2	1	5	8
	箱根畑宿群							3	3
	和田土屋橋西群							2	2
	未分析							25	25
ホルンフェルス		1	1		1			3	6
ガラス質黒色安山岩				1					1
計		1	1	1	1	2	1	38	45

石器ブロック11（第78・79図）

Ⅰ－６グリッドから検出された。北東～南西方向４ｍ、北西～南東方向2.4mの範囲に、41点の石器が分布している。第Ⅰ黒色帯～第Ⅰスコリア層にかけて、上下に多少の幅を持って分布しているが、出土のピークは第Ⅰスコリア層の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る、谷部の斜面である。また、石器ブロックと重複して、５～７号礫群、３～６号配石、炭化物集中24が検出された。

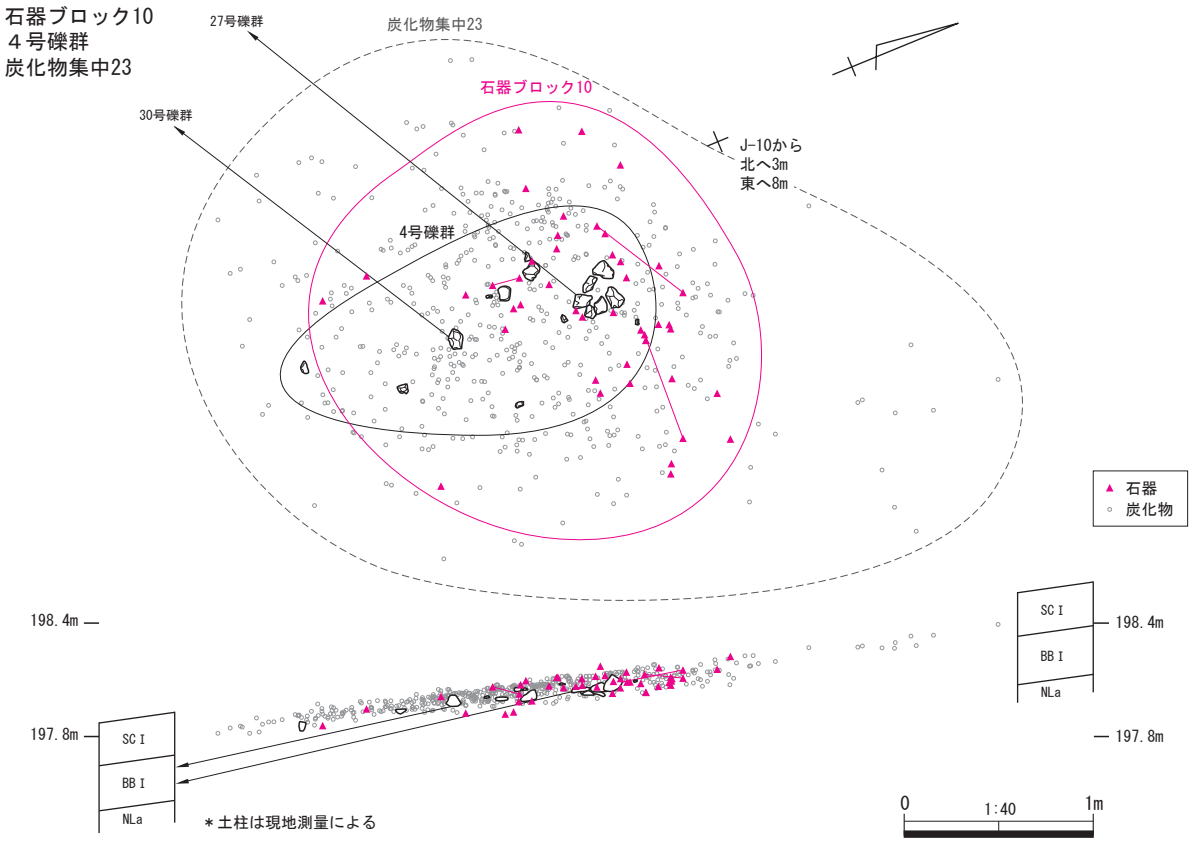
石器群は、ナイフ形石器１点、サイド・スクレイパー１点、楔形石器１点、微細な剥離痕を有する剥片１点、石核１点、剥片類36点である。石材は、黒曜石20点（天城柏峠群７点、未分析13点）、ホルンフェルス６点、ガラス質黒色安山岩15点である。

黒曜石は、小型の剥片や砕片が多く確認された。未分析の砕片も、肉眼鑑定から天城柏峠群であると推測され、全て同一産地の黒曜石であったと考えられる。これらは両極剥離を行った際のブランクだと推測される。ホルンフェルスは、全て単品の資料であった。ガラス質黒色安山岩は、小型の横長剥片を剥離した接合資料が出土している。交互剥離が行われている。

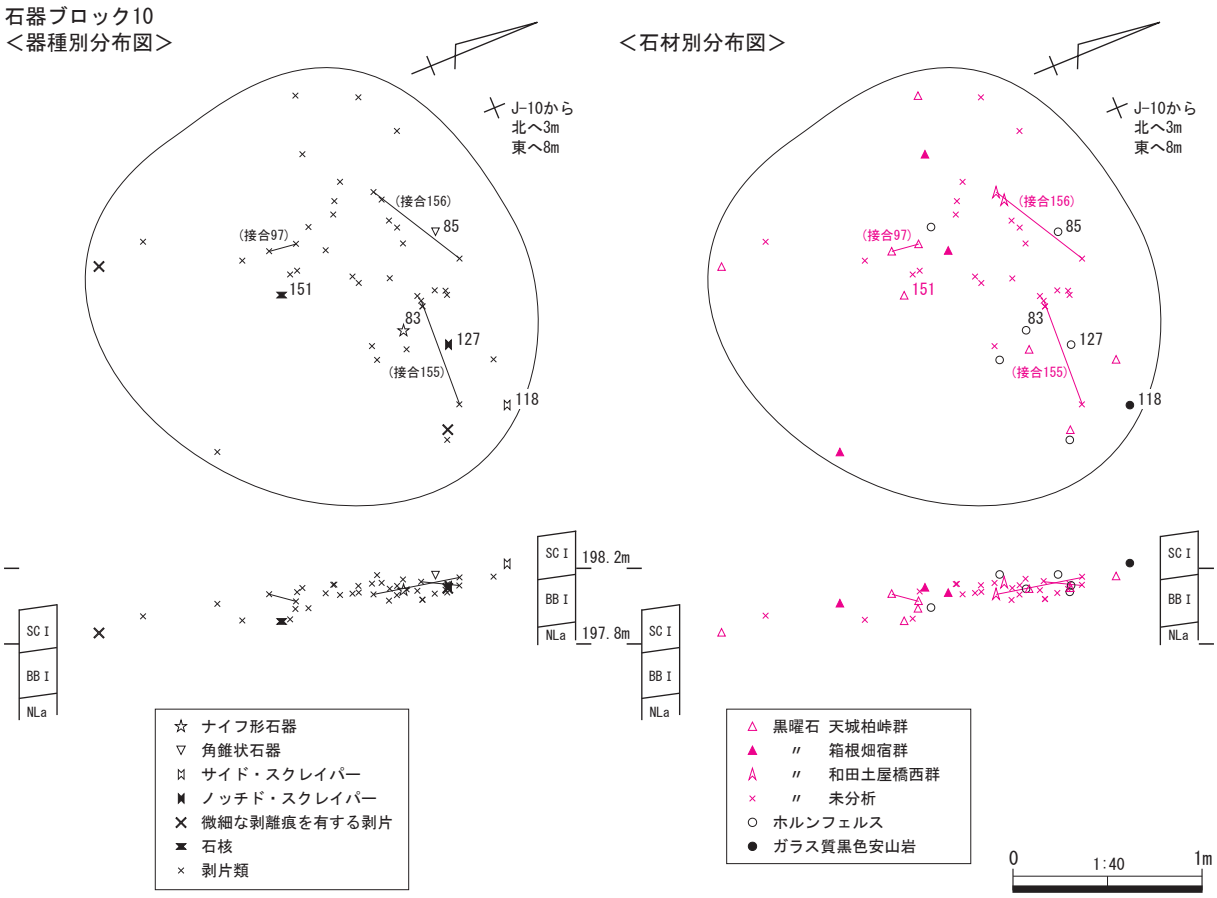
石器ブロック12（第80～82図）

Ｈ～Ⅰ－６グリッドから検出された。北西～南東方向2.4m、北東～南西方向2.1mの範囲に、34点の石器が分布している。第Ⅰ黒色帯～第Ⅰスコリア層にかけて、上下に多少の幅を持って分布しているが、出土のピークは第Ⅰスコリア層の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る、谷部のやや緩やかな斜面である。また、石器ブロックと重複して、８～10号礫群、８・９号配石、炭化物集中25が検出された。

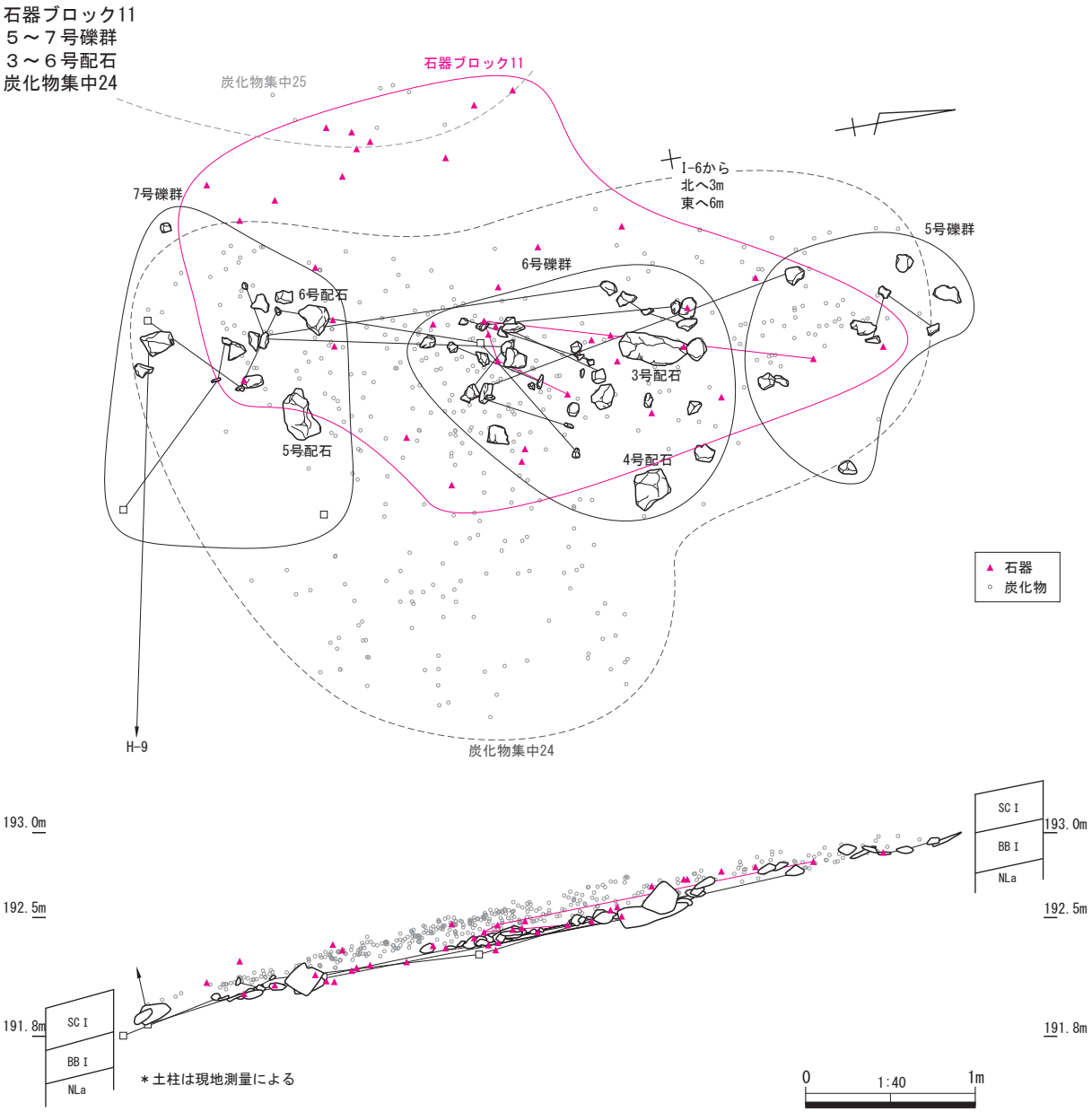
石器群は、エンド・スクレイパー２点、楔形石器２点、石刃１点、微細な剥離痕を有する剥片１点、



第76図　第Ⅶ文化層　南西谷部 石器ブロック10、４号礫群、炭化物集中23 遺構図



第77図　第Ⅶ文化層　南西谷部 石器ブロック10 遺構図

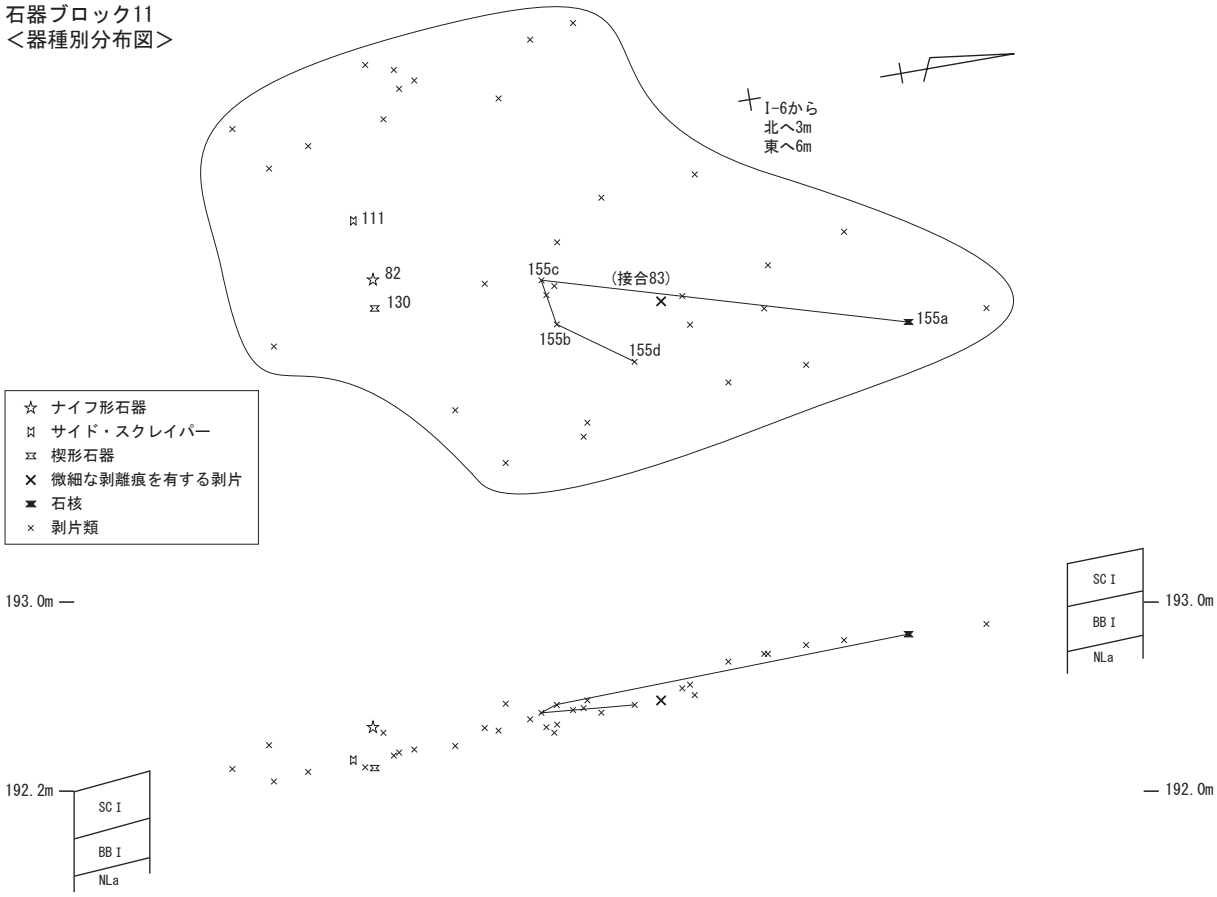


第78図　第Ⅶ文化層　南西谷部 石器ブロック11、５～７号礫群、３～６号配石、炭化物集中24 遺構図

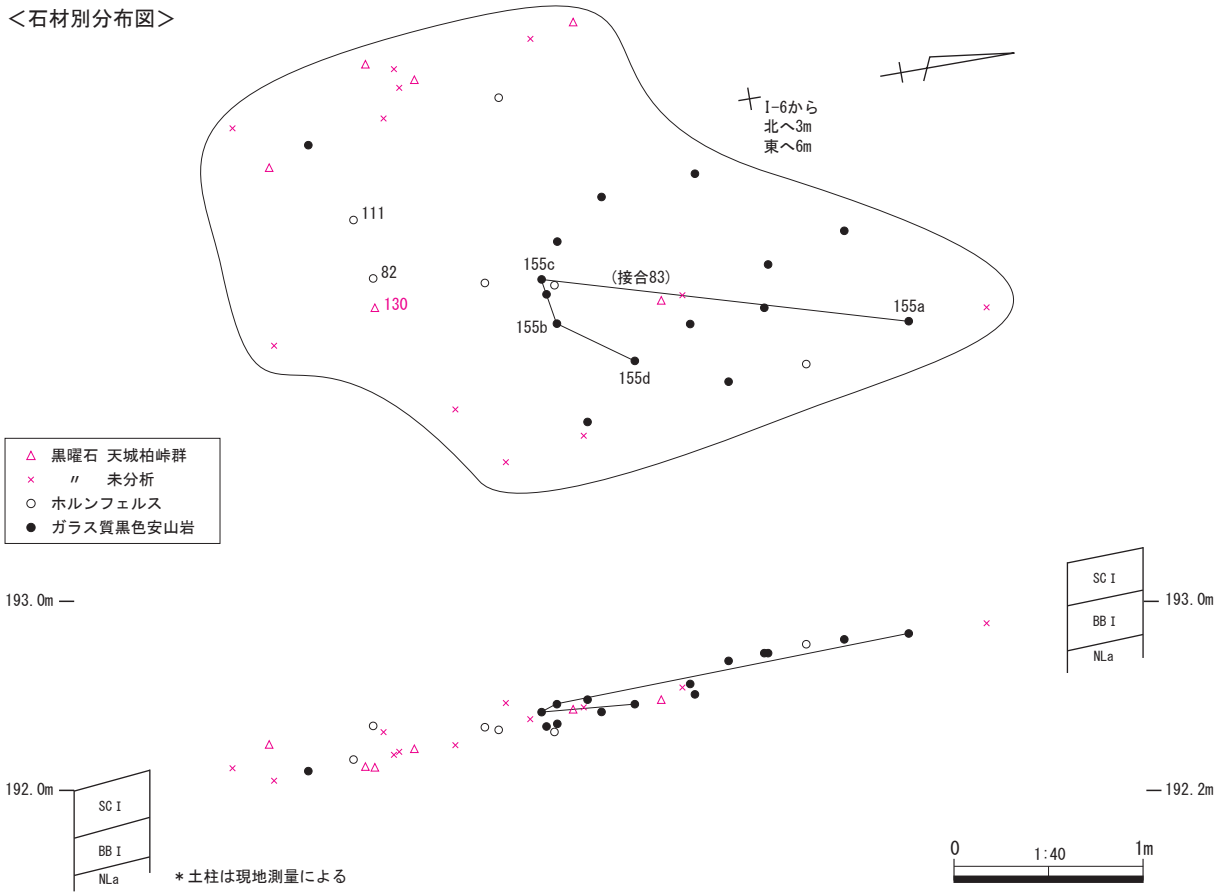
第26表　第Ⅶ文化層 石器ブロック11 石器組成表

		ナイフ形石器	サイド・スクレイパー	楔形石器	微細な剥離痕を有する剥片	石核	剥片類	計
黒曜石	天城柏峠群			1	1		5	7
	未分析						13	13
ホルンフェルス		1	1				4	6
ガラス質黒色安山岩						1	14	15
計		1	1	1	1	1	36	41

石器ブロック11
＜器種別分布図＞

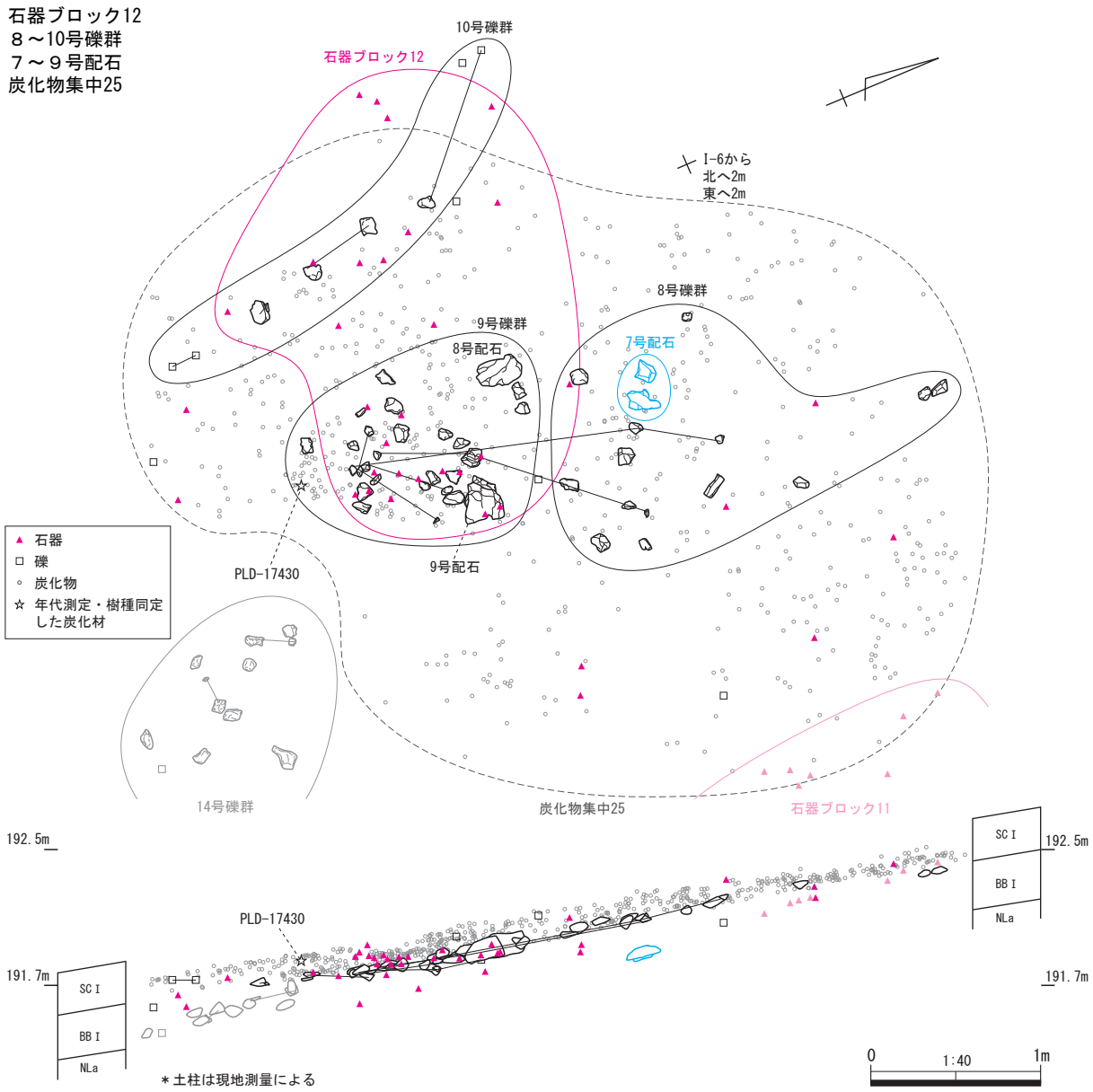


＜石材別分布図＞



＊土柱は現地測量による

第79図　第Ⅶ文化層　南西谷部 石器ブロック11 遺構図



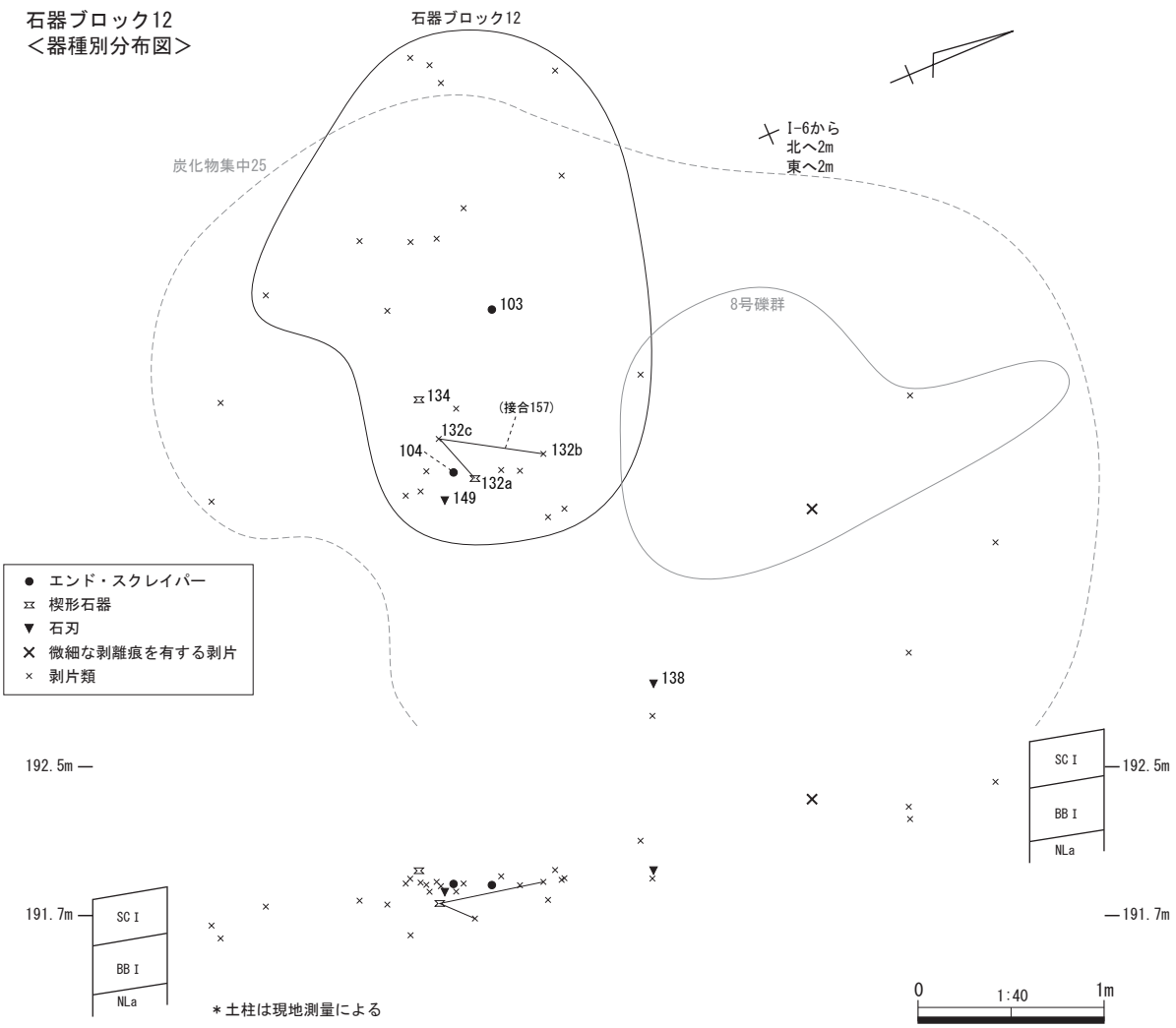
第80図　第Ⅶ文化層　南西谷部 石器ブロック12、８～10号礫群、７～９号配石、炭化物集中25 遺構図

剥片類28点である。石材は、黒曜石28点（天城柏峠群13点、箱根畑宿群３点、推定不可１点、未分析11点）、ホルンフェルス１点、ガラス質黒色安山岩５点である。

黒曜石は、小型の剥片や砕片が多く確認された。未分析等の資料も肉眼鑑定から天城柏峠群であると推測され、大半が同一産地の黒曜石であったと考えられる。これらは両極剥離を行った際のブランクだと推測され、天城柏峠群の接合資料も確認されている。ホルンフェルス、ガラス質黒色安山岩製の製品は、全て単品の資料であった。

石器ブロック13（第83・84図）

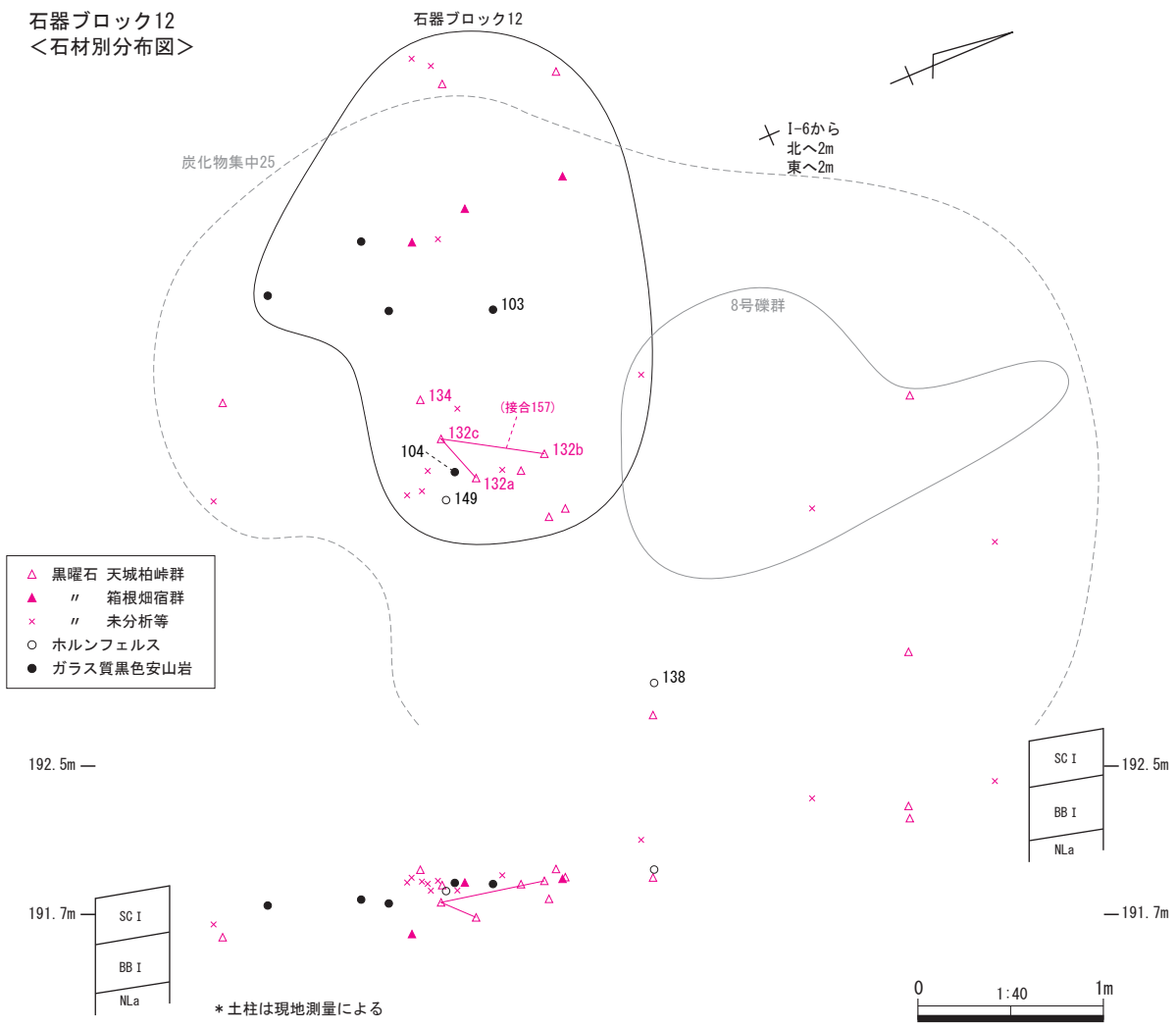
Ⅰ－５グリッドから検出された。北西～南東方向1.9m、北東～南西方向1.3mの範囲に、31点の石器が密集して分布している。上下に多少の幅を持って分布しているが、出土のピークは第Ⅰスコリア層の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る、谷部のやや緩やかな斜面である。石器ブロックと重複



第81図　第Ⅶ文化層　南西谷部 石器ブロック12 遺構図（１）

第27表　第Ⅶ文化層 石器ブロック12 石器組成表

		エンド・スクレイパー	楔形石器	石刃	微細な剥離痕を有する剥片	剥片類	計
黒曜石	天城柏峠群		2			11	13
	箱根畑宿群					3	3
	未分析等				1	11	12
ホルンフェルス				1			1
ガラス質黒色安山岩		2				3	5
計		2	2	1	1	28	34



第82図　第Ⅶ文化層　南西谷部 石器ブロック12 遺構図（２）

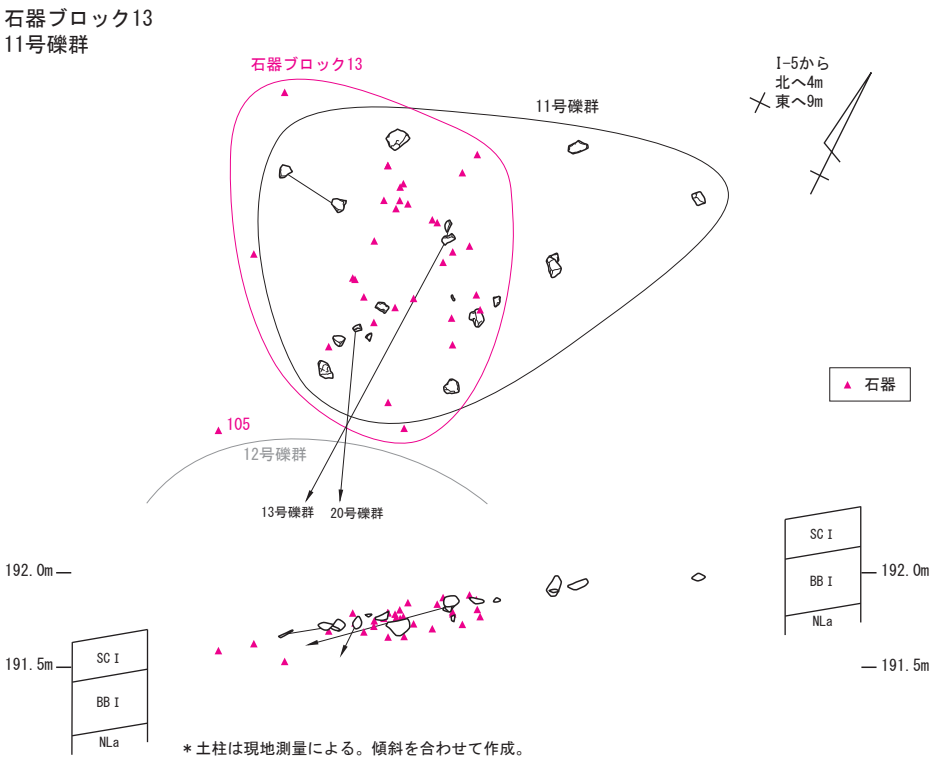
して、11号礫群が検出された。

石器群は、エンド・スクレイパー１点、楔形石器２点、石刃１点、微細な剥離痕を有する剥片１点、剥片類26点である。石材は、黒曜石29点（天城柏峠群９点、諏訪星ヶ台群１点、蓼科冷山群２点、推定不可１点、未分析16点）、ホルンフェルス２点である。

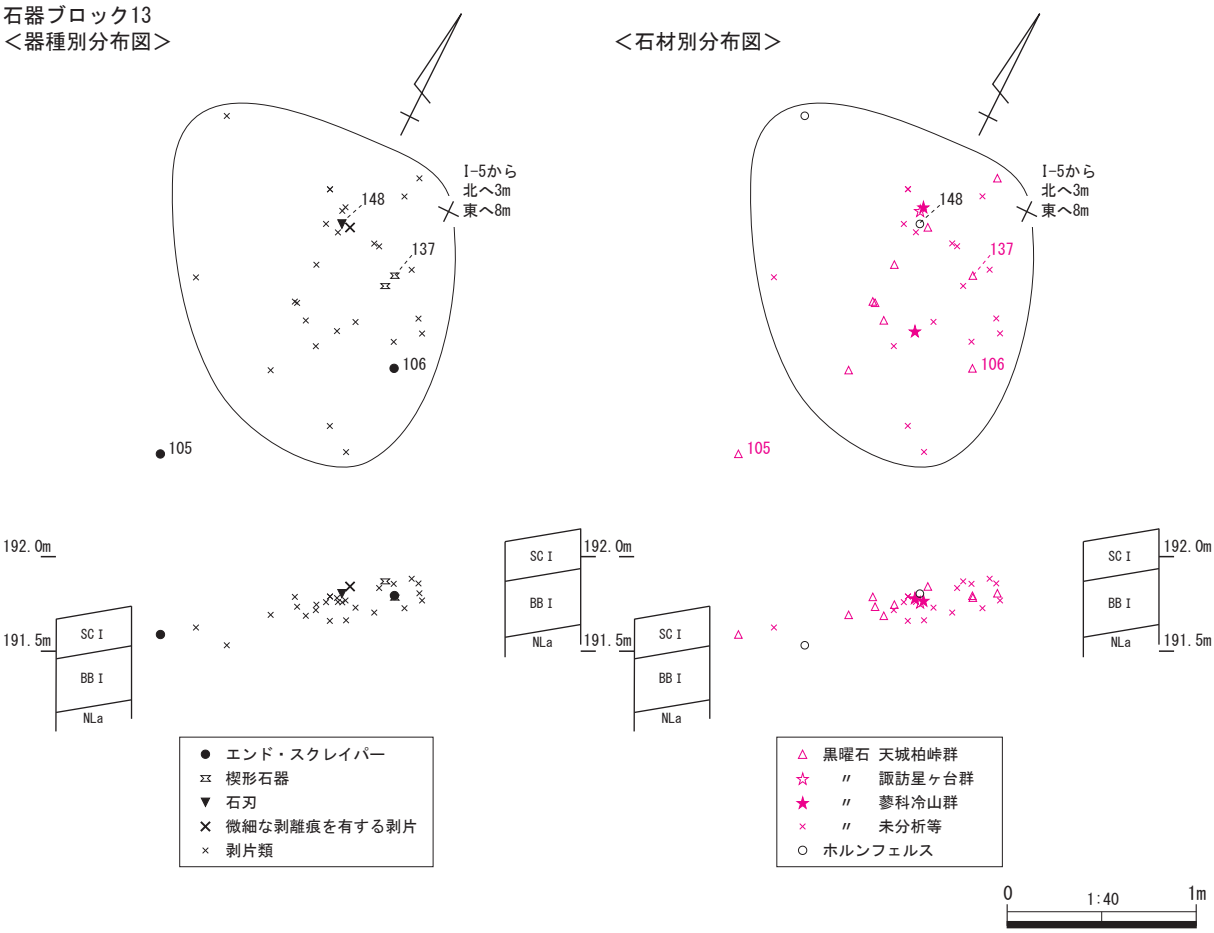
黒曜石は、小型の剥片や砕片が多く確認された。未分析等の資料も肉眼鑑定から天城柏峠群であると推測され、大半が同一産地の黒曜石であったと考えられる。これらは両極剥離を行った際のブランクだと推測され、実際に、天城柏峠群であると推測される楔形石器が２点、エンド・スクレイパーも１点出土している。ホルンフェルス製の石刃は単品の資料であった。

第28表　第Ⅶ文化層 石器ブロック13 石器組成表

		エンド・スクレイパー	楔形石器	石刃	微細な剥離痕を有する剥片	剥片類	計
黒曜石	天城柏峠群	1	1		1	6	9
	諏訪星ヶ台群					1	1
	蓼科冷山群					2	2
	未分析等		1			16	17
ホルンフェルス				1		1	2
計		1	2	1	1	26	31



第83図　第Ⅶ文化層　南西谷部 石器ブロック13、11号礫群 遺構図



第84図　第Ⅶ文化層　南西谷部 石器ブロック13 遺構図

石器ブロック14（第85・86図）

Ｈ－６グリッドから検出された。北東～南西方向1.6m、北西～南東方向1.4mの範囲に、133点の石器が集中して分布している。上下に多少の幅を持って分布しているが、出土のピークは第Ⅰスコリア層の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。また、石器ブロックと重複して、19号礫群、11号配石、炭化物集中27が検出された。

石器群は、石刃１点、剥片類132点である。石材は、黒曜石129点（天城柏峠群８点、推定不可14点、未分析107点）、ホルンフェルス４点である。

黒曜石は、小型の剥片や砕片が多く確認された。未分析等の資料も肉眼鑑定から天城柏峠群であると推測され、全て同一産地の黒曜石であったと考えられる。これらは両極剥離を行った際のブランクだと推測されるが、実際には楔形石器をはじめとした製品は出土しなかった。おそらくは、作業後に廃棄された石器ブロックだと考えられる。ホルンフェルスは全て単品の資料であった。

石器ブロック15（第87・88図）

Ｇ－６グリッドから検出された。北西～南東方向２m、北東～南西方向1.4mの範囲に、79点の石器が集中して分布している。上下に多少の幅を持って分布しているが、出土のピークは第Ⅰスコリア層の中部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。石器ブロックと重複して、21・22号礫群、炭化物集中28が検出された。

石器群は、楔形石器１点、剥片類78点である。石材は、全て黒曜石（天城柏峠群13点、未分析66点）である。

黒曜石は、楔形石器１点を除き、小型の剥片や砕片であった。未分析の資料も肉眼鑑定から天城柏峠群であると推測され、全て同一産地の黒曜石であったと考えられる。これらは、なんらかの作業を行った際のブランクだと推測される。

また、炭化物集中28から出土した炭化物のうち炭化材１点について、放射性炭素年代測定（AMS法）を行った。その結果、23,180±70yrBP（PLD－17431）の^{14}C年代値が確認された（詳細は第２分冊附編を参照）。

石器ブロック16・17（第89～93図）

Ｆ～Ｇ－５グリッドから検出された。付近は北東から南西にかけて下る谷底である。同一地点から、第Ⅰ黒色帯から休場層直下黒色帯まで、石器が重複して出土している。これらの石器群は、様相も酷似しているため、明確な分離が困難であったが、重複して出土している礫群の検出面が、第Ⅰ黒色帯中～上部の27～43号礫群と、第Ⅰスコリア層下部の44～47号礫群に分離可能であるため、それに伴う石器ブロックも、第Ⅰ黒色帯から出土した資料を石器ブロック16、第Ⅰスコリア層から出土した資料を石器ブロック17に設定した。しかし、同一地点からは、検出面がさらに下層の第Ⅰ黒色帯下部の礫群・配石も重複して出土している。さらに上部では、休場層直下黒色帯からも多量の資料が出土しており、第Ⅷ文化層の石器ブロック28と設定した。そのため、これらの資料と混在している可能性も考えられる。

石器ブロックの主体となっている石材は黒曜石であり、小型の剥片や砕片が多く確認された。天城柏峠群の資料を中心に、両極剥離を行った際のブランクと思われる資料が多く出土している。黒曜石が、ラウンド・スクレイパーやエンド・スクレイパー、楔形石器に多く用いられているのに対して、ホルンフェルスは大型の石刃、もしくはそれを素材としたサイド・スクレイパーに用いられており、石材による器種の使い分けが行われている。また、黒曜石は石器ブロック内で二次加工・剥片剥離を行っているのに対して、ホルンフェルスは単品出土の様相を見せており、外部から製品の状態で持ち込まれたと考

えられる。

石器ブロック16（第90・91図）

第Ⅰ黒色帯中～上部を中心に出土した資料を石器ブロック16とした。北東～南西方向10.5m、北西～南東方向3.9mの範囲に、832点の石器が分布している。石器ブロックと重複して、27～43号礫群、14～24号配石、炭化物集中31が検出された。

石器群は、ナイフ形石器５点、ラウンド・スクレイパー５点、エンド・スクレイパー６点、サイド・スクレイパー３点、ノッチド・スクレイパー２点、楔形石器８点、石刃８点、微細な剥離痕を有する剥片12点、石核１点、剥片類780点、敲石１点、台石１点である。

石材は黒曜石791点（天城柏峠群112点、箱根畑宿群93点、諏訪星ヶ台群５点、蓼科冷山群３点、和田鷹山群２点、和田土屋橋北群１点、和田土屋橋西群13点、和田土屋橋南群１点、和田高松沢群２点、分析不可等29点、未分析530点）、ホルンフェルス33点、ガラス質黒色安山岩４点、赤玉石（碧玉）２点、輝石安山岩１点、玄武岩１点である。

これらの石器は、谷底に沿って広く分布しているが、中央部付近に数ヶ所のまとまりをもっている。特に黒曜石については、産地ごとに分布の偏りが確認され、ブロック中央を境に、北東側では天城柏峠群を主体とし、南西側は箱根畑宿群を主体としている。また、産地分析ができない黒曜石の砕片は、南西側に比較的多く確認されており、これは箱根畑宿群の分布と重複している。一方、信州系の黒曜石の数は少なく、天城柏峠群および箱根畑宿群を積極的に用いて、ブロック内で二次加工・剥片剥離を行っていたと考えられる。

器種ごとの分布の傾向は、スクレイパー類、石刃が比較的中央に固まるのに対して、ナイフ形石器、楔形石器は散らばる傾向を見せている。

石器ブロック17（第92・93図）

第Ⅰスコリア層下部を中心に出土した資料を石器ブロック17とした。北東～南西方向10.1m、北西～南東方向3.7mの範囲に、442点の石器が分布している。石器ブロックと重複して、44～47号礫群、25・26号配石、炭化物集中32が検出された。

石器群は、ナイフ形石器９点、ラウンド・スクレイパー３点、エンド・スクレイパー６点、サイド・スクレイパー７点、ノッチド・スクレイパー３点、楔形石器６点、石刃３点、微細な剥離痕を有する剥片６点、石核３点、剥片類396点である。石材は、黒曜石394点（天城柏峠群98点、箱根畑宿群28点、諏訪星ヶ台群１点、蓼科冷山群７点、和田鷹山群１点、和田土屋橋西群４点、推定不可７点、未分析248点）、ホルンフェルス38点、ガラス質黒色安山岩７点、チャート（赤色）１点、珪質頁岩２点である。

ブロック16と比べると、構成される石器の数は半分であり、密集部も確認できないが、若干中央部にまとまりが見られ、黒曜石の天城柏峠群を主体とする。ブロック16では主要石材の一つであった箱根畑宿群は、ブロック17ではまとまりが見られない。一方、ホルンフェルスは、ブロック16より資料数が多いが、特定の偏りを持たずに分布している。また、器種ごとでも分布に顕著な偏りは確認できなかった。こうした石材分布は、下層の石器ブロック16と若干様相が異なる。

ホルンフェルスの接合資料161aに被熱した様相が確認されたが、それ以外の石器については認められなかった。

第29表　第Ⅶ文化層 石器ブロック14～17 石器組成表

石器ブロック14

		石刃	剥片類	計
黒曜石	天城柏峠群		8	8
	未分析等		121	121
ホルンフェルス		1	3	4
計		1	132	133

石器ブロック15

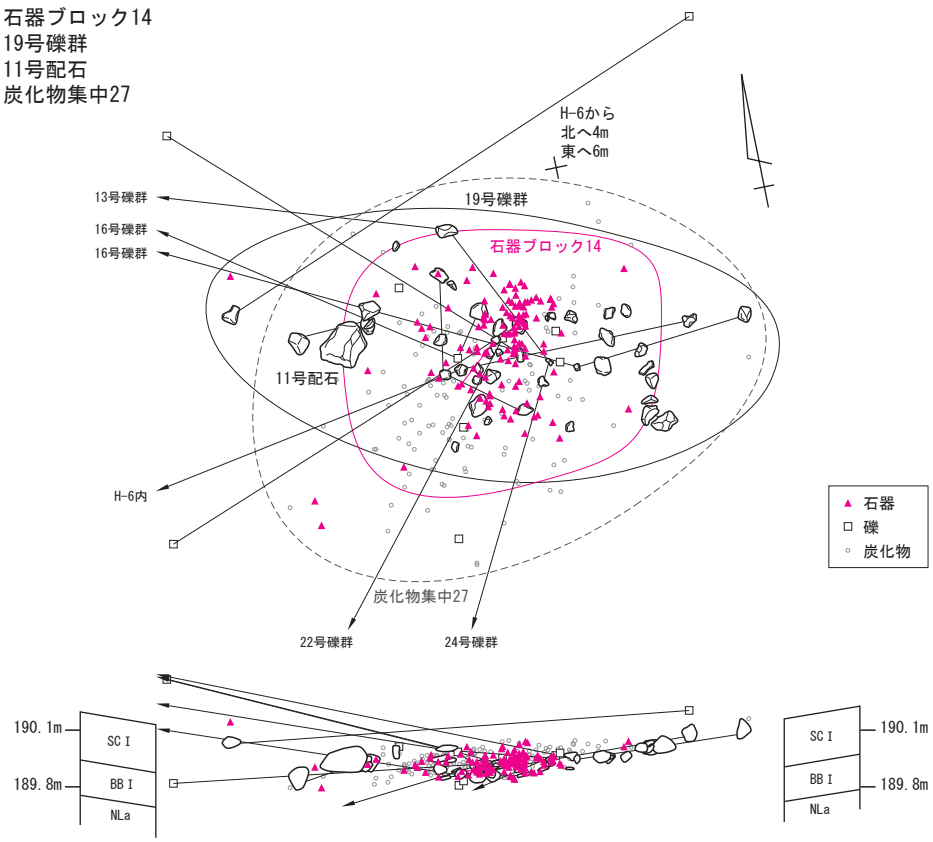
		楔形石器	剥片類	計
黒曜石	天城柏峠群	1	12	13
	未分析		66	66
計		1	78	79

石器ブロック16

		ナイフ形石器	ラウンド・スクレイパー	エンド・スクレイパー	サイド・スクレイパー	ノッチド・スクレイパー	楔形石器	石刃	微細な剥離痕を有する剥片	石核	剥片類	敲石	台石	計
黒曜石	天城柏峠群		3	3		1	5		3	1	96			112
	箱根畑宿群	1		2	1		2		2		85			93
	諏訪星ヶ台群		1								4			5
	蓼科冷山群										3			3
	和田鷹山群										2			2
	和田土屋橋北群										1			1
	和田土屋橋西群		1				1		2		9			13
	和田土屋橋南群										1			1
	和田高松沢群										2			2
	未分析等	1		1					1		556			559
ホルンフェルス		3			2	1		8	4		15			33
ガラス質黒色安山岩											4			4
赤玉石（碧玉）											2			2
輝石安山岩													1	1
玄武岩												1		1
計		5	5	6	3	2	8	8	12	1	780	1	1	832

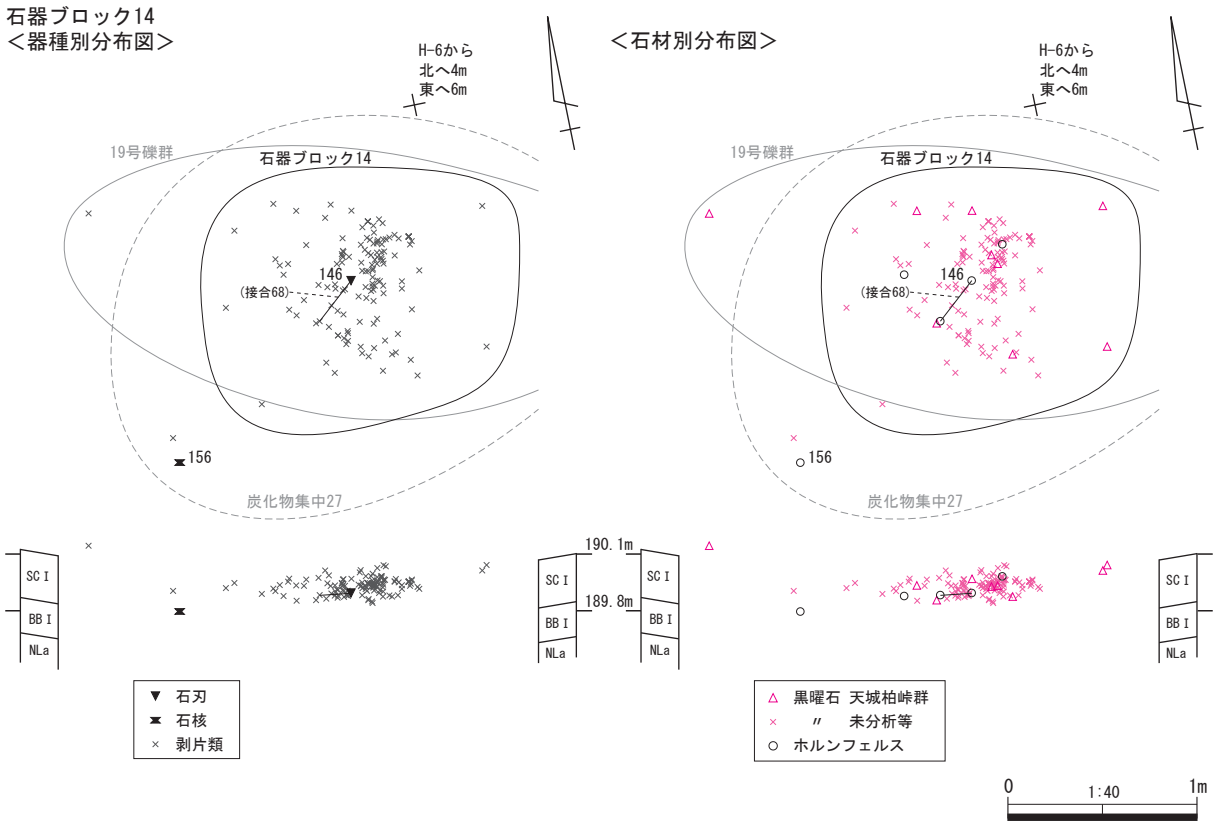
石器ブロック17

		ナイフ形石器	ラウンド・スクレイパー	エンド・スクレイパー	サイド・スクレイパー	ノッチド・スクレイパー	楔形石器	石刃	微細な剥離痕を有する剥片	石核	剥片類	計
黒曜石	天城柏峠群	1	1	3	1		5		2	3	82	98
	箱根畑宿群		1	1			1		1		24	28
	諏訪星ヶ台群										1	1
	蓼科冷山群	2	1								4	7
	和田鷹山群								1			1
	和田土屋橋西群			2							2	4
	未分析等										255	255
ホルンフェルス		5			5	3		2			23	38
ガラス質黒色安山岩		1							2		4	7
チャート（赤色）					1							1
珪質頁岩								1			1	2
計		9	3	6	7	3	6	3	6	3	396	442

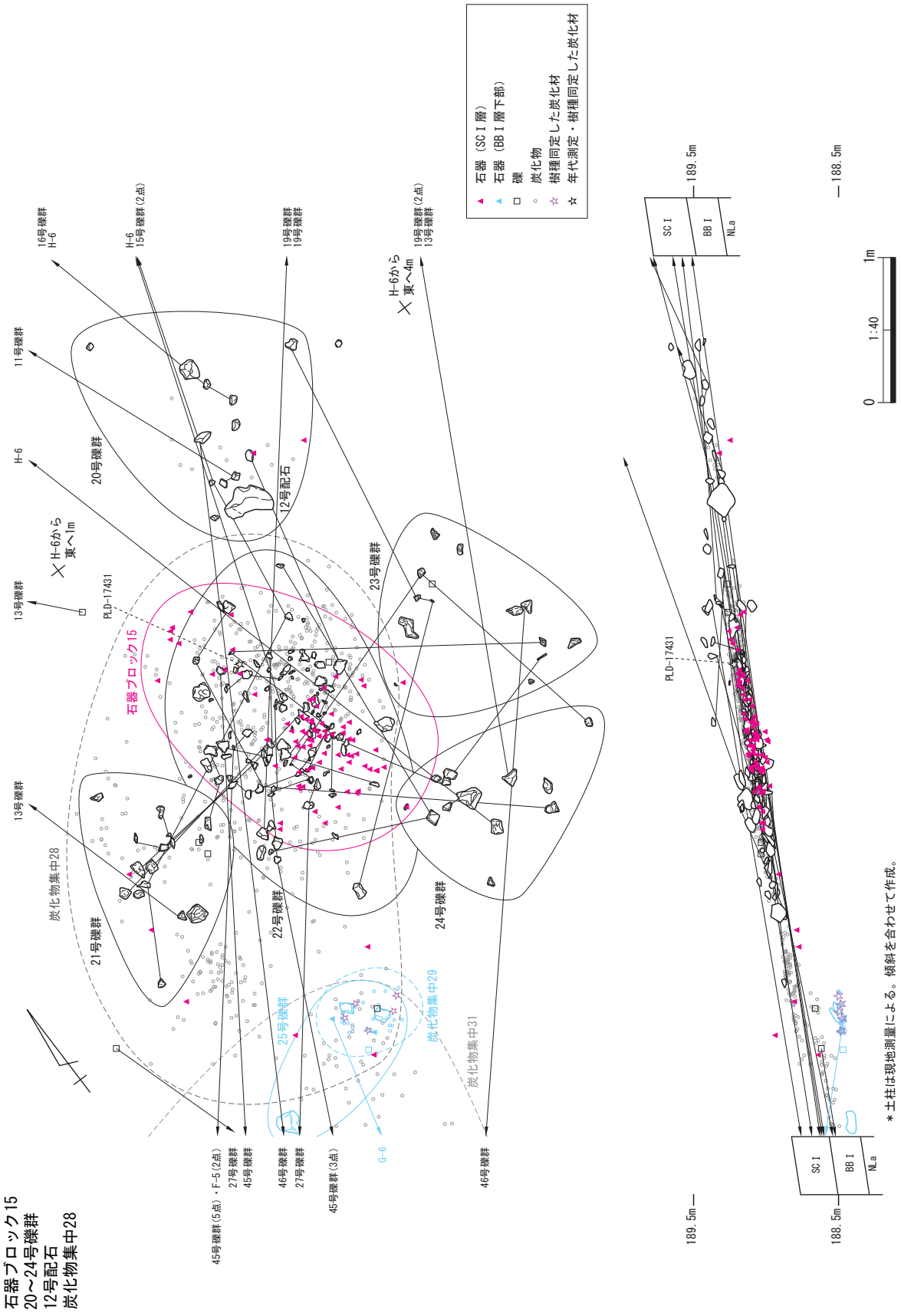


＊西側の土柱は現地測量による。東側は傾斜を合わせて作成。

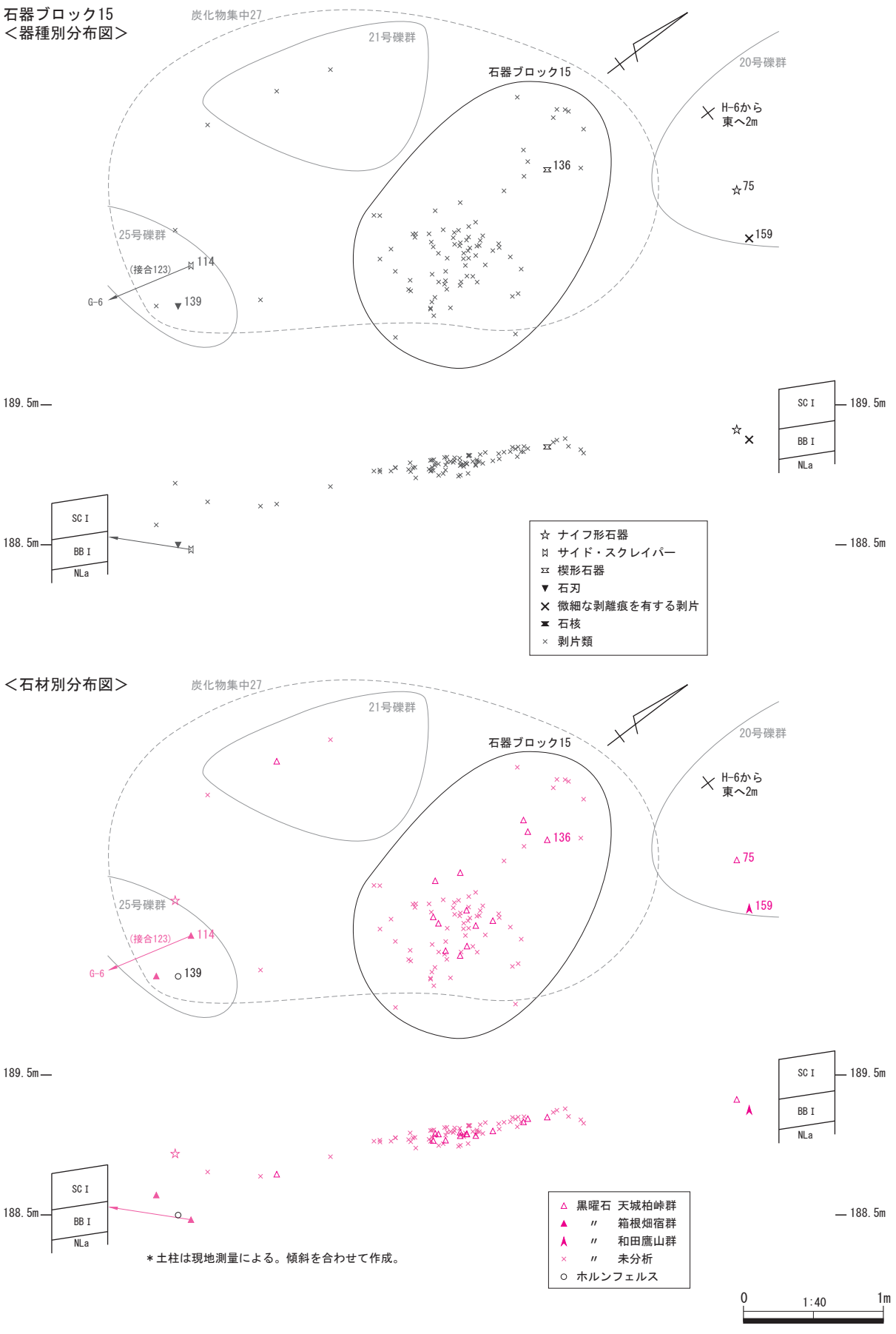
第85図　第Ⅶ文化層　南西谷部 石器ブロック14、19号礫群、11号配石、炭化物集中27 遺構図



第86図　第Ⅶ文化層　南西谷部 石器ブロック14 遺構図

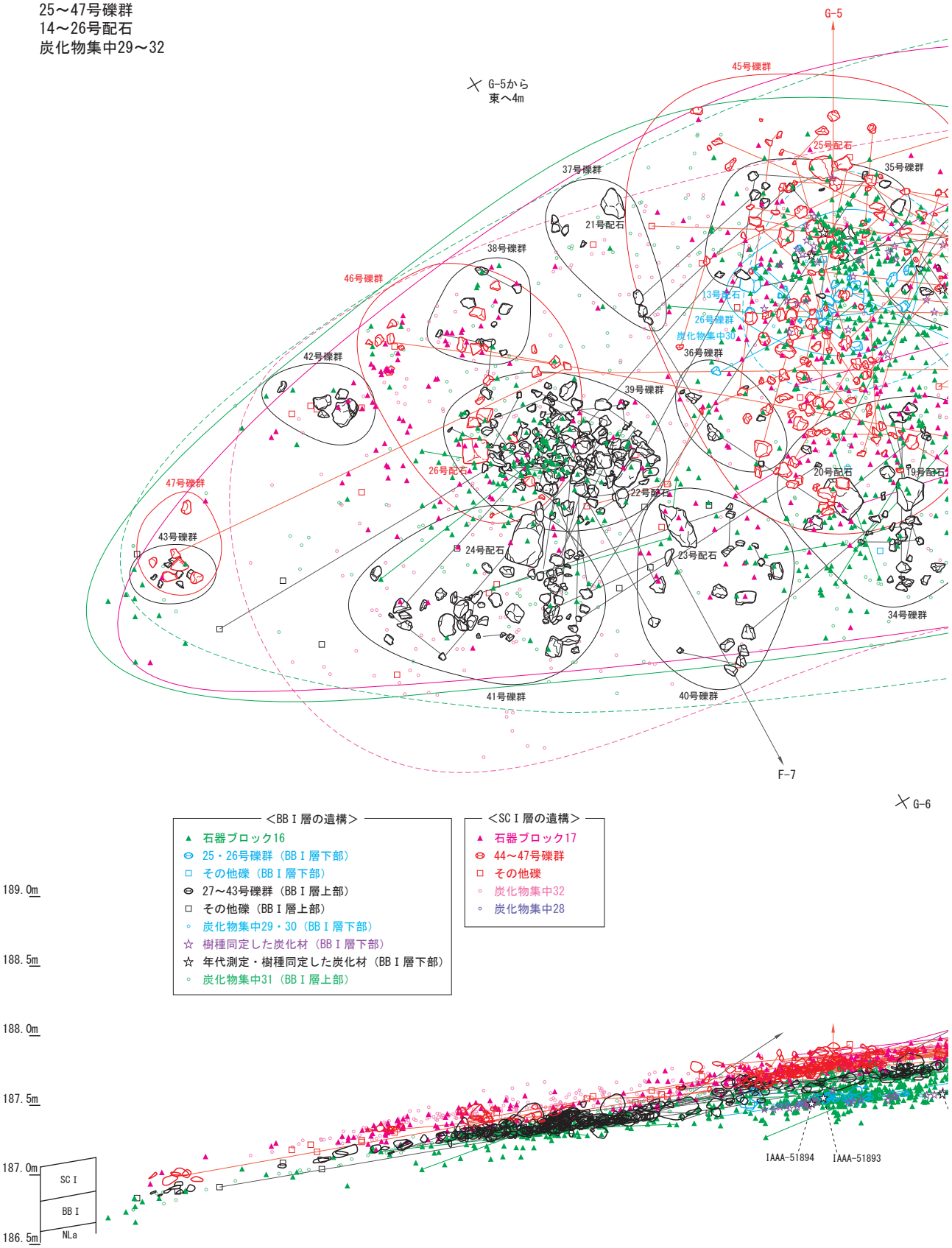


第87図　第Ⅶ文化層　南西谷部 石器ブロック15、20～24号礫群、12号配石、炭化物集中28 遺構図



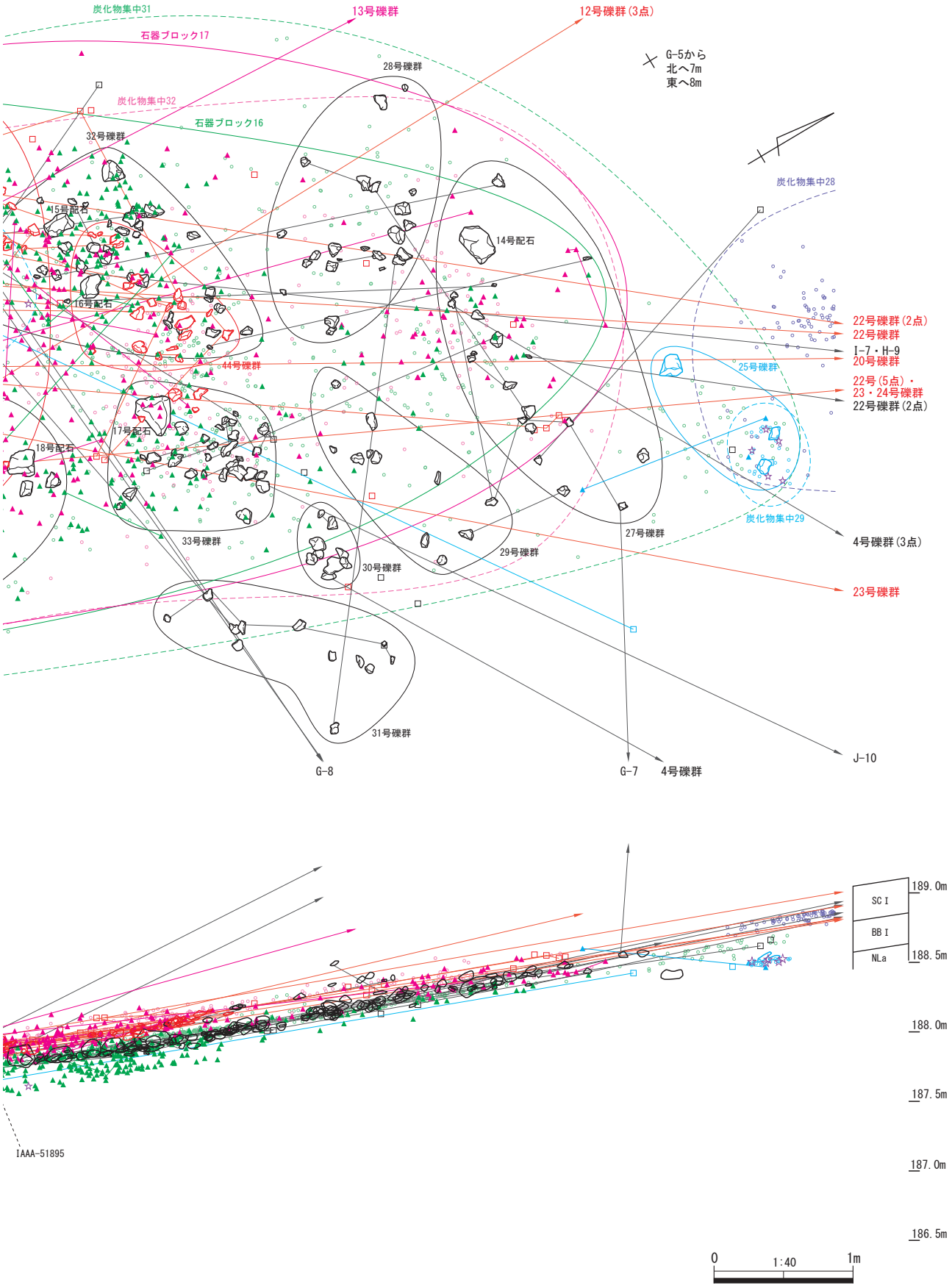
第88図　第Ⅶ文化層　南西谷部 石器ブロック15 遺構図

石器ブロック16・17
25～47号礫群
14～26号配石
炭化物集中29～32



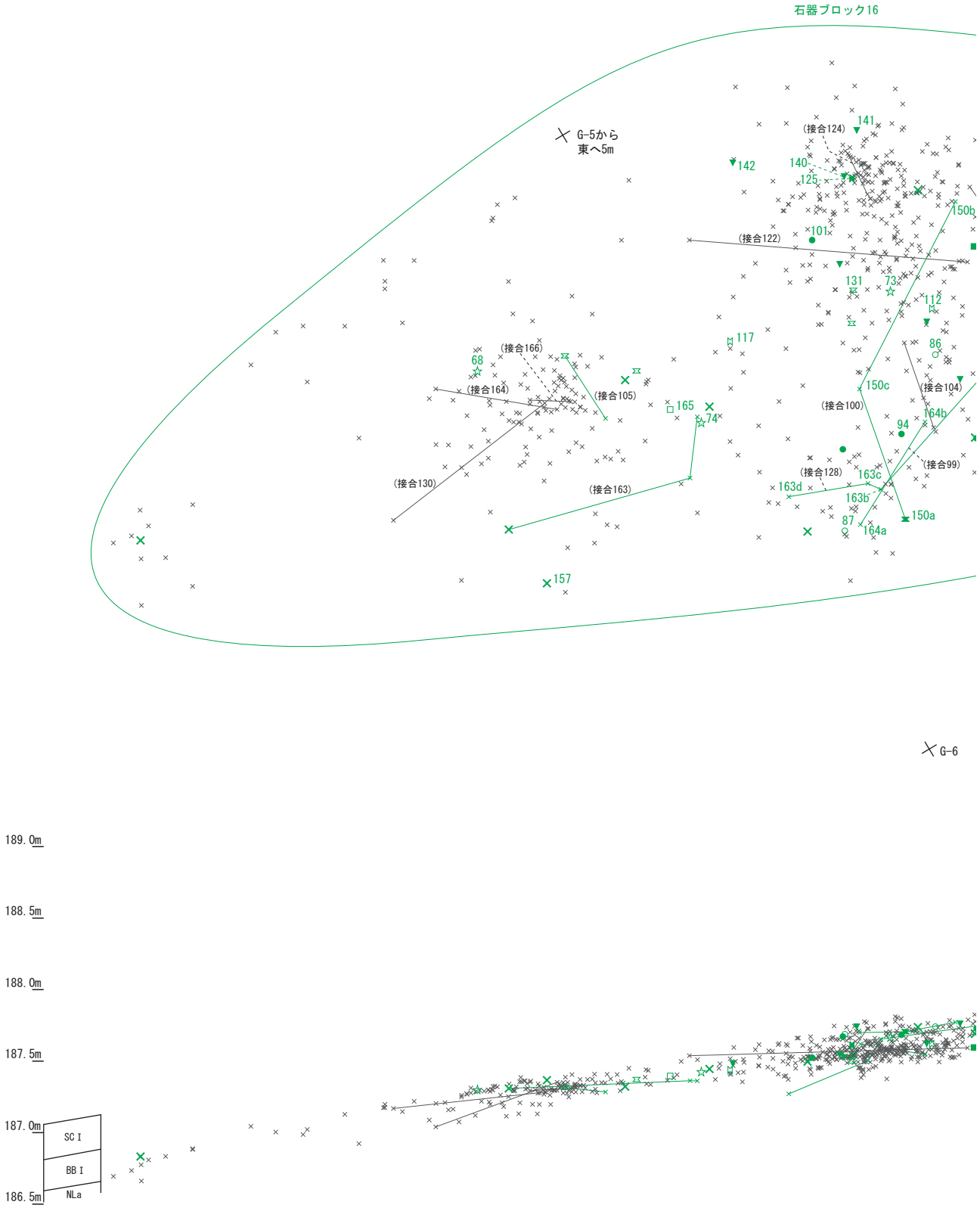
＊土柱は現地測量による。傾斜を合わせて作成。

第89図　第Ⅶ文化層　南西谷部 石器ブロック16・17、25～47号礫群、14～26号配石、炭化物集中29～32


炭化物集中31
石器ブロック17
13号礫群
12号礫群(3点)
28号礫群
G-5から
北へ7m
東へ8m
炭化物集中32
石器ブロック16
32号礫群
炭化物集中28
15号配石
14号配石
16号配石
22号礫群(2点)
22号礫群
I-7・H-9
20号礫群
44号礫群
25号礫群
22号(5点)・
23・24号礫群
22号礫群(2点)
17号配石
18号配石
炭化物集中29
27号礫群
33号礫群
29号礫群
4号礫群(3点)
30号礫群
23号礫群
31号礫群
J-10
G-8
G-7
4号礫群
IAAA-51895
SC I
BB I
NLa
189.0m
188.5m
188.0m
187.5m
187.0m
186.5m
0
1:40
1m

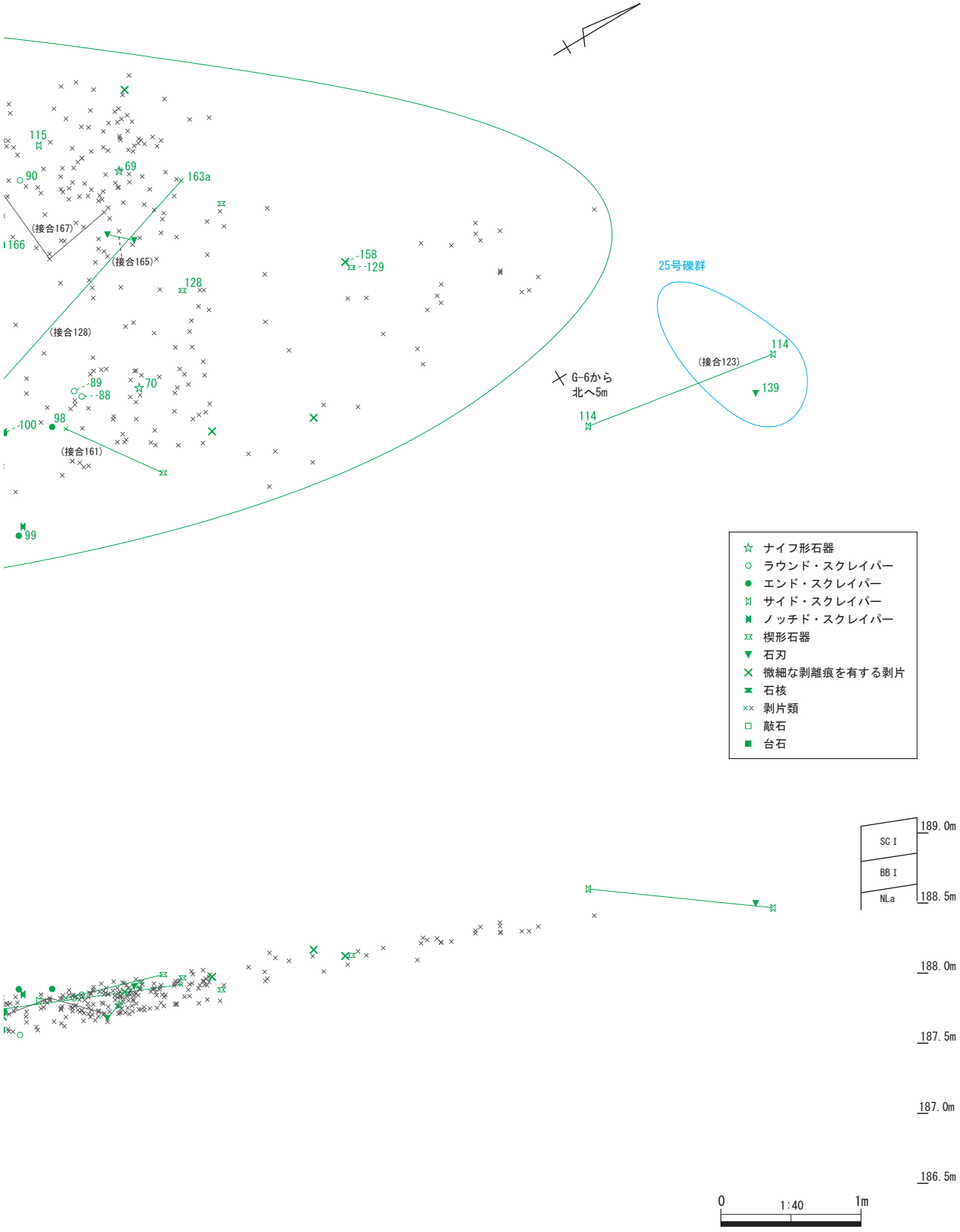
遺構図

石器ブロック16
25号礫群
＜器種別分布図＞

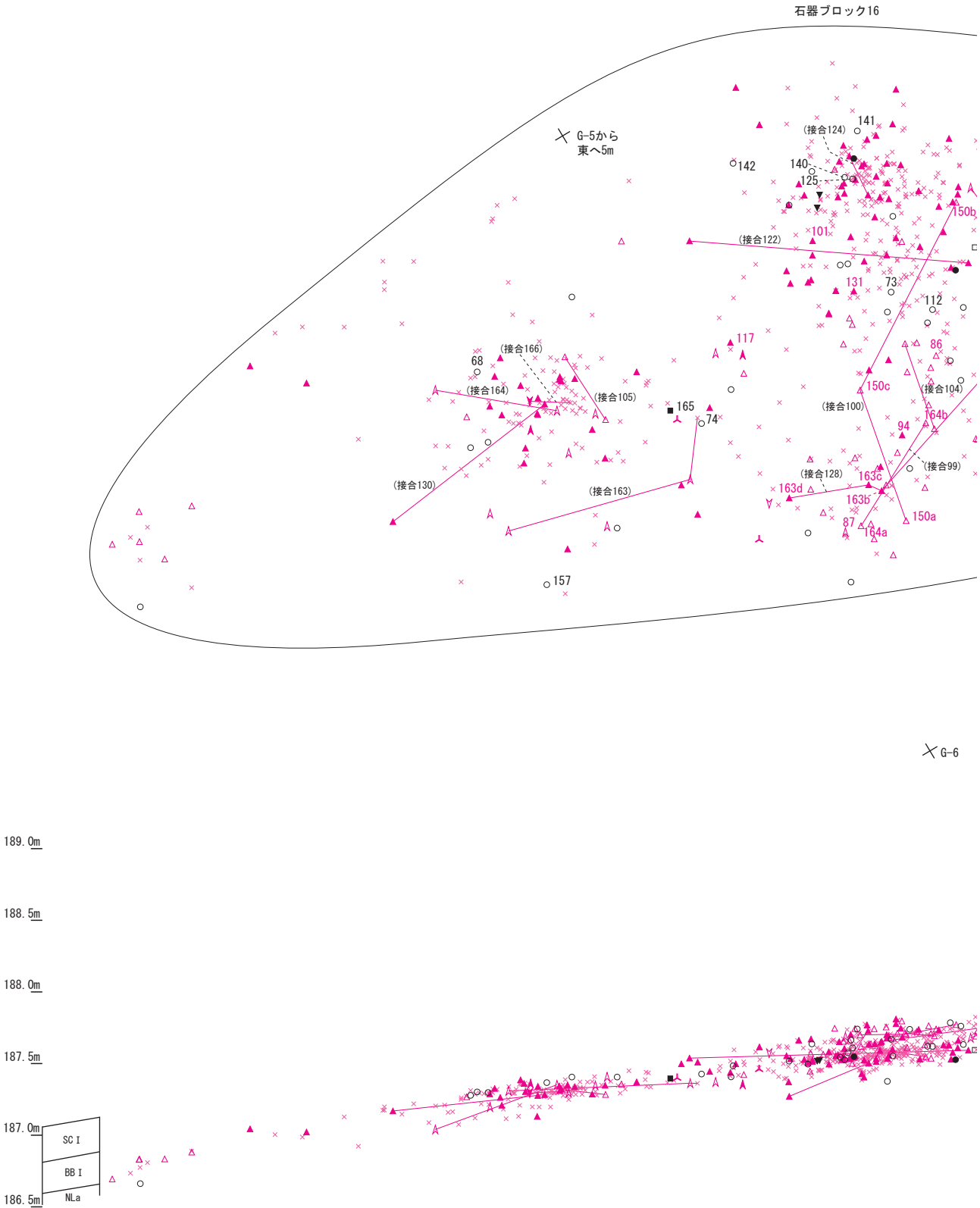


＊土柱は現地測量による。傾斜を合わせて作成。

第90図　第Ⅶ文化層　南西谷部 石器ブロック16、25号礫群 遺構図（１）

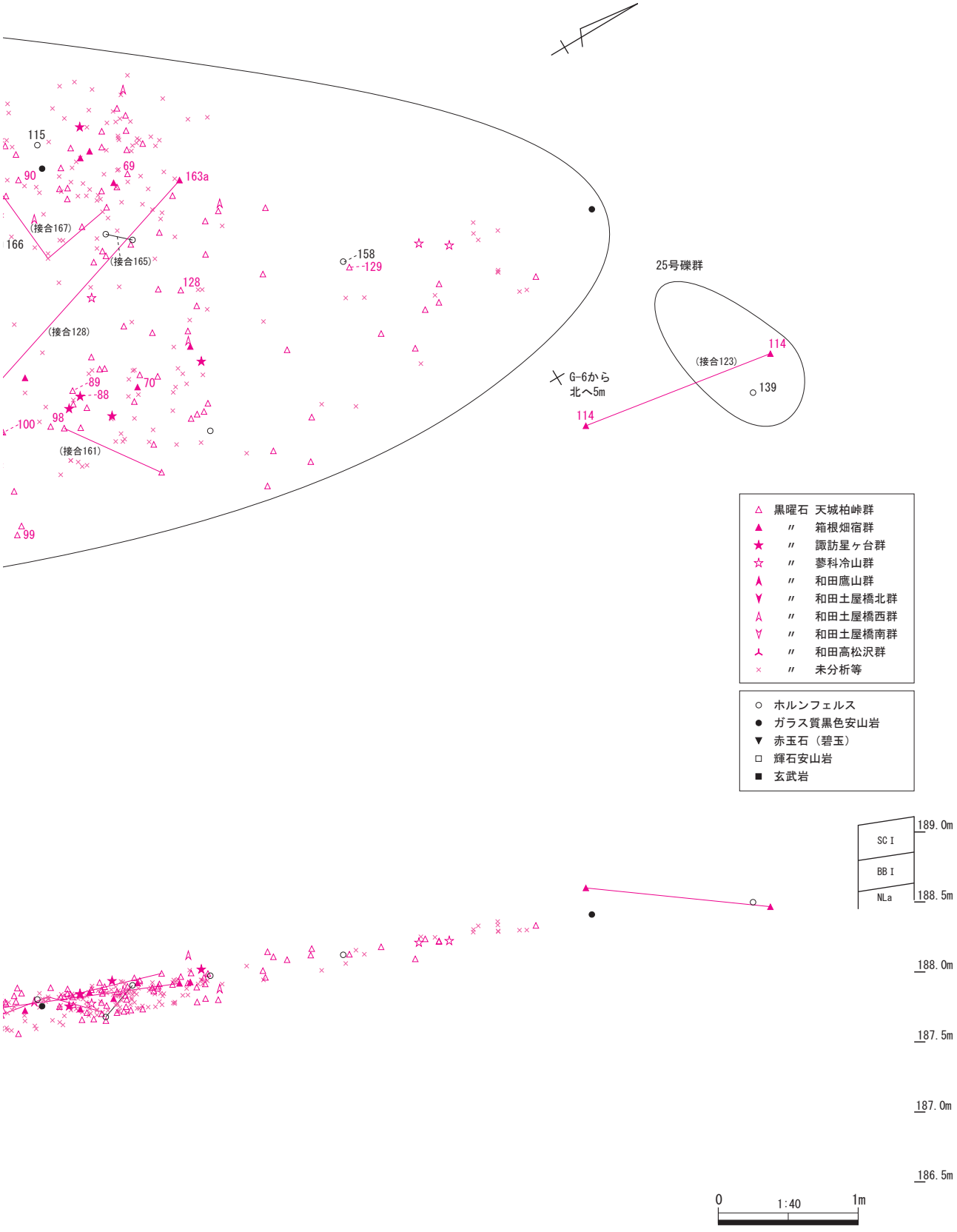

115
69
90
163a
(接合167)
166
(接合165)
158
129
128
(接合128)
89
88
70
100
98
(接合161)
99
25号礫群
114
(接合123)
139
G-6から
北へ5m
114
☆ ナイフ形石器
○ ラウンド・スクレイパー
● エンド・スクレイパー
⌑ サイド・スクレイパー
⌑ ノッチド・スクレイパー
⌑ 楔形石器
▼ 石刃
× 微細な剥離痕を有する剥片
石核
×× 剥片類
□ 敲石
■ 台石
SC I
BB I
NLa
189.0m
188.5m
188.0m
187.5m
187.0m
186.5m
0
1:40
1m

石器ブロック16
25号礫群
＜石材別分布図＞

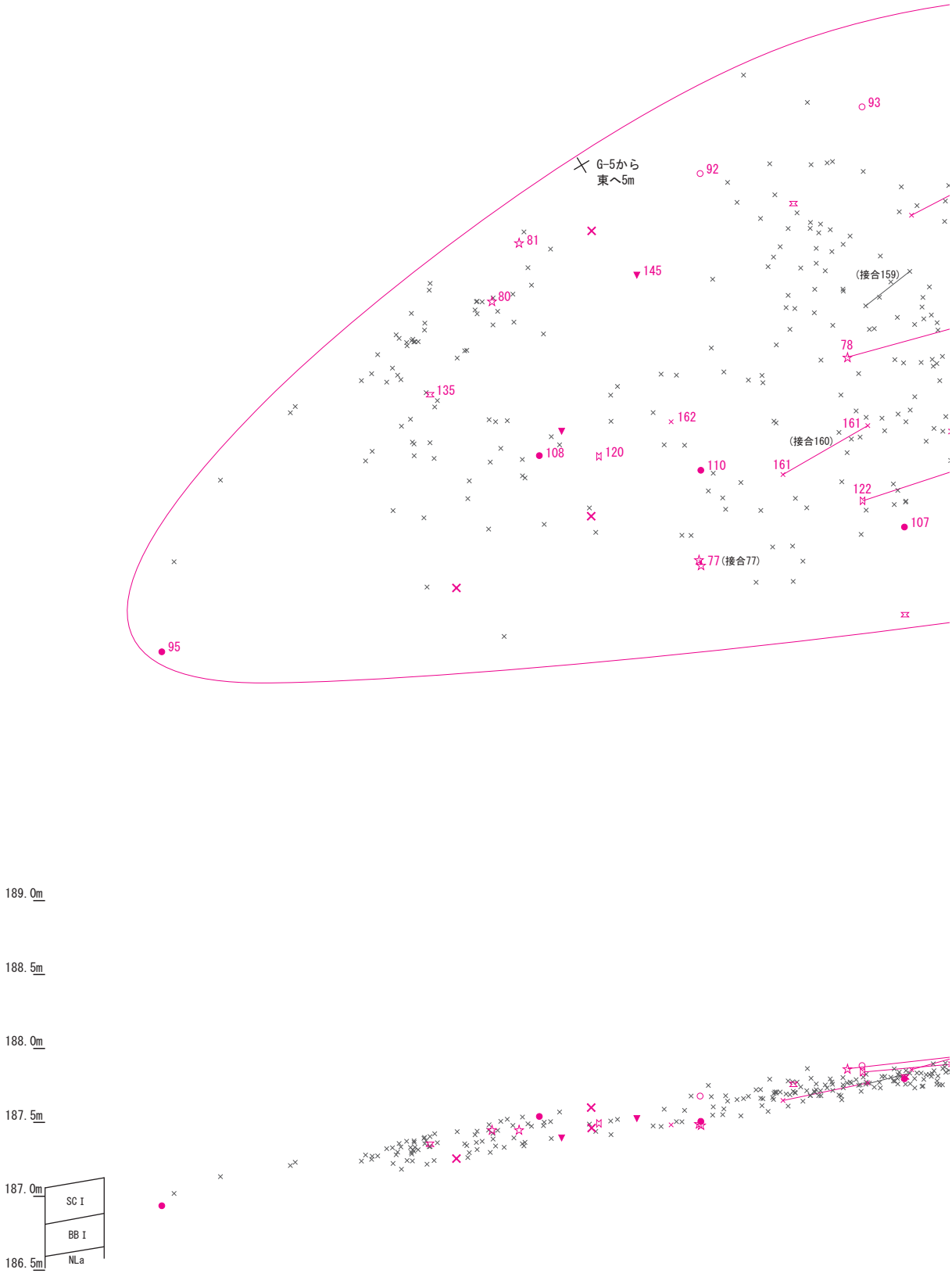


＊土柱は現地測量による。傾斜を合わせて作成。

第91図　第Ⅶ文化層　南西谷部 石器ブロック16、25号礫群 遺構図（２）

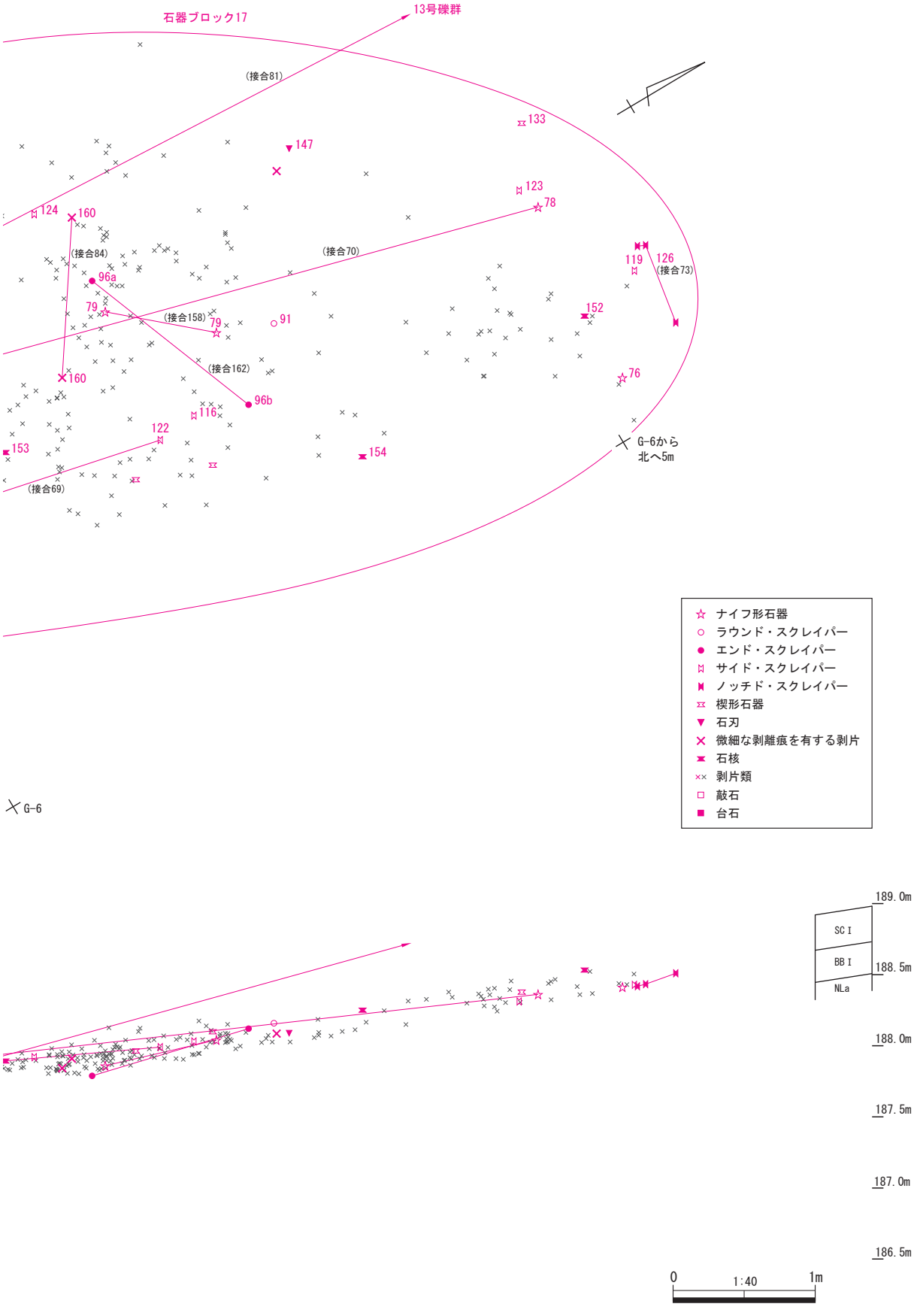

115
90
69
163a
(接合167)
166
(接合165)
158
129
128
(接合128)
89
88
70
100
98
(接合161)
99
G-6から
北へ5m
25号礫群
114
(接合123)
139
114
△ 黒曜石 天城柏峠群
▲ 〃 箱根畑宿群
★ 〃 諏訪星ヶ台群
☆ 〃 蓼科冷山群
〃 和田鷹山群
〃 和田土屋橋北群
〃 和田土屋橋西群
〃 和田土屋橋南群
〃 和田高松沢群
× 〃 未分析等
○ ホルンフェルス
● ガラス質黒色安山岩
▼ 赤玉石（碧玉）
□ 輝石安山岩
■ 玄武岩
SC Ⅰ
BB Ⅰ
NLa
189.0m
188.5m
188.0m
187.5m
187.0m
186.5m
0
1:40
1m

石器ブロック17
＜器種別分布図＞

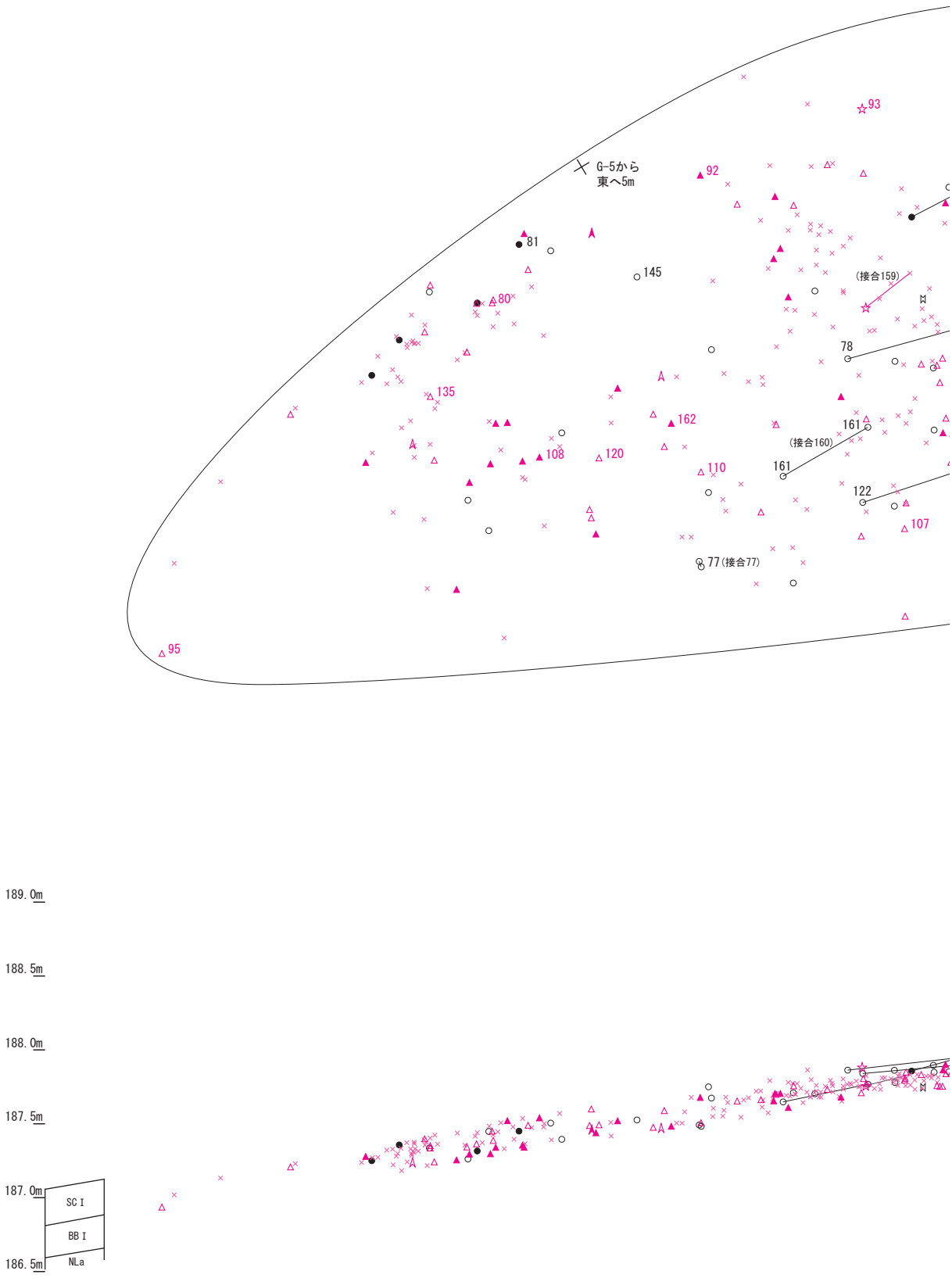


＊土柱は現地測量による。傾斜を合わせて作成。

第92図　第Ⅶ文化層　南西谷部 石器ブロック17 遺構図（１）

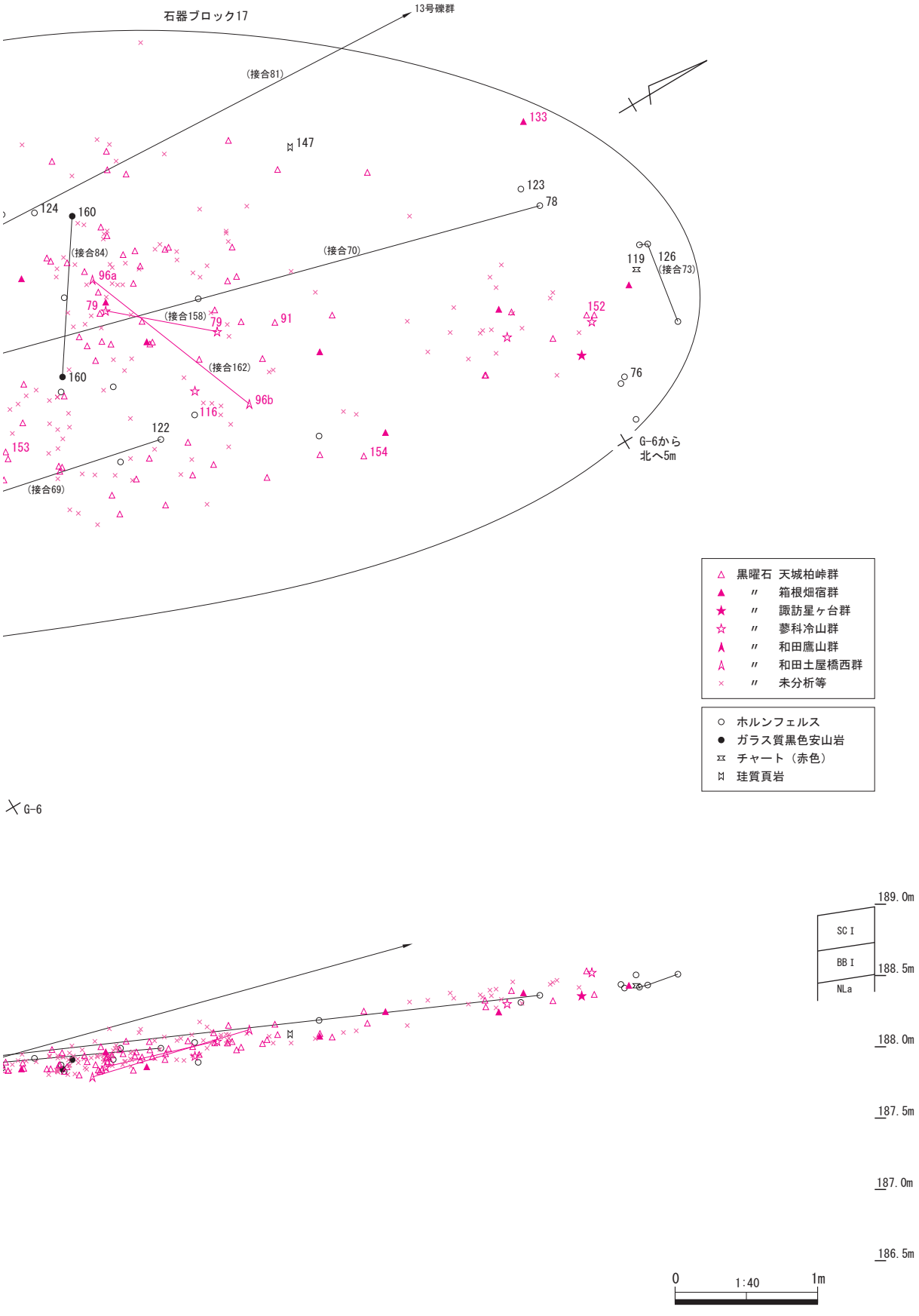

石器ブロック17
13号礫群
(接合81)
133
147
123
78
124
160
(接合84)
(接合70)
119
126
(接合73)
96a
79
(接合158)
79
91
152
(接合162)
76
160
96b
116
122
153
154
(接合69)
G-6から
北へ5m
G-6
ナイフ形石器
ラウンド・スクレイパー
エンド・スクレイパー
サイド・スクレイパー
ノッチド・スクレイパー
楔形石器
石刃
微細な剥離痕を有する剥片
石核
剥片類
敲石
台石
189.0m
SC I
BB I
188.5m
NLa
188.0m
187.5m
187.0m
186.5m
0
1:40
1m

石器ブロック17
＜石材別分布図＞



＊土柱は現地測量による。傾斜を合わせて作成。

第93図　第Ⅶ文化層　南西谷部 石器ブロック17 遺構図（２）


石器ブロック17
13号礫群
(接合81)
133
147
123
78
124
160
(接合84)
96a
(接合70)
119
126
(接合73)
79
(接合158)
79
91
152
(接合162)
160
76
96b
116
122
153
154
(接合69)
G-6から
北へ5m
△ 黒曜石 天城柏峠群
▲ 〃 箱根畑宿群
★ 〃 諏訪星ヶ台群
☆ 〃 蓼科冷山群
人 〃 和田鷹山群
人 〃 和田土屋橋西群
× 〃 未分析等
○ ホルンフェルス
● ガラス質黒色安山岩
⌑ チャート（赤色）
⌑ 珪質頁岩
G-6
189.0m
SC Ⅰ
BB Ⅰ
188.5m
NLa
188.0m
187.5m
187.0m
186.5m
0
1:40
1m

イ　礫群・配石

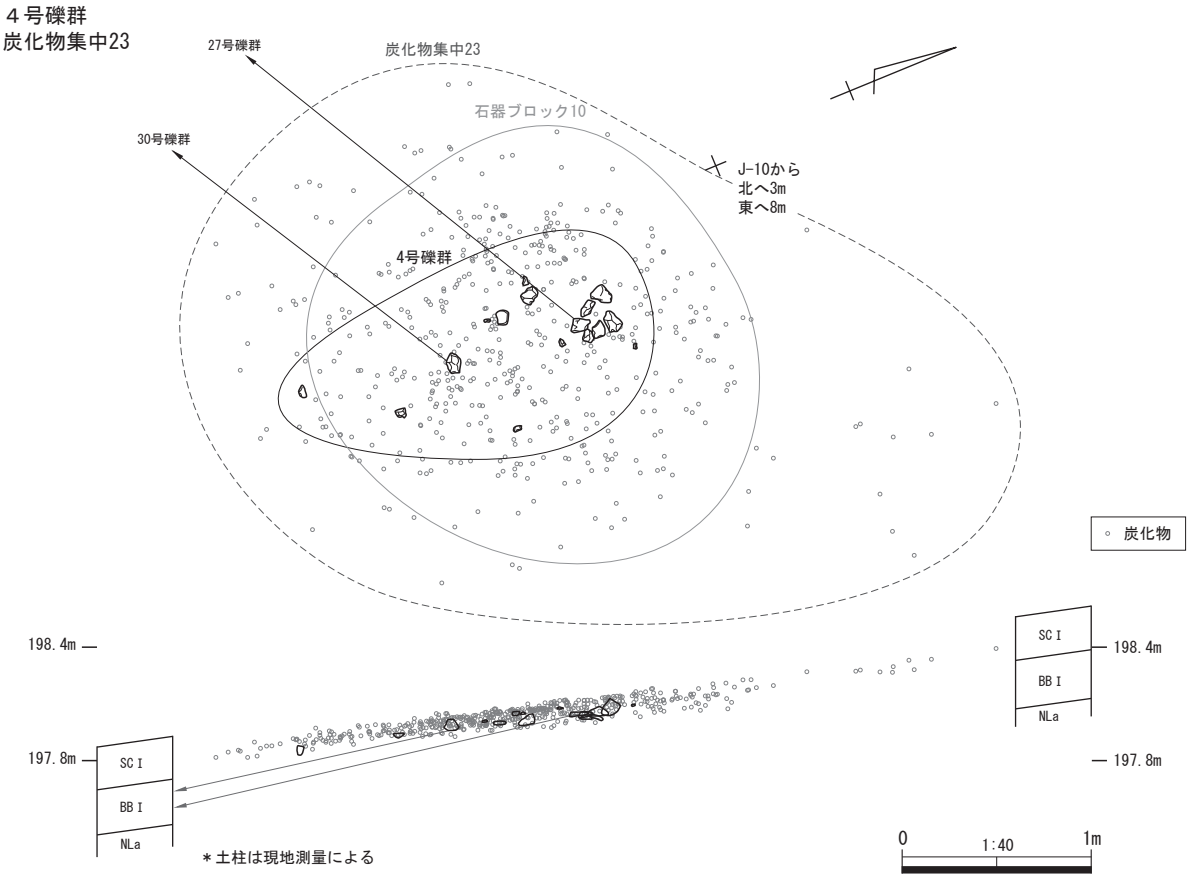
南西谷部からは44基の礫群が検出された（第30表）。そのうち検出面が第Ⅰ黒色帯下部のものが２基、第Ⅰ黒色帯中～上部のものが20基、第Ⅰスコリア層下部のものが22基である。大半の礫群は、炭化物集中と重複して出土しており、構成礫の全てに、被熱の痕跡である赤化が確認されている。また、本遺跡の特徴として、完形礫に比べて破損礫の割合が高く、多くの接合資料が確認されている。礫群内の接合に加え、礫群間の接合も数多く確認され、60mを隔てた接合資料も確認されている（第96図）。また、赤化は破損礫の割面にも見られることから、繰り返し被熱した結果、礫が小型化したと推測される。実際、300g以下のものが全体の78％を占める。

一方、構成礫の中でも3,000gを超える大型の礫を配石と設定し（７号配石を除く）、24基が検出された。第Ⅰ黒色帯下部のものが１基、第Ⅰ黒色帯中～上部のものが13基、第Ⅰスコリア層下部のものが10基である。礫群と配石は重複する例が多いため、同じ条内で述べる。

４号礫群（第94図）

J－10グリッドから検出された。南北方向1.7m、東西方向0.7mの範囲に17点の礫が分布している。主な出土層位は第Ⅰスコリア層の下部である。石器ブロック10、炭化物集中23と重複して検出された。

石材は、輝石安山岩９点、玄武岩５点、多孔質玄武岩３点である。４点に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は15点の礫群となった。接合した資料の中には、礫群内の接合に加え、南西方向へ60mの距離を隔てて27・30号礫群と、それぞれ接合したものも確認されている。



第94図　第Ⅶ文化層　南西谷部　４号礫群、炭化物集中23 遺構図

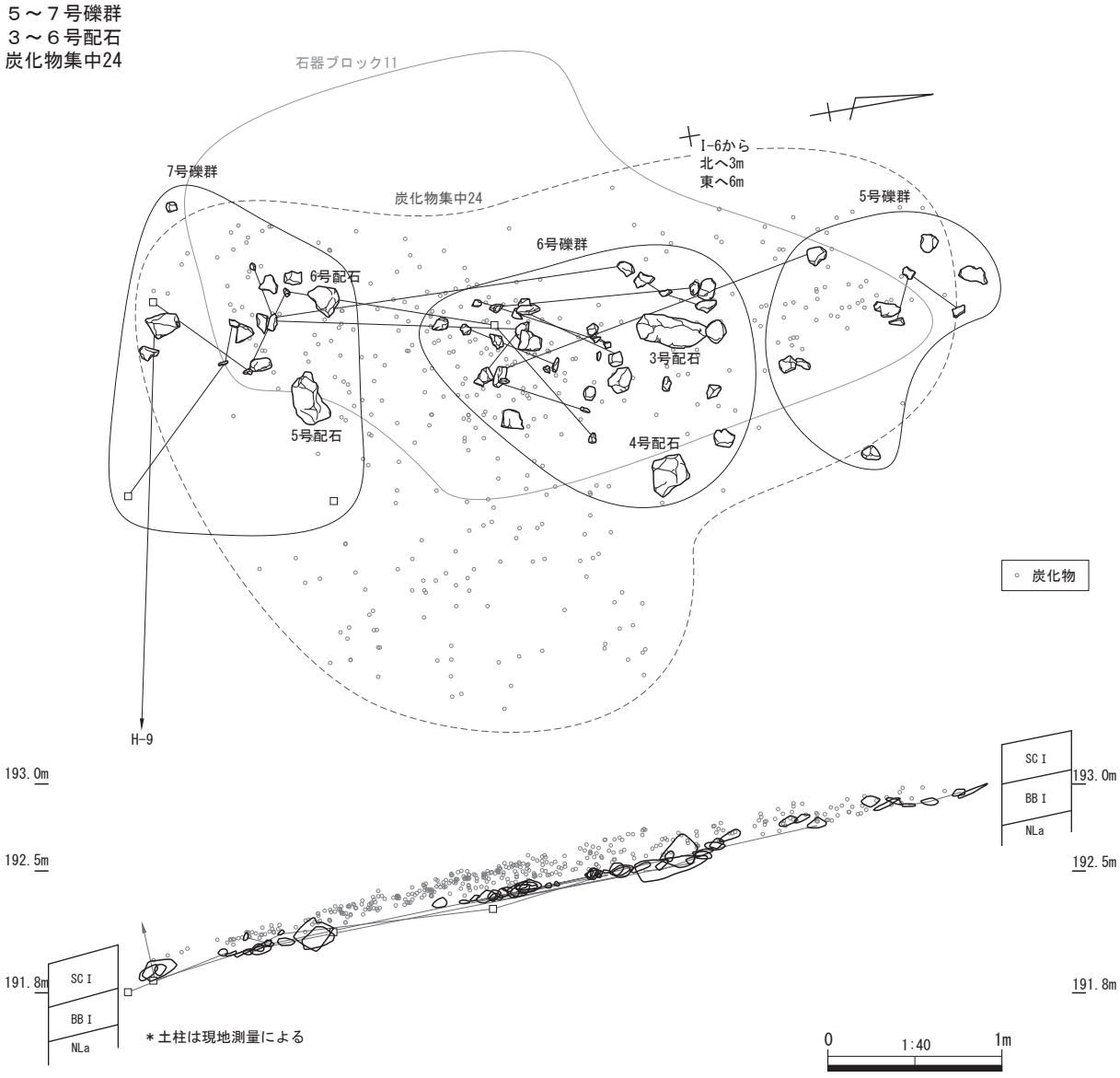
２号配石

Ⅰ－７グリッドから検出された。検出層位は第Ⅰスコリア層の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る傾斜地である。石器ブロックや礫群とは重複せず単独で出土している。重量は3,200gを超える。石材は玄武岩である。

５号礫群（第95図）

Ⅰ－６グリッドから検出された。北西～南東方向1.3m、北東～南西方向1.1mの範囲に10点の礫が分布している。主な出土層位は、第Ⅰ黒色帯と第Ⅰスコリア層の境界付近である。石器ブロック11、炭化物集中24と重複して検出された。

石材は、輝石安山岩２点、玄武岩６点、多孔質玄武岩２点である。４点に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は８点の礫群となった。接合した資料の中には、礫群内の接合に加え、隣接する６号礫群と接合したものも確認されている。

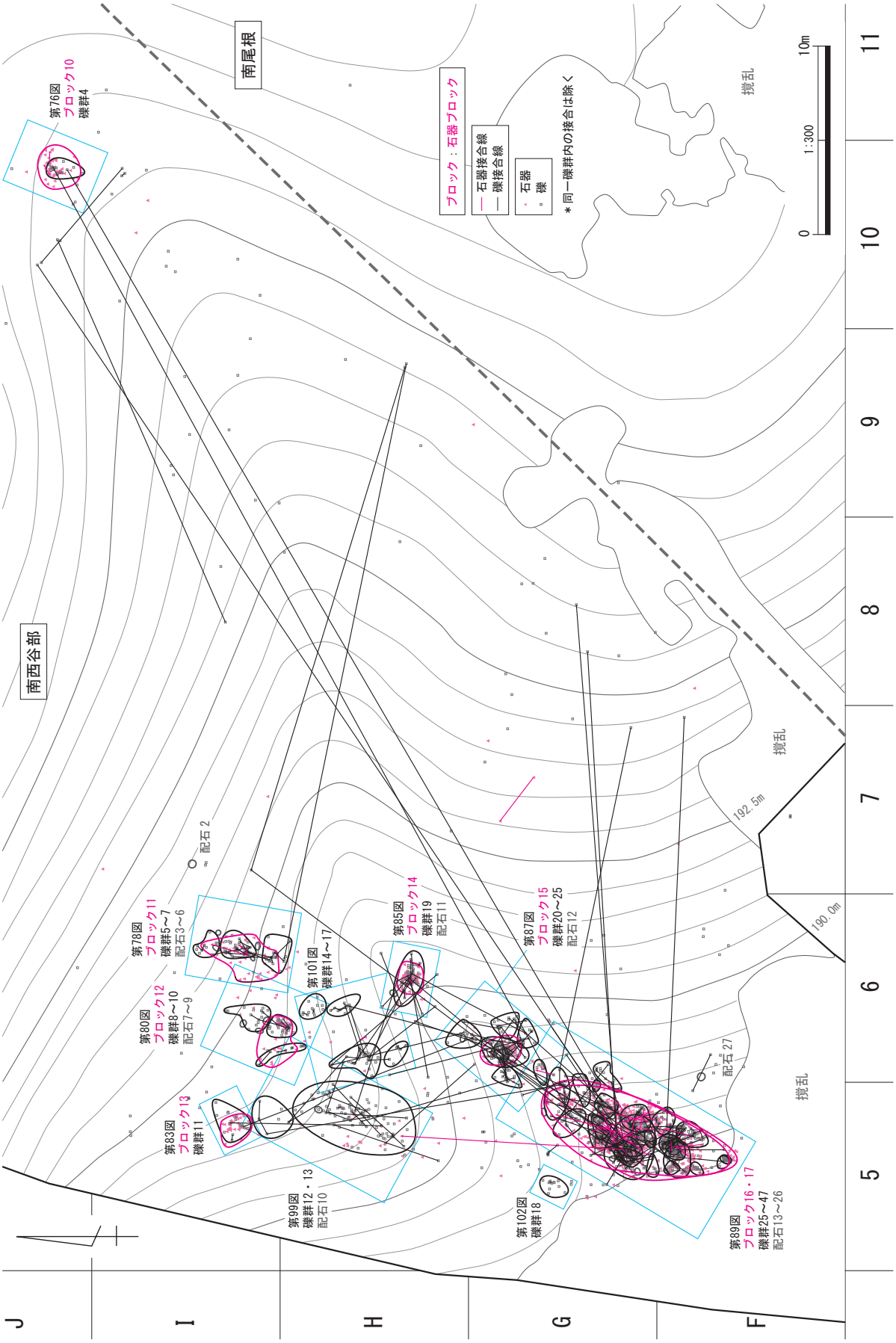


第95図　第Ⅶ文化層　南西谷部　５～７号礫群、３～６号配石、炭化物集中24 遺構図

第30表　第Ⅶ文化層 南西谷部 ４～47号礫群一覧表

礫群番号	グリッド	検出層位	構成礫数	接合礫数	接合後個体数	石材				重複する				赤化率％	赤化状態		
										遺構番号			遺物				
						輝石安山岩	多孔質安山岩	玄武岩	多孔質玄武岩	石器ブロック	配石	炭化物集中	石器（点数）		A	B	C
４号	J-10	SC Ⅰ下部	17	4	15	9		5	3	10		23		100	7	9	1
５号	I-6	BB Ⅰ～SC Ⅰ	10	4	8	2		6	2	11		24		100	1	5	4
６号	I-6	BB Ⅰ～SC Ⅰ	36	20	25	7	3	23	3	11	3・4	24		100	9	20	7
７号	H～I-6	BB Ⅰ～SC Ⅰ	17	10	12	1		14	2	11	5・6	24		100	2	11	4
８号	I-6	BB Ⅰ～SC Ⅰ	14	3	13	2		7	5	12	7	25		100	5	7	2
９号	H～I-6	BB Ⅰ～SC Ⅰ	27	8	23	4		23		12	8・9	25		100	9	18	
10号	H～I-6	BB Ⅰ～SC Ⅰ	9	8	5	7		2		12		25		100		9	
11号	I-5	SC Ⅰ下部	18	5	16	9		7	2	13				100	4	12	2
12号	H～I-5	SC Ⅰ下部	6	4	4	4		2				26		100		6	
13号	H-5	SC Ⅰ下部	87	27	74	27	4	19	37		10	26	17	100	20	63	4
14号	H-6	SC Ⅰ下部	13	4	11	2		10	1					100	5	8	
15号	H-6	SC Ⅰ下部	11	10	6	3		8						100		5	6
16号	H-6	SC Ⅰ下部	32	14	27	13	1	13	5				1	100	10	17	5
17号	H-6	SC Ⅰ下部	6	5	3		1	5						100	1	5	
18号	G-5	SC Ⅰ下部	10	—	10	4	2	3	1					100	1	8	1
19号	H-6	SC Ⅰ下部	49	21	39	11	2	17	19	14	11	27		100	11	48	
20号	G～H-6	SC Ⅰ中部	13	8	11	3		8	2		12		2	100	1	9	3
21号	G-5～6	SC Ⅰ中部	18	10	15	4		10	4			28		100		17	1
22号	G-6	SC Ⅰ中部	112	55	81	54	3	42	13	15		28		100	5	96	11
23号	G-6	SC Ⅰ中部	14	6	13	9		5		15				100	1	11	2
24号	G-6	SC Ⅰ中部	14	9	12	4		5	5	15				100	2	11	1
25号	G-6	BB Ⅰ下部	4	—	4	2		2				29	2	100	1	3	
26号	G-5	BB Ⅰ下部	30	17	19	9	3	13	5	16	13	30		100	3	24	3
27号	G-5～6	BB Ⅰ上部	19	11	15	4		14	1	16	14	31		100	3	12	4
28号	G-5	BB Ⅰ上部	23	8	19	9		11	3	16		31		100	6	15	2
29号	G-5	BB Ⅰ上部	11	2	11	3	1	7		16		31		100	6	3	2
30号	G-5	BB Ⅰ上部	9	3	8	1		3	5	16		31		100	3	3	3
31号	G-5～6	BB Ⅰ上部	13	8	8	3		10		16		31		100	2	4	7
32号	G-5	BB Ⅰ上部	38	18	32	8		25	5	16	15・16	31		100	5	29	4
33号	G-5	BB Ⅰ上部	34	20	21	7		25	2	16	17	31		100	7		27
34号	G-5	BB Ⅰ上部	33	20	20	9	1	20	3	16	18～20	31		100	6	22	5
35号	G-5	BB Ⅰ上部	15	8	13	5		9	1	16		31		100	2	13	
36号	G-5	BB Ⅰ上部	6	3	5	3		3		16		31		100		6	
37号	F～G-5	BB Ⅰ上部	7	5	6	2		4	1	16	21	31		100		7	
38号	F-5	BB Ⅰ上部	10	6	6	2		5	3	16		31		100	3	7	
39号	F-5	BB Ⅰ上部	133	75	89	37	1	94	1	16	22	31		100	21	108	4
40号	F～G-5	BB Ⅰ上部	20	14	13	12		8		16	23	31		100	5	9	6
41号	F-5	BB Ⅰ上部	61	27	50	22		37	2	16	24	31		100	10	45	6
42号	F-5	BB Ⅰ上部	5	—	5	3		2		16		31		100		5	
43号	F-5	BB Ⅰ上部	9	—	9	6		3		16		31		100	1	8	
44号	G-5	SC Ⅰ下部	26	16	20	11		11	4	17		32		100	1	22	3
45号	G-5	SC Ⅰ下部	140	67	103	55	7	54	24	17	25	32		100	26	90	24
46号	F-5	SC Ⅰ下部	29	9	26	12	1	13	3	17	26	32		100	3	24	2
47号	F-5	SC Ⅰ下部	6	1	6	3		3		17				100	3	3	

赤化状態A－赤化　完形　　B－赤化　破損礫　割面も赤化　　C－赤化　破損礫　割面は非赤化



第96図　第Ⅶ文化層　南西谷部 接合関係図

６号礫群、３・４号配石（第95図）

Ｉ－６グリッドから検出された。北東～南西方向1.8m、北西～南東方向1.3mの範囲に36点の礫が集中して分布している。主な出土層位は、第Ｉ黒色帯と第Ｉスコリア層の境界付近である。石器ブロック11、炭化物集中24と重複して検出された。

石材は、輝石安山岩７点、多孔質安山岩３点、玄武岩23点、多孔質玄武岩３点である。20点に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は25点の礫群となった。接合した資料の中には、礫群内の接合に加え、隣接する５号礫群、７号礫群と、それぞれ接合したものも確認されている。構成礫の大半は500g以下の小型の礫だが、１点のみ1,000gを超える礫が検出されている。

また、礫群の北側と北東側に、7,000g、10,000gを超える大型の礫が検出され、それぞれ３号配石、４号配石と設定した。石材は、３号配石が多孔質玄武岩、４号配石は玄武岩である。

７号礫群、５・６号配石（第95図）

Ｈ～Ｉ－６グリッドから検出された。北東～南西方向２m、北西～南東方向1.4mの範囲に17点の礫が分布している。主な出土層位は、第Ｉ黒色帯と第Ｉスコリア層の境界付近である。石器ブロック11、炭化物集中24と重複して検出された。

石材は、輝石安山岩１点、玄武岩14点、多孔質玄武岩２点である。10点に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は12点の礫群となった。接合した資料の中には、礫群内の接合に加え、隣接する６号礫群、また東に32mの距離を隔てたＨ－９の遺構外の礫と接合したものも確認されている。構成礫の大半は500g以下の小型の礫だが、１点、2,600gを超える礫が検出されている。

また、礫群の北東側と北側に、7,500g、3,700gを超える大型の礫が検出され、それぞれ５号配石、６号配石と設定した。石材は５号配石が多孔質玄武岩、６号配石は玄武岩である。

８号礫群、７号配石（第97図）

Ｉ－６グリッドから検出された。南北方向2.4m、東西方向1.3mの範囲に14点の礫が分布している。主な出土層位は、第Ｉ黒色帯と第Ｉスコリア層の境界付近である。炭化物集中25と重複し、石器ブロック12とは隣接して検出された。

石材は、輝石安山岩２点、玄武岩７点、多孔質玄武岩５点である。３点に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は13点の礫群となった。接合した資料３点は、隣接する９号礫群と接合した。

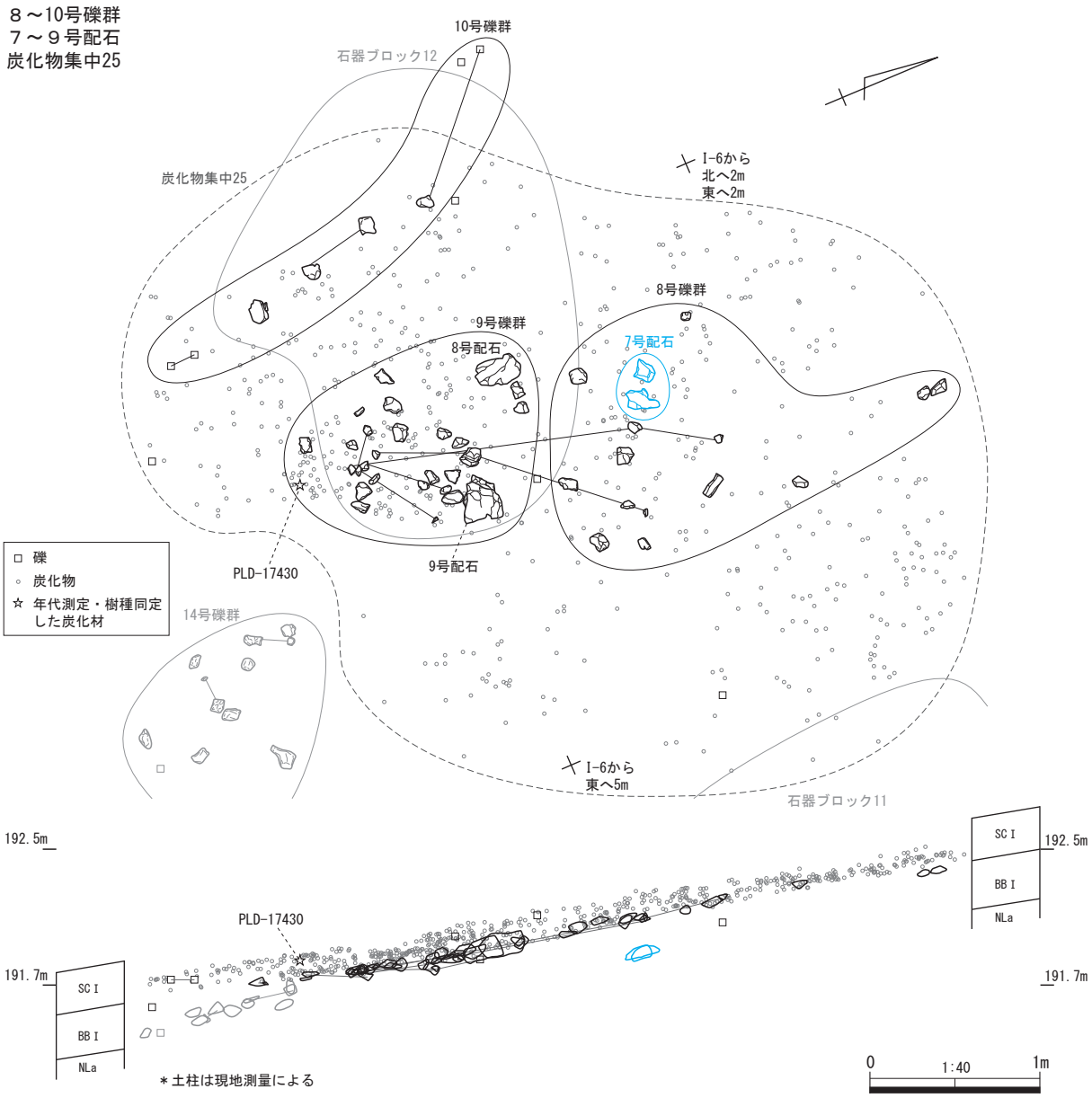
また、礫群の北東側で検出された２点の礫が、それぞれ1,000g、1,200gを超えており、７号配石と設定した。付近の遺構が第Ｉスコリア層下部の出土に対して、本配石は第Ｉ黒色帯中部と、低い出土となっている。石材は輝石安山岩、多孔質安山岩である。

９号礫群、８・９号配石（第97図）

Ｈ～Ｉ－６グリッドから検出された。南北方向1.3m、東西方向１mの範囲に27点の礫が集中して分布している。主な出土層位は、第Ｉ黒色帯と第Ｉスコリア層の境界付近である。石器ブロック12、炭化物集中25と重複して検出された。

石材は、輝石安山岩４点、玄武岩23点である。８点に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は23点の礫群となった。接合した資料の中には、礫群内の接合に加え、隣接する８号礫群と接合したものも確認されている。

また、礫群の北側、北東側に6,700g、4,600gを超える礫が検出され、それぞれ８号配石、９号配石と設定した。石材は、両者とも玄武岩である。



第97図　第Ⅶ文化層　南西谷部　８～10号礫群、７～９号配石、炭化物集中25 遺構図

10号礫群（第97図）

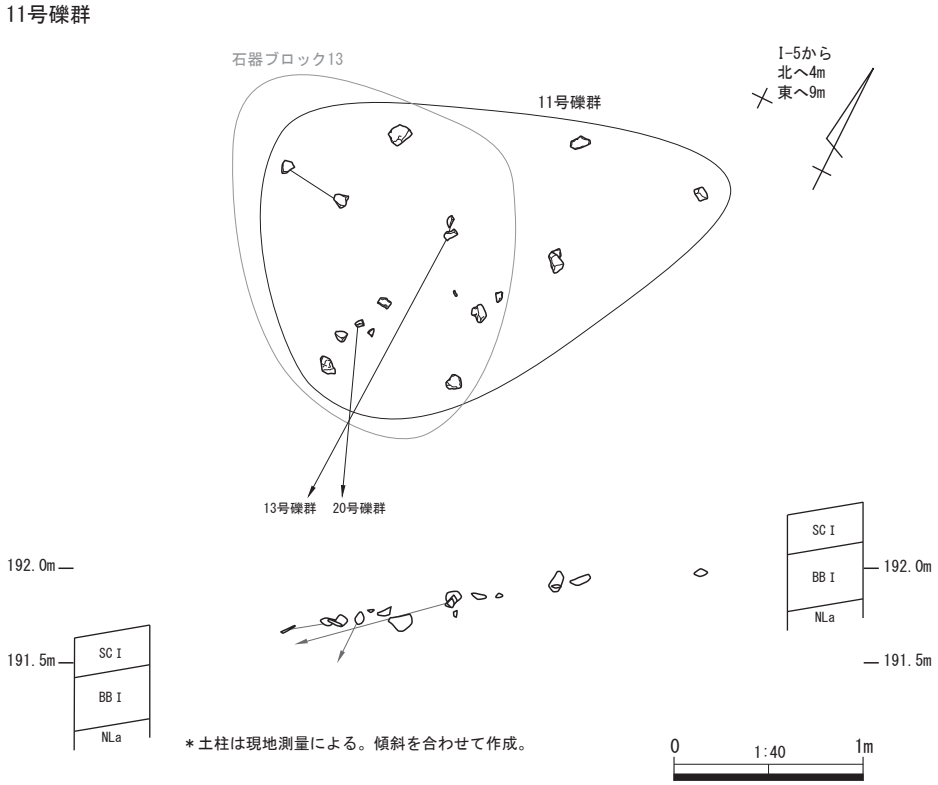
H～I－６グリッドから検出された。北西～南東方向2.7m、北東～南西方向0.5mの長さで９点の礫が、列状に並んで分布している。主な出土層位は、第Ⅰ黒色帯と第Ⅰスコリア層の境界付近である。石器ブロック12、炭化物集中25と重複して検出された。

石材は、輝石安山岩７点、玄武岩２点である。８点に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は５点の礫群となった。接合は全て礫群内であった。

11号礫群（第98図）

Ⅰ－５グリッドから検出された。東西方向2.3m、南北方向1.7mの範囲に18点の礫が集中して分布している。主な出土層位は第Ⅰスコリア層の下部である。石器ブロック13と重複して検出された。

石材は、輝石安山岩９点、玄武岩７点、多孔質玄武岩２点である。５点に接合関係が確認され、その



第98図　第Ⅶ文化層　南西谷部 11号礫群 遺構図

結果、接合後個体数16点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、南方向へ８ｍの距離を隔てた13号礫群と、南東方向へ13ｍの距離を隔てた20号礫群と、それぞれ接合が確認された。構成礫の大半は200g以下の小型の礫だが、1,000gを超える礫が１点出土している。

12号礫群（第99図）

Ｈ～Ｉ－５グリッドから検出された。東西方向1.8m、南北方向1.6ｍの範囲に、６点の礫が散漫に分布している。主な出土層位は第Ⅰスコリア層の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷部のやや緩やかな斜面である。一部、炭化物集中26と重複して検出された。

石材は、輝石安山岩４点、玄武岩２点である。４点に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数４点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、南側の13・16号礫群、南方向へ約19mの距離を隔てた45号礫群と、それぞれ接合が確認された。また、遺構外では、南東方向へ16ｍの距離を隔てたＧ－５の礫との接合も確認された。

13号礫群、10号配石（第99・100図）

Ｈ－５グリッドから検出された。南北方向6.1m、東西方向3.5ｍの範囲に87点の礫が分布している。主な出土層位は第Ⅰスコリア層の下部である。付近は、北から南にかけて下る谷部のやや緩やかな斜面であり、分布は斜面に沿うようにして、帯状に伸びている。一部、炭化物集中26と重複して検出された。

石材は、輝石安山岩27点、多孔質安山岩４点、玄武岩19点、多孔質玄武岩37点である。27点に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数74点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、北側の11・12号礫群、東側の16号礫群、南東方向へ約８ｍの距離を隔てた19号礫群、南方向へ8.5ｍの距離を隔てた21号礫群、南東方向へ10ｍの距離を隔てた24号礫群と、それぞれ接合が確認された。また、

遺構外では、南東方向へ6.3mの距離を隔てたＧ－６の礫、同方向へ6.7mの距離を隔てたＨ－６の礫との接合も確認された。構成礫の大半は500g以下の小型の礫だが、1,000gを超える礫が３点、2,800gを超える礫が１点出土している。

礫群の中央付近に3,200gを超える大型の礫が検出され、10号配石と設定した。石材は多孔質玄武岩である。

また、石器が17点重複して出土した。内訳は、ナイフ形石器１点（72)、微細な剥離痕を有する剥片２点、剥片類14点である。石材は、黒曜石14点（天城柏峠群３点、諏訪星ヶ台群２点、蓼科冷山群１点、和田鷹山群１点、推定不可１点、未分析６点)、ホルンフェルス２点、ガラス質黒色安山岩１点である。

14号礫群（第101図）

Ｈ－６グリッドから検出された。北西～南東方向1.2m、北東～南西方向0.9mの範囲に13点の礫が集中して分布している。主な出土層位は第Ⅰスコリア層の下部である。付近は、北から南にかけて下る谷部の斜面である。

石材は輝石安山岩２点、玄武岩10点、多孔質玄武岩１点である。４点に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は11点の礫群となった。接合は全て礫群内であった。

15号礫群（第101図）

Ｈ－６グリッドから検出された。南北方向1.6m、東西方向0.7mの範囲に、11点の礫が集中して分布している。主な出土層位は第Ⅰスコリア層の下部である。付近は、北から南にかけて下る谷部の斜面である。

石材は、輝石安山岩３点、玄武岩８点である。10点に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数６点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、西側の16号礫群、南西方向へ約７～10mの距離を隔てた20・21・22号礫群と、それぞれ接合が確認された。構成礫の大半は500g以下の小型の礫だが、1,100gを超える礫が２点出土している。

16号礫群（第101図）

Ｈ－６グリッドから検出された。南北方向2.6m、東西方向1.7mの範囲に、32点の礫が集中して分布している。主な出土層位は第Ⅰスコリア層の下部である。付近は、北から南にかけて下る谷部のやや緩やかな斜面である。

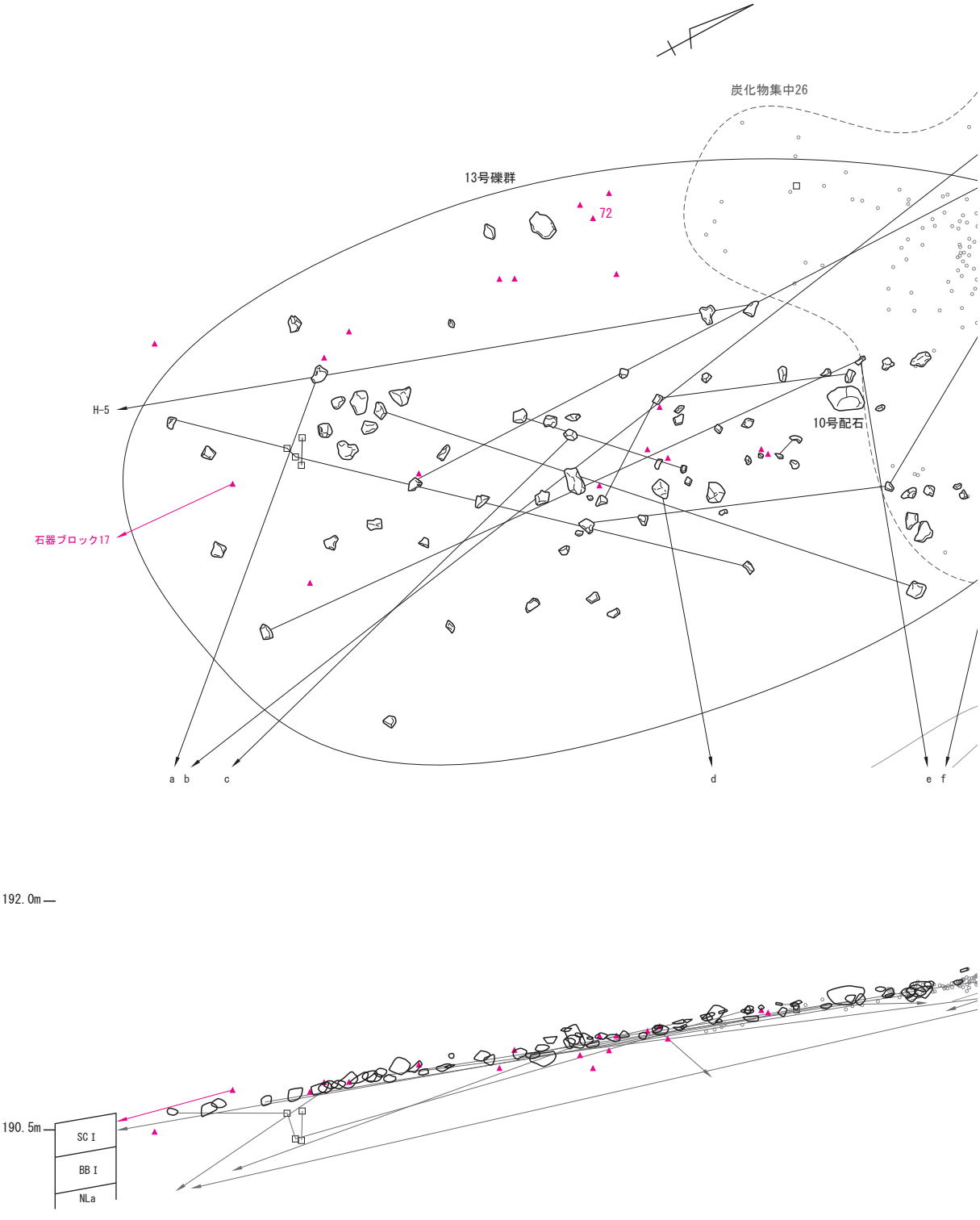
石材は、輝石安山岩13点、多孔質安山岩１点、玄武岩13点、多孔質玄武岩５点である。14点に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数27点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、西側の12・13号礫群、南側の17号礫群、東側の15号礫群、南東方向へ約５ｍの距離を隔てた19号礫群、南方向へ約７ｍの距離を隔てた20号礫群と、それぞれ接合が確認された。また、遺構外では、南東方向へ7.4mの距離を隔てたＨ－６の礫との接合も確認された。構成礫の大半は500g以下の小型の礫だが、1,000gを超える礫が６点出土している。

また、石器が１点重複して出土した。黒曜石（未分析）の剥片類である。

17号礫群（第101図）

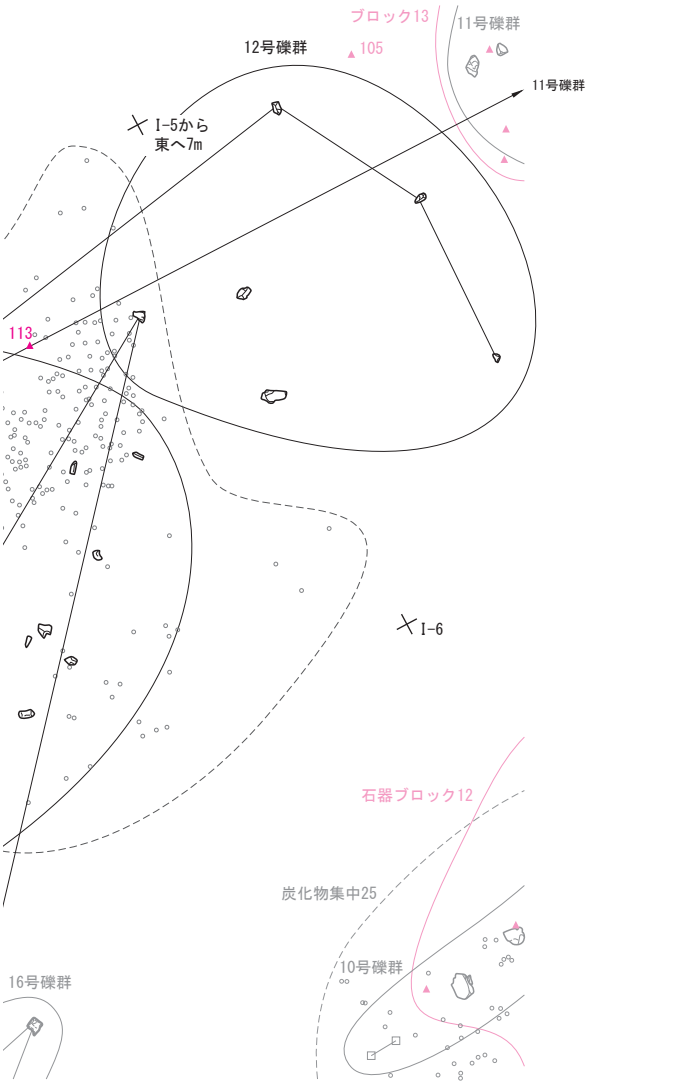
Ｈ－６グリッドから検出された。北西～南東方向1.3m、北東～南西方向0.5mの範囲に、６点の礫が分布している。主な出土層位は第Ⅰスコリア層の下部である。付近は、北から南にかけて下る谷部の斜面である。

12・13号礫群
10号配石
炭化物集中26



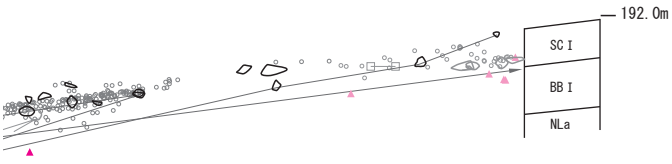
＊土柱は現地測量による。傾斜を合わせて作成。

第99図　第Ⅶ文化層　南西谷部 12・13号礫群、10号配石、炭化物集中26 遺構図

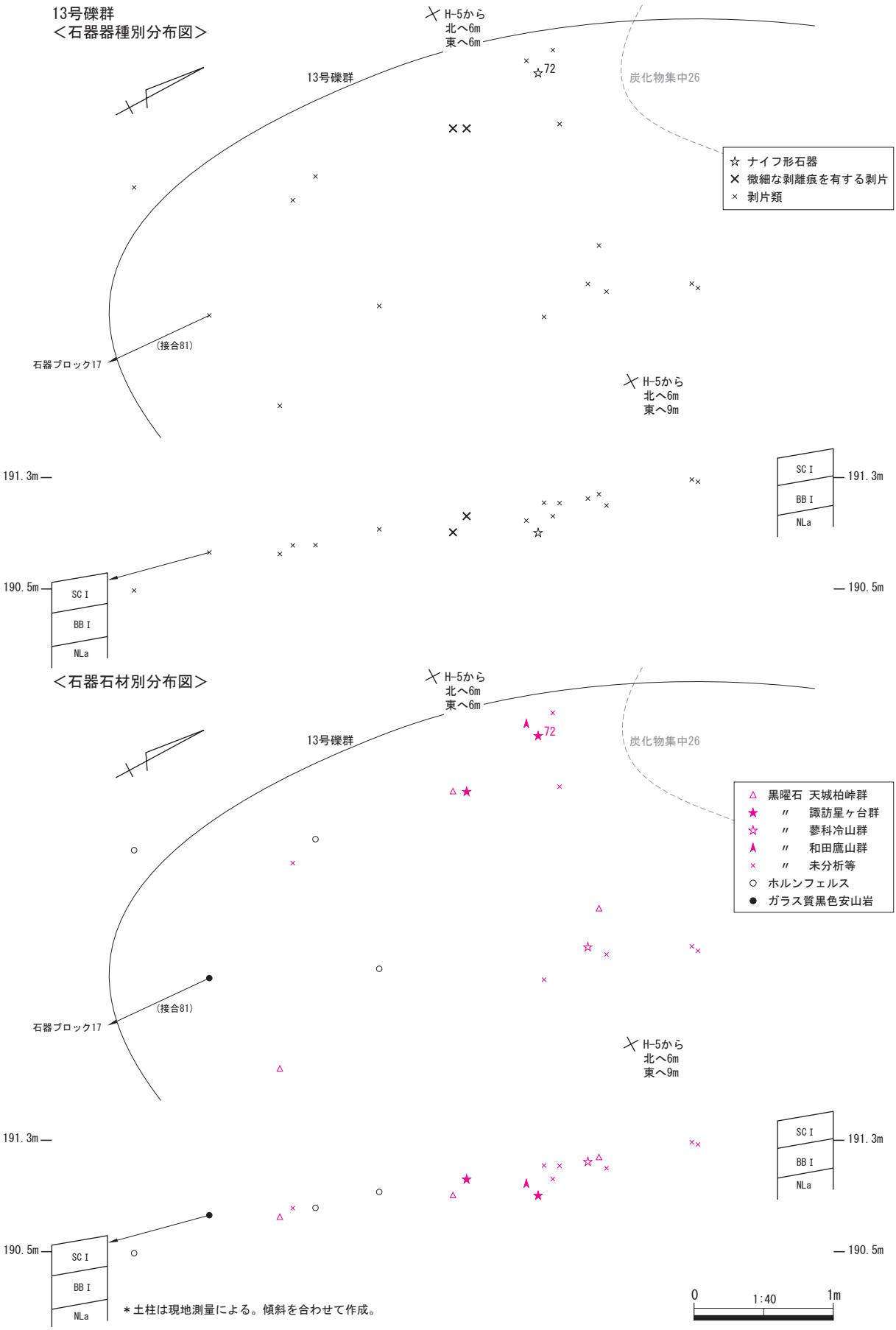


▲ 石器
□ 礫
◦ 炭化物

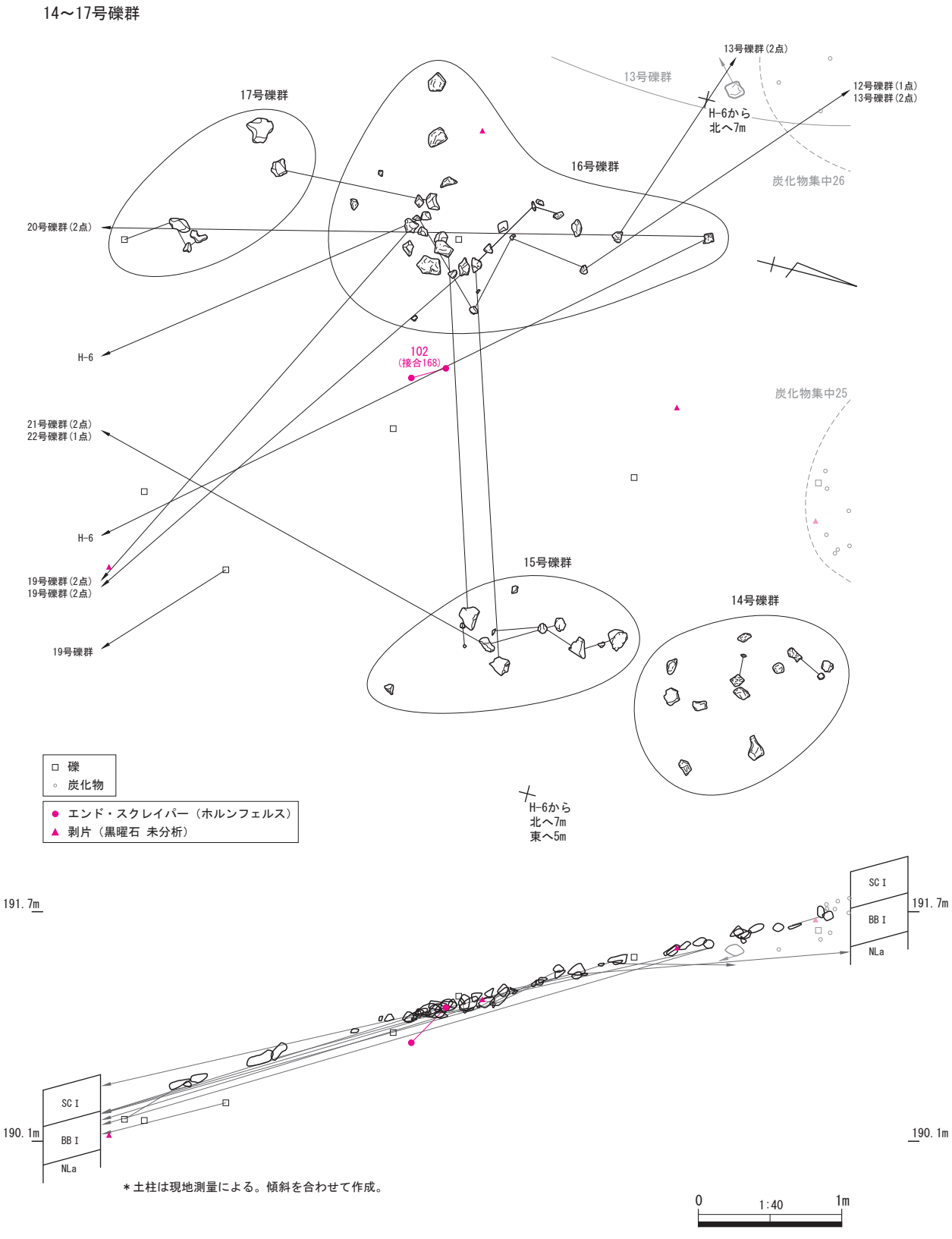
＜接合先＞
a　G-6
b　G-5(2点)・45号礫群
c　21号礫群
d　19号礫群(2点)・24号礫群
e　16号礫群
f　16号礫群(4点)・H-6



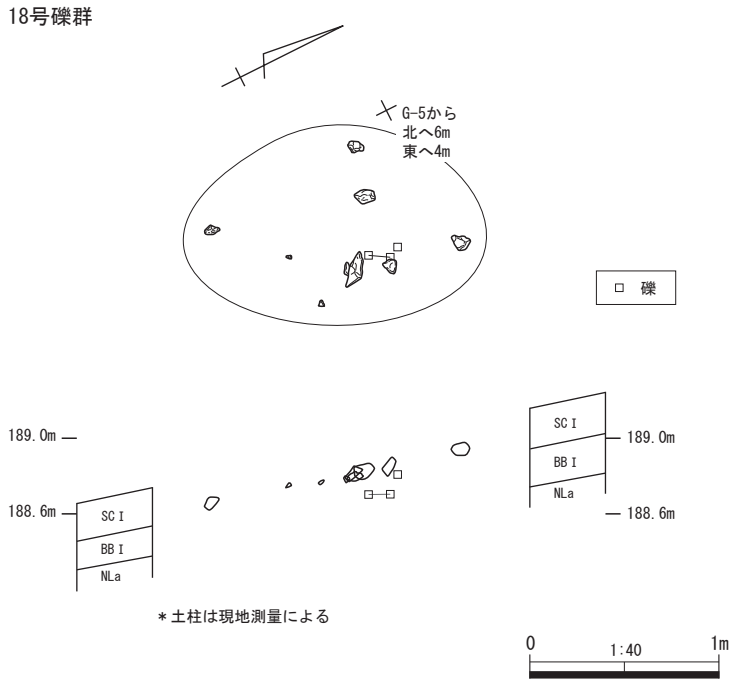
0　1:40　1m



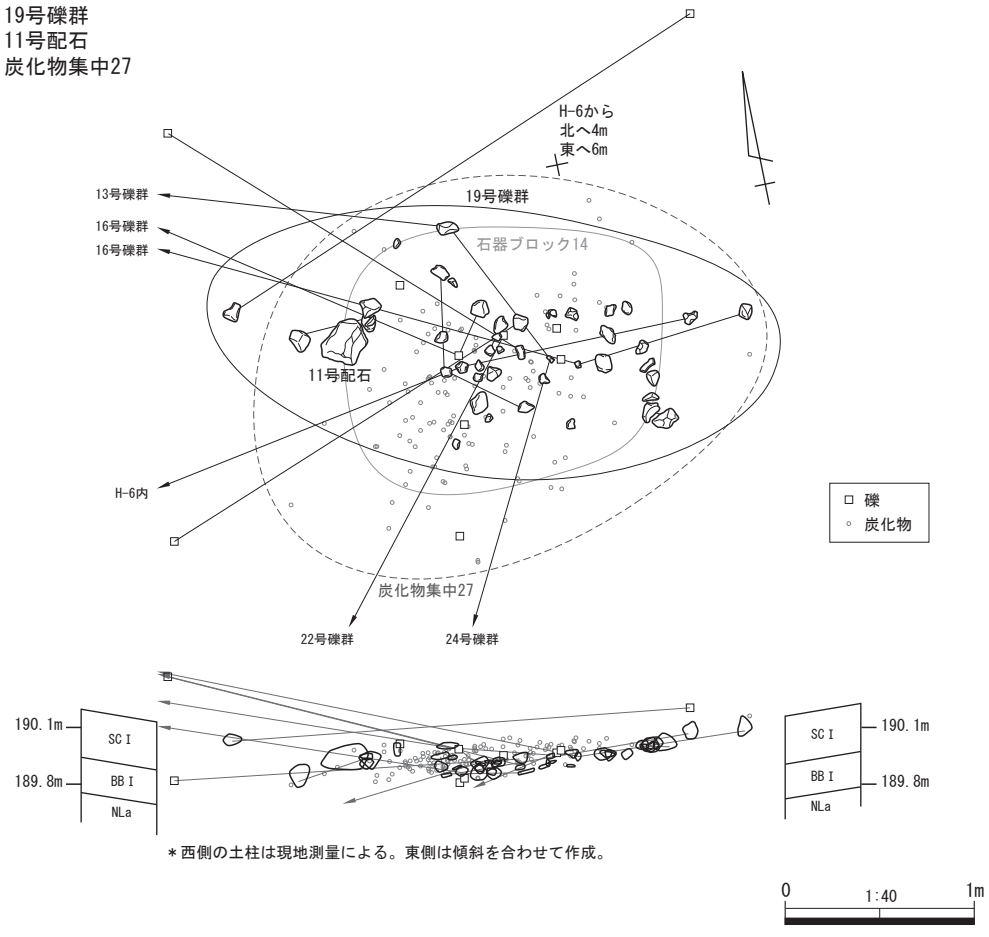
第100図　第Ⅶ文化層　南西谷部 13号礫群 石器分布図



第101図　第Ⅶ文化層　南西谷部 14～17号礫群 遺構図



第102図　第Ⅶ文化層　南西谷部 18号礫群 遺構図



第103図　第Ⅶ文化層　南西谷部 19号礫群、11号配石、炭化物集中27 遺構図

石材は、多孔質安山岩１点、玄武岩５点である。５点に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数３点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、北側の16号礫群と接合が確認された。構成礫の大半は500g以下の小型の礫だが、それぞれ1,000g、1,800gを超える礫が２点出土している。

18号礫群（第102図）

Ｇ－５グリッドから検出された。北東～南西方向1.4m、北西～南東方向0.9mの範囲に10点の礫が集中して分布している。主な出土層位は第Ⅰスコリア層の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷部のやや緩やかな斜面である。

石材は、輝石安山岩４点、多孔質安山岩２点、玄武岩３点、多孔質玄武岩１点である。構成礫に接合関係は確認できなかった。

19号礫群、11号配石（第103図）

Ｈ－６グリッドから検出された。東西方向2.8m、南北方向1.3mの範囲に49点の礫が集中して分布している。主な出土層位は第Ⅰスコリア層の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。石器ブロック14・炭化物集中27と重複して検出された。

石材は、輝石安山岩11点、多孔質安山岩２点、玄武岩17点、多孔質玄武岩19点である。21点に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は39点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、北西方向に約５ｍの距離を隔てた13・16号礫群と、南西方向に約７ｍの距離を隔てた22・24号礫群と、それぞれ接合が確認された。また、遺構外では、同一グリッド内の礫との接合も確認された。構成礫の大半は500g以下の小型の礫だが、2,000gを超える礫が１点出土している。

礫群の西側に6,500gを超える大型の礫が検出され、11号配石と設定した。石材は輝石安山岩である。

20号礫群、12号配石（第104図）

Ｇ～Ｈ－６グリッドから検出された。南北方向1.5m、東西方向1.2mの範囲に13点の礫が集中して分布している。主な出土層位は第Ⅰスコリア層の中部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。

石材は、輝石安山岩３点、玄武岩８点、多孔質玄武岩２点である。８点に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数11点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、南側に隣接する21～24号礫群、北西方向へ約13mの距離を隔てた11号礫群、北方向へ約７ｍの距離を隔てた15・16号礫群、南西方向へ約13mの距離を隔てた46号礫群と、それぞれ接合が確認された。また、遺構外では、北東方向へ約３ｍの距離を隔てたＨ－６の礫との接合も確認された。構成礫の大半は500g以下の小型の礫だが、1,600gを超える礫が１点出土している。

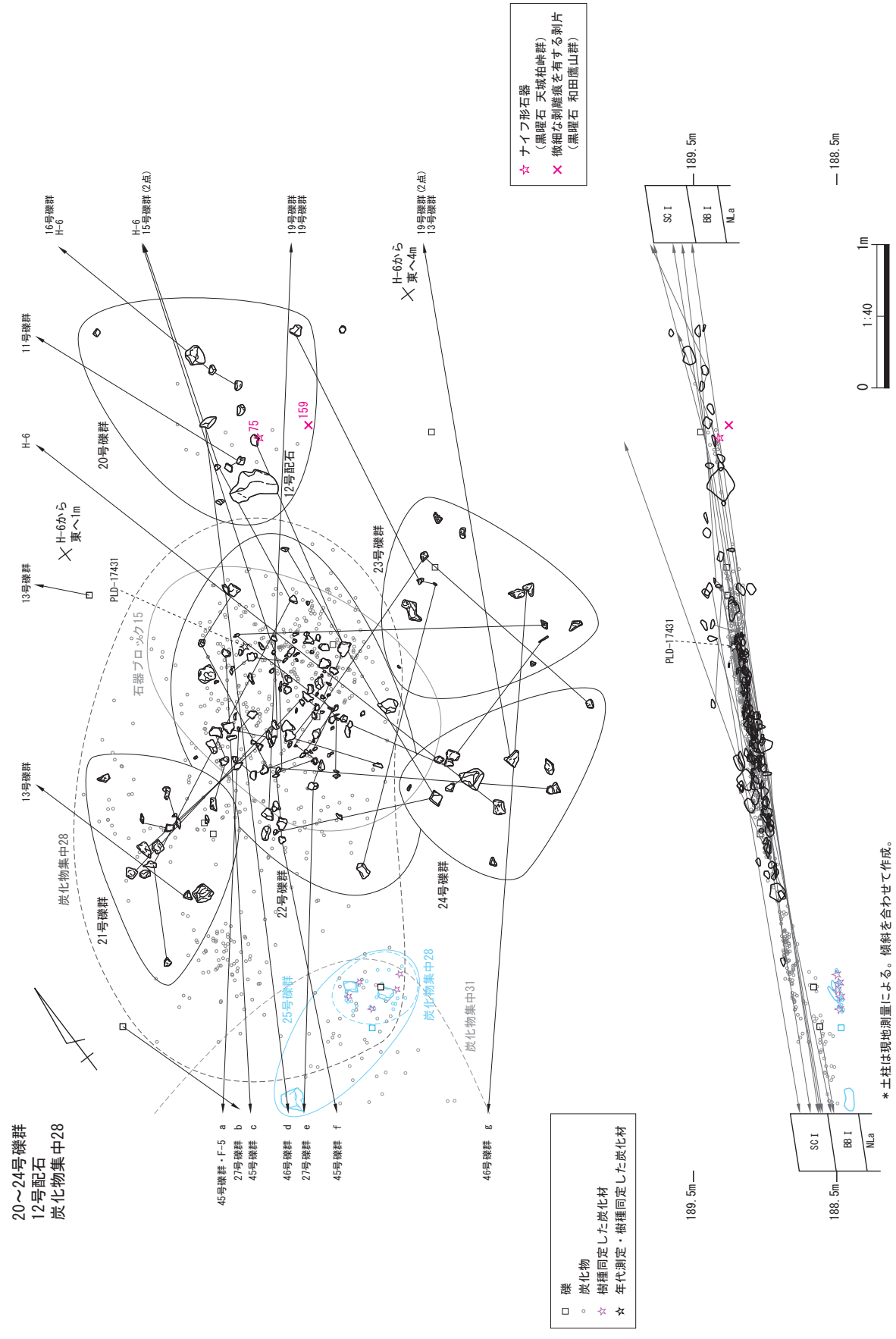
また、石器が２点重複して出土した。内訳は、黒曜石（天城柏峠群）製のナイフ形石器１点（75）、黒曜石（和田鷹山群）製の微細な剥離痕を有する剥片１点（159）である。

礫群の南側に12,500gを超える大型の礫が検出され、12号配石と設定した。石材は輝石安山岩である。

21号礫群（第104図）

Ｇ－５～６グリッドから検出された。南北方向1.4m、東西方向１ｍの範囲に18点の礫が集中して分布している。主な出土層位は第Ⅰスコリア層の中部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。炭化物集中28と重複して検出された。

石材は、輝石安山岩４点、玄武岩10点、多孔質玄武岩４点である。10点に接合関係が確認され、その



第104図　第Ⅶ文化層　南西谷部 20～24号礫群、12号配石、炭化物集中28 遺構図

結果、接合後個体数15点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、東側に隣接する20・22～24号礫群、北方向へ約８ｍの距離を隔てた13号礫群、北東方向へ約10ｍの距離を隔てた15号礫群と、それぞれ接合が確認された。構成礫の大半は300g以下の小型の礫だが、1,400gを超える礫が１点出土している。

22号礫群（第104図）

Ｇ－６グリッドから検出された。南北方向2.2m、東西方向1.4ｍの範囲に112点の礫が密集して分布している。主な出土層位は第Ⅰスコリア層の中部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。石器ブロック15、炭化物集中28と重複して検出された。

石材は、輝石安山岩54点、多孔質安山岩３点、玄武岩42点、多孔質玄武岩13点である。55点に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数81点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、隣接する20・21・23・24号礫群、北東方向へ約８ｍの距離を隔てた15号礫群、同方向へ約７ｍの距離を隔てた19号礫群、南西方向へ3.3ｍの距離を隔てた27号礫群、同方向へ約９ｍの距離を隔てた45号礫群と、それぞれ接合が確認された。また、遺構外では、南西方向へ約10ｍの距離を隔てたＦ－５の礫との接合も確認された。構成礫はすべて350g以下の小型の礫である。

23号礫群（第104図）

Ｇ－６グリッドから検出された。南北方向1.3m、東西方向1.2ｍの範囲に14点の礫が集中して分布している。主な出土層位は第Ⅰスコリア層の中部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。一部石器ブロック15と重複して検出された。

石材は、輝石安山岩９点、玄武岩５点である。６点に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数13点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、隣接する20～22・24号礫群、南西方向へ約９ｍの距離を隔てた45号礫群、同方向へ約12ｍの距離を隔てた46号礫群と、それぞれ接合が確認された。構成礫の大半は300g以下の小型の礫である。

24号礫群（第104図）

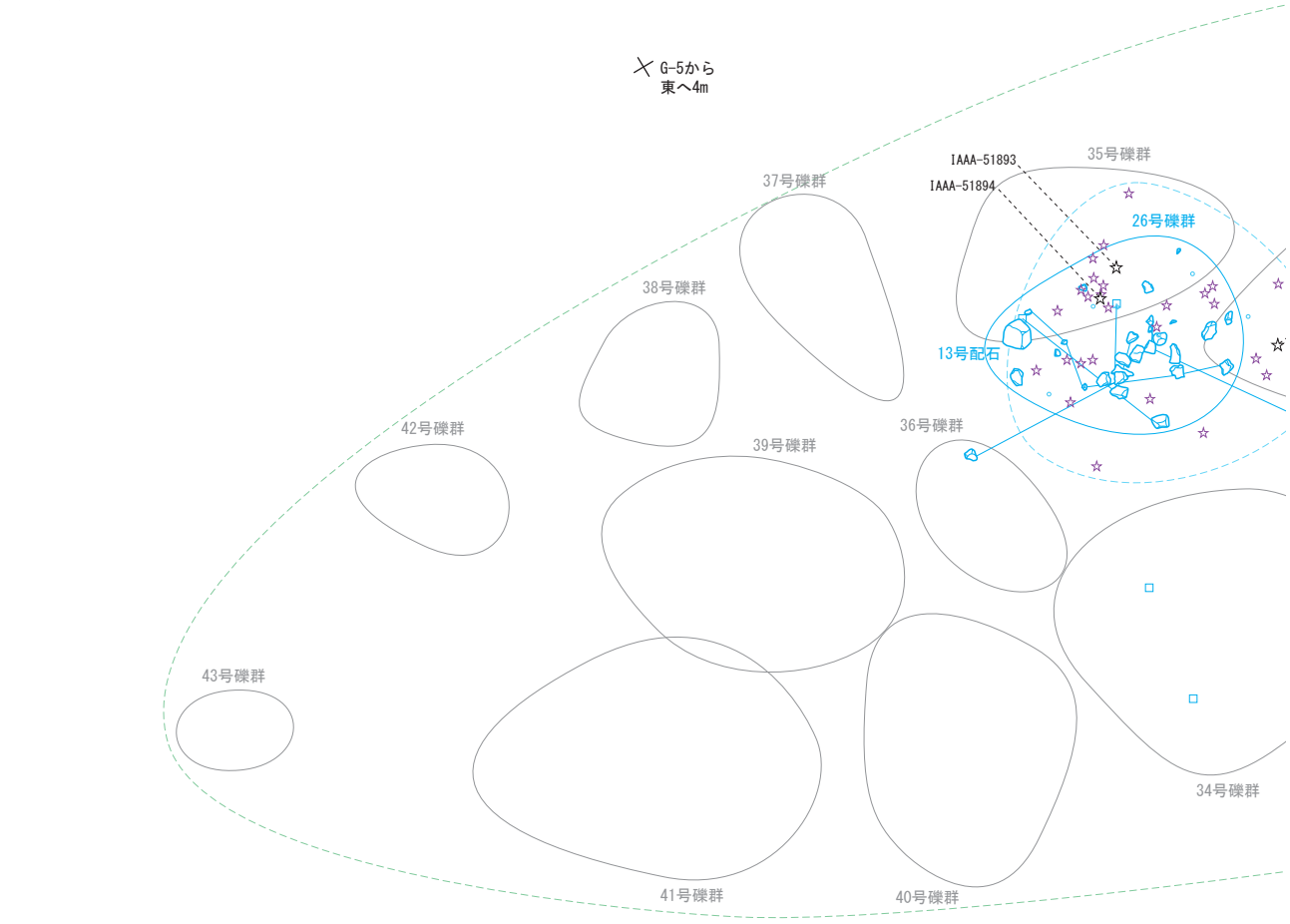
Ｇ－６グリッドから検出された。東西方向1.4m、南北方向0.9ｍの範囲に14点の礫が集中して分布している。主な出土層位は第Ⅰスコリア層の中部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。一部石器ブロック15と重複して検出された。

石材は、輝石安山岩４点、玄武岩５点、多孔質玄武岩５点である。９点に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数12点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、隣接する20・22・23号礫群、北西方向へ約10ｍの距離を隔てた13号礫群、北東方向へ約７ｍの距離を隔てた19号礫群、南西方向へ約８ｍの距離を隔てた45号礫群と、それぞれ接合が確認された。また、遺構外では、北西方向へ約８ｍの距離を隔てたＨ－６の礫との接合も確認された。構成礫の大半は300g以下の小型の礫だが、1,900gを超える礫が１点出土している。

25号礫群（第105図）

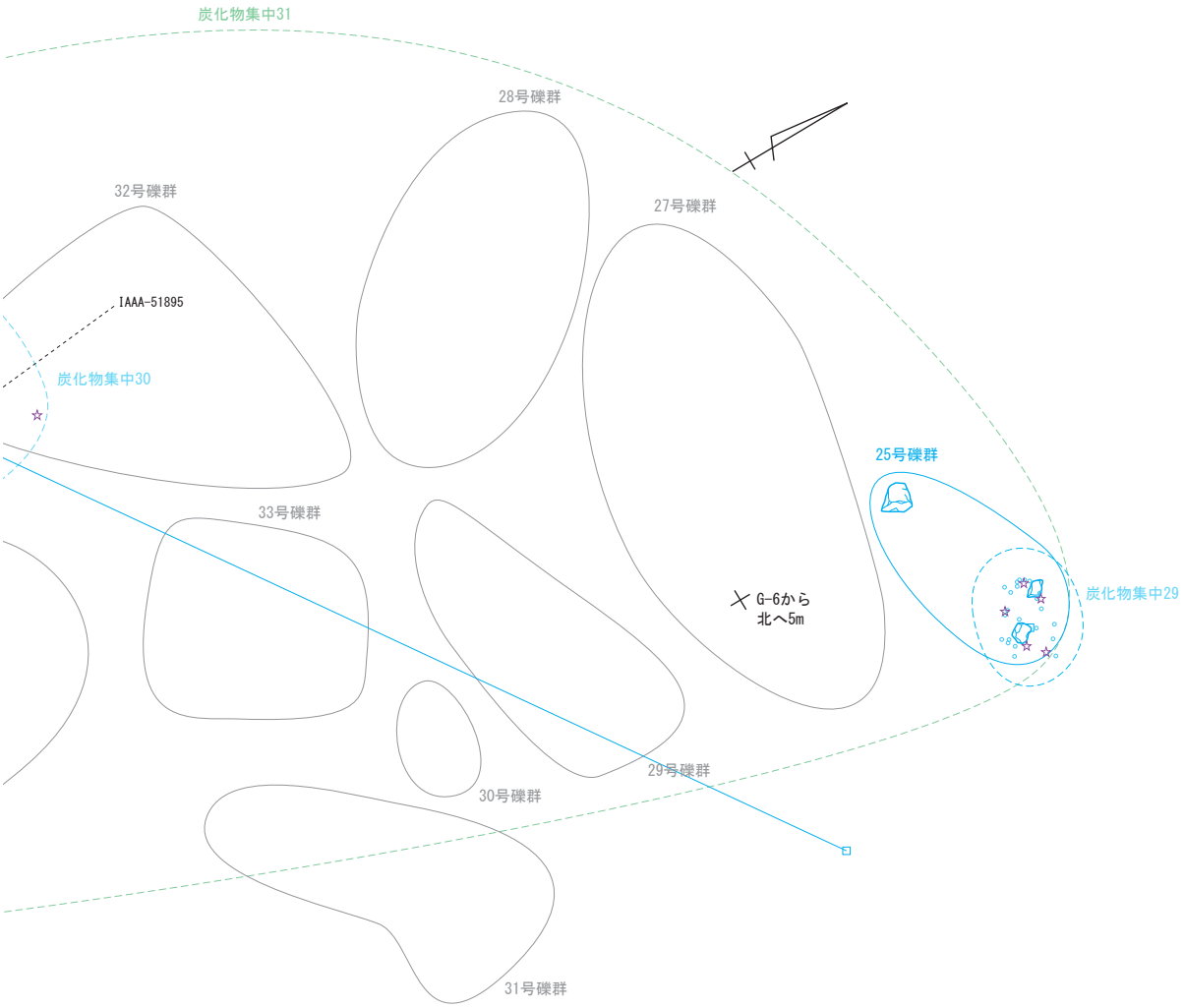
Ｇ－６グリッドから検出された。北東～南西方向1.1m、北西～南東方向0.3ｍの範囲に４点の礫が分布している。主な出土層位は第Ⅰ黒色帯の下部である。石器ブロック16の北側に隣接しており、付近の遺構が第Ⅰスコリア層下部の出土に対して、本礫群は第Ⅰ黒色帯下部と、低い出土となっている。構成礫のうち３点は炭化物集中29と重複して検出された。少し離れた西側の１点は1,800gを超える礫である。

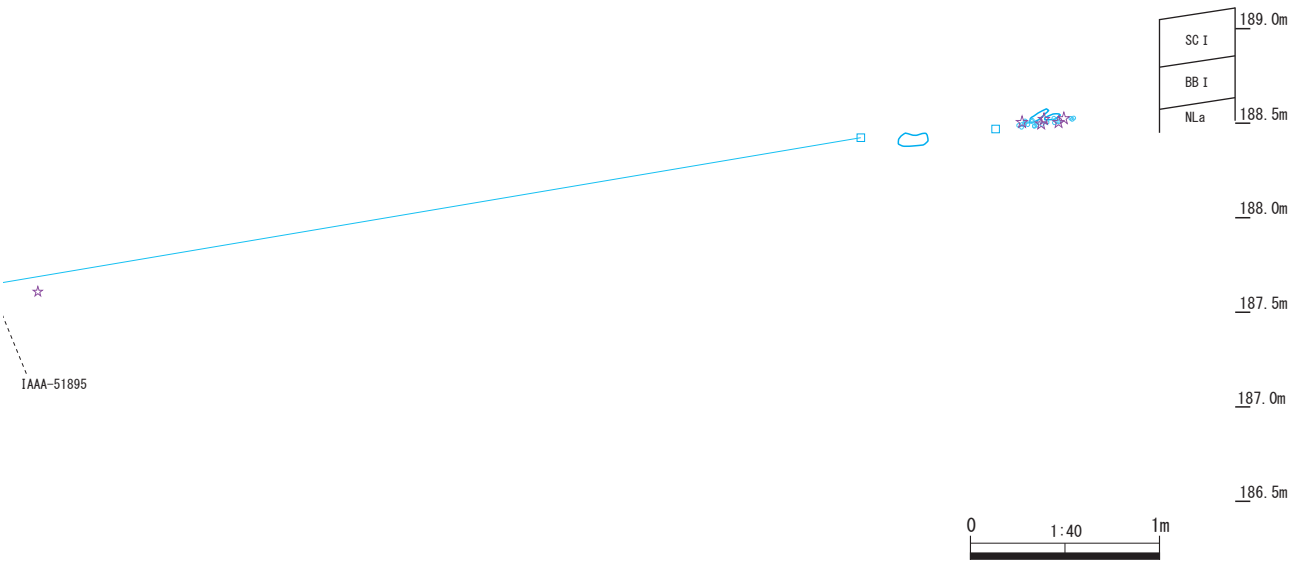
25・26号礫群
13号配石
炭化物集中29・30



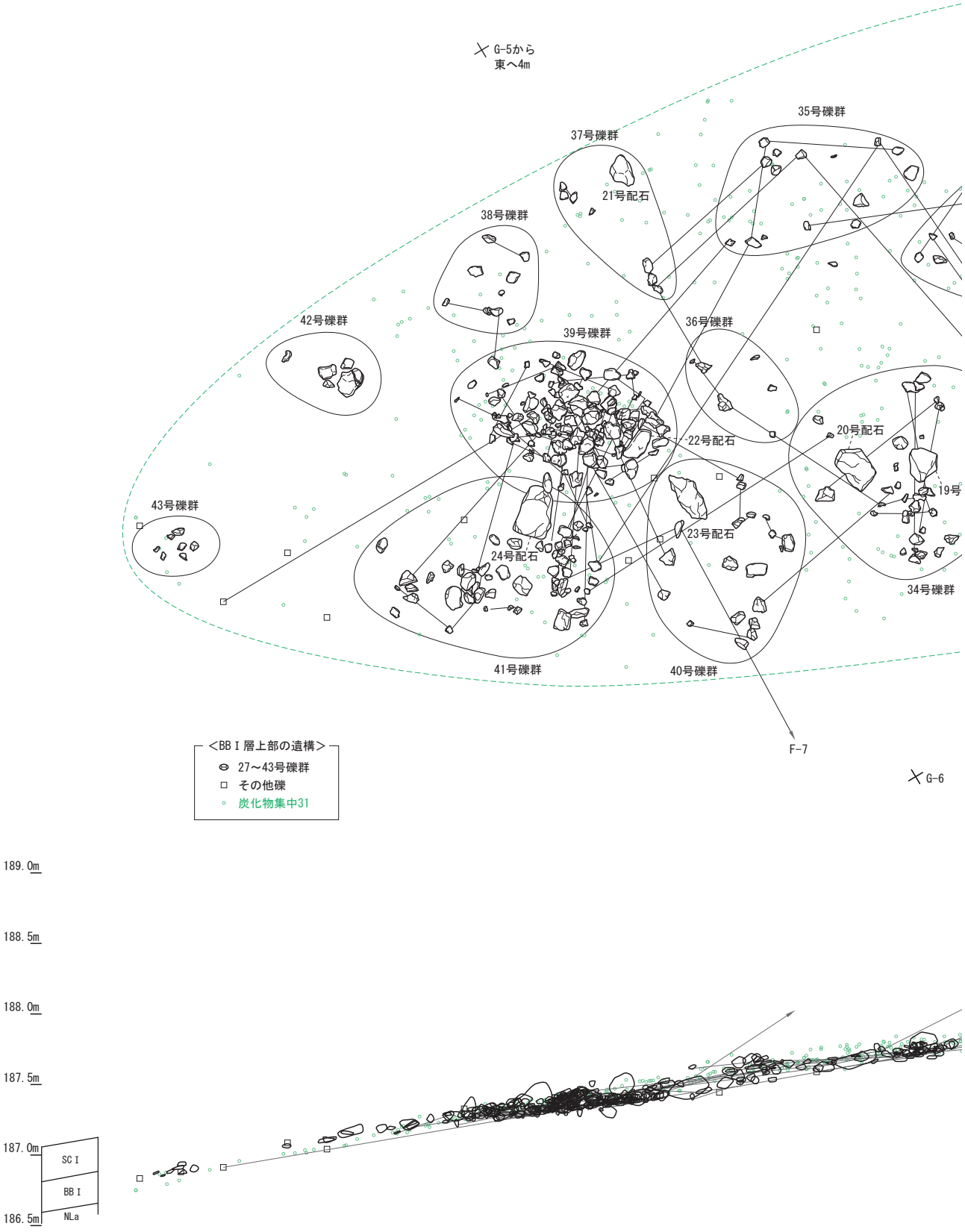
＊土柱は現地測量による。傾斜を合わせて作成。

第105図　第Ⅶ文化層　南西谷部 25・26号礫群、 13号配石、炭化物集中29・30 遺構図


炭化物集中31
28号礫群
32号礫群
27号礫群
IAAA-51895
炭化物集中30
25号礫群
33号礫群
G-6から
北へ5m
炭化物集中29
29号礫群
30号礫群
31号礫群

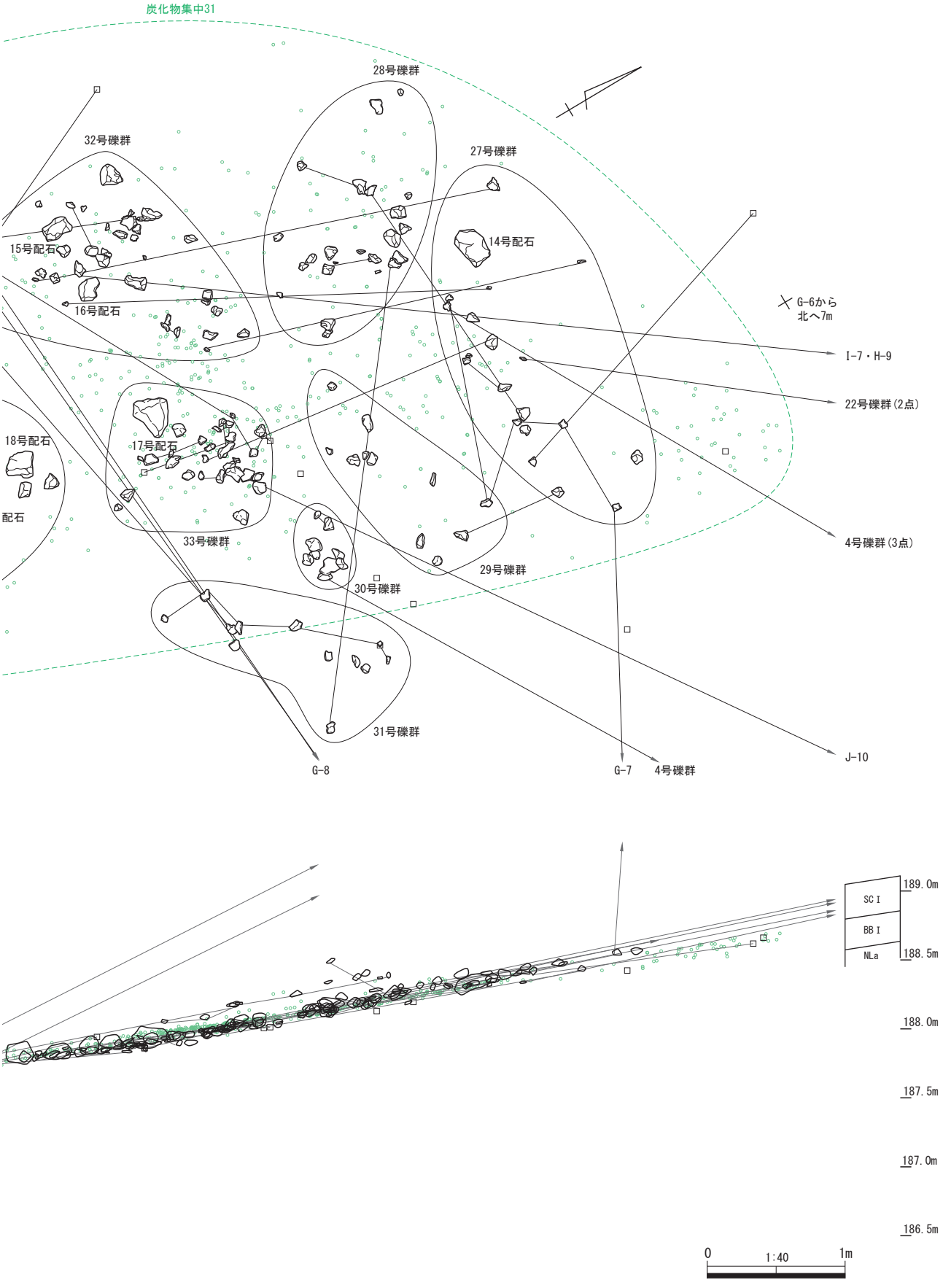

SC I
BB I
NLa
189.0m
188.5m
188.0m
187.5m
187.0m
186.5m
IAAA-51895
0
1:40
1m

27～43号礫群
14～24号配石
炭化物集中31



＊土柱は現地測量による。傾斜を合わせて作成。

第106図　第Ⅶ文化層　南西谷部 27～43号礫群、14～24号配石、炭化物集中31 遺構図


炭化物集中31
28号礫群
32号礫群
27号礫群
14号配石
15号配石
16号配石
G-6から
北へ7m
I-7・H-9
22号礫群(2点)
18号配石
17号配石
配石
33号礫群
4号礫群(3点)
29号礫群
30号礫群
31号礫群
G-8
G-7
4号礫群
J-10
SC I
BB I
NLa
189.0m
188.5m
188.0m
187.5m
187.0m
186.5m
0
1:40
1m

石材は輝石安山岩２点、玄武岩２点である。接合関係は確認されなかった。

また、石器が２点重複して出土した。内訳は、黒曜石（箱根畑宿群）製のサイド・スクレイパー（114）と、ホルンフェルス製の石刃（139）である。

26号礫群、13号配石（第105図）

Ｇ－５グリッドから検出された。南北方向1.6m、東西方向0.8mの範囲に30点の礫が密集して分布している。主な出土層位は第Ⅰ黒色帯の下部である。石器ブロック16、炭化物集中30と重複して検出された。礫群の分布範囲の土壌には、明瞭な赤褐色の焼土塊も認められた。

石材は、輝石安山岩９点、多孔質安山岩３点、玄武岩13点、多孔質玄武岩５点である。17点に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は19点の礫群となった。礫群内の接合に加え、遺構外では、６mの距離を隔てたＧ－６の礫との接合が確認された。

礫群の南西側に3,400gを超える大型の礫が検出され、13号配石と設定した。石材は玄武岩である。

27～43号礫群、14～24号配石（第106図）

Ｆ～Ｇ－５～６グリッドから検出された。北東～南西方向10.5m、北西～南東方向4.6mの範囲に459点の礫が分布している。上下に多少の幅を持って分布しているが、出土のピークは第Ⅰ黒色帯の上部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。石器ブロック16と重複して検出された。また、炭化物集中31とも重複しており、分布範囲の一部には焼土が確認された。同一地点の上層からは、石器ブロック17、44～47号礫群、25・26号配石、炭化物集中32も重複して検出された。

以下、各礫群について個別に記載する。なお、配石は重複する礫群に含む。

27号礫群、14号配石（第106図）

東西方向2.6m、南北方向1.1mの範囲に19点の礫が分布している。石材は、輝石安山岩４点、玄武岩14点、多孔質玄武岩１点である。11点に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は15点の礫群となった。接合礫の半数は礫群内の接合であった。礫群間では、28・29・32・33号礫群との接合に加え、遺構外では、北東方向へ４mの距離を隔てた22号礫群、さらに同方向へ57mの距離を隔てた４号礫群と、それぞれ接合が確認された。

また、礫群の西側に7,200gを超える礫が検出され、14号配石と設定した。石材は輝石安山岩である。

28号礫群（第106図）

北西～南東方向1.9m、北東～南西方向１mの範囲に23点の礫が分布している。

石材は、輝石安山岩９点、玄武岩11点、多孔質玄武岩３点である。８点に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は19点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間では27・31号礫群と、それぞれ接合が確認された。構成礫の大半は500g以下の小型の礫だが、１点のみ1,100gを超える礫が検出されている。

29号礫群（第106図）

東西方向1.5m、南北方向0.8mの範囲に11点の礫が集中して分布している。

石材は、輝石安山岩３点、多孔質安山岩１点、玄武岩７点である。２点に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は11点の礫群となった。いずれも27号礫群と接合が確認された。

30号礫群（第106図）

北西～南東方向0.5m、北東～南西方向0.3mの範囲に９点の礫が密集して分布している。

石材は、輝石安山岩１点、玄武岩３点、多孔質玄武岩５点である。３点に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は８点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間では北東方向へ57mの距離を隔てた４号礫群と接合が確認された。

31号礫群（第106図）

北東～南西方向1.7m、北西～南東方向0.9mの範囲に13点の礫が分布している。

石材は、輝石安山岩３点、玄武岩10点である。８点に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は８点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間では28号礫群、35・37号礫群と、それぞれ接合が確認された。

32号礫群、15・16号配石（第106図）

北東～南西方向2.1m、北西～南東方向1.2mの範囲に38点の礫が集中して分布している。

石材は、輝石安山岩８点、玄武岩25点、多孔質玄武岩５点である。構成礫のうち18点に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は32点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間では27・33・35号礫群と、また、遺構外では、それぞれ29m・43m・24mの距離を隔てた、Ｇ－８・Ｈ－９・Ｉ－７の礫との接合が確認された。構成礫の大半は500g以下の小型の礫だが、１点のみ2,000gを超える礫が検出されている。

礫群の中央付近に3,800g、3,100gを超える大型の礫が検出され、それぞれ15・16号配石と設定した。石材は15号が玄武岩、16号が多孔質玄武岩である。

33号礫群、17号配石（第106図）

南北方向1.2m、東西方向0.9mの範囲に34点の礫が密集して分布している。

石材は、輝石安山岩７点、玄武岩25点、多孔質玄武岩２点である。20点に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は21点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間では27・32号礫群と、それぞれ接合が確認された。また遺構外では、54mの距離を隔てたＪ－10の礫との接合が確認された。

礫群の西側に8,500gを超える大型礫が検出され、17号配石と設定した。石材は多孔質玄武岩である。

34号礫群、18～20号配石（第106図）

北東～南西方向1.4m、北西～南東方向1.3mの範囲に33点の礫が集中して分布している。

石材は、輝石安山岩９点、多孔質安山岩１点、玄武岩20点、多孔質玄武岩３点である。20点に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は20点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間では36・40・41号礫群と、それぞれ接合が確認された。構成礫の大半は500g以下の小型の礫だが、１点のみ1,100gを超える礫が検出されている。

また、礫群中央部の北から南にかけて一列に並ぶ様に、7,300g、5,800g、9,100gを超える大型の礫が検出され、それぞれ18号配石、19号配石、20号配石と設定した。石材は、18号が輝石安山岩、19・20号が多孔質玄武岩である。

35号礫群（第106図）

南北方向1.5m、東西方向0.8mの範囲に15点の礫が集中して分布している。

石材は、輝石安山岩５点、玄武岩９点、多孔質玄武岩１点である。８点に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は13点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、31・32・37・39・41号礫群と、それぞれ接合が確認された。また、遺構外では、27mの距離を隔てたＧ－８の礫との接合が確認された。

36号礫群（第106図）

東西方向0.8m、南北方向0.5mの範囲に６点の礫が分布している。

石材は、輝石安山岩３点、玄武岩３点である。３点に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は５点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間では34・37号礫群と、それぞれ接合が確認された。

37号礫群、21号配石（第106図）

東西方向1.1m、南北方向0.2mの範囲に７点の礫が列状に分布している。

石材は、輝石安山岩２点、玄武岩４点、多孔質玄武岩１点である。５点に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は６点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、31・35・36号礫群と、それぞれ接合が確認された。

礫群の北側に3,900gを超える大型の礫が検出され、21号配石と設定した。石材は玄武岩である。

38号礫群（第106図）

南北方向0.7m、東西方向0.6mの範囲に10点の礫が分布している。

石材は、輝石安山岩２点、玄武岩５点、多孔質玄武岩３点である。６点に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は６点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、39号礫群と接合が確認された。

39号礫群、22号配石（第106図）

北東～南西方向1.5m、北西～南東方向1.1mの範囲に133点の礫が密集して分布している。

石材は、輝石安山岩37点、多孔質安山岩１点、玄武岩94点、多孔質玄武岩１点である。75点に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は89点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、35・38・40・41号礫群と、それぞれ接合が確認された。構成礫の大半は500g以下の小型の礫だが、1,000gを超える礫が２点検出されている。

礫群の北東側に3,600gを超える大型の礫が検出され、22号配石と設定した。石材は玄武岩である。

40号礫群、23号配石（第106図）

北西～南東方向1.3m、北東～南西方向１mの範囲に20点の礫が分布している。

石材は、輝石安山岩12点、玄武岩８点である。14点に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は13点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、34・39・41号礫群と、それぞれ接合が確認された。また、遺構外では、22mの距離を隔てたＦ－７の礫との接合が確認された。

礫群の西側に6,500gを超える大型の礫が検出され、23号配石と設定した。石材は輝石安山岩である。

41号礫群、24号配石（第106図）

北東～南西方向1.5m、北西～南東方向0.9mの範囲に61点の礫が集中して分布している。

石材は、輝石安山岩22点、玄武岩37点、多孔質玄武岩２点である。27点に接合関係が確認され、その

結果、接合後個体数は50点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、34・35・39・40号礫群と、それぞれ接合が確認された。構成礫の大半は500g以下の小型の礫であるが、それぞれ1,400g、1,500g、1,800gを超える礫が３点出土している。

礫群の北西側に20,900gを超える大型の礫が検出され、24号配石と設定した。石材は輝石安山岩である。

42号礫群（第106図）

北東～南西方向0.6m、北西～南東方向0.3mの範囲に５点の礫が集中して分布している。

石材は、輝石安山岩３点、玄武岩２点である。接合は確認されなかった。構成礫のうち、2,000gを超える礫が３点出土している。

43号礫群（第106図）

北東～南西方向0.3m、北西～南東方向0.2mの範囲に９点の小型礫が集中して分布している。

石材は、輝石安山岩６点、玄武岩３点である。接合は確認されなかった。

44～47号礫群、25・26号配石（第107図）

Ｆ～Ｇ－５グリッドから検出された。北東～南西方向7.6m、北西～南東方向3.1mの範囲に201点の礫が分布している。上下に多少の幅を持って分布しているが、出土のピークは第Ⅰスコリア帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。石器ブロック17と重複して検出された。また、47号礫群を除き、炭化物集中32とも重複しており、分布範囲の一部には焼土が確認された。

同一地点の下層の第Ⅰ黒色帯の上部からは、石器ブロック16、27～43号礫群、14～24号配石、炭化物集中31も重複して検出された。さらに下層の第Ⅰ黒色帯の下部からも、26号礫群、13号配石、炭化物集中30が重複して検出されている。

以下、各礫群について個別に記載する。なお、配石は重複する礫群に含む。

44号礫群（第107図）

東西方向1.5m、南北方向1.0mの範囲に26点の礫が分布している。

石材は、輝石安山岩11点、玄武岩11点、多孔質玄武岩４点である。16点に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は20点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、45号礫群と接合が確認された。また、遺構外では、周辺のＧ－５の礫との接合が確認された。

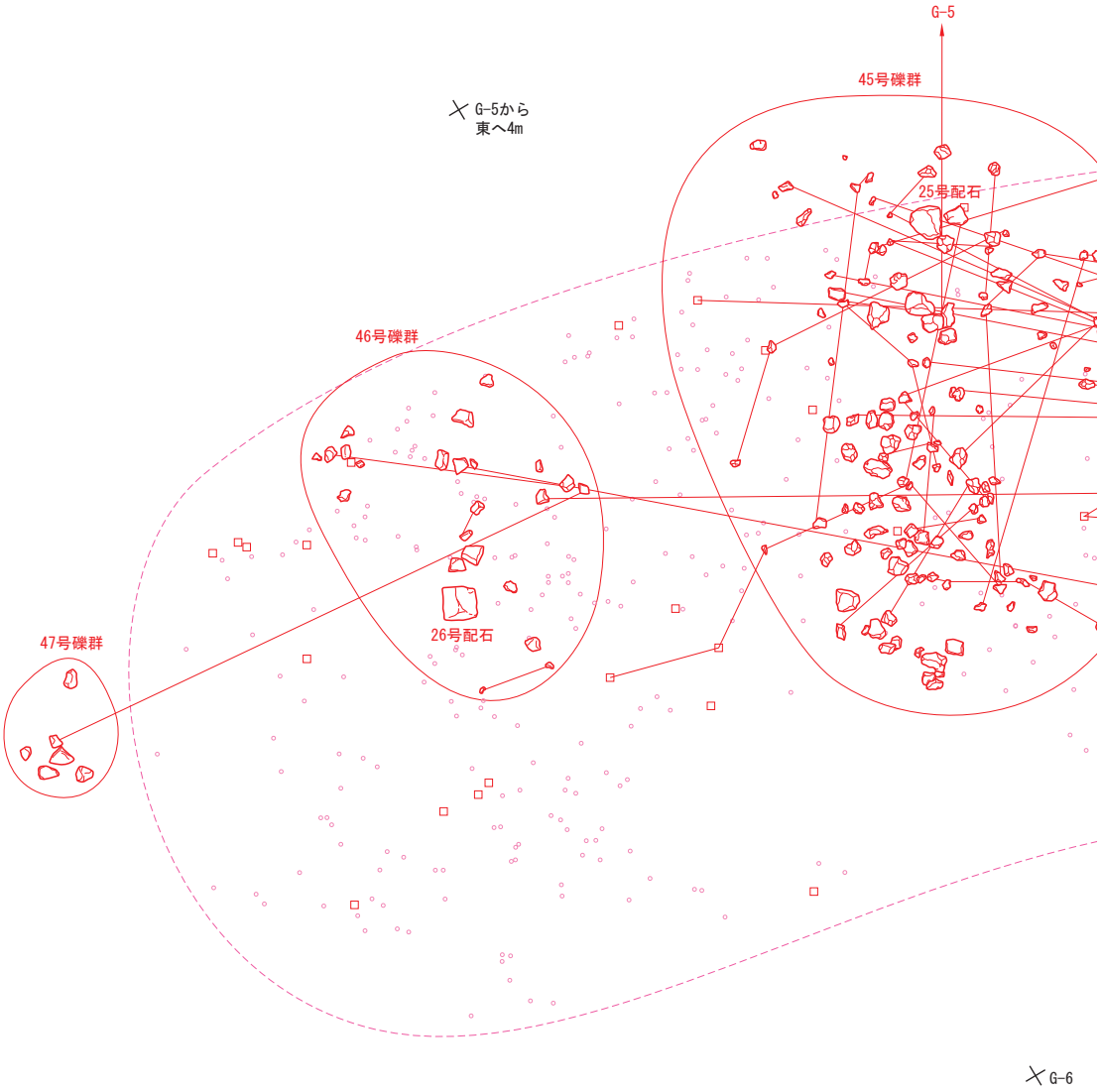
45号礫群、25号配石（第107図）

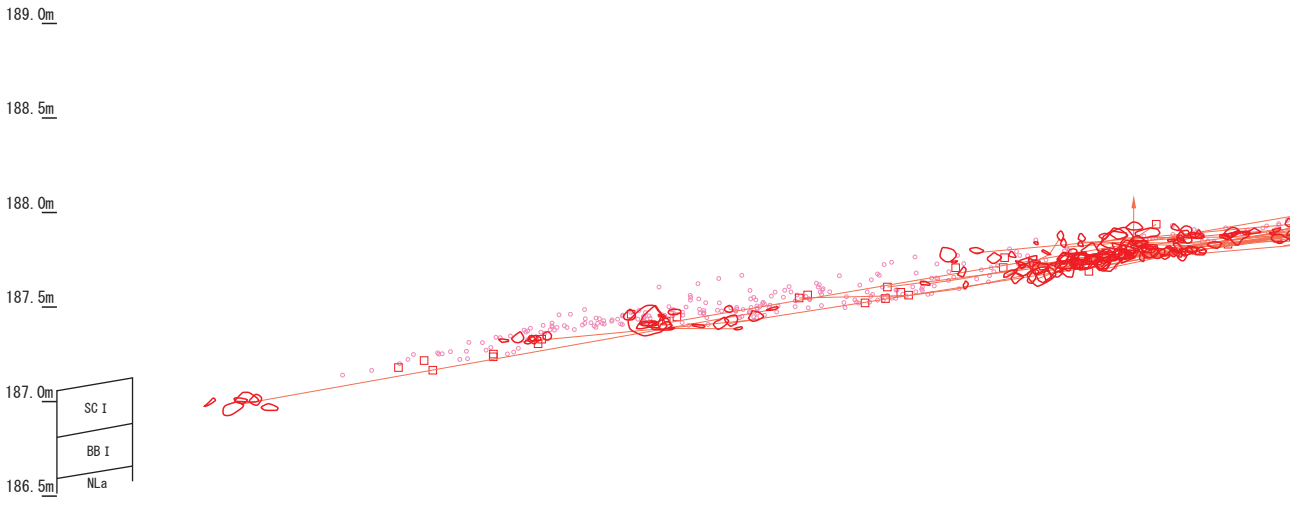
東西方向3.2m、南北方向2.4mの範囲に140点の礫が集中して分布している。

石材は、輝石安山岩55点、多孔質安山岩７点、玄武岩54点、多孔質玄武岩24点である。67点に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は103点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、隣接する44号礫群、北方向に約19mの距離を隔てた12号礫群、北東方向に約９mの距離を隔てた22・23・24号礫群と、それぞれ接合が確認された。また遺構外では、周辺のＦ－５、Ｇ－５の礫との接合が確認された。構成礫の大半は500g以下の小型の礫だが、それぞれ1,100g、1,800g、2,200gを超える礫が３点出土している。

礫群の西側に4,000gを超える大型の礫が検出され、25号配石と設定した。石材は玄武岩である。

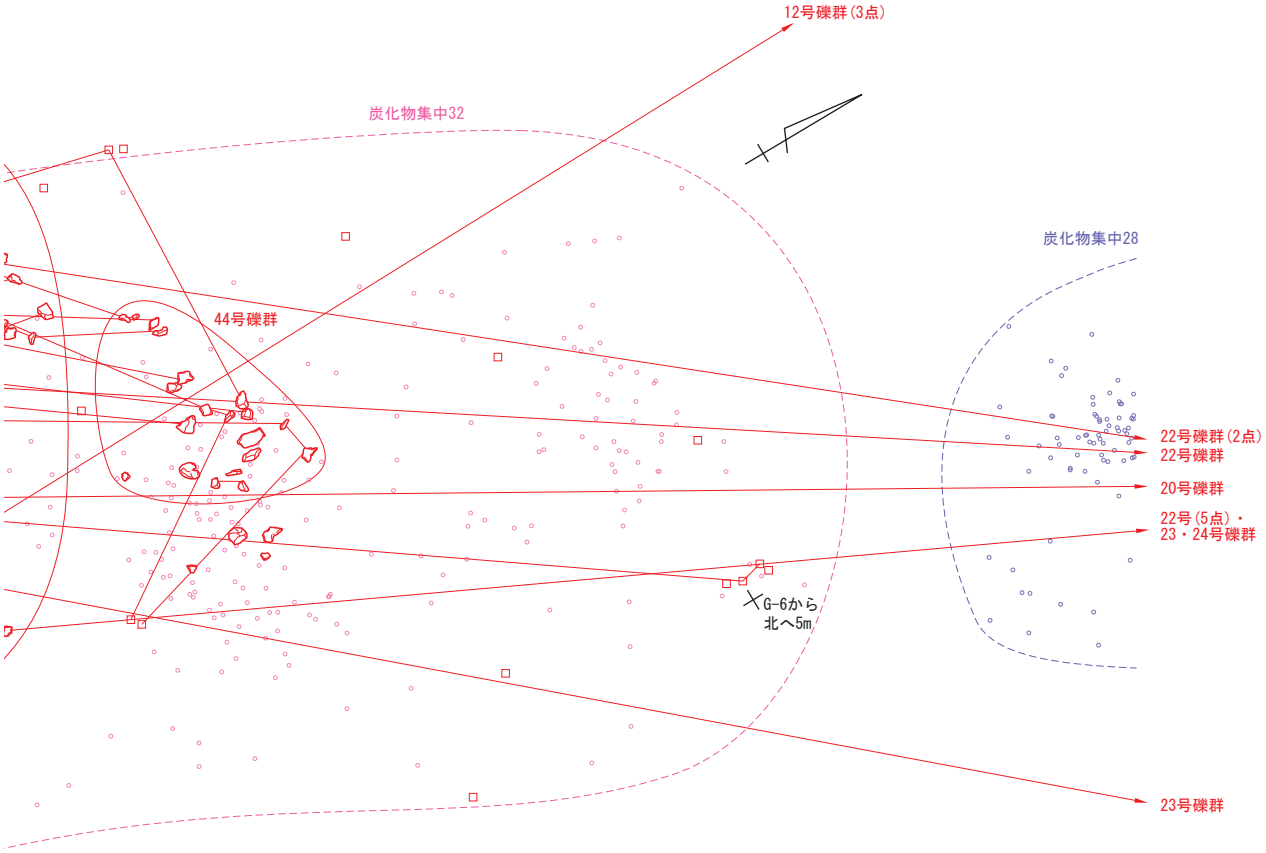
44～47号礫群
25・26号配石
炭化物集中32

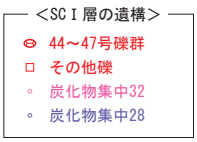


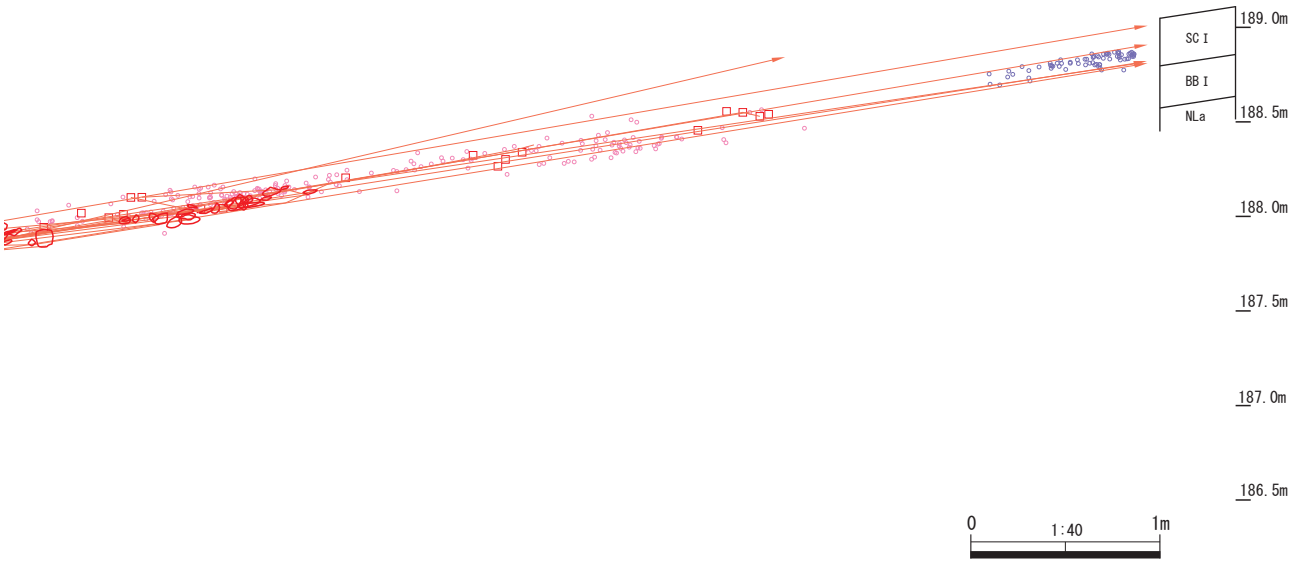


＊土柱は現地測量による。傾斜を合わせて作成。

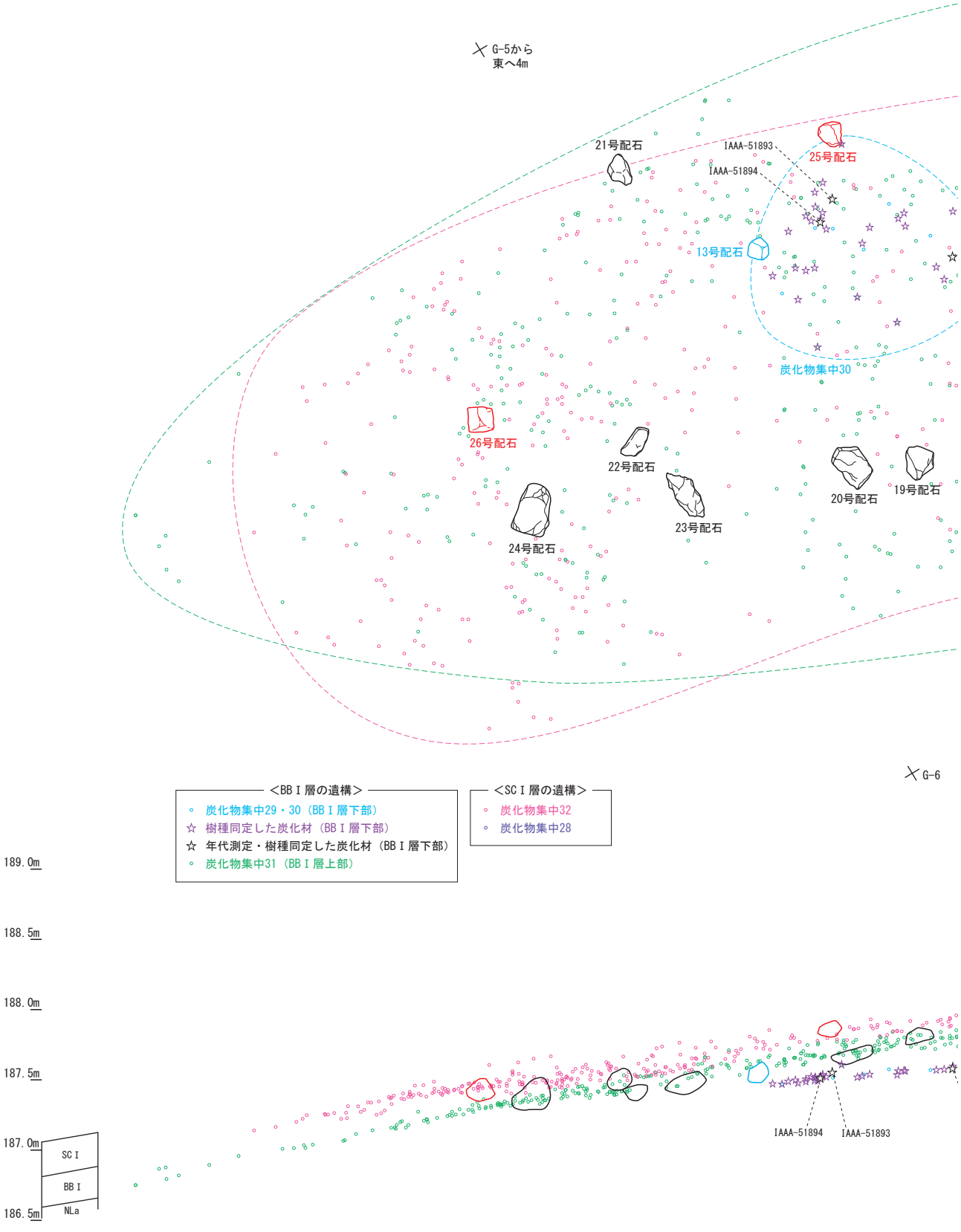
第107図　第Ⅶ文化層　南西谷部 44～47号礫群、25・26号配石、炭化物集中32 遺構図


12号礫群(3点)
炭化物集中32
炭化物集中28
44号礫群
22号礫群(2点)
22号礫群
20号礫群
22号(5点)・
23・24号礫群
G-6から
北へ5m
23号礫群


＜SC I 層の遺構＞
44～47号礫群
その他礫
炭化物集中32
炭化物集中28

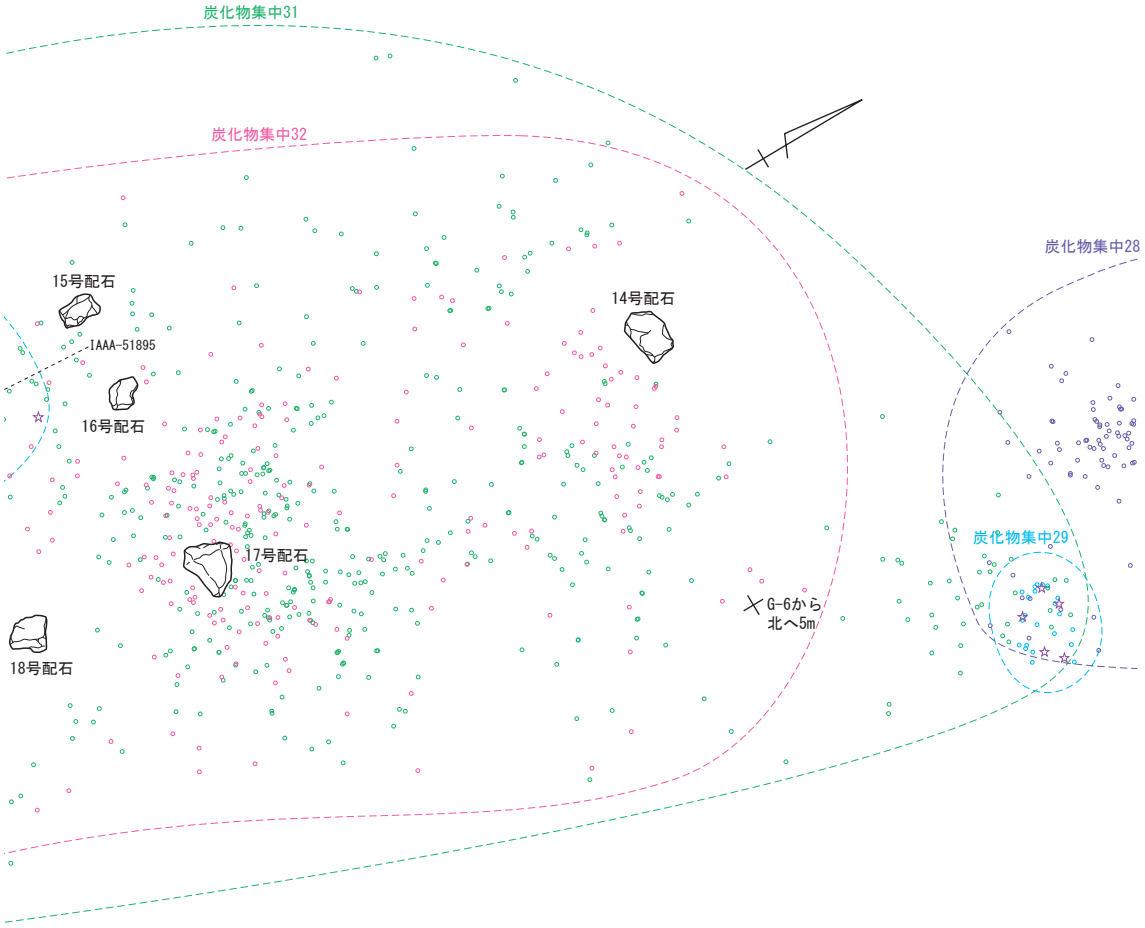

SC I
BB I
NLa
189.0m
188.5m
188.0m
187.5m
187.0m
186.5m
0
1:40
1m

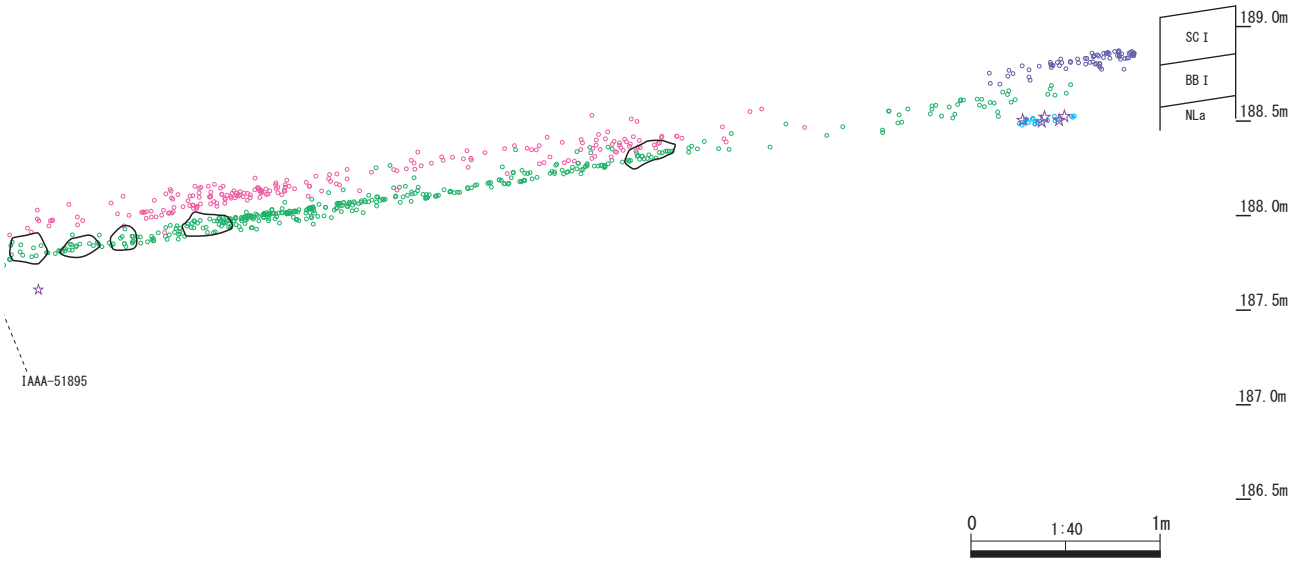
13～26号配石
炭化物集中29～32



＊土柱は現地測量による。傾斜を合わせて作成。

第108図　第Ⅶ文化層　南西谷部 13～26号配石、炭化物集中29～32 遺構図


炭化物集中31
炭化物集中32
炭化物集中28
炭化物集中29
15号配石
14号配石
IAAA-51895
16号配石
17号配石
18号配石
G-6から
北へ5m


SC I
BB I
NLa
189.0m
188.5m
188.0m
187.5m
187.0m
186.5m
IAAA-51895
0
1:40
1m

46号礫群、26号配石（第107図）

東西方向1.6m、南北方向1.2mの範囲に29点の礫が分布している。

石材は、輝石安山岩12点、多孔質安山岩１点、玄武岩13点、多孔質玄武岩３点である。９点に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は26点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、隣接する47号礫群、北東方向に約12mの距離を隔てた20・23号礫群と、それぞれ接合が確認された。

礫群の南東側に6,300gを超える大型の礫が検出され、26号配石と設定した。石材は玄武岩である。

47号礫群（第107図）

北西～南東方向0.6m、北東～南西方向0.4mの範囲に６点の礫が集中して分布している。

石材は、輝石安山岩３点、玄武岩３点である。構成礫のうち１点に、46号礫群との礫群間の接合関係が確認された。

ウ　炭化物集中

炭化物集中23（第94図）

Ｊ－10グリッドから検出された。北東～南西方向4.2m、北西～南東方向2.6mの範囲に510点を超える炭化物が集中して分布している。上下に多少の幅を持って分布しているが、出土のピークは第Ⅰスコリア層の下部である。４号礫群と重複して検出されたが、土壌に赤化などの変化は確認できなかった。また、石器ブロック10と重複して検出された。付近は、北東から南西に向かう、谷部の下り始めである。

炭化物集中24（第95図）

Ｈ～Ｉ－６グリッドから検出された。南北方向4.6m、東西方向3.0mの範囲に、390点を超える炭化物が集中して分布している。上下に多少の幅を持って分布しているが、出土のピークは第Ⅰスコリア層の下部である。５～７号礫群、３～６号配石と重複して検出されたが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。また、石器ブロック11と重複して検出された。付近は、北東から南西にかけて下る谷部の斜面である。

炭化物集中25（第97図）

Ｈ～Ｉ－６グリッドから検出された。北東～南西方向5.6m、北西～南東方向3.6mの範囲に、620点を超える炭化物が集中して分布している。上下に多少の幅を持って分布しているが、出土のピークは第Ⅰスコリア層の下部である。８～10号礫群、７～９号配石と重複して検出されたが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。また、石器ブロック12と重複して検出された。付近は、北東から南西にかけて下るやや緩やかな谷部の斜面である。

出土した炭化物のうち炭化材１点について、放射性炭素年代測定（AMS法）を行った。その結果、22,880±70yrBP（PLD－17430）の^{14}C年代値が確認された（詳細は第２分冊附編を参照）。

炭化物集中26（第99図）

Ｈ－５グリッドから検出された。北東～南西方向3.6m、北西～南東方向3.5mの範囲に、240点を超える炭化物が集中して分布している。上下に多少の幅を持って分布しているが、出土のピークは第Ⅰスコリア層の下部である。12・13号礫群と重複して検出されたが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。付近は、北東から南西にかけて下る、やや緩やかな谷部の斜面である。

炭化物集中27（第103図）

Ｈ－６グリッドから検出された。東西方向2.6m、南北方向1.9mの範囲に110点を超える炭化物が集中して分布している。上下に多少の幅を持って分布しているが、出土のピークは第Ⅰスコリア層の下部である。19号礫群、11号配石と重複して検出されたが、土壌に赤化などの変化は確認できなかった。また、石器ブロック14と重複して検出された。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。

炭化物集中28（第104図）

Ｇ－５～６グリッドから検出された。北東～南西方向3.7m、北西～南東方向2.1mの範囲に、530点を超える炭化物が集中して分布している。上下に多少の幅を持って分布しているが、出土のピークは第Ⅰスコリア層の下部である。21・22号礫群と重複して検出されたが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。また、石器ブロック15と重複して検出された。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。

出土した炭化物のうち炭化材１点について、放射性炭素年代測定（AMS法）を行った。その結果、23,180±70yrBP（PLD－17431）の^{14}C年代値が確認された（詳細は第２分冊附編を参照）。

炭化物集中29（第105図）

Ｇ－６グリッドから検出された。東西方向0.7m、南北方向0.3mの範囲に27点の炭化材片が集中して分布している。検出層位は第Ⅰ黒色帯の下部である。25号礫群と重複して検出されたが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。

出土した炭化材片は樹種同定を行い、うち５点について結果を得られた（詳細は第２分冊附編を参照）。

炭化物集中30（第105図）

Ｇ－５グリッドから検出された。南北方向1.7m、東西方向1.6mの範囲に36点の炭化材片が集中して分布している。検出層位は第Ⅰ黒色帯の下部である。26号礫群と重複して検出され、分布範囲の土壌には、明瞭な赤褐色の焼土塊が認められた。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。

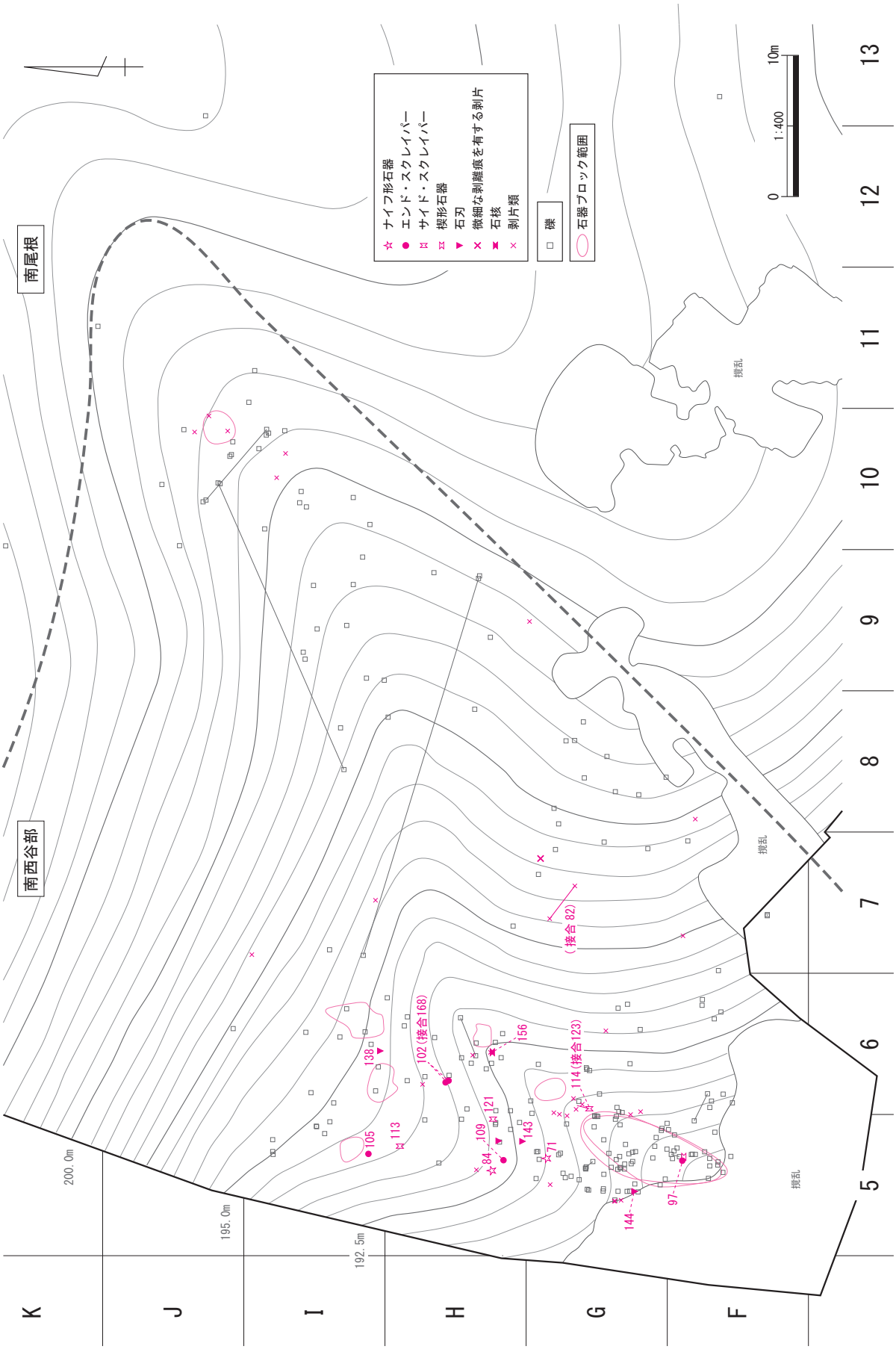
出土炭化材片は樹種同定を行い、うち30点について結果を得られた。これらのうち３点について、放射性炭素年代測定を行った。その結果、24,100±140BP（IAAA－51893）、24,260±100BP（IAAA－51894）、24,220±110BP（IAAA－51895）の補正を行った年代値が確認された（詳細は第２分冊附編を参照）。

炭化物集中31（第106図）

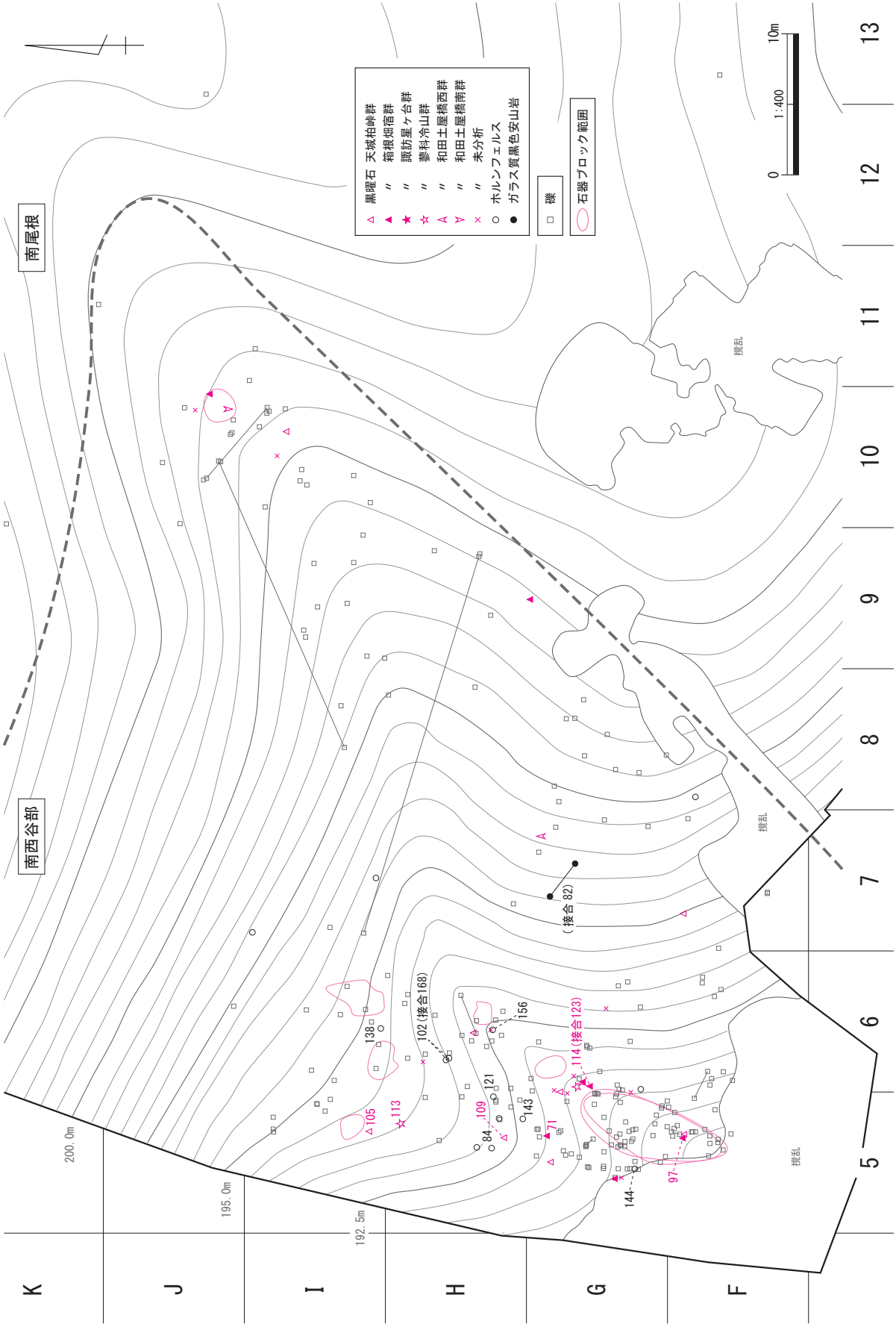
Ｆ～Ｇ－５グリッドから検出された。北東～南西方向11.6m、北西～南東方向4.4mの範囲に、710点を超える炭化物が集中して分布している。上下に多少の幅を持って分布しているが、出土のピークは第Ⅰ黒色帯の上部である。27～43号礫群、14～24号配石と重複して検出されたが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。また、石器ブロック16と重複して検出された。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。

炭化物集中32（第107図）

Ｆ～Ｇ－５グリッドから検出された。北東～南西方向９m、北西～南東方向3.8mの範囲に、480点を超える炭化物が集中して分布している。上下に多少の幅を持って分布しているが、出土のピークは第Ⅰスコリア層の下部である。44～46号礫群、25・26号配石と重複して検出された。また、石器ブロック17と重複して検出された。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。



第109図　第Ⅶ文化層　南西谷部 遺構外出土遺物 器種別分布図



第110図　第Ⅶ文化層　南西谷部 遺構外出土遺物 石材別分布図

（２）遺物

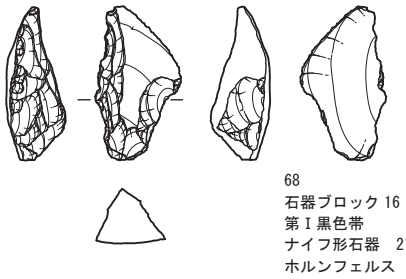
南西谷部からは、石器1,706点が出土した（第24表）。石器群の内訳は、ナイフ形石器が20点、角錐状石器が１点、ラウンド・スクレイパーが８点、エンド・スクレイパーが21点、サイド・スクレイパー16点、ノッチド・スクレイパーが６点、楔形石器が21点、石刃が19点、微細な剥離痕を有する剥片27点、石核が７点、剥片類が1,558点、敲石が１点、台石が１点である。石材は、黒曜石1,557点（天城柏峠群280点、箱根畑宿群135点、諏訪星ヶ台群９点、蓼科冷山群15点、和田鷹山群５点、和田土屋橋北群１点、和田土屋橋西群20点、和田土屋橋南群２点、和田高松沢群２点、分析不可等53点、未分析1,035点）、ホルンフェルス107点、ガラス質黒色安山岩35点、チャート（赤色）１点、珪質頁岩２点、赤玉石（碧玉）２点、輝石安山岩１点、玄武岩１点である。

ナイフ形石器（第111・112図68～84　写真図版５）

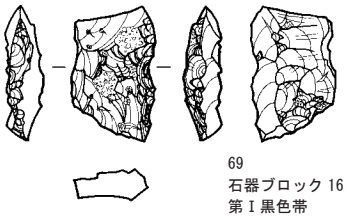
20点出土した。第Ⅰ黒色帯出土の資料は切出形石器が中心であるのに対して、第Ⅰスコリア層出土の資料は二側縁加工や基部加工が中心であった。また、第Ⅰスコリア層出土の資料には、石刃を素材とした資料も確認できた。石材は、黒曜石８点（天城柏峠群２点、箱根畑宿群２点、諏訪星ヶ台群１点、蓼科冷山群２点、分析不可１点）、ホルンフェルス11点、ガラス質黒色安山岩１点であった。

第Ⅰ黒色帯からは７点出土し、そのうち68～70・73・74は石器ブロック16から出土した。68は小型の切出形石器である。素材剥片を横位に用いており、両側縁に鋸歯状の剥離を施して、斜方向の刃部を作出している。断面は三角形状である。石材はホルンフェルスである。69は小型の切出形石器である。元は現状よりも大きなナイフ形石器であったが、何らかの理由で剥がれてしまったと考えられる。左側縁に再加工を施し、粗い剥離を施して斜方向の刃部を作出している。右側縁に施された加工は、元のナイフ形石器のブランティングである。石材は黒曜石（分析不可等）である。肉眼鑑定から、天城柏峠群であることが推定される。70は小型の切出形石器である。素材剥片を縦位に用いており、打点部は加工によって除去されている。両側縁は折断を行った後、粗い剥離を施している。刃部を折損しているため全体の形状は不明だが、加工から切出形石器と判断した。石材は黒曜石（箱根畑宿群）である。71は尖頭状の刃部を有する切出形石器である。素材剥片を縦位に用いており、両側縁の基部側に加工を施している。基部に向かって細くなるように整形しており、全体形状は、バチをひっくり返したものに近い。石材は黒曜石（箱根畑宿群）である。72は尖頭状の刃部を有する切出形石器である。素材剥片を縦位に用いており、両側縁の基部側に加工を施している。71ほど顕著ではないが、基部に向かって細くなるように整形している。刃部が折損しているため全体形状は不明だが、加工などから71と近似した資料と判断した。石材は黒曜石（諏訪星ヶ台群）である。73は基部加工のナイフ形石器である。横長剥片を素材としており、両側縁の基部側に加工を施している。左側縁の打点部を除去した加工は、背面側から施されている。素材剥片になっている大型の横長剥片は、本文化層内では確認されておらず、特異な資料となっている。石材はホルンフェルスである。74は先端部加工のナイフ形石器である。素材剥片を縦位に用いて、右側縁の先端部にのみ加工を施して、尖頭部を作出している。石材はホルンフェルスである。

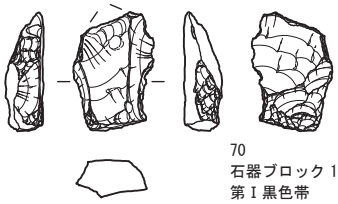
第Ⅰスコリア層から13点出土し、そのうち75は20号礫群、76～81は石器ブロック17、82は石器ブロック11、83は石器ブロック10から出土した。75は先端部加工のナイフ形石器である。素材剥片を縦位に用いる。先端部に加工を施して、尖頭部を作出している。石材は黒曜石（天城柏峠群）である。76は二側縁加工のナイフ形石器である。縦長剥片を素材として打点部を基部側に用いており、左側縁基部と右側縁の基部、先端部に加工を施している。素材剥片の打点部は、加工によって除去されている。石材はホルンフェルスである。77は二側縁加工のナイフ形石器である。全体的に風化の激しい資料であり明確ではないが、右側縁の先端部に加工が施されている。基部には両側縁に平坦剥離が施され、ブランティン



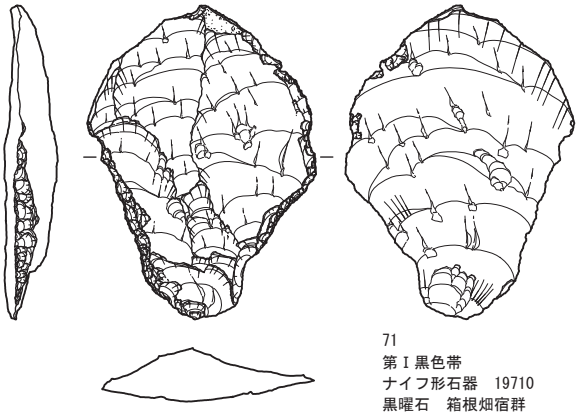
68
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
ナイフ形石器　21550
ホルンフェルス



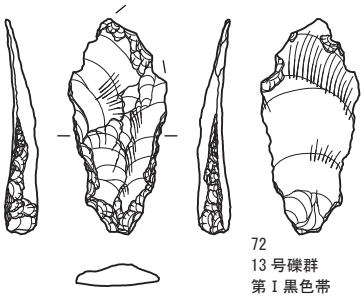
69
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
ナイフ形石器　22159
黒曜石　分析不可等



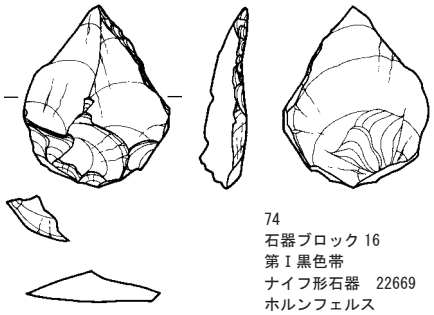
70
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
ナイフ形石器　21563
黒曜石　箱根畑宿群



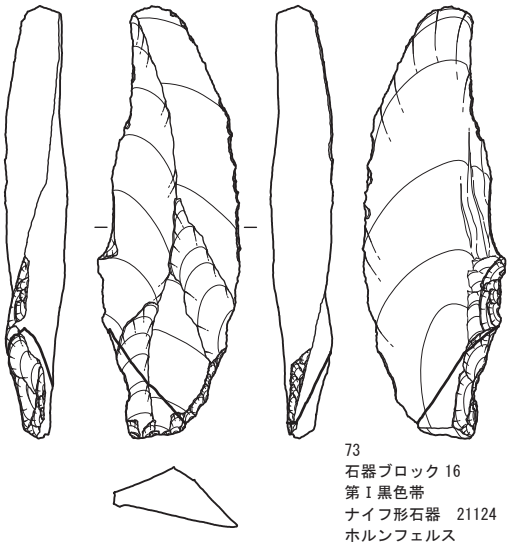
71
第Ⅰ黒色帯
ナイフ形石器　19710
黒曜石　箱根畑宿群



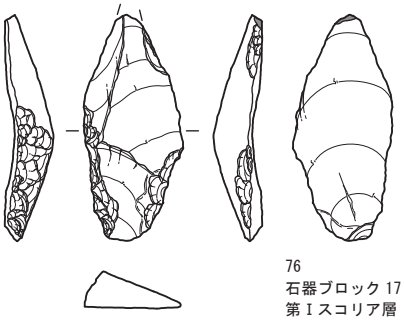
72
13 号礫群
第Ⅰ黒色帯
ナイフ形石器　22791
黒曜石　諏訪星ヶ台群



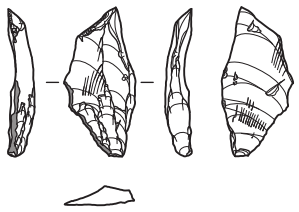
74
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
ナイフ形石器　22669
ホルンフェルス



73
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
ナイフ形石器　21124
ホルンフェルス

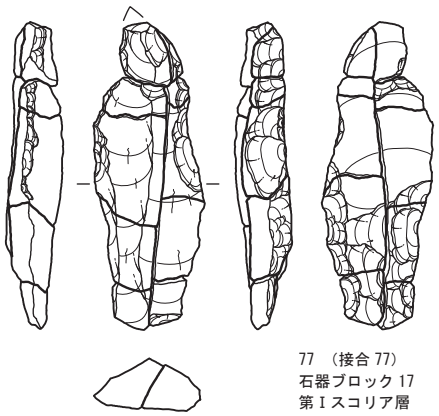


76
石器ブロック 17
第Ⅰスコリア層
ナイフ形石器　20138
ホルンフェルス

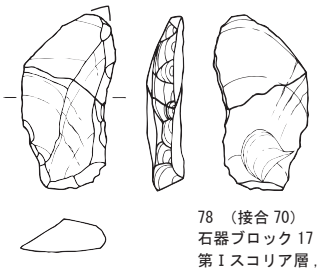


75
20 号礫群
第Ⅰスコリア層
ナイフ形石器　21238
黒曜石　天城柏峠群

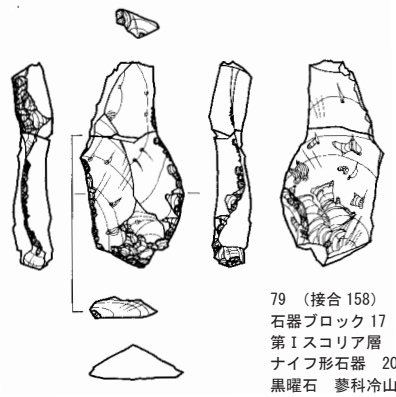
第111図　第Ⅶ文化層　南西谷部 出土石器実測図（１）



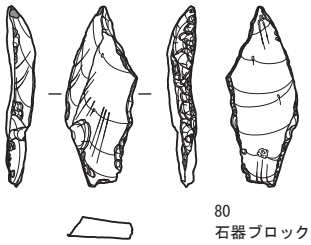
77 （接合 77）
石器ブロック 17
第Ⅰスコリア層
ナイフ形石器　20473+20530
ホルンフェルス



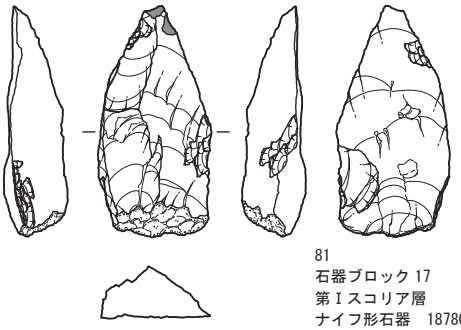
78 （接合 70）
石器ブロック 17
第Ⅰスコリア層，休場層直下黒色帯
ナイフ形石器　19969+20230
ホルンフェルス



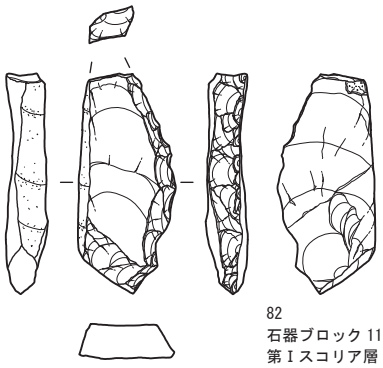
79 （接合 158）
石器ブロック 17
第Ⅰスコリア層
ナイフ形石器　20343+20504
黒曜石　蓼科冷山群



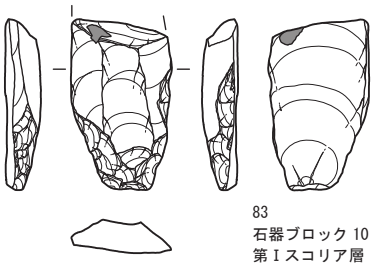
80
石器ブロック 17
第Ⅰスコリア層
ナイフ形石器　20189
黒曜石　天城柏峠群



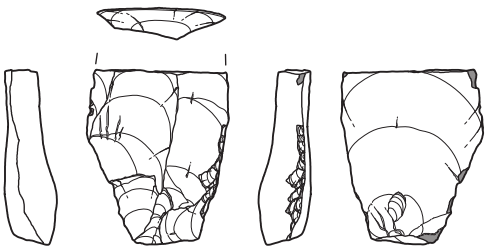
81
石器ブロック 17
第Ⅰスコリア層
ナイフ形石器　18780
ガラス質黒色安山岩



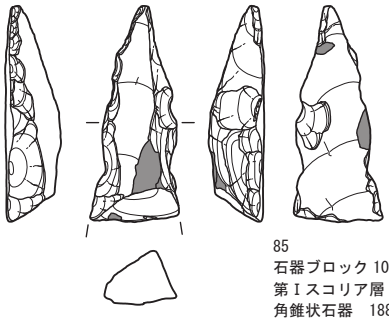
82
石器ブロック 11
第Ⅰスコリア層
ナイフ形石器　18866
ホルンフェルス



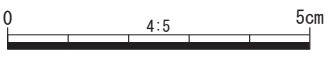
83
石器ブロック 10
第Ⅰスコリア層
ナイフ形石器　18874
ホルンフェルス



84
第Ⅰスコリア層
ナイフ形石器　18942
ホルンフェルス



85
石器ブロック 10
第Ⅰスコリア層
角錐状石器　18809
ホルンフェルス



第112図　第Ⅶ文化層　南西谷部 出土石器実測図（２）

グの代わりとなっている。左側縁先端部にも微細な剥離が確認できるが、他と比べて弱く、刃部と判断した。石材はホルンフェルスである。78は二側縁加工のナイフ形石器である。縦長剥片を素材として打点部を基部側に用いており、左側縁基部と右側縁全てに加工を施している。石材はホルンフェルスである。79は二側縁加工のナイフ形石器である。縦長剥片を素材として打点部を基部側に用いており、側縁と右側縁の基部に加工を施している。石材は黒曜石（蓼科冷山群）である。80は二側縁加工のナイフ形石器である。縦長剥片を素材として打点部を先端側に用いており、右側縁全体に加工を施している。石材は黒曜石（天城柏峠群）である。81は基部加工のナイフ形石器である。縦長剥片を素材として打点部を基部側に用いており、両側縁の基部に加工を施している。加工はあまり顕著には行われず、素材剥片の形状がほぼそのまま残存している。石材はガラス質黒色安山岩である。82は一側縁加工のナイフ形石器である。縦長剥片を素材として、打点部を基部側に用いており、右側縁全体に加工を施している。左側縁は、90°近い急斜度になっている。先端部は折損している。石材はホルンフェルスである。83は基部加工のナイフ形石器である。石刃を素材として打点部を基部側に用いており、両側縁の基部に加工を施している。上半部は折損している。石材はホルンフェルスである。84は基部加工のナイフ形石器である。石刃を素材として打点部を基部側に用いており、右側縁の基部に加工を施している。加工はあまり顕著には行われず、素材剥片の形状が、ほぼそのまま残存している。上半部は折損している。石材はホルンフェルスである。

角錐状石器（第112図85　写真図版５）

石器ブロック10から出土した。85は素材剥片を縦位に用いており、両側縁に粗い剥離を施して、尖端部を作出している。やや細身であり、断面は三角形状である。下半部を折損しているため、全体形状は不明である。石材はホルンフェルスである。

ラウンド・スクレイパー（第113図86～93　写真図版５）

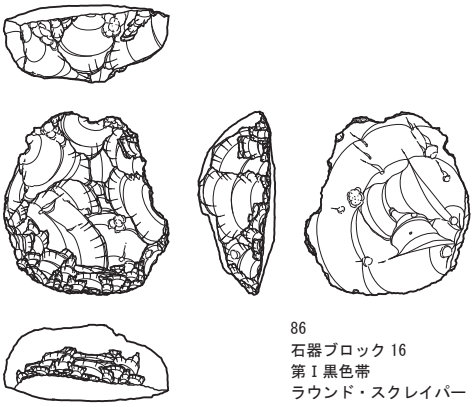
器体の周縁に刃部が確認されたスクレイパーを、ラウンド・スクレイパーとして分類した。全て小型の円形掻器、あるいは拇指状掻器と呼ばれる類の資料である。８点出土した。層位間による形状、加工の違いは確認できなかった。素材剥片の打点部が残されている例が多く見られ、刃部も厚く、素材剥片の段階で厚さを有した資料が選択されている、と考えられる。石材は全て黒曜石であり、天城柏峠群４点、箱根畑宿群１点、諏訪星ヶ台群１点、蓼科冷山群１点、和田土屋橋西群１点であった。

エンド・スクレイパー（第114～116図94～110　写真図版５）

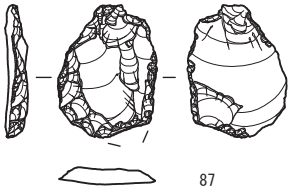
器体の末端部に刃部が確認されたスクレイパーを、エンド・スクレイパーとして分類した。21点出土した。層位間による形状、加工の違いは確認できなかった。94は下部だけでなく、上部にも刃部が存在している。上部の刃部は折断後に再加工して利用したと考えられる。101～104は、いわゆる先刃掻器であり、縦長剥片の末端部に刃部を作出している。中でも、102は唯一の石刃素材である。109・110は楔形石器を転用している。石材は、黒曜石17点（天城柏峠群９点、箱根畑宿群４点、和田土屋橋西群２点、分析不可１点、未分析１点）、ホルンフェルス２点、ガラス質黒色安山岩２点であった。

サイド・スクレイパー（第116～119図111～124　写真図版６）

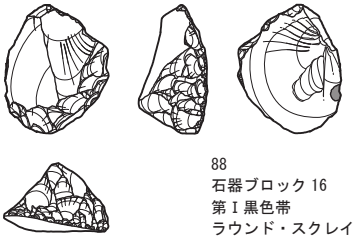
器体の側縁部に刃部が確認されたスクレイパーを、サイド・スクレイパーとして分類した。16点出土した。層位間による形状、加工の違いは確認できなかった。111・112・115・121～124は、比較的大型のホルンフェルス製の石刃を素材としている。112・116～118・120・121・123は、加工が鋸歯状である。



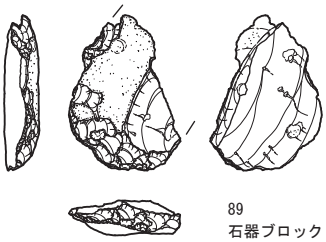
86
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
ラウンド・スクレイパー　20948
黒曜石　天城柏峠群



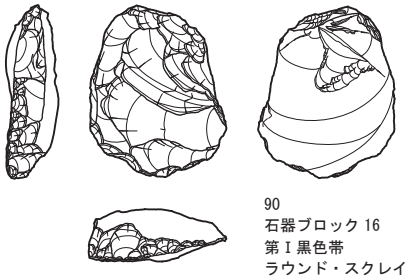
87
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
ラウンド・スクレイパー　21579
黒曜石　和田土屋橋西群



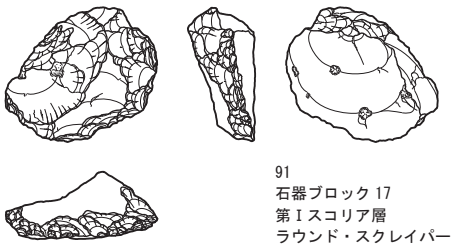
88
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
ラウンド・スクレイパー　21531
黒曜石　諏訪星ヶ台群



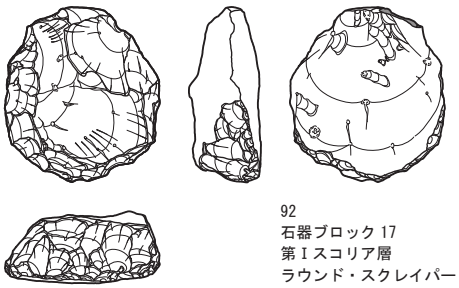
89
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
ラウンド・スクレイパー　21520
黒曜石　天城柏峠群



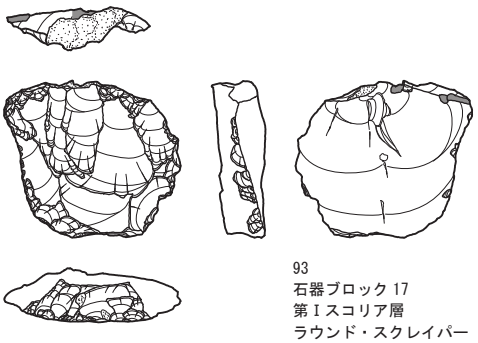
90
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
ラウンド・スクレイパー　23043
黒曜石　天城柏峠群



91
石器ブロック 17
第Ⅰスコリア層
ラウンド・スクレイパー　20222
黒曜石　天城柏峠群

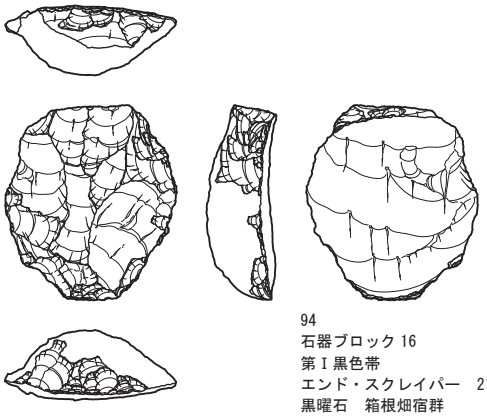


92
石器ブロック 17
第Ⅰスコリア層
ラウンド・スクレイパー　20225
黒曜石　箱根畑宿群

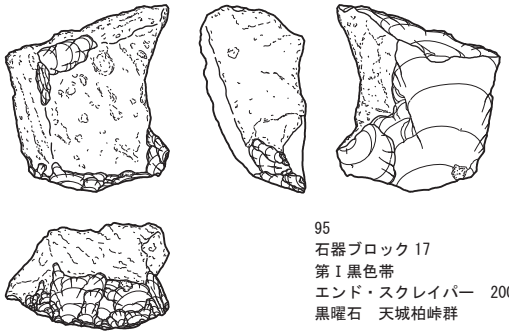


93
石器ブロック 17
第Ⅰスコリア層
ラウンド・スクレイパー　20352
黒曜石　蓼科冷山群

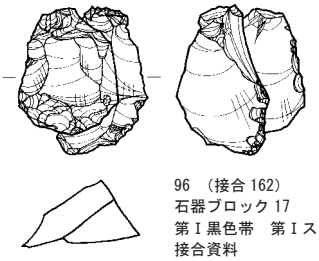
第113図　第Ⅶ文化層　南西谷部 出土石器実測図（３）



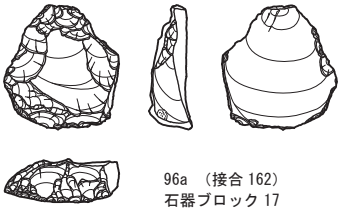
94
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
エンド・スクレイパー　21592
黒曜石　箱根畑宿群



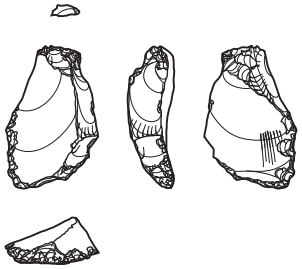
95
石器ブロック 17
第Ⅰ黒色帯
エンド・スクレイパー　20044
黒曜石　天城柏峠群



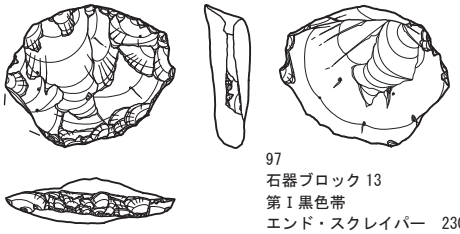
96 （接合 162）
石器ブロック 17
第Ⅰ黒色帯　第Ⅰスコリア層
接合資料
黒曜石　和田土屋橋西群



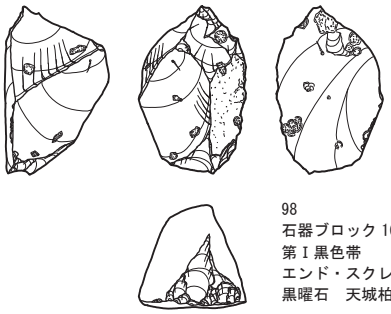
96a （接合 162）
石器ブロック 17
第Ⅰ黒色帯
エンド・スクレイパー　21022
黒曜石　和田土屋橋西群



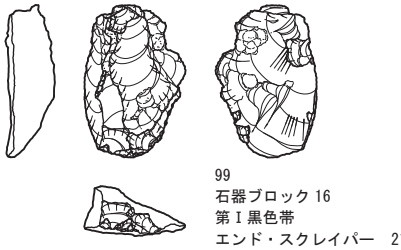
96b （接合 162）
石器ブロック 17
第Ⅰスコリア層
エンド・スクレイパー　20287
黒曜石　和田土屋橋西群



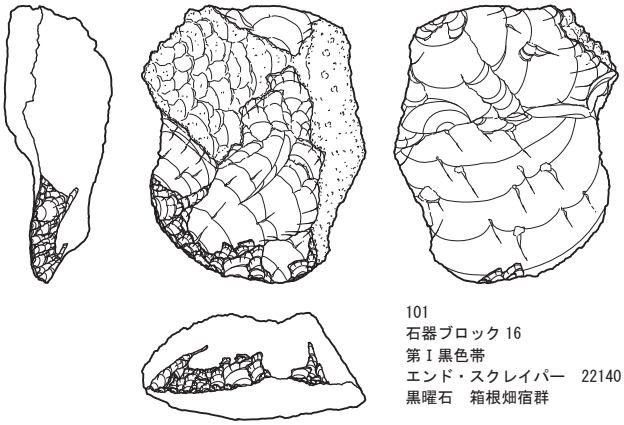
97
石器ブロック 13
第Ⅰ黒色帯
エンド・スクレイパー　23000
黒曜石　箱根畑宿群



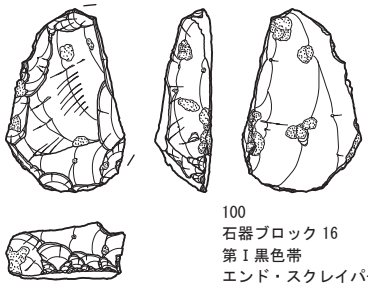
98
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
エンド・スクレイパー　20637
黒曜石　天城柏峠群



99
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
エンド・スクレイパー　21038
黒曜石　天城柏峠群

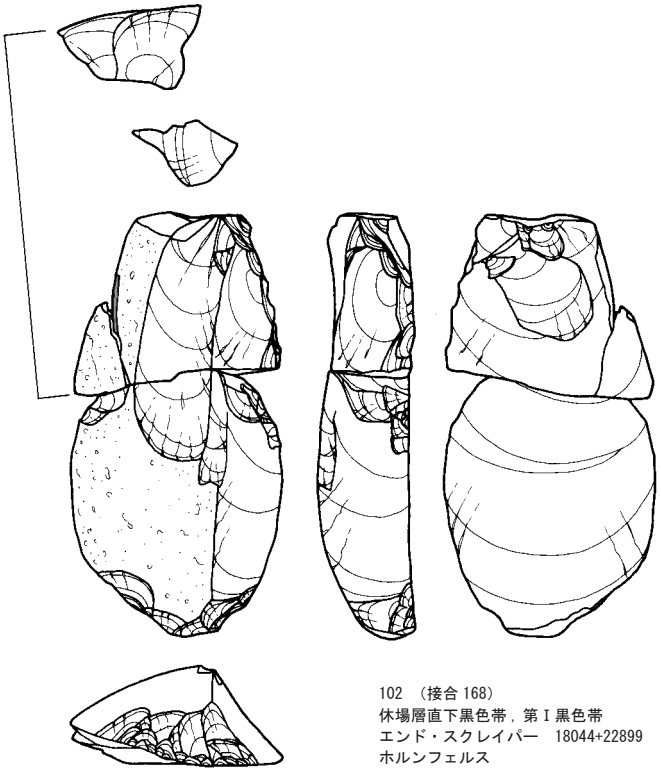


101
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
エンド・スクレイパー　22140
黒曜石　箱根畑宿群

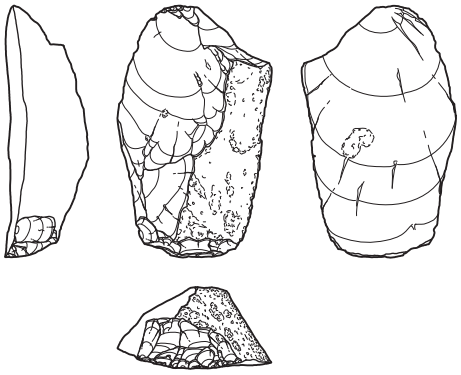


100
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
エンド・スクレイパー　22024
黒曜石　天城柏峠群

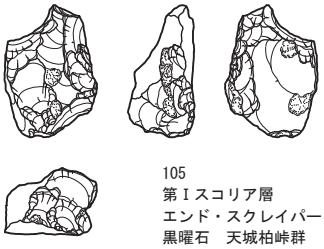
第114図　第Ⅶ文化層　南西谷部 出土石器実測図（４）



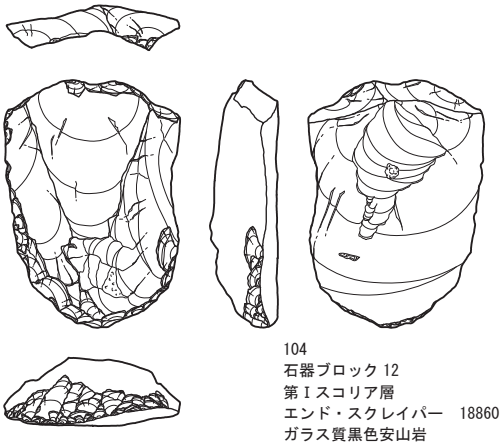
102　（接合 168）
休場層直下黒色帯，第Ⅰ黒色帯
エンド・スクレイパー　18044+22899
ホルンフェルス



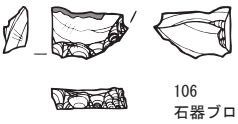
103
石器ブロック 12
第Ⅰスコリア層
エンド・スクレイパー　19102
ガラス質黒色安山岩



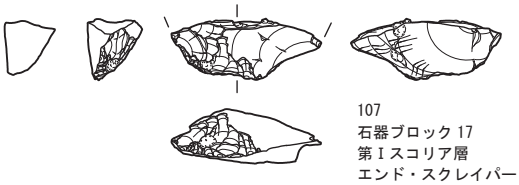
105
第Ⅰスコリア層
エンド・スクレイパー　18931
黒曜石　天城柏峠群



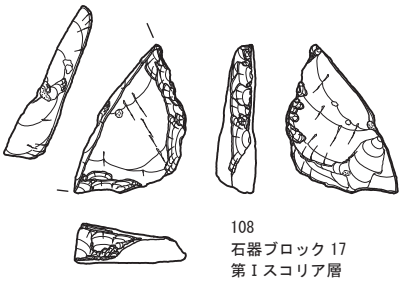
104
石器ブロック 12
第Ⅰスコリア層
エンド・スクレイパー　18860
ガラス質黒色安山岩



106
石器ブロック 13
第Ⅰスコリア層
エンド・スクレイパー　20370
黒曜石　天城柏峠群

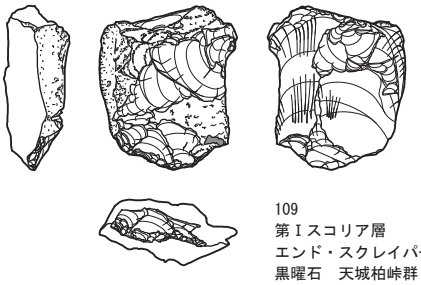


107
石器ブロック 17
第Ⅰスコリア層
エンド・スクレイパー　20438
黒曜石　天城柏峠群

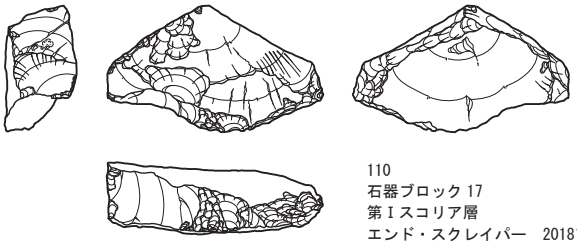


108
石器ブロック 17
第Ⅰスコリア層
エンド・スクレイパー　20173
黒曜石　箱根畑宿群

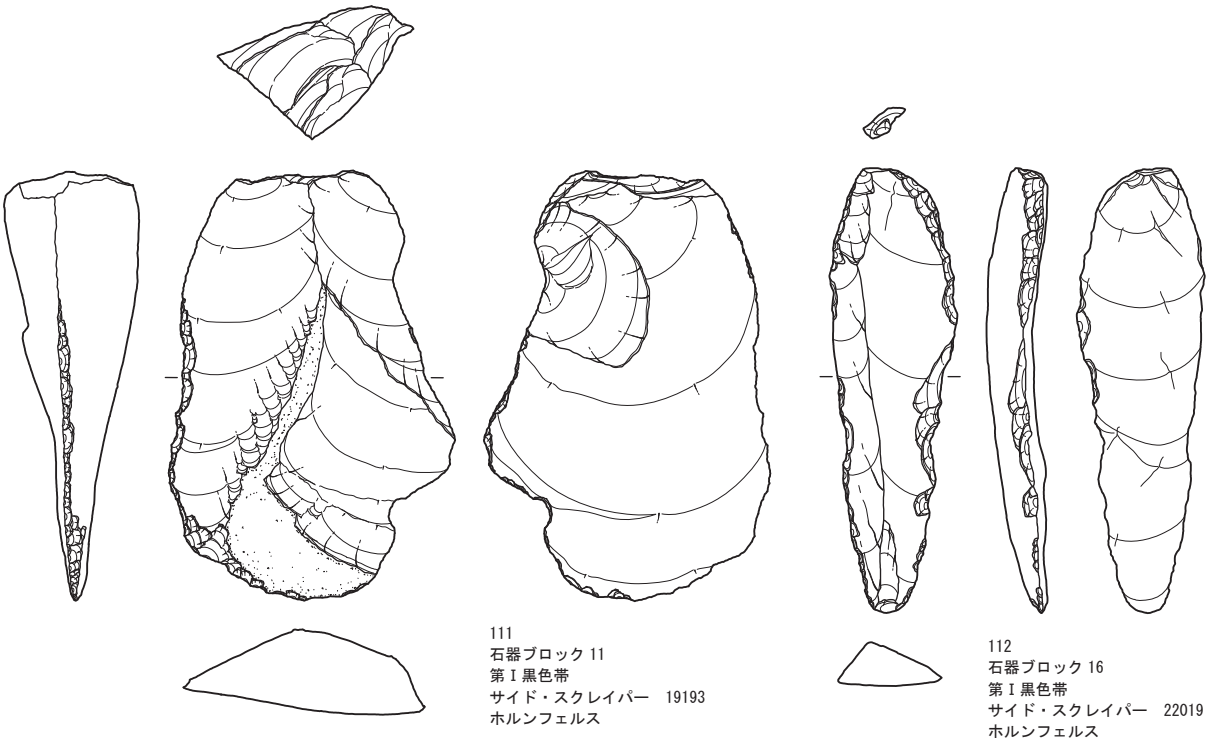
第115図　第Ⅶ文化層　南西谷部 出土石器実測図（５）



109
第Ⅰスコリア層
エンド・スクレイパー　20666
黒曜石　天城柏峠群

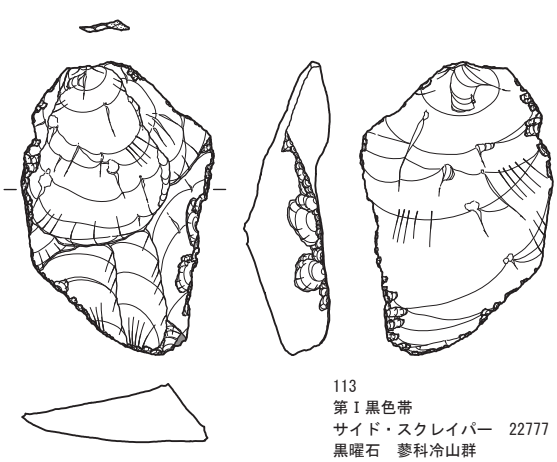


110
石器ブロック 17
第Ⅰスコリア層
エンド・スクレイパー　20181
黒曜石　天城柏峠群

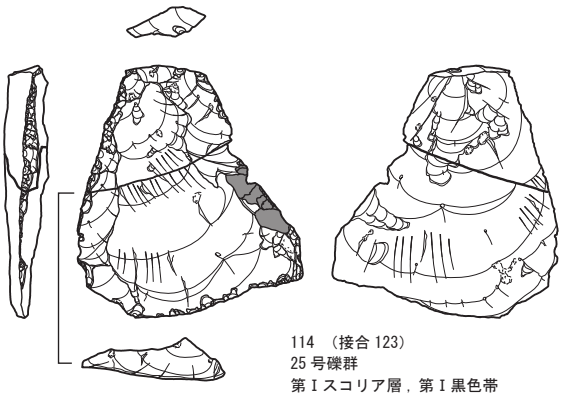


111
石器ブロック 11
第Ⅰ黒色帯
サイド・スクレイパー　19193
ホルンフェルス

112
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
サイド・スクレイパー　22019
ホルンフェルス

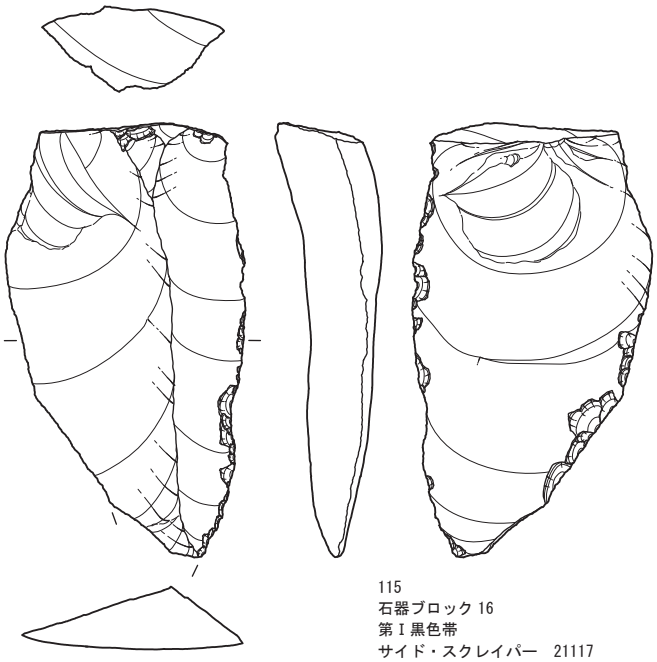


113
第Ⅰ黒色帯
サイド・スクレイパー　22777
黒曜石　蓼科冷山群

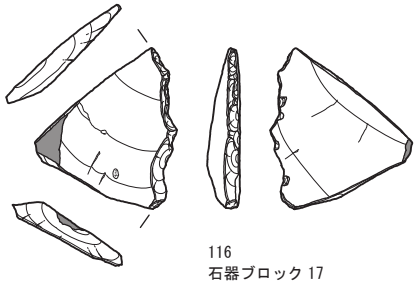


114　（接合 123）
25 号礫群
第Ⅰスコリア層，第Ⅰ黒色帯
サイド・スクレイパー　19616+22909
黒曜石　箱根畑宿群

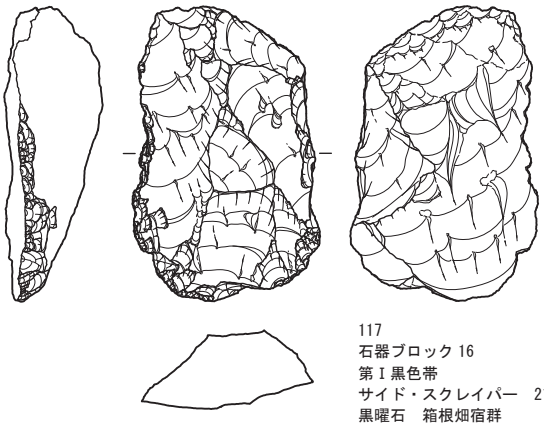
第116図　第Ⅶ文化層　南西谷部 出土石器実測図（６）



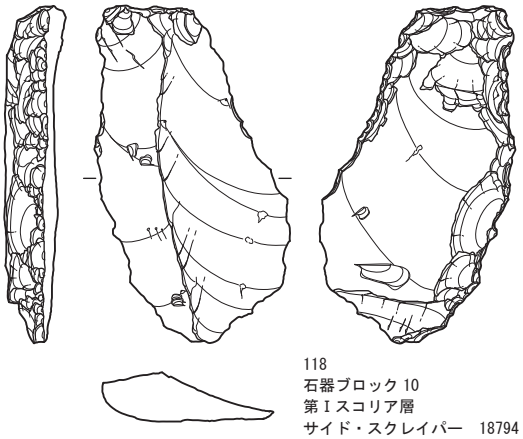
115
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
サイド・スクレイパー　21117
ホルンフェルス



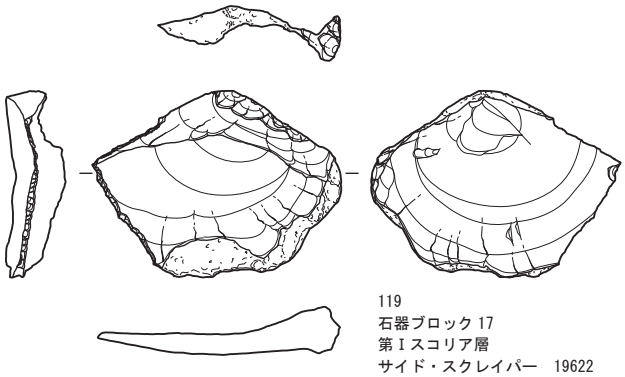
116
石器ブロック 17
第Ⅰスコリア層
サイド・スクレイパー　20347
ホルンフェルス



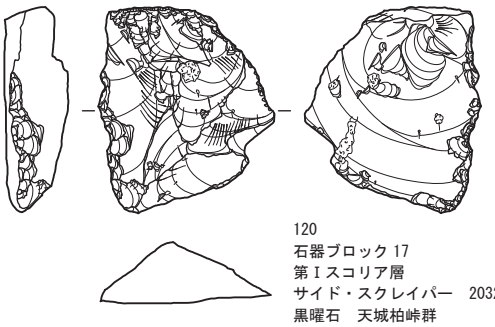
117
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
サイド・スクレイパー　21649
黒曜石　箱根畑宿群



118
石器ブロック 10
第Ⅰスコリア層
サイド・スクレイパー　18794
ガラス質黒色安山岩

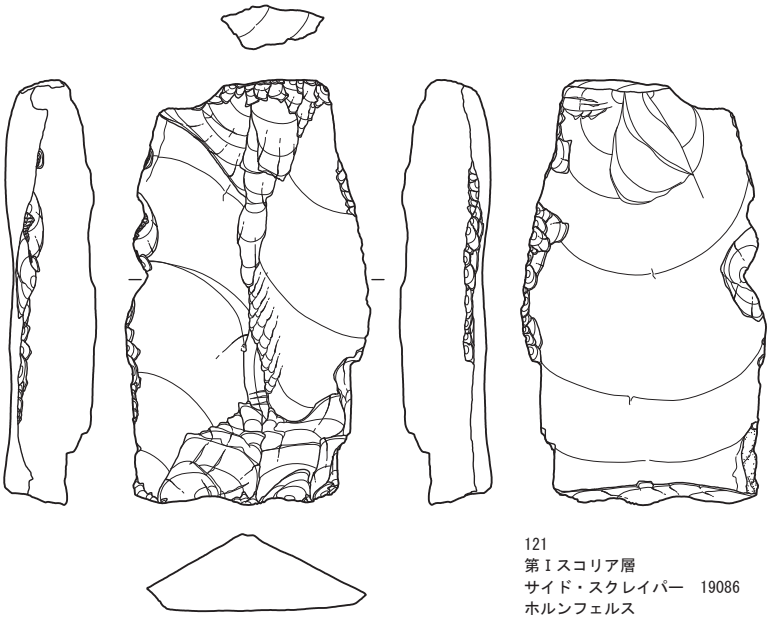


119
石器ブロック 17
第Ⅰスコリア層
サイド・スクレイパー　19622
チャート（赤色）

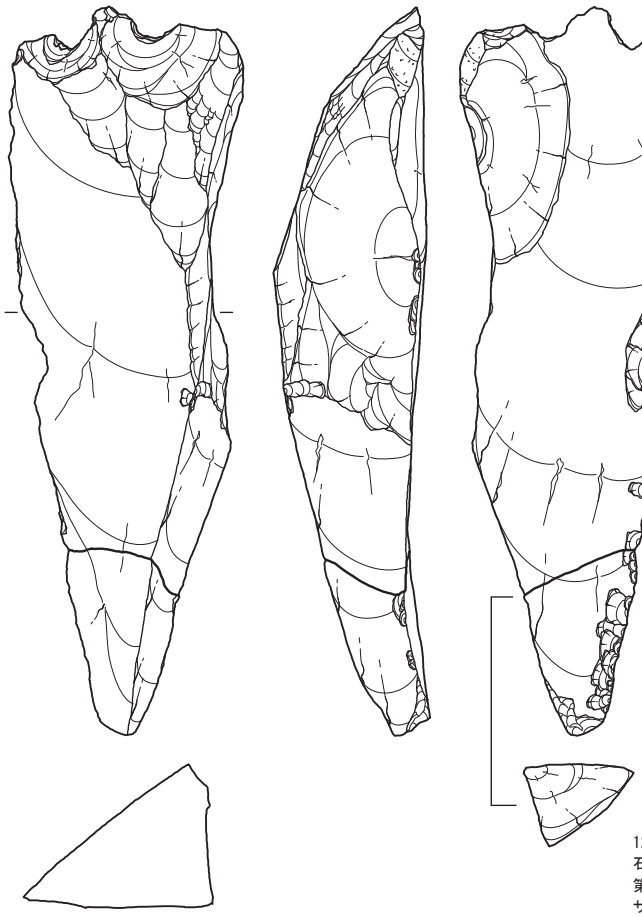


120
石器ブロック 17
第Ⅰスコリア層
サイド・スクレイパー　20324
黒曜石　天城柏峠群

第117図　第Ⅶ文化層　南西谷部 出土石器実測図（７）



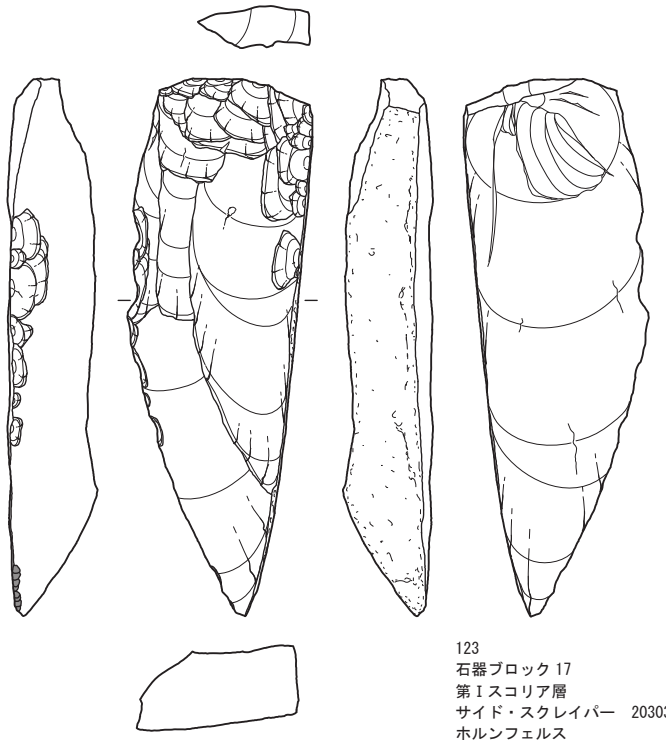
121
第Ⅰスコリア層
サイド・スクレイパー　19086
ホルンフェルス



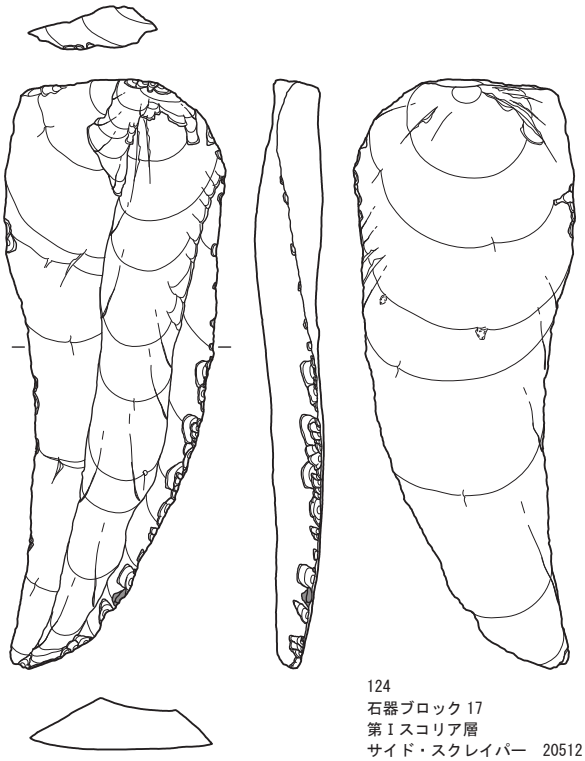
122　（接合 69）
石器ブロック 17
第Ⅰスコリア層
サイド・スクレイパー　20300+20425
ホルンフェルス

0　4:5　5cm

第118図　第Ⅶ文化層　南西谷部 出土石器実測図（８）



123
石器ブロック 17
第Ⅰスコリア層
サイド・スクレイパー　20303
ホルンフェルス



124
石器ブロック 17
第Ⅰスコリア層
サイド・スクレイパー　20512
ホルンフェルス

0　4:5　5cm

第119図　第Ⅶ文化層　南西谷部 出土石器実測図（９）

111は裏面左側縁に、122は右側縁の表裏両面に、大きな剥離が行われており、石核として使用されていた可能性も考えられる。また122は上部にノッチ状の加工も確認できることから、ノッチド・スクレイパーとして使用されていた可能性も考えられる。石材は、黒曜石５点（天城柏峠群１点、箱根畑宿群３点、蓼科冷山群１点）、ホルンフェルス９点、ガラス質黒色安山岩１点、チャート（赤色）１点であった。

ノッチド・スクレイパー（第120図125～127　写真図版６）

器体にノッチ状の刃部が確認されたスクレイパーを、ノッチド・スクレイパーとして分類した。６点出土した。層位間による形状、加工の違いは確認できなかった。125・126は石刃を素材とし、側縁部に連続した剥離を施して、ノッチ状の刃部を作出している。127は両側縁に表裏両面から粗い剥離を施して、ノッチ状の刃部を作出している。一見するとドリルの整形にも似ているが、先端部に未加工の縁辺を残している。125・126に比べて剥離痕が大きい。石材は黒曜石（天城柏峠群）１点、ホルンフェルス５点であった。

楔形石器（第120・121図128～137　写真図版５）

器体に両極剥離が行われ、縁辺に明確な潰れが確認できる資料を、楔形石器として分類した。21点出土した。層位間による形状、加工の違いは確認できなかった。全て小型の資料である。132は使用時の衝撃で３点に割れてしまっている。133・135はサイド・スクレイパーからの転用が推測される。また、134から窺えるように、かなりの小型に至るまで執拗に使い込んでいたことも推測される。石材は全て黒曜石であり、天城柏峠群16点、箱根畑宿群３点、和田土屋橋西群１点、分析不可１点であった。

石刃（第122～124図138～149　写真図版７）

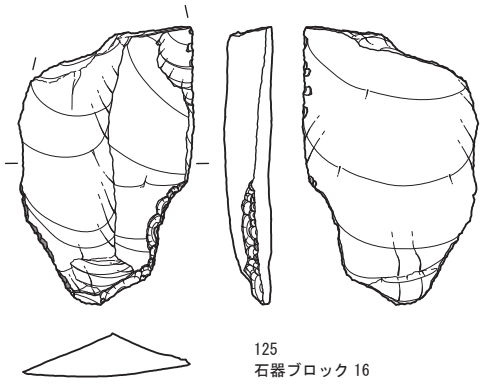
同一方向から連続した剥離が行われている縦長剥片を、石刃として分類した。19点出土した。層位間による形状の違いは確認できないが、石材はほとんどがホルンフェルスである。比較的、大型の資料が多く出土しており、中には138のように長さ15cm近くの資料も確認できる。また、石刃同士の接合は確認できず、全て遺跡の外から持ち込まれた単品資料であると考えられる。珪質頁岩製の147には、縁辺に微細な剥離痕が明確に確認できた。石材は、ホルンフェルス18点、珪質頁岩１点であった。

石核（第125・126図150～156　写真図版７）

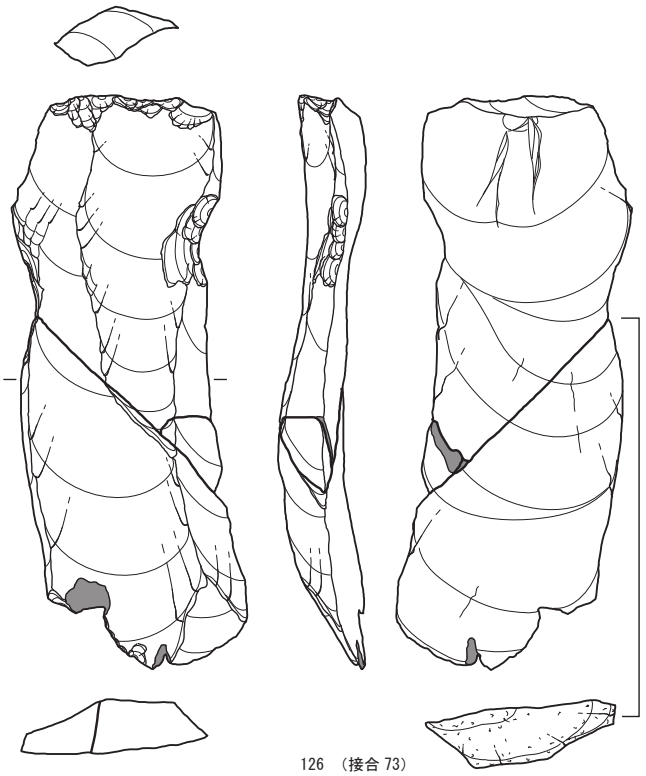
７点出土した。小型の幅広剥片を剥離した資料が、大半を占めている。層位間による形状、加工の違いは確認できなかった。150は平坦な素材を求心状に剥離した石核であり、150b，cは、その際に剥離された剥片である。150aの石核は、両極剥離が行われている。154でも両極剥離を行う以前に、別に剥片剥離が行われており、小型になった石核の最終段階で、両極剥離が行われていたことが窺える。151は求心状の剥離が行われた石核である。152・153は船底状をした石核である。広い平坦な打面を作出し、作業面を横に移動しながら剥離を行っている。155・156は交互剥離などで、打面転移を繰り返した石核である。石材は、黒曜石（天城柏峠群）５点、ホルンフェルス１点、ガラス質黒色安山岩１点であった。

微細な剥離痕を有する剥片（第127図157～160　写真図版７）

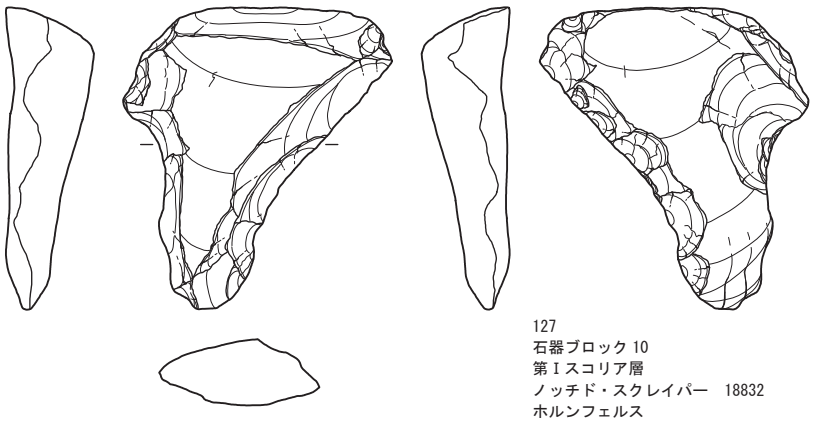
剥片の縁辺に、微細な使用痕、および微細な加工痕を有した資料を分類した。27点出土した。何らかの製品の一部の可能性がある資料も含まれている。157は厚みを持った石刃を素材として、その打点部と両脇に粗い剥離が施されている。何らかの製品である可能性が高いが、下部が折損しており不明である。石材はホルンフェルスである。158は平坦な石刃を素材としており、末端部に微細な剥離痕が確認でき



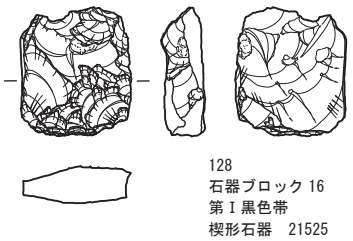
125
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
ノッチド・スクレイパー　22079
ホルンフェルス



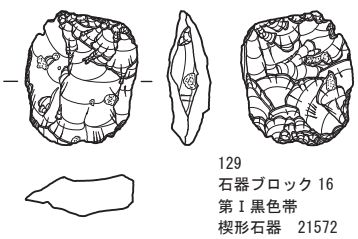
126　（接合 73）
石器ブロック 17
第Ⅰスコリア層
ノッチド・スクレイパー　19623+19624+19709
ホルンフェルス



127
石器ブロック 10
第Ⅰスコリア層
ノッチド・スクレイパー　18832
ホルンフェルス

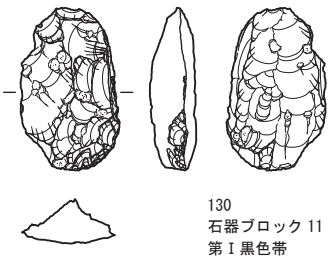


128
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
楔形石器　21525
黒曜石　天城柏峠群

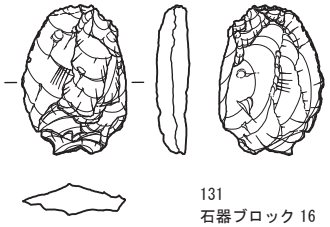


129
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
楔形石器　21572
黒曜石　天城柏峠群

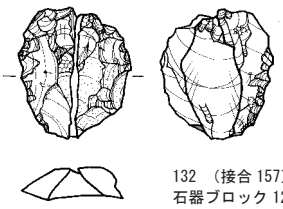
第120図　第Ⅶ文化層　南西谷部 出土石器実測図（10）



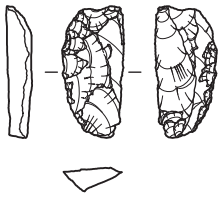
130
石器ブロック 11
第Ⅰ黒色帯
楔形石器　21788
黒曜石　天城柏峠群



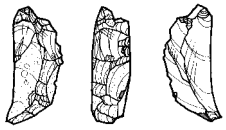
131
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
楔形石器　22353
黒曜石　箱根畑宿群



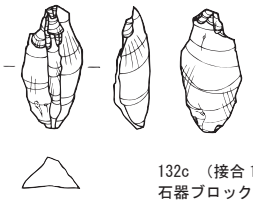
132 （接合 157）
石器ブロック 12
第Ⅰ黒色帯
楔形石器
黒曜石　天城柏峠群



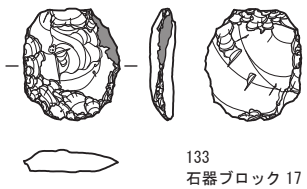
132a （接合 157）
石器ブロック 12
第Ⅰ黒色帯
楔形石器　21928
黒曜石　天城柏峠群



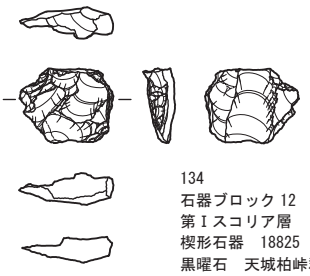
132b （接合 157）
石器ブロック 12
第Ⅰ黒色帯
剥片　21787
黒曜石　天城柏峠群



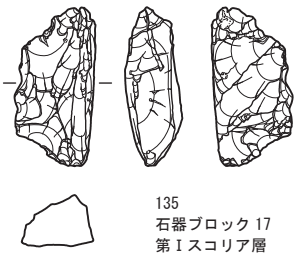
132c （接合 157）
石器ブロック 12
第Ⅰ黒色帯
剥片　21820
黒曜石　天城柏峠群



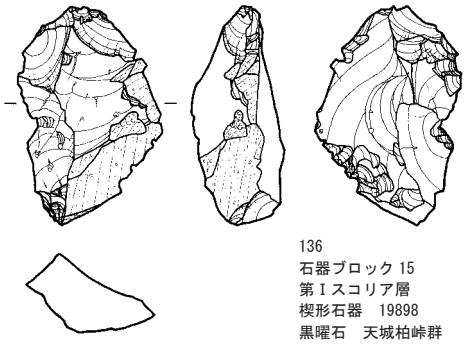
133
石器ブロック 17
第Ⅰスコリア層
楔形石器　20402
黒曜石　天城柏峠群



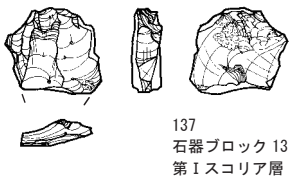
134
石器ブロック 12
第Ⅰスコリア層
楔形石器　18825
黒曜石　天城柏峠群



135
石器ブロック 17
第Ⅰスコリア層
楔形石器　20590
黒曜石　天城柏峠群

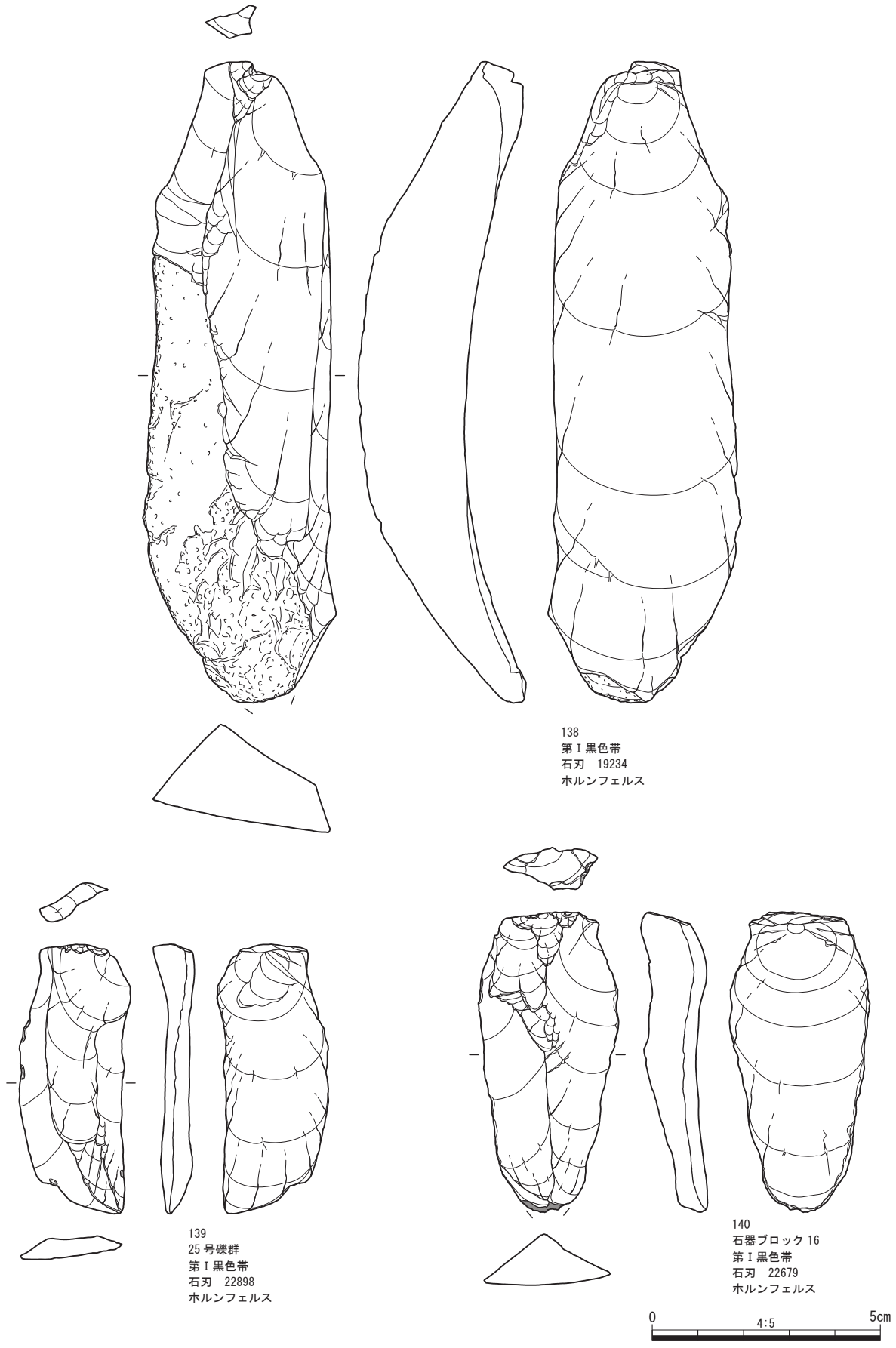


136
石器ブロック 15
第Ⅰスコリア層
楔形石器　19898
黒曜石　天城柏峠群

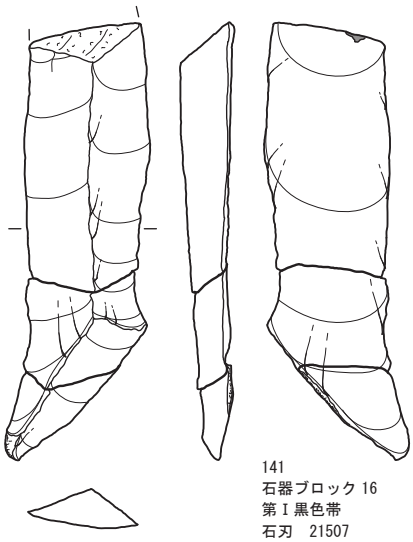


137
石器ブロック 13
第Ⅰスコリア層
楔形石器　21425
黒曜石　天城柏峠群

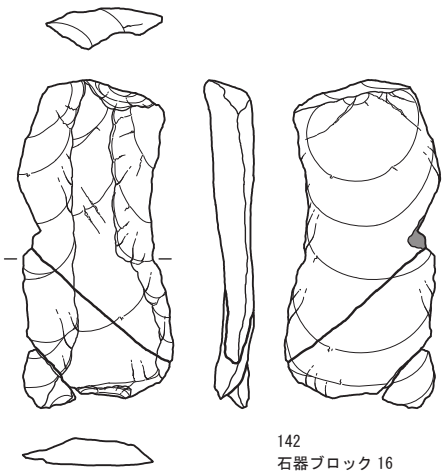
第121図　第Ⅶ文化層　南西谷部 出土石器実測図（11）



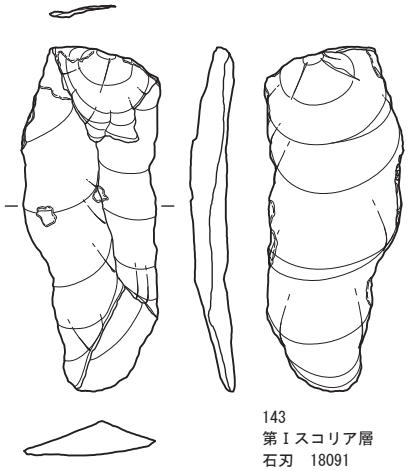
第122図　第Ⅶ文化層　南西谷部 出土石器実測図（12）



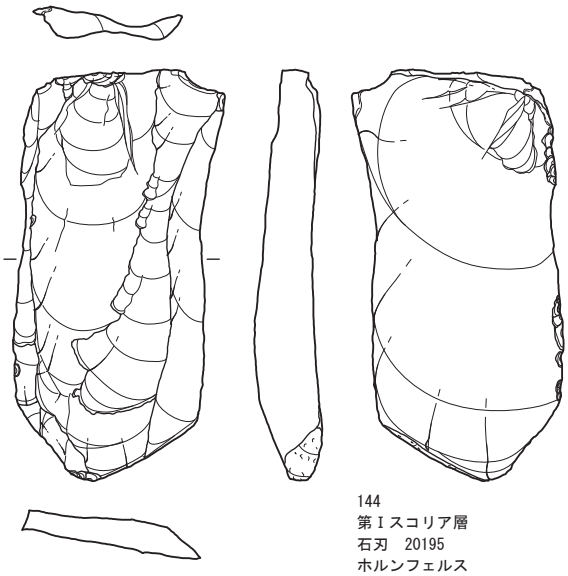
141
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
石刃　21507
ホルンフェルス



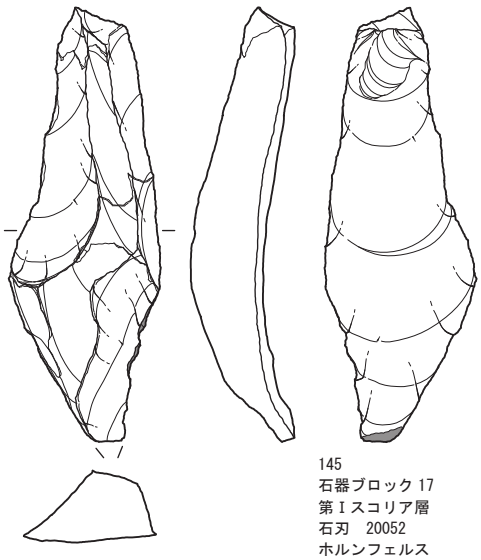
142
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
石刃　22096
ホルンフェルス



143
第Ⅰスコリア層
石刃　18091
ホルンフェルス

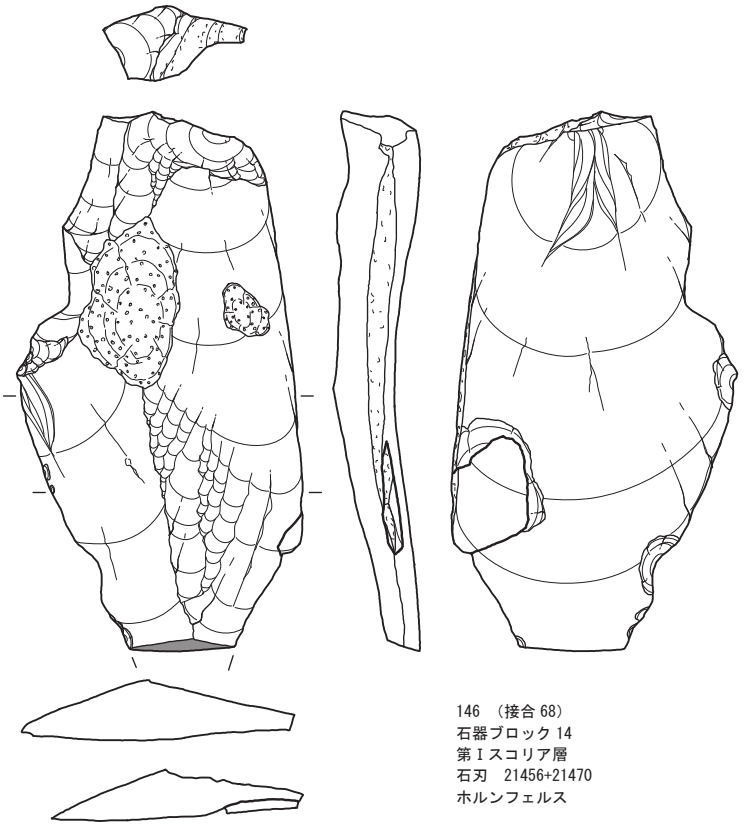


144
第Ⅰスコリア層
石刃　20195
ホルンフェルス

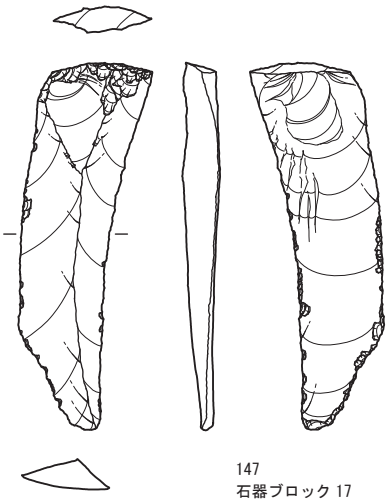


145
石器ブロック 17
第Ⅰスコリア層
石刃　20052
ホルンフェルス

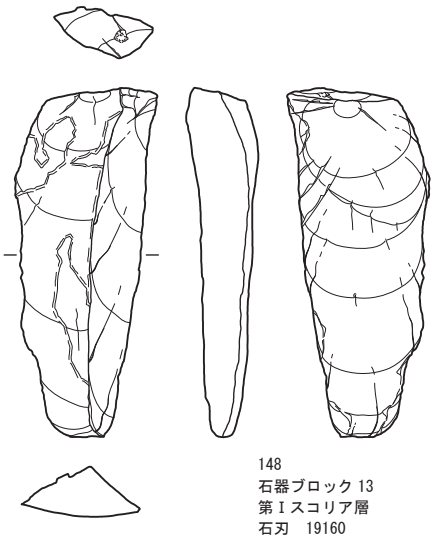
第123図　第Ⅶ文化層　南西谷部 出土石器実測図（13）



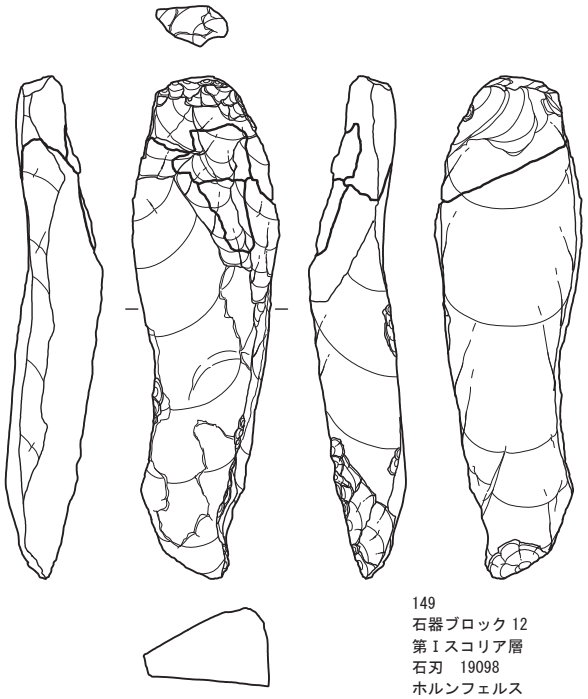
146　（接合 68）
石器ブロック 14
第Ⅰスコリア層
石刃　21456+21470
ホルンフェルス



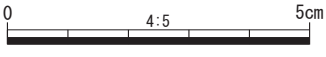
147
石器ブロック 17
第Ⅰスコリア層
石刃　20284
珪質頁岩



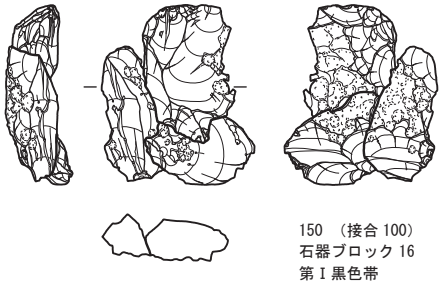
148
石器ブロック 13
第Ⅰスコリア層
石刃　19160
ホルンフェルス



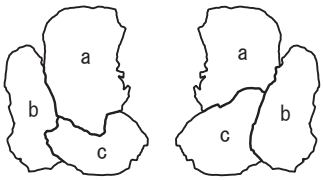
149
石器ブロック 12
第Ⅰスコリア層
石刃　19098
ホルンフェルス

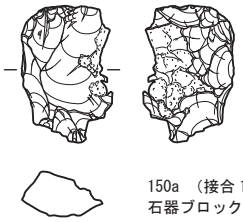


第124図　第Ⅶ文化層　南西谷部 出土石器実測図（14）

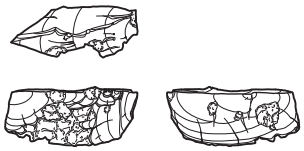


150　（接合 100）
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
接合資料
黒曜石　天城柏峠群

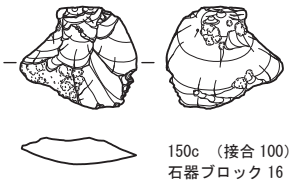




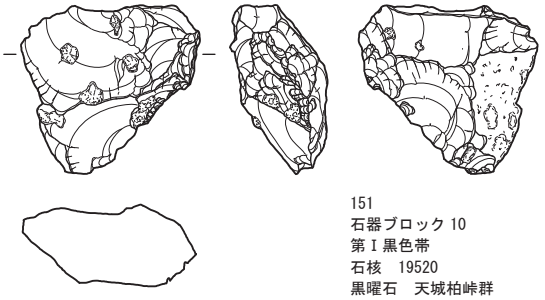
150a　（接合 100）
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
石核　21541
黒曜石　天城柏峠群



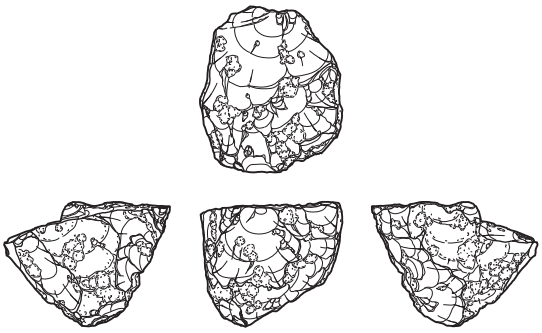
150b　（接合 100）
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
剥片　21024
黒曜石　天城柏峠群



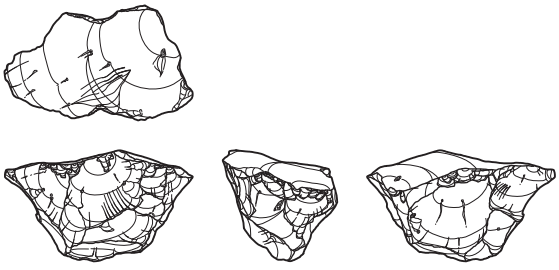
150c　（接合 100）
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
剥片　20949
黒曜石　天城柏峠群



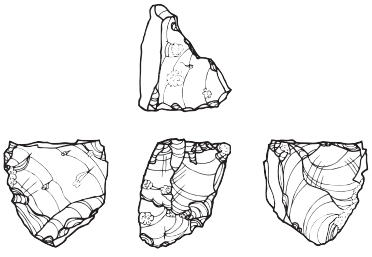
151
石器ブロック 10
第Ⅰ黒色帯
石核　19520
黒曜石　天城柏峠群



152
石器ブロック 17
第Ⅰスコリア層
石核　19620
黒曜石　天城柏峠群

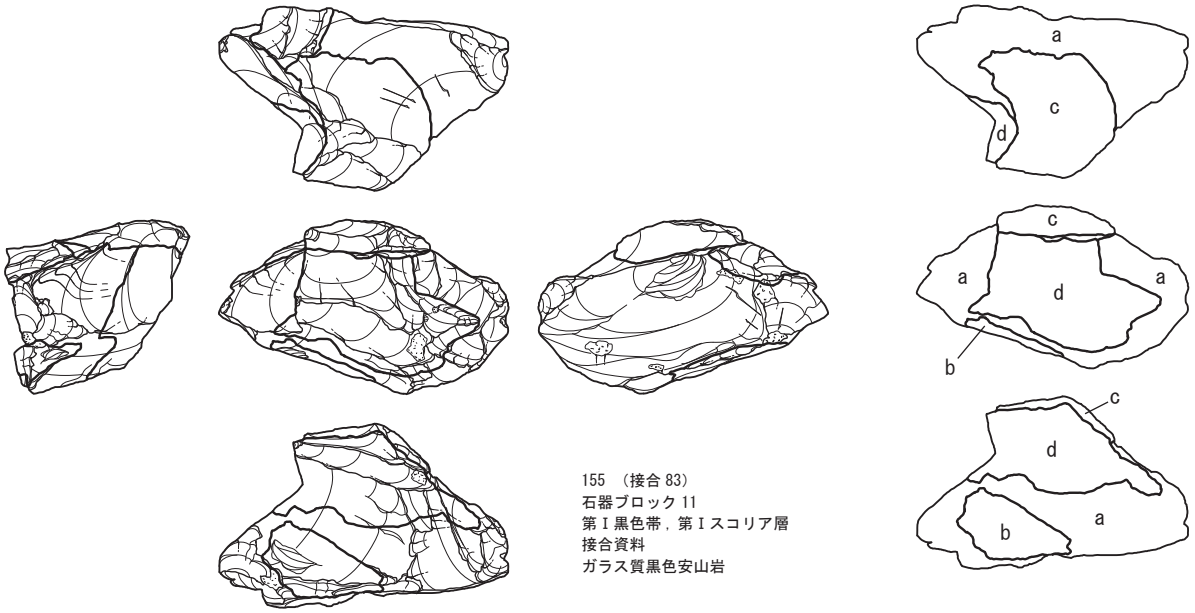


153
石器ブロック 17
第Ⅰスコリア層
石核　20210
黒曜石　天城柏峠群

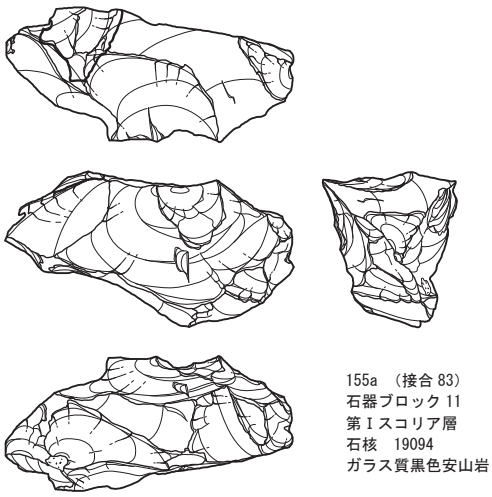


154
石器ブロック 17
第Ⅰスコリア層
石核　20199
黒曜石　天城柏峠群

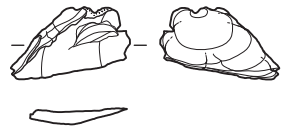
第125図　第Ⅶ文化層　南西谷部 出土石器実測図（15）



155　（接合 83）
石器ブロック 11
第Ⅰ黒色帯，第Ⅰスコリア層
接合資料
ガラス質黒色安山岩

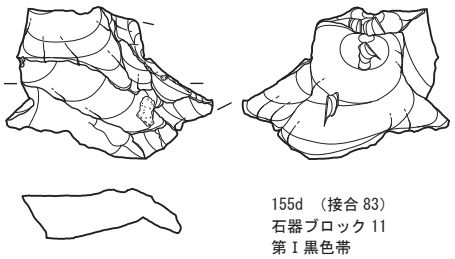


155a　（接合 83）
石器ブロック 11
第Ⅰスコリア層
石核　19094
ガラス質黒色安山岩

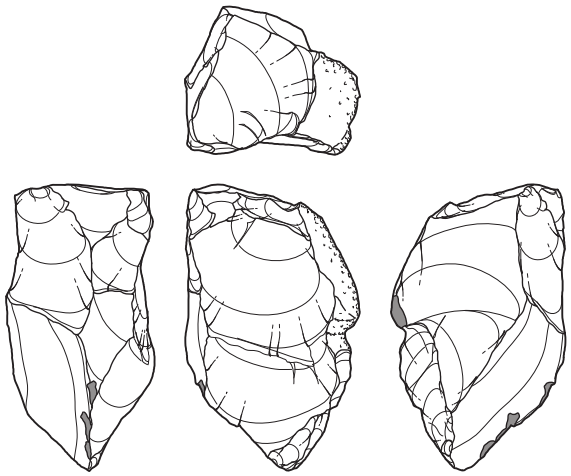


155b　（接合 83）
石器ブロック 11
第Ⅰスコリア層
剥片　19057
ガラス質黒色安山岩

155c　（接合 83）
石器ブロック 11
第Ⅰスコリア層
剥片　19095
ガラス質黒色安山岩



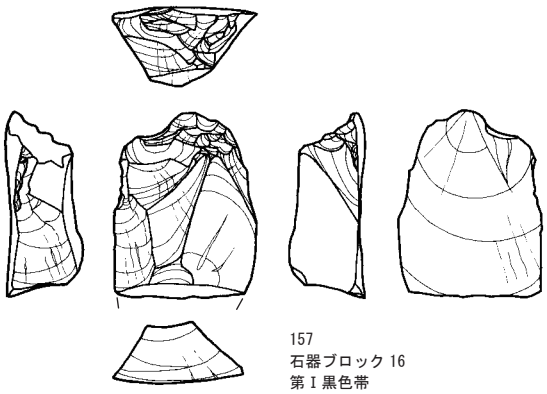
155d　（接合 83）
石器ブロック 11
第Ⅰ黒色帯
剥片　19188
ガラス質黒色安山岩



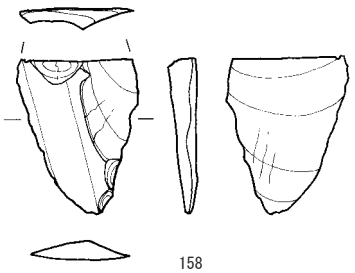
156
第Ⅰスコリア層
石核　19343
ホルンフェルス

0　4:5　5cm

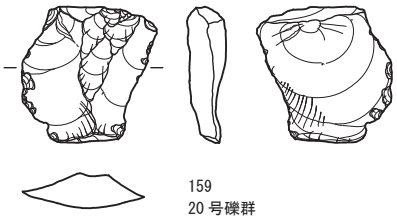
第126図　第Ⅶ文化層　南西谷部 出土石器実測図（16）



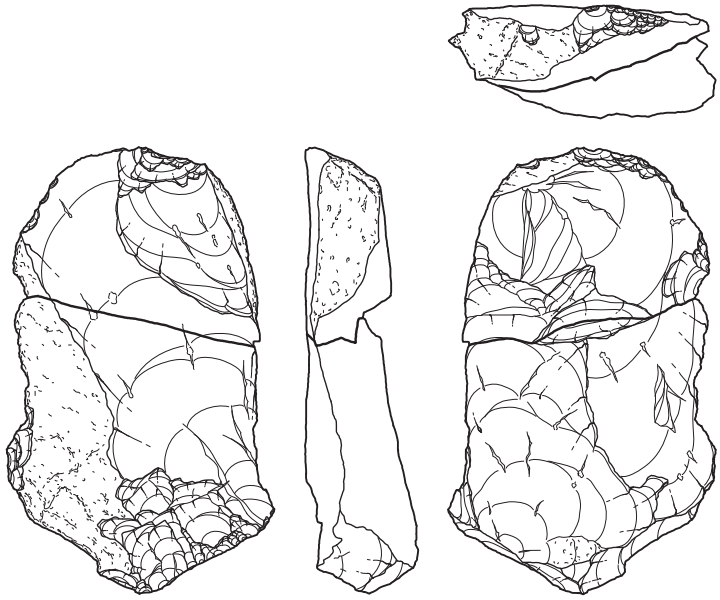
157
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
微細な剥離痕を有する剥片　21134
ホルンフェルス



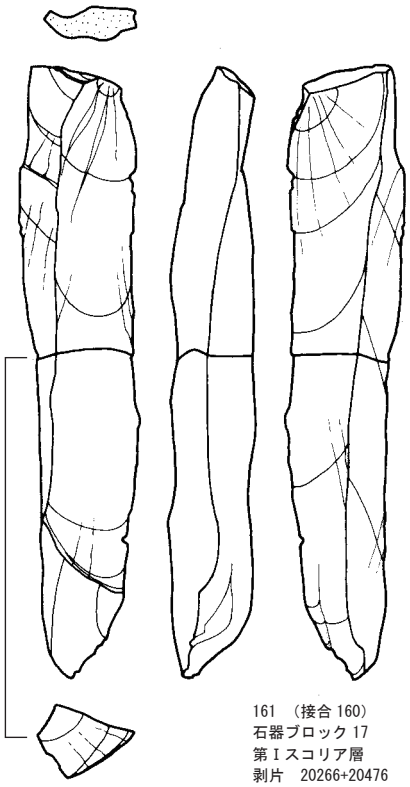
158
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
微細な剥離痕を有する剥片　21571
ホルンフェルス



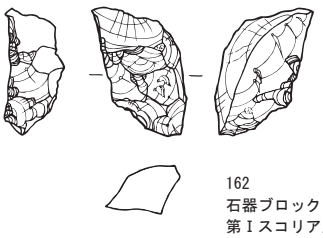
159
20 号礫群
第Ⅰスコリア層
微細な剥離痕を有する剥片　21494
黒曜石　和田鷹山群



160 （接合 84）
石器ブロック 17
第Ⅰスコリア層
微細な剥離痕を有する剥片　20290+20584
ガラス質黒色安山岩

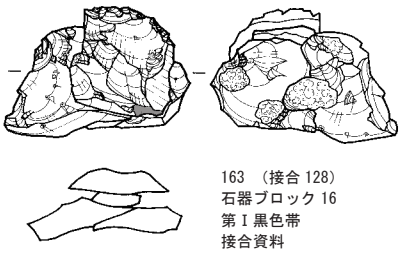


161 （接合 160）
石器ブロック 17
第Ⅰスコリア層
剥片　20266+20476
ホルンフェルス

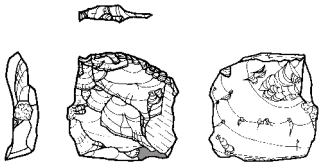


162
石器ブロック 17
第Ⅰスコリア層
剥片　20471
黒曜石　箱根畑宿群

第127図　第Ⅶ文化層　南西谷部 出土石器実測図（17）

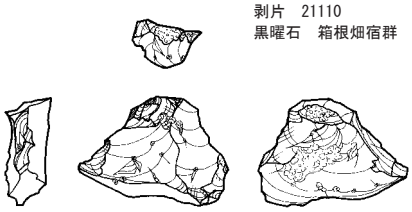


163 （接合 128）
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
接合資料
黒曜石　箱根畑宿群

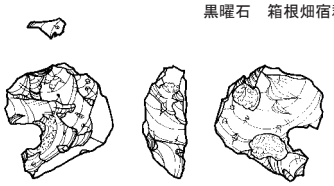


163a （接合 128）
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
剥片　21110
黒曜石　箱根畑宿群

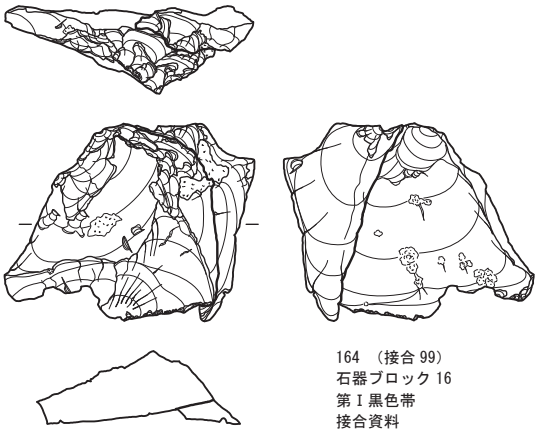
163b （接合 128）
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
剥片　23002
黒曜石　箱根畑宿群



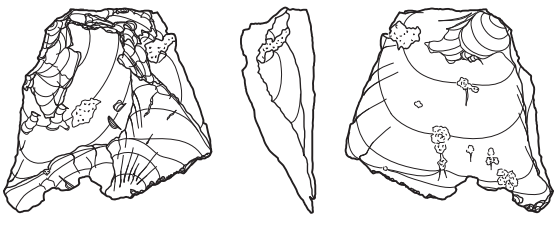
163c （接合 128）
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
剥片　22012
黒曜石　箱根畑宿群



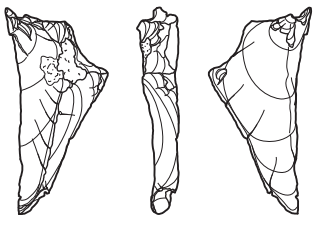
163d （接合 128）
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
剥片　22808
黒曜石　箱根畑宿群



164 （接合 99）
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
接合資料
黒曜石　天城柏峠群



164a （接合 99）
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
剥片　22027
黒曜石　天城柏峠群



164b （接合 99）
石器ブロック 16
第Ⅰ黒色帯
剥片　22710
黒曜石　天城柏峠群

第128図　第Ⅶ文化層　南西谷部 出土石器実測図（18）

る。ナイフ形石器の一部である可能性も考えられるが、上部が折損しており不明である。石材はホルンフェルスである。159は寸詰まりの縦長剥片を素材としており、その縁辺に微細な剥離痕が確認できる。石材は黒曜石（和田鷹山群）である。160は両極打法によって剥離された、厚みを有した縦長剥片である。左側縁に微細な剥離痕が確認できる。石材はガラス質黒色安山岩である。石材は、黒曜石21点（天城柏峠群10点、箱根畑宿群３点、諏訪星ヶ台群１点、和田鷹山群２点、和田土屋橋西群３点、分析不可２点)、ホルンフェルス４点、ガラス質黒色安山岩２点であった。

剥片（第127・128図161～164　写真図版７）

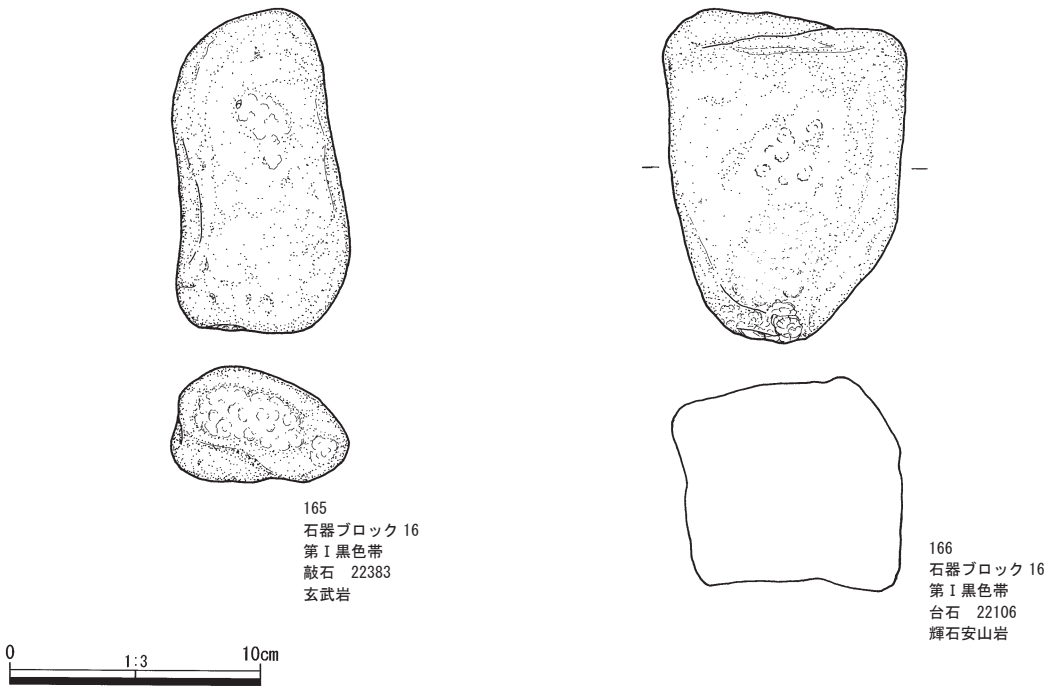
161は縦長剥片である。器体が歪んで、捻じれている。中央付近で折断している。石材はホルンフェルスである。162は楔形石器、もしくはエンド・スクレイパーから剥落した剥片である。石材は黒曜石（箱根畑宿群）である。163は小型の幅広剥片の接合資料である。長さ1.5cm程度の幅広剥片を、連続して剥離している。石材は黒曜石（箱根畑宿群）である。164は幅広剥片の接合資料である。打面転移を繰り返して、剥片剥離を行っているのが、背面から見てとれる。石材は黒曜石（天城柏峠群）である。

敲石（第129図165　写真図版７）

石器ブロック16から１点出土した。やや平坦な亜角礫を素材とした敲石である。上下両端部と正面の平坦面に、敲打痕が確認された。弱く被熱している。石材は玄武岩である。

台石（第129図166）

石器ブロック16から１点出土した。立方体に近い亜角礫を素材とした台石である。平坦面には弱い敲打痕が確認されており、なんらかの作業を行った際の使用痕である可能性が推測される。被熱は顕著に確認できない。石材は輝石安山岩である。



第129図　第Ⅶ文化層　南西谷部 出土石器実測図（19）

第９節　第Ⅷ文化層

休場層直下黒色帯で確認された遺構、遺物の一群を、第Ⅷ文化層とした。遺構は、石器ブロックが11ヶ所、礫群が134基、配石が17基、炭化物集中が８ヶ所検出された。遺物は、石器が1,236点、礫が3,429点出土した。また、炭化物が大量に出土した。

遺構は、すべて遺跡の南端に集中しており、南尾根では尾根部の最南端の丘陵地、南西谷部では谷底から、それぞれまとまって検出されている（第130図）。

石器ブロックは、南尾根では７ヶ所、南西谷部では４ヶ所検出されているが、南尾根のものが小規模で散漫なのに対して、南西谷部のものは分布範囲も広く、密集度も高い。

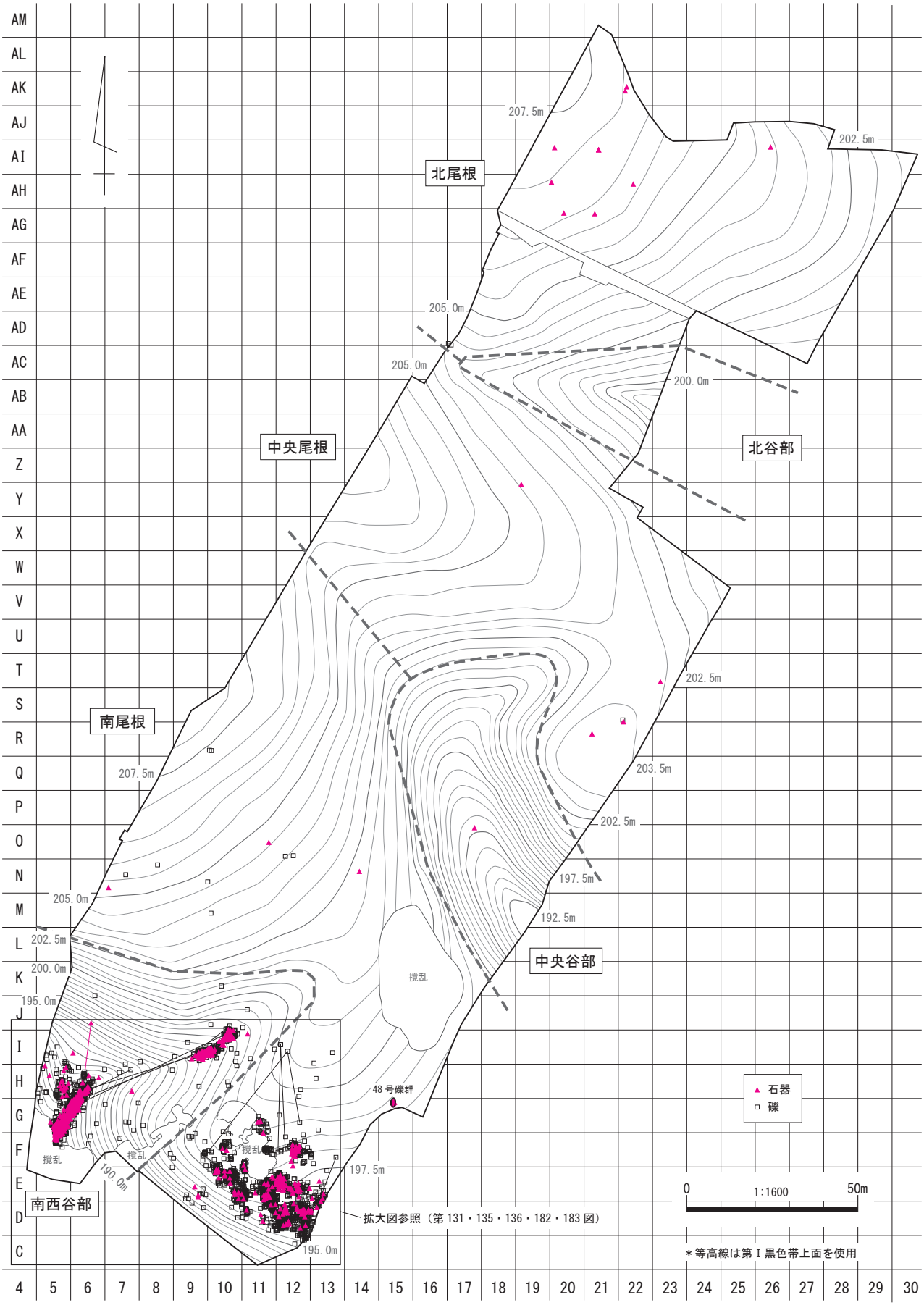
礫群は、南尾根では96基、南西谷部では38基検出されている。南尾根では、構成礫20点未満の小規模な礫群が全体の80％を占め、100点を超える礫群は１基のみである。一方、南西谷部では、小規模な礫群に加え、200点を超える大規模な礫群も３基検出されている。

さらに、本文化層では、石器、礫ともに、接合関係が多く確認されている（第132図）。石器は同一ブロック内の接合が大半を占めるが、礫は同一礫群内の接合に加え、異なる礫群との接合関係も多く確認された。礫は繰り返し使用されたと推測され、その結果、被熱によって小型化し、分散していったためと考えられる。特に南西谷部では、谷の上部と下部で、約50ｍの距離を隔てて集中域が分かれているが、その間での接合も複数確認されている。

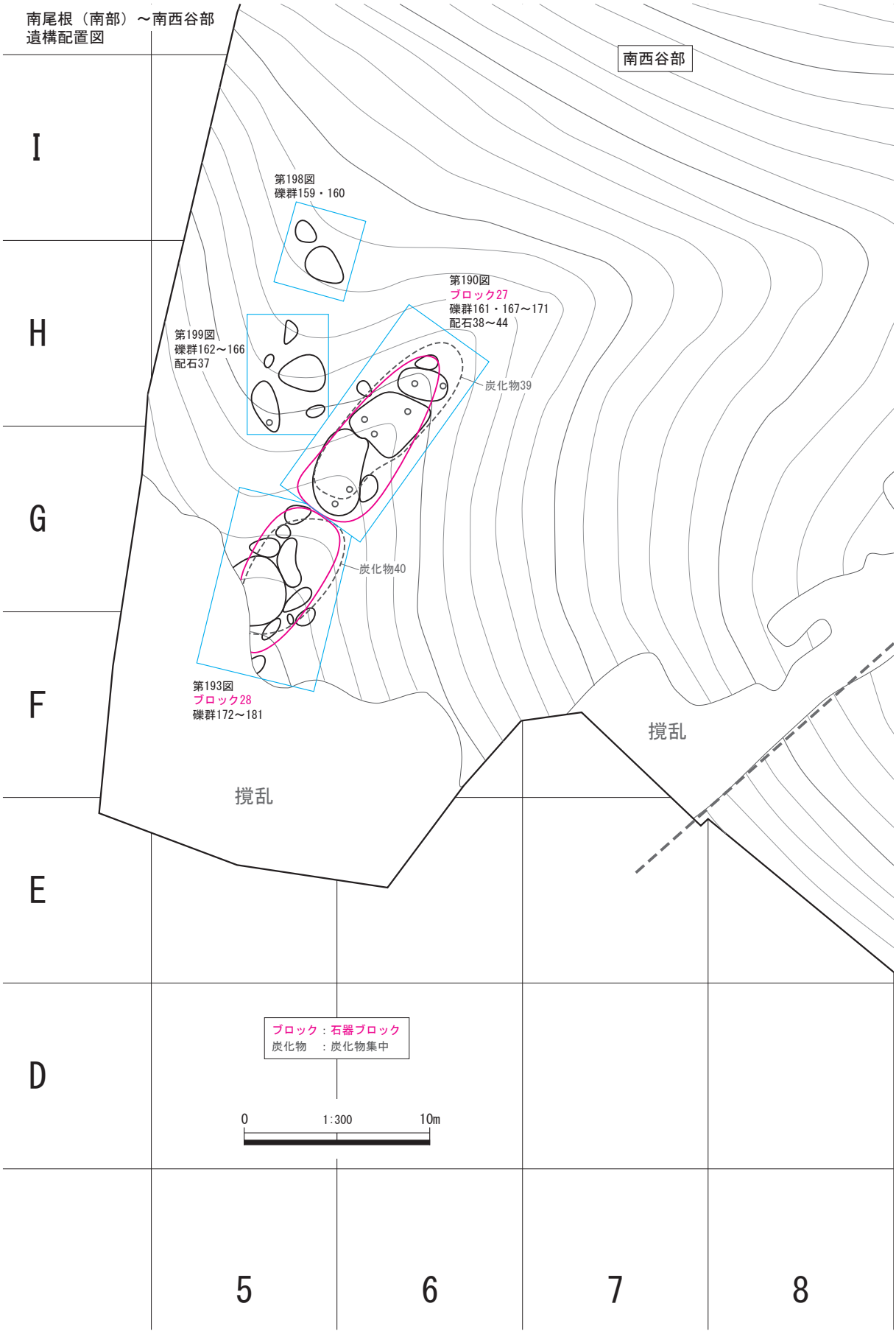
このように、南尾根内、南西谷部内では多くの接合関係が見られたが、南尾根と南西谷部間で、地区を越えた接合関係は確認されなかった。

第31表　第Ⅷ文化層 石器組成表

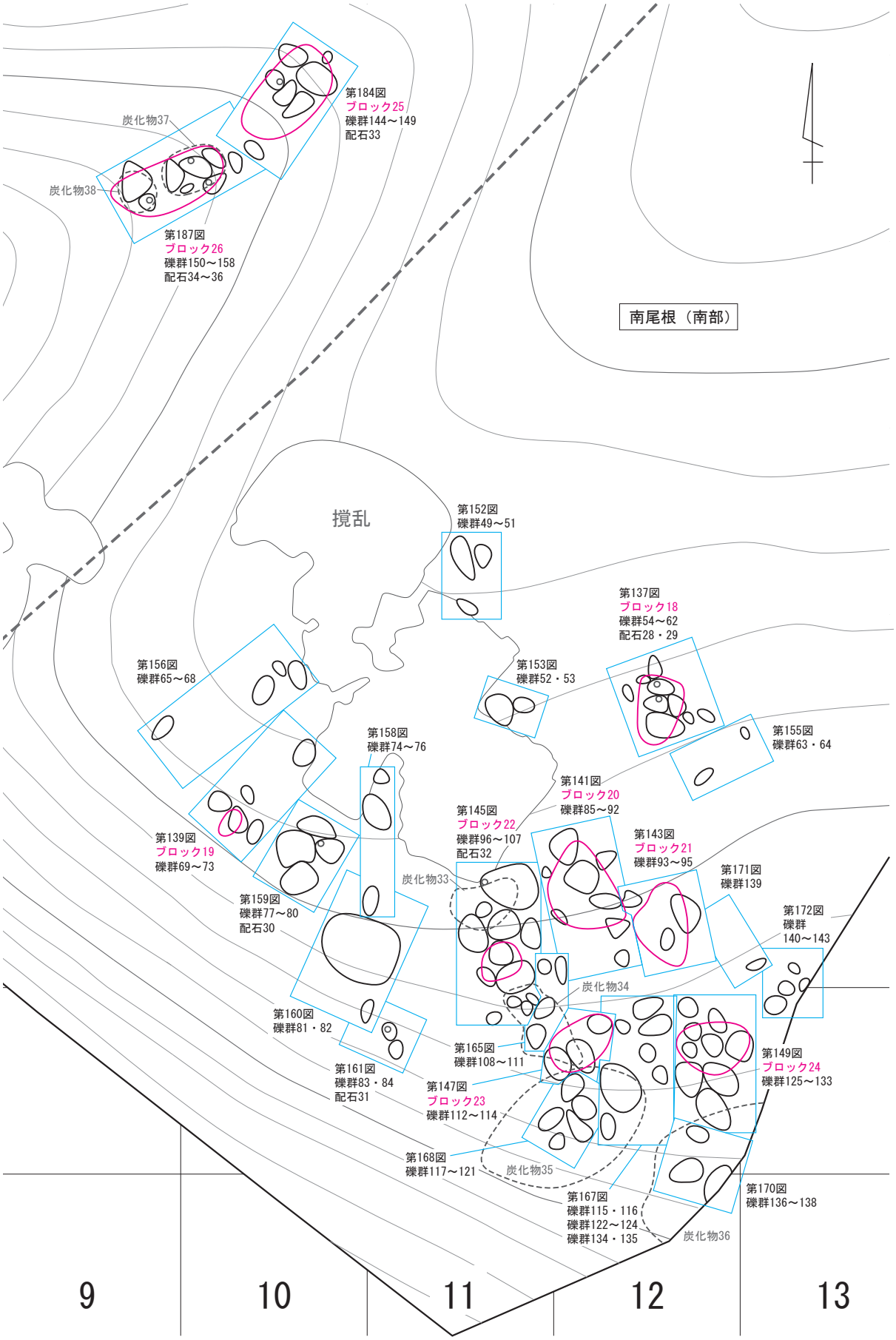
		ナイフ形石器	角錐状石器	尖頭器	ラウンド・スクレイパー	エンド・スクレイパー	サイド・スクレイパー	ノッチド・スクレイパー	ドリル	楔形石器	石刃	微細な剥離痕を有する剥片	石核	剥片類	原石	敲石	台石	計
黒曜石	天城柏峠群	2								1		3	3	14				23
	神津島恩馳島群			1								1						2
	箱根畑宿群	2			1							2	4	28				37
	諏訪星ヶ台群													1				1
	蓼科冷山群	1	2		5	3	1	6				9	7	69				103
	和田小深沢群													1				1
	和田鷹山群	1			2													3
	和田土屋橋南群													1				1
	分析不可等						1					1	1	206				209
ホルンフェルス		12				15	12	2	1		21	2	49	694				808
ガラス質黒色安山岩		1											2	4				7
細粒安山岩														1				1
硬質細粒凝灰岩												1						1
珪質頁岩						1	1					3	1	21				27
頁岩														2				2
粗粒砂岩														1				1
細粒砂岩														2		1		3
珪質シルト岩																1		1
輝緑岩															1			1
輝石安山岩														1		1	1	3
角閃石安山岩																1		1
計		19	2	1	8	19	15	8	1	1	21	22	67	1046	1	4	1	1236

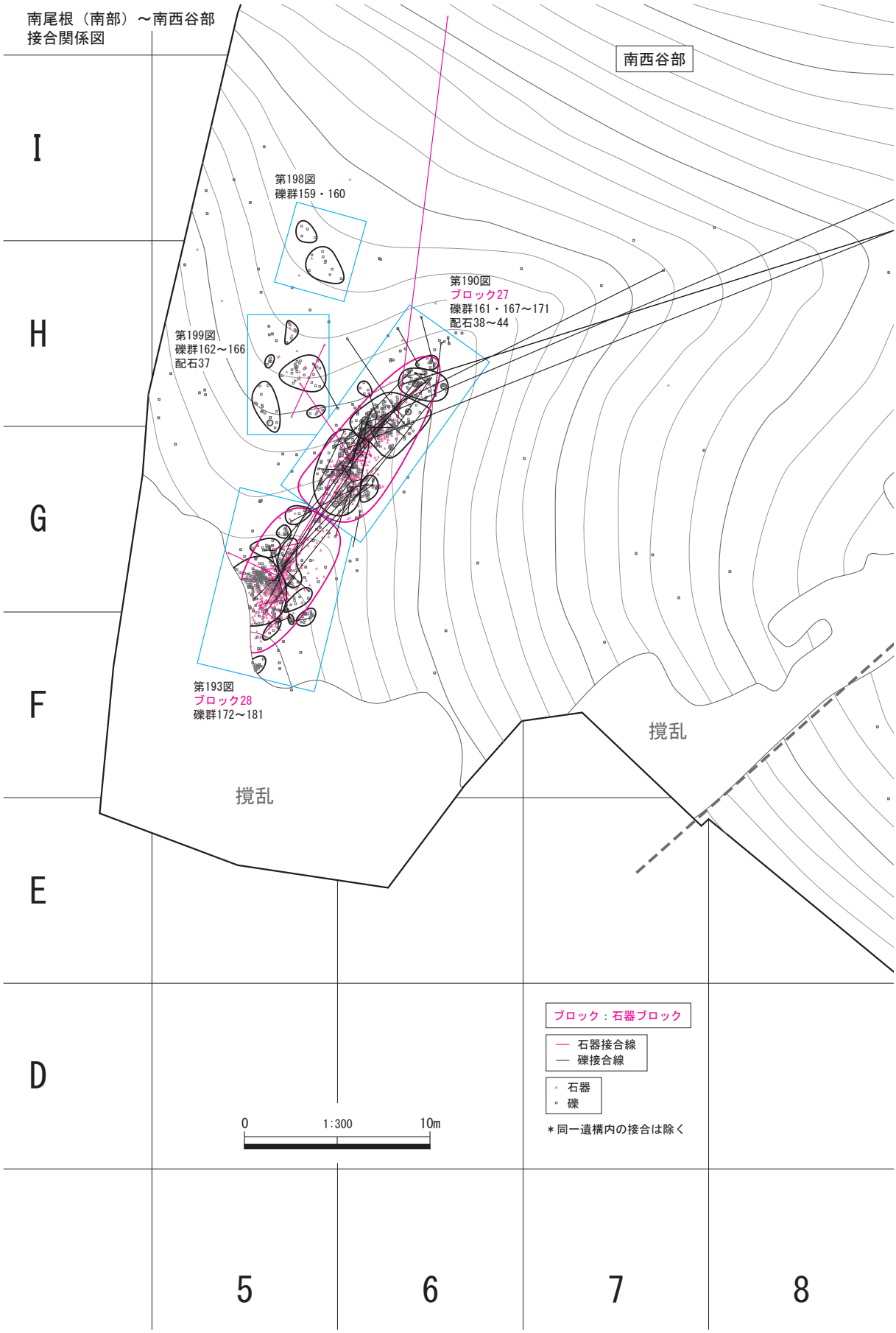


第130図　第Ⅷ文化層　遺構配置図・遺物分布図

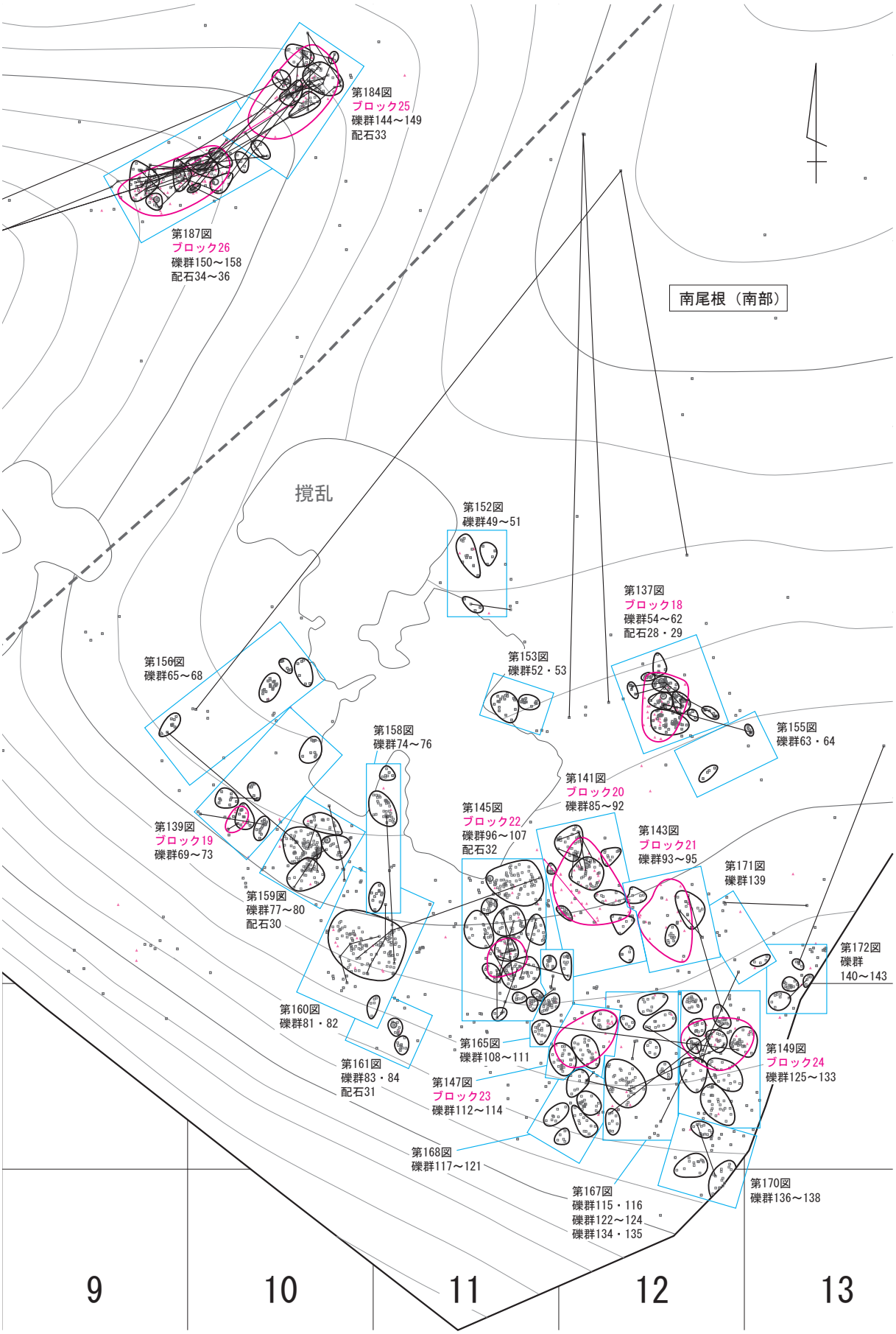


第131図　第Ⅷ文化層　南尾根（南部）～南西谷部 遺構配置図


第184図
ブロック25
礫群144～149
配石33
炭化物37
炭化物38
第187図
ブロック26
礫群150～158
配石34～36
南尾根（南部）
撹乱
第152図
礫群49～51
第137図
ブロック18
礫群54～62
配石28・29
第156図
礫群65～68
第153図
礫群52・53
第155図
礫群63・64
第158図
礫群74～76
第141図
ブロック20
礫群85～92
第145図
ブロック22
礫群96～107
配石32
第143図
ブロック21
礫群93～95
第139図
ブロック19
礫群69～73
炭化物33
第171図
礫群139
第172図
礫群
140～143
第159図
礫群77～80
配石30
炭化物34
第160図
礫群81・82
第165図
礫群108～111
第149図
ブロック24
礫群125～133
第161図
礫群83・84
配石31
第147図
ブロック23
礫群112～114
第168図
礫群117～121
炭化物35
第170図
礫群136～138
第167図
礫群115・116
礫群122～124
礫群134・135
炭化物36
9
10
11
12
13



第132図　第Ⅷ文化層　南尾根（南部）～南西谷部 接合関係図


第184図
ブロック25
礫群144～149
配石33
第187図
ブロック26
礫群150～158
配石34～36
南尾根（南部）
撹乱
第152図
礫群49～51
第137図
ブロック18
礫群54～62
配石28・29
第153図
礫群52・53
第156図
礫群65～68
第155図
礫群63・64
第158図
礫群74～76
第141図
ブロック20
礫群85～92
第145図
ブロック22
礫群96～107
配石32
第143図
ブロック21
礫群93～95
第139図
ブロック19
礫群69～73
第171図
礫群139
第159図
礫群77～80
配石30
第172図
礫群
140～143
第160図
礫群81・82
第165図
礫群108～111
第149図
ブロック24
礫群125～133
第161図
礫群83・84
配石31
第147図
ブロック23
礫群112～114
第168図
礫群117～121
第167図
礫群115・116
礫群122～124
礫群134・135
第170図
礫群136～138
9
10
11
12
13

１　北尾根・中央尾根・中央谷部

石器が17点、礫が３点出土したのみであり、遺構は検出されなかった。

（１）遺物

石器群の内訳は、ナイフ形石器２点、石刃３点、石核１点、剥片類が11点である。石材は黒曜石８点（天城柏峠群２点、箱根畑宿群２点、諏訪星ヶ台群１点、分析不可等２点、未分析１点）、ホルンフェルス９点である。

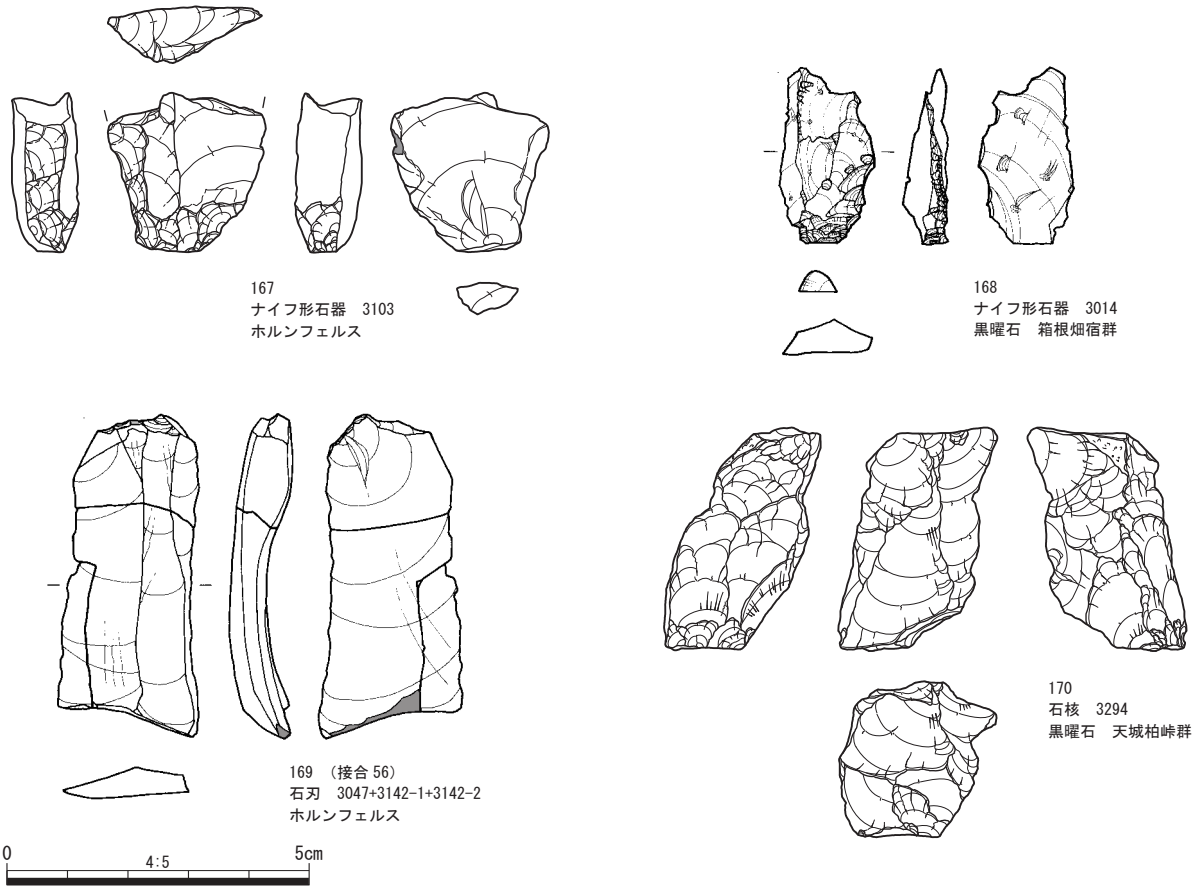
ナイフ形石器（第133図167・168　写真図版８）

167は、縦長剥片を素材とした二側縁加工のナイフ形石器である。左側縁と、右側縁の基部にブランティングを施して刃部を作出しているが、素材剥片の打点部は残している。上部は折損している。石材はホルンフェルスである。

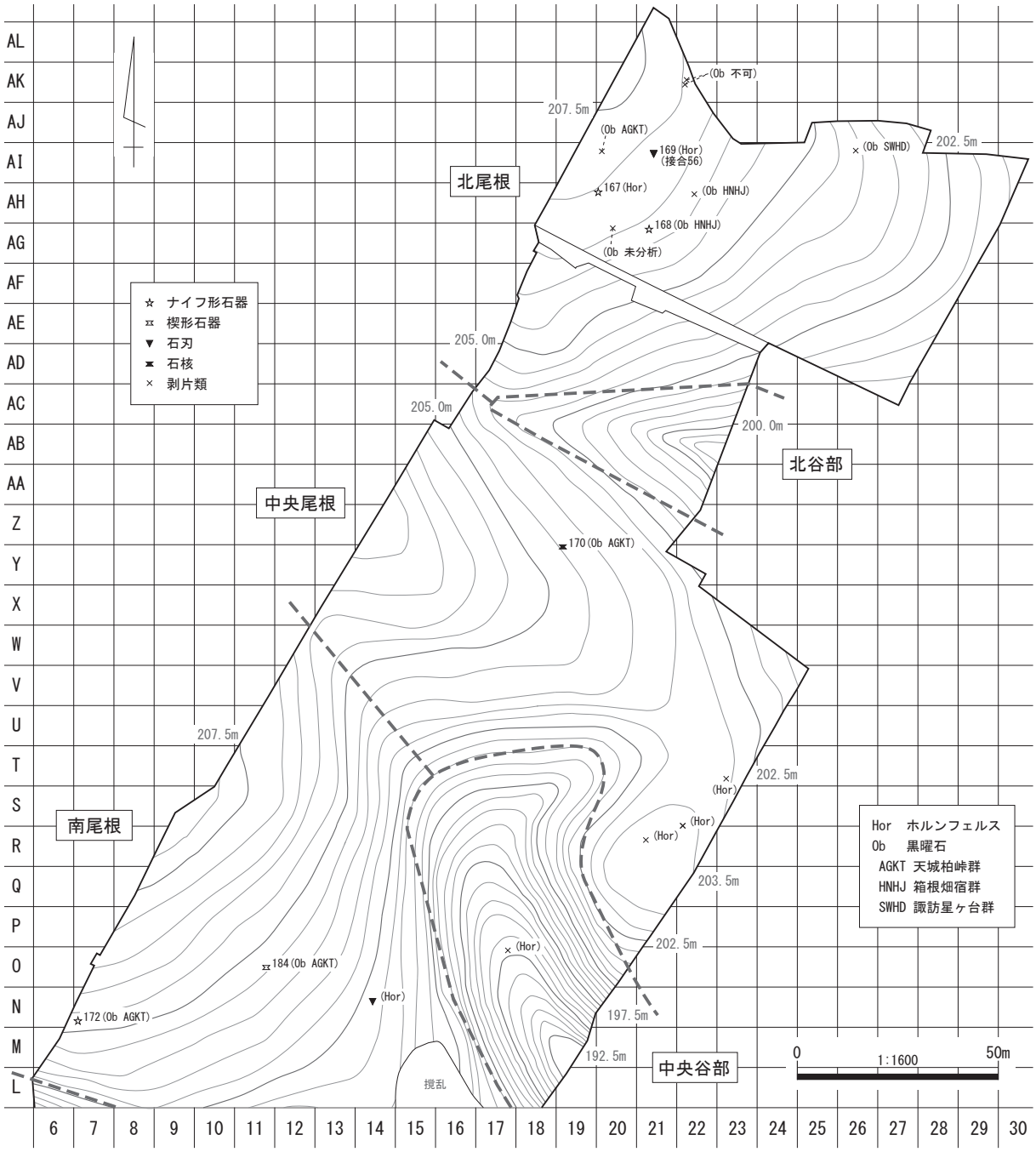
168は、幅広剥片を素材とした二側縁加工のナイフ形石器である。右側縁と、左側縁の基部にブランティングが確認できる。素材剥片の打点部は、加工によって除去されている。平面形状は切出形石器に近い。石材は黒曜石（箱根畑宿群）である。

石刃（第133図169　写真図版８）

169は大型の石刃である。背面には、同一方向の剥離を繰り返しているのが見て取れる。打面部付近に頭部調整が確認できる。石材はホルンフェルスである。



第133図　第Ⅷ文化層　北尾根・中央尾根 出土石器実測図



第134図　第Ⅷ文化層　北尾根～中央谷部 遺物分布図

石核（第133図170　写真図版８）

170は小型の石刃を剥離した石核である。形状は直方体に近く、両端に打面を作出して、上下両方向から剥離を行っている。打面には細かい調整は確認できなかった。剥離面から判断するに、長さ2.5～３cm程度の石刃を剥離している。石材は黒曜石（天城柏峠群）である。

第32表　第Ⅷ文化層 北尾根・中央尾根・中央谷部 石器組成表

		ナイフ形石器	石刃	石核	剥片類	計
黒曜石	天城柏峠群			1	1	2
	箱根畑宿群	1			1	2
	諏訪星ヶ台群				1	1
	分析不可等				3	3
ホルンフェルス		1	3		5	9
計		2	3	1	11	17

２　南尾根

遺構は、石器ブロックが７ヶ所、礫群が96基、配石が７基、炭化物集中が４ヶ所検出された。遺物は、石器が206点、礫が1,850点出土した。遺物・遺構ともに南側から多く確認された。

第33表　第Ⅷ文化層 南尾根 石器組成表

		ナイフ形石器	尖頭器	エンド・スクレイパー	サイド・スクレイパー	ノッチド・スクレイパー	ドリル	楔形石器	石刃	微細な剥離痕を有する剥片	石核	剥片類	敲石	台石	原石	計
黒曜石	天城柏峠群	1						1								2
	神津島恩馳島群		1							1						2
	箱根畑宿群									2						2
	蓼科冷山群									1	1	9				11
	分析不可等				1							2				3
ホルンフェルス		2		4	5	2	1		5	1	28	116				164
ガラス質黒色安山岩		1									2	4				7
細粒安山岩												1				1
硬質細粒凝灰岩										1						1
珪質頁岩					1					2		2				5
細粒砂岩												2	1			3
珪質シルト岩													1			1
輝緑岩															1	1
輝石安山岩													1	1		2
角閃石安山岩													1			1
計		4	1	4	7	2	1	1	5	8	31	136	4	1	1	206

（１）遺構

ア　石器ブロック

石器ブロック18（第137・138図）

Ｆ－12グリッドから検出された。北東～南西方向3.3m、北西～南東方向1.9mの範囲に、35点の石器が分布している。上下に多少の幅を持って分布しているが、出土のピークは休場層直下黒色帯の中部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。

石器ブロックと重複して、55～58・61号礫群、28・29号配石が検出された。また、80点以上の炭化物が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

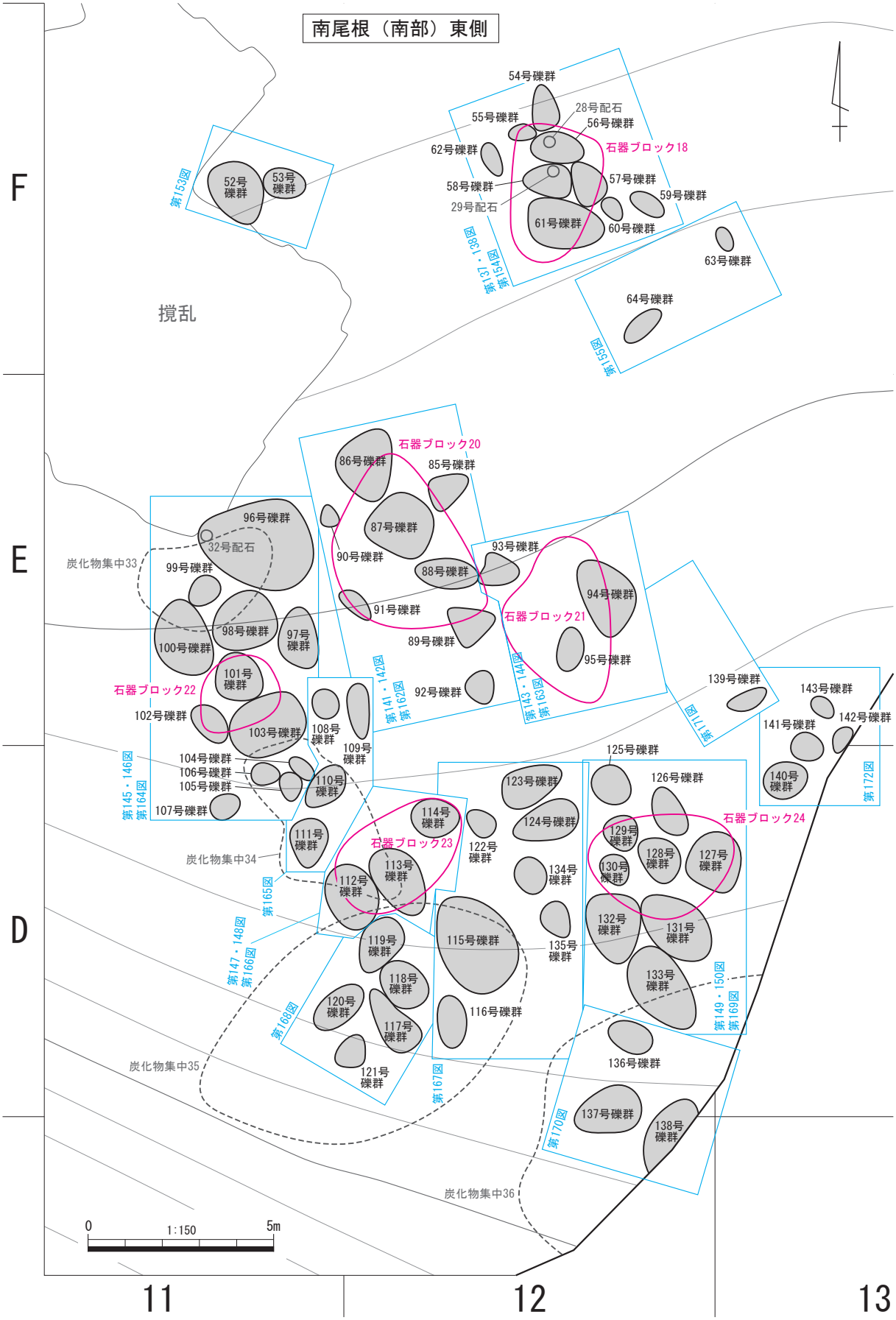
石器群は、エンド・スクレイパー１点、石刃２点、微細な剥離痕を有する剥片２点、石核６点、剥片類23点、敲石１点である。石材は、黒曜石（蓼科冷山群）４点、ホルンフェルス29点、珪質頁岩１点、珪質シルト岩１点である。いずれの石器にも被熱した様相は認められなかった。

出土資料の大半がホルンフェルスであり、剥片類であった。製品はエンド・スクレイパーや石刃などであり、刺突具は確認できなかった。剥片の量に比べて石核がやや多く、192のような剥片剥離を行っている接合資料も出土している。剥離されているのは不定形な幅広剥片であるため、石刃をはじめとした製品は、遺構外から持ち込まれたと推測される。

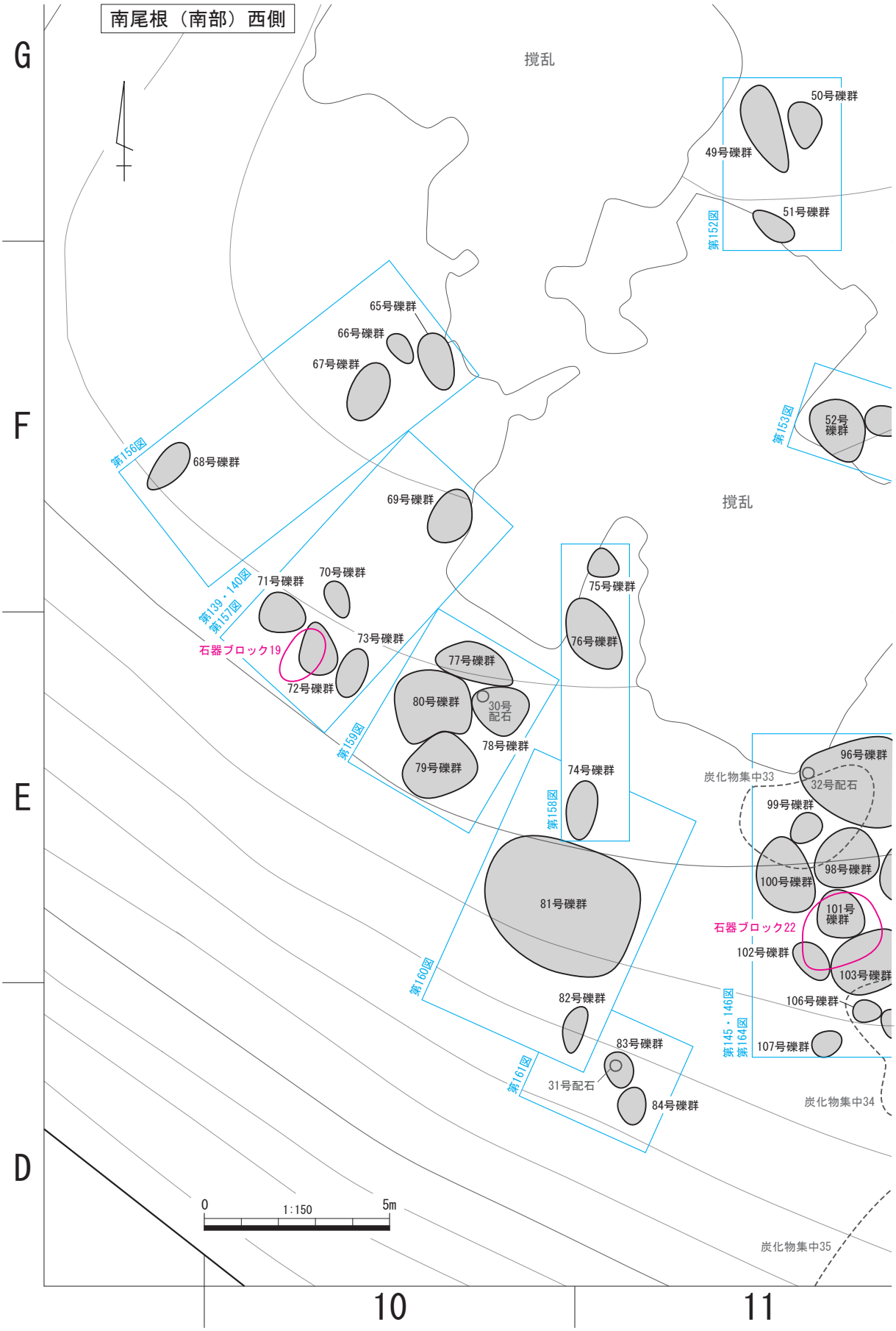
石器ブロック19（第139・140図）

Ｅ－10グリッドから検出された。北西～南東方向0.8m、北東～南西方向0.6mの範囲に、７点の石器が分布している。上下に多少の幅を持って分布しているが、出土のピークは休場層直下黒色帯の中部である。付近は北東から南西にかけて、緩やかに下る傾斜地である。

石器ブロックと重複して、72号礫群が検出された。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかっ



第135図　第Ⅷ文化層　南尾根（南部）東側 遺構配置図



第136図　第Ⅷ文化層　南尾根（南部）西側 遺構配置図

第34表　第Ⅷ文化層 石器ブロック18～24 石器組成表

石器ブロック18

		エンド・スクレイパー	石刃	微細な剥離痕を有する剥片	石核	剥片類	敲石	計
黒曜石	蓼科冷山群			1		3		4
ホルンフェルス		1	2		6	20		29
珪質頁岩				1				1
珪質シルト岩							1	1
計		1	2	2	6	23	1	35

石器ブロック19

	石核	剥片類	計
ホルンフェルス	1	6	7

石器ブロック20

		微細な剥離痕を有する剥片	石核	剥片類	敲石	計
黒曜石	箱根畑宿群	1				1
	蓼科冷山群		1	3		4
	未分析			1		1
ホルンフェルス			2	29		31
細粒砂岩				1		1
輝石安山岩					1	1
角閃石安山岩					1	1
計		1	3	34	2	40

石器ブロック21

	ナイフ形石器	石核	剥片類	敲石	計
ホルンフェルス	1	4	8		13
細粒砂岩				1	1
計	1	4	8	1	14

石器ブロック22

	ナイフ形石器	石刃	剥片類	計
ホルンフェルス	1	1	6	8
珪質頁岩			1	1
計	1	1	7	9

石器ブロック23

	エンド・スクレイパー	剥片類	台石	計
ホルンフェルス	1	8		9
ガラス質黒色安山岩		1		1
輝石安山岩			1	1
計	1	9	1	11

石器ブロック24

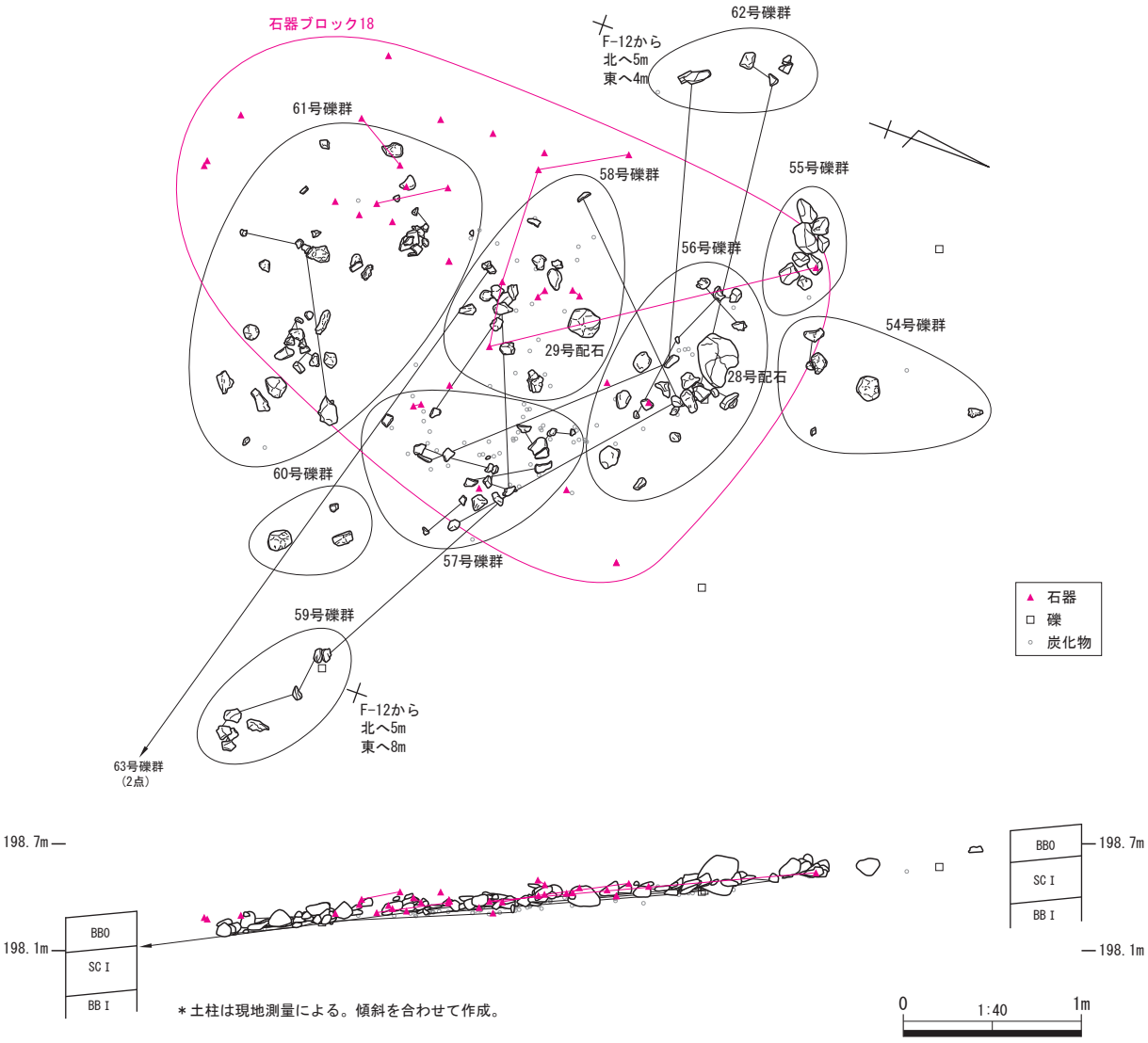
	サイド・スクレイパー	ノッチド・スクレイパー	石刃	微細な剥離痕を有する剥片	石核	剥片類	計
ホルンフェルス	3	2	1	1	2	9	18

た。

石器群は、石核１点、剥片類６点である。石材は、全てホルンフェルスである。いずれの石器にも被熱した様相は認められなかった。

非常に小規模な石器ブロックであり、剥片剥離を行っているような、石核との接合関係は確認できなかった。

石器ブロック18
54～62号礫群
28・29号配石



第137図　第Ⅷ文化層　南尾根 石器ブロック18、54～62号礫群、28・29号配石 遺構図

石器ブロック20（第141・142図）

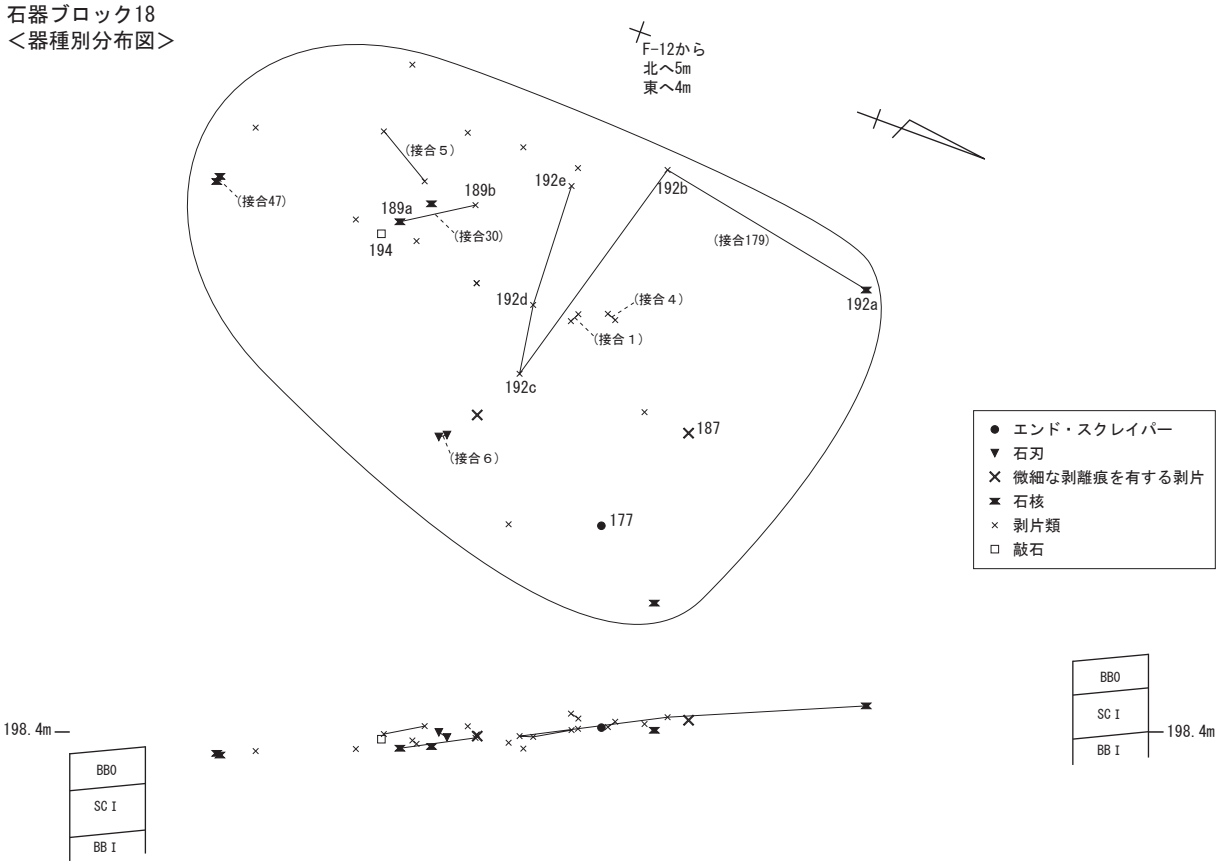
E－11～12グリッドから検出された。北西～南東方向4.6m、北東～南西方向3.4mの範囲に、40点の石器が分布している。上下に多少の幅を持って分布しているが、出土のピークは休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。

石器ブロックと重複して、85～88・91号礫群が検出された。また、110点以上の炭化物が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

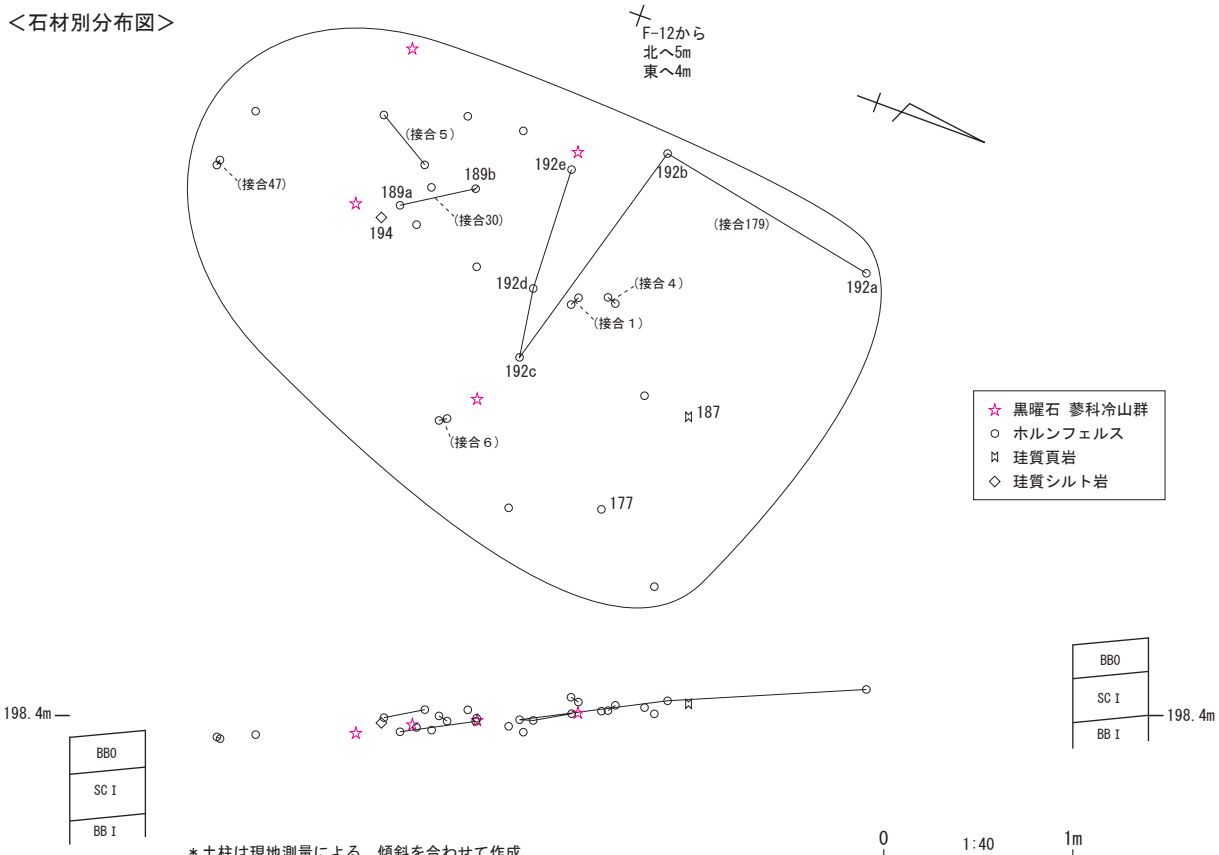
石器群は、微細な剥離痕を有する剥片１点、石核３点、剥片類34点、敲石２点である。石材は、黒曜石６点（箱根畑宿群１点、蓼科冷山群４点、未分析１点）、ホルンフェルス31点、細粒砂岩１点、輝石安山岩１点、角閃石安山岩１点である。いずれの石器にも被熱した様相は認められなかった。

出土資料の大半がホルンフェルスであり、剥片類であった。剥片剥離を行っている接合資料も出土している。剥離されているのは、不定形な幅広剥片である。黒曜石（蓼科冷山群）の石核が１点出土しているが、エンド・スクレイパーを転用した資料である。

石器ブロック18
＜器種別分布図＞



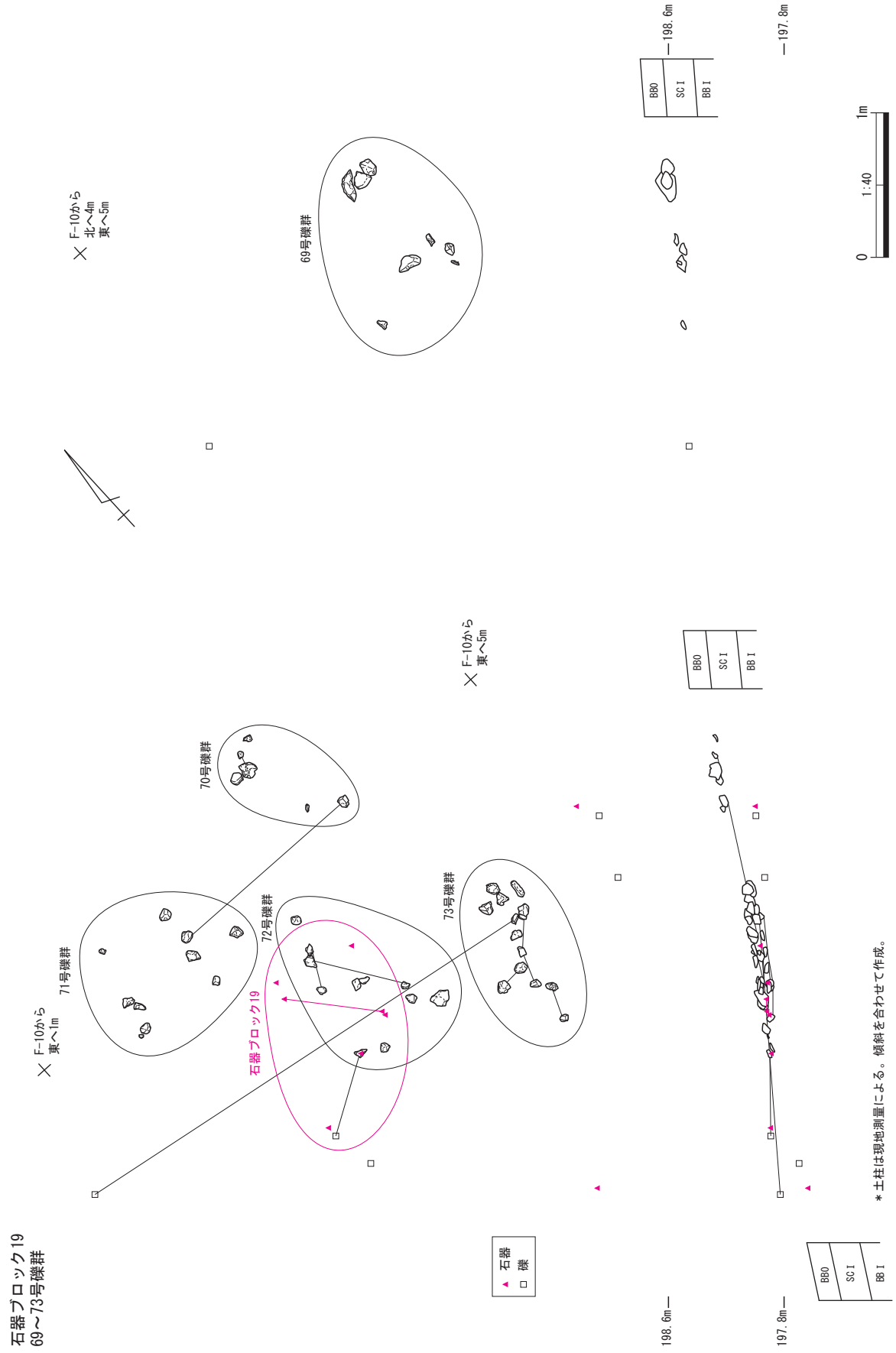
＜石材別分布図＞



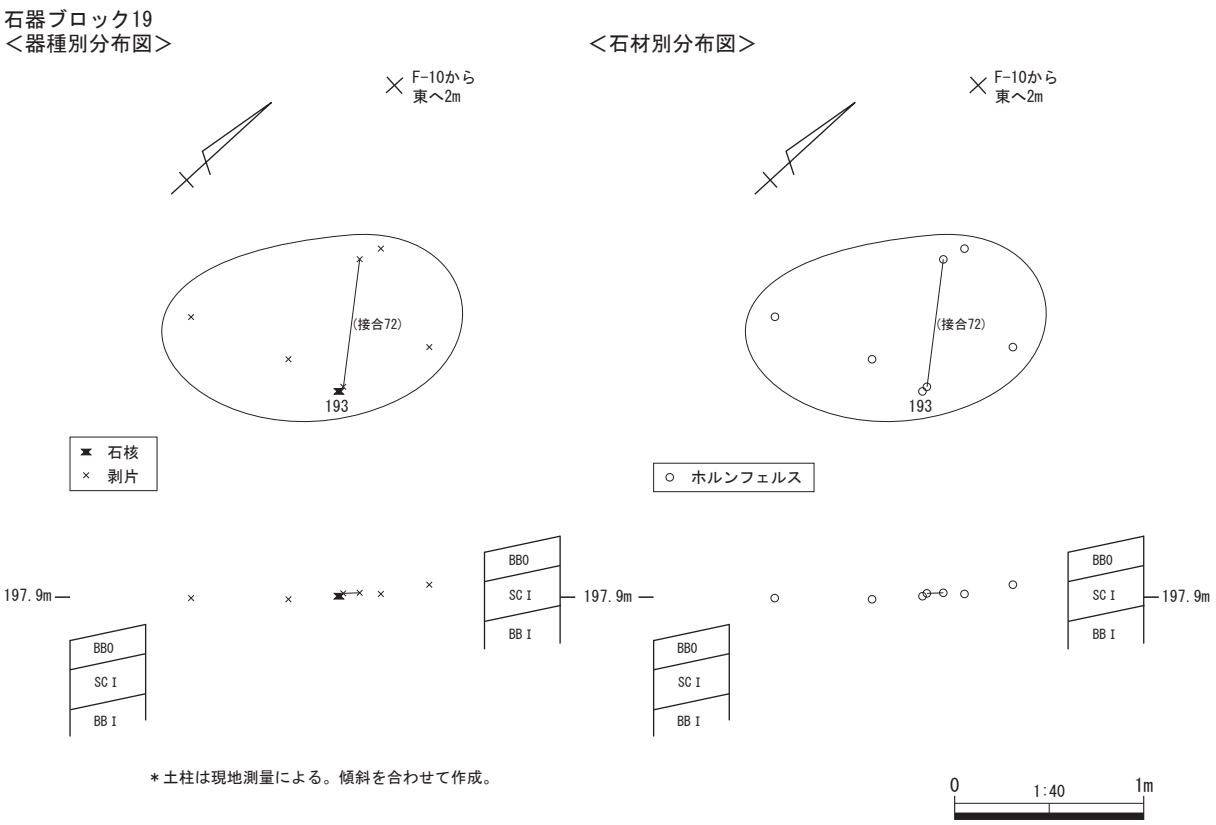
＊土柱は現地測量による。傾斜を合わせて作成。

0　1:40　1m

第138図　第Ⅷ文化層　南尾根 石器ブロック18 遺構図



第139図　第Ⅷ文化層　南尾根 石器ブロック19、69～73号礫群 遺構図



第140図　第Ⅷ文化層　南尾根 石器ブロック19 遺構図

石器ブロック21（第143・144図）

Ｅ－12グリッドから検出された。北西～南東方向4.3m、北東～南西方向2.6mの範囲に、14点の石器が散漫に分布している。休場層直下黒色帯の下部～上部にかけて、多少の幅を持って分布している。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。

石器ブロックと重複して、94・95号礫群が検出された。また、40点以上の炭化物が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石器群は、ナイフ形石器１点、石核４点、剥片類８点、敲石１点である。石材は、ホルンフェルス13点、細粒砂岩１点である。いずれの石器にも被熱した様相は認められなかった。

小規模な石器ブロックであり、接合関係は確認できなかった。

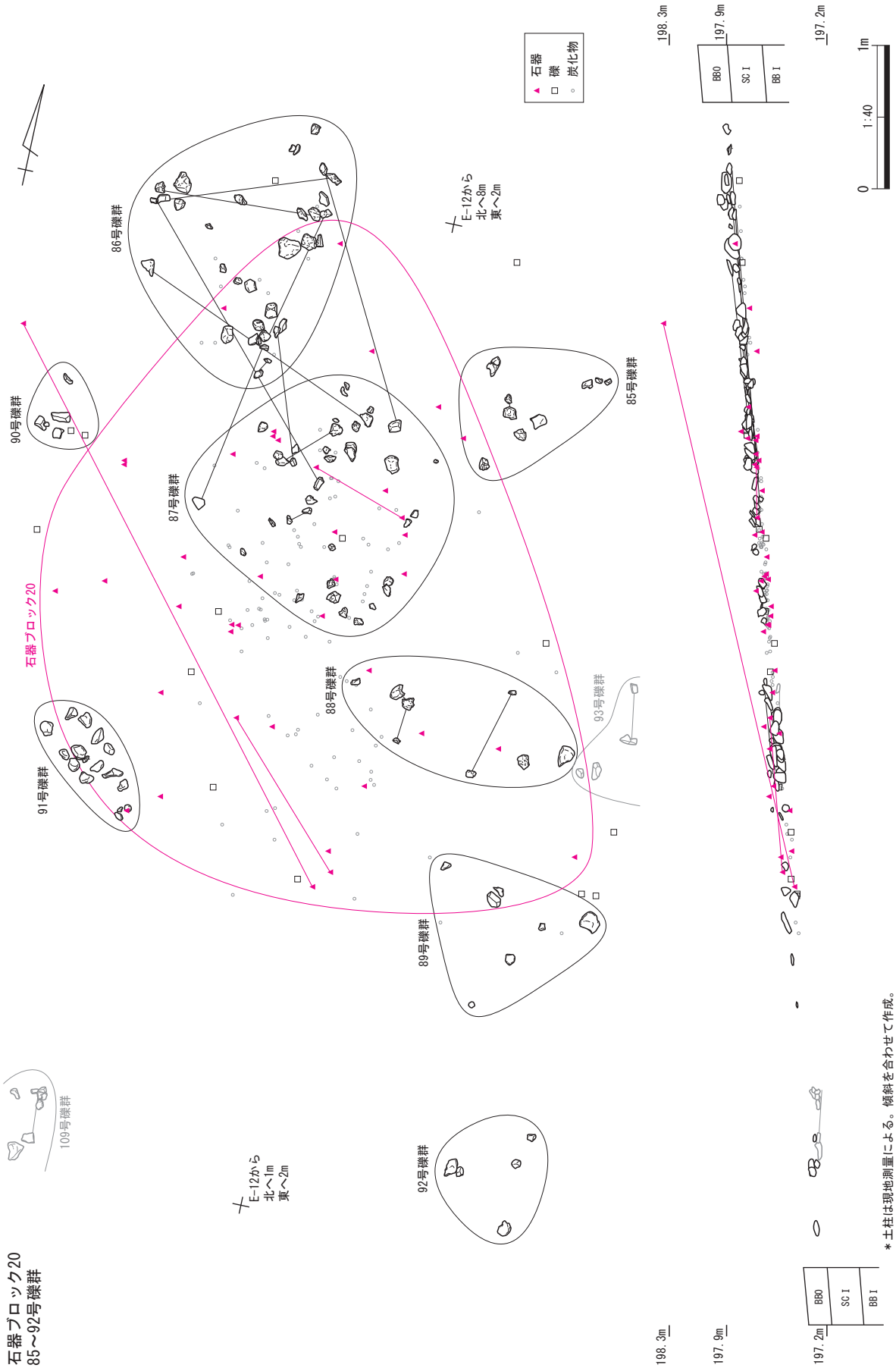
石器ブロック22（第145・146図）

Ｅ－11グリッドから検出された。北東～南西方向2.2m、北西～南東方向1.8mの範囲に、９点の石器が分布している。休場層直下黒色帯の下部～上部にかけて、多少の幅を持って分布している。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。

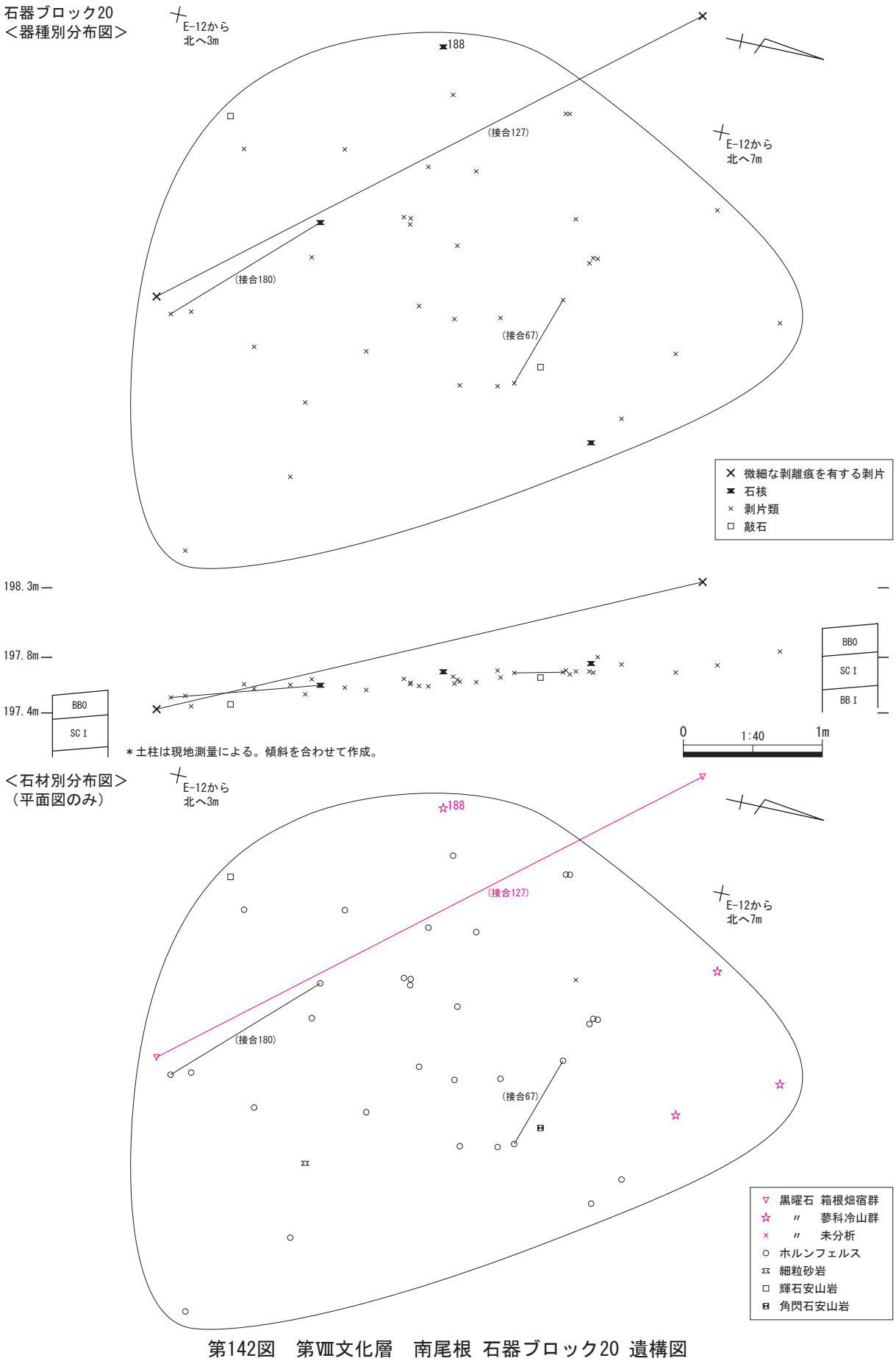
石器ブロックと重複して、101～103号礫群が検出された。また、30点以上の炭化物が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石器群は、ナイフ形石器１点、石刃１点、剥片類７点である。石材は、ホルンフェルス８点、珪質頁岩１点である。いずれの石器にも被熱した様相は認められなかった。

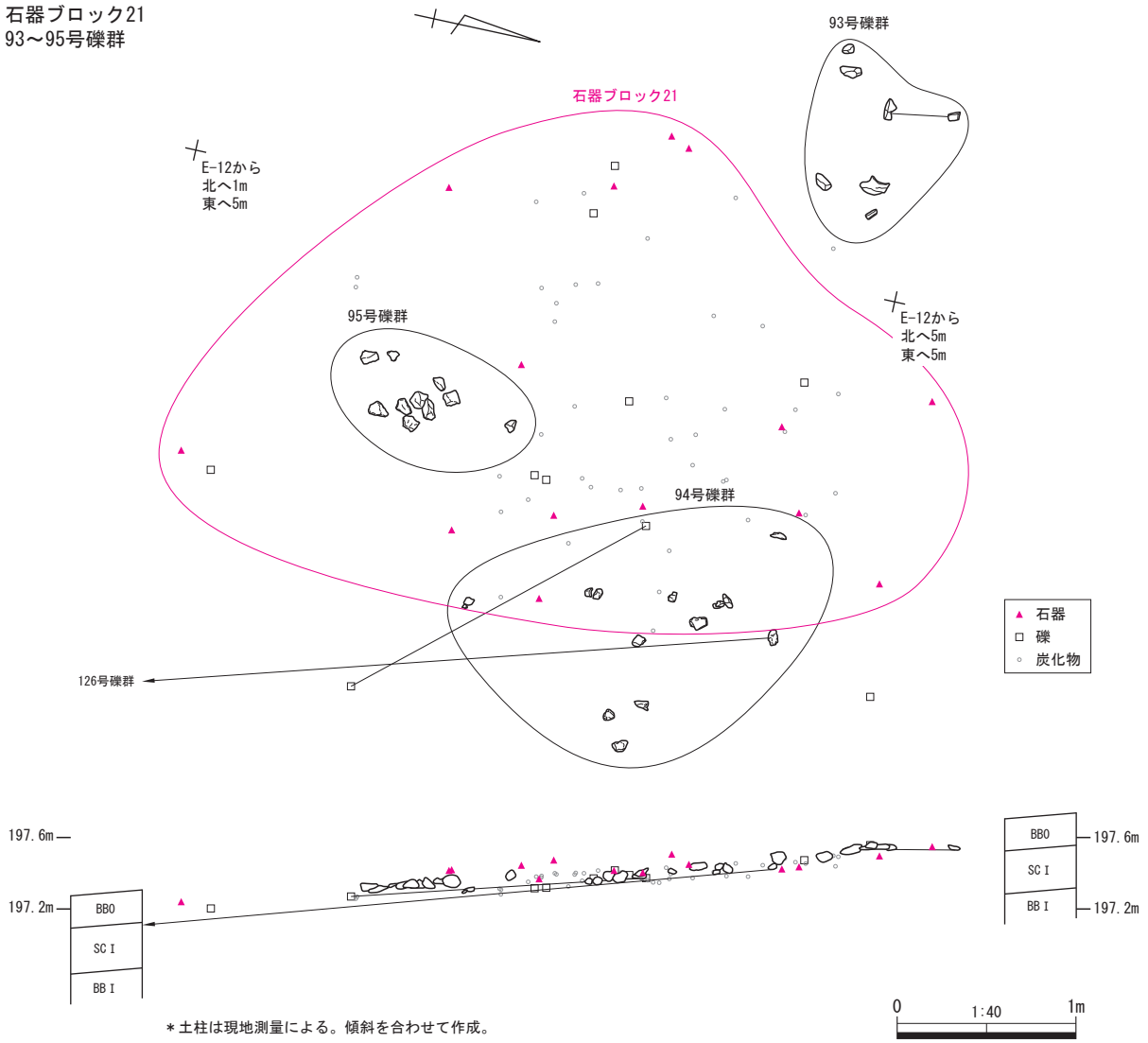
小規模な石器ブロックであり、接合関係は確認できなかった。



第141図　第Ⅷ文化層　南尾根 石器ブロック20、85～92号礫群 遺構図



第142図　第Ⅷ文化層　南尾根 石器ブロック20 遺構図



第143図　第Ⅷ文化層　南尾根 石器ブロック21、93～95号礫群 遺構図

石器ブロック23（第147・148図）

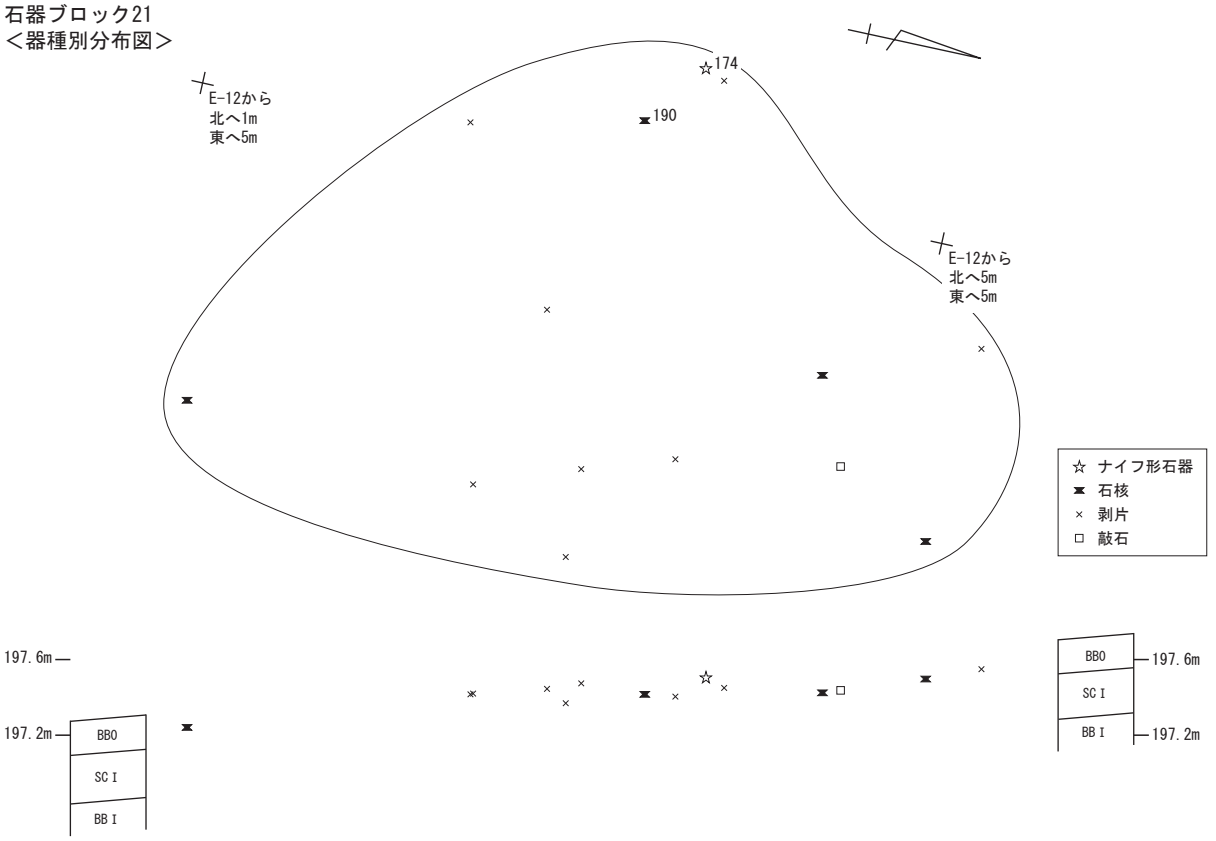
D－11～12グリッドから検出された。北東～南西方向3.4m、北西～南東方向1.9mの範囲に、11点の石器が分布している。休場層直下黒色帯の下部～上部にかけて、多少の幅を持って分布している。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。

石器ブロックと重複して、112～114号礫群が検出された。また、炭化物集中34・35が、分布範囲の一部に、それぞれ重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

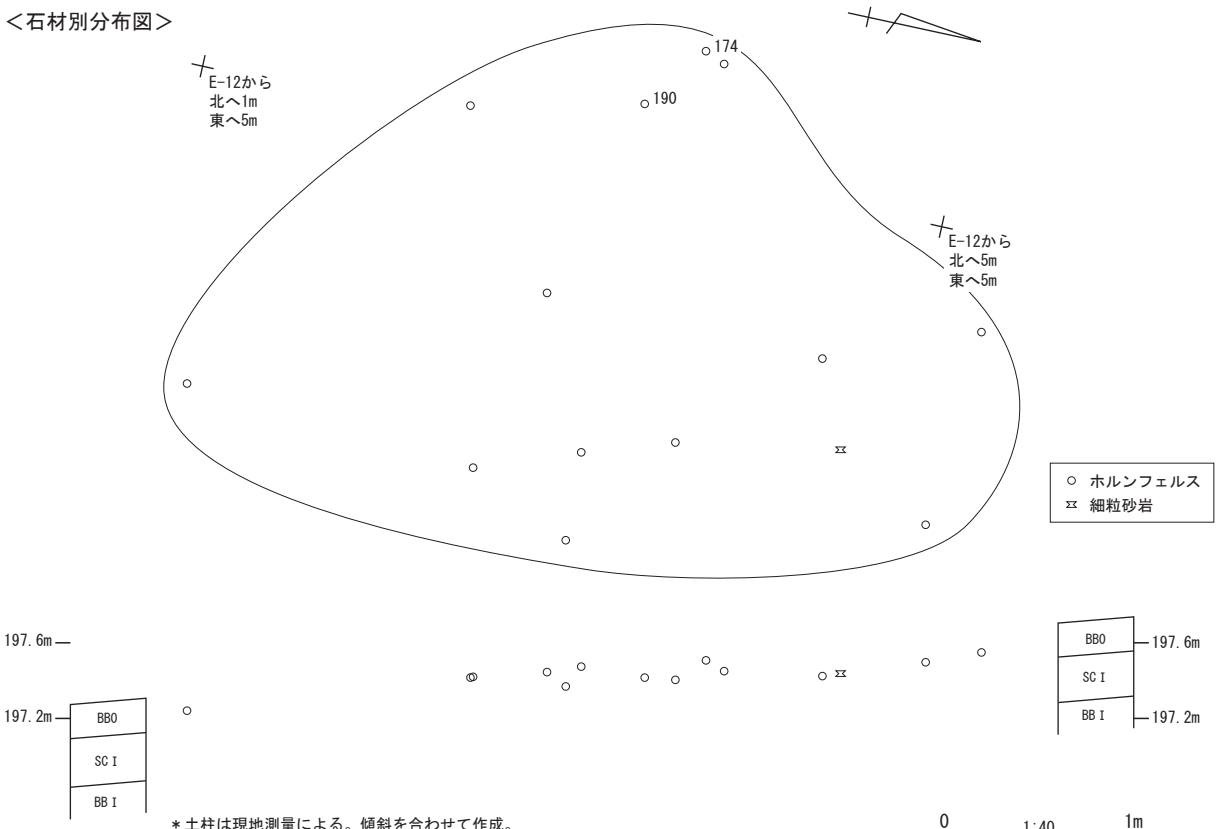
石器群は、エンド・スクレイパー１点、剥片類９点、台石１点である。石材は、ホルンフェルス９点、ガラス質黒色安山岩１点、輝石安山岩１点である。台石は重さ1,200g程度で、114号礫群の東端より出土している。いずれの石器にも被熱した様相は認められなかった。

小規模な石器ブロックであり、接合関係は確認できなかった。

石器ブロック21
＜器種別分布図＞



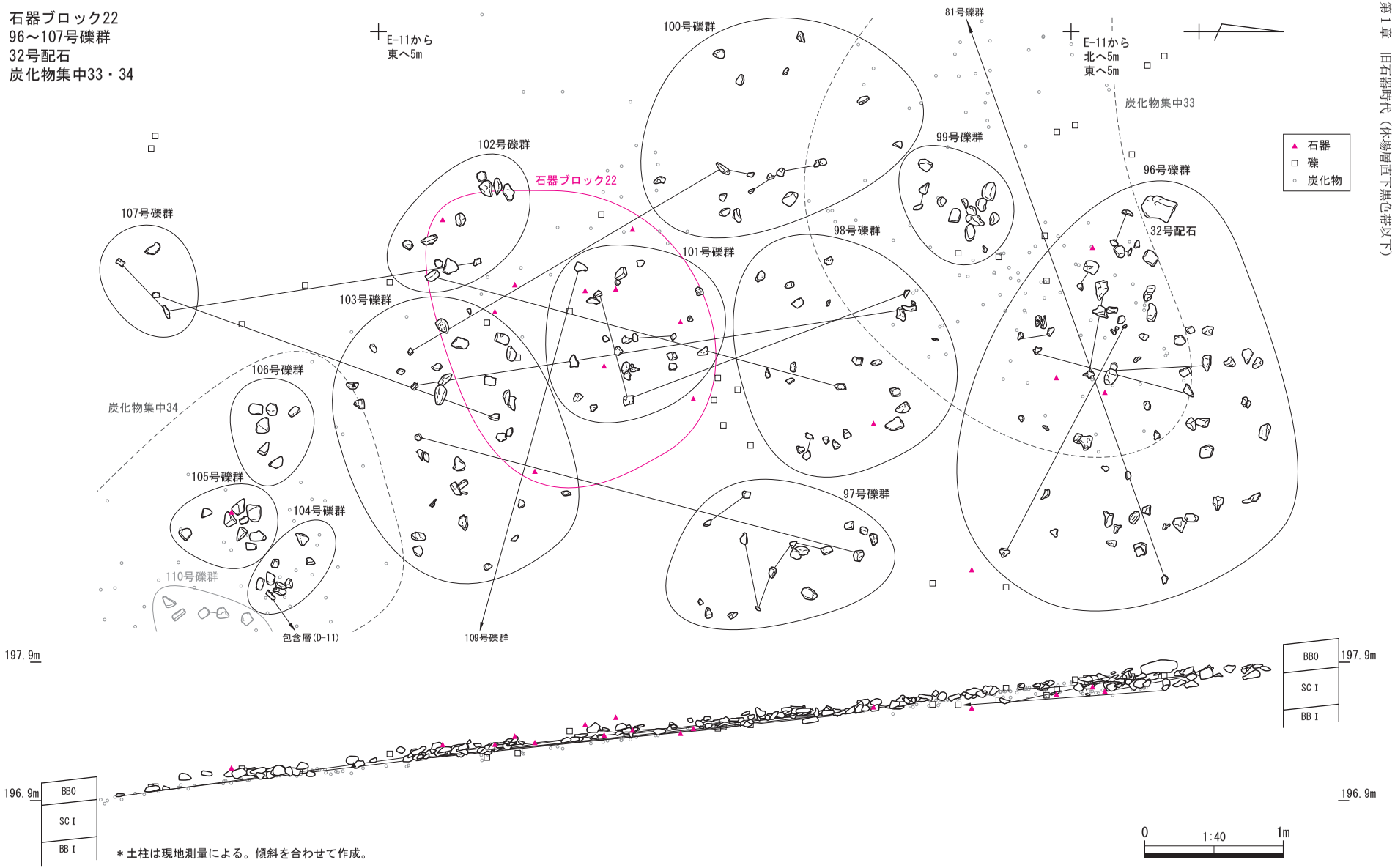
＜石材別分布図＞



＊土柱は現地測量による。傾斜を合わせて作成。

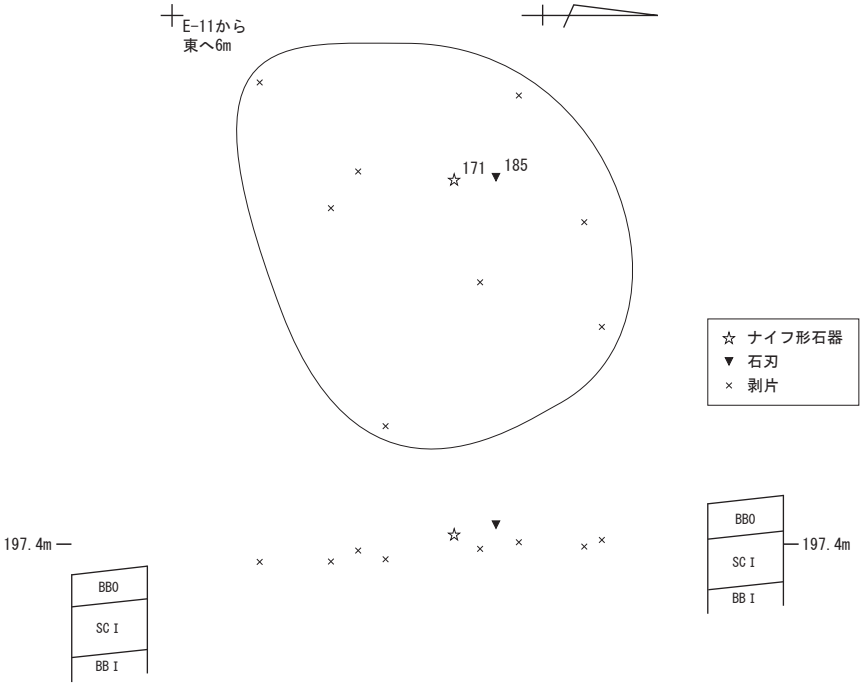
0　1:40　1m

第144図　第Ⅷ文化層　南尾根 石器ブロック21 遺構図

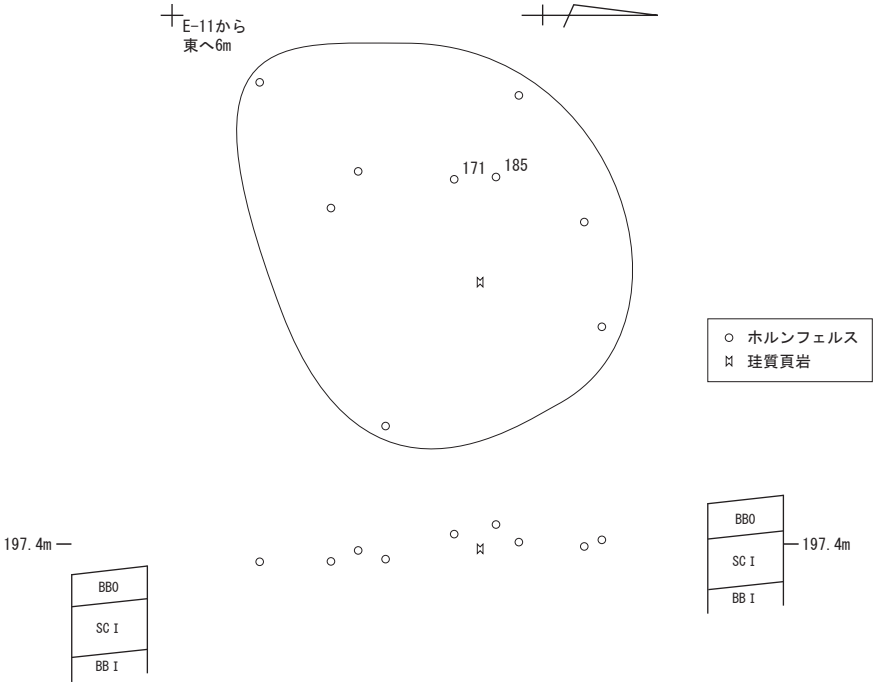


第145図　第Ⅷ文化層　南尾根 石器ブロック22、96～107号礫群、32号配石、炭化物集中33・34 遺構図

石器ブロック22
＜器種別分布図＞



＜石材別分布図＞

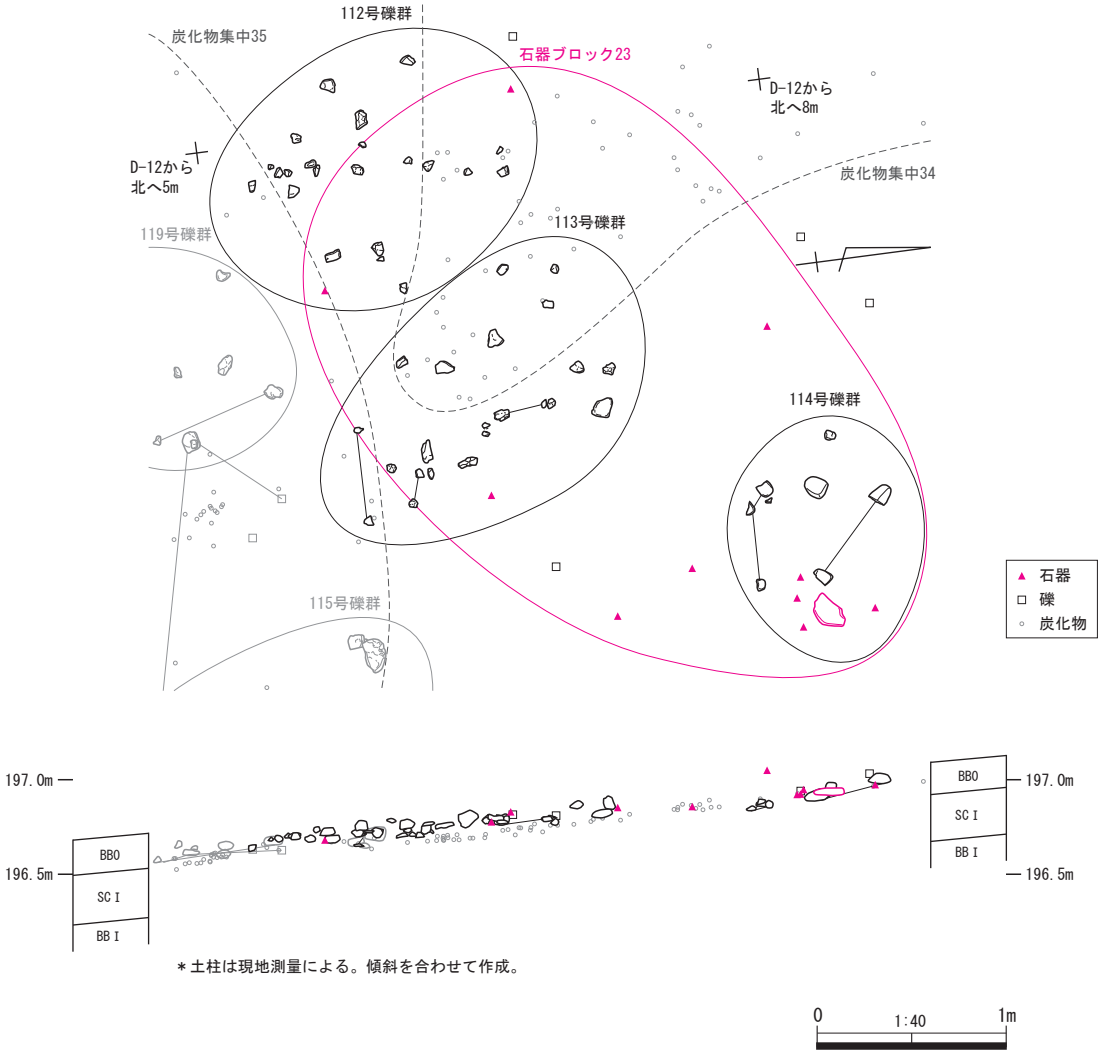


＊土柱は現地測量による。傾斜を合わせて作成。

0　1:40　1m

第146図　第Ⅷ文化層　南尾根 石器ブロック22 遺構図

石器ブロック23
112～114号礫群
炭化物集中34・35



第147図　第Ⅷ文化層　南尾根 石器ブロック23、112～114号礫群、炭化物集中34・35 遺構図

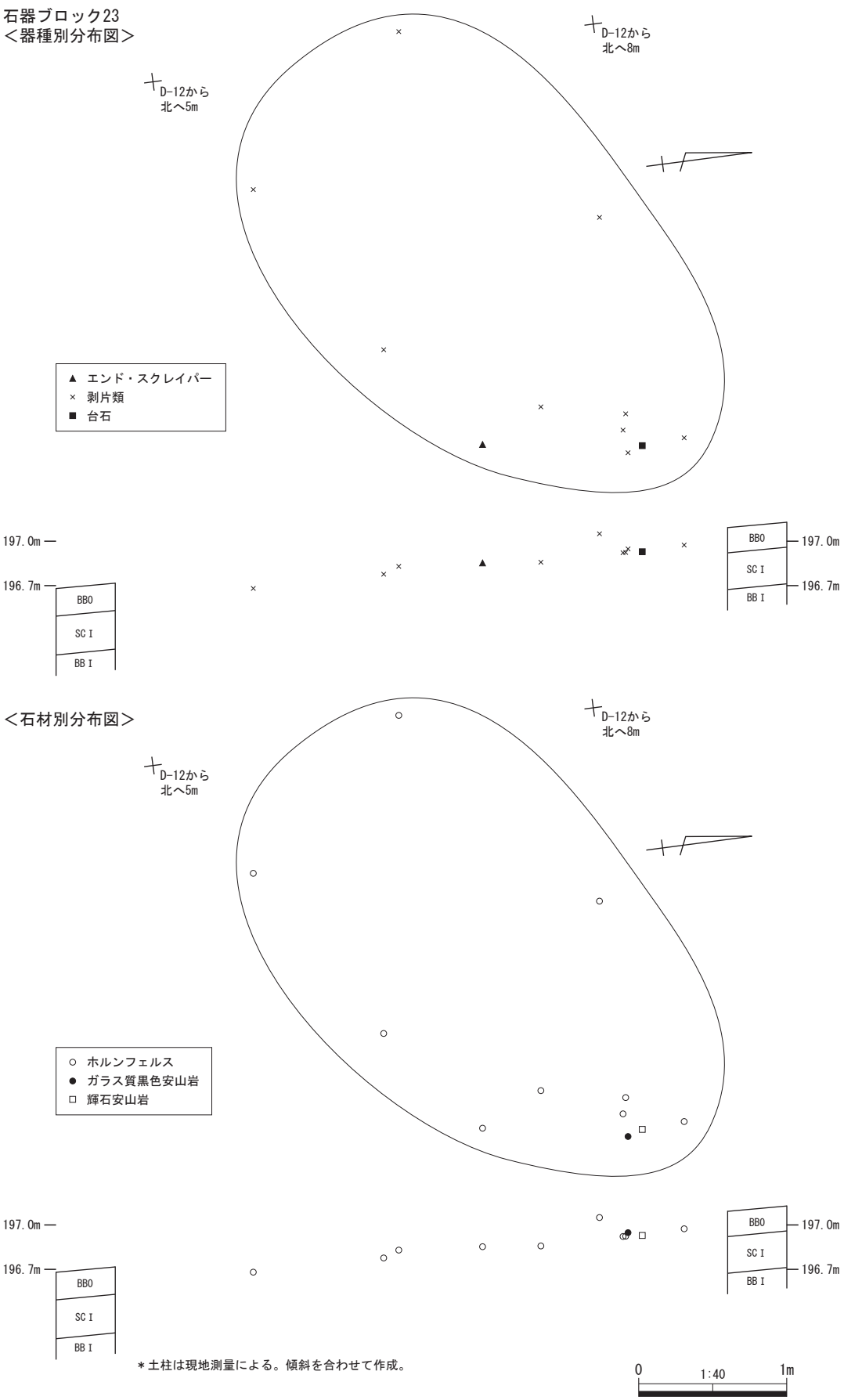
石器ブロック24（第149・150図）

D－12～13グリッドから検出された。東西方向3.6m、南北方向2.4mの範囲に、18点の石器が分布している。上下に多少の幅を持って分布しているが、出土のピークは休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。

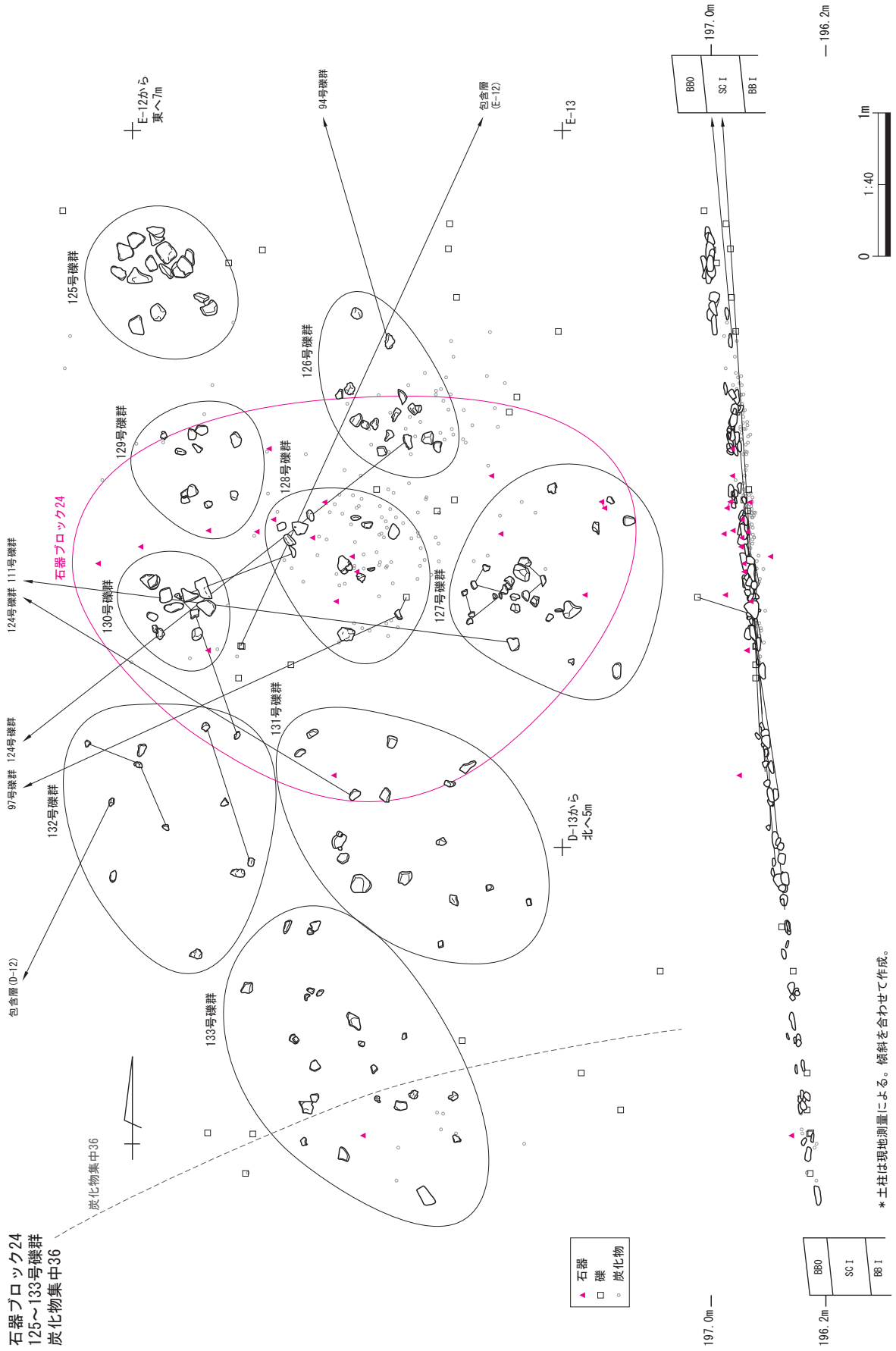
石器ブロックと重複して、126～131号礫群が検出された。また、140点以上の炭化物が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石器群は、サイド・スクレイパー３点、ノッチド・スクレイパー２点、石刃１点、微細な剥離痕を有する剥片１点、石核２点、剥片類９点である。石材は、全てホルンフェルスである。いずれの石器にも被熱した様相は認められなかった。

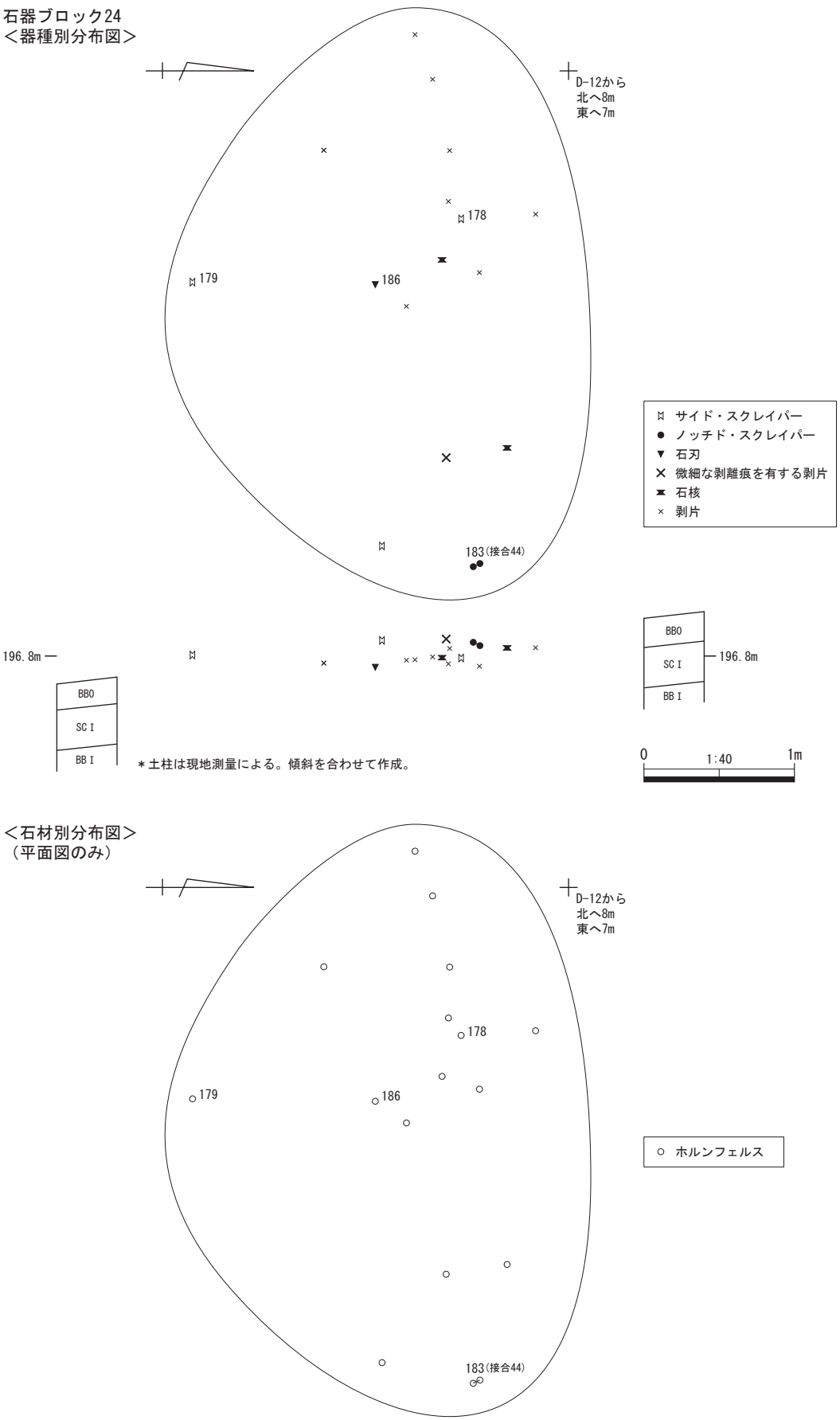
加工具が比較的多く出土している。剥片剥離を行っているような、石核との接合関係は確認できなかった。



第148図　第Ⅷ文化層　南尾根 石器ブロック23 遺構図



第149図　第Ⅷ文化層　南尾根 石器ブロック24、125～133号礫群、炭化物集中36 遺構図



第150図　第Ⅷ文化層　南尾根 石器ブロック24 遺構図

イ　礫群

48号礫群（第151図）

Ｇ－15グリッドから検出された。南北方向0.4m、東西方向0.2mの範囲に、６点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に、赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩２点、玄武岩４点である。この内２点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は５点の礫群となった。接合関係は礫群内であった。

また、礫群と重複して、５点の石器が出土した。石材は、黒曜石（測定不可）１点、ホルンフェルス４点である。全て極小の砕片であった。石器に被熱の痕跡は確認できなかった。

49号礫群（第152図）

Ｇ－11グリッドから検出された。北西～南東方向2.1m、北東～南西方向0.7mの範囲に、12点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北東から南西にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に、赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩２点、多孔質安山岩１点、玄武岩５点、多孔質玄武岩４点である。この内４点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は10点の礫群となった。接合関係は礫群内であった。

また、礫群と重複して、３点の石器が出土した。ホルンフェルス製の石核の接合資料とガラス質黒色安山岩製の剥片である。石器に被熱の痕跡は確認できなかった。

50号礫群（第152図）

Ｇ－11グリッドから検出された。北西～南東方向１m、北東～南西方向0.7mの範囲に、４点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北東から南西にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に、赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩３点、玄武岩１点である。接合関係は確認できなかった。

51号礫群（第152図）

Ｇ－11グリッドから検出された。北西～南東方向１m、北東～南西方向0.3mの範囲に、４点の礫が散漫に分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北東から南西にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に、赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩２点、多孔質安山岩１点、多孔質玄武岩１点である。この内１点の礫に接合関係が確認され、東に約２mの距離を隔てた遺構外の礫との接合関係が確認された。

52号礫群（第153図）

Ｆ－11グリッドから検出された。北西～南東方向1.5m、北東～南西方向1.2mの範囲に、17点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に、赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩４点、玄武岩８点、多孔質玄武岩５点である。この内２点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は16点の礫群となった。接合関係は礫群内であった。

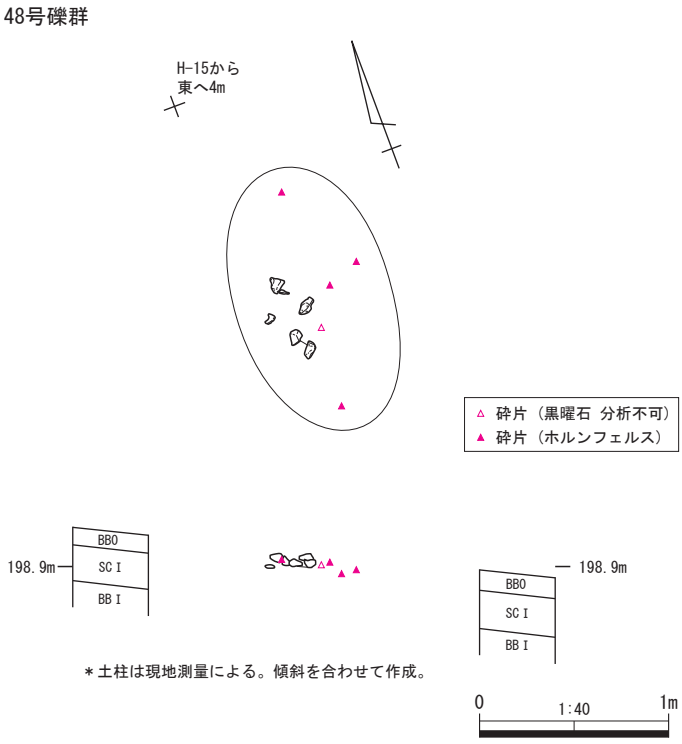
第35表　第Ⅷ文化層 南尾根 礫群一覧表

検出層位は全て休場層直下黒色帯下部である。

礫群番号	グリッド	構成礫数	接合礫数	接合後個体数	石材					重複する遺構番号			重複する遺物		赤化率%	赤化状態			
					輝石安山岩	多孔質安山岩	玄武岩	多孔質玄武岩	その他	石器ブロック	配石	炭化物集中	石器（点数）	炭化物		A	B	C	E
48号	G-15	6	2	5	2		4						5		100	1	4	1	
49号	G-11	12	4	10	2	1	5	4					3		100	4	7	1	
50号	G-11	4	—	4	3		1								100	1	1	2	
51号	G-11	4	1	4	2	1		1							100	3	1		
52号	F-11	17	2	16	4		8	5							100	2	13	2	
53号	F-11	13	—	13	4		4	5							100	3	10		
54号	F-12	6	3	4	6									○	100		3	3	
55号	F-12	7	—	7	6			1		18				○	100	3	4		
56号	F-12	26	17	16	15		6	5		18	28			○	100	9	11	6	
57号	F-12	22	18	12	12	1	6	3		18				○	100		17	5	
58号	F-12	18	9	14	3	2	9	4		18	29			○	100	5	10	3	
59号	F-12	9	7	3				9							100	2		7	
60号	F-12	3	—	3	3										100	2	1		
61号	F-12	40	20	26	15	2	18	5		18				○	100		28	12	
62号	F-12	6	5	4	4		1	1							100		2	4	
63号	F-13	5	4	3	3		2								100		5		
64号	F-12	4	2	3	2	2									100		3	1	
65号	F-10	6	2	5	4		2								100	1	3	2	
66号	F-10	6	5	3	6										100		6		
67号	F-10	19	8	14	7	6	3	3					1	○	100	5	9	5	
68号	F-9	9	7	5	2	2	1	4							100	1	7	1	
69号	F-10	8	—	8	4	1		3							100	2	6		
70号	E～F-10	6	4	5		3		3							100		5	1	
71号	E～F-10	9	1	9	3	1	1	4							100	3	5	1	
72号	E-10	12	6	9	2	5	2	3		19					100	2	10		
73号	E-10	14	8	10	7	3		4							100	3	9	2	
74号	E-10～11	11	4	9	5			6							100	1	10		
75号	F-11	7	—	7	4			3							100	5	2		
76号	E～F-11	37	18	26	10	2	8	17					1		100	5	28	4	
77号	E-10	18	6	15	8	6	1	3					1		100	8	10		
78号	E-10	13	3	12	4	1	6	2			30				100	7	6		
79号	E-10	33	10	29	7	6	7	13					1	○	100	6	22	5	
80号	E-10	76	33	57	24	5	19	28					1	○	100	9	62	5	
81号	E-10～11	108	34	88	48	40	4	15	1				9		100	24	74	10	
82号	D-10～11	5	—	5	2	1	2								100	4	1		
83号	D-11	7	—	7	4		2	1			31				100	5	2		
84号	D-11	10	6	7	10										100	2	8		
85号	E-12	10	2	9	7		3								100	3	6	1	
86号	E-11～12	35	16	28	16	2	15	2		20				○	100	7	24	4	
87号	E-12	39	13	35	25	3	7	4		20				○	100	12	23	4	
88号	E-12	8	5	5	2		2	4		20				○	100	1	6	1	
89号	E-12	7	—	7	6	1								○	100	2	4	1	
90号	E-11	7	—	7	4	3									100		6	1	
91号	E-11～12	16	3	14	10	1	3	2							100	7	5	4	
92号	E-12	5	2	4	5										100	3		2	
93号	E-12	7	2	6	4		1	2							100	2	4	1	
94号	E-12	15	7	12	3		5	7		21				○	100	2	10	3	
95号	E-12	10	—	10	8		2								100	4	6		
96号	E-11	67	20	57	32	2	24	9			32	33	3		100	16	44	7	
97号	E-11	17	10	11	12	2	2	1							100	3	14		

礫群番号	グリッド	構成礫数	接合礫数	接合後個体数	石材					重複する遺構番号			重複する遺物		赤化率%	赤化状態			
					輝石安山岩	多孔質安山岩	玄武岩	多孔質玄武岩	その他	石器ブロック	配石	炭化物集中	石器（点数）	炭化物		A	B	C	E
98号	E-11	25	7	23	16		6	3				33	1		100	13	10	2	
99号	E-11	13	2	12	8		1	4				33			100	5	7	1	
100号	E-11	18	5	15	11		6	1				33			100	5	9	4	
101号	E-11	25	5	23	15	3	4	3		22					100	10	11	4	
102号	E-11	11	4	10	5	1	3	2		22					100	6	3	2	
103号	D～E-11	37	6	36	18	5	10	4		22		34			100	23	10	4	
104号	D-11	9	1	9	9							34			100	7	2		
105号	D-11	9	—	9	9							34	1		100	8	1		
106号	D-11	6	—	6	6							34			100	6			
107号	D-11	4	3	3	2			2							100		3	1	
108号	E-11	12	5	9	12										100	5	7		
109号	E-12	11	7	7	4	1		6							91	2	7	1	1
110号	D-11	25	6	22	21	1	1	2				34	1		100	18	7		
111号	D-11	14	6	10	11		1	2				34			100	4	7	3	
112号	D-11～12	22	2	21	7	4	6	5		23		34・35			100	6	15	1	
113号	D-12	22	7	18	10	3	4	5		23		34・35			100	2	18	2	
114号	D-12	8	5	5	7			1		23					100	2	6		
115号	D-12	35	6	33	19	5	3	8				35	2		100	12	20	3	
116号	D-12	7	1	7	2		3	2				35			100	1	6		
117号	D-12	12	3	10	4	3	2	3				35			100		12		
118号	D-12	18	9	11	5	2	8	3				35			100	1	17		
119号	D-12	10	5	8	5		2	3				35			100	1	9		
120号	D-11～12	8	—	8	2	4	1	1				35			100	2	5	1	
121号	D-11～12	5	—	5	4		1					35			100		5		
122号	D-12	4	—	4		2		2							100	2	2		
123号	D-12	9	2	8	4	1		4					1		100	1	8		
124号	D-12	10	1	10	7	3							2	○	100	3	7		
125号	D-12	16	2	15	16										100	14		2	
126号	D-12	17	2	17	2	1	7	7		24				○	100	6	10	1	
127号	D-12～13	27	11	19	20		6	1		24				○	100	4	19	4	
128号	D-12	14	3	13	13		1			24				○	100	9	4	1	
129号	D-12	11	—	11	9		1	1		24				○	100	9	2		
130号	D-12	13	2	12	11			2		24				○	100	11	2		
131号	D-12	18	1	18	8	5	4	1		24					100	8	10		
132号	D-12	12	7	9	9	2		1							100		12		
133号	D-12	24	—	24	12	1	2	9				36			100	5	18	1	
134号	D-12	5	—	5	3		2								100	2	3		
135号	D-12	6	—	6	3	1		2							100	4	2		
136号	D-12	12	1	12	2	2	3	5				36			100	1	11		
137号	C～D-12	12	—	12	6	1	2	3				36			100	3	9		
138号	C～D-12	13	1	13	5	5	1	2				36			100	4	9		
139号	E-13	4	—	4	1		3								100	3	1		
140号	D-13	7	1	7	3	1	3								100	3	4		
141号	D～E-13	14	10	9	4		6	4							100	2	12		
142号	D～E-13	4	1	4	3		1								100		2	2	
143号	E-13	5	1	5	2		2	1							100		4	1	

赤化状態　Ａ－赤化　完形　　Ｃ－赤化　破損礫　割面は非赤化
Ｂ－赤化　破損礫　割面も赤化　　Ｅ－非赤化　破損礫



第151図　第Ⅷ文化層　南尾根 48号礫群 遺構図

53号礫群（第153図）

Ｆ－11グリッドから検出された。東西方向0.9m、南北方向0.5mの範囲に、13点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかったが、一部の礫には赤化が顕著に確認された。

石材は、輝石安山岩４点、玄武岩４点、多孔質玄武岩５点である。接合関係は確認できなかった。

54号礫群（第154図）

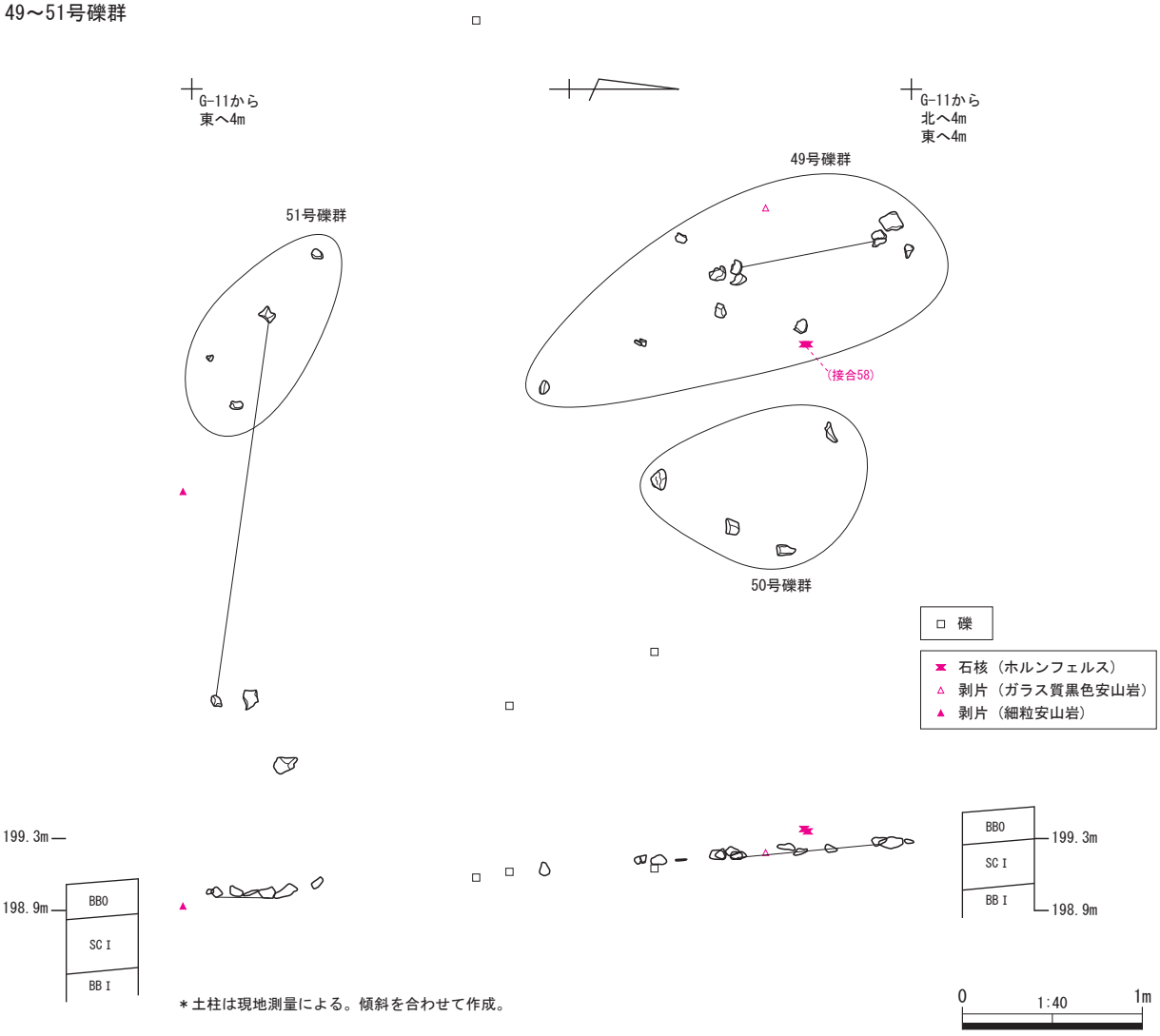
Ｆ－12グリッドから検出された。南北方向１m、東西方向0.5mの範囲に、６点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。炭化物が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、全て輝石安山岩である。この内３点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は４点の礫群となった。接合関係は全て礫群内であった。構成礫の大半は250g以下の小型の礫だが、1,600gを超える礫が１点出土している。

55号礫群（第154図）

Ｆ－12グリッドから検出された。東西方向0.4m、南北方向0.2mの範囲に、７点の礫が密集して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。石器ブロック18が重複して検出されている。炭化物が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。しかし、一部の礫には赤化が顕著に確認された。

石材は、輝石安山岩６点、多孔質玄武岩１点である。接合関係は確認できなかった。構成礫の中に、1,200gの礫が２点出土している。



第152図　第Ⅷ文化層　南尾根 49～51号礫群 遺構図

56号礫群・28号配石（第154図）

F－12グリッドから検出された。東西方向1.2m、南北方向0.6mの範囲に、26点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。石器ブロック18が重複して検出されている。また、炭化物が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。しかし、一部の礫には赤化が顕著に確認された。

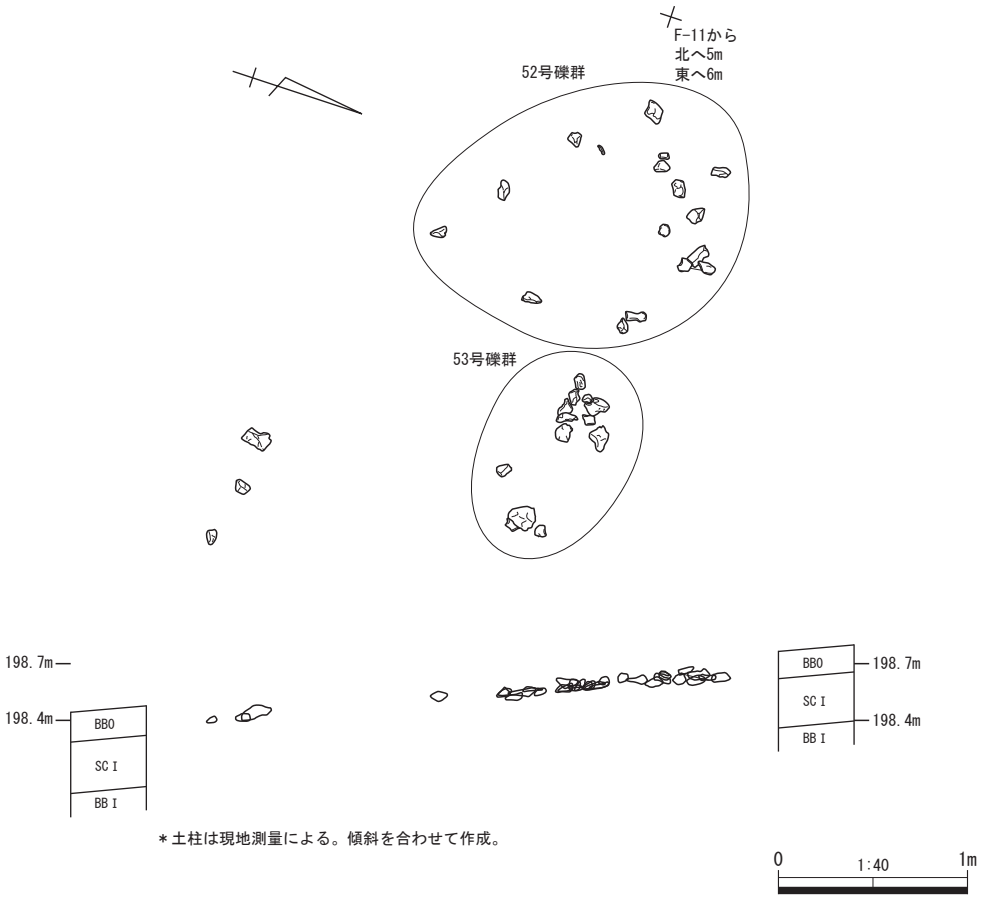
石材は、輝石安山岩15点、玄武岩６点、多孔質玄武岩５点である。この内17点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は16点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、57・58・62号礫群と、それぞれ接合が確認された。

また、礫群の北側に4,600gの大型の礫が検出され、28号配石と設定した。石材は輝石安山岩である。

57号礫群（第154図）

F－12グリッドから検出された。北西～南東方向１m、北東～南西方向0.7mの範囲に、22点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。石器ブロック18が重複して検出されている。また、炭化物が重複して分布している

52・53号礫群



第153図　第Ⅷ文化層　南尾根 52・53号礫群 遺構図

が、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。しかし、一部の礫には赤化が顕著に確認された。

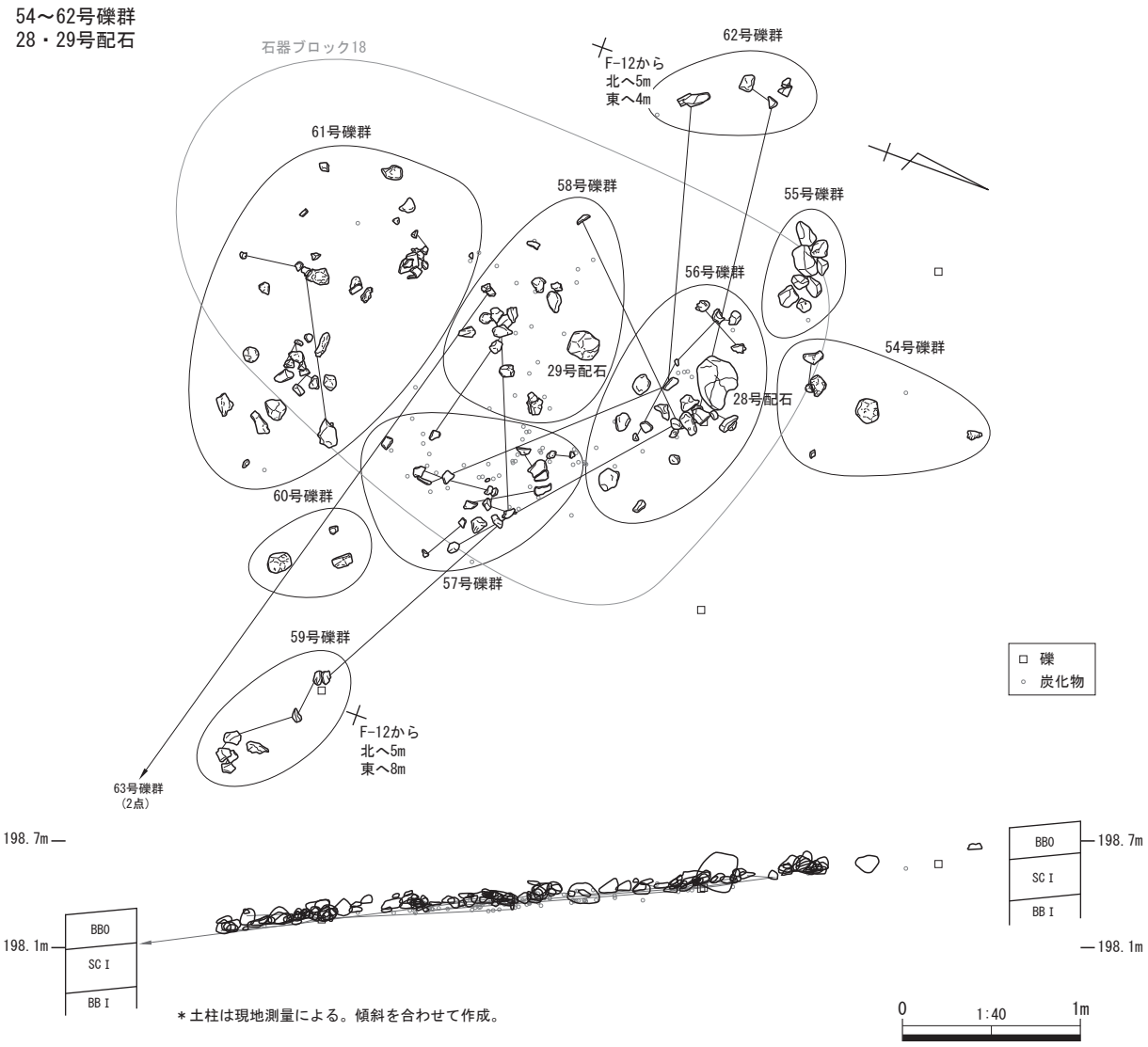
石材は、輝石安山岩12点、多孔質安山岩１点、玄武岩６点、多孔質玄武岩３点である。この内18点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は12点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、56・58・59・62号礫群と、それぞれ接合が確認された。

58号礫群・29号配石（第154図）

Ｆ－12グリッドから検出された。東西方向1.1m、南北方向0.5mの範囲に、18点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。石器ブロック18が重複して検出されている。炭化物が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩３点、多孔質安山岩２点、玄武岩９点、多孔質玄武岩４点である。この内９点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は14点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、隣接する56・57、南東方向へ５ｍの距離を隔てた63号礫群と、それぞれ接合が確認された。構成礫の大半は250g以下の小型の礫だが、1,100gを超える礫が１点出土している。

また、礫群の北側に5,000gの大型の礫が検出され、29号配石と設定した。石材は多孔質玄武岩である。



第154図　第Ⅷ文化層　南尾根 54～62号礫群、28・29号配石 遺構図

59号礫群（第154図）

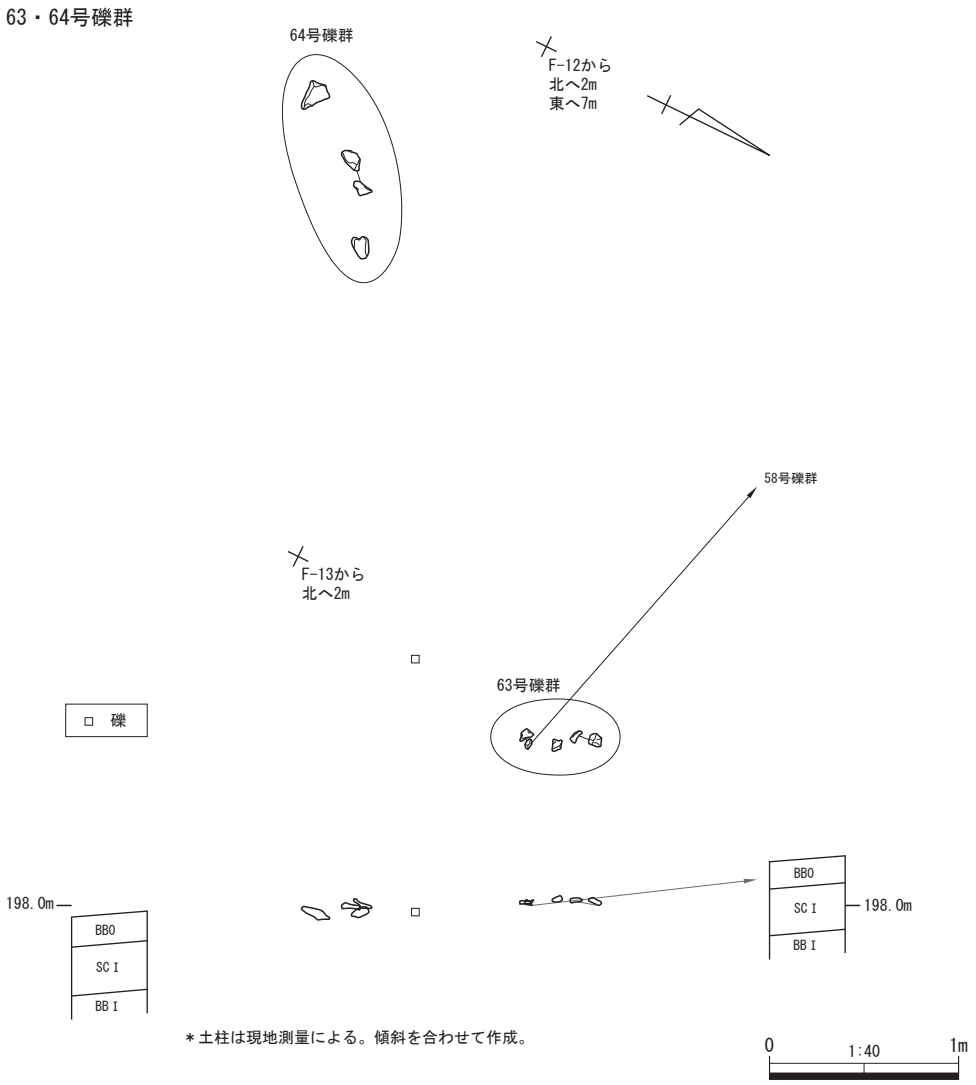
F－12グリッドから検出された。北西～南東方向0.8m、北東～南西方向0.2mの範囲に、９点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかったが、一部の礫には赤化が顕著に確認された。

石材は、全て多孔質玄武岩である。この内７点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は３点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、57号礫群と接合が確認された。

60号礫群（第154図）

F－12グリッドから検出された。北西～南東方向0.4m、北東～南西方向0.2mの範囲に、３点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、全て輝石安山岩である。接合関係は確認できなかった。構成礫の中に、1,200gを超える礫が１点出土している。



第155図　第Ⅷ文化層　南尾根 63・64号礫群 遺構図

61号礫群（第154図）

Ｆ－12グリッドから検出された。東西方向1.8m、南北方向１ｍの範囲に、40点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。石器ブロック18が重複して検出されている。炭化物が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。しかし、一部の礫には赤化が顕著に確認された。

石材は、輝石安山岩15点、多孔質安山岩２点、玄武岩18点、多孔質玄武岩５点である。この内20点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は26点の礫群となった。接合した礫は全て礫群内接合であった。構成礫の大半は300g以下の小型の礫だが、1,100gを超える礫も１点出土している。

62号礫群（第154図）

Ｆ－12グリッドから検出された。北西～南東方向0.6m、北東～南西方向0.2mの範囲に、６点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかったが、一部の礫には赤化が顕著に確認された。

石材は、輝石安山岩４点、玄武岩１点、多孔質玄武岩１点である。この内５点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は４点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、56・57号礫群と接合が確認された。

63号礫群（第155図）

Ｆ－13グリッドから検出された。北西～南東方向0.4m、北東～南西方向0.2mの範囲に、５点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩３点、玄武岩２点である。この内４点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は３点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、北西方向へ５ｍの距離を隔てた58号礫群との接合が確認された。

64号礫群（第155図）

Ｆ－12グリッドから検出された。北東～南西方向0.9m、北西～南東方向0.2mの範囲に、４点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩２点、多孔質安山岩２点である。この内２点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は３点の礫群となった。接合関係は礫群内であった。

65号礫群（第156図）

Ｆ－10グリッドから検出された。北西～南東方向1.3m、北東～南西方向0.5mの範囲に、６点の礫が散漫に分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北東から南西にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩４点、玄武岩２点である。この内２点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は５点の礫群となった。接合関係は礫群内であった。

66号礫群（第156図）

Ｆ－10グリッドから検出された。北西～南東方向0.7m、北東～南西方向0.2mの範囲に、６点の礫が散漫に分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北東から南西にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

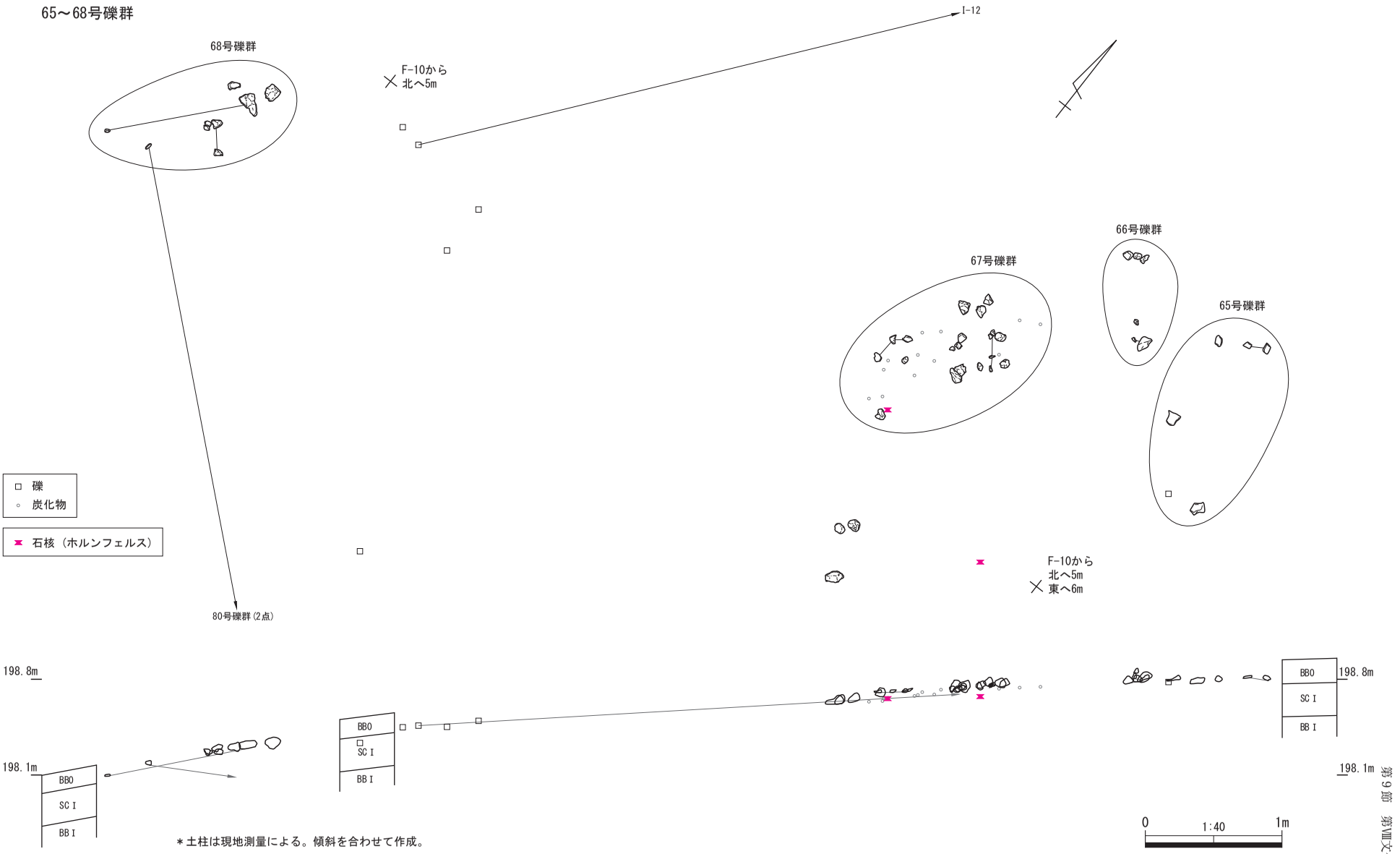
石材は、全て輝石安山岩である。この内５点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は３点の礫群となった。接合関係は全て礫群内であった。

67号礫群（第156図）

Ｆ－10グリッドから検出された。南北方向1.2m、東西方向0.8mの範囲に、19点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北東から南西にかけて、緩やかに下る傾斜地である。炭化物が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩７点、多孔質安山岩６点、玄武岩３点、多孔質玄武岩３点である。この内８点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は14点の礫群となった。接合関係は全て礫群内であった。

礫群と重複して、ホルンフェルス製の石核が１点出土した。石器に被熱は確認できなかった。



＊土柱は現地測量による。傾斜を合わせて作成。

第156図　第Ⅷ文化層　南尾根 65～68号礫群 遺構図

68号礫群（第156図）

Ｆ－９グリッドから検出された。北東～南西方向1.3m、北西～南東方向0.4mの範囲に、９点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北東から南西にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかったが、一部の礫には赤化が顕著に確認された。

石材は、輝石安山岩２点、多孔質安山岩２点、玄武岩１点、多孔質玄武岩４点である。この内７点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は５点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、南東方向へ約10mの距離を隔てた80号礫群と接合が確認された。構成礫の大半は350g以下の小型の礫だが、1,200gの礫が１点出土している。

69号礫群（第157図）

Ｆ－10グリッドから検出された。北東～南西方向1.1m、北西～南東方向0.7mの範囲に、８点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北東から南西にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩４点、多孔質安山岩１点、多孔質玄武岩３点である。接合関係は確認できなかった。構成礫の中に、1,000gを超える礫が２点出土している。

70号礫群（第157図）

Ｅ～Ｆ－10グリッドから検出された。北西～南東方向0.8m、北東～南西方向0.3mの範囲に、６点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北東から南西にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、多孔質安山岩３点、多孔質玄武岩３点である。この内４点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は５点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、71号礫群と接合が確認された。

71号礫群（第157図）

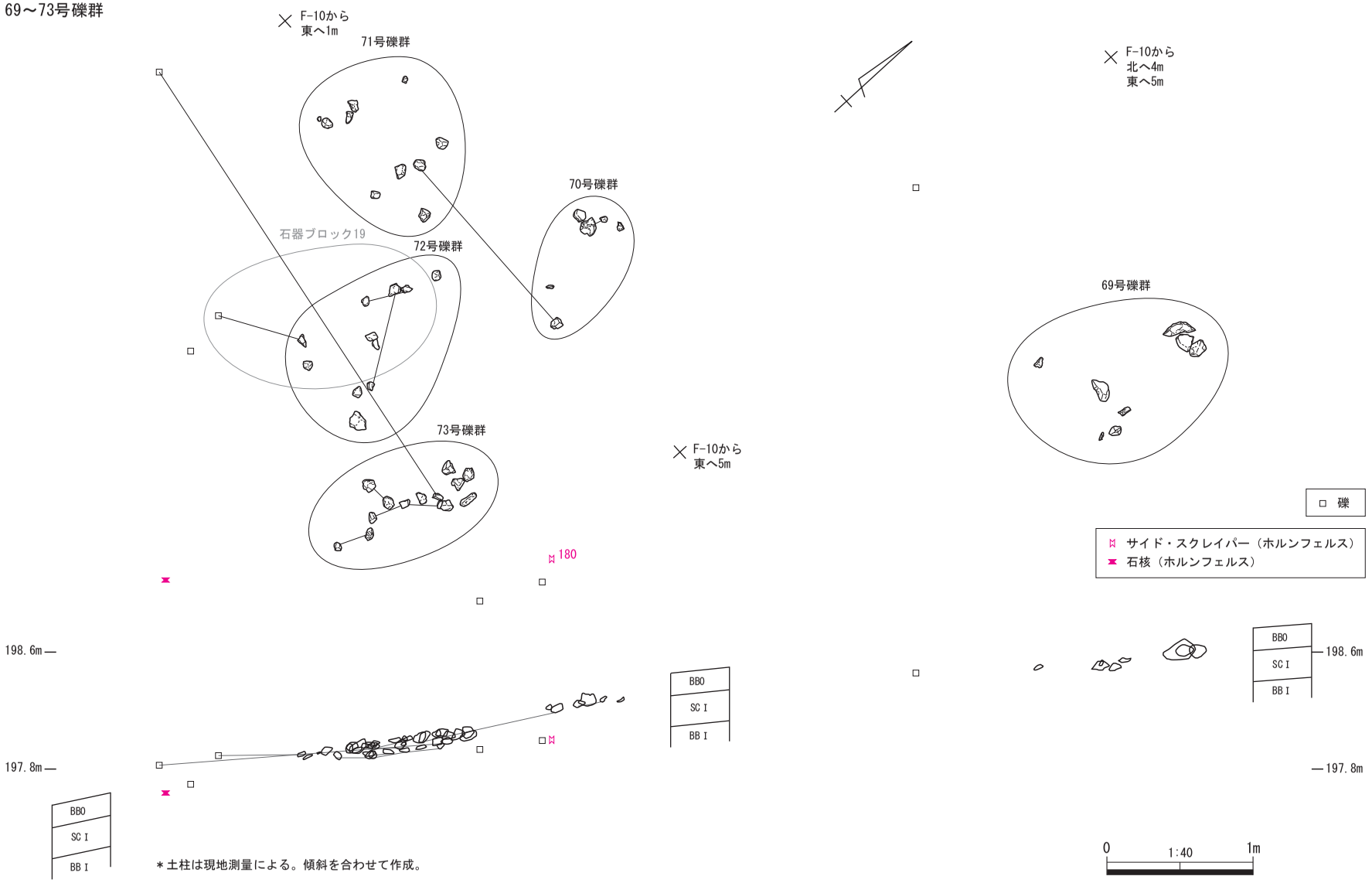
Ｅ～Ｆ－10グリッドから検出された。東西方向１m、南北方向0.8mの範囲に、９点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北東から南西にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩３点、多孔質安山岩１点、玄武岩１点、多孔質玄武岩４点である。この内１点の礫に、70号礫群との接合関係が確認された。

72号礫群（第157図）

Ｅ－10グリッドから検出された。北西～南東方向1.1m、北東～南西方向0.6mの範囲に、12点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北東から南西にかけて、緩やかに下る傾斜地である。石器ブロック19が重複して検出されている。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかったが、一部の礫には赤化が顕著に確認された。

石材は、輝石安山岩２点、多孔質安山岩５点、玄武岩２点、多孔質玄武岩３点である。この内６点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は９点の礫群となった。礫群内の接合に加え、南西方向へ0.6mの距離を隔てた遺構外の礫（休場層下位出土）との接合が確認された。



＊土柱は現地測量による。傾斜を合わせて作成。

第157図　第Ⅷ文化層　南尾根 69～73号礫群 遺構図

73号礫群（第157図）

Ｅ－10グリッドから検出された。北東～南西方向１ｍ、北西～南東方向0.4ｍの範囲に、14点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北東から南西にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかったが、一部の礫には赤化が顕著に確認された。

石材は、輝石安山岩７点、多孔質安山岩３点、多孔質玄武岩４点である。この内８点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は10点の礫群となった。礫群内の接合に加え、北西方向へ3.5ｍの距離を隔てた遺構外の礫（休場層中位出土）との接合が確認された。

74号礫群（第158図）

Ｅ－10～11グリッドから検出された。南北方向1.3m、東西方向0.6ｍの範囲に、11点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北東から南西にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩５点、多孔質玄武岩６点である。この内４点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は９点の礫群となった。接合関係は全て礫群内であった。

75号礫群（第158図）

Ｆ－11グリッドから検出された。東西方向0.6m、南北方向0.5ｍの範囲に、７点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩４点、多孔質玄武岩３点である。接合関係は確認できなかった。

76号礫群（第158図）

Ｅ～Ｆ－11グリッドから検出された。北西～南東方向1.9m、北東～南西方向1.1ｍの範囲に、37点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかったが、一部の礫には赤化が顕著に確認された。

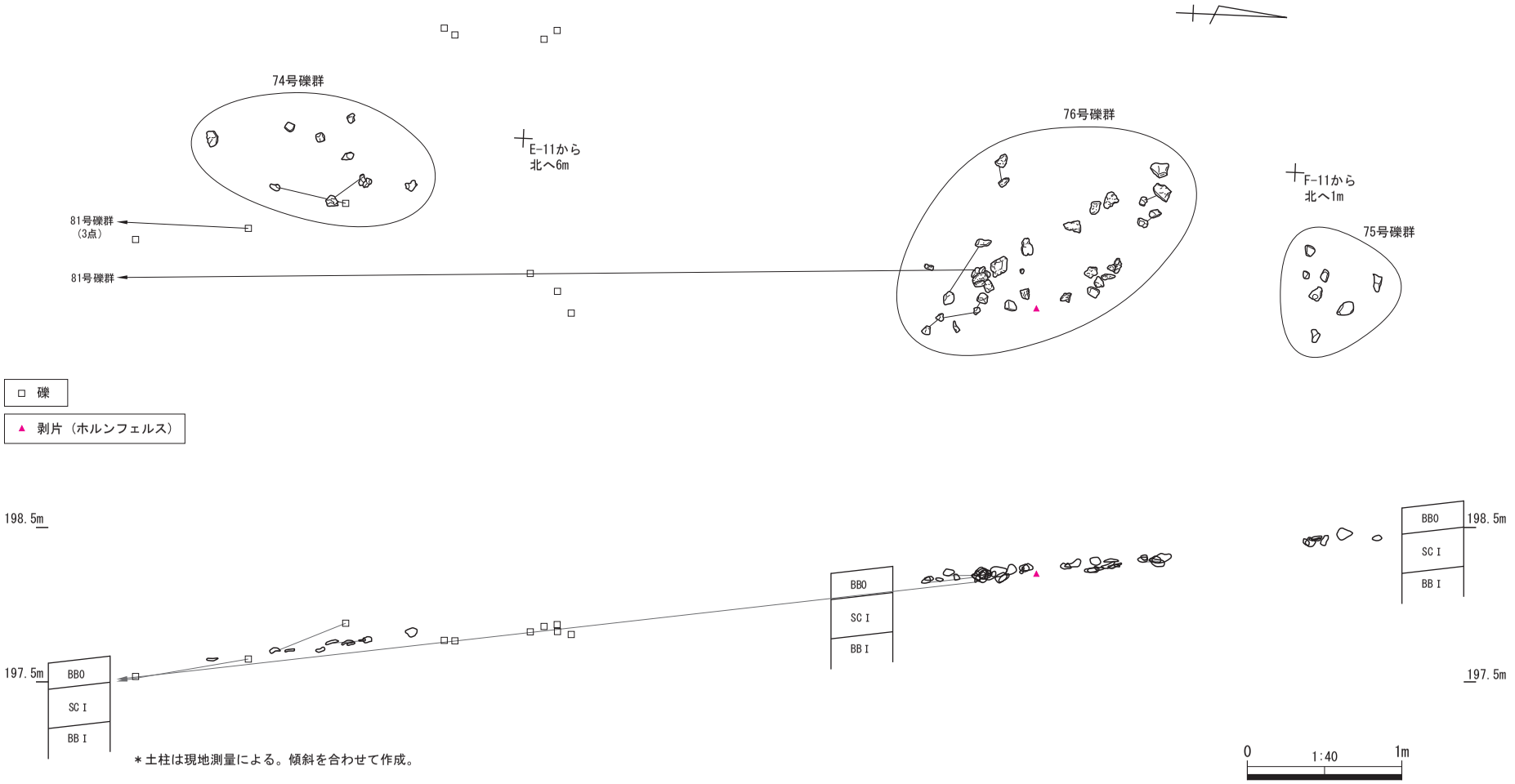
石材は、輝石安山岩10点、多孔質安山岩２点、玄武岩８点、多孔質玄武岩17点である。この内18点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は26点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、南方向へ約８ｍの距離を隔てた81号礫群との接合が確認された。構成礫の大半は350g以下の小型の礫だが、1,000gを超える礫が１点出土している。

礫群と重複して、ホルンフェルス製の剥片が１点出土した。石器に被熱は確認できなかった。

77号礫群（第159図）

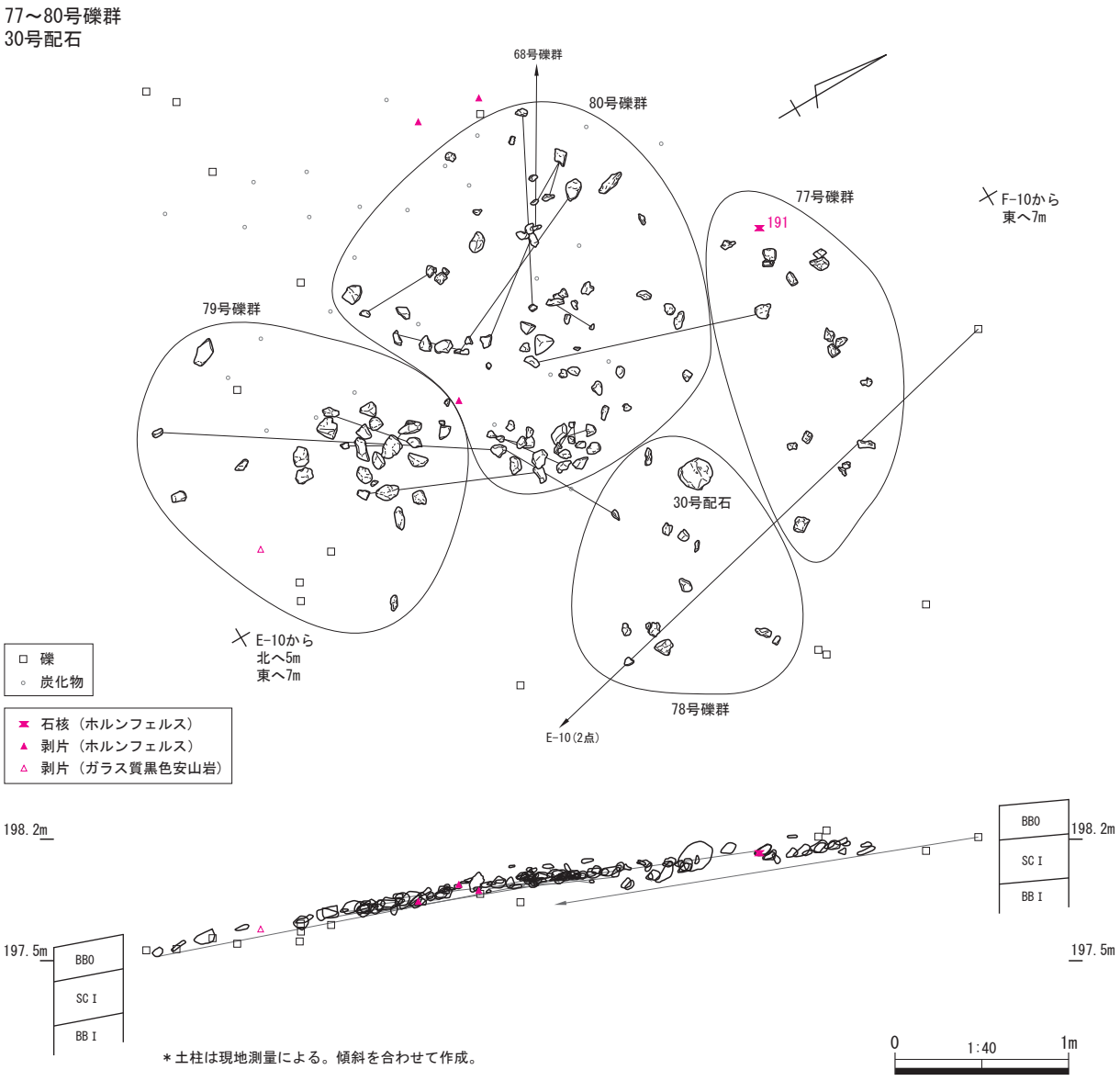
Ｅ－10グリッドから検出された。北西～南東方向1.6m、北東～南西方向0.8ｍの範囲に、18点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北東から南西にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかったが、一部の礫には赤化が顕著に確認された。

石材は、輝石安山岩８点、多孔質安山岩６点、玄武岩１点、多孔質玄武岩３点である。この内６点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は15点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、隣接する80号礫群との接合が確認された。



＊土柱は現地測量による。傾斜を合わせて作成。

第158図　第Ⅷ文化層　南尾根 74～76号礫群 遺構図



第159図　第Ⅷ文化層　南尾根 77～80号礫群、30号配石 遺構図

礫群と重複して、ホルンフェルス製の石核が１点出土した（191）。石器に被熱は確認できなかった。

78号礫群・30号配石（第159図）

Ｅ－10グリッドから検出された。東西方向1.3m、南北方向0.8mの範囲に、13点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北東から南西にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかったが、一部の礫には赤化が顕著に確認された。

石材は、輝石安山岩４点、多孔質安山岩１点、玄武岩６点、多孔質玄武岩２点である。この内３点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は12点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、隣接する80・79号礫群との接合が確認された。

また、礫群の北側に6,000gを超える大型の礫が検出され、30号配石と設定した。石材は多孔質安山岩である。

79号礫群（第159図）

Ｅ－10グリッドから検出された。北東～南西方向1.6m、北西～南東方向0.9mの範囲に、33点の礫が集中して分布している。礫群の北側は、特に密集度が高い。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北東から南西にかけて、緩やかに下る傾斜地である。炭化物が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。しかし、一部の礫には赤化が顕著に確認された。

石材は、輝石安山岩７点、多孔質安山岩６点、玄武岩７点、多孔質玄武岩13点である。この内10点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は29点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、隣接する80・78号礫群との接合が確認された。

礫群と重複して、ガラス質黒色安山岩製の剥片が１点出土した。石器に被熱は確認できなかった。

80号礫群（第159図）

Ｅ－10グリッドから検出された。北東～南西方向２m、北西～南東方向２mの範囲に、76点の礫が集中して分布している。礫群の南東側は、特に密集度が高い。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北東から南西にかけて、緩やかに下る傾斜地である。炭化物が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。しかし、一部の礫には赤化が顕著に確認された。

石材は、輝石安山岩24点、多孔質安山岩５点、玄武岩19点、多孔質玄武岩28点である。この内33点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は57点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、隣接する77・78・79号礫群、北西方向へ約10mの距離を隔てた68号礫群との接合が確認された。構成礫の大半は300g以下の小型の礫だが、1,000gを超える礫が１点出土している。

礫群と重複して、ホルンフェルス製の剥片が１点出土した。石器に被熱は確認できなかった。

81号礫群（第160図）

Ｅ－10～11グリッドから検出された。北西～南東方向4.1m、北東～南西方向3.4mの範囲に、108点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北東から南西にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかったが、一部の礫には赤化が顕著に確認された。

石材は、輝石安山岩48点、多孔質安山岩40点、玄武岩４点、多孔質玄武岩15点、火山礫凝灰岩１点である。この内34点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は88点の礫群となった。礫群内および付近の礫との接合に加え、礫群間の接合では、北方向へ８mの距離を隔てた76号礫群、北東方向へ8.5mの距離を隔てた96号礫群との接合が確認された。

礫群と重複して、石器が９点出土した。内訳は、エンド・スクレイパー１点、ドリル１点、石核が２点、剥片類が５点である。石材はすべてホルンフェルスである。石器に被熱は確認できなかった。

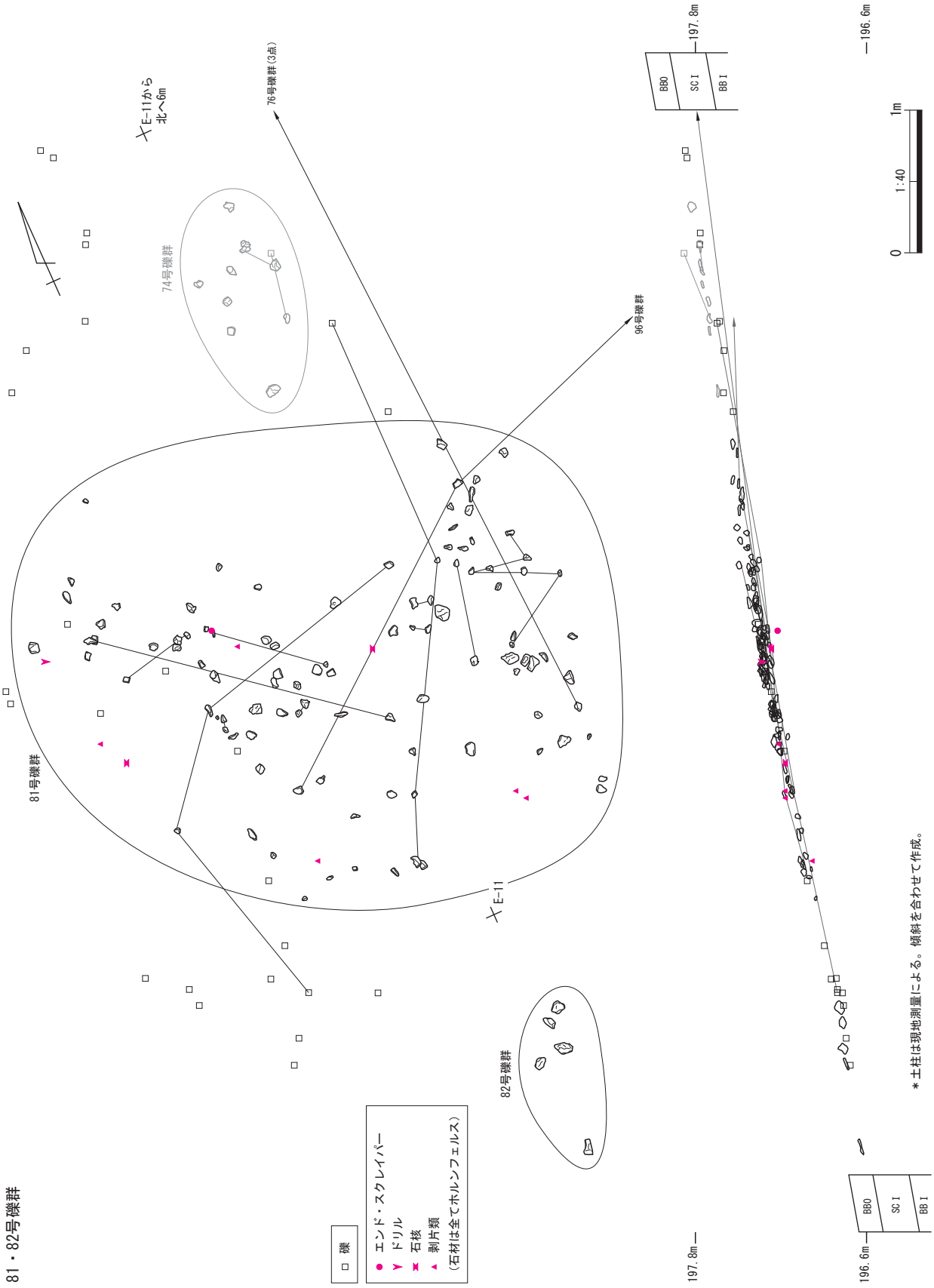
82号礫群（第160図）

Ｄ－10～11グリッドから検出された。南北方向１m、東西方向0.3mの範囲に、５点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北東から南西にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかったが、一部の礫には赤化が顕著に確認された。

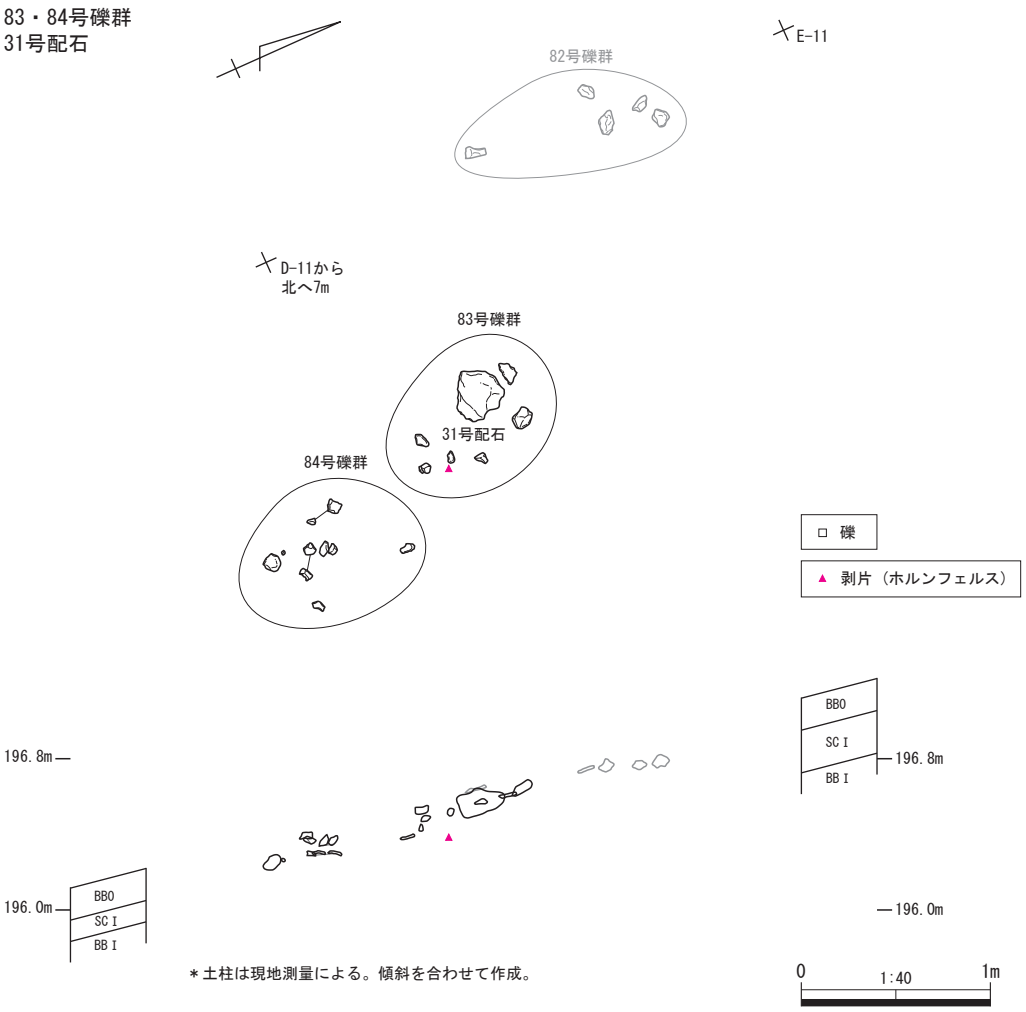
石材は、輝石安山岩２点、多孔質安山岩１点、玄武岩２点である。接合関係は確認できなかった。

83号礫群・31号配石（第161図）

Ｄ－11グリッドから検出された。南北方向0.6m、東西方向0.4mの範囲に、７点の礫が分布している。



第160図　第Ⅷ文化層　南尾根 81・82号礫群 遺構図



第161図　第Ⅷ文化層　南尾根 83・84号礫群、31号配石 遺構図

出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北東から南西にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩４点、玄武岩２点、多孔質玄武岩１点である。接合関係は確認できなかった。

また、礫群の中央に10,000gを超える礫が検出され、31号配石と設定した。石材は玄武岩である。

84号礫群（第161図）

Ｄ－11グリッドから検出された。南北方向0.7m、東西方向0.4mの範囲に、10点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北東から南西にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、全て輝石安山岩である。この内６点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は７点の礫群となった。接合関係は全て礫群内であった。

85号礫群（第162図）

Ｅ－12グリッドから検出された。北東～南西方向１m、北西～南東方向0.6mの範囲に、10点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩７点、玄武岩３点である。この内２点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は９点の礫群となった。接合関係は礫群内であった。

86号礫群（第162図）

Ｅ－11～12グリッドから検出された。南北方向1.7m、東西方向1.2mの範囲に、35点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。石器ブロック20が重複して検出されている。また、炭化物が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩16点、多孔質安山岩２点、玄武岩15点、多孔質玄武岩２点である。この内16点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は28点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、隣接する87号礫群との接合が確認された。構成礫の大半は300g以下の小型の礫だが、2,200gを超える礫が１点出土している。

87号礫群（第162図）

Ｅ－12グリッドから検出された。南北方向1.6m、東西方向1.6mの範囲に、39点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。石器ブロック20が重複して検出されている。また、炭化物が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩25点、多孔質安山岩３点、玄武岩７点、多孔質玄武岩４点である。この内13点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は35点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、隣接する86号礫群との接合が確認された。

88号礫群（第162図）

Ｅ－12グリッドから検出された。東西方向1.6m、南北方向0.6mの範囲に、８点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。石器ブロック20が重複して検出されている。また、炭化物が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩２点、玄武岩２点、多孔質玄武岩４点である。この内５点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は５点の礫群となった。接合関係は全て礫群内であった。

89号礫群（第162図）

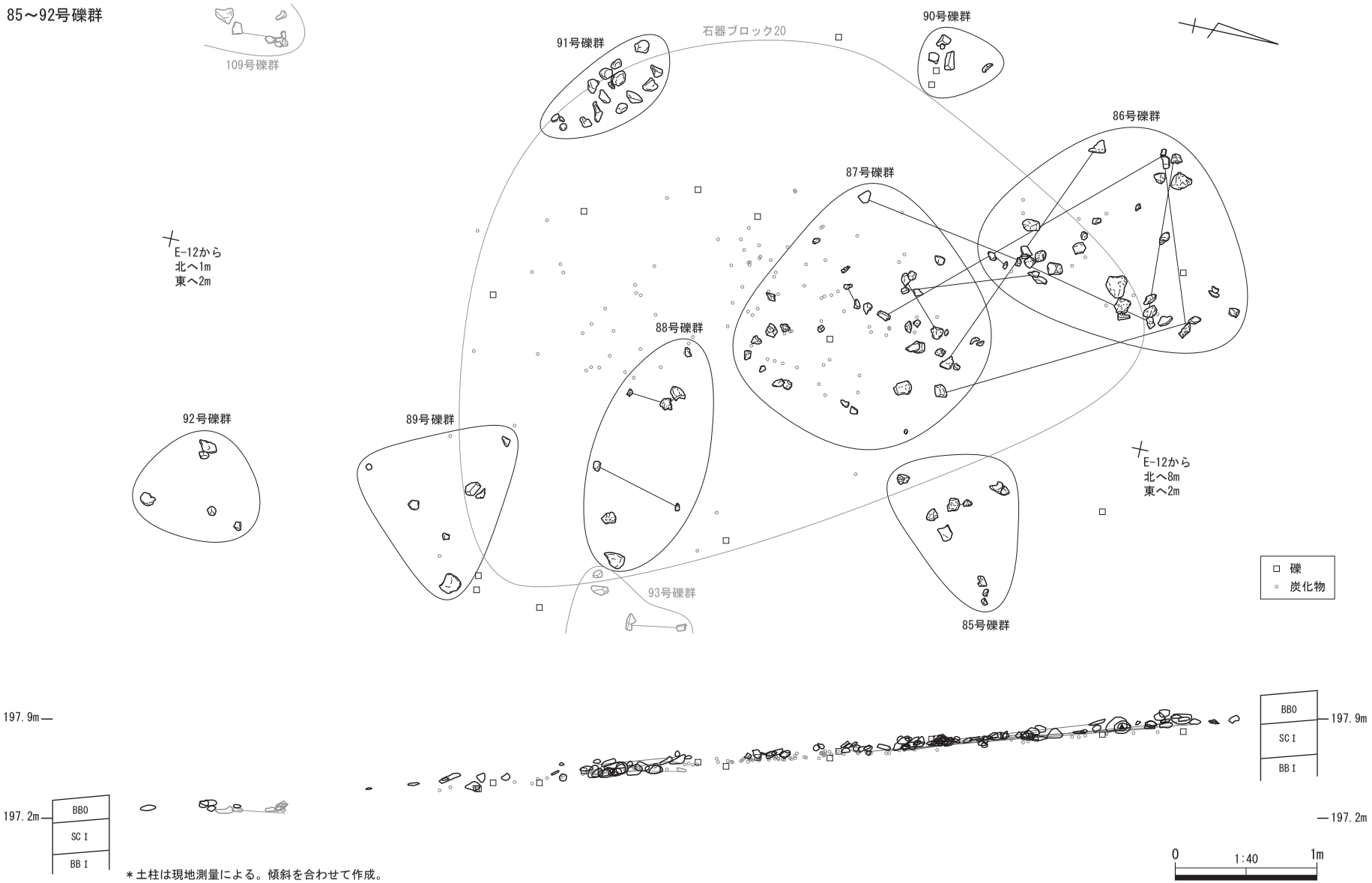
Ｅ－12グリッドから検出された。東西方向１m、南北方向0.9mの範囲に、７点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。一部に炭化物が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩６点、多孔質安山岩１点である。接合関係は確認できなかった。

90号礫群（第162図）

Ｅ－11グリッドから検出された。南北方向0.4m、東西方向0.3mの範囲に、７点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩４点、多孔質安山岩３点である。接合関係は確認できなかった。



＊土柱は現地測量による。傾斜を合わせて作成。

第162図　第Ⅷ文化層　南尾根 85～92号礫群 遺構図

91号礫群（第162図）

Ｅ－11～12グリッドから検出された。北西～南東方向0.8m、北東～南西方向0.3mの範囲に、16点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩10点、多孔質安山岩１点、玄武岩３点、多孔質玄武岩２点である。この内３点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は14点の礫群となった。接合関係は礫群内であった。

92号礫群（第162図）

Ｅ－12グリッドから検出された。南北方向0.6m、東西方向0.5mの範囲に、５点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、全て輝石安山岩である。この内２点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は４点の礫群となった。接合関係は礫群内であった。

93号礫群（第163図）

Ｅ－12グリッドから検出された。東西方向0.9m、南北方向0.7mの範囲に、７点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩４点、玄武岩１点、多孔質玄武岩２点である。この内２点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は６点の礫群となった。接合関係は礫群内であった。

94号礫群（第163図）

Ｅ－12グリッドから検出された。南北方向1.7m、東西方向1.3mの範囲に、15点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。石器ブロック21が重複して検出されている。また、炭化物が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩３点、玄武岩５点、多孔質玄武岩７点である。この内７点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は12点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、南東方向へ6.4mの距離を隔てた126号礫群との接合が確認された。

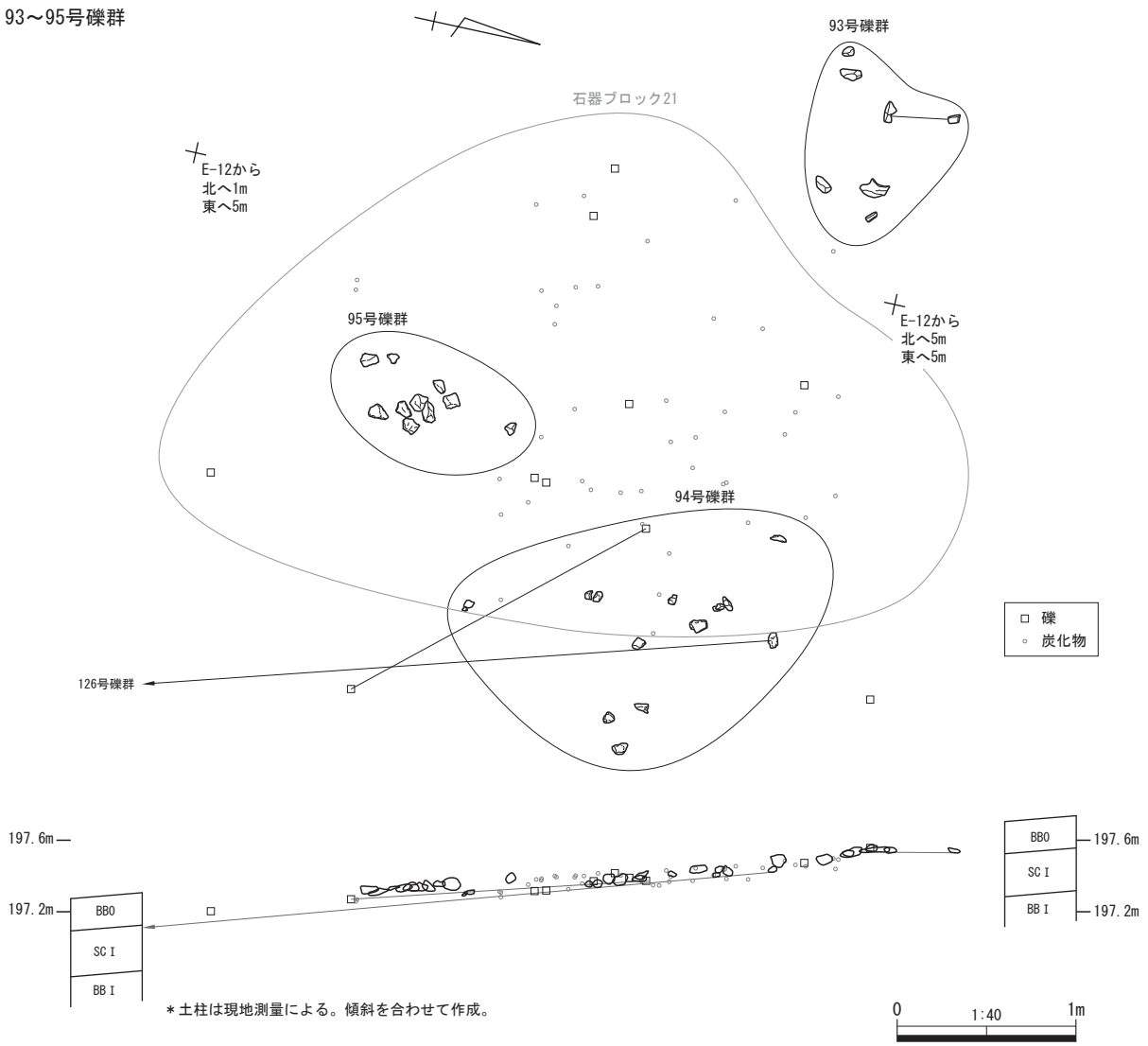
95号礫群（第163図）

Ｅ－12グリッドから検出された。南北方向0.9m、東西方向0.4mの範囲に、10点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩８点、玄武岩２点である。接合関係は確認できなかった。

96号礫群・32号配石（第164図）

Ｅ－11グリッドから検出された。北西～南東方向2.6m、北東～南西方向1.9mの範囲に、67点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。一部、炭化物集中33が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。



第163図　第Ⅷ文化層　南尾根 93～95号礫群 遺構図

石材は、輝石安山岩32点、多孔質安山岩２点、玄武岩24点、多孔質玄武岩９点である。この内20点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は57点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、南西方向へ8.5mの距離を隔てた81号礫群との接合が確認された。

礫群と重複して、ホルンフェルス製のサイド・スクレイパー（181）１点と剥片が２点出土した。これらの石器に被熱は確認できなかった。

また、礫群の西側に4,100gを超える礫が検出され、32号配石と設定した。石材は、輝石安山岩である。この配石は96号礫群と重複しているが、検出位置は礫群の検出面の上面である。

97号礫群（第164図）

Ｅ－11グリッドから検出された。北西～南東方向1.4m、北東～南西方向0.8mの範囲に、17点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩12点、多孔質安山岩２点、玄武岩２点、多孔質玄武岩１点である。この内10点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は11点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群

間の接合では、近隣の103号礫群との接合が確認された。

98号礫群（第164図）

Ｅ－11グリッドから検出された。北東～南西方向1.5m、北西～南東方向1.3mの範囲に、25点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。一部、炭化物集中33が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩16点、玄武岩６点、多孔質玄武岩３点である。この内７点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は23点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、隣接する101・102・103号礫群との接合が確認された。

礫群と重複して、ホルンフェルス製の剥片が１点出土した。石器に被熱は確認できなかった。

99号礫群（第164図）

Ｅ－11グリッドから検出された。北東～南西方向0.7m、北西～南東方向0.5mの範囲に、13点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。炭化物集中33が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩８点、玄武岩１点、多孔質玄武岩４点である。この内２点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は12点の礫群となった。接合関係は礫群内であった。

100号礫群（第164図）

Ｅ－11グリッドから検出された。南北方向1.8m、東西方向1.2mの範囲に、18点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。一部、炭化物集中33が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩11点、玄武岩６点、多孔質玄武岩１点である。この内５点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は15点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、隣接する103号礫群との接合が確認された。

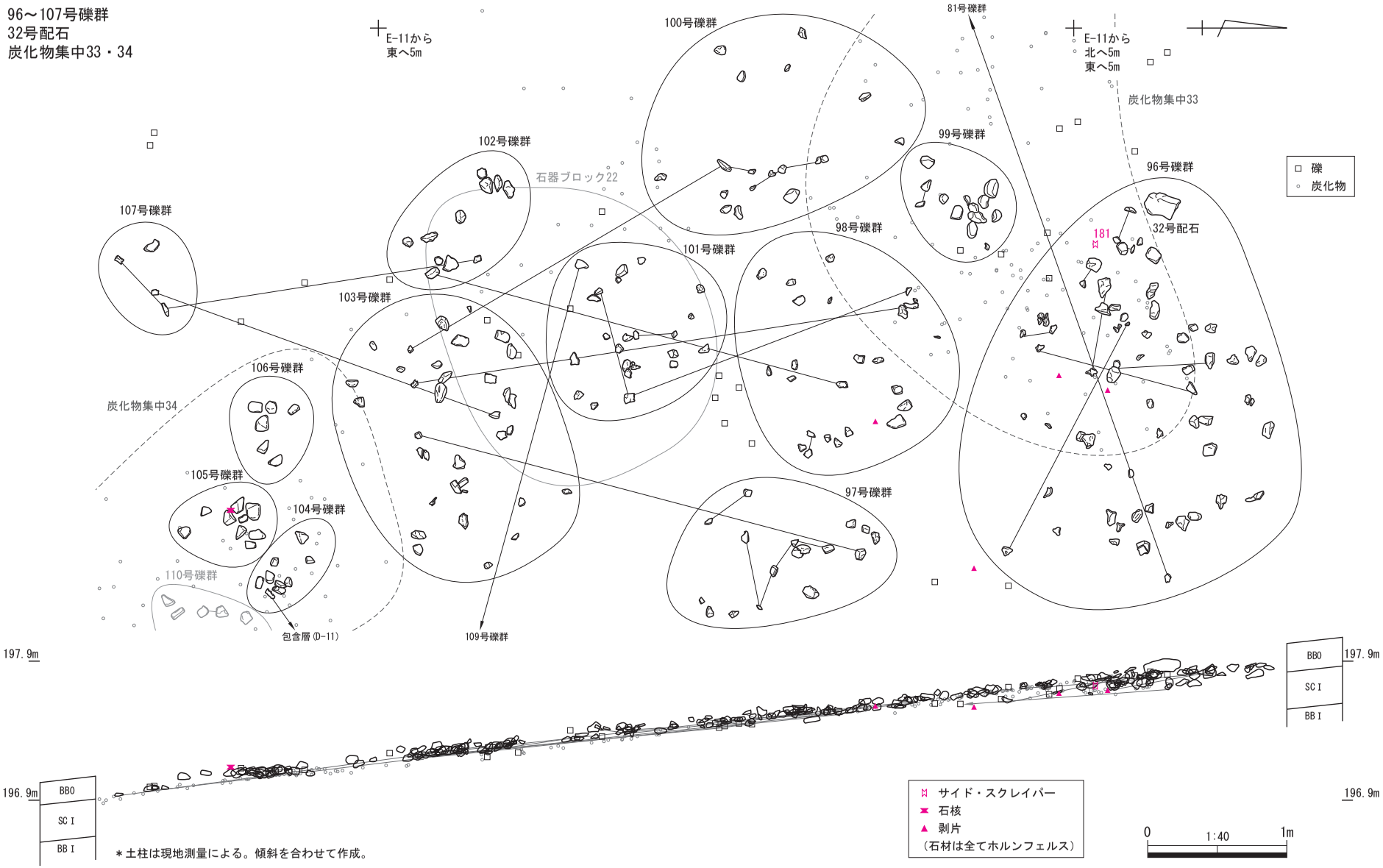
101号礫群（第164図）

Ｅ－11グリッドから検出された。北西～南東方向1.2m、北東～南西方向１ｍの範囲に、25点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。石器ブロック22が重複して分布している。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩15点、多孔質安山岩３点、玄武岩４点、多孔質玄武岩３点である。この内５点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は23点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、隣接する98号礫群、南東方向へ約４ｍの距離を隔てた109号礫群との接合が確認された。

102号礫群（第164図）

Ｅ－11グリッドから検出された。北西～南東方向0.8m、北東～南西方向0.5mの範囲に、11点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。石器ブロック22が重複して検出されている。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。



＊土柱は現地測量による。傾斜を合わせて作成。

第164図　第Ⅷ文化層　南尾根 96～107号礫群、32号配石、炭化物集中33・34 遺構図

石材は、輝石安山岩５点、多孔質安山岩１点、玄武岩３点、多孔質玄武岩２点である。この内４点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は10点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、近隣の98・107号礫群との接合が確認された。

103号礫群（第164図）

D～E－11グリッドから検出された。北東～南西方向1.8m、北西～南東方向1.2mの範囲に、37点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。一部、石器ブロック22が重複して検出されている。また、炭化物集中34が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩18点、多孔質安山岩５点、玄武岩10点、多孔質玄武岩４点である。この内６点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は36点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、近隣の97・98・100・107号礫群との接合が確認された。

104号礫群（第164図）

D－11グリッドから検出された。北西～南東方向0.5m、北東～南西方向0.2mの範囲に、９点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。炭化物集中34が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、全て輝石安山岩である。この内１点の礫に接合関係が確認され、北東方向に約１ｍの距離を隔てた遺構外の礫と接合した。

105号礫群（第164図）

D－11グリッドから検出された。南北方向0.5m、東西方向0.3mの範囲に、９点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。炭化物集中34が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、全て輝石安山岩である。接合関係は確認できなかった。

礫群と重複して、ホルンフェルス製の石核が１点出土した。石器に被熱は確認できなかった。

106号礫群（第164図）

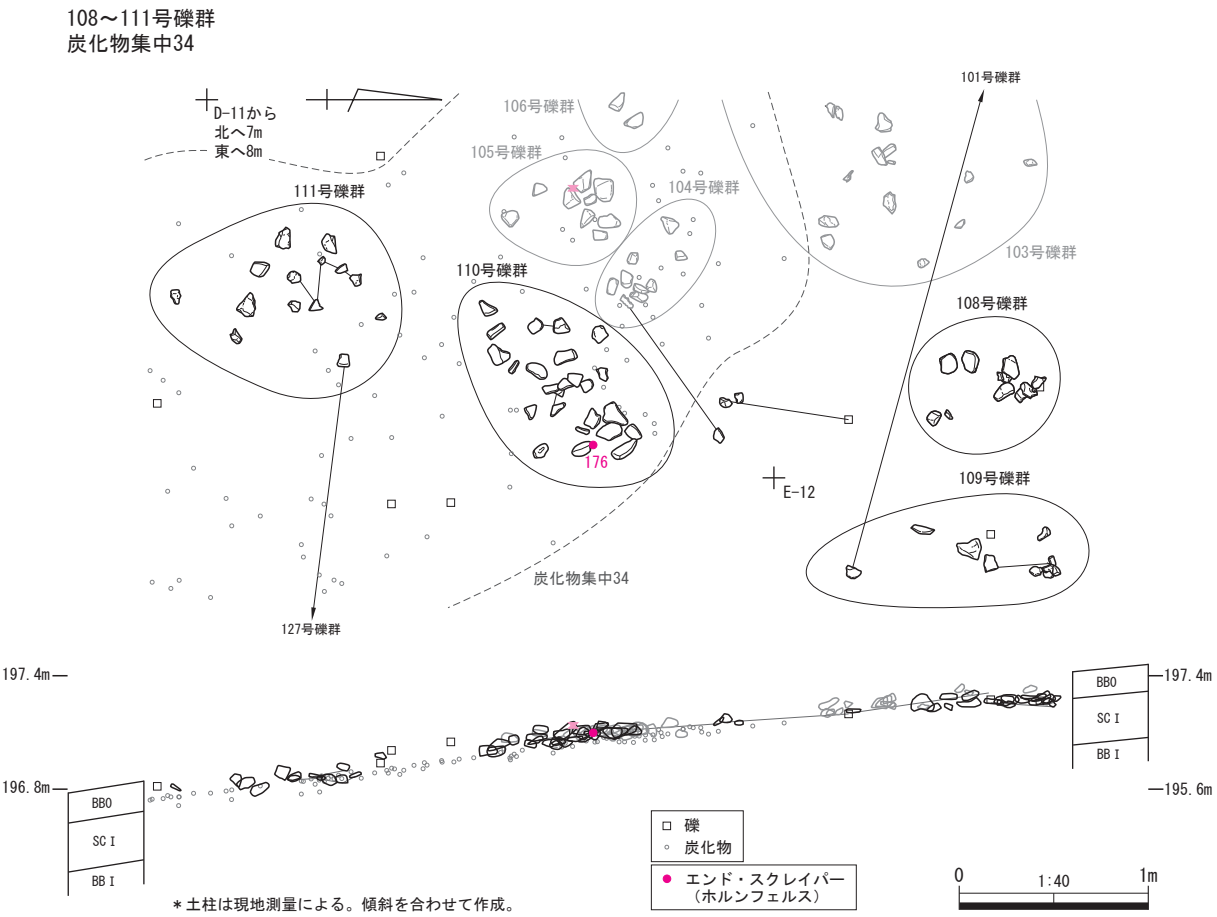
D－11グリッドから検出された。東西方向0.4m、南北方向0.3mの範囲に、６点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。炭化物集中34が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、全て輝石安山岩である。接合関係は確認できなかった。構成礫の大半は300g以下の小型の礫だが、1,100gを超える礫が１点出土している。

107号礫群（第164図）

D－11グリッドから検出された。北東～南西方向0.5m、北西～南東方向0.3mの範囲に、４点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩２点、多孔質玄武岩２点である。この内３点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は３点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、近隣の102・103号



第165図　第Ⅷ文化層　南尾根 108～111号礫群、炭化物集中34 遺構図

礫群との接合が確認された。

108号礫群（第165図）

Ｅ－11グリッドから検出された。北西～南東方向0.6m、北東～南西方向0.3mの範囲に、12点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、全て輝石安山岩である。この内５点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は９点の礫群となった。接合関係は全て礫群内であった。

109号礫群（第165図）

Ｅ－12グリッドから検出された。南北方向1.1m、東西方向0.2mの範囲に、11点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩４点、多孔質安山岩１点、多孔質玄武岩６点である。この内７点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は７点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、北西方向へ約４ｍの距離を隔てた101号礫群との接合が確認された。

110号礫群（第165図）

Ｄ－11グリッドから検出された。北東～南西方向1.1m、北西～南東方向0.7mの範囲に、25点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。炭化物集中34が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩21点、多孔質安山岩１点、玄武岩１点、多孔質玄武岩２点である。この内６点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は22点の礫群となった。接合関係は全て礫群内であった。

礫群と重複して、ホルンフェルス製のエンド・スクレイパー（176）が出土した。石器に被熱は確認できなかった。

111号礫群（第165図）

Ｄ－11グリッドから検出された。南北方向1.1m、東西方向0.5mの範囲に、14点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。炭化物集中34が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩11点、玄武岩１点、多孔質玄武岩２点である。この内６点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は10点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、東方向へ約10mの距離を隔てた127号礫群との接合が確認された。

112号礫群（第166図）

Ｄ－11～12グリッドから検出された。南北方向1.4m、東西方向1.2mの範囲に、22点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。石器ブロック23が重複して検出されている。また、北側と南側の一部に、炭化物集中34・35がそれぞれ重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩７点、多孔質安山岩４点、玄武岩６点、多孔質玄武岩５点である。この内２点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は21点の礫群となった。接合関係は礫群内であった。

113号礫群（第166図）

Ｄ－12グリッドから検出された。北西～南東方向1.7m、北東～南西方向１mの範囲に、22点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。石器ブロック23が重複して検出されている。また、北側と南側の一部に、炭化物集中34・35がそれぞれ重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

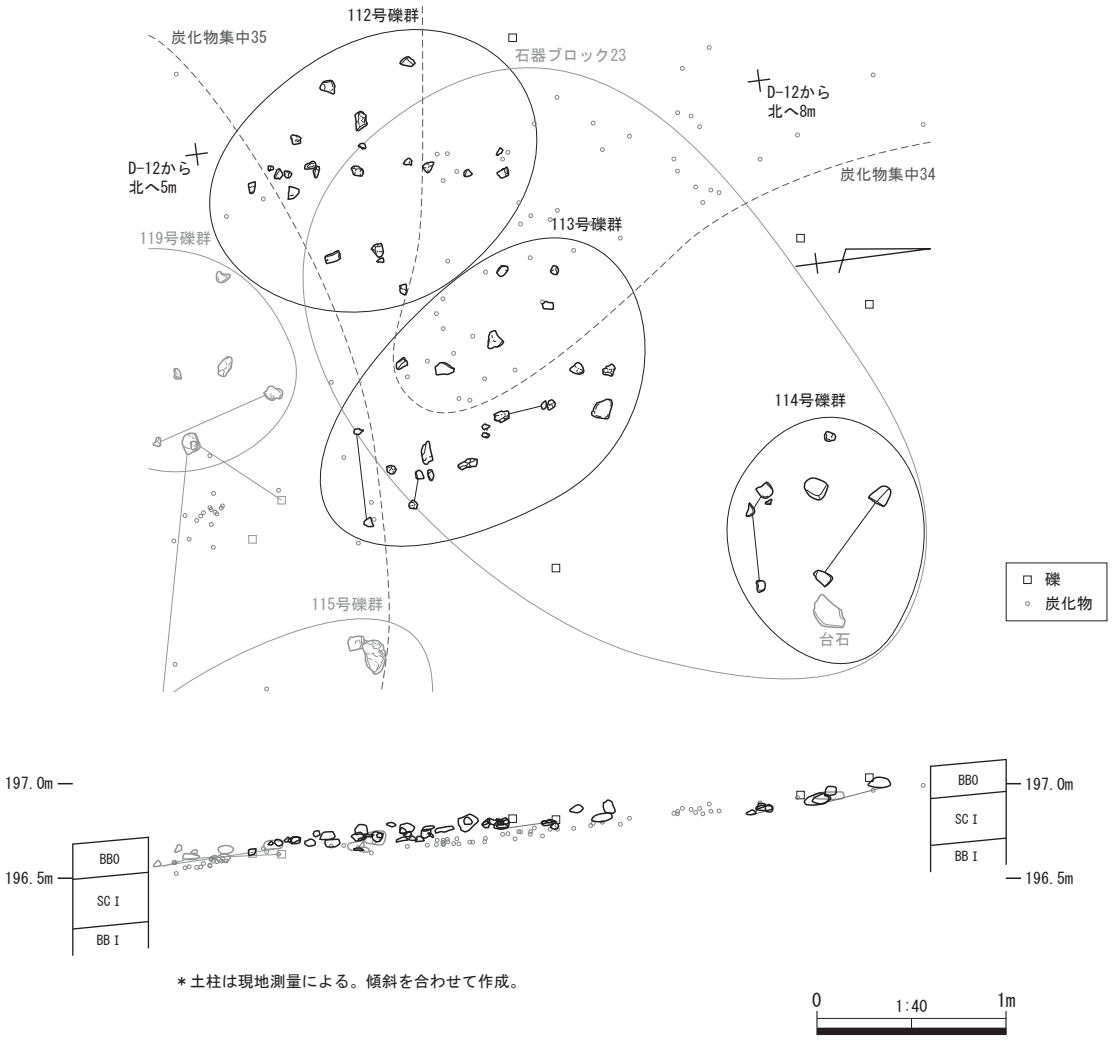
石材は、輝石安山岩10点、多孔質安山岩３点、玄武岩４点、多孔質玄武岩５点である。この内７点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は18点の礫群となった。接合関係は礫群内であった。

114号礫群（第166図）

Ｄ－12グリッドから検出された。北西～南東方向0.8m、北東～南西方向0.6mの範囲に、８点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。石器ブロック23が重複して検出されている。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩７点、多孔質玄武岩１点である。この内５点の礫に接合関係が確認され、その結

112～114号礫群
炭化物集中34・35



第166図　第Ⅷ文化層　南尾根 112～114号礫群、炭化物集中34・35 遺構図

果、接合後個体数は５点の礫群となった。接合関係は礫群内であった。

115号礫群（第167図）

Ｄ－12グリッドから検出された。北西～南東方向2.4m、北東～南西方向1.7mの範囲に、35点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。炭化物集中35が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩19点、多孔質安山岩５点、玄武岩３点、多孔質玄武岩８点である。この内６点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は33点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、北東方向へ約６ｍの距離を隔てた128号礫群、北西方向へ約2.5mの距離を隔てた119号礫群および遺構外の礫との接合が確認された。

また、礫群と重複して、ホルンフェルス製と珪質頁岩製の剥片がそれぞれ１点出土した。石器に被熱は確認できなかった。

116号礫群（第167図）

Ｄ－12グリッドから検出された。南北方向１ｍ、東西方向0.5ｍの範囲に、７点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。炭化物集中35が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩２点、玄武岩３点、多孔質玄武岩２点である。この内１点の礫に接合関係が確認された。礫群間の接合であり、北東方向へ約８ｍの距離を隔てた126号礫群との接合が確認された。

117号礫群（第168図）

Ｄ－12グリッドから検出された。北西～南東方向1.6ｍ、北東～南西方向0.7ｍの範囲に、12点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北東から南西にかけて、緩やかに下る傾斜地である。炭化物集中35が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩４点、多孔質安山岩３点、玄武岩２点、多孔質玄武岩３点である。この内３点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は10点の礫群となった。接合関係は礫群内であった。

118号礫群（第168図）

Ｄ－12グリッドから検出された。北西～南東方向1.1ｍ、北東～南西方向0.9ｍの範囲に、18点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北東から南西にかけて、緩やかに下る傾斜地である。炭化物集中35が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩５点、多孔質安山岩２点、玄武岩８点、多孔質玄武岩３点である。この内９点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は11点の礫群となった。接合関係は全て礫群内であった。

119号礫群（第168図）

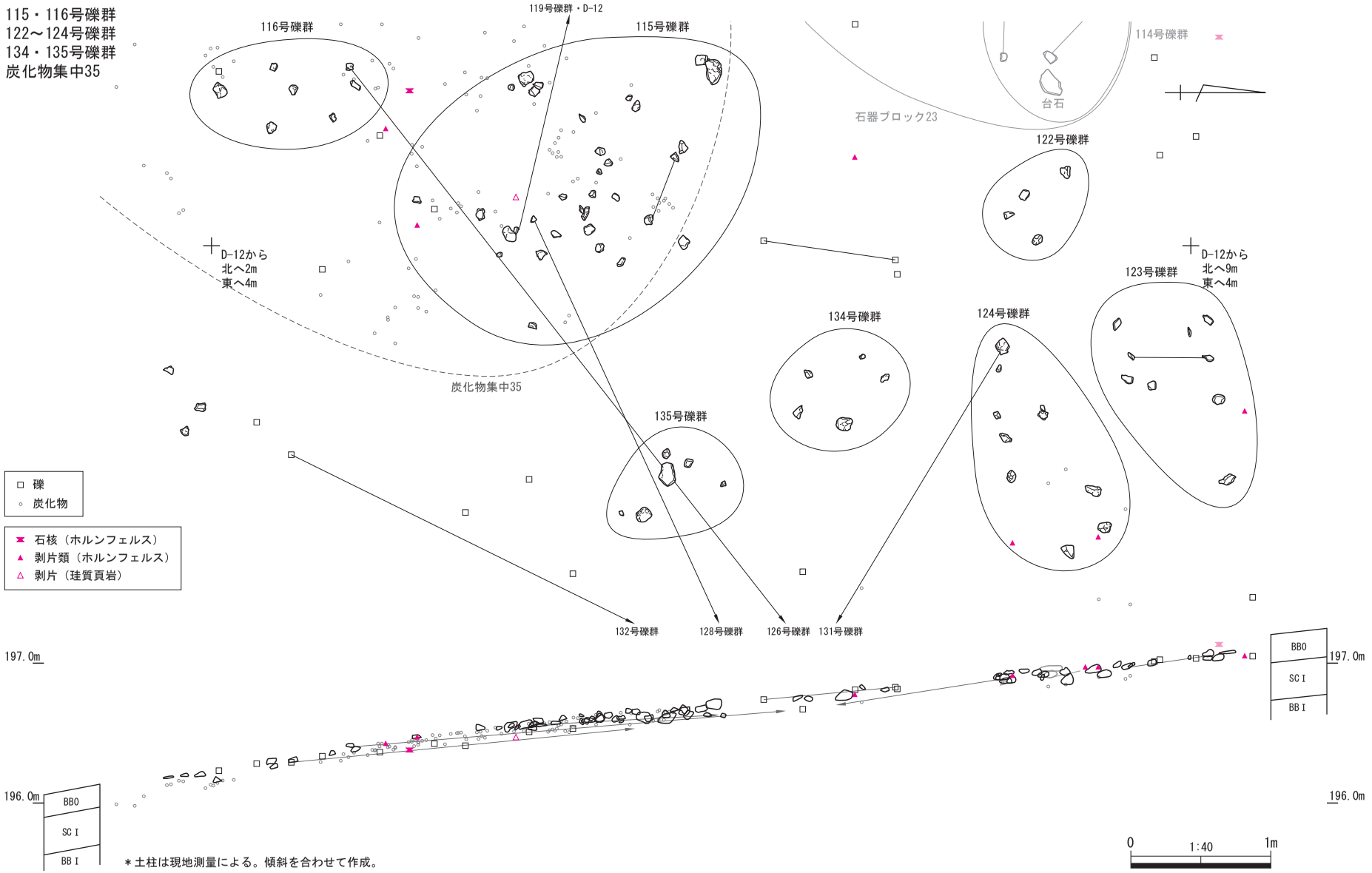
Ｄ－12グリッドから検出された。北東～南西方向1.3ｍ、北西～南東方向0.9ｍの範囲に、10点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北東から南西にかけて、緩やかに下る傾斜地である。炭化物集中35が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩５点、玄武岩２点、多孔質玄武岩３点である。この内５点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は８点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、南東方向へ約2.5ｍの距離を隔てた115号礫群および、遺構外の礫との接合が確認された。

120号礫群（第168図）

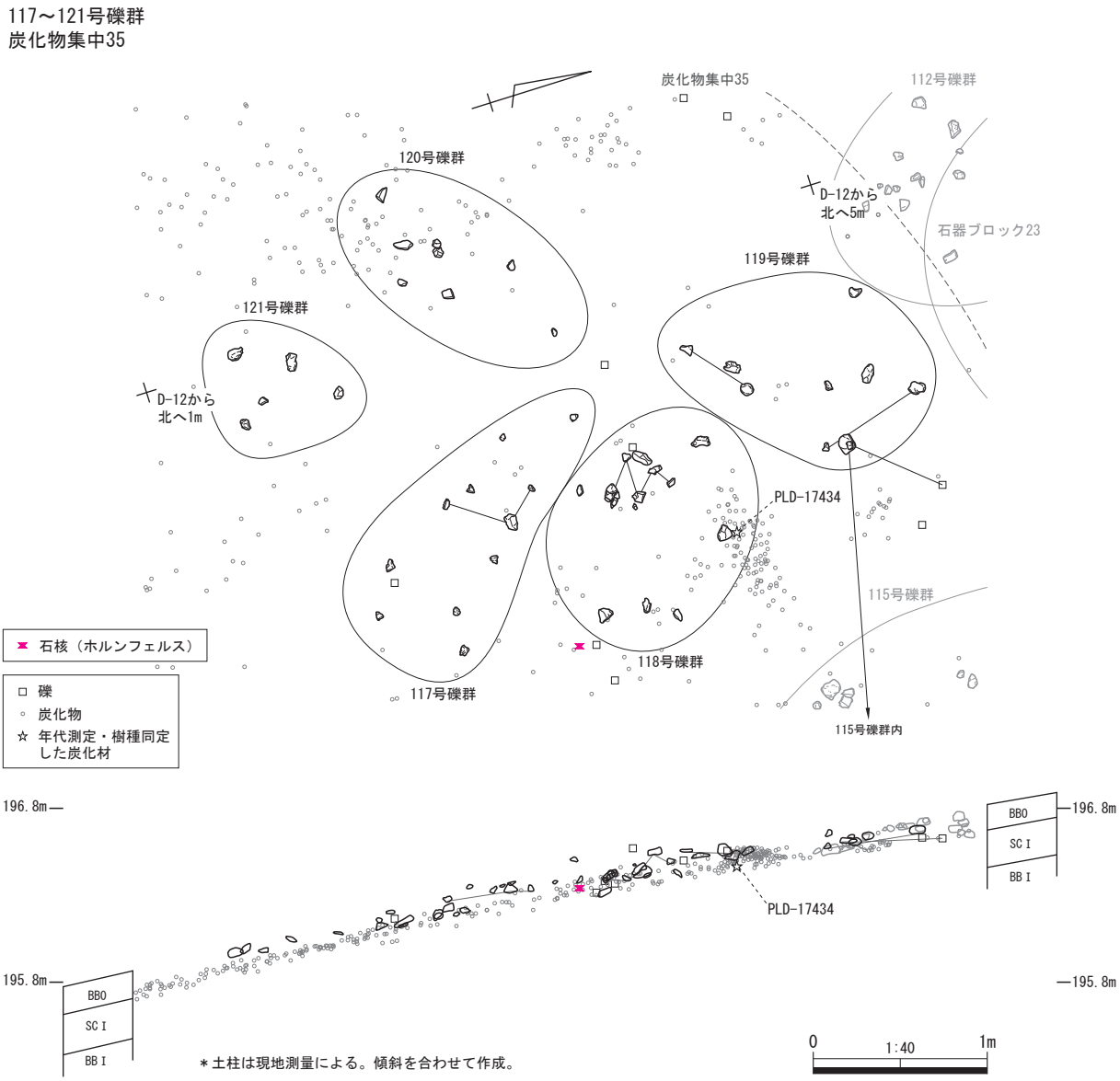
Ｄ－11～12グリッドから検出された。北東～南西方向1.3ｍ、北西～南東方向0.5ｍの範囲に、８点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北東から南西にかけて、緩やかに下る傾斜地である。炭化物集中35が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩２点、多孔質安山岩４点、玄武岩１点、多孔質玄武岩１点である。接合関係は確認できなかった。



＊土柱は現地測量による。傾斜を合わせて作成。

第167図　第Ⅷ文化層　南尾根 115・116・122～124・134・135号礫群、炭化物集中35 遺構図



第168図　第Ⅷ文化層　南尾根 117～121号礫群、炭化物集中35 遺構図

121号礫群（第168図）

D－11～12グリッドから検出された。南北方向0.6m、東西方向0.4mの範囲に、５点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北東から南西にかけて、緩やかに下る傾斜地である。炭化物集中35が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩４点、玄武岩１点である。接合関係は確認できなかった。

122号礫群（第167図）

D－12グリッドから検出された。北西～南東方向0.5m、北東～南西方向0.3mの範囲に、４点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、多孔質安山岩２点、多孔質玄武岩２点である。接合関係は確認できなかった。

123号礫群（第167図）

Ｄ－12グリッドから検出された。北東～南西方向1.4m、北西～南東方向0.8mの範囲に、９点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩４点、多孔質安山岩１点、多孔質玄武岩４点である。この内２点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は８点の礫群となった。接合関係は礫群内であった。

礫群と重複して、ホルンフェルス製の剥片が１点出土した。石器に被熱は確認できなかった。

124号礫群（第167図）

Ｄ－12グリッドから検出された。北東～南西方向1.6m、北西～南東方向0.5mの範囲に、10点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。炭化物が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩７点、多孔質安山岩３点である。この内１点の礫に接合関係が確認された。礫群間の接合であり、南東方向へ約4.5mの距離を隔てた131号礫群との接合が確認された。

礫群と重複して、ホルンフェルス製の剥片が２点出土した。石器に被熱は確認できなかった。

125号礫群（第169図）

Ｄ－12グリッドから検出された。北西～南東方向0.7m、北東～南西方向0.6mの範囲に、16点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、全て輝石安山岩である。この内２点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は15点の礫群となった。接合関係は礫群内であった。

構成礫の内、1,000gを超える礫が１点出土している。その他の礫も全て400g以上あり、他の礫群の構成礫に比べ大型である。

126号礫群（第169図）

Ｄ－12グリッドから検出された。北西～南東方向1.1m、北東～南西方向0.5mの範囲に、17点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。石器ブロック24が重複して検出されている。また、炭化物が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩２点、多孔質安山岩１点、玄武岩７点、多孔質玄武岩７点である。この内２点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は17点の礫群となった。いずれも礫群間の接合であり、北西方向へ約6.4mの距離を隔てた94号礫群と、南西方向へ約８ｍの距離を隔てた116号礫群との接合が確認された。

127号礫群（第169図）

Ｄ－12～13グリッドから検出された。北西～南東方向1.3m、北東～南西方向1.3mの範囲に、27点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。石器ブロック24が重複して検出されている。また、炭化物が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩20点、玄武岩６点、多孔質玄武岩１点である。この内11点の礫に接合関係が確認

され、その結果、接合後個体数は19点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、西方向へ約10mの距離を隔てた111号礫群との接合が確認された。

128号礫群（第169図）

Ｄ－12グリッドから検出された。北西～南東方向0.9m、北東～南西方向0.7mの範囲に、14点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。石器ブロック24が重複して検出されている。また、炭化物が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩13点、玄武岩１点である。この内３点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は13点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、近隣の130・132号礫群、南西方向へ約６ｍの距離を隔てた115号礫群との接合が確認された。

129号礫群（第169図）

Ｄ－12グリッドから検出された。北西～南東方向0.7m、北東～南西方向0.6mの範囲に、11点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。石器ブロック24が重複して検出されている。また、炭化物が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩９点、玄武岩１点、多孔質玄武岩１点である。接合関係は確認できなかった。

130号礫群（第169図）

Ｄ－12グリッドから検出された。北西～南東方向0.5m、北東～南西方向0.5mの範囲に、13点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。石器ブロック24が重複して検出されている。また、炭化物が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩11点、多孔質玄武岩２点である。この内２点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は12点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、近隣の128・132号礫群との接合が確認された。

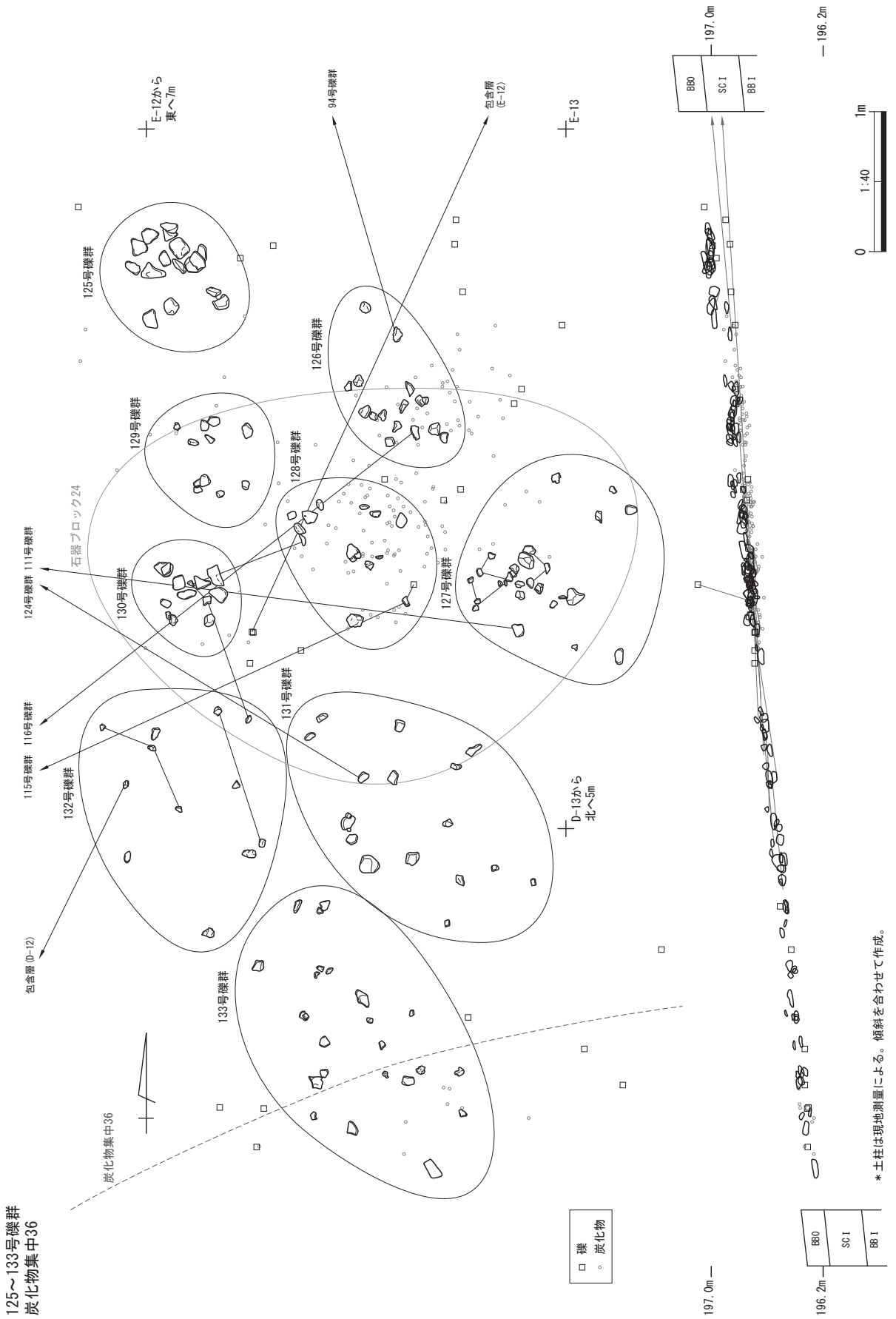
131号礫群（第169図）

Ｄ－12グリッドから検出された。北西～南東方向1.9m、北東～南西方向1.1mの範囲に、18点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。一部、石器ブロック24が重複して検出されている。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩８点、多孔質安山岩５点、玄武岩４点、多孔質玄武岩１点である。この内１点の礫に接合関係が確認された。礫群間の接合であり、北西方向へ約4.5mの距離を隔てた124号礫群との接合が確認された。構成礫の大半は300g以下の小型の礫だが、1,400gを超える礫が１点出土している。

132号礫群（第169図）

Ｄ－12グリッドから検出された。北西～南東方向1.7m、北東～南西方向1.3mの範囲に、12点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。



第169図　第Ⅷ文化層　南尾根 125～133号礫群、炭化物集中36 遺構図

石材は、輝石安山岩９点、多孔質安山岩２点、多孔質玄武岩１点である。この内７点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は９点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、近隣の128・130号礫群、遺構外では、南西方向へ約３ｍの距離を隔てた礫との接合が確認された。

133号礫群（第169図）

Ｄ－12グリッドから検出された。北西～南東方向2.1m、北東～南西方向1.1ｍの範囲に、24点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。一部、炭化物集中36が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩12点、多孔質安山岩１点、玄武岩２点、多孔質玄武岩９点である。接合関係は確認できなかった。

134号礫群（第167図）

Ｄ－12グリッドから検出された。北西～南東方向0.7m、北東～南西方向0.5ｍの範囲に、５点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩３点、玄武岩２点である。接合関係は確認できなかった。

135号礫群（第167図）

Ｄ－12グリッドから検出された。北西～南東方向0.8m、北東～南西方向0.4ｍの範囲に、６点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩３点、多孔質安山岩１点、多孔質玄武岩２点である。接合関係は確認できなかった。構成礫の大半は300g以下の小型の礫だが、1,500gを超える礫が１点出土している。

136号礫群（第170図）

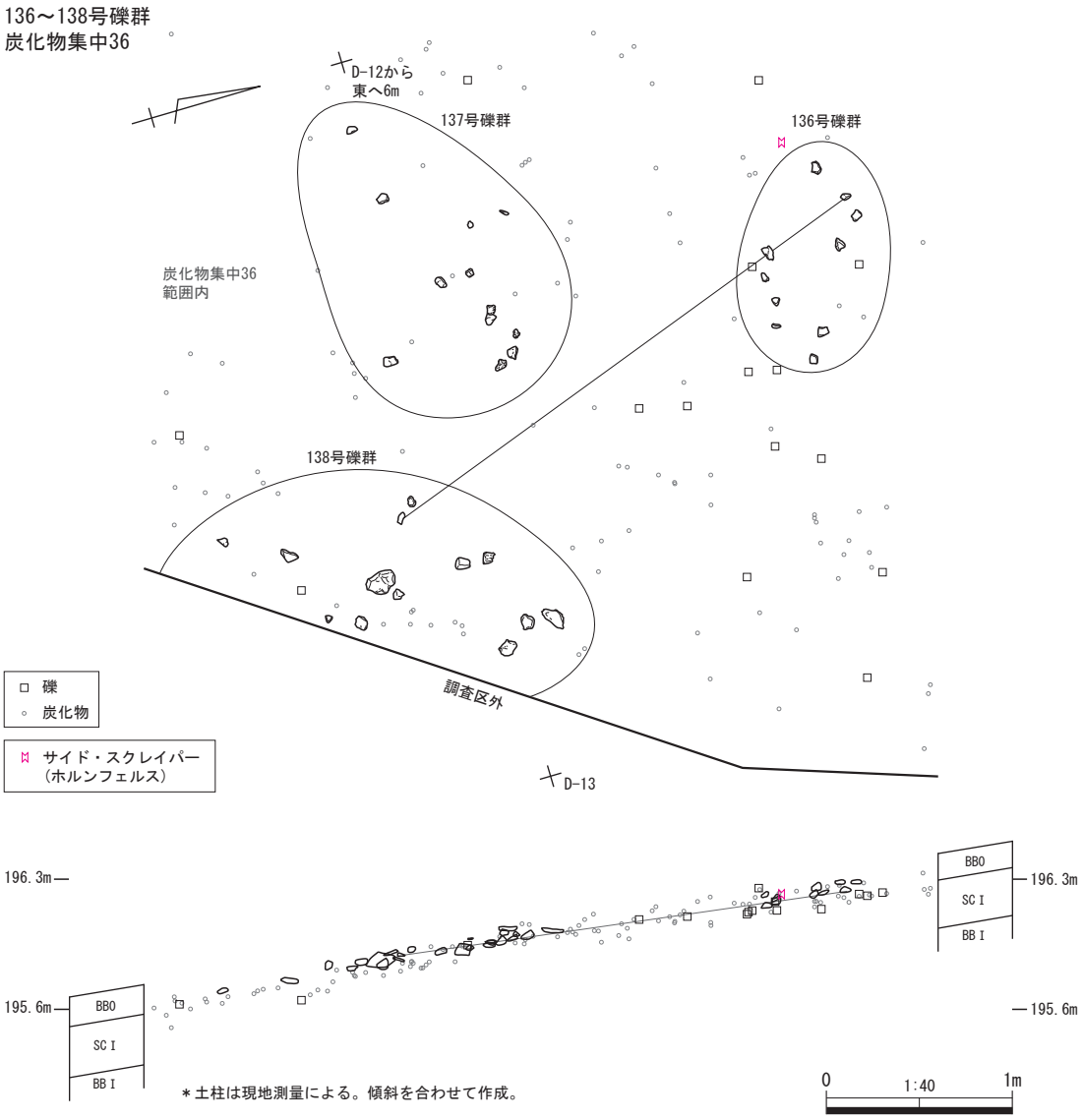
Ｄ－12グリッドから検出された。北西～南東方向１ｍ、北東～南西方向0.6ｍの範囲に、12点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。炭化物集中36が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩２点、多孔質安山岩２点、玄武岩３点、多孔質玄武岩５点である。この内１点の礫に接合関係が確認された。礫群間の接合であり、近隣の138号礫群との接合が確認された。

137号礫群（第170図）

Ｃ～Ｄ－12グリッドから検出された。北東～南西方向1.5m、北西～南東方向１ｍの範囲に、12点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。炭化物集中36が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩６点、多孔質安山岩１点、玄武岩２点、多孔質玄武岩３点である。接合関係は確認できなかった。



第170図　第Ⅷ文化層　南尾根 136～138号礫群、炭化物集中36 遺構図

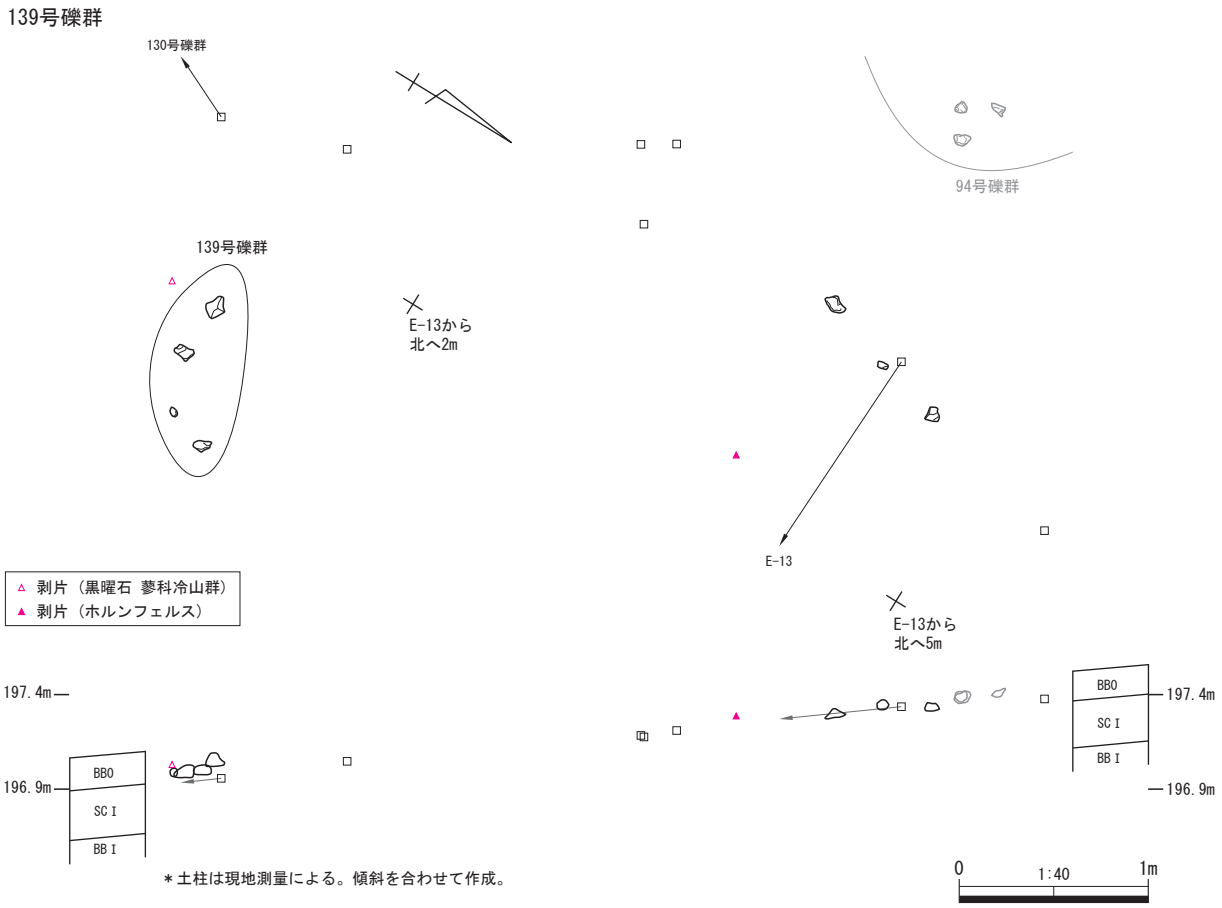
138号礫群（第170図）

C～D－12グリッドから検出された。北東～南西方向1.8m、北西～南東方向0.7mの範囲に、13点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。炭化物集中36が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩５点、多孔質安山岩５点、玄武岩１点、多孔質玄武岩２点である。この内１点の礫に接合関係が確認された。礫群間の接合であり、近隣の136号礫群との接合が確認された。構成礫の大半は300g以下の小型の礫だが、1,000gを超える礫が１点出土している。

139号礫群（第171図）

E－13グリッドから検出された。北東～南西方向0.7m、北西～南東方向0.2mの範囲に、４点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。



第171図　第Ⅷ文化層　南尾根 139号礫群 遺構図

石材は、輝石安山岩１点、玄武岩３点である。接合関係は確認できなかった。

140号礫群（第172図）

D－13グリッドから検出された。北東～南西方向１m、北西～南東方向0.7mの範囲に、７点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩３点、多孔質安山岩１点、玄武岩３点である。この内１点の礫に接合関係が確認された。礫群間の接合であり、近隣の142号礫群との接合が確認された。

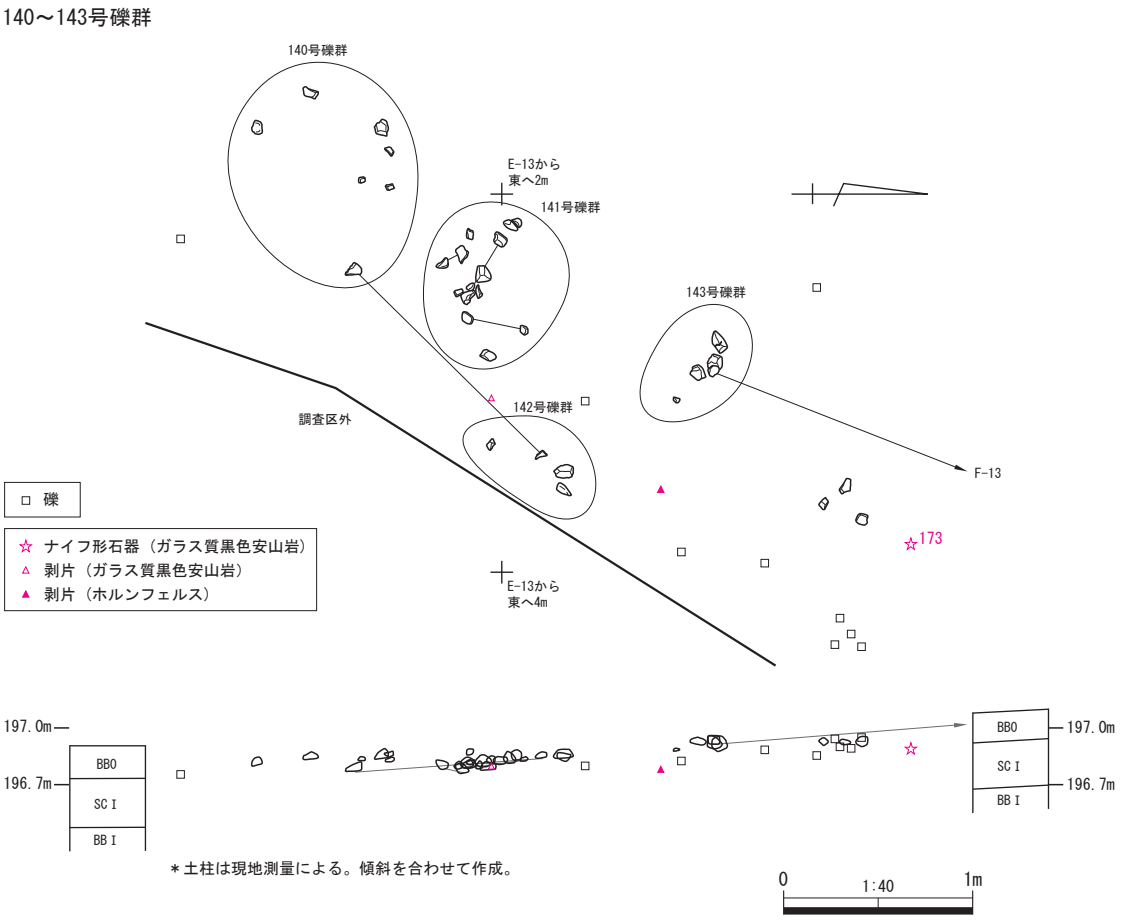
141号礫群（第172図）

D～E－13グリッドから検出された。北西～南東方向0.7m、北東～南西方向0.5mの範囲に、14点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩４点、玄武岩６点、多孔質玄武岩４点である。この内10点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は９点の礫群となった。接合関係は全て礫群内であった。

142号礫群（第172図）

D～E－13グリッドから検出された。北東～南西方向0.5m、北西～南東方向0.1mの範囲に、４点の礫



第172図　第Ⅷ文化層　南尾根 140～143号礫群 遺構図

が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩３点、玄武岩１点である。この内１点の礫に接合関係が確認された。礫群間の接合であり、近隣の140号礫群との接合が確認された。

143号礫群（第172図）

Ｅ－13グリッドから検出された。北西～南東方向0.4m、北東～南西方向0.1mの範囲に、５点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩２点、玄武岩２点、多孔質玄武岩１点である。この内１点の礫に接合関係が確認され、北東方向に約13mの距離を隔てた遺構外の礫と接合した。

ウ　炭化物集中

炭化物集中33（第164図）

Ｅ－11グリッドから検出された。北東～南西方向4.0m、北西～南東方向2.2mの範囲に、110点を超える炭化物が集中して分布している。出土のピークは休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に、赤化などの変化は確認できなかった。

96・98～100号礫群が重複して検出された。

炭化物集中34（第164～166図）

D－11～12グリッドから検出された。北西～南東方向5.3m、北東～南西方向3.0mの範囲に120点を超える炭化物が集中して分布している。出土のピークは休場層直下黒色帯の下部である。付近は北西から南東にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に、赤化などの変化は確認できなかった。

石器ブロック23、103～106・110～113号礫群が重複して検出された。

炭化物集中35（第166～168図）

C～D－11～12グリッドから検出された。北東～南西方向8.7m、北西～南東方向5.4mの範囲に、580点を超える炭化物が集中して分布している。特に、中央付近に密集している箇所が見られる。出土のピークは休場層直下黒色帯の下部である。付近は北東から南西にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に、赤化などの変化は確認できなかった。

石器ブロック23が一部重複している。112・113・115～121号礫群が重複して検出された。

また、密集箇所から出土した炭化物のうち炭化材１点について、放射性炭素年代測定（AMS法）を行った結果、1,585±20yrBP（PLD－17434）の^{14}C年代値が確認された（詳細は第２分冊附編を参照）。この値は当該期を示す値としては著しく不適切であり、何らかの外的要因によって誤った数値が出されたと考えられる。

炭化物集中36（第169・170図）

C～D－12・D－13グリッドから検出された。北東～南西方向8.9m、北西～南東方向4.0mの範囲に、210点を超える炭化物が集中して分布している。出土のピークは休場層直下黒色帯の下部である。付近は北から南にかけて、緩やかに下る傾斜地である。分布範囲の土壌に、赤化などの変化は確認できなかった。

133・136～138号礫群が重複して検出された。

（２）遺物

南尾根からは、石器206点が出土した（第33表）。石器群の内訳は、ナイフ形石器４点、尖頭器１点、エンド・スクレイパーが４点、サイド・スクレイパー７点、ノッチド・スクレイパー２点、ドリル１点、楔形石器１点、石刃５点、微細な剥離痕を有する剥片８点、石核が31点、剥片類が136点、敲石が４点、台石１点、原石が１点である。石材は、黒曜石20点（天城柏峠群２点、神津島恩馳島群２点、箱根畑宿群２点、蓼科冷山群11点、分析不可等２点、未分析１点）、ホルンフェルス164点、ガラス質黒色安山岩７点、細粒安山岩１点、硬質細粒凝灰岩１点、珪質頁岩５点、細粒砂岩３点、珪質シルト岩１点、輝緑岩１点、輝石安山岩２点、角閃石安山岩１点である。内、遺構外出土石器の組成を第36表に示す。

ナイフ形石器（第173図171～174　写真図版８）

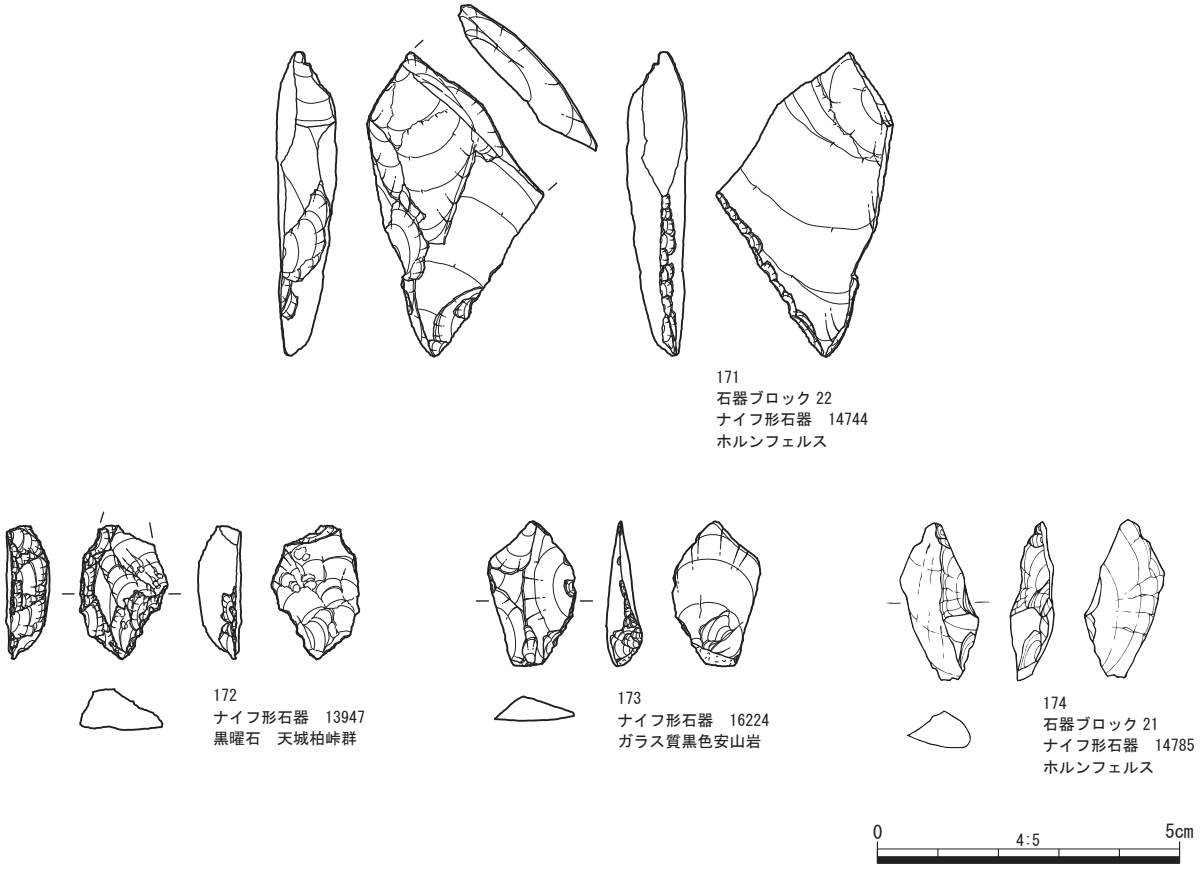
171は二側縁加工のナイフ形石器である。石器ブロック22から出土した。素材剥片を横位に用いている。左側縁は、素材剥片の打面をブランティングの代わりとし、右側縁の基部には背面側から加工を施している。刃部が存在したと推測される右側縁先端部は、折損している。石材はホルンフェルスである。

172は二側縁加工のナイフ形石器である。素材剥片を縦位に用いており、加工によって打点部を除去している。先端部は折損している。石材は黒曜石（天城柏峠群）である。

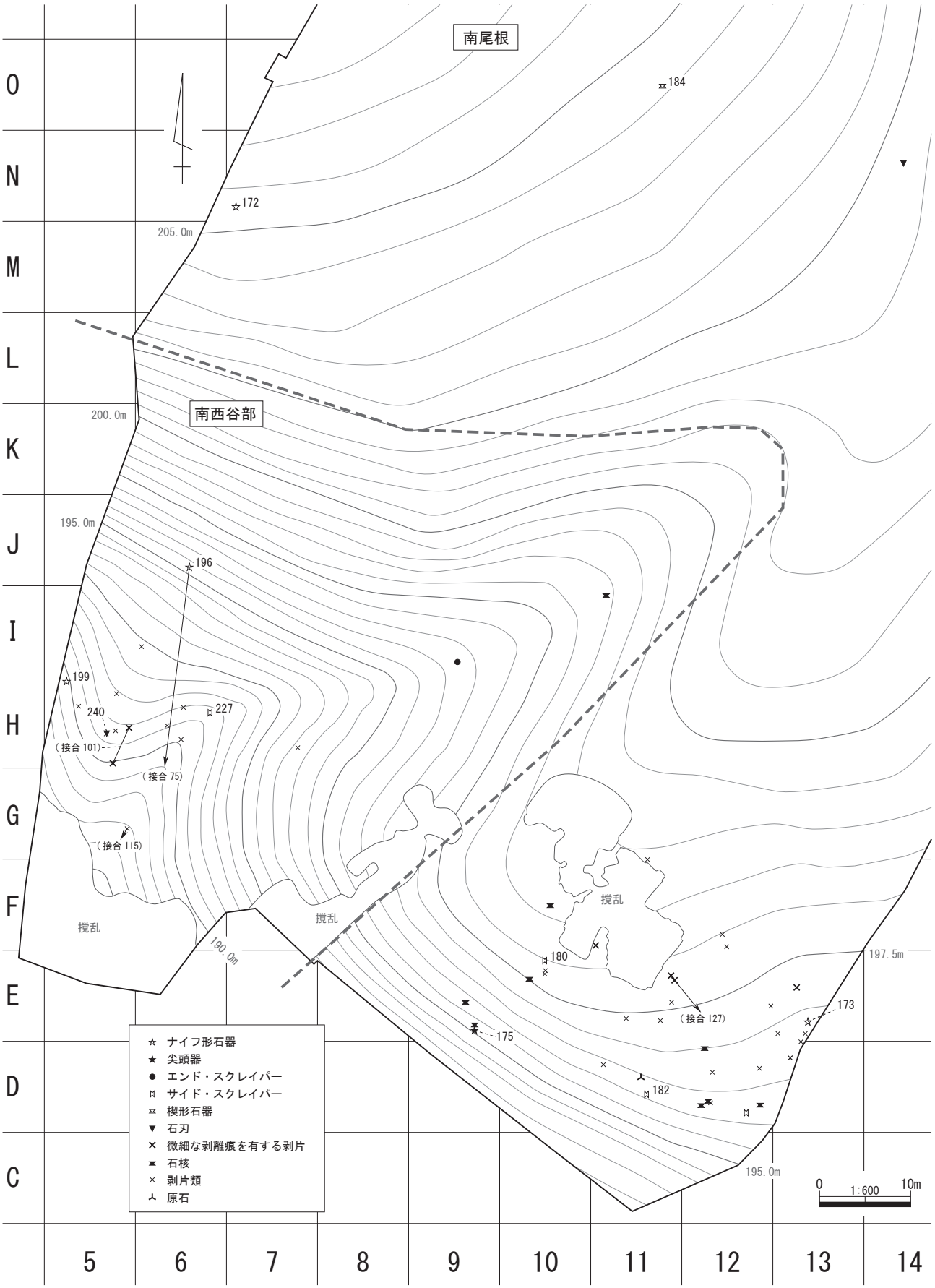
173は基部加工のナイフ形石器である。小型の縦長剥片を縦位に用いており、右側縁の基部にのみ、ブランティングを施している。素材剥片の末端部が尖頭状を呈しており、それをそのまま先端部に用いている。石材はガラス質黒色安山岩である。

第36表　第Ⅷ文化層 南尾根 遺構外出土 石器組成表

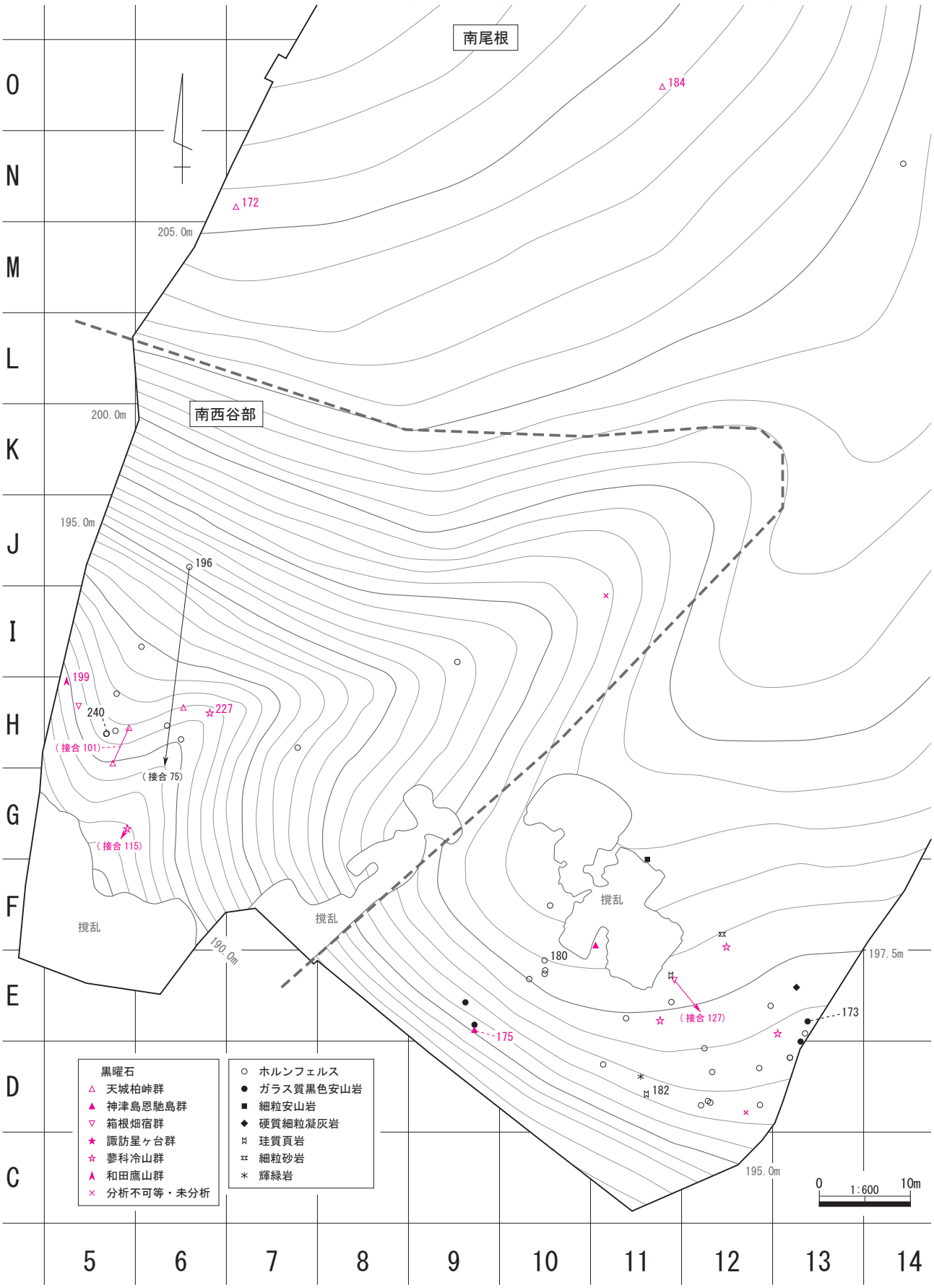
		ナイフ形石器	尖頭器	サイド・スクレイパー	楔形石器	石刃	微細な剥離痕を有する剥片	石核	剥片類	原石	計
黒曜石	天城柏峠群	1			1						2
	神津島恩馳島群		1				1				2
	箱根畑宿群						1				1
	蓼科冷山群								3		3
	分析不可等			1							1
ホルンフェルス				1		1		6	12		20
ガラス質黒色安山岩		1						2	1		4
細粒安山岩									1		1
硬質細粒凝灰岩							1				1
珪質頁岩				1			1				2
細粒砂岩									1		1
輝緑岩										1	1
計		2	1	3	1	1	4	8	18	1	39



第173図　第Ⅷ文化層　南尾根 出土石器実測図（１）



第174図　第Ⅷ文化層　南尾根～南西谷部 遺構外出土石器 器種別分布図



第175図　第Ⅷ文化層　南尾根～南西谷部 遺構外出土石器 石材別分布図

174は一側縁加工のナイフ形石器である。石器ブロック21から出土した。小型の横長剥片を横位に用いており、ブランティングによって打点部を除去している。石材はホルンフェルスである。

尖頭器（第176図175　写真図版８）

175は両面加工の尖頭器の基部である。全面が加工されており、素材剥片を推測することはできない。加工はやや粗い。上部は折損しており、全体形状は不明である。石材は黒曜石（神津島恩馳島群）である。石材も含めて本文化層では異色の存在であり、何らかの理由で上層の資料が混在した可能性も考えられる。

エンド・スクレイパー（第176図176・177　写真図版８）

176は、横長剥片を素材としたエンド・スクレイパーである。110号礫群から出土した。素材剥片を横位に用いて、左側縁から下縁にかけて刃部を作出している。左側縁の刃部は、ややノッチ状を呈しており、ノッチド・スクレイパーとしての特徴も有している。石材はホルンフェルスである。

177は、石刃を素材としたエンド・スクレイパーである。石器ブロック18から出土した。素材の末端部に厚みを持った刃部を作出しているが、刃部が配置されているのは末端部中央ではなく、やや左側である。石材はホルンフェルスである。

サイド・スクレイパー（第176・177図178～182　写真図版８）

178は、縦長剥片を素材としたサイド・スクレイパーである。石器ブロック24から出土した。素材剥片の厚みのある右側縁に、急斜度な剥離を施して刃部としている。刃部の加工はブランティングの様にも見ることができるが、尖端部を持たないためスクレイパーと判断した。石材はホルンフェルスである。

179は、横長剥片を素材としたサイド・スクレイパーである。石器ブロック24から出土した。素材剥片を横位に用いて、右側縁と下縁に刃部を作出している。下縁の刃部は、背面側から作出している。石材はホルンフェルスである。

180は、石刃を素材としたサイド・スクレイパーである。素材の右側縁に連続した加工を施して、刃部を作出している。加工はやや粗く、刃部は鋸歯状を呈する。石材はホルンフェルスである。

181はサイド・スクレイパーである。96号礫群から出土した。素材剥片の左側縁に、連続した加工を施して、刃部を作出している。加工はやや粗く、刃部は鋸歯状を呈する。石材はホルンフェルスである。

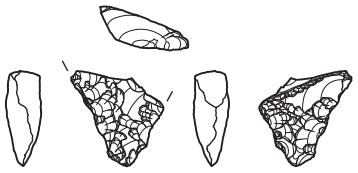
182は、横長剥片を素材としたサイド・スクレイパーである。素材剥片の右側縁から下縁にかけて、連続した加工を施して、刃部を作出している。また、下縁左側に大きな剥離を一回施しているが、刃部作出の剥離とは大きさが明らかに異なる。石材は珪質頁岩である。

ノッチド・スクレイパー（第177図183　写真図版８）

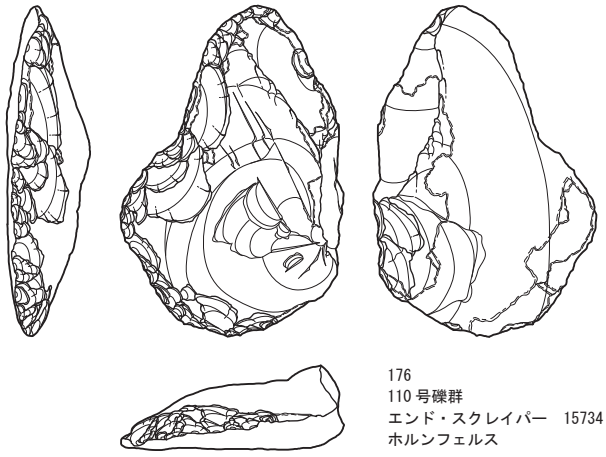
183は、縦長剥片を素材としたノッチド・スクレイパーである。石器ブロック24から出土した。素材剥片を縦位に用いており、腹面の左側縁に加工を施して刃部としている。厚みのある下縁には、腹面側から剥離が確認されるため、エンド・スクレイパーとしての特徴も持っている。また、裏面右側縁には大きな一回の剥離が確認できるため、石核として転用されていた可能性も考えられる。石材はホルンフェルスである。

楔形石器（第177図184　写真図版８）

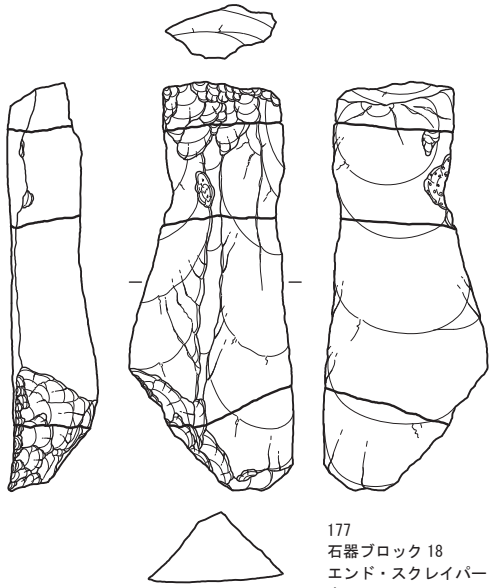
184は楔形石器である。上下に明確な潰れが確認され、表裏両面には使用時の衝撃で作出された剥離面



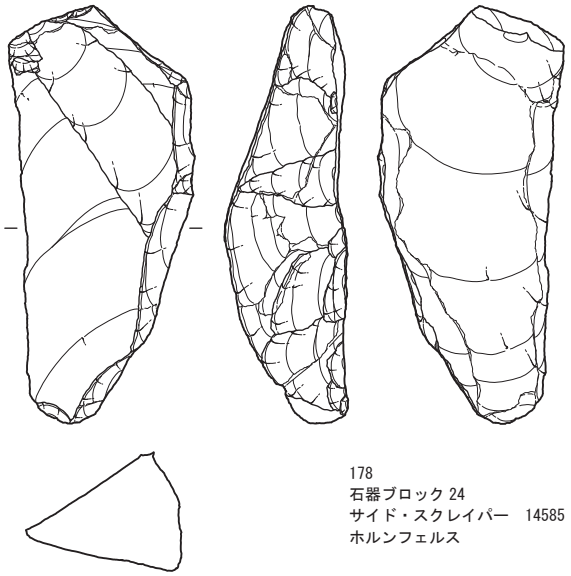
175
尖頭器　14712
黒曜石　神津島恩馳島群



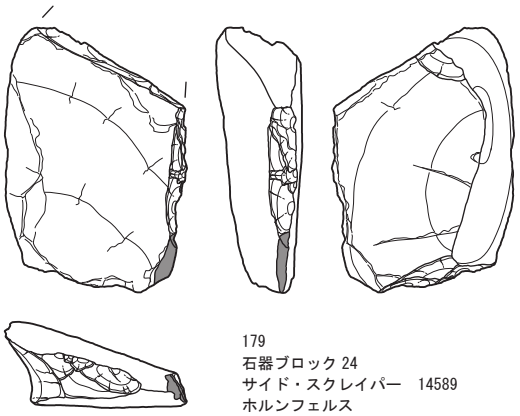
176
110 号礫群
エンド・スクレイパー　15734
ホルンフェルス



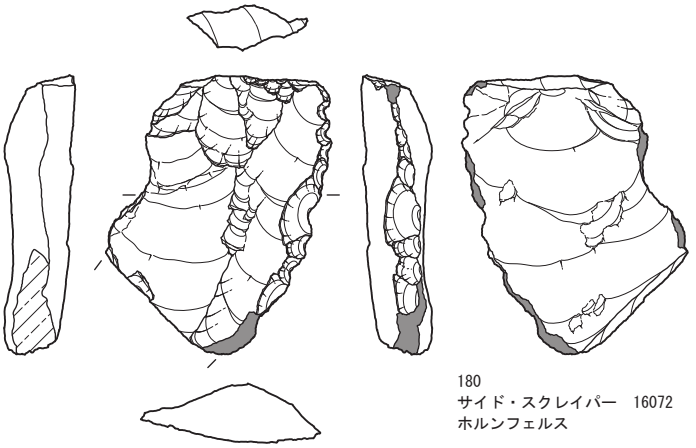
177
石器ブロック 18
エンド・スクレイパー　14983
ホルンフェルス



178
石器ブロック 24
サイド・スクレイパー　14585
ホルンフェルス

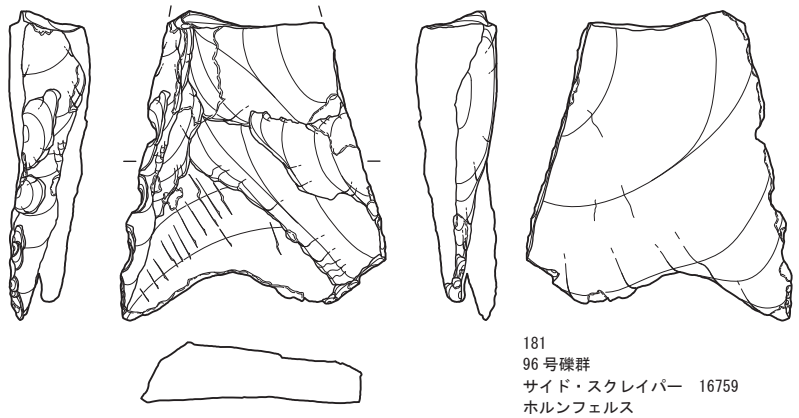


179
石器ブロック 24
サイド・スクレイパー　14589
ホルンフェルス

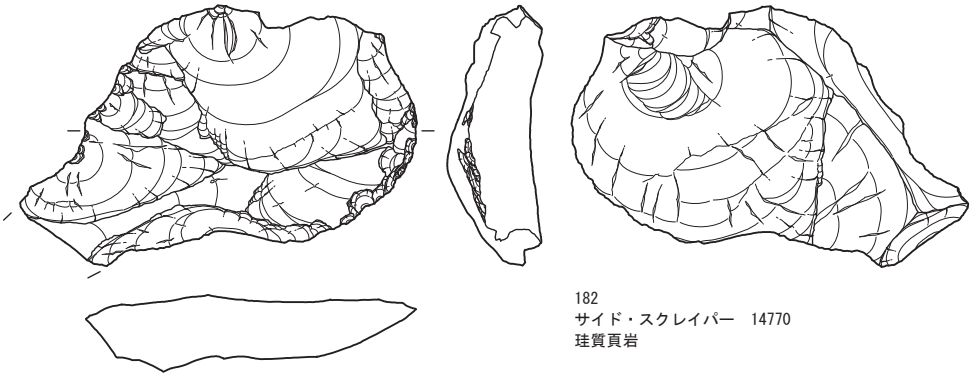


180
サイド・スクレイパー　16072
ホルンフェルス

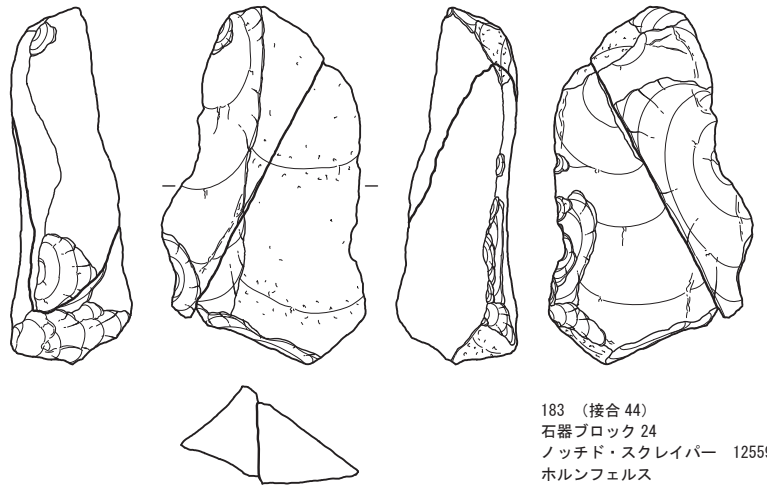
第176図　第Ⅷ文化層　南尾根 出土石器実測図（２）



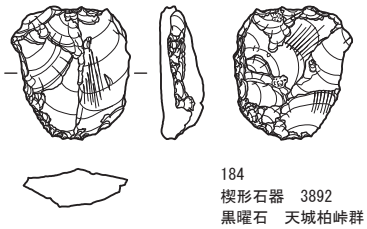
181
96 号礫群
サイド・スクレイパー　16759
ホルンフェルス



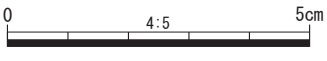
182
サイド・スクレイパー　14770
珪質頁岩



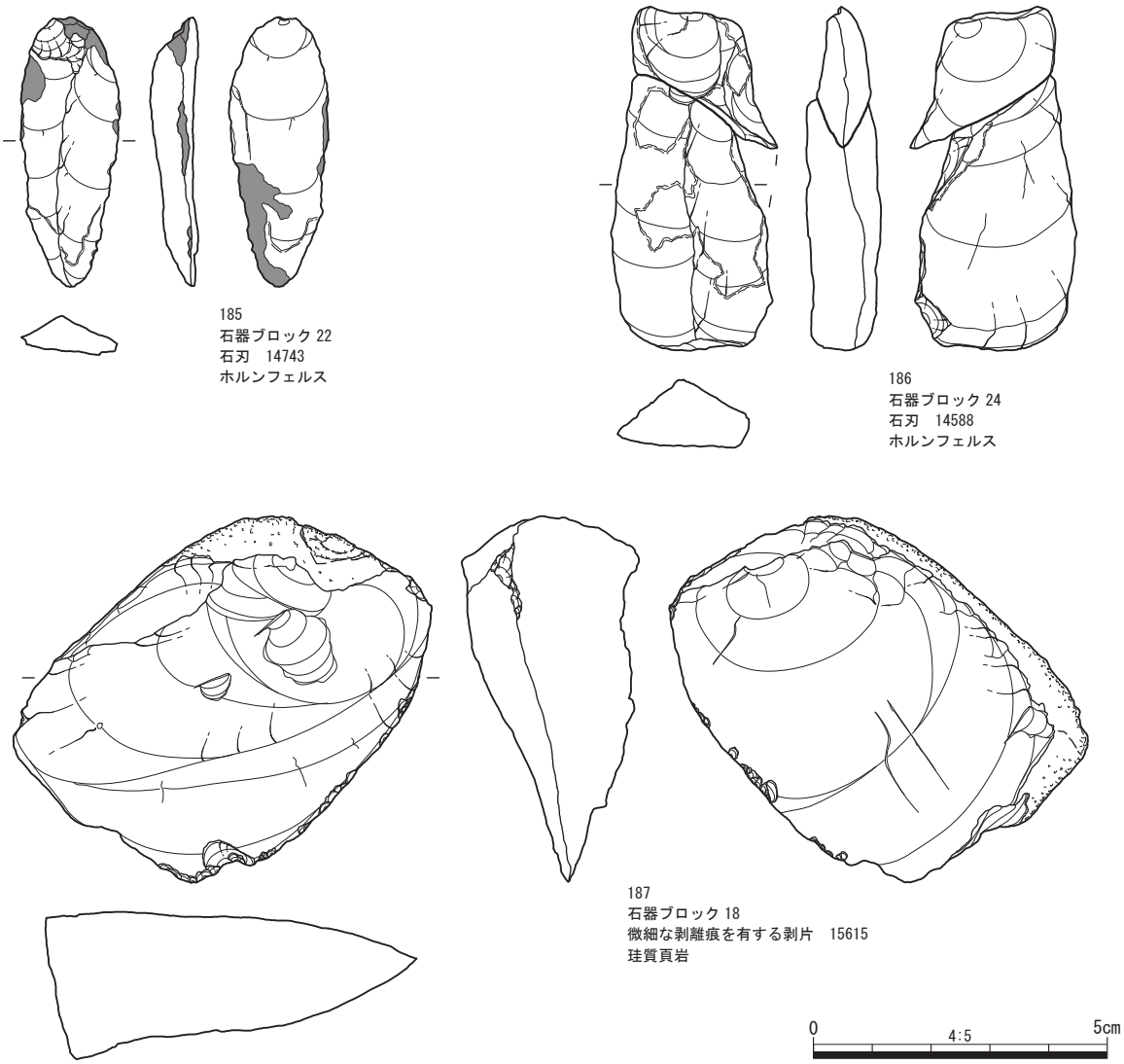
183　（接合 44）
石器ブロック 24
ノッチド・スクレイパー　12559+14853
ホルンフェルス



184
楔形石器　3892
黒曜石　天城柏峠群



第177図　第Ⅷ文化層　南尾根 出土石器実測図（３）



第178図　第Ⅷ文化層　南尾根 出土石器実測図（４）

が、複数確認できる。また、両側面には微細な剥離が施されており、左側縁は裏面側から、右側縁には表面側から施されている。石材は黒曜石（天城柏峠群）である。出土地点は、南尾根の中でも北側の丘陵部にあたり、石器集中部から大きく離れている。

石刃（第178図185・186　写真図版８）

185は小型の石刃である。石器ブロック22から出土した。背面には、同一方向の剥離を繰り返しているのが見て取れる。剥離の際に、頭部調整が行われている。石材はホルンフェルスである。

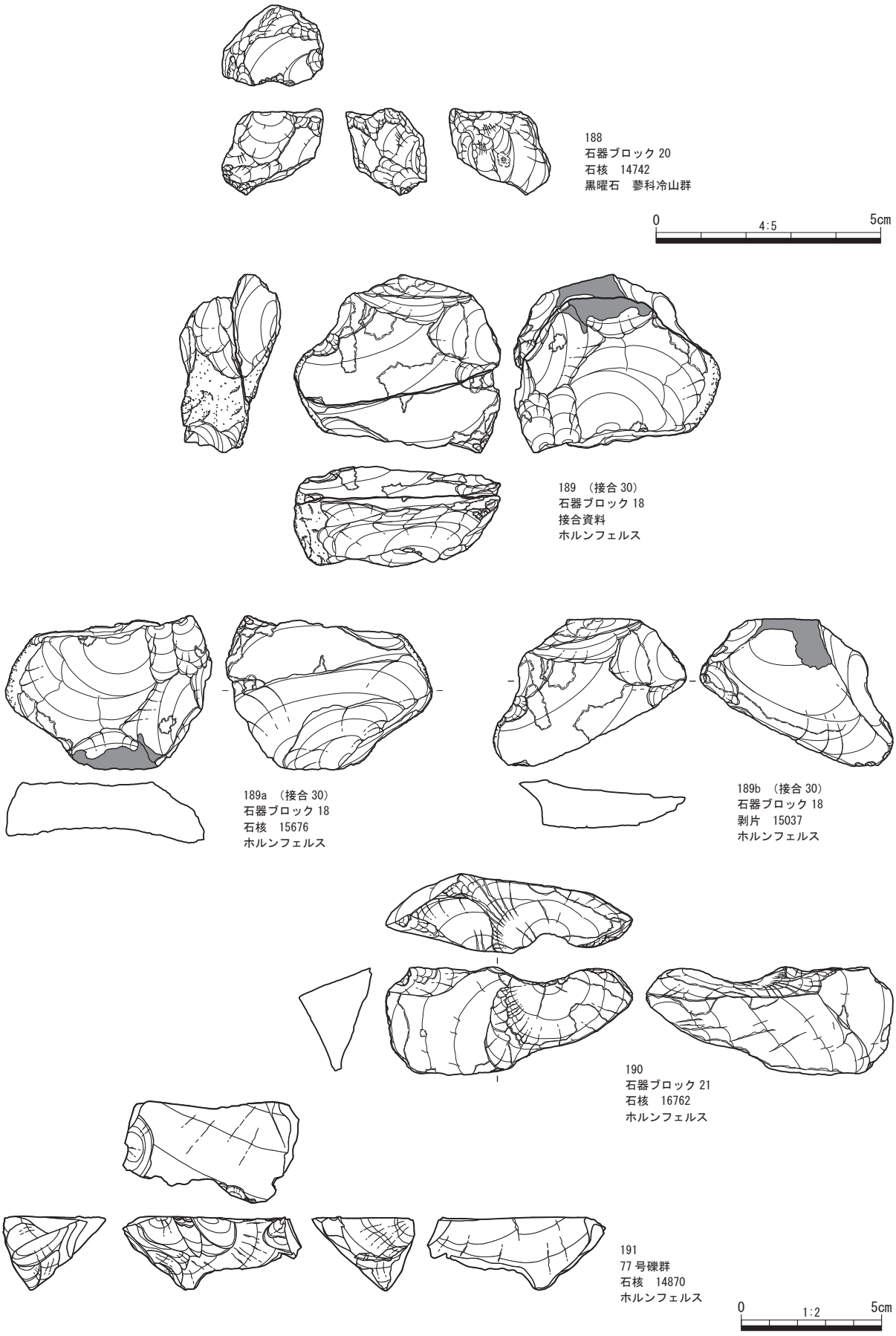
186は、やや小型の石刃である。石器ブロック24から出土した。背面には、同一方向の剥離を繰り返しているのが見て取れる。石材はホルンフェルスである。

微細な剥離痕を有する剥片（第178図187　写真図版８）

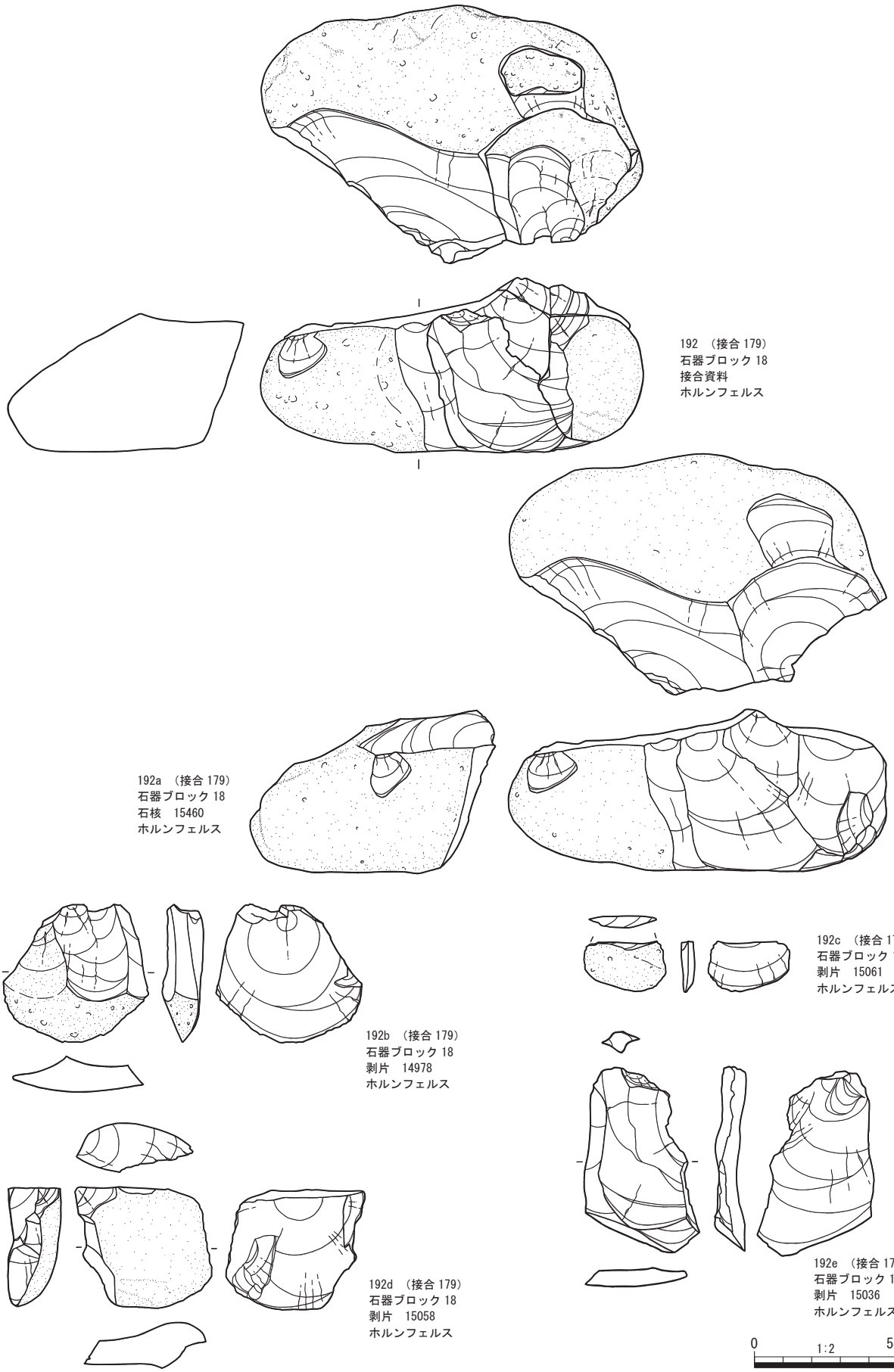
187は、石器ブロック18から出土した。幅広剥片の縁辺に、微細な剥離痕が表裏両面にわたって確認できる。石材は珪質頁岩である。

石核（第179～181図188～193　写真図版８）

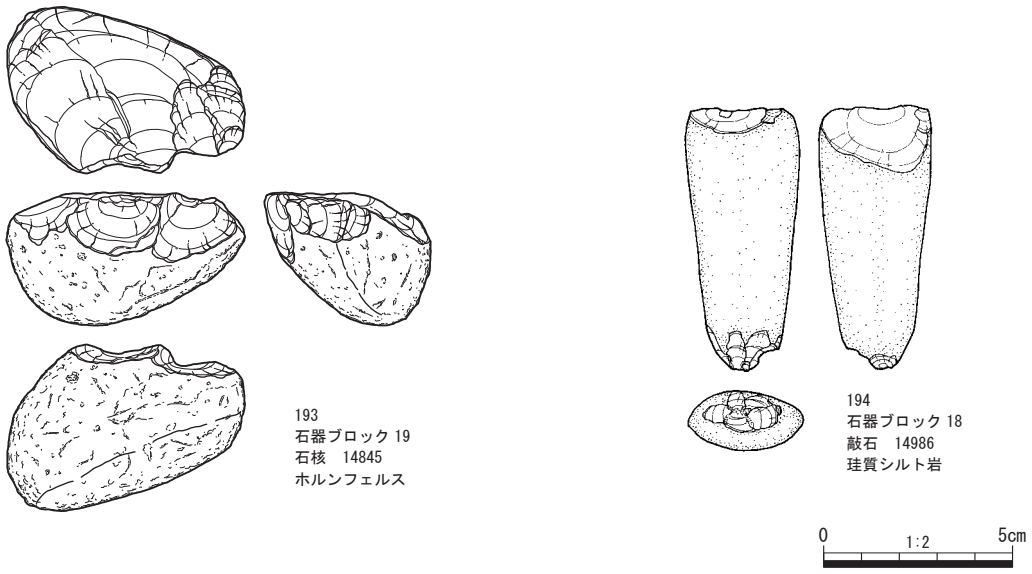
188は、石器ブロック20から出土した小型の石核である。打面転移を繰り返している。正面左下に微細



第179図　第Ⅷ文化層　南尾根 出土石器実測図（５）



第180図　第Ⅷ文化層　南尾根 出土石器実測図（６）



第181図　第Ⅷ文化層　南尾根 出土石器実測図（７）

な剥離が連続して確認できるが、石核の剥片剥離とは直接関連はなく、元々エンド・スクレイパーであった資料を、石核に転用した可能性が考えられる。得られた剥片は小型の幅広剥片である。石材は黒曜石（蓼科冷山群）である。

189は、石器ブロック18から出土した石核と剥片の接合資料である。厚みを持った盤状の剥片の一端を、折断に近い形で取り除き、そこを打面として剥離を施している。裏面に、その際の連続した剥離が見て取れる。さらに打面転移を行おうとして、広く平坦な面に平行に189bを剥離した。しかし、その際に器体は大きく抉れてしまい、剥片剥離を行わずに放棄している。石材はホルンフェルスである。

190は石器ブロック21から出土した。厚みを持った剥片を素材として、その一端に交互剥離を行っている。まず、腹面側から数回の剥離を施し、さらに、その剥離面を打面として、腹面側にも一回の剥離を行っている。得られた剥片は、不定形な横長剥片である。石材はホルンフェルスである。

191は、77号礫群から出土した。厚みを持った剥片の縁辺に、連続した剥離を行っている。その際には、素材剥片の主要剥離面を、そのまま打面として利用している。また、素材剥片の一端を折断して、その折断面を打面とした剥離も行っている。石材はホルンフェルスである。

192は、石器ブロック18から出土した石核と剥片の接合資料である。拳大よりも大きい亜角礫を素材として、90°の打面転移を繰り返しながら剥片剥離を行っている。まず、礫の一端に剥離を施して、その剥離面を打面として複数回の剥離を行い192bを剥離した。その際の衝撃によって192cが剥落してしまっている。次に192bの剥離面を打面として、192dを剥離した。さらに、打点を左に平行移動させて、192eを剥離した。その後、一回の剥離を行い、石核192aが残された。剥離された剥片は幅広剥片であるが、形状に統一性は見られない。石材はホルンフェルスである。

193は石器ブロック19から出土した。幼児の拳大の楕円礫を素材として、その長軸方向へ剥離を施し、広い剥離面を作出した。さらに、その剥離面を打面として、小型の幅広剥片を剥離している。剥離は２回で終了しており、石核の大部分は未加工のままである。石材はホルンフェルスである。

敲石（第181図194　写真図版８）

194は、小型の棒状の礫を素材とした敲石である。石器ブロック18から出土した。末端部を中心に敲打痕が確認されており、衝撃痕と考えられる剥離面も存在する。上半部は折損している。石材は珪質シルト岩である。石質のためか、器体全体に光沢が確認できる。

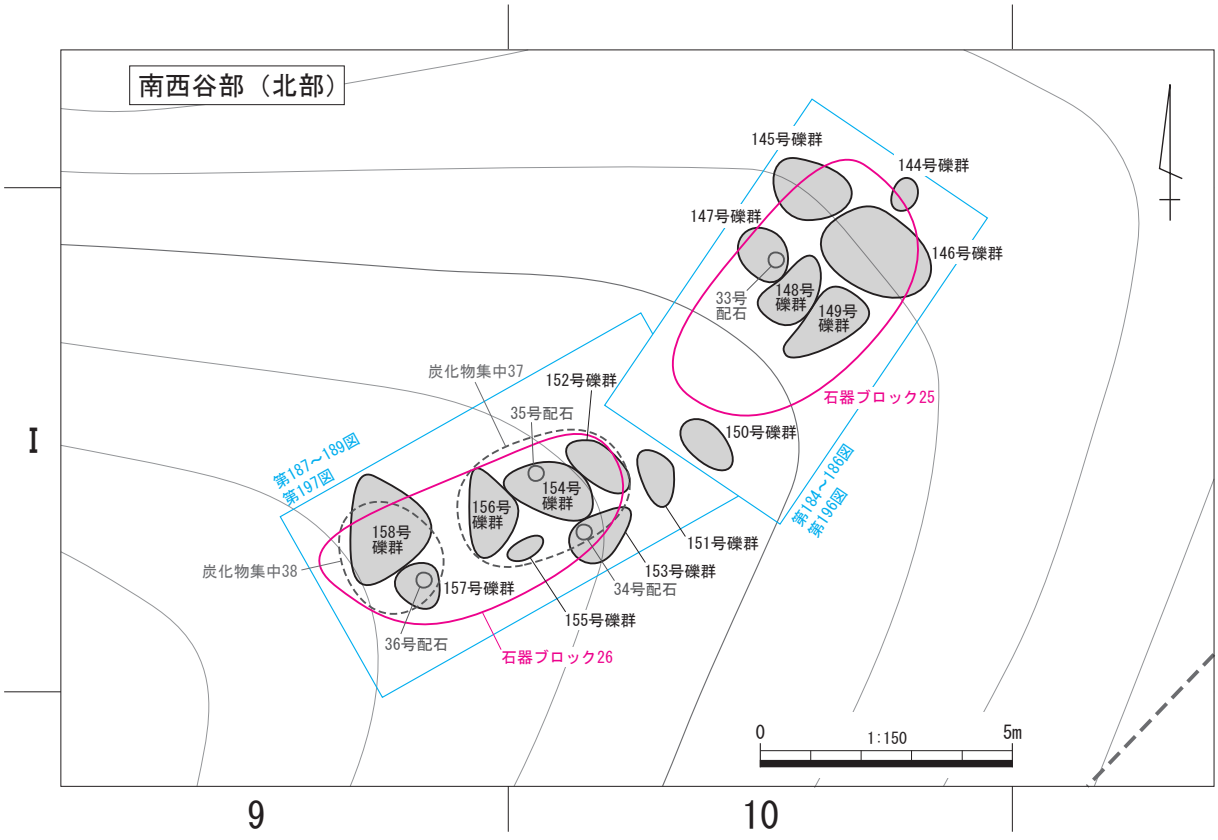
３　南西谷部

遺構は、石器ブロックが４ヶ所、礫群が40基、配石が13基、炭化物集中が１ヶ所検出された。遺物は、石器が1,013点、礫が1,576点出土した。

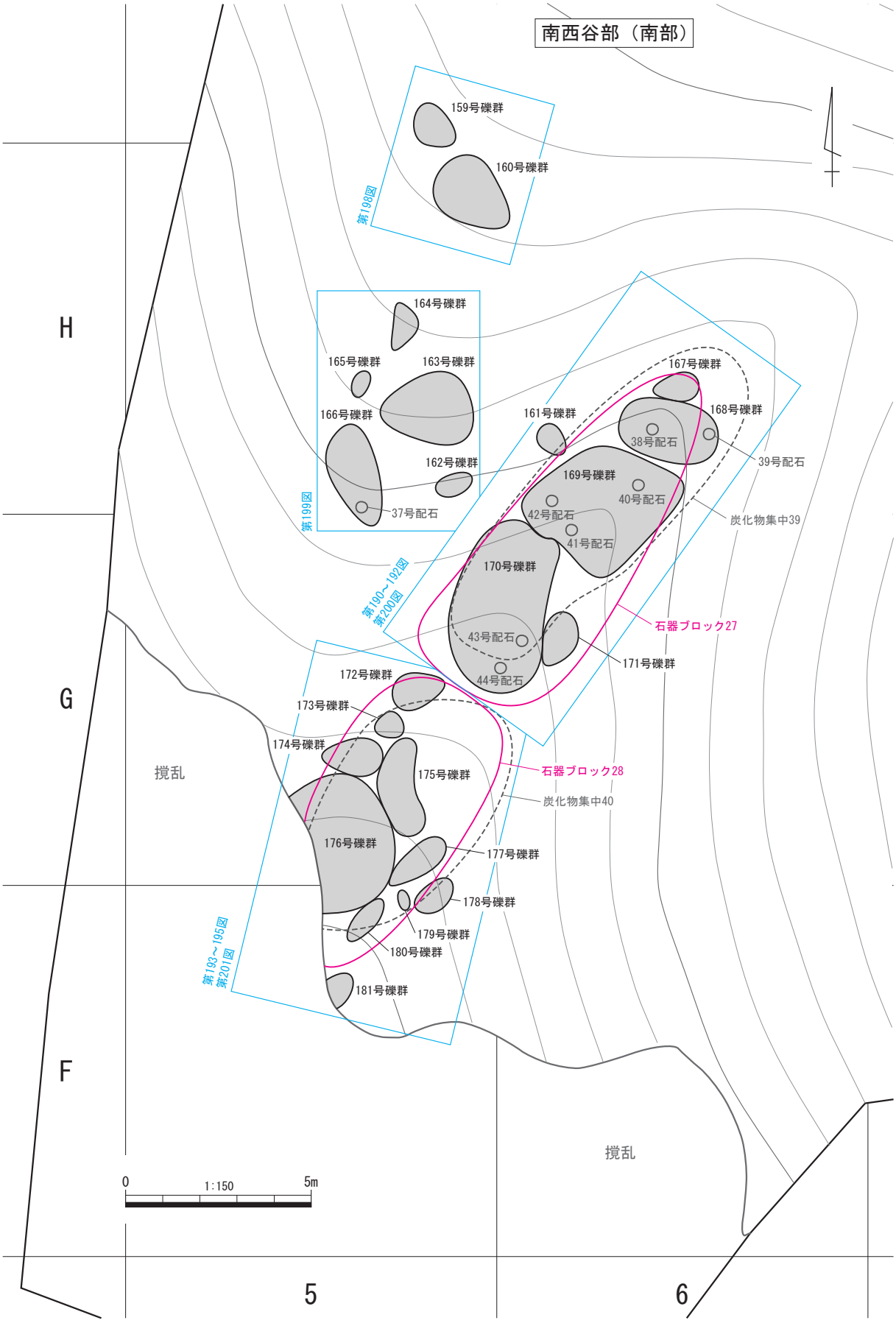
遺構、遺物の大半は下層の第Ⅰスコリア層、上層の休場層下位と重複して検出されており、明確な分離は困難であった。そのため、文化層が混在している可能性を認識しながら報告を行った。

第37表　第Ⅷ文化層　南西谷部　石器組成表

		ナイフ形石器	角錐状石器	ラウンド・スクレイパー	エンド・スクレイパー	サイド・スクレイパー	ノッチド・スクレイパー	石刃	微細な剥離痕を有する剥片	石核	剥片類	計
黒曜石	天城柏峠群	1							3	2	13	19
	箱根畑宿群	1		1						4	27	33
	蓼科冷山群	1	2	5	3	1	6		8	6	60	92
	和田小深沢群										1	1
	和田鷹山群	1		2								3
	和田土屋橋南群										1	1
	分析不可等								1	1	201	203
ホルンフェルス		9			11	7		13	1	21	573	635
珪質頁岩					1				1	1	19	22
頁岩											2	2
粗粒砂岩											1	1
輝石安山岩											1	1
計		13	2	8	15	8	6	13	14	35	899	1013



第182図　第Ⅷ文化層　南西谷部（北部）　遺構配置図



第183図　第Ⅷ文化層　南西谷部（南部）　遺構配置図

（１）遺構

ア　石器ブロック

石器ブロック25（第184～186図）

I～J－10グリッドから検出された。北東～南西方向4.8m、北西～南東方向２ｍの範囲に、48点の石器が分布している。休場層直下黒色帯～休場層下位にかけて、上下に多少の幅を持って分布しているが、出土のピークは休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。

石器ブロックと重複して、145～149号礫群、33号配石が検出された。また、中央付近には炭化物が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石器群は、ナイフ形石器１点、ラウンド・スクレイパー２点、サイド・スクレイパー３点、微細な剥離痕を有する剥片１点、石核１点、剥片類40点である。石材は、黒曜石10点（天城柏峠群２点、蓼科冷山群６点、分析不可等１点、未分析１点）、ホルンフェルス38点である。

全体の８割以上をホルンフェルスが占めており、石核から剥片剥離を行った12点の接合資料も確認されている。剥離されているのは、小型の幅広剥片である。一方、製品は大型の縦長剥片を素材としており、単品で持ち込まれたと推測される。また、黒曜石では、蓼科冷山群の微細な剥離痕を有する剥片が、南西方向へ6.5mの距離を隔てた石器ブロック26と接合した。石器ブロック26からは蓼科冷山群の剥片類が多数出土しており、そちらで製作された資料を本ブロックへ持ち込んだと推測される。

石器ブロック26（第187～189図）

I－９～10グリッドから検出された。北東～南西方向5.4m、北西～南東方向2.5mの範囲に119点の石器が分布しているが、集中域は北東側と南西側の２ヶ所に分かれている。休場層直下黒色帯～休場層下位にかけて、上下に多少の幅を持って分布しているが、出土のピークは休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。

石器ブロックと重複して、152～158号礫群、34～36号配石が検出された。また、炭化物集中37・38が、北東側と南西側に、それぞれ重複して分布している。しかし、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石器群は、ナイフ形石器１点、エンド・スクレイパー３点、石核５点、剥片類110点である。石材は黒曜石67点（蓼科冷山群20点、分析不可等16点、未分析31点）、ホルンフェルス52点である。

全体の６割弱を占める黒曜石は、蓼科冷山群以外の産地は確認できなかった。分析不可等、未分析の砕片も肉眼鑑定から蓼科冷山群であると推測され、全て同一産地の黒曜石であったと考えられる。小型の幅広剥片や砕片が多く確認され、剥片剥離を行った際のブランクだと推測される。この内剥片２点が、北東方向へ6.5mの距離を隔てた石器ブロック25と接合している。ホルンフェルスは、小型の石核が５点確認された。接合資料も確認されており、小型の幅広剥片を剥離している。

石器ブロック27（第190～192図）

G－５～６・H－６グリッドから検出された。北東～南西方向10m、北西～南東方向3.6mの範囲に、349点の石器が集中して分布している。上下に多少の幅を持って分布しているが、出土のピークは休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。

石器ブロックと重複して、167～171号礫群、38・40～44号配石、炭化物集中39が検出された。しかし、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石器群は、ナイフ形石器７点、角錐状石器２点、ラウンド・スクレイパー２点、エンド・スクレイパー３点、サイド・スクレイパー３点、ノッチド・スクレイパー２点、石刃５点、微細な剥離痕を有する剥

第38表　第Ⅷ文化層 石器ブロック25～28 石器組成表

石器ブロック25

		ナイフ形石器	ラウンド・スクレイパー	サイド・スクレイパー	微細な剥離痕を有する剥片	石核	剥片類	計
黒曜石	天城柏峠群	1					1	2
	蓼科冷山群		2		1		3	6
	分析不可等						2	2
ホルンフェルス				3		1	34	38
計		1	2	3	1	1	40	48

石器ブロック26

		ナイフ形石器	エンド・スクレイパー	石核	剥片類	計
黒曜石	蓼科冷山群	1	1	1	17	20
	分析不可等				47	47
ホルンフェルス			2	4	46	52
計		1	3	5	110	119

石器ブロック27

		ナイフ形石器	角錐状石器	ラウンド・スクレイパー	エンド・スクレイパー	サイド・スクレイパー	ノッチド・スクレイパー	石刃	微細な剥離痕を有する剥片	石核	剥片類	計
黒曜石	箱根畑宿群									1	17	18
	蓼科冷山群		2	2	2		2		4	1	16	29
	和田小深沢群										1	1
	分析不可等										45	45
ホルンフェルス		7				3		5	1	9	228	253
珪質頁岩					1							1
頁岩											2	2
計		7	2	2	3	3	2	5	5	11	309	349

石器ブロック28

		ナイフ形石器	ラウンド・スクレイパー	エンド・スクレイパー	ノッチド・スクレイパー	石刃	微細な剥離痕を有する剥片	石核	剥片類	計
黒曜石	天城柏峠群						1	2	11	14
	箱根畑宿群	1	1					3	9	14
	蓼科冷山群		1		4		3	4	22	34
	和田鷹山群		2							2
	和田土屋橋南群								1	1
	分析不可等						1		106	107
ホルンフェルス		1		8		7		6	249	271
珪質頁岩							1	1	19	21
粗粒砂岩									1	1
計		2	4	8	4	7	6	16	418	465

片５点、石核11点、剥片類309点である。石材は黒曜石93点（箱根畑宿群18点、蓼科冷山群29点、和田小深沢群１点、分析不可等２点、未分析43点）、ホルンフェルス253点、珪質頁岩１点、頁岩２点である。

全体の７割をホルンフェルスが占める。石核と剥片の接合資料も５組確認されており、ブロック内で剥片剥離を行っていたことが明らかである。また、南西方向へ5.7mの距離を隔てた石器ブロック28との接合関係も認められている（241）。一方、大型の剥片、石刃も多く出土しており、石核との接合資料も確認されたが、大半は単独で出土している。これらの大型の剥片は、製品の素材には用いられていないが、石核の素材としては用いられており、剥片との接合資料も確認されている（256）。また、ブロック内南東部に位置する171号礫群の東側からは、ホルンフェルス製の剥片が、一箇所に密集して13点出土している（263～265）。これらは大型の剥片に限定されていることから、キャッシュ（保管場所）として意図的に残された可能性も考えられる。

黒曜石の主体となっている産地は、蓼科冷山群と箱根畑宿群であった。未分析の砕片も、肉眼鑑定から前述の２群であると推測される。蓼科冷山群は、角錐状石器やスクレイパー、微細な剥離痕を有する剥片が、単品で出土している。箱根畑宿群は、小型の剥片が大半であった。また、南西方向へ5.5mの距離を隔てた石器ブロック28と接合関係が認められており（248）、同時期性が示唆される。

石器ブロック28（第193～195図）

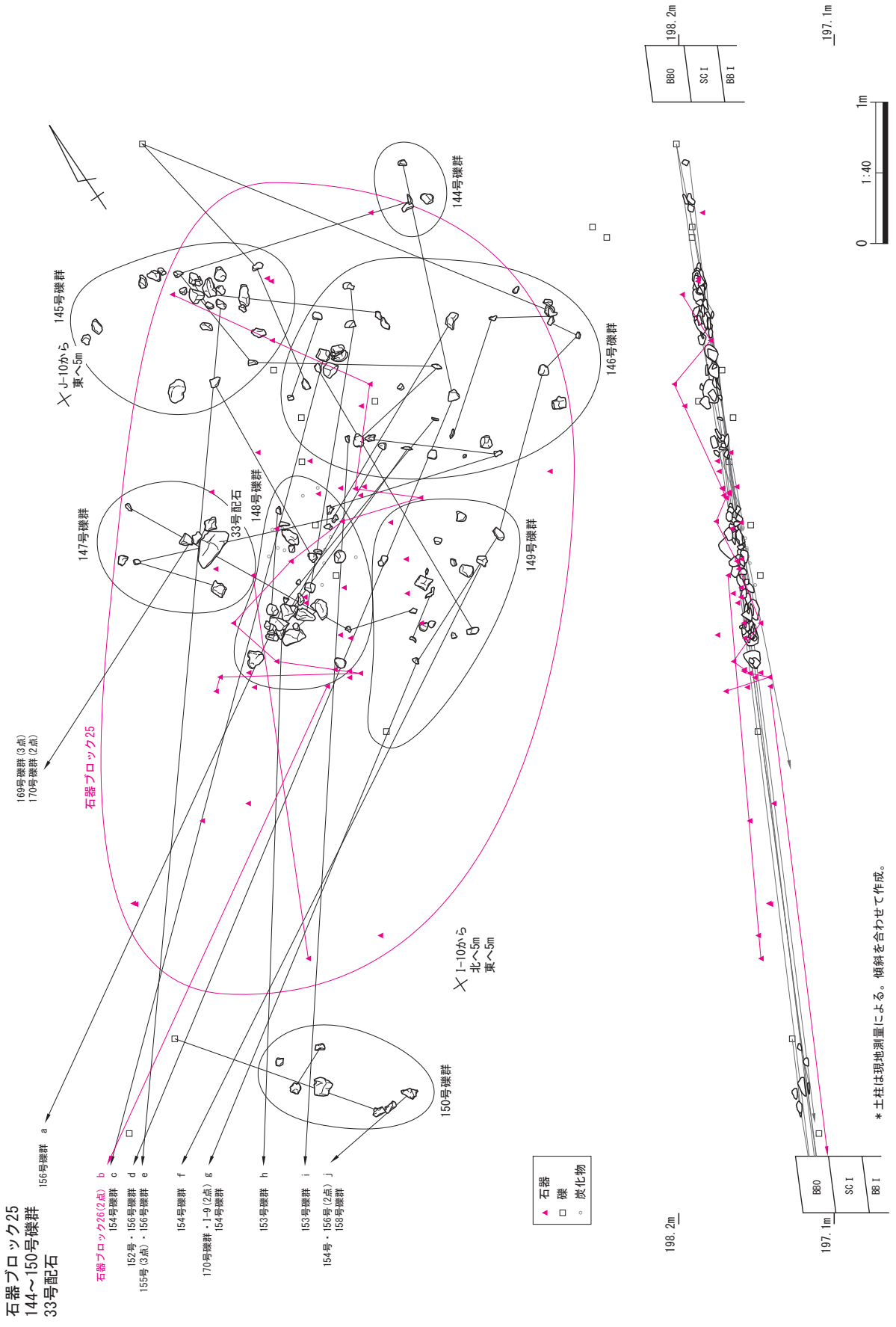
F～G－５グリッドから検出された。北東～南西方向８m、北西～南東方向4.1mの範囲に、465点の石器が集中して分布している。本文化層の中で最も範囲が広く、構成される石器の数も多い。休場層直下黒色帯～休場層下位にかけて、上下に多少の幅を持って分布しているが、出土のピークは休場層直下黒色帯の下部である。同一地点で、第Ⅶ文化層からは石器ブロック16・17が重複して検出されており、一部については混在している可能性も考えられる。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。

石器ブロックと重複して、172～177・179・180号礫群、炭化物集中40が検出された。しかし、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

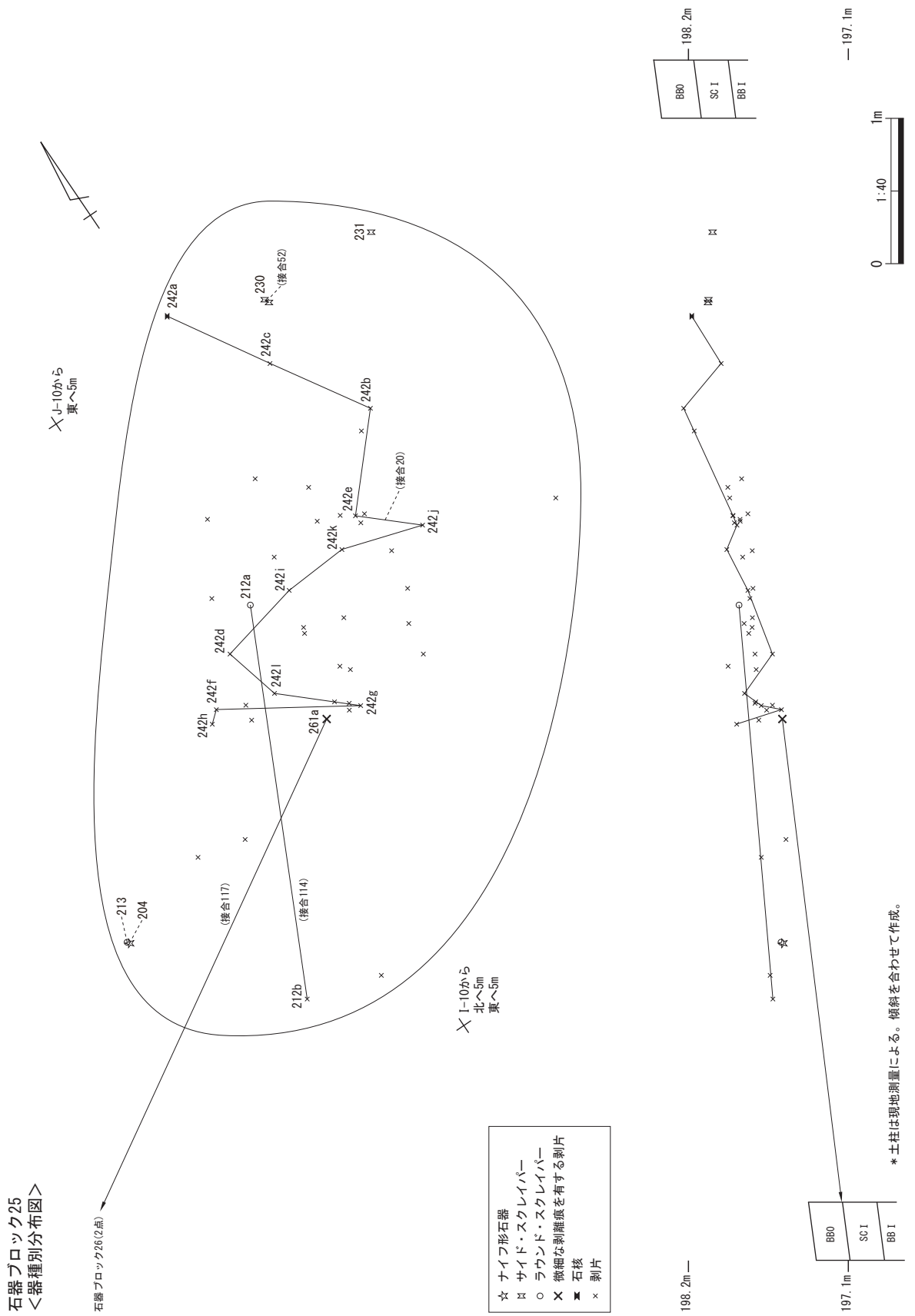
石器群は、ナイフ形石器２点、ラウンド・スクレイパー４点、エンド・スクレイパー８点、ノッチド・スクレイパー４点、石刃７点、微細な剥離痕を有する剥片６点、石核16点、剥片類418点である。石材は、黒曜石172点（天城柏峠群14点、箱根畑宿群14点、蓼科冷山群34点、和田鷹山群２点、和田土屋橋南群１点、分析不可等１点、未分析106点）、ホルンフェルス271点、珪質頁岩21点、粗粒砂岩１点である。

全体の６割弱をホルンフェルスが占める。石核と剥片、剥片同士の接合資料も11組確認されており、ブロック内で剥片剥離を行っていたことが明らかである。また、北東方向へ5.7mの距離を隔てた石器ブロック27との接合関係も認められており、この資料は、石核と石刃と剥片との17点の接合資料である（241）。本ブロックでは、石器ブロック27と比較して、小型の幅広剥片が多く確認されており、大型の剥片はほとんど確認できなかった。

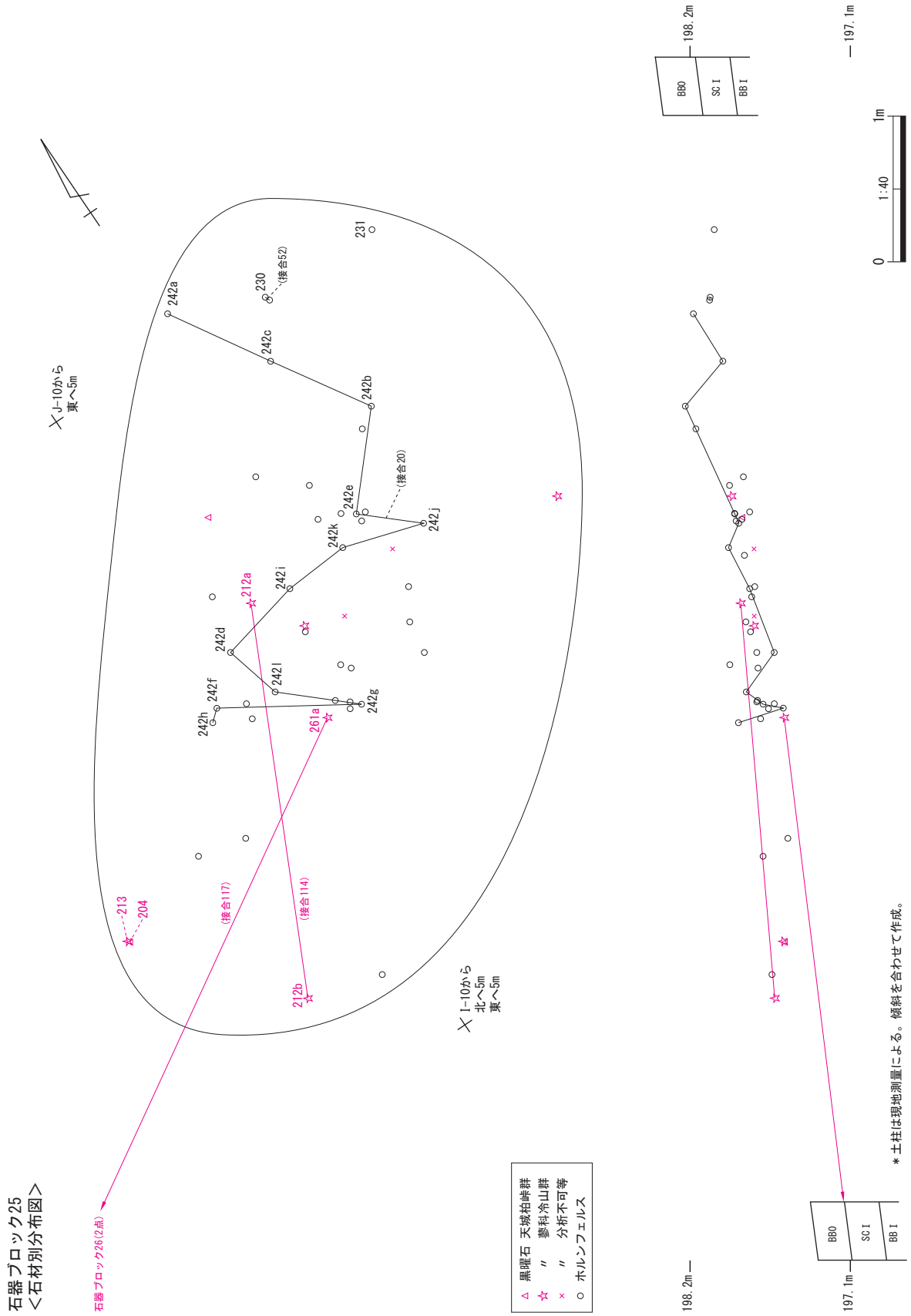
黒曜石は、直下で検出された石器ブロック16・17（第Ⅶ文化層）とは異なり、石材ごと、器種ごとの分布域の偏りは確認できなかった。黒曜石製石器は、蓼科冷山群の資料を中心に、ラウンド・スクレイパーやノッチド・スクレイパーが確認された。箱根畑宿群の資料は、ブロック内での剥片剥離を示す接合資料が３組確認されており、その内１組は、北東方向へ5.5mの距離を隔てた石器ブロック27と接合関係が確認されている（248）。



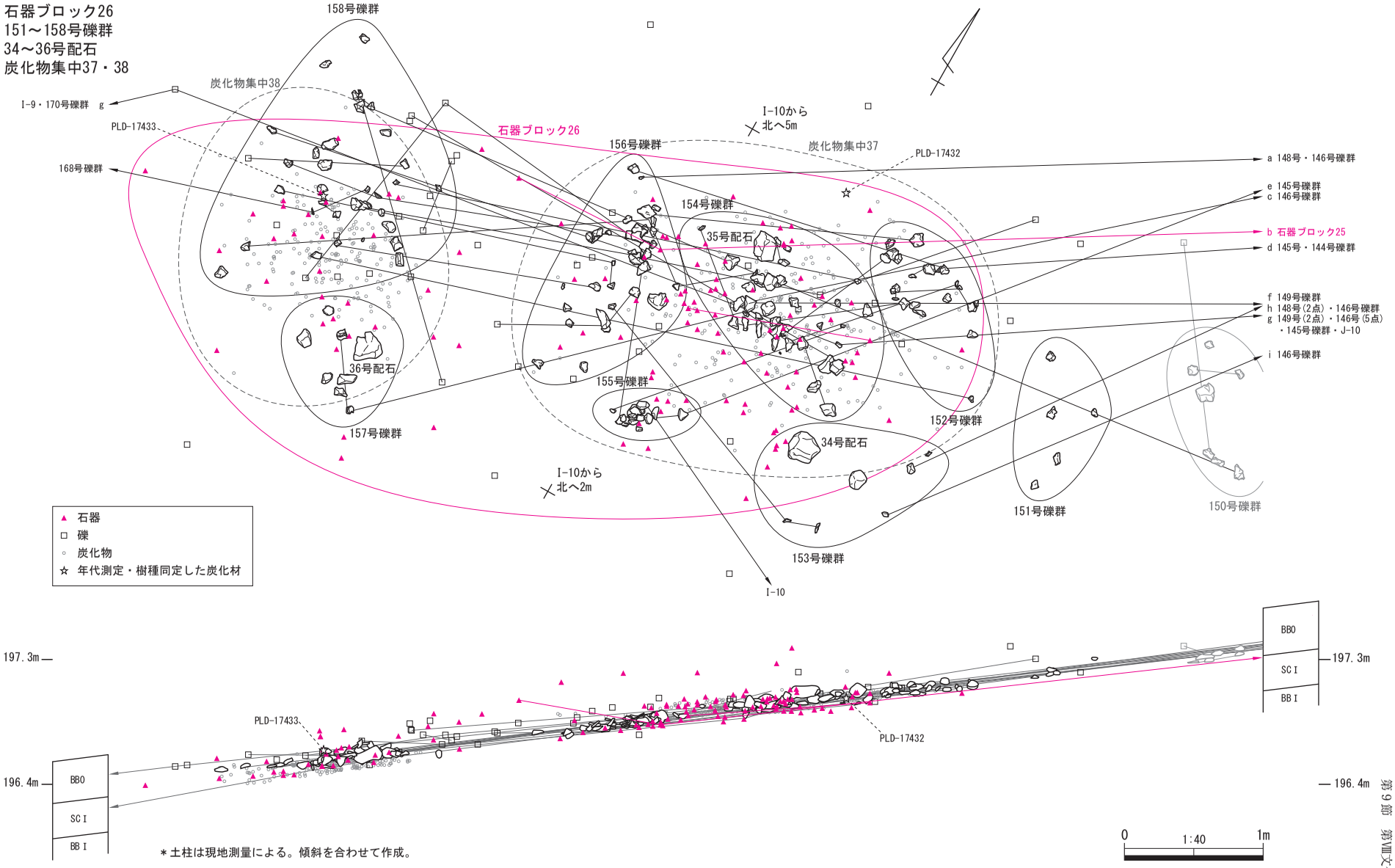
第184図　第Ⅷ文化層　南西谷部 石器ブロック25、144～150号礫群、33号配石 遺構図



第185図　第Ⅷ文化層　南西谷部 石器ブロック25 遺構図（１）

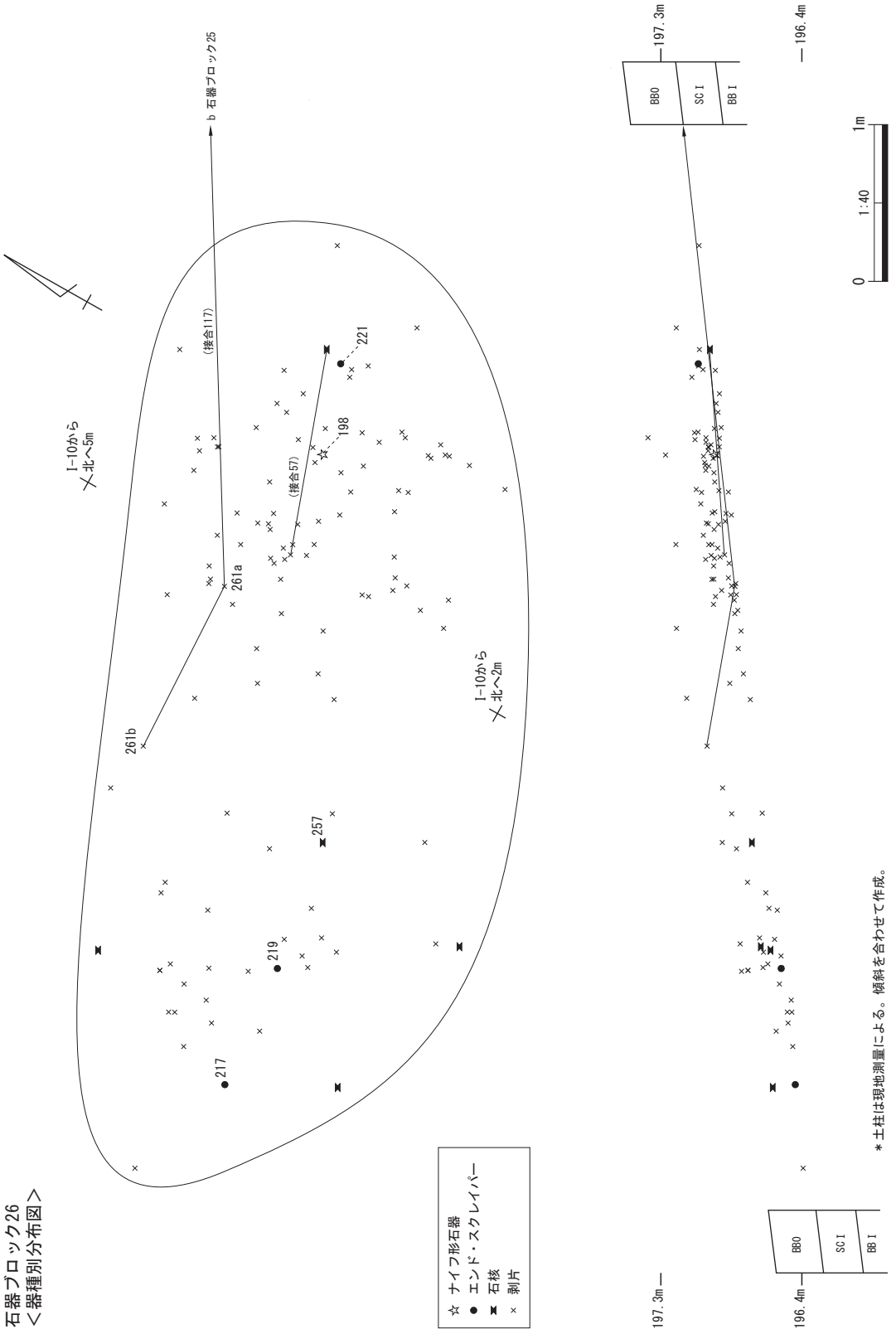


第186図　第Ⅷ文化層　南西谷部 石器ブロック25 遺構図（２）

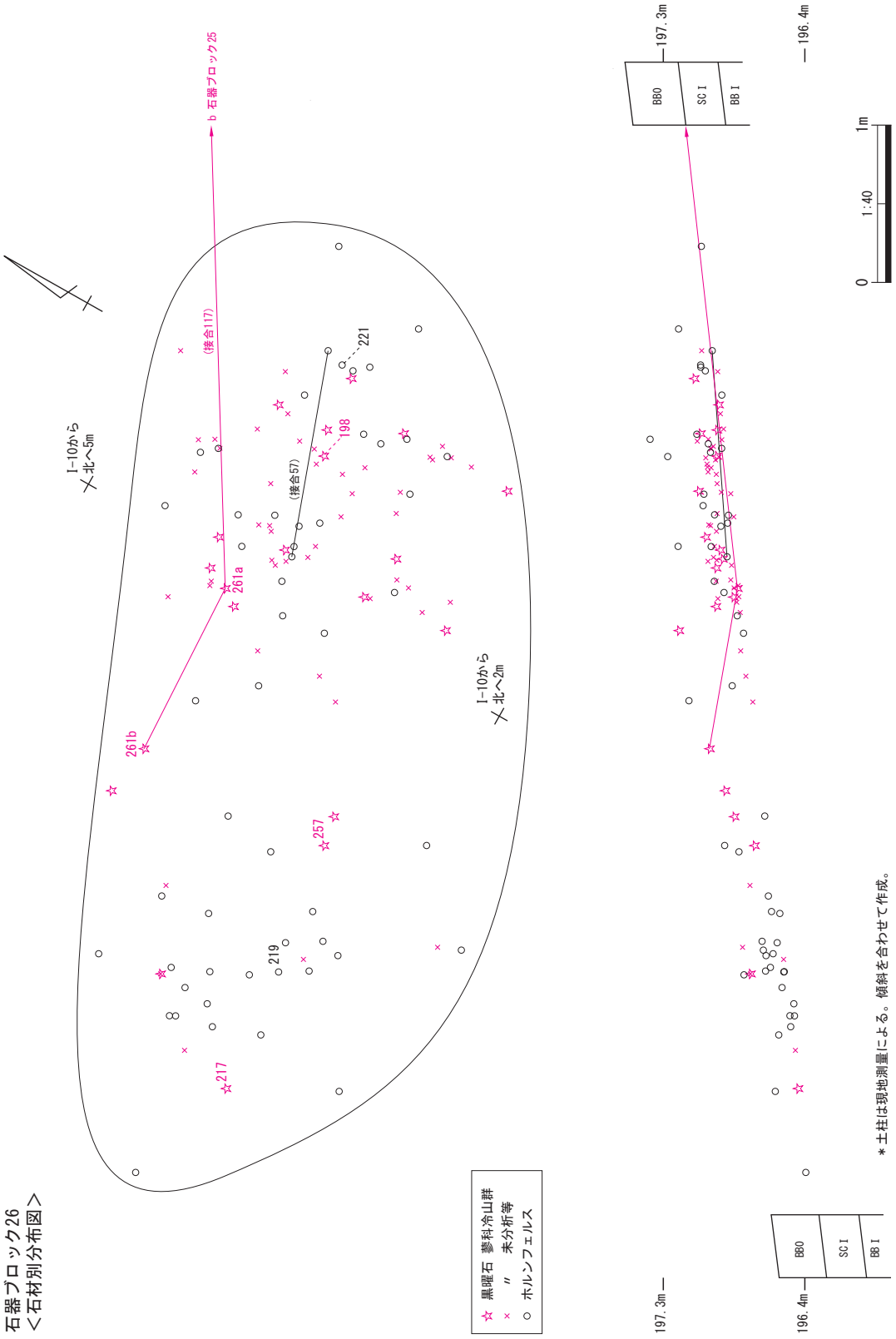


＊土柱は現地測量による。傾斜を合わせて作成。

第187図　第Ⅷ文化層　南西谷部 石器ブロック26、151～158号礫群、34～36号配石、炭化物集中37・38 遺構図

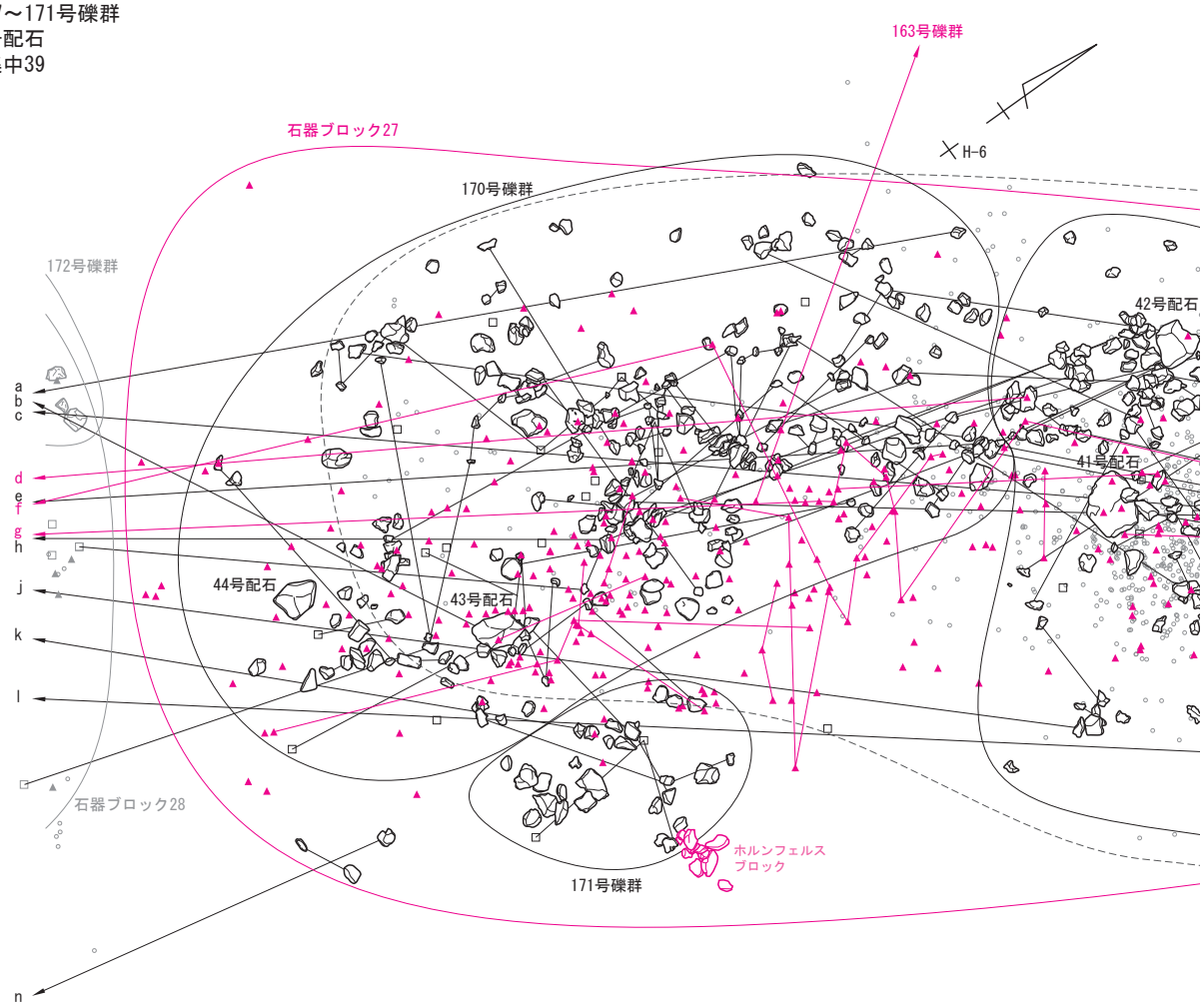


第188図　第Ⅷ文化層　南西谷部 石器ブロック26 遺構図（１）



第189図　第Ⅷ文化層　南西谷部 石器ブロック26 遺構図（２）

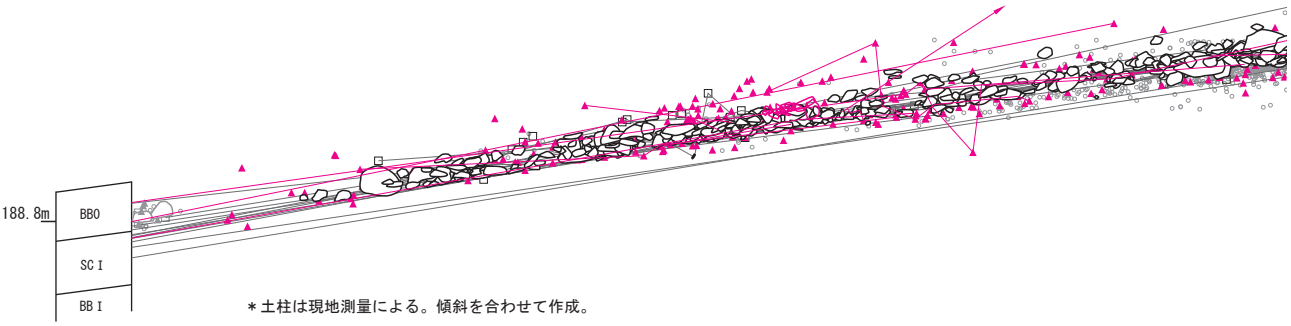
石器ブロック27
161・167～171号礫群
38～44号配石
炭化物集中39



▲ 石器
□ 礫
◦ 炭化物

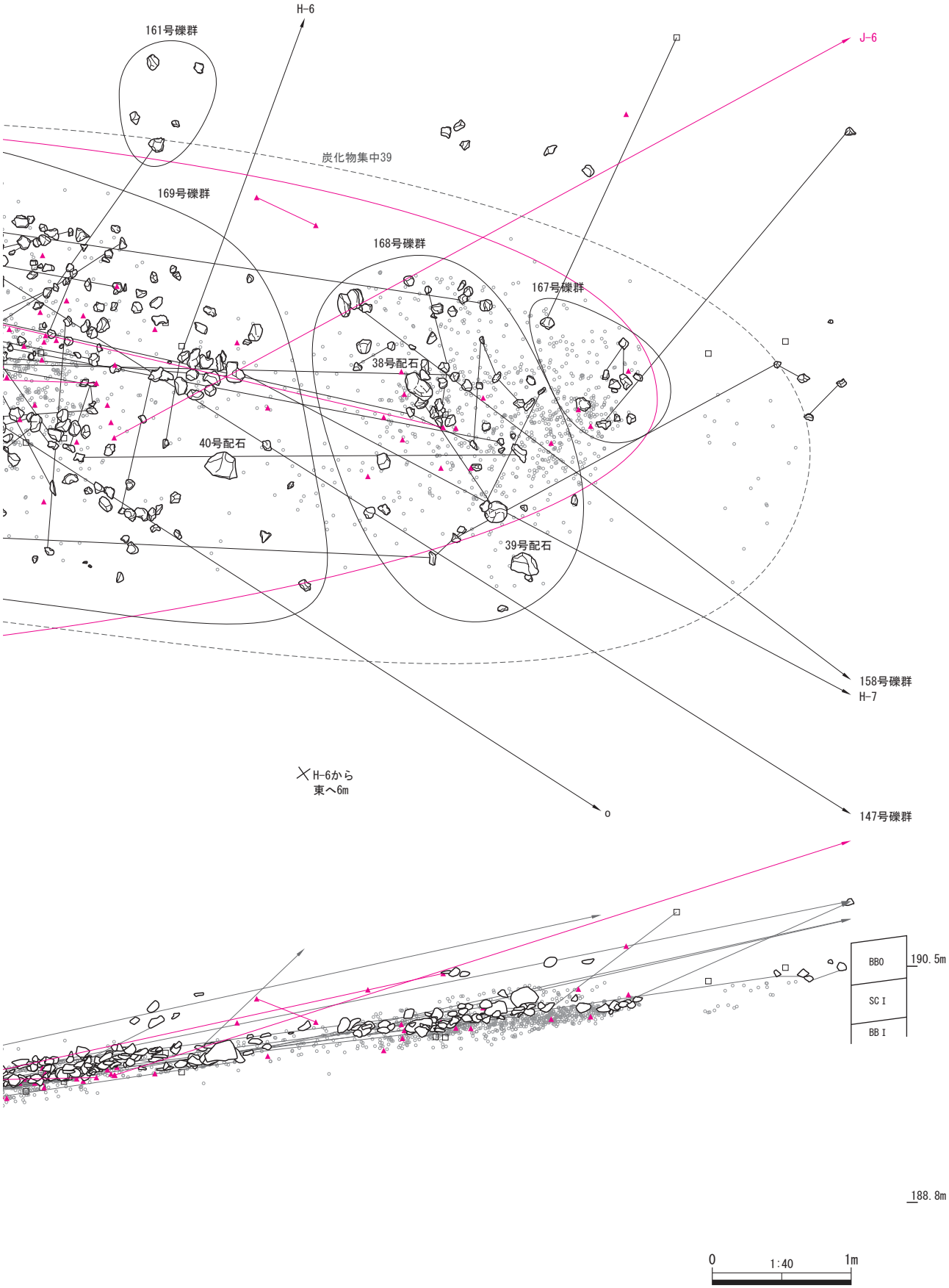
＜接合先＞

a	175号礫群	k	175号礫群
b	172号礫群	l	176号礫群(2点)
c	174号礫群(2点)	n	G-6
d	石器ブロック28(3点)	o	I-9(2点)
e	176号礫群		154号礫群(1点)
f	石器ブロック28(15点)		149号礫群(2点)
g	石器ブロック28(2点)		146号礫群(5点)
h	175号礫群(2点)		145号礫群(1点)
j	177・175号礫群		J-10(1点)

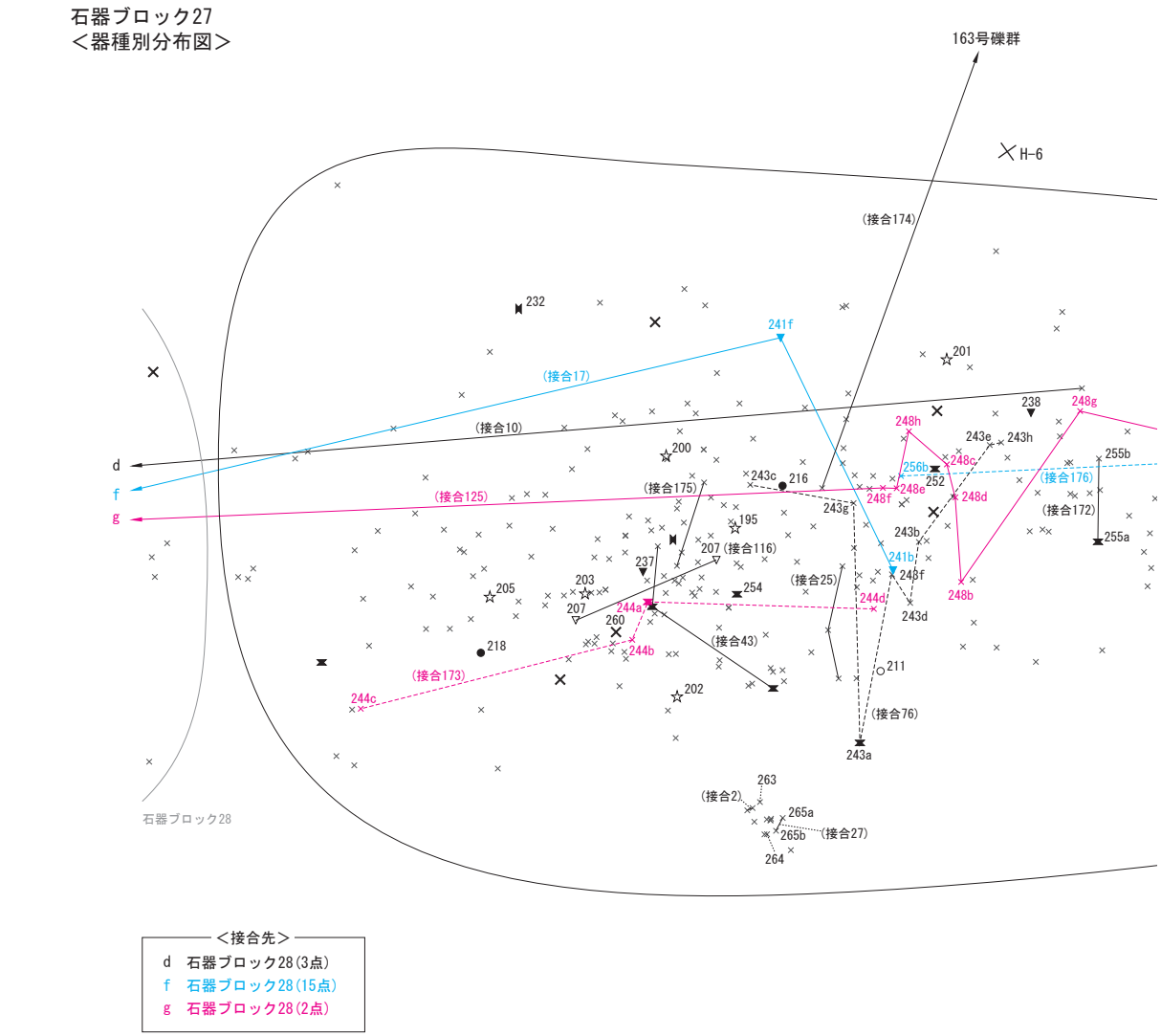


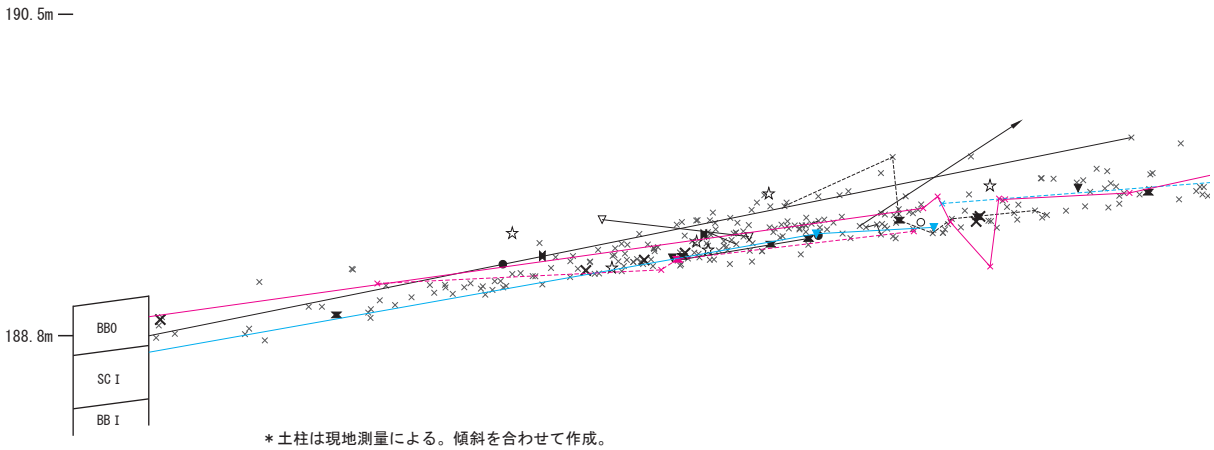
＊土柱は現地測量による。傾斜を合わせて作成。

第190図　第Ⅷ文化層　南西谷部 石器ブロック27、161・167～171号礫群、38～44号配石、炭化物集中39


H-6
161号礫群
J-6
炭化物集中39
169号礫群
168号礫群
167号礫群
38号配石
40号配石
39号配石
158号礫群
H-7
H-6から
東へ6m
o
147号礫群
BBO
SC I
BB I
190.5m
188.8m
0
1:40
1m

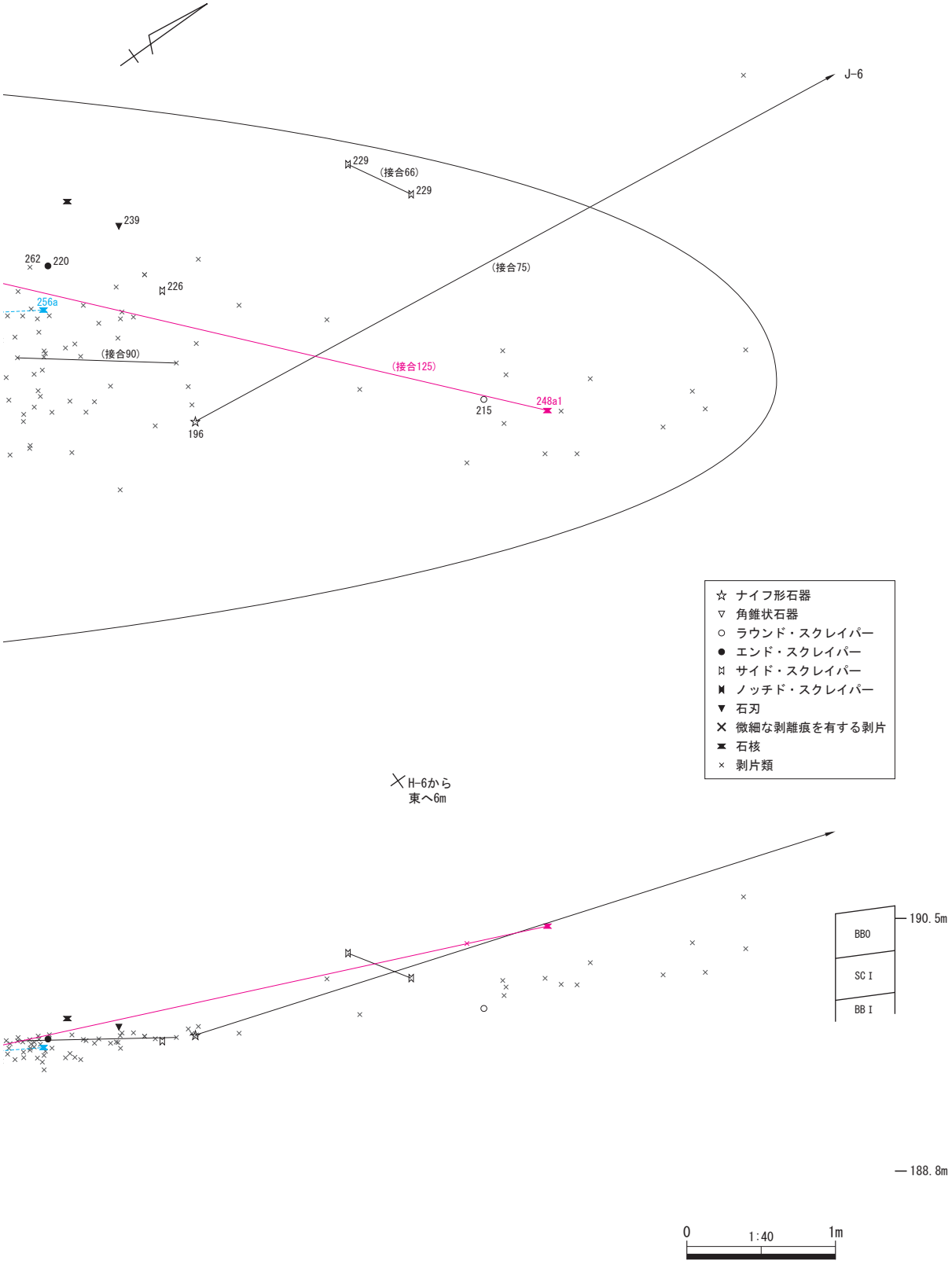
遺構図





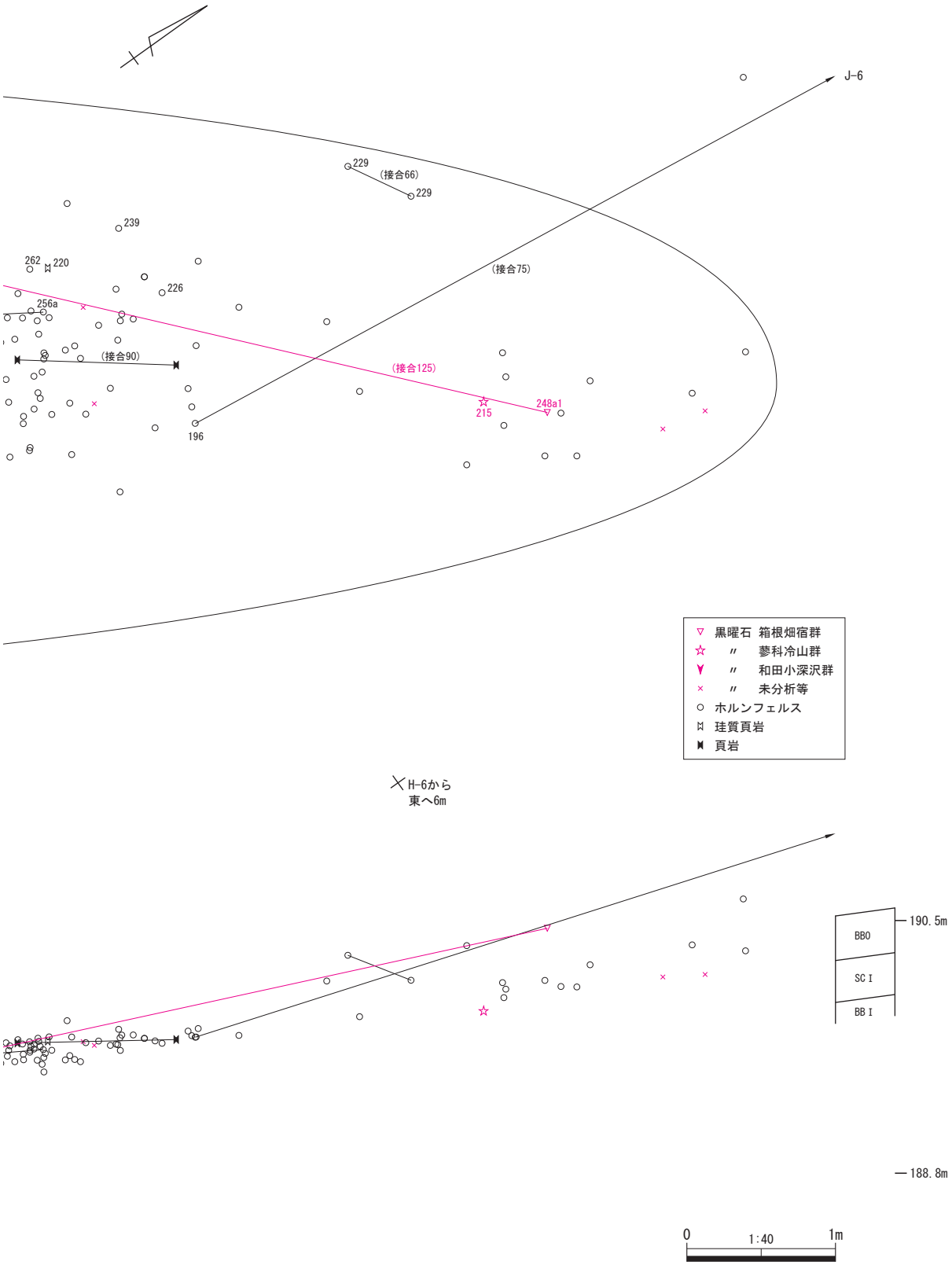
＊土柱は現地測量による。傾斜を合わせて作成。

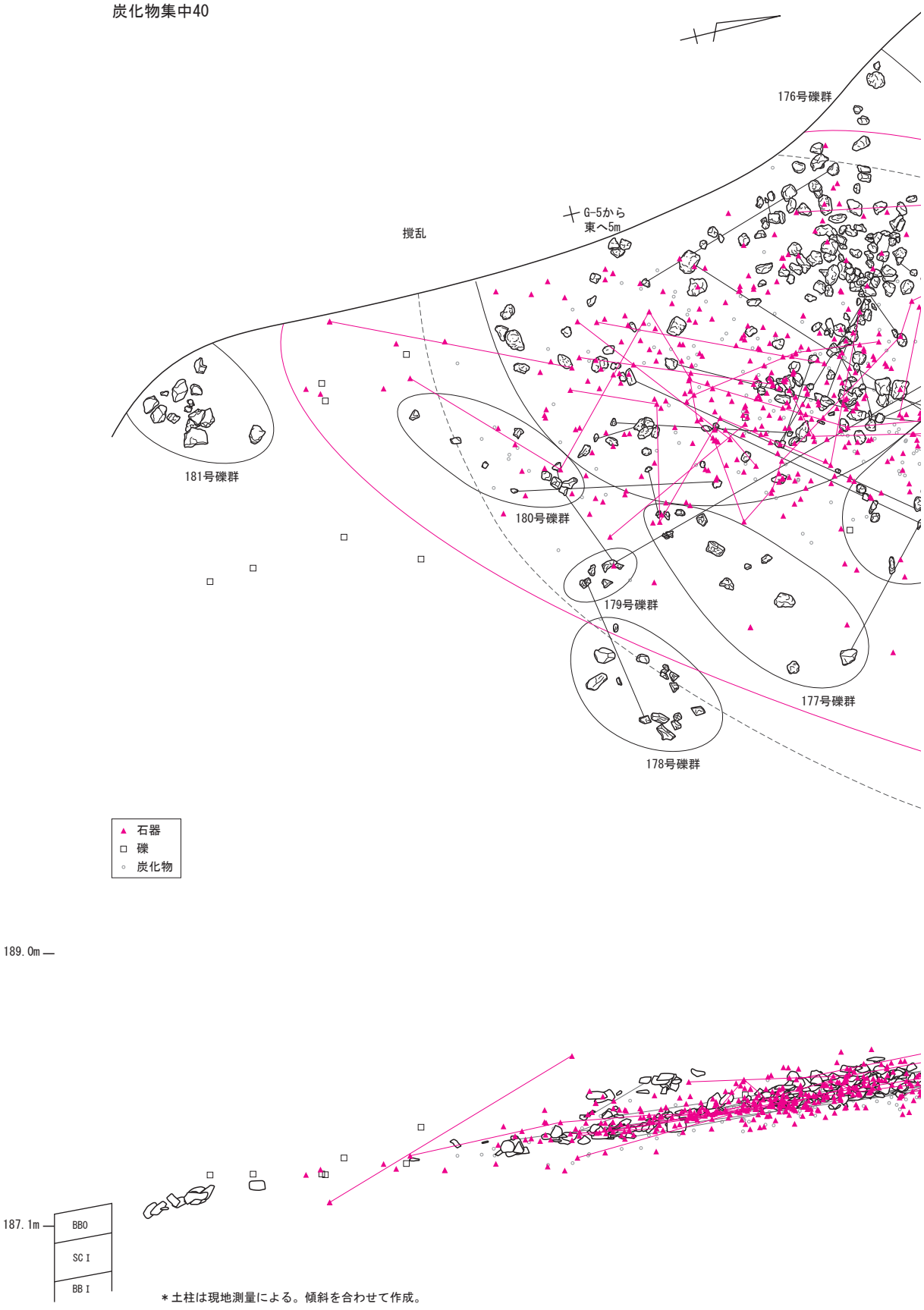
第191図　第Ⅷ文化層　南西谷部 石器ブロック27 遺構図（１）


J-6
229
(接合66)
229
239
262
220
226
256a
(接合90)
(接合75)
(接合125)
248a1
215
196
☆ ナイフ形石器
▽ 角錐状石器
○ ラウンド・スクレイパー
● エンド・スクレイパー
⌑ サイド・スクレイパー
⋈ ノッチド・スクレイパー
▼ 石刃
✕ 微細な剥離痕を有する剥片
⧓ 石核
× 剥片類
H-6から
東へ6m
BBO
SC I
BB I
190.5m
188.8m
0
1:40
1m

＊土柱は現地測量による。傾斜を合わせて作成。

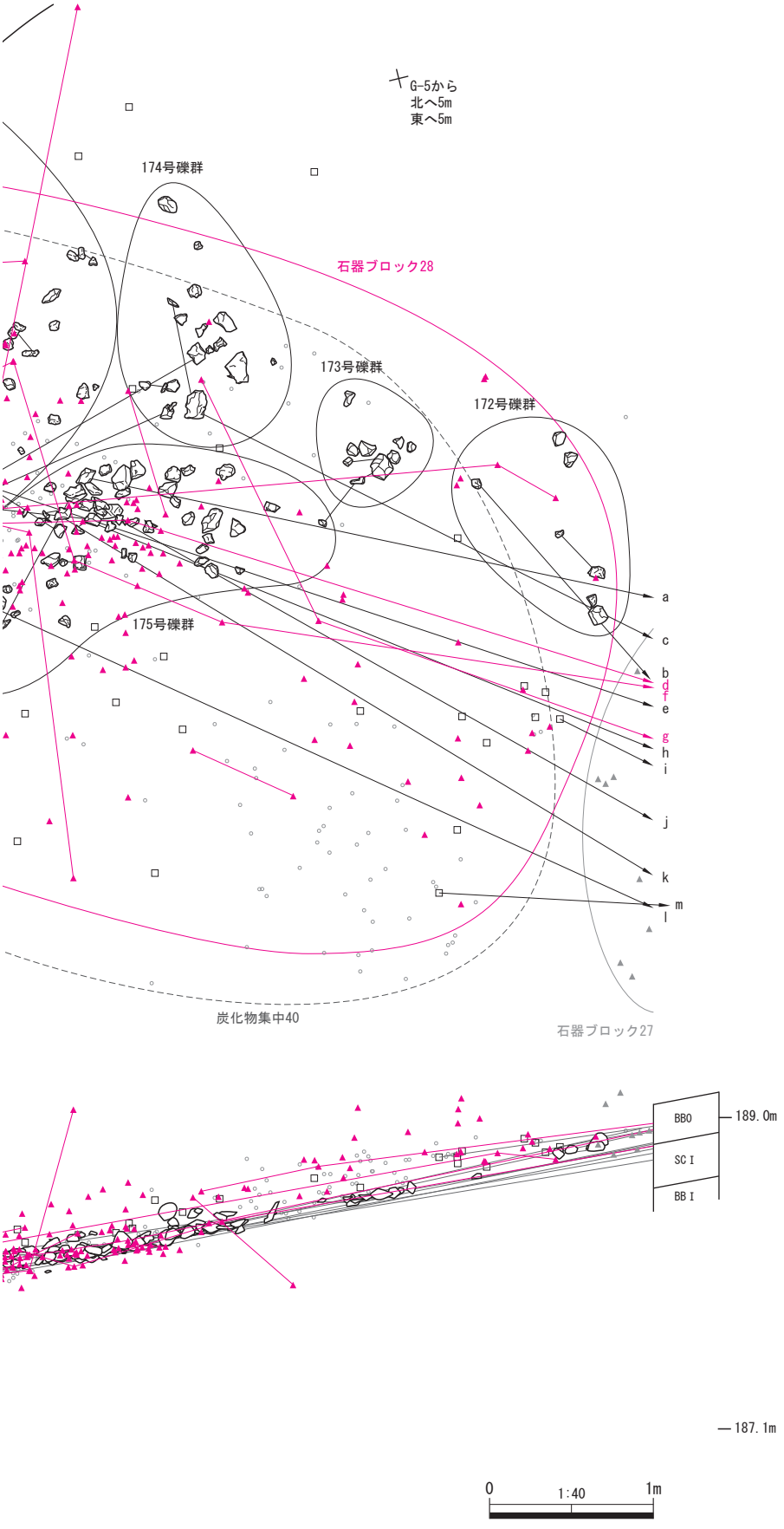
第192図　第Ⅷ文化層　南西谷部 石器ブロック27 遺構図（２）


J-6
229
(接合66)
229
239
262
220
226
256a
(接合75)
(接合90)
(接合125)
215
248a1
196
黒曜石　箱根畑宿群
〃　蓼科冷山群
〃　和田小深沢群
〃　未分析等
ホルンフェルス
珪質頁岩
頁岩
H-6から
東へ6m
190.5m
BBO
SC I
BB I
188.8m
0
1:40
1m



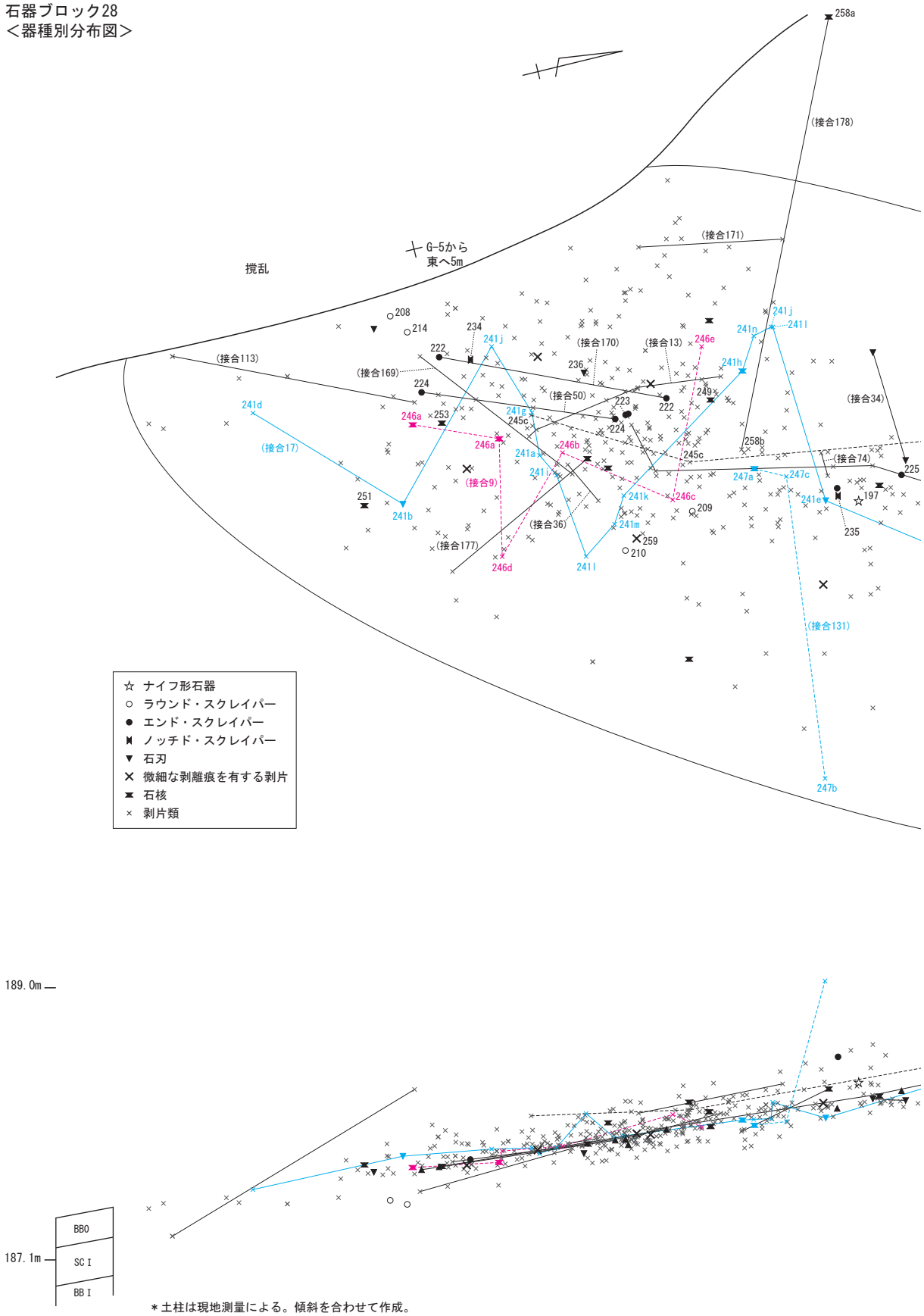
＊土柱は現地測量による。傾斜を合わせて作成。

第193図　第Ⅷ文化層　南西谷部 石器ブロック28、172～181号礫群、炭化物集中40 遺構図

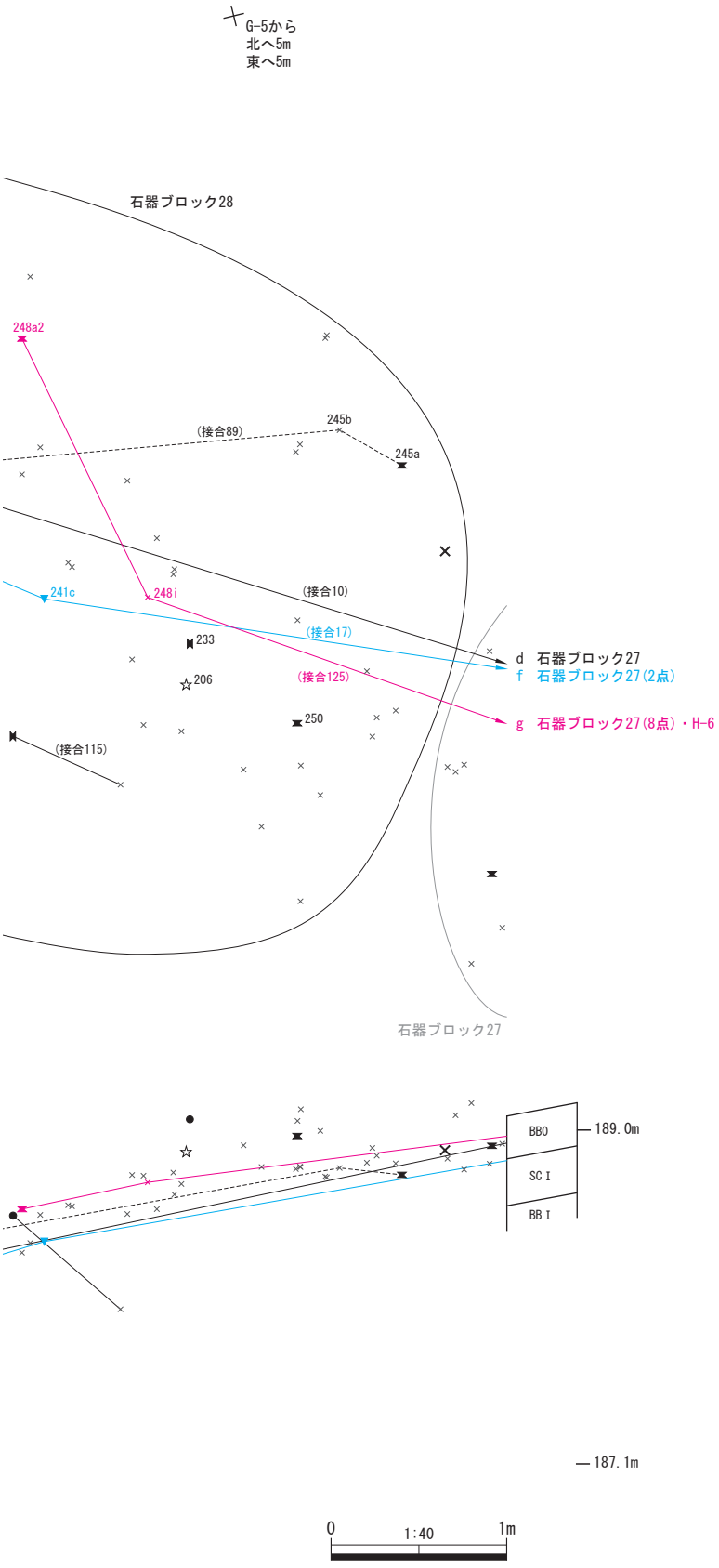


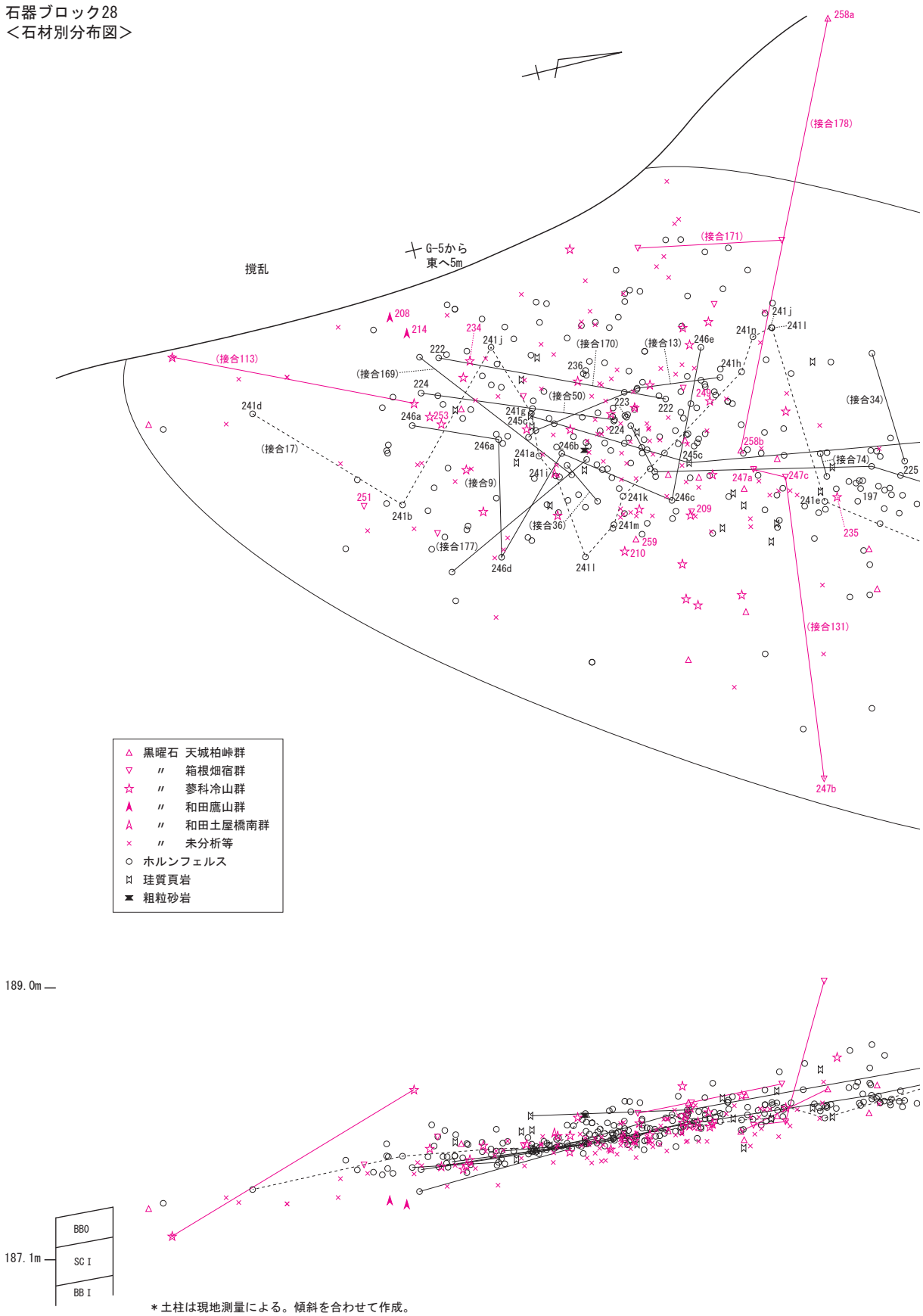
＜接合先＞

a	170号礫群
c	169号礫群
b	170号(2点)・171号礫群
d	石器ブロック27
f	石器ブロック27(2点)
e	170号・169号礫群
g	石器ブロック27(8点)・H-6
h	170号礫群(4点)
i	170号・169号礫群
j	169号礫群
k	171号礫群(2点)
m	170号礫群
l	168号礫群(2点)



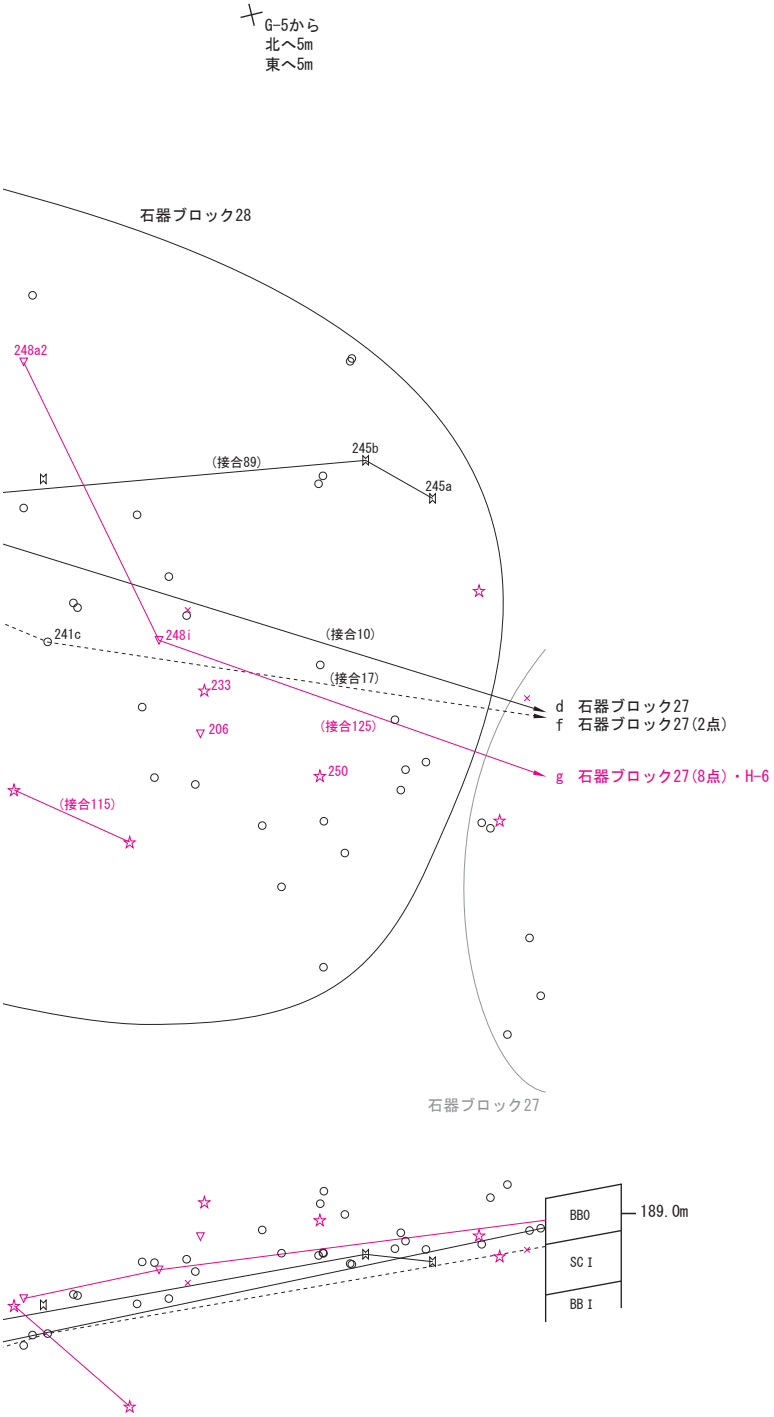
第194図　第Ⅷ文化層　南西谷部 石器ブロック28 遺構図（１）


G-5から
北へ5m
東へ5m
石器ブロック28
248a2
(接合89)
245b
245a
241c
248i
(接合10)
(接合17)
233
206
(接合125)
250
(接合115)
d　石器ブロック27
f　石器ブロック27(2点)
g　石器ブロック27(8点)・H-6
石器ブロック27
BBO
SC I
BB I
189.0m
187.1m
0
1:40
1m



＊土柱は現地測量による。傾斜を合わせて作成。

第195図　第Ⅷ文化層　南西谷部 石器ブロック28 遺構図（２）


G-5から
北へ5m
東へ5m
石器ブロック28
248a2
(接合89)
245b
245a
241c
248i
(接合10)
(接合17)
233
206
(接合125)
250
(接合115)
d　石器ブロック27
f　石器ブロック27(2点)
g　石器ブロック27(8点)・H-6
石器ブロック27
BBO
SC I
BB I
189.0m
187.1m
0
1:40
1m

イ　礫群・配石

144号礫群（第196図）

I～J－10グリッドから検出された。南北方向0.3m、東西方向0.2mの範囲に４点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。分布範囲の土壌に、赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩２点、玄武岩２点である。この内２点の礫に接合関係が確認された。いずれも礫群間の接合であり、近隣の145・146・148号礫群と、南西方向へ約８～10mの距離を隔てた152・156号との接合が確認された。

145号礫群（第196図）

I～J－10グリッドから検出された。北西～南東方向1.2m、北東～南西方向0.9mの範囲に、24点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。石器ブロック25と重複して検出された。分布範囲の土壌に、赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩７点、玄武岩16点、多孔質玄武岩１点である。この内13点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は19点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、近隣の144・146・148・149号礫群、南西方向へ約８～９ｍの距離を隔てた154・155・156号礫群、更に、同方向へ約51mの距離を隔てた170号礫群、また、遺構外では、北方向へ1.2mの距離を隔てたJ－10グリッドの礫、南西方向へ約13mの距離を隔てたI－９グリッドの礫との接合が確認された。構成礫の大半は400g以下の小型の礫だが、1,800gの礫が１点出土している。

146号礫群（第196図）

I－10グリッドから検出された。北西～南東方向2.2m、北東～南西方向1.5mの範囲に、37点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。石器ブロック25と重複して検出された。分布範囲の土壌に、赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩９点、玄武岩26点、多孔質玄武岩２点である。この内25点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は26点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、近隣の144・145・147・148・149号礫群、南西方向へ約７～９ｍの距離を隔てた152・153・154・156号礫群、更に、同方向へ約50mの距離を隔てた170号礫群、また、遺構外では、北方向へ約２ｍの距離を隔てたJ－10グリッドの礫、南西方向へ約12mの距離を隔てたI－９グリッドの礫との接合が確認された。

147号礫群・33号配石（第196図）

I－10グリッドから検出された。南北方向0.8m、東西方向0.7mの範囲に７点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。石器ブロック25と重複して検出された。分布範囲の土壌に、赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩３点、玄武岩４点である。この内６点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は５点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、近隣の146・148・149号礫群、更に、南西方向へ約48～51mの距離を隔てた169・170号礫群との接合が確認された。

また、礫群の南東側に6,300gを超える礫が検出され、33号配石と設定した。石材は玄武岩である。

第39表　第Ⅷ文化層 南西谷部 礫群一覧表

検出層位は全て休場層直下黒色帯下部である。

礫群番号	グリッド	構成礫数	接合礫数	接合後個体数	石材					重複する遺構番号			重複する遺物		赤化率%	赤化状態				
					輝石安山岩	多孔質安山岩	玄武岩	多孔質玄武岩	その他	石器ブロック	配石	炭化物集中	石器（点数）	炭化物		A	B	C	D	E
144号	I～J-10	4	2	4	2		2								100	1	2	1		
145号	I～J-10	24	13	19	7		16	1		25					100	7	17			
146号	I-10	37	25	26	9		26	2		25					100	6	24	7		
147号	I-10	7	6	5	3		4			25	33				100		2	5		
148号	I-10	32	18	25	7	1	24			25				○	100	4	14	14		
149号	I-10	17	9	14	12		3	2		25					100	1	10	6		
150号	I-10	7	4	6	4		3								100	2	3	2		
151号	I-10	5	—	5	1		4								100	1	4			
152号	I-10	23	15	18	13		10			26		37			100	4	17	2		
153号	I-10	6	4	5	4		2			26	34				100		6			
154号	I-10	40	22	32	19	1	19	1		26	35	37			100	3	28	9		
155号	I-10	15	8	11	7		6	2		26		37			100		11	4		
156号	I-9～10	37	23	29	13		24			26		37			100	4	31	2		
157号	I-9	8	2	7	5		3			26	36	38			100	1	3	4		
158号	I-9	40	18	36	6	1	28	5		26		38			97	7	17	15		1
159号	I-5	4	—	4	1		2	1						○	100	1	2	1		
160号	H-5～6	9	—	9	2		1	6					1	○	100	3	6			
161号	H-6	5	1	5	4	1									100	2	3			
162号	H-5	4	—	4	3		1						1		100	1	3			
163号	H-5	27	9	22	1	3	10	13					8		100	5	19	3		
164号	H-5	6	—	6	1		3	2					2	○	100	3	3			
165号	H-5	5	2	4	1	2		2							100		4	1		
166号	G～H-5	14	2	13	5	2	1	6			37			○	100	2	9	3		
167号	H-6	12	7	9	7	1	3	1		27		39			100	1	10	1		
168号	H-6	61	27	47	20	2	38	1		27	38・39	39			100	11	28	22		
169号	G～H-6	238	74	198	117	12	78	30	1	27	40～42	39			100	54	165	18	1	
170号	G-5～6	286	140	200	180	2	92	12		27	43・44	39			98	55	211	15		5
171号	G-6	30	10	25	19		11			27					97	14	5	10		1
172号	G-5	7	3	6	4		3			28					100	3	3	1		
173号	G-5	9	4	7	4		4	1		28		40			100	2	6	1		
174号	G-5	19	9	15	16	1	2			28		40			100	1	15	3		
175号	G-5	63	17	57	40	1	17	5		28		40			98	14	44	4		1
176号	F～G-5	213	68	176	112	9	74	18		28		40			100	42	163	8		
177号	G-5	13	5	11	3	2	8			28					100	2	11			
178号	F～G-5	16	7	13	6	1	8	1							100	5	10	1		
179号	F-5	6	4	5	3		3			28		40			100		6			
180号	F-5	10	3	9	6	1	1	2		28		40			100	2	7	1		
181号	F-5	14	2	13	8	2	1	3							100	5	9			

赤化状態　Ａ－赤化　完形
Ｂ－赤化　破損礫　割面も赤化
Ｃ－赤化　破損礫　割面は非赤化
Ｄ－非赤化　完形
Ｅ－非赤化　破損礫

148号礫群（第196図）

Ｉ－10グリッドから検出された。北東～南西方向1.2m、北西～南東方向0.6mの範囲に、32点の礫が密集して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。石器ブロック25と重複して検出された。また、炭化物が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩７点、多孔質安山岩１点、玄武岩24点である。この内18点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は25点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、近隣の144・145・146・147・149号礫群、南西方向へ約５～７ｍの距離を隔てた153・156号礫群との接合が確認された。構成礫の大半は400g以下の小型の礫だが、それぞれ1,200g、1,500gを超える礫が１点ずつ出土している。

149号礫群（第196図）

Ｉ－10グリッドから検出された。北東～南西方向1.6m、北西～南東方向0.8mの範囲に、17点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。石器ブロック25と重複して検出された。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩12点、玄武岩３点、多孔質玄武岩２点である。この内９点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は14点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、近隣の145・146・147・148号礫群、南西方向へ約７ｍの距離を隔てた154号礫群、更に、同方向へ約50mの距離を隔てた170号礫群、また、遺構外では、北方向へ約４ｍの距離を隔てたＪ－10グリッドの礫、南西方向へ約11mの距離を隔てたＩ－９グリッドの礫との接合が確認された。

150号礫群（第196図）

Ｉ－10グリッドから検出された。北西～南東方向１ｍ、北東～南西方向0.4mの範囲に、７点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩４点、玄武岩３点である。この内４点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は６点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、南西方向へ約３～７ｍの距離を隔てた154・156・158号礫群、また、近隣の遺構外の礫との接合が確認された。構成礫の大半は200g以下の小型の礫だが、1,100gを超える礫が１点出土している。

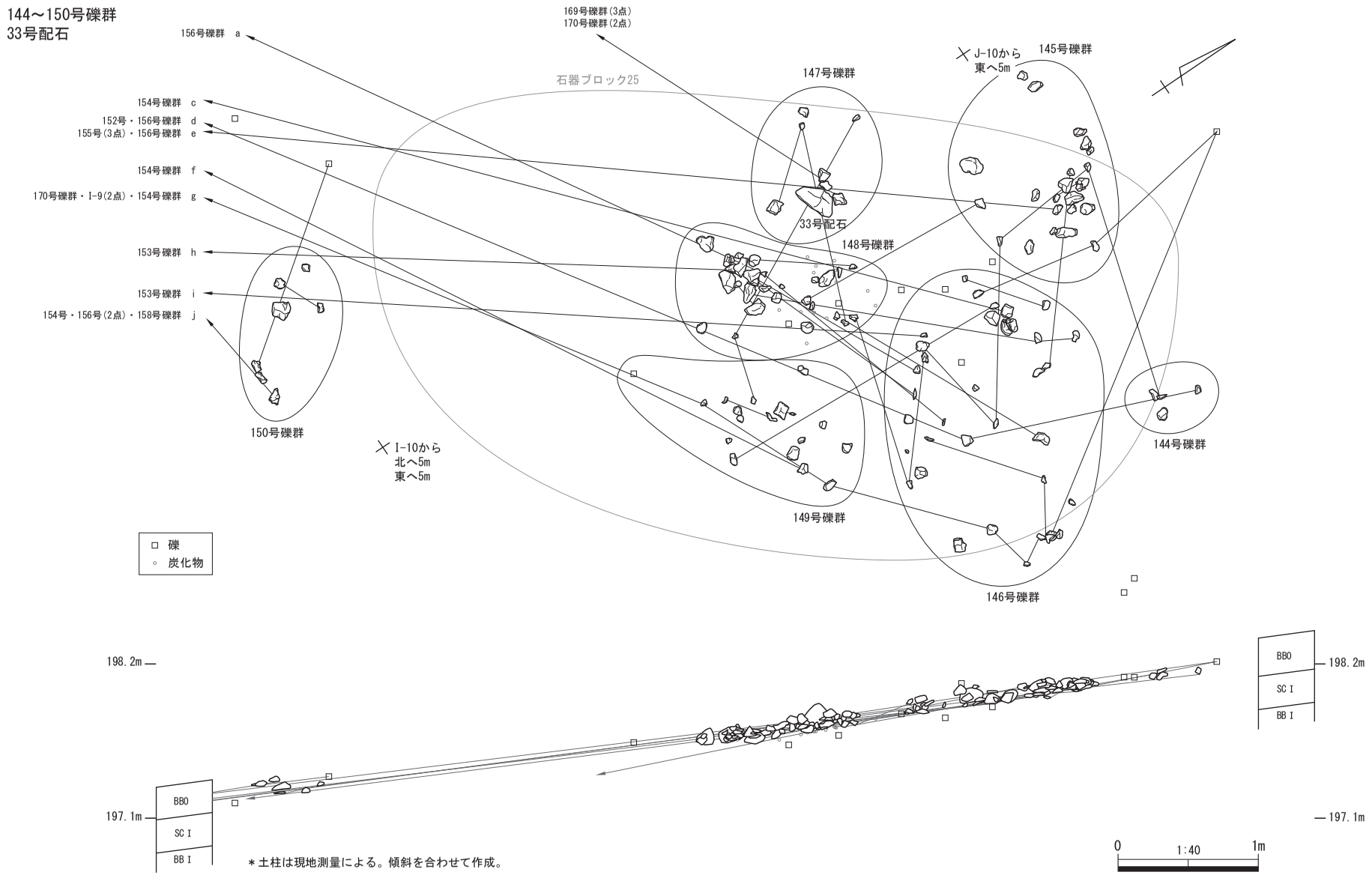
151号礫群（第197図）

Ｉ－10グリッドから検出された。北西～南東方向1.3m、北東～南西方向0.5mの範囲に、５点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩１点、玄武岩４点である。接合関係は確認できなかった。

152号礫群（第197図）

Ｉ－10グリッドから検出された。北西～南東方向0.9m、北東～南西方向0.4mの範囲に、23点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。石器ブロック26と重複して検出された。また、炭化物集中37が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。



＊土柱は現地測量による。傾斜を合わせて作成。

第196図　第Ⅷ文化層　南西谷部 144～150号礫群、33号配石 遺構図

石材は、輝石安山岩13点、玄武岩10点である。この内15点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は18点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、近隣の154・156・157・158号礫群、また、北東方向へ約８～９ｍの距離を隔てた144・146号礫群との接合が確認された。

153号礫群・34号配石（第197図）

Ｉ－10グリッドから検出された。北東～南西方向1.1m、北西～南東方向0.3mの範囲に、６点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。石器ブロック26と重複して検出された。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩４点、玄武岩２点である。この内４点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は５点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、近隣の156号礫群、また、北東方向へ約５～７ｍの距離を隔てた146・148号礫群との接合が確認された。構成礫の大半は100g以下の小型の礫だが、1,900gを超える礫が１点出土している。

また、礫群の西側に4,100gを超える礫が検出され、34号配石と設定した。石材は輝石安山岩である。

154号礫群・35号配石（第197図）

Ｉ－10グリッドから検出された。北西～南東方向1.6m、北東～南西方向0.9mの範囲に、40点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。石器ブロック26と重複して検出された。また、炭化物集中37が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩19点、多孔質安山岩１点、玄武岩19点、多孔質玄武岩１点である。この内22点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は32点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、近隣の150・152・155・156・157・158号礫群、北東方向へ約６～８ｍの距離を隔てた145・146・149号礫群、南西方向へ約44mの距離を隔てた170号礫群、また、遺構外では、近隣の礫、北東方向へ約９ｍの距離を隔てたＪ－10グリッドの礫、南西方向へ約５ｍの距離を隔てたＩ－９グリッドの礫との接合が確認された。

また、礫群の北西側に3,300gを超える礫が検出され、35号配石と設定した。石材は輝石安山岩である。

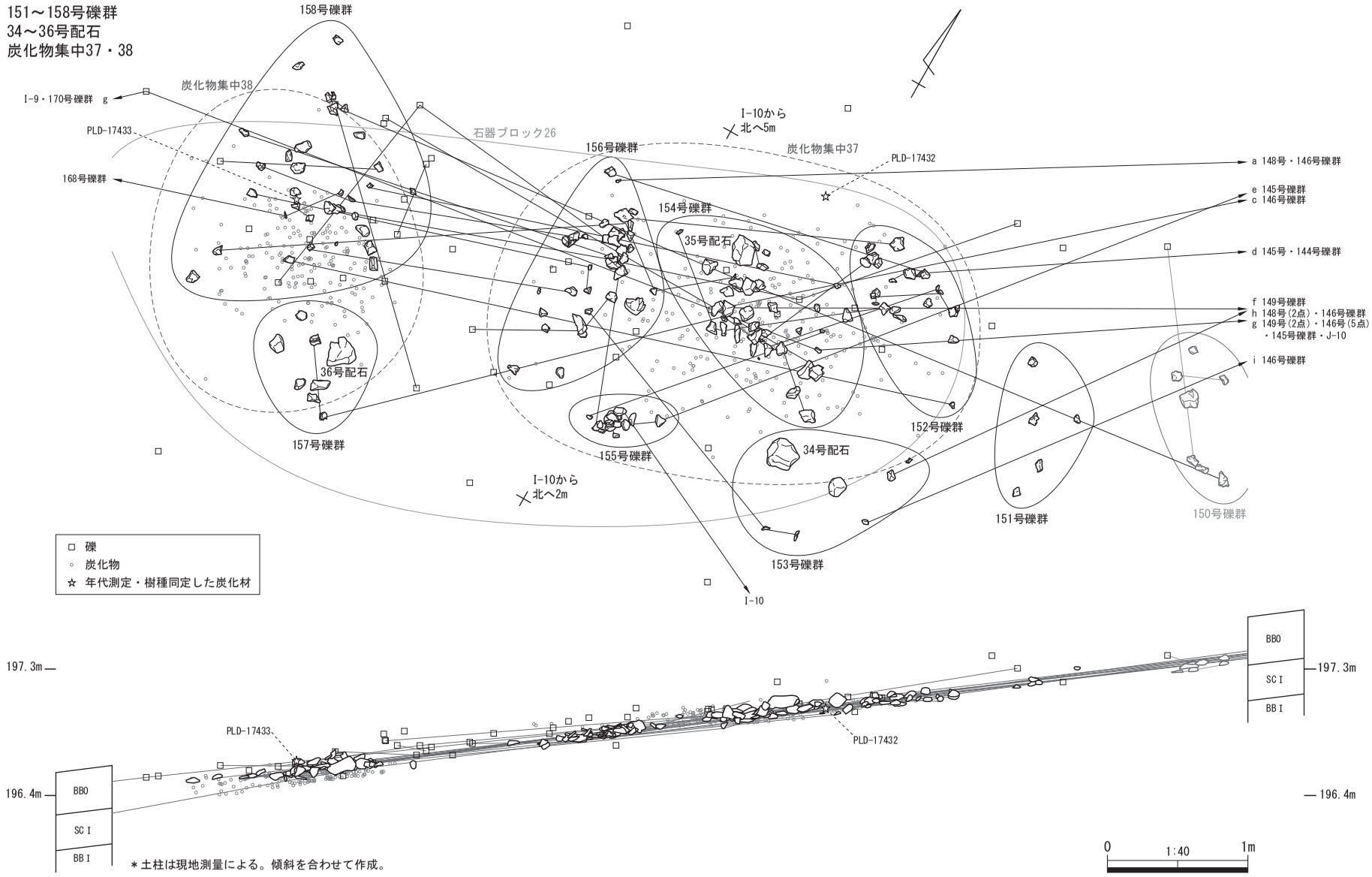
155号礫群（第197図）

Ｉ－10グリッドから検出された。北東～南西方向0.5m、北西～南東方向0.2mの範囲に、15点の礫が密集して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。石器ブロック26と重複して検出された。また、炭化物集中37が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩７点、玄武岩６点、多孔質玄武岩２点である。この内８点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は11点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、近隣の154・156号礫群、北東方向へ約９ｍの距離を隔てた145号礫群、また、遺構外では、南東方向へ2.5mの距離を隔てたＩ－10グリッドの礫との接合が確認された。

156号礫群（第197図）

Ｉ－９～10グリッドから検出された。南北方向1.6m、東西方向0.8mの範囲に、37点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。石器ブロック26と重複して検出された。また、炭化物集中37が重複して分布しているが、分布範囲の土



第197図　第Ⅷ文化層　南西谷部 151～158号礫群、34～36号配石、炭化物集中37・38 遺構図

壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩13点、玄武岩24点である。この内23点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は29点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、近隣の150・152・153・154・155・158号礫群、北東方向へ約９～10mの距離を隔てた144・145・146・148号礫群、また、遺構外では、近隣の礫と、北東方向へ約３ｍの距離を隔てたⅠ－９グリッドの礫との接合が確認された。構成礫の大半は200g以下の小型の礫だが、1,300gを超える礫が１点出土している。

157号礫群・36号配石（第197図）

Ⅰ－９グリッドから検出された。北西～南東方向0.8m、北東～南西方向0.3mの範囲に、８点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。石器ブロック26と重複して検出された。また、炭化物集中38が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩５点、玄武岩３点である。この内２点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は７点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、近隣の152・154号礫群との接合が確認された。

また、礫群の東側に3,700gを超える礫が検出され、36号配石と設定した。石材は輝石安山岩である。

158号礫群（第197図）

Ⅰ－９グリッドから検出された。南北方向２ｍ、東西方向1.3mの範囲に、40点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。石器ブロック26と重複して検出された。また、炭化物集中38が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩６点、多孔質安山岩１点、玄武岩28点、多孔質玄武岩５点である。この内18点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は36点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、近隣の150・152・154・156号礫群、南西方向へ約36mの距離を隔てた168号礫群、また、遺構外では、近隣の礫と、北東方向へ約６ｍの距離を隔てたⅠ－10グリッドの礫との接合が確認された。

159号礫群（第198図）

Ⅰ－５グリッドから検出された。北西～南東方向１ｍ、北東～南西方向0.5mの範囲に、４点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る斜面である。炭化物が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

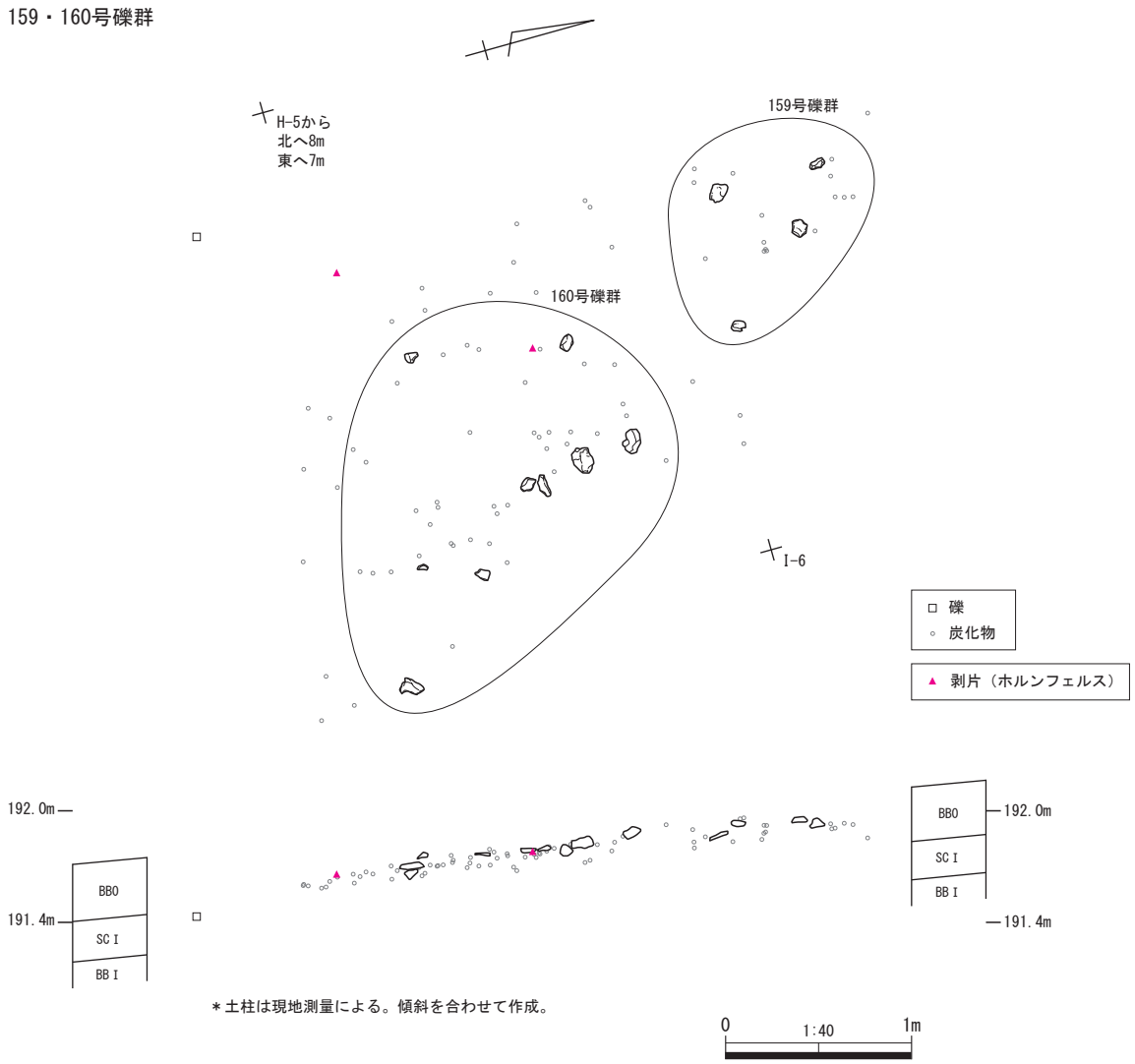
石材は、輝石安山岩１点、玄武岩２点、多孔質玄武岩１点である。接合関係は確認できなかった。

160号礫群（第198図）

Ｈ－５～６グリッドから検出された。北西～南東方向２ｍ、北東～南西方向1.2mの範囲に、９点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る斜面である。炭化物が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩２点、玄武岩１点、多孔質玄武岩６点である。接合関係は確認できなかった。

礫群と重複して、ホルンフェルス製の剥片１点が出土した。石器に被熱は確認できなかった。



第198図　第Ⅷ文化層　南西谷部 159・160号礫群 遺構図

161号礫群（第200図）

Ｈ－６グリッドから検出された。北西～南東方向0.7m、北東～南西方向0.3mの範囲に、５点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北から南にかけて下る斜面である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩４点、多孔質安山岩１点である。この内１点の礫に接合関係が確認された。礫群間の接合であり、近隣の169号礫群との接合が確認された。

162号礫群（第199図）

Ｈ－５グリッドから検出された。北東～南西方向0.7m、北西～南東方向0.1mの範囲に、４点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北から南にかけて下る斜面である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩３点、玄武岩１点である。接合関係は確認できなかった。構成礫の大半は250g以下の小型の礫だが、1,700gを超える礫が１点出土している。

礫群と重複して、ホルンフェルス製の剥片１点が出土した。石器に被熱は確認できなかった。

163号礫群（第199図）

Ｈ－５グリッドから検出された。北東～南西方向2.1m、北西～南東方向1.6mの範囲に、27点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北から南にかけて下る斜面である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩１点、多孔質安山岩３点、玄武岩10点、多孔質玄武岩13点である。この内９点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は22点の礫群となった。礫群内の接合に加え、遺構外では、南東方向へ約３ｍの距離を隔てたＨ－６グリッドの礫との接合が確認された。構成礫の大半は300g以下の小型の礫だが、1,100g、1,700gを超える礫が、それぞれ１点ずつ出土している。

礫群と重複して、ホルンフェルス製のサイド・スクレイパーが１点（228）、剥片が６点、黒曜石（蔓科冷山群）製の剥片が１点出土している。石器に被熱は確認できなかった。

164号礫群（第199図）

Ｈ－５グリッドから検出された。南北方向1.1m、東西方向0.4mの範囲に、６点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北から南にかけて下る斜面である。炭化物が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩１点、玄武岩３点、多孔質玄武岩２点である。接合関係は確認されなかった。

礫群と重複して、輝石安山岩製の剥片と黒曜石（未分析）製の砕片が、１点ずつ出土している。石器に被熱は確認できなかった。

165号礫群（第199図）

Ｈ－５グリッドから検出された。北東～南西方向0.4m、北西～南東方向0.1mの範囲に、５点の礫が密集して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北から南にかけて下る斜面である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩１点、多孔質安山岩２点、多孔質玄武岩２点である。この内２点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は４点の礫群となった。接合関係は礫群内であった。構成礫の大半は360g以下の小型の礫だが、1,100gを超える礫が１点出土している。

166号礫群・37号配石（第199図）

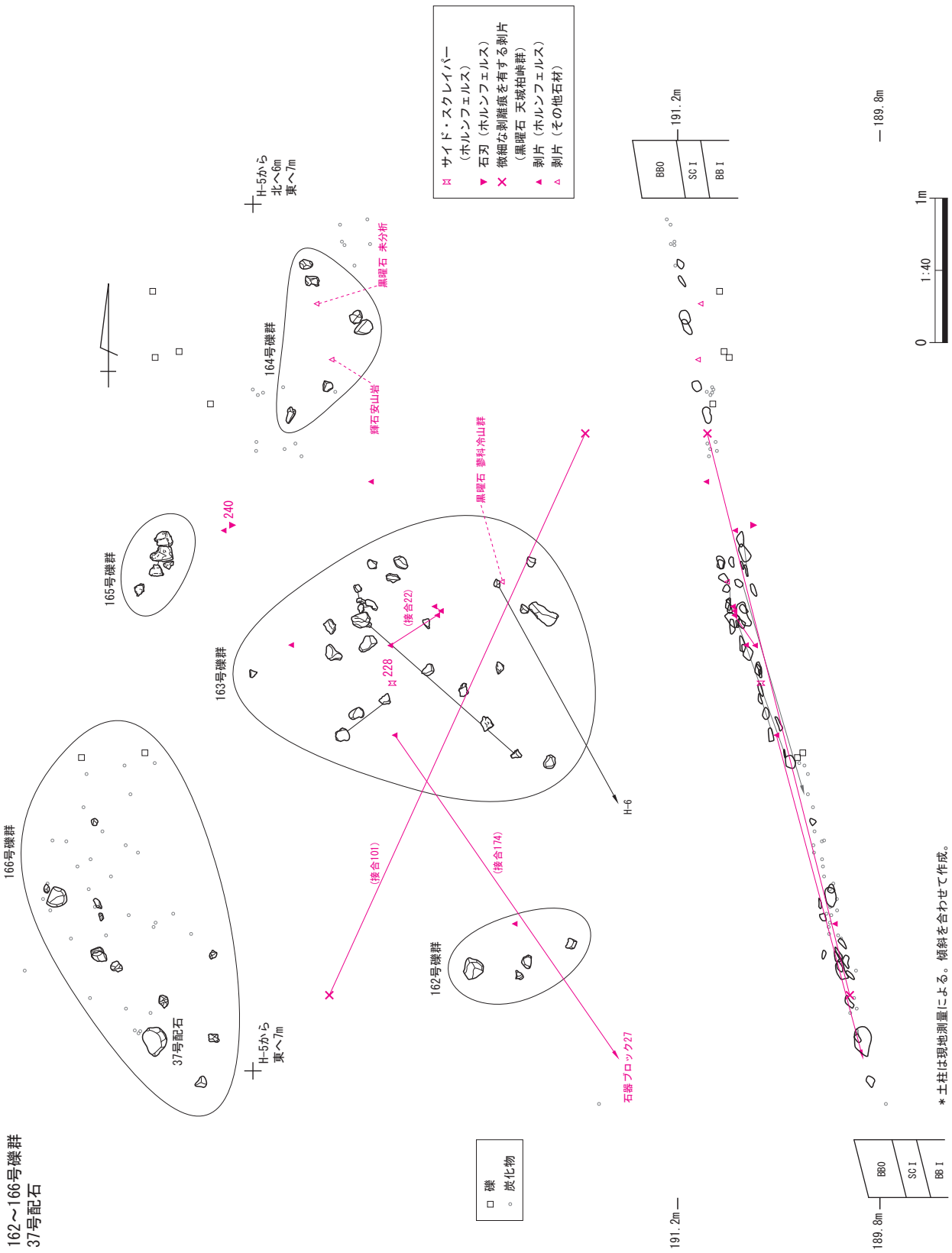
Ｇ～Ｈ－５グリッドから検出された。北西～南東方向2.4m、北東～南西方向１ｍの範囲に、14点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北から南にかけて下る斜面である。炭化物が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩５点、多孔質安山岩２点、玄武岩１点、多孔質玄武岩６点である。この内２点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は13点の礫群となった。接合関係は礫群内であった。構成礫の大半は250g以下の小型の礫だが、1,400gを超える礫が１点出土している。

また、礫群の南側に4,000gを超える礫が検出され、37号配石と設定した。石材は輝石安山岩である。

167号礫群（第200図）

Ｈ－６グリッドから検出された。東西方向0.9m、南北方向0.5mの範囲に、12点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。石器ブロック27と重複して検出された。また、炭化物集中39が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。



第199図　第Ⅷ文化層　南西谷部 162～166号礫群、37号配石 遺構図

石材は、輝石安山岩７点、多孔質安山岩１点、玄武岩３点、多孔質玄武岩１点である。この内７点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は９点の礫群となった。礫群内の接合に加え、遺構外では、北西方向へ約２～３ｍの距離を隔てたＨ－６グリッドの礫との接合が確認された。

168号礫群・38・39号配石（第200図）

Ｈ－６グリッドから検出された。北西～南東方向2.5m、北東～南西方向1.4mの範囲に、61点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。石器ブロック27と重複して検出された。また、炭化物集中39が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩20点、多孔質安山岩２点、玄武岩38点、多孔質玄武岩１点である。この内27点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は47点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、近隣の169・170号礫群、北東方向へ約36mの距離を隔てた158号礫群、南西方向へ約15mの距離を隔てた176号礫群、また、遺構外では、北方向へ約３ｍの距離を隔てたＨ－６グリッドの礫との接合が確認された。構成礫の大半は400g以下の小型の礫だが、1,000g、1,600g、2,100gを超える礫が、それぞれ１点ずつ出土している。

また、礫群の中央と東側に3,100g、3,800gを超える礫が検出され、それぞれ38・39号配石と設定した。石材は、それぞれ玄武岩、多孔質玄武岩である。

169号礫群・40～42号配石（第200図）

Ｇ～Ｈ－６グリッドから検出された。東西方向4.2m、南北方向3.4mの範囲に、238点の礫が密集して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。石器ブロック27と重複して検出された。また、炭化物集中39が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩117点、多孔質安山岩12点、玄武岩78点、多孔質玄武岩30点、中粒砂岩１点である。この内74点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は198点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、近隣の161・168・170号礫群、北東方向へ約48mの距離を隔てた147号礫群、南西方向へ約９～11mの距離を隔てた174・175・176・177号礫群、また、遺構外では、北東方向へ約16mの距離を隔てたＨ－７グリッド、北西方向へ約５ｍの距離を隔てたＨ－６グリッドの礫との接合が確認された。構成礫の大半は300g以下の小型の礫だが、1,000g、1,300gを超える礫が、それぞれ１点ずつ出土している。

また、礫群の北東側と南西側に5,400g、7,700g、5,400gを超える礫が検出され、それぞれ40～42号配石と設定した。石材は、それぞれ輝石安山岩、玄武岩、輝石安山岩である。

170号礫群・43・44号配石（第200図）

Ｇ－５～６グリッドから検出された。南北方向4.5m、東西方向2.6mの範囲に、286点の礫が密集して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。石器ブロック27と重複して検出された。また、炭化物集中39が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩180点、多孔質安山岩２点、玄武岩92点、多孔質玄武岩12点である。この内140点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は200点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、近隣の168・169・171号礫群、北東方向へ約50～51mの距離を隔てた145・146・147・

149号礫群、同方向へ約44mの距離を隔てた154号礫群、さらに、南西方向へ約４～６ｍの距離を隔てた172・175号礫群、同方向へ約９ｍの距離を隔てた176号礫群、また、遺構外では、北東方向へ約51mの距離を隔てたJ－10グリッドの礫、同方向へ約39mの距離を隔てたI－９グリッドの礫、さらに、南西方向へ約２～３ｍの距離を隔てたG－５グリッドの礫との接合が確認された。構成礫の大半は400g以下の小型の礫だが、1,000g、1,300g、2,300gを超える礫が、それぞれ１点ずつ出土している。

また、礫群の南側に4,900g、6,400gを超える礫が検出され、それぞれ43・44号配石と設定した。石材は、いずれも輝石安山岩である。

171号礫群（第200図）

G－６グリッドから検出された。南北方向1.1m、東西方向0.8mの範囲に、30点の礫が密集して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。石器ブロック27と重複して検出された。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩19点、玄武岩11点である。この内10点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は25点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、近隣の170号礫群、南西方向へ約５～６ｍの距離を隔てた172・175号礫群との接合が確認された。構成礫の大半は400g以下の小型の礫だが、1,400gを超える礫が１点出土している。

172号礫群（第201図）

G－５グリッドから検出された。東西方向1.2m、南北方向0.7mの範囲に、７点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。石器ブロック28と重複して検出された。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩４点、玄武岩３点である。この内３点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は６点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、北東方向へ約４～５ｍの距離を隔てた170・171号礫群との接合が確認された。

173号礫群（第201図）

G－５グリッドから検出された。東西方向0.5m、南北方向0.4mの範囲に、９点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。石器ブロック28と重複して検出された。また、炭化物集中40が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

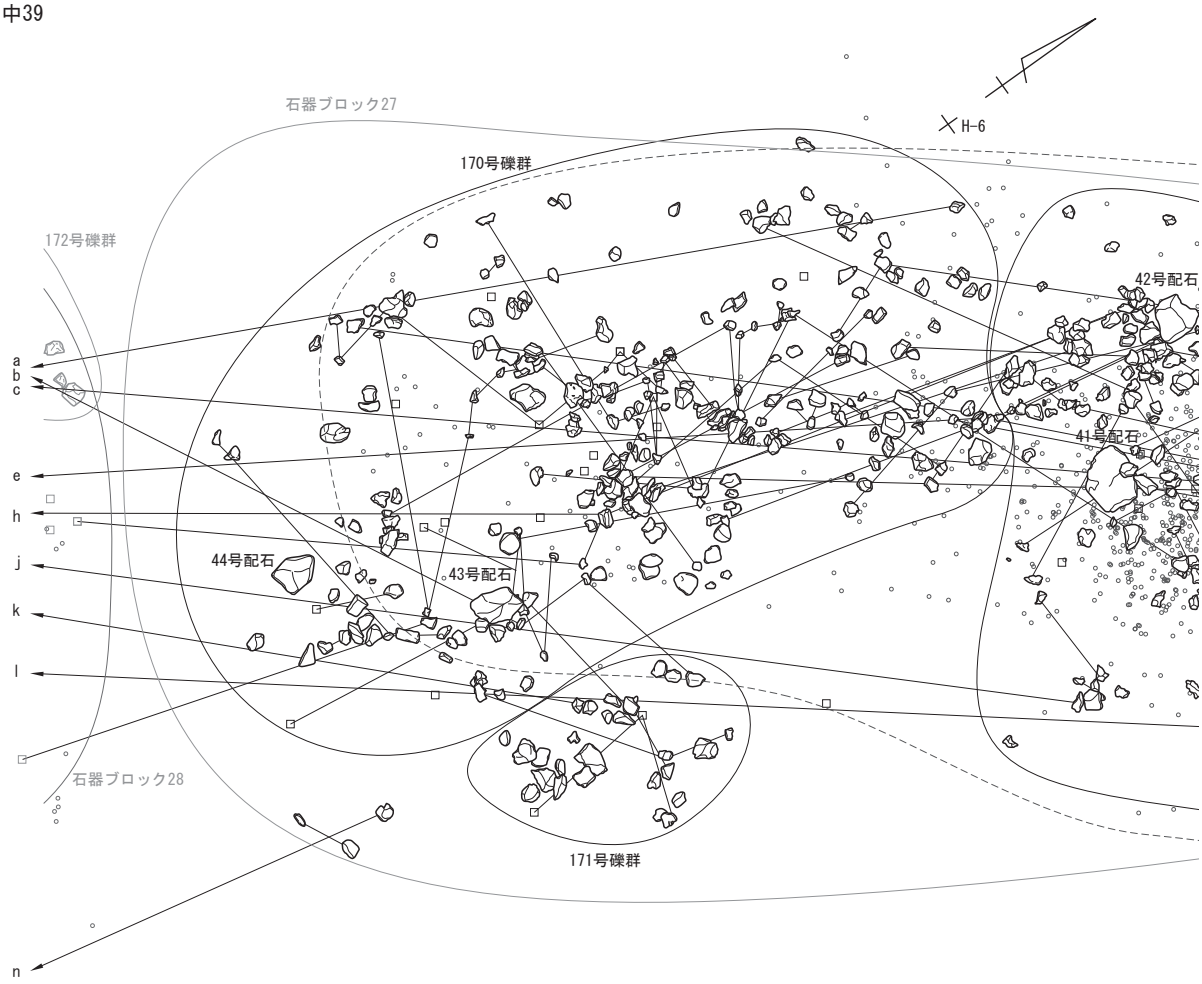
石材は、輝石安山岩４点、玄武岩４点、多孔質玄武岩１点である。この内４点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は７点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、隣接する175号礫群との接合が確認された。

174号礫群（第201図）

G－５グリッドから検出された。東西方向1.3m、南北方向0.9mの範囲に、19点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。石器ブロック28と重複して検出された。また、炭化物集中40が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩16点、多孔質安山岩１点、玄武岩２点である。この内９点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は15点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、近隣

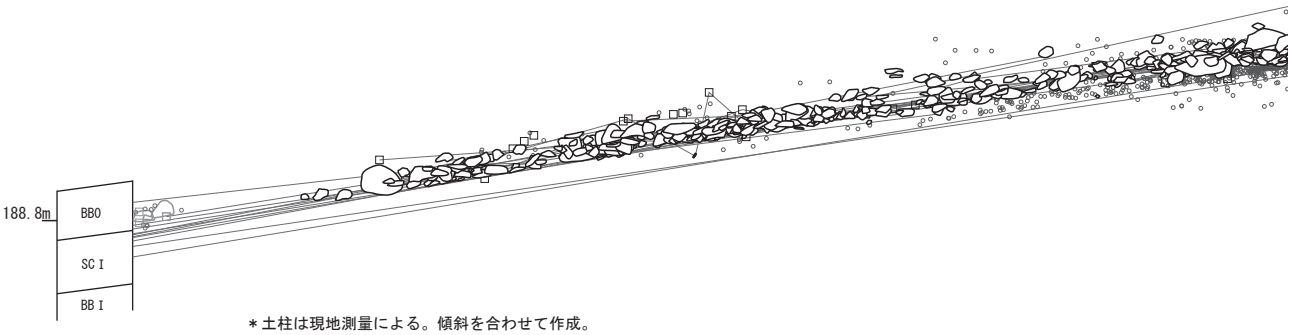
161・167～171号礫群
38～44号配石
炭化物集中39



□ 礫
◦ 炭化物

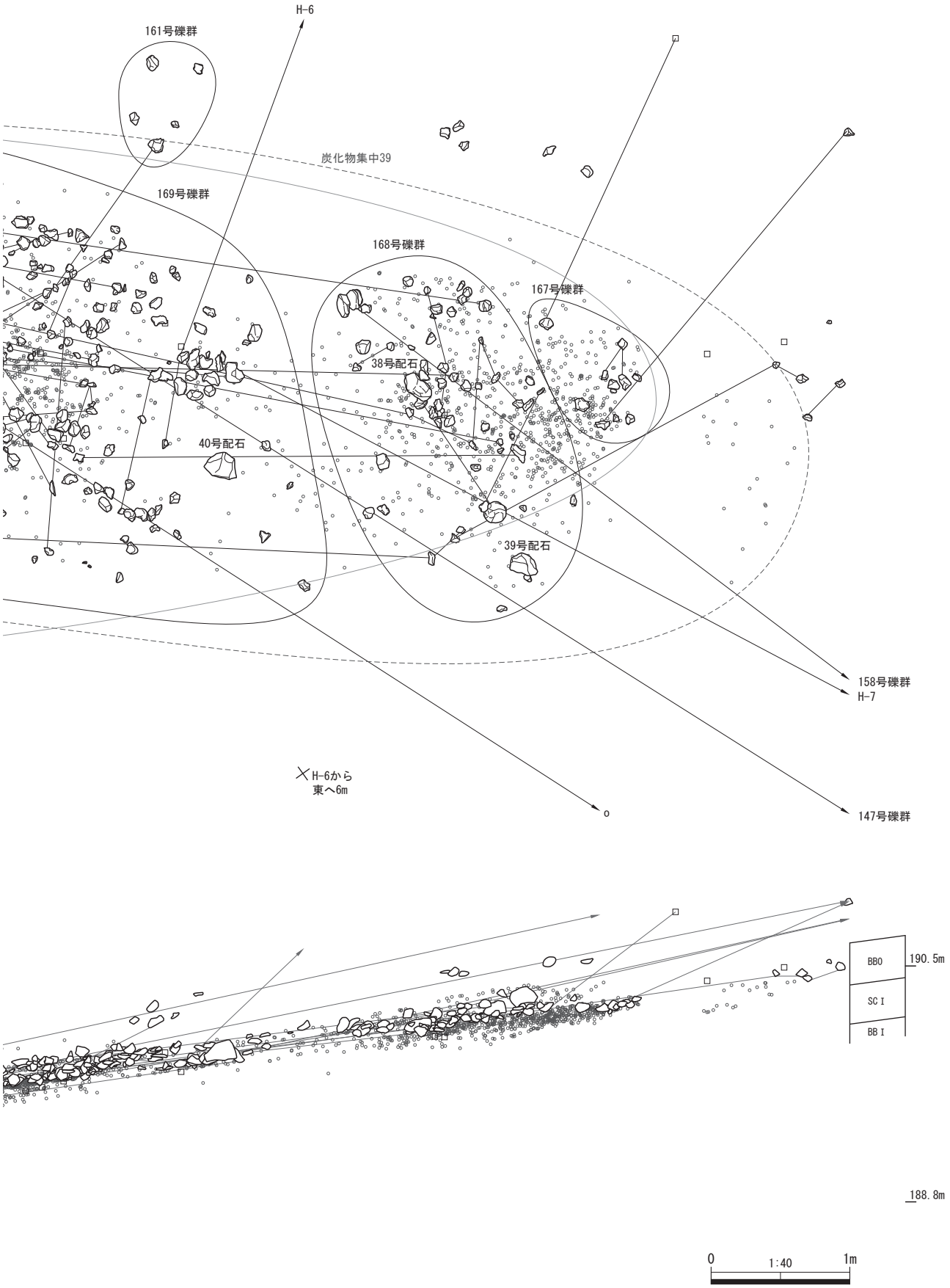
＜接合先＞

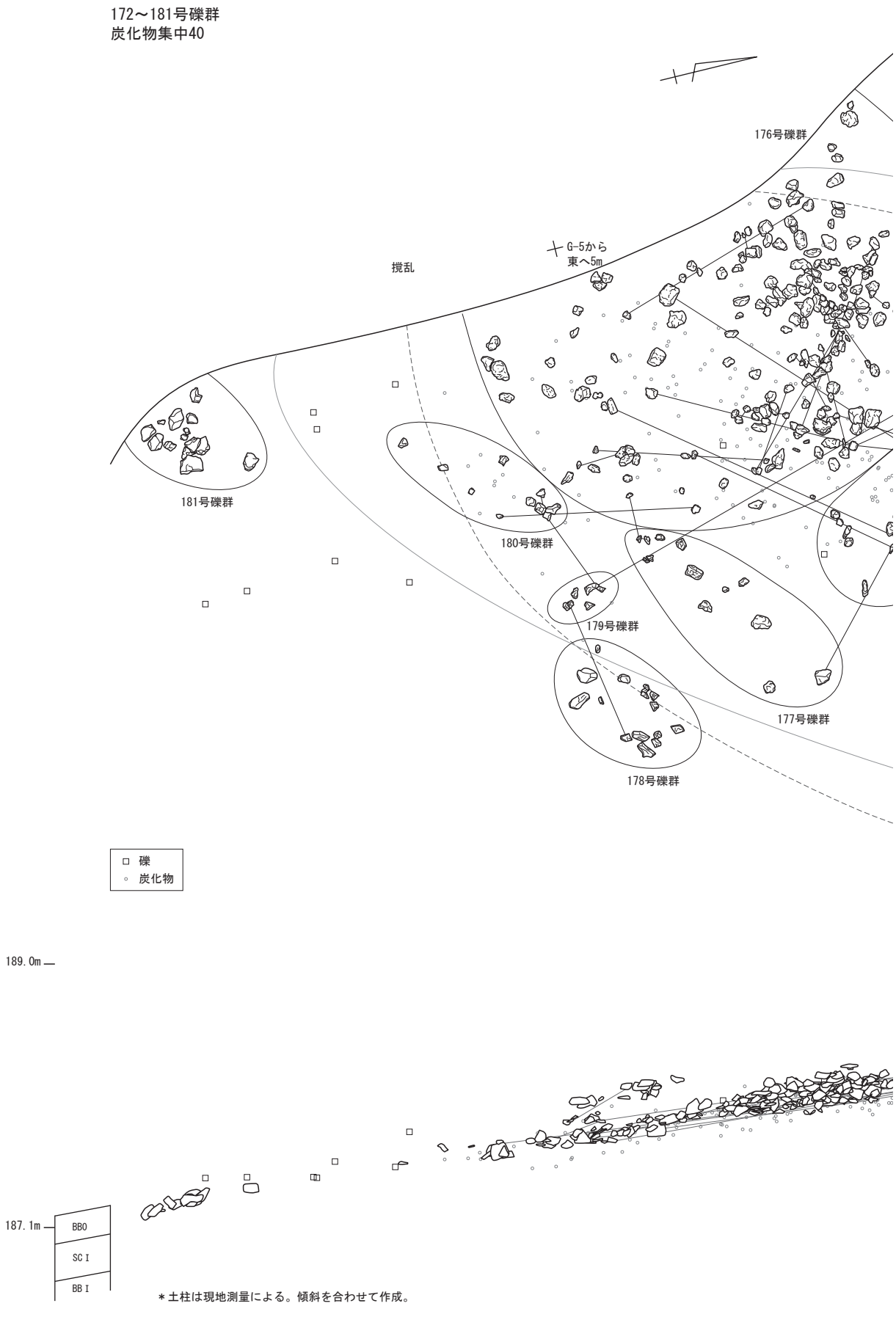
a	175号礫群	l	176号礫群(2点)
b	172号礫群	n	G-6
c	174号礫群(2点)	o	I-9(2点)
e	176号礫群		154号礫群(1点)
h	175号礫群(2点)		149号礫群(2点)
j	177・175号礫群		146号礫群(5点)
k	175号礫群		145号礫群(1点)
			J-10(1点)



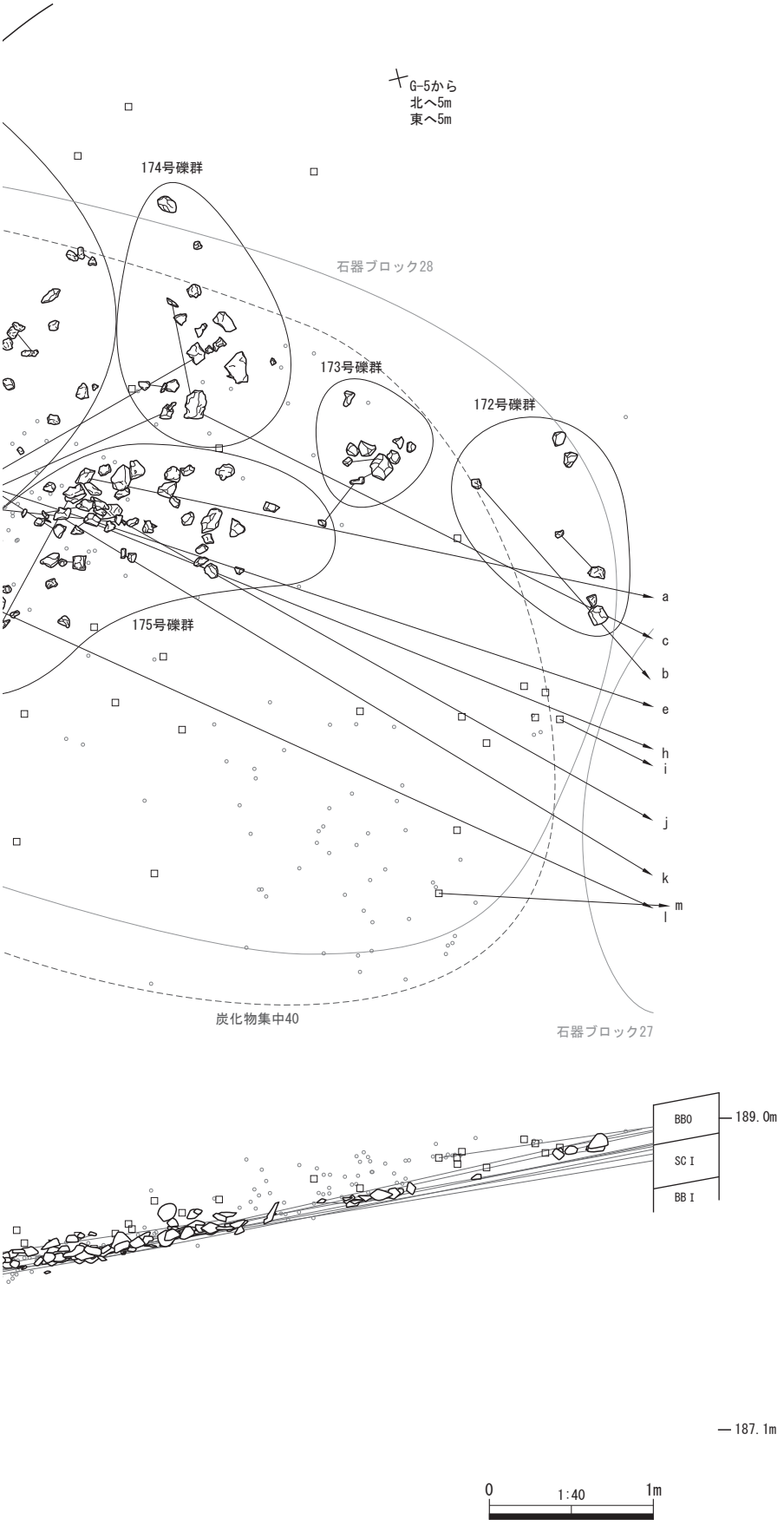
＊土柱は現地測量による。傾斜を合わせて作成。

第200図　第Ⅷ文化層　南西谷部 161・167～171号礫群、38～44号配石、炭化物集中39 遺構図


H-6
161号礫群
炭化物集中39
169号礫群
168号礫群
167号礫群
38号配石
40号配石
39号配石
158号礫群
H-7
H-6から
東へ6m
147号礫群
BBO
SC I
BB I
190.5m
188.8m
0
1:40
1m



第201図　第Ⅷ文化層　南西谷部 172～181号礫群、炭化物集中40 遺構図



＜接合先＞

a	170号礫群
c	169号礫群
b	170号(2点)・171号礫群
e	170号・169号礫群
h	170号礫群(4点)
i	170号・169号礫群
j	169号礫群
k	171号礫群(2点)
m	170号礫群
l	168号礫群(2点)

の176・179号礫群、北東方向へ約10mの距離を隔てた169号礫群との接合が確認された。構成礫の大半は300g以下の小型の礫だが、1,100g、1,400gを超える礫が、それぞれ１点ずつ出土している。

175号礫群（第201図）

Ｇ－５グリッドから検出された。南北方向2.4m、東西方向１ｍの範囲に、63点の礫が密集して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。石器ブロック28と重複して検出された。また、炭化物集中40が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩40点、多孔質安山岩１点、玄武岩17点、多孔質玄武岩５点である。この内17点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は57点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、隣接する173・176・177号礫群、北東方向へ約６～９ｍの距離を隔てた169・170・171号礫群との接合が確認された。構成礫の大半は400g以下の小型の礫だが、1,700gを超える礫が１点出土している。

176号礫群（第201図）

Ｆ～Ｇ－５グリッドから検出された。南北方向3.6m、東西方向2.7mの範囲に、213点の礫が密集して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。石器ブロック28と重複して検出された。また、炭化物集中40が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩112点、多孔質安山岩９点、玄武岩74点、多孔質玄武岩18点である。この内68点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は176点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、隣接する174・175・177・180号礫群、北東方向へ約９～15mの距離を隔てた168・169・170号礫群との接合が確認された。構成礫の大半は350g以下の小型の礫だが、1,000g、1,300g、1,500g、1,700g、2,200gを超える礫が、それぞれ１点ずつ出土している。

177号礫群（第201図）

Ｇ－５グリッドから検出された。北東～南西方向1.7m、北西～南東方向0.5mの範囲に、13点の礫が分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。石器ブロック28と重複して検出された。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩３点、多孔質安山岩２点、玄武岩８点である。この内５点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は11点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、隣接する175・176号礫群、北東方向へ約９ｍの距離を隔てた169号礫群との接合が確認された。構成礫の大半は300g以下の小型の礫だが、1,200gを超える礫が１点出土している。

178号礫群（第201図）

Ｆ～Ｇ－５グリッドから検出された。東西方向0.8m、南北方向0.7mの範囲に、16点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る斜面である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩６点、多孔質安山岩１点、玄武岩８点、多孔質玄武岩１点である。この内７点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は13点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、隣接する179号礫群との接合が確認された。構成礫の大半は200g以下の小型の礫だが、

1,000gを超える礫が１点出土している。

179号礫群（第201図）

Ｆ－５グリッドから検出された。南北方向0.3m、東西方向0.1mの範囲に、６点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。石器ブロック28と重複して検出された。また、炭化物集中40が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩３点、玄武岩３点である。この内４点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は５点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、近隣の174・178・180号礫群との接合が確認された。

180号礫群（第201図）

Ｆ－５グリッドから検出された。北東～南西方向1.2m、北西～南東方向0.4mの範囲に、10点の礫が集中して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。石器ブロック28と重複して検出された。また、炭化物集中40が重複して分布しているが、分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩６点、多孔質安山岩１点、玄武岩１点、多孔質玄武岩２点である。この内３点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は９点の礫群となった。礫群内の接合に加え、礫群間の接合では、隣接する176・179号礫群との接合が確認された。

181号礫群（第201図）

Ｆ－５グリッドから検出された。北東～南西方向0.8m、北西～南東方向0.5mの範囲に、14点の礫が密集して分布している。出土は休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る斜面である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。

石材は、輝石安山岩８点、多孔質安山岩２点、玄武岩１点、多孔質玄武岩３点である。この内２点の礫に接合関係が確認され、その結果、接合後個体数は13点の礫群となった。接合関係は礫群内であった。構成礫は、500g以上の比較的大型の礫が多く確認され、1,000g、1,200g、1,400gを超える礫が、それぞれ１点ずつ出土している。

ウ　炭化物集中

炭化物集中37（第197図）

Ｉ－９～10グリッドから検出された。北東～南西方向3.3m、北西～南東方向2.5mの範囲に、250点に及ぶ炭化物が集中して分布している。上下に多少の幅を持って分布しているが、出土のピークは休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。分布範囲の土壌に、赤化などの変化は確認できなかった。石器ブロック26、152・154～156号礫群、35号配石が重複して検出された。

また、出土した炭化物のうち炭化材１点について、放射性炭素年代測定（AMS法）を行った結果、22,780±70yrBP（PLD－17432）の^{14}C年代値が確認された（詳細は第２分冊附編を参照）。

炭化物集中38（第197図）

Ｉ－９グリッドから検出された。南北方向２m、東西方向1.8mの範囲に、200点に及ぶ炭化物が集中し

て分布している。上下に多少の幅を持って分布しているが、出土のピークは休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。分布範囲の土壌に、赤化などの変化は確認できなかった。石器ブロック26、157・158号礫群、36号配石が重複して検出された。

また、密集箇所から出土した炭化物のうち炭化材１点について、放射性炭素年代測定（AMS法）を行った結果、22,600±70yrBP（PLD－17433）の^{14}C年代値が確認された（詳細は第２分冊附編を参照）。

炭化物集中39（第200図）

G－５～６・H－６グリッドから検出された。北東～南西方向10.2m、北西～南東方向3.8mの範囲に、1,700点を超える炭化物が集中して分布している。上下に多少の幅を持って分布しているが、出土のピークは休場層直下黒色帯の下部である。付近は北東から南西にかけて下る谷底である。分布範囲の土壌に赤化などの変化は確認できなかった。石器ブロック27、167～170号礫群、38～43号配石と重複して検出された。中でも、北東部の167・168号礫群付近と、中央部の169号礫群付近に、２ヶ所の密集域が確認できる。

炭化物集中40（第201図）

F－５・G－５～６グリッドから検出された。北東～南西方向７m、北西～南東方向3.9mの範囲に、240点に及ぶ炭化物が集中して分布している。上下に多少の幅を持って分布しているが、出土のピークは休場層直下黒色帯の下部である。付近は、北東から南西にかけて下る谷底である。分布範囲の土壌に、赤化などの変化は確認できなかった。石器ブロック28、173～176・179・180号礫群が重複して検出された。中でも、南西部の176号礫群付近に、密集域が確認できる。

（２）遺物

南西谷部からは、石器1,013点が出土した（第37表）。石器群の内訳は、ナイフ形石器が13点、角錐状石器が２点、ラウンド・スクレイパーが８点、エンド・スクレイパーが15点、サイド・スクレイパーが８点、ノッチド・スクレイパーが６点、石刃が13点、微細な剥離痕を有する剥片14点、石核が35点、剥片類が899点である。石材は、黒曜石352点（天城柏峠群19点、箱根畑宿33点、蓼科冷山群92点、和田小深沢群１点、和田鷹山群３点、和田土屋橋南群１点、分析不可等21点、未分析182点）、ホルンフェルス635点、珪質頁岩22点、頁岩２点、粗粒砂岩１点、輝石安山岩１点である。内、遺構外出土石器の組成を第40表に示す。

第40表　第Ⅷ文化層 南西谷部 遺構外出土 石器組成表

		ナイフ形石器	エンド・スクレイパー	サイド・スクレイパー	石刃	微細な剥離痕を有する剥片	石核	剥片類	計
黒曜石	天城柏峠群					2		1	3
	箱根畑宿群							1	1
	蓼科冷山群			1				1	2
	和田鷹山群	1							1
	分析不可等						1		1
ホルンフェルス		1	1		1		1	8	12
計		2	1	1	1	2	2	11	20

ナイフ形石器（第202・203図195～206　写真図版９）

195は二側縁加工のナイフ形石器である。石器ブロック27から出土した。素材剥片を縦位に用いており、左側縁の基部側と右側縁に精緻なブランティングを施している。素材剥片の打点部は、加工によって除去されている。刃部は急斜度であり、断面は三角形状である。石材はホルンフェルスである。

196は二側縁加工のナイフ形石器である。石器ブロック27から出土した。素材剥片を縦位に用いており、左側縁と右側縁の基部側にブランティングを施している。素材剥片の打点部は、加工によって除去されている。石材はホルンフェルスである。

197は小型の二側縁加工のナイフ形石器である。石器ブロック28から出土した。小型の横長剥片を横位に用いており、両側縁にブランティングを施している。加工は腹面側から行っている。石材はホルンフェルスである。

198は二側縁加工のナイフ形石器である。石器ブロック26から出土した。小型の横長剥片を横位に用いており、左側縁、右側縁の基部側に、それぞれブランティングを施している。また、左側縁の先端側に素材剥片の打面を残しており、それをブランティングの代替としている。石材は黒曜石（蓼科冷山群）である。

199は基部加工のナイフ形石器である。横長剥片を横位に用いており、右側縁の基部にブランティングを施している。素材剥片の打面は、加工によって除去されている。先端部にも数枚の剥離痕が確認できるが、使用痕である可能性も考えられる。石材は黒曜石（和田鷹山群）である。

200は基部加工のナイフ形石器である。石器ブロック27から出土した。素材剥片を縦位に用いており、左側縁の基部にブランティングを施している。素材剥片の打面は、加工によって除去されている。石材はホルンフェルスである。

201は基部加工のナイフ形石器である。石器ブロック27から出土した。素材剥片を縦位に用いており、右側縁の基部にブランティングを施している。また、左側縁には、腹面側に平坦剥離を施している。上半部は折損している。石材はホルンフェルスである。

202は先端部加工のナイフ形石器である。石器ブロック27から出土した。素材剥片を縦位に用いており、左側縁にブランティングを施している。上部は折損している。石材はホルンフェルスである。

203は切出形石器である。石器ブロック27から出土した。横長剥片を横位に用いており、両側縁にブランティングを施して、切出状の刃部を作出している。加工は精緻に施されている。石材はホルンフェルスである。

204は小型の切出形石器である。石器ブロック25から出土した。横長剥片を横位に用いており、両側縁にブランティングを施して、切出状の刃部を作出している。石材は黒曜石（天城柏峠群）である。

205はナイフ形石器の先端部である。石器ブロック27から出土した。下半部を折損しているため詳細は不明だが、形状から二側縁加工のナイフ形石器であることが推測される。縦長剥片を縦位に用いており、右側縁にブランティングを施している。石材はホルンフェルスである。

206は切出形石器である。石器ブロック28から出土した。横長剥片を横位に用いており、両側縁に粗い剥離を施して刃部を作出している。器体が厚みを有しており、刃部も急斜度である。基部には平坦剥離を施している。石材は黒曜石（箱根畑宿群）である。

角錐状石器（第203図207　写真図版９）

207は角錐状石器である。石器ブロック27から出土した。横長剥片を横位に用いており、両側縁に粗い剥離を施している。加工は鋸歯状を呈する。器体の捻れが大きく、素材剥片の打点部を残しているなど、やや粗雑な作りの印象を受ける。尖端部は折損している。石材は黒曜石（蓼科冷山群）である。

ラウンド・スクレイパー（第203・204図208～215　写真図版９）

器体の周縁部に刃部が確認されたスクレイパーを、ラウンド・スクレイパーとして分類した。全て小型の円形掻器、あるいは拇指状掻器と呼ばれる類の資料である。石材はすべて黒曜石であり、209を除いて信州産が占めている。

208～212のように厚みを有している資料と、213～215のように平坦な資料が確認された。212は接合資料であるが、212bは偶発的な剥離だと考えられ、再加工などは確認できない。

エンド・スクレイパー（第204～206図216～225　写真図版９）

器体の末端部に刃部が確認されたスクレイパーを、エンド・スクレイパーとして分類した。縦長剥片の末端部に刃部を設定している資料が大半だが、218・225のように、横長剥片を素材としている資料も確認できる。素材剥片の大きさのためか、黒曜石は小型の資料であり、ホルンフェルスは大型の資料となっている。ラウンド・スクレイパーと同様、黒曜石は、すべて信州産（蓼科冷山群）が占めている。また、221は側縁にも加工が施されサイド・スクレイパーとしての性格も兼ねている。

サイド・スクレイパー（第206・207図226～231　写真図版９）

器体の側縁部に刃部が確認されたスクレイパーを、サイド・スクレイパーとして分類した。加工は大きな剥離で施されており、鋸歯状になっている例が多い。大半の刃部は大きく抉れており、ノッチド・スクレイパーとの区分は困難であったが、連続した加工を施している資料を中心に分類した。加工は片側にのみ施されている資料が大半だが、227は両側に施され、錯交剥離を行っている。縦長剥片を素材としている資料（226・229・231）と、横長剥片を素材としている資料（227・228）が確認された。石材は227を除いてホルンフェルスである。

ノッチド・スクレイパー（第207・208図232～235　写真図版９）

器体に、複数回の剥離によって作出されたノッチ状の刃部が確認されたスクレイパーを、ノッチド・スクレイパーとして分類した。すべて黒曜石（蓼科冷山群）製であり、横長剥片や幅広剥片を素材としている。232は右側縁に連続して加工を行っている。234は素材剥片の背面側から加工を施している。また、235は複数箇所に剥離を施しており、石核に分類される可能性も考えられる。233・235は一回の大きな剥離を施したのち、細かな剥離を施してノッチ状の刃部を作り出している。

石刃（第208～211図236～241　写真図版10）

同一方向から連続した剥離が行われている縦長剥片を石刃として分類した。石材は、すべてホルンフェルスである。長さ10cm前後の大型の資料と、長さ７cm前後の中型の資料の二種類が確認できる。大型の資料は石刃同士の接合関係が確認できず、単品資料である可能性が高いが、中型の資料は剥離を行った接合資料が確認されている。また、238・239のように、縁辺に微細な剥離痕が確認できる例も見られる。

241は石刃、剥片を剥離した接合資料である。石器ブロック27・28から出土した。ホルンフェルスの円礫を素材としている。まずは平坦な礫面を打面に幅広な241aを剥離して、その剥離面を打面に241b，cを剥離している。この際に剥離されているのは、幅に多少の差異は認められるものの、縦長を意識した石刃である。次に241cの剥離面を打面として、241d～fを剥離している。この内241e，fは、やや歪んだ石刃である。その後は241fの剥離面を打面として、241g～mを剥離している。この一群は連続して同一方向から剥離を行っており、241j，kのような縦長剥片も確認できるが、非常に厚みのある剥片である

241hや、小型の剥片である241iを剥離しているため、石刃を剥離する目的があったとは判断しづらい。しかし、縦長を意識した剥片剥離であったことは間違いない。これらを剥離した石核は確認されなかった。また、241hは石核の素材となり、241nを剥離している。この接合資料は、全体的に調整剥離が希薄であった。

石核（第212～221図242～258　写真図版10）

定型的な製品に不向きな、小型の幅広剥片を剥離した資料が大半を占めている。石刃を剥離した石核は確認できなかった。石核は剥離方法や素材、打面転移の有無などによって３種類に分類した。

１類：石核を素材とした資料（242～246・250～254）

本類の中でも打面転移を繰り返している242～244・250～253と、打面転移の少ない245・246・254に分かれる。前者は形状がサイコロ状に近いものが多く、後者は船底状に近いものが多い。

242は石核と剥片の接合資料である。石器ブロック25から出土した。数回の剥離を行った後に打面転移を繰り返しており、結果として石核はサイコロ状になっている。剥離した順序は、まず初めに242bを剥離した。その後、数回の剥離と打面転移を繰り返したのち、242cを剥離した。次に、再び数回の剥離と打面転移を行い、242dを剥離した。さらに、242dの剥離面を打面として、242e，fを剥離した。また、同一打面で剥離された剥離面を打面として242gを剥離している。次は242cの剥離面に打面を転移して、242h，iを剥離した。次に242iの剥離面を打面として、242jを剥離した。次に242jの剥離面を打面として、242kを剥離した。最後に242kの剥離面を打面として、242lを剥離した。得られた剥片は小型の幅広剥片であり、寸詰まりになっているものも多い。全て同一ブロックから出土していることから、その場で剥片剥離が行われたと推測される。石材はホルンフェルスである。

243は石核と剥片の接合資料である。石器ブロック27から出土した。小型の円礫を素材として数回の剥離を行った後に、その作業面を打面とする転移を繰り返しており、結果として石核はサイコロ状を呈している。剥離した順序は、まず初めに243bを剥離した。その後、数回の剥離と打面転移を繰り返したのち、243cを剥離した。次に243cの剥離面を打面として、243dを剥離した。さらに243bの剥離面を打面として、243eを剥離した。また、打面を隣の剥離面に移して、243fを剥離している。さらに243fの剥離面を打面として、243gを剥離した。次は243cを剥離した打面から、243hを剥離した。得られた剥片は、小型の幅広剥片、縦長剥片である。全て同一ブロックから出土していることから、その場で剥片剥離が行われたと推測される。石材はホルンフェルスである。

244は石核と剥片の接合資料である。石器ブロック27から出土した。作業面は一面であるが、数回の打面転移が行われている。剥離の際には、打面が作出されている。同一方向からの剥離でも、打面作出は何回か行われており、244bを剥離した後、打面を作出している。そこから244cを剥離した後、さらに打面作出として244dを剥離している。得られた剥片はすべて小型の幅広剥片であり、寸詰まりの資料が大半である。石材はホルンフェルスである。

245は石核と剥片の接合資料である。石器ブロック28から出土した。平坦な広い剥離面を打面として、剥離を行っている。細かな打面調整は行われていない。打点を横に移動して、求心状に近い連続した剥離を行っており、作業面は全周にわたっている。そのため、石核の最終的な形状は、船底に近くなっている。剥片は245b，cの順に剥離されている。素材となっている珪質頁岩は、節理が顕著に確認でき、剥離面はその影響を多分に受けている。得られた剥片は小型の幅広剥片である。

246は石核と剥片の接合資料である。石器ブロック28から出土した。ホルンフェルスの小型の円礫を素材として、打面は作出せず、比較的平坦な広い礫面を打面としながら剥離を行っている。剥離は246b，

c，d，eの順に行われており、数回の剥離を行った後に、打点を移動しているのが見て取れる。そのため、最終的な石核の形状は、船底状に近くなっている。素材となっているホルンフェルスは、節理が顕著に確認できる。そのため、剥離面はその影響を多分に受けており、寸詰まりの資料も多い。得られた剥片は、小型の幅広剥片や縦長剥片である。

247は石核と剥片の接合資料である。石器ブロック28から出土した。数回の剥離を行った後に、打面転移を繰り返しており、結果として石核はサイコロ状になっている。打面は、作業面がそのまま転用されている場合が多く、細かな調整は行われていない。247b，cは、上部の平坦な剥離面を打面として剥離されている。247bは247cを剥離する際に、衝撃で剥落してしまったブランクである。得られた剥片は247cをはじめとした、小型の幅広剥片や縦長剥片である。石材は黒曜石（箱根畑宿群）である。

248は石核と剥片の接合資料である。石器ブロック27・28から出土した。黒曜石（箱根畑宿群）製の板状の素材の平坦面を打面として、小型の幅広剥片を剥離している。最初は広く平坦な面を打面として、248b，e～gを剥離している。次に作業面を180°転移させ、裏側に移して、248c，dを剥離している。得られた剥片は、大半が小型の幅広剥片である。この時点で、形状が船底に近い石核が出来上がっているが（248a）、それを折断し、248a1を石核として再利用している。更に、この折断面を打面として248h，iを剥離した。この剥離では、比較的縦長の剥片を剥離している。最後に同一作業面で打面を90°転移させて剥離を行っているが、得られた剥片は確認できなかった。作業の一連の工程の中で、細かい打面調整や頭部調整は行われていない。

249は石器ブロック28から出土した。小型の角礫を素材とし、上面には打面を作出した際の連続した剥離が確認できる。作業面は正面のみである。打面は、比較的大きな剥離面が作出されており、細かい調整は顕著には確認できない。打面転移は明確には確認できなかったが、作業面の下部に下方向からの剥離面が確認できるため、行われていた可能性も考えられる。得られた剥片は小型の縦長剥片である。石材は黒曜石（蓼科冷山群）である。

250は石器ブロック28から出土した。板状の素材の平坦面を打面として、小型の縦長剥片を剥離している。細かな打面調整は行われていない。右面は細かい剥離が行われているが、調整痕というよりもスクレイパーの刃部のような印象を受ける。そのためスクレイパーに転用されていた可能性も考えられる。石材は黒曜石（蓼科冷山群）である。

251は石器ブロック28から出土した。数回の剥離を行った後に、打面転移を繰り返しており、結果として石核はサイコロ状に近くなっている。比較的大きな剥離面が作出されており、そこを打面として剥離を行っている。上面、右面、裏面に打面が確認され、それぞれ正面、裏面、下面に作業面が確認できる。得られた剥片は小型の幅広剥片であり、寸詰まりの資料が多い。石材は黒曜石（箱根畑宿群）である。

２類：剥片を素材とした資料（252～257）

252・253・254は素材となった剥片の縁辺から、そのまま剥離を行っており、打面を作出していない。得られた剥片は、小型の幅広剥片である。252は素材剥片の腹面側に、253・254は素材剥片の背面側に剥離を行っている。また、254の剥離は、打面を除去するように行っている。石材は、252がホルンフェルス、253・254は黒曜石（蓼科冷山群）である。

255・256・257は、素材となった剥片の縁辺に、背面と腹面から交互に剥離を繰り返している。得られた剥片は小型の幅広剥片であり、寸詰まりの資料が多い。255は、素材となった剥片の上面と下面から交互に剥離を行っている。256は、素材となった剥片の両側縁に、それぞれの剥離面を打面として剥離を繰り返している。257は、打面を作出しない状態での剥離も行っている。石材は、255・256はホルンフェルス、257は黒曜石（蓼科冷山群）である。

３類：両極打法によって剥離された資料（258）

258は石核と剥片の接合資料である。小礫の一端に打面を作出し、上下方向から両極剥離を行って、小型の剥片を剥離している。得られた剥片は、寸詰まりの剥片が大半だが、258bのような長さを持った縦長剥片も剥離されている。得られる剥片は、極めて小型の資料であることから、石核ではなく楔形石器に分類される可能性も考えられる。石材は黒曜石（天城柏峠群）である。

微細な剥離痕を有する剥片（第221図259～261　写真図版10）

剥片の縁辺に、微細な剥離痕を有する資料を分類した。何らかの製品の一部である資料も含まれている可能性がある。

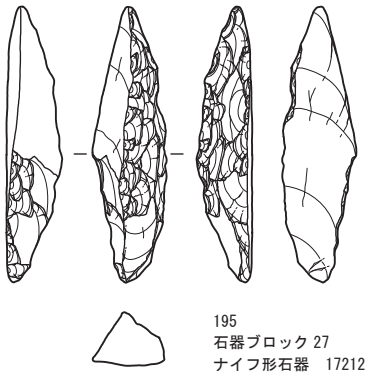
259は幅広な縦長剥片を素材として、右側縁上部に微細な剥離痕が確認できる。素材となった剥片はウートラパッセ気味であり、背面には下方向からの剥離面が見て取れる。石材は黒曜石（天城柏峠群）である。

260は小型の幅広剥片の末端部に、微細な剥離痕が確認できる。また、上部は折損しており、折断面からの微細な剥離が背面に確認できる。石材は黒曜石（蓼科冷山群）である。

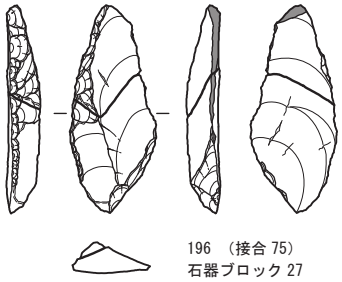
261は剥片の接合資料である。261aと261bでは異なる打面から剥離されている。261aは右側縁に微細な剥離痕が確認できる。石材は黒曜石（蓼科冷山群）である。

剥片（第222・223図262～265　写真図版10）

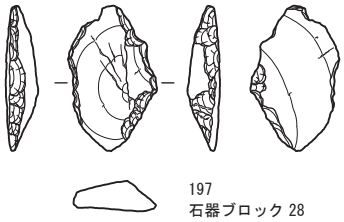
ホルンフェルス製の大型の資料を中心に取り上げた。262・263のように、縦長剥片に近い資料も確認できるが、大半は不定形な幅広剥片である。中でも263～265は、石器ブロック27内の171号礫群の東端からまとまって出土している。石器ブロックの記載でも触れたが、ここからはホルンフェルス製の大型の剥片が13点出土している。



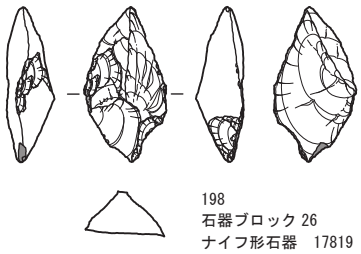
195
石器ブロック 27
ナイフ形石器　17212
ホルンフェルス



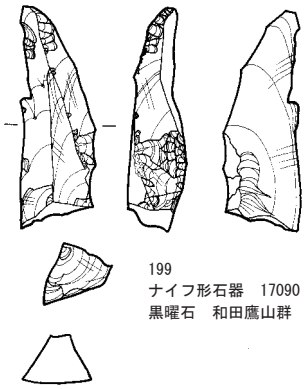
196 （接合 75）
石器ブロック 27
ナイフ形石器　18640+18654
ホルンフェルス



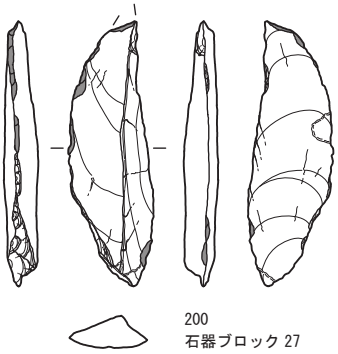
197
石器ブロック 28
ナイフ形石器　19068
ホルンフェルス



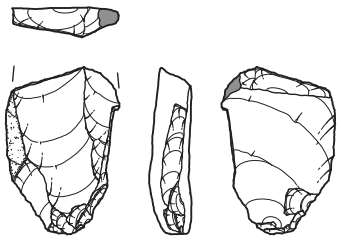
198
石器ブロック 26
ナイフ形石器　17819
黒曜石　蓼科冷山群



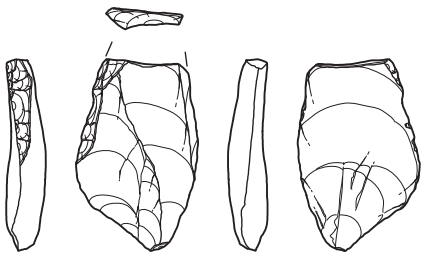
199
ナイフ形石器　17090
黒曜石　和田鷹山群



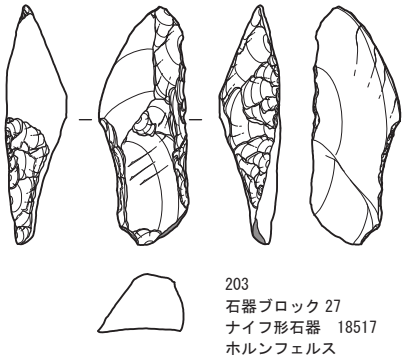
200
石器ブロック 27
ナイフ形石器　17221
ホルンフェルス



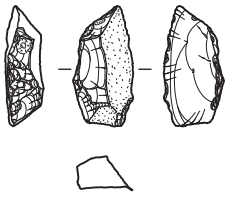
201
石器ブロック 27
ナイフ形石器　17207
ホルンフェルス



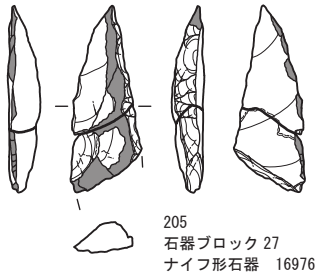
202
石器ブロック 27
ナイフ形石器　17395
ホルンフェルス



203
石器ブロック 27
ナイフ形石器　18517
ホルンフェルス

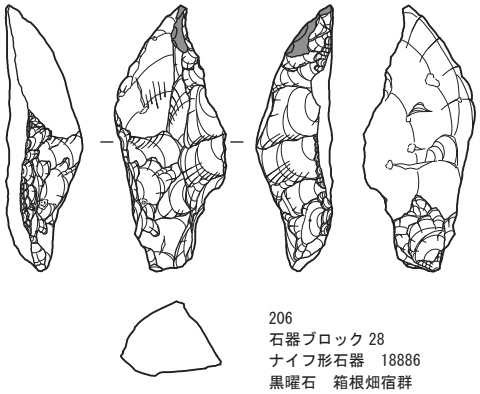


204
石器ブロック 25
ナイフ形石器　14577
黒曜石　天城柏峠群

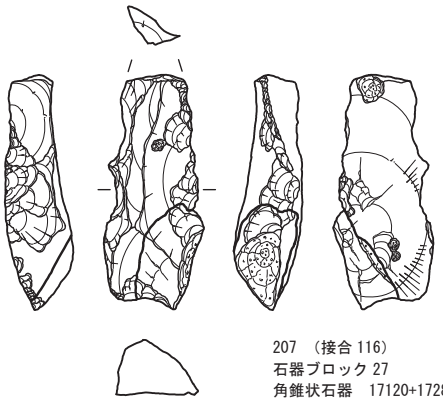


205
石器ブロック 27
ナイフ形石器　16976
ホルンフェルス

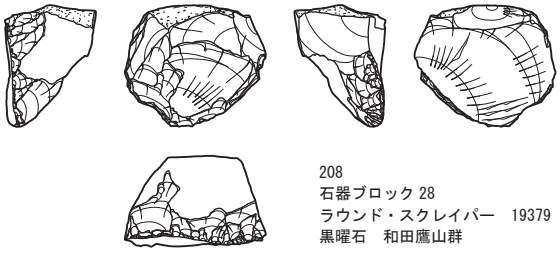
第202図　第Ⅷ文化層　南西谷部 出土石器実測図（１）



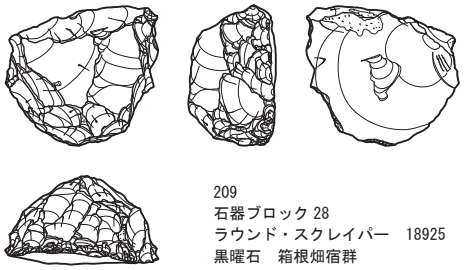
206
石器ブロック 28
ナイフ形石器　18886
黒曜石　箱根畑宿群



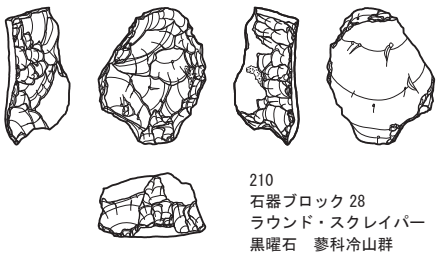
207 （接合 116）
石器ブロック 27
角錐状石器　17120+17289
黒曜石　蓼科冷山群



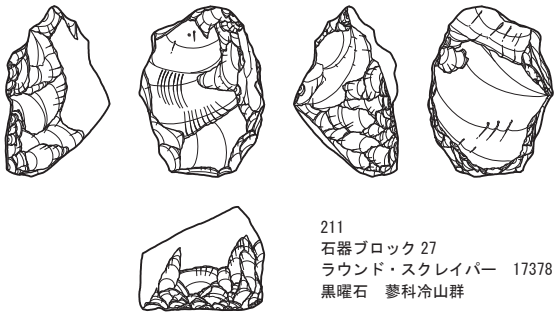
208
石器ブロック 28
ラウンド・スクレイパー　19379
黒曜石　和田鷹山群



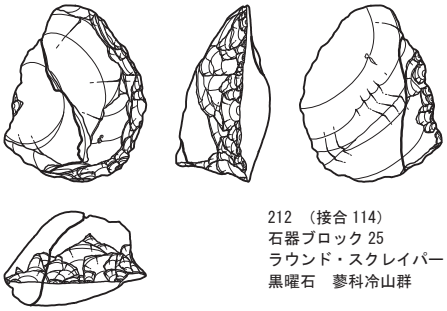
209
石器ブロック 28
ラウンド・スクレイパー　18925
黒曜石　箱根畑宿群



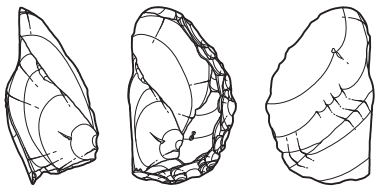
210
石器ブロック 28
ラウンド・スクレイパー　19287
黒曜石　蓼科冷山群



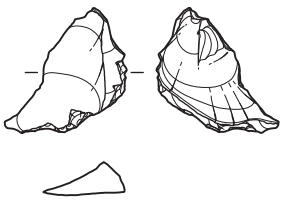
211
石器ブロック 27
ラウンド・スクレイパー　17378
黒曜石　蓼科冷山群



212 （接合 114）
石器ブロック 25
ラウンド・スクレイパー
黒曜石　蓼科冷山群

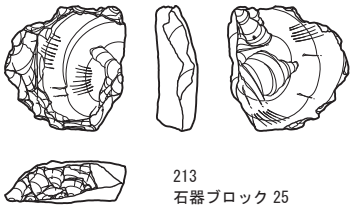


212a （接合 114）
石器ブロック 25
ラウンド・スクレイパー　14885
黒曜石　蓼科冷山群

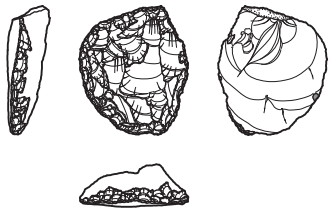


212b （接合 114）
石器ブロック 25
剥片　14900
黒曜石　蓼科冷山群

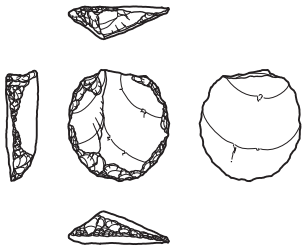
第203図　第Ⅷ文化層　南西谷部 出土石器実測図（２）



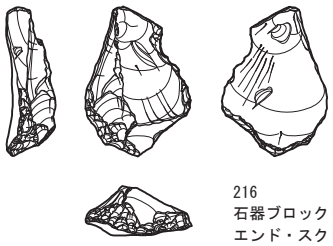
213
石器ブロック 25
ラウンド・スクレイパー　13864
黒曜石　蓼科冷山群



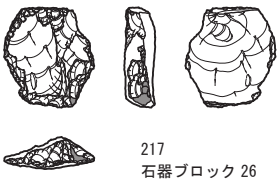
214
石器ブロック 28
ラウンド・スクレイパー　20048
黒曜石　和田鷹山群



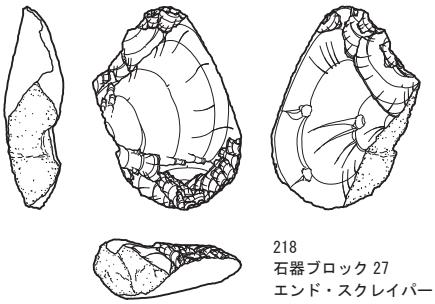
215
石器ブロック 27
ラウンド・スクレイパー　18636
黒曜石　蓼科冷山群



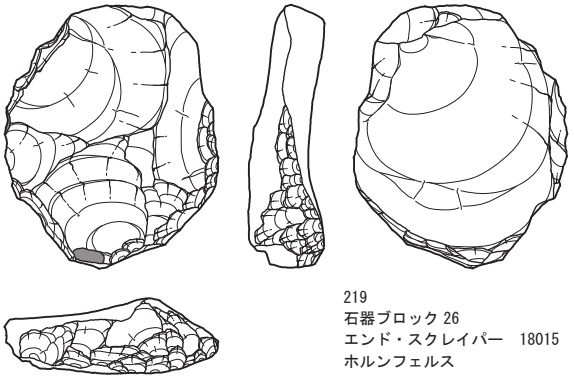
216
石器ブロック 27
エンド・スクレイパー　17405
黒曜石　蓼科冷山群



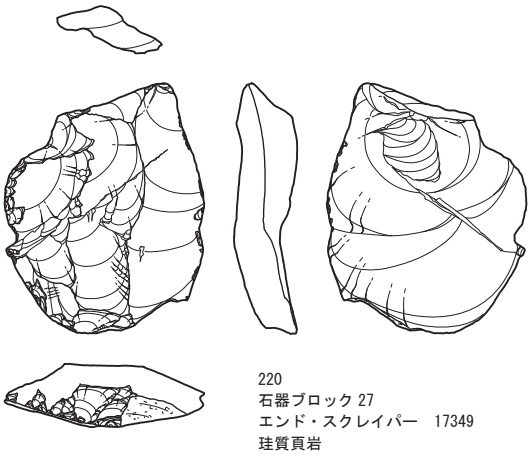
217
石器ブロック 26
エンド・スクレイパー　17725
黒曜石　蓼科冷山群



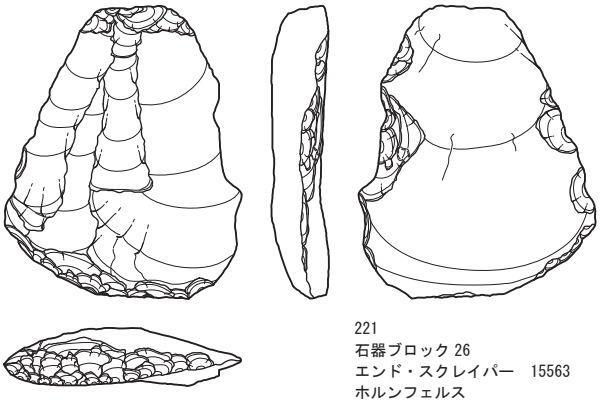
218
石器ブロック 27
エンド・スクレイパー　17150
黒曜石　蓼科冷山群



219
石器ブロック 26
エンド・スクレイパー　18015
ホルンフェルス

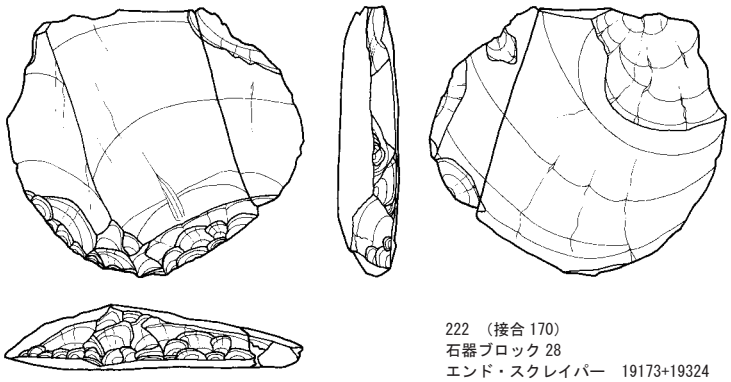


220
石器ブロック 27
エンド・スクレイパー　17349
珪質頁岩

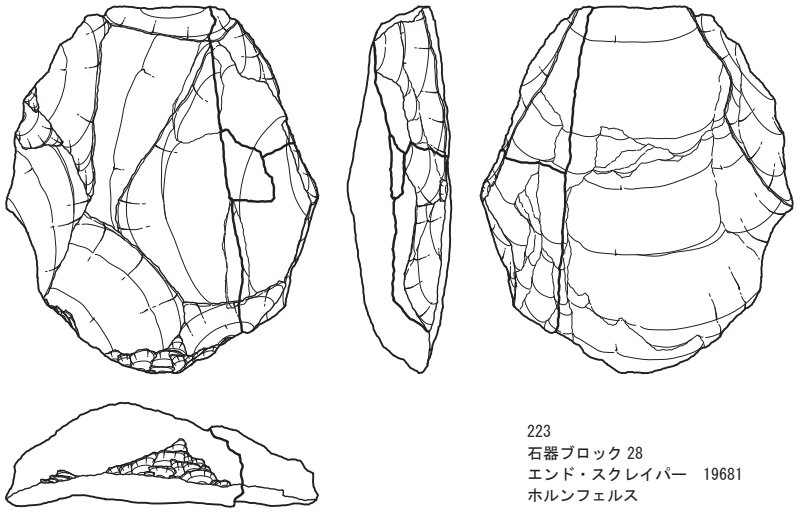


221
石器ブロック 26
エンド・スクレイパー　15563
ホルンフェルス

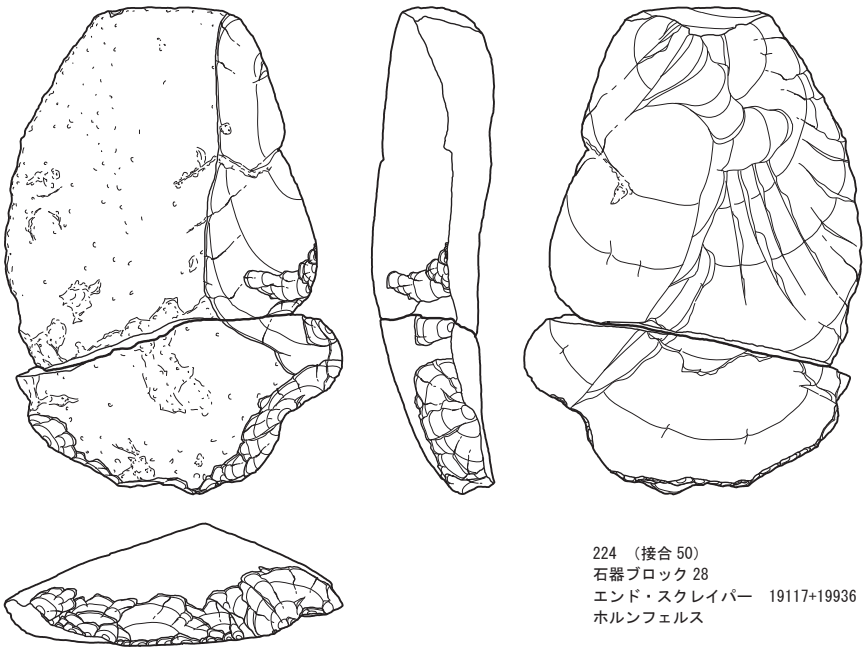
第204図　第Ⅷ文化層　南西谷部 出土石器実測図（３）



222 （接合 170）
石器ブロック 28
エンド・スクレイパー　19173+19324
ホルンフェルス



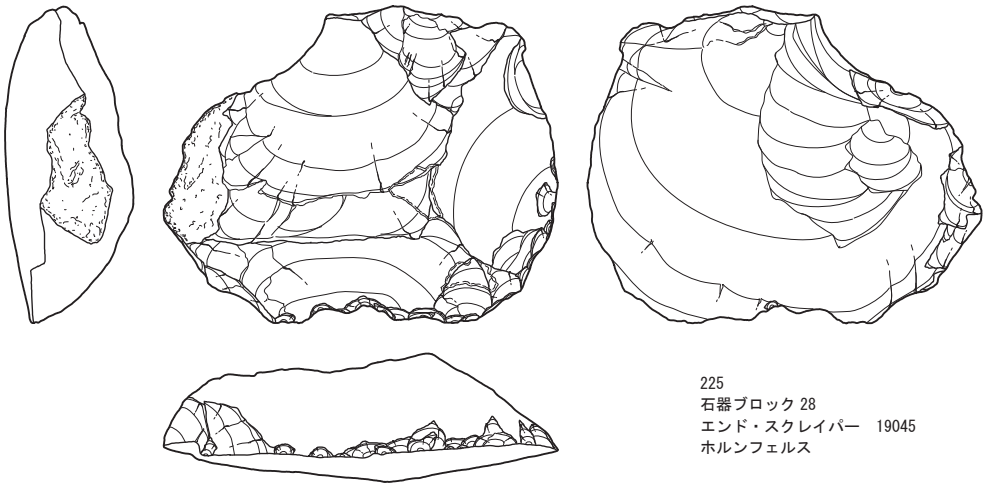
223
石器ブロック 28
エンド・スクレイパー　19681
ホルンフェルス



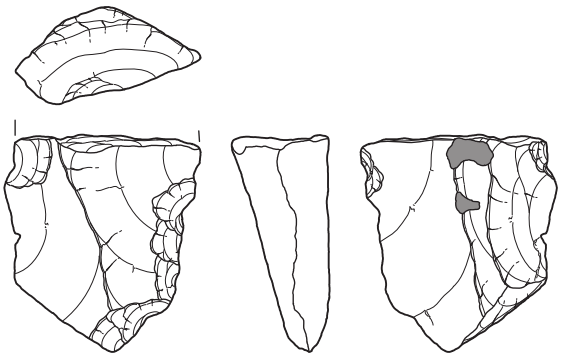
224 （接合 50）
石器ブロック 28
エンド・スクレイパー　19117+19936
ホルンフェルス

0　4:5　5cm

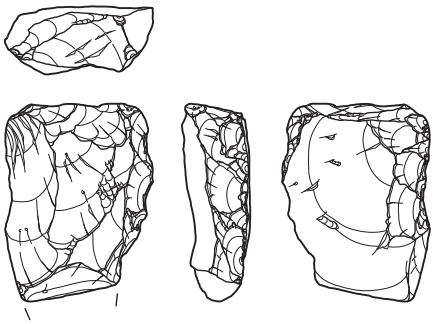
第205図　第Ⅷ文化層　南西谷部 出土石器実測図（４）



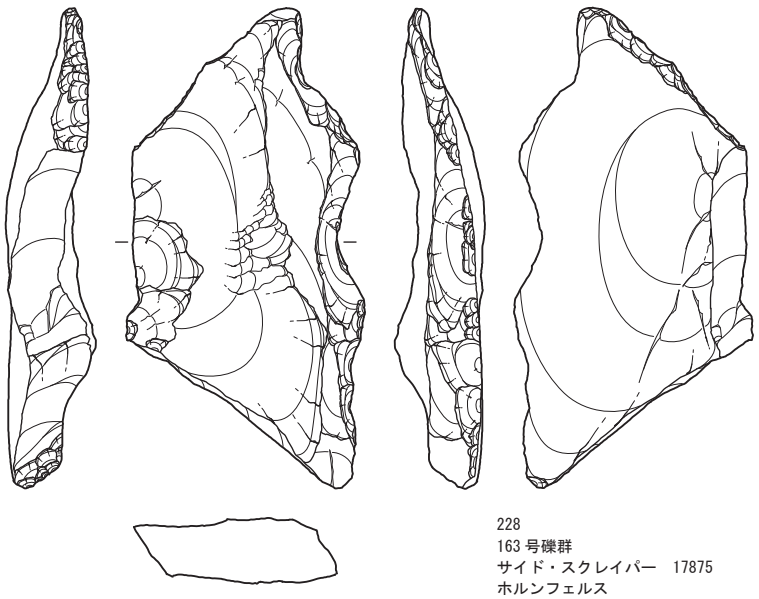
225
石器ブロック 28
エンド・スクレイパー　19045
ホルンフェルス



226
石器ブロック 27
サイド・スクレイパー　18695
ホルンフェルス

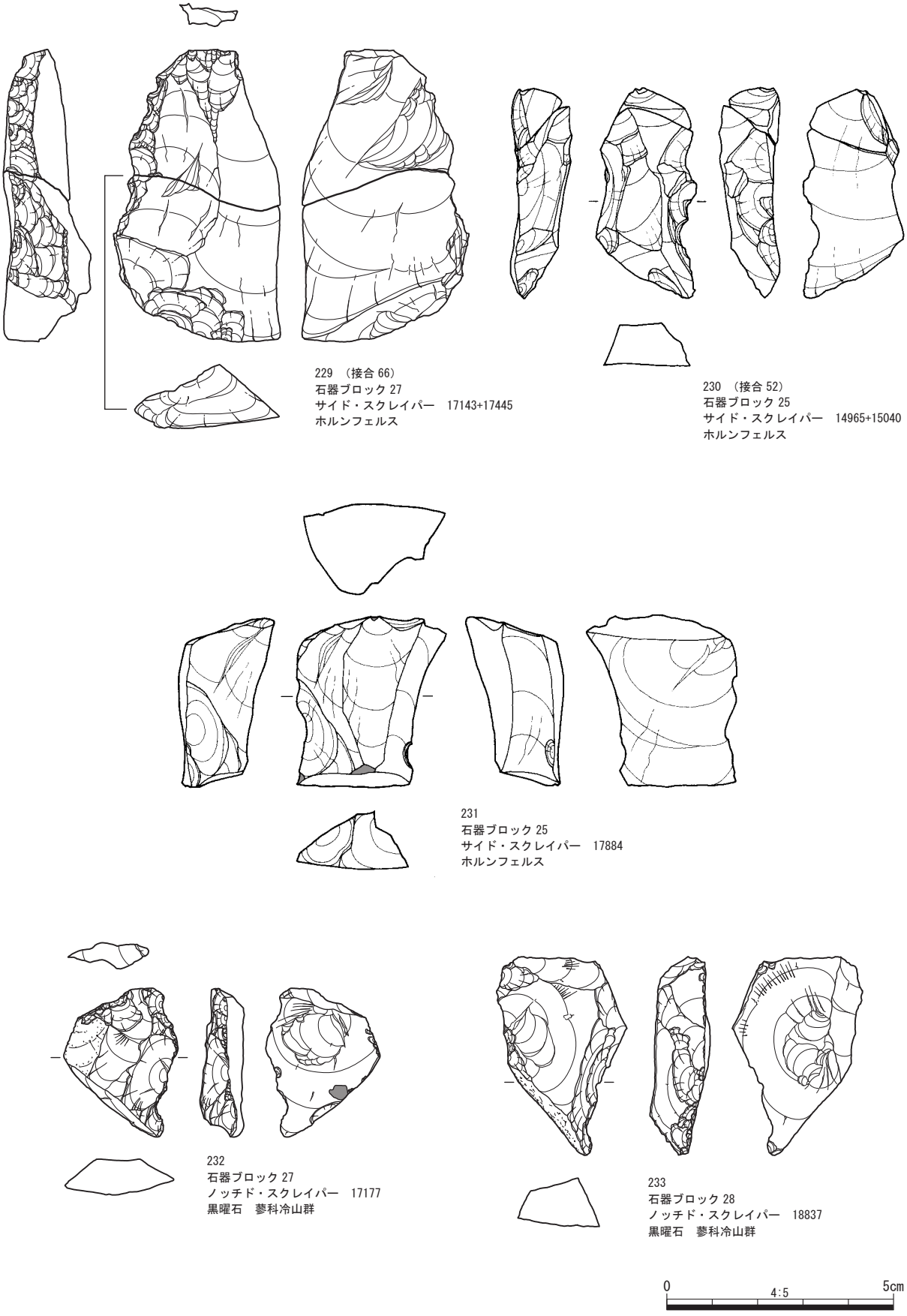


227
サイド・スクレイパー　17110
黒曜石　蓼科冷山群

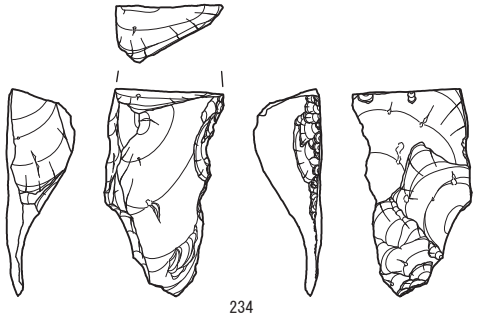


228
163 号礫群
サイド・スクレイパー　17875
ホルンフェルス

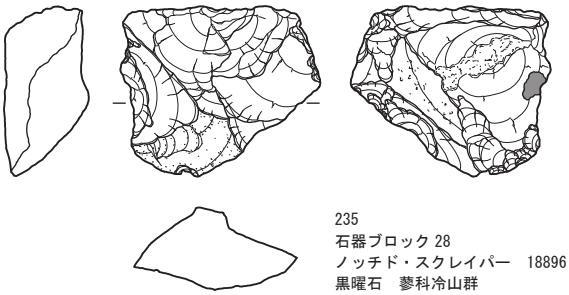
第206図　第Ⅷ文化層　南西谷部 出土石器実測図（５）



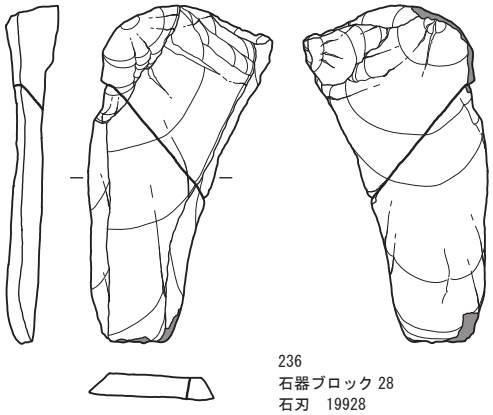
第207図　第Ⅷ文化層　南西谷部 出土石器実測図（６）



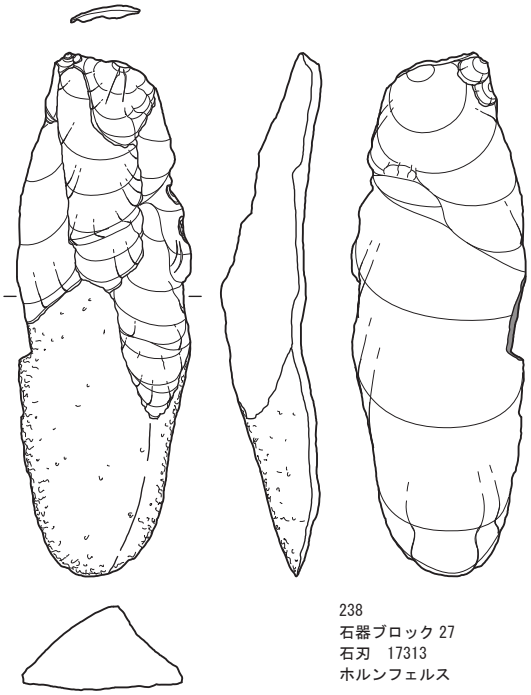
234
石器ブロック 28
ノッチド・スクレイパー　19264
黒曜石　蓼科冷山群



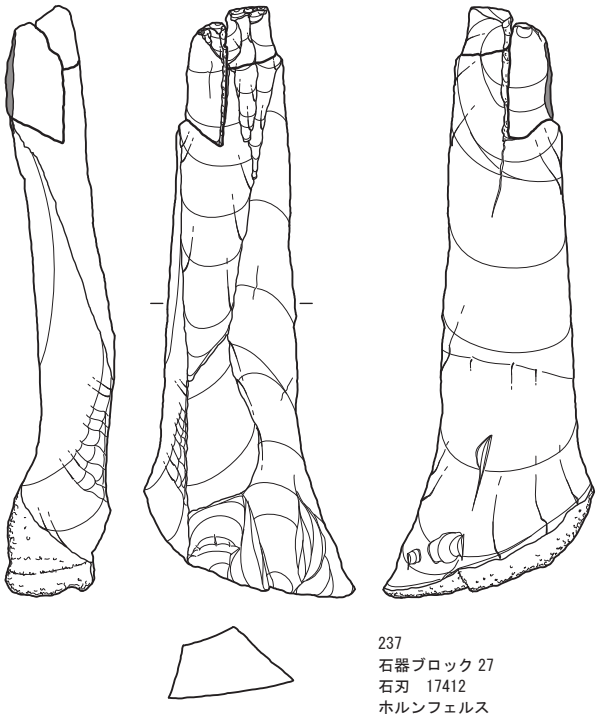
235
石器ブロック 28
ノッチド・スクレイパー　18896
黒曜石　蓼科冷山群



236
石器ブロック 28
石刃　19928
ホルンフェルス

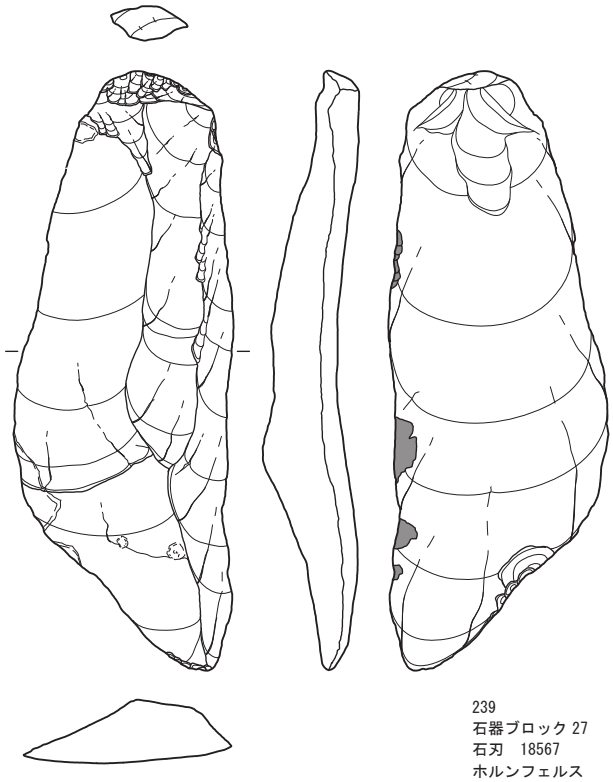


238
石器ブロック 27
石刃　17313
ホルンフェルス

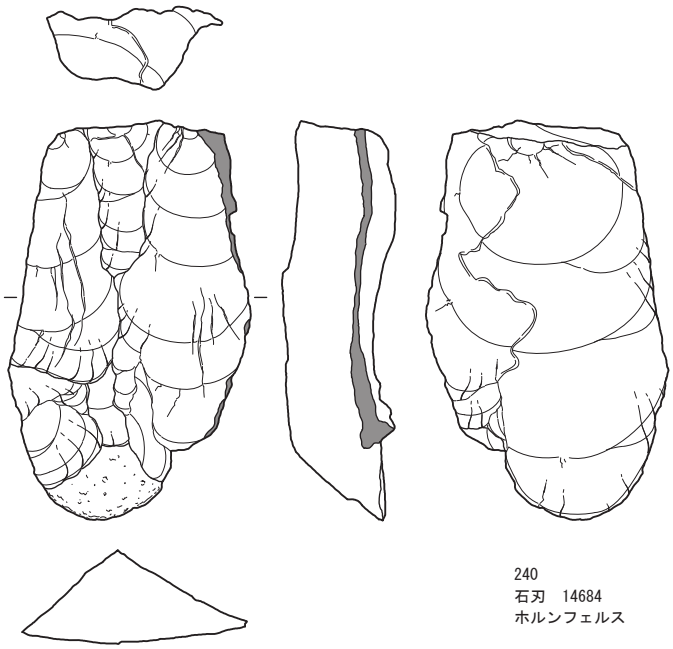


237
石器ブロック 27
石刃　17412
ホルンフェルス

第208図　第Ⅷ文化層　南西谷部 出土石器実測図（７）



239
石器ブロック 27
石刃　18567
ホルンフェルス

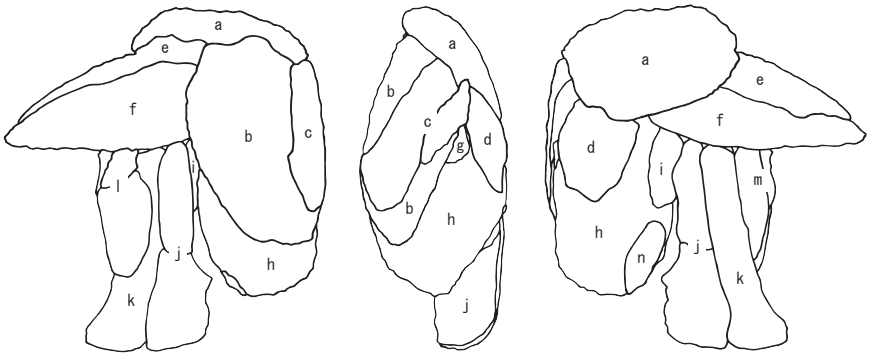


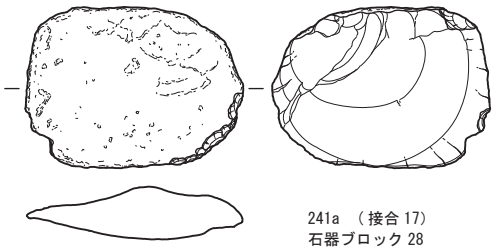
240
石刃　14684
ホルンフェルス

0　4:5　5cm

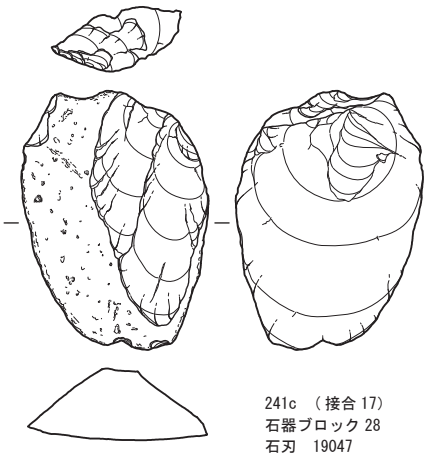
第209図　第Ⅷ文化層　南西谷部 出土石器実測図（８）

241 （接合 17）
石器ブロック 27・28
接合資料
ホルンフェルス

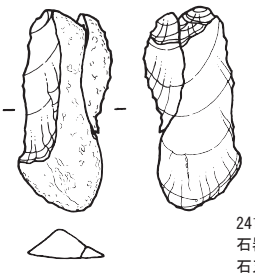




241a （接合 17）
石器ブロック 28
剥片　19294
ホルンフェルス

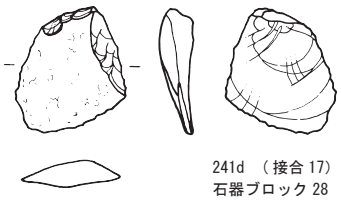


241c （接合 17）
石器ブロック 28
石刃　19047
ホルンフェルス

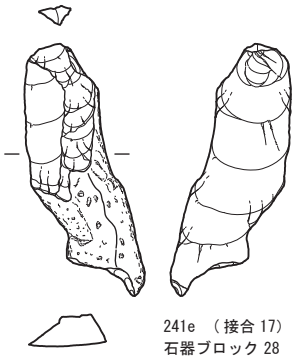


241b （接合 17）
石器ブロック 27・28
石刃　17430+19113
ホルンフェルス

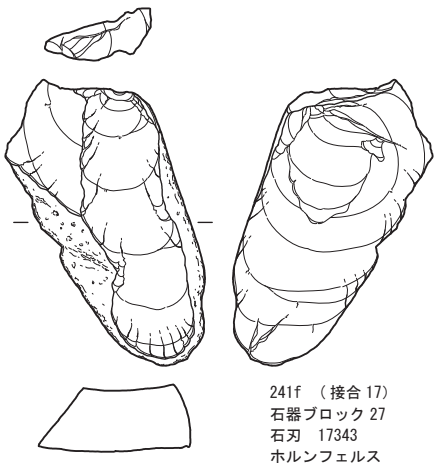
第210図　第Ⅷ文化層　南西谷部 出土石器実測図（９）



241d （接合 17）
石器ブロック 28
剥片　18989
ホルンフェルス

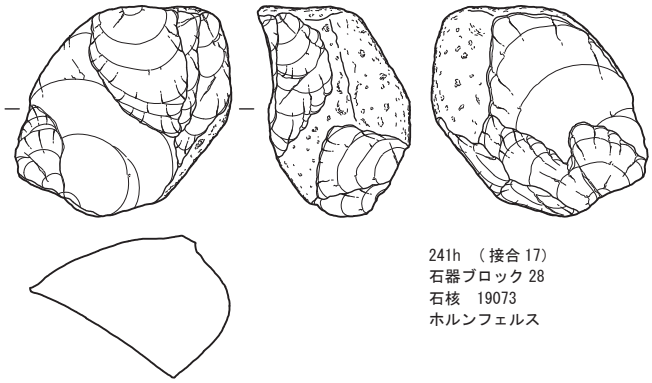


241e （接合 17）
石器ブロック 28
石刃　19351
ホルンフェルス

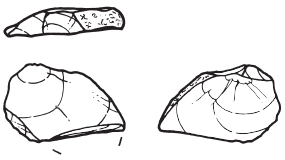


241f （接合 17）
石器ブロック 27
石刃　17343
ホルンフェルス

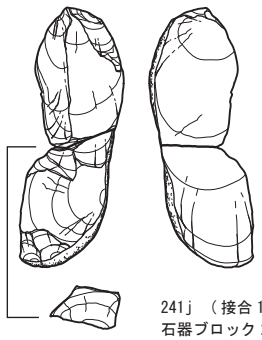
241g （接合 17）
石器ブロック 28
剥片　19150
ホルンフェルス



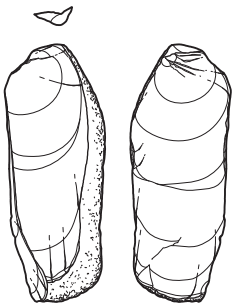
241h （接合 17）
石器ブロック 28
石核　19073
ホルンフェルス



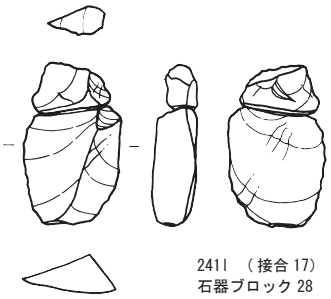
241i （接合 17）
石器ブロック 28
剥片　19178
ホルンフェルス



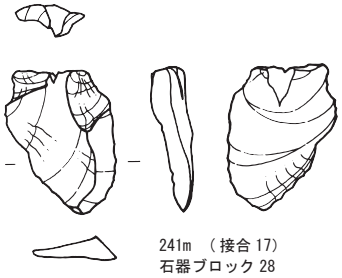
241j （接合 17）
石器ブロック 28
剥片　18986+19872
ホルンフェルス



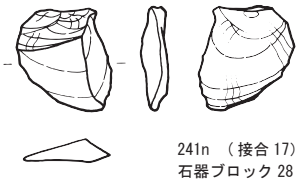
241k （接合 17）
石器ブロック 28
剥片　19249
ホルンフェルス



241l （接合 17）
石器ブロック 28
剥片　18911+19181
ホルンフェルス

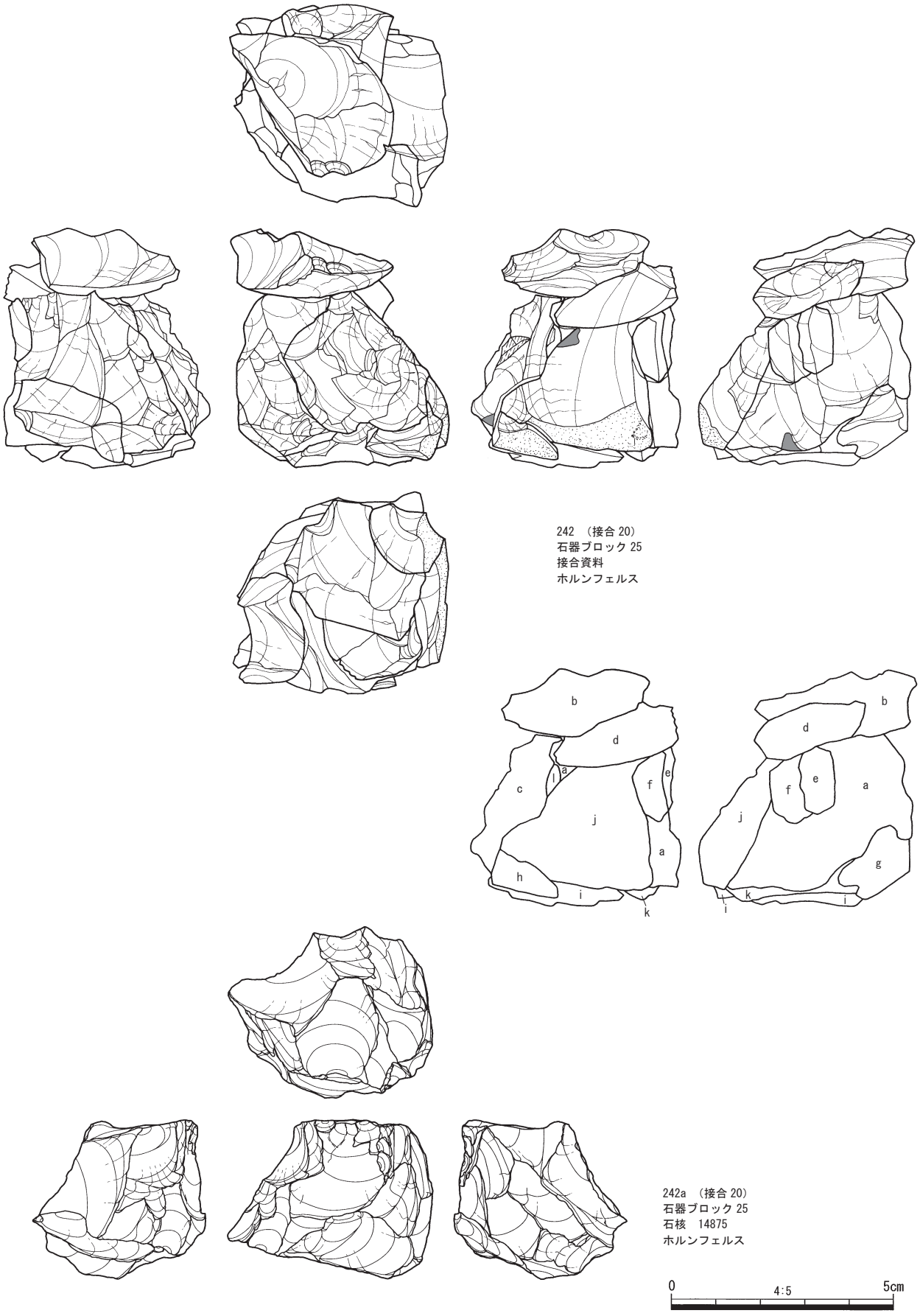


241m （接合 17）
石器ブロック 28
剥片　19272
ホルンフェルス



241n （接合 17）
石器ブロック 28
剥片　19285
ホルンフェルス

第211図　第Ⅷ文化層　南西谷部 出土石器実測図（10）

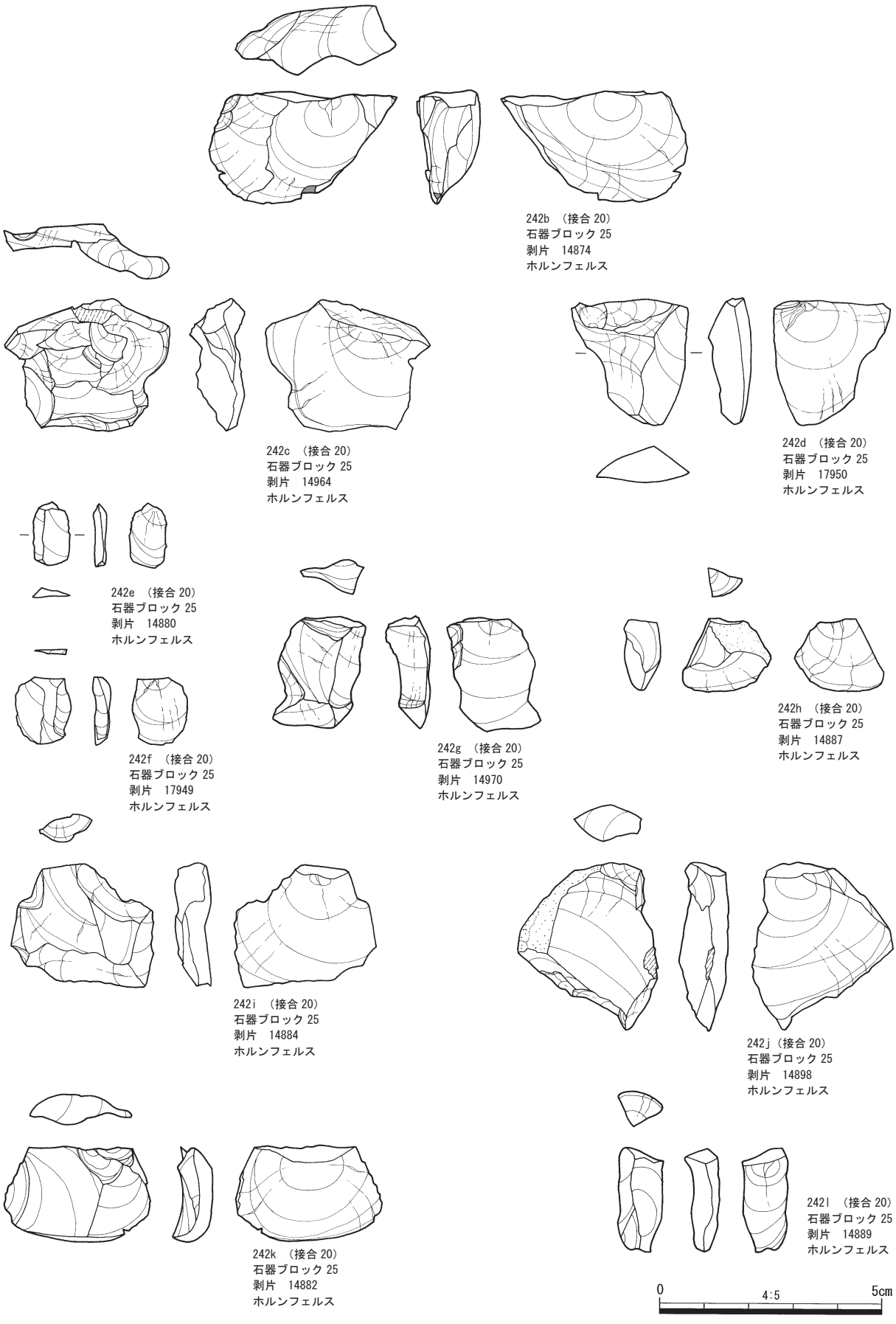


242　（接合 20）
石器ブロック 25
接合資料
ホルンフェルス

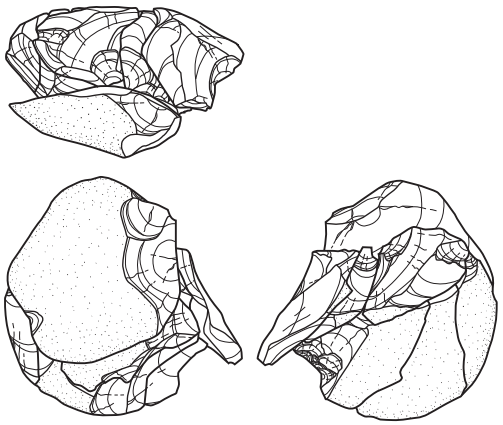
242a　（接合 20）
石器ブロック 25
石核　14875
ホルンフェルス

0　4:5　5cm

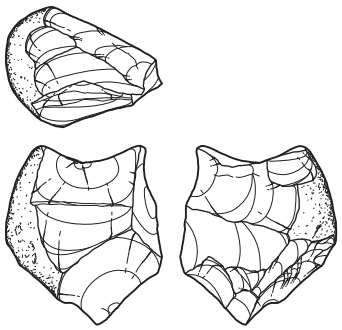
第212図　第Ⅷ文化層　南西谷部 出土石器実測図（11）



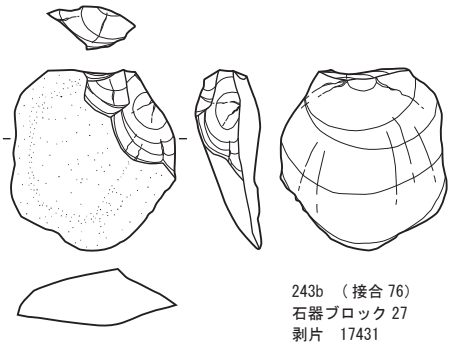
第213図　第Ⅷ文化層　南西谷部 出土石器実測図（12）



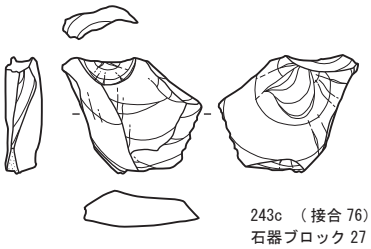
243　（接合 76）
石器ブロック 27
接合資料
ホルンフェルス



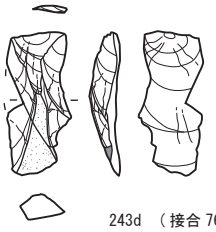
243a　（接合 76）
石器ブロック 27
石核　17201
ホルンフェルス



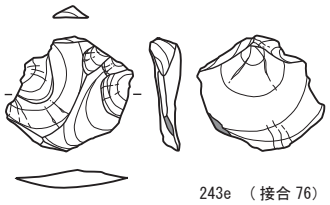
243b　（接合 76）
石器ブロック 27
剥片　17431
ホルンフェルス



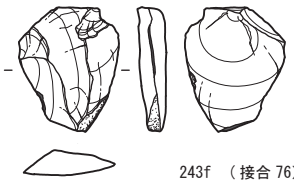
243c　（接合 76）
石器ブロック 27
剥片　17155
ホルンフェルス



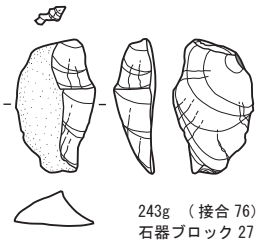
243d　（接合 76）
石器ブロック 27
剥片　17371
ホルンフェルス



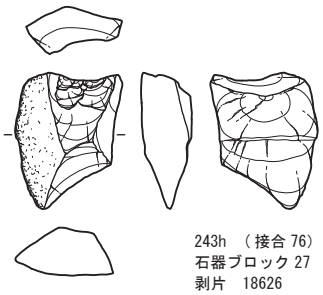
243e　（接合 76）
石器ブロック 27
剥片　17406
ホルンフェルス



243f　（接合 76）
石器ブロック 27
剥片　17450
ホルンフェルス

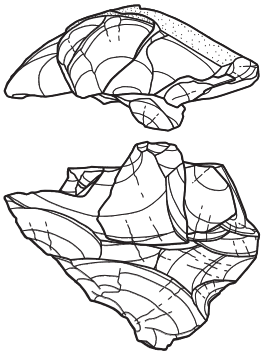


243g　（接合 76）
石器ブロック 27
剥片　16971
ホルンフェルス



243h　（接合 76）
石器ブロック 27
剥片　18626
ホルンフェルス

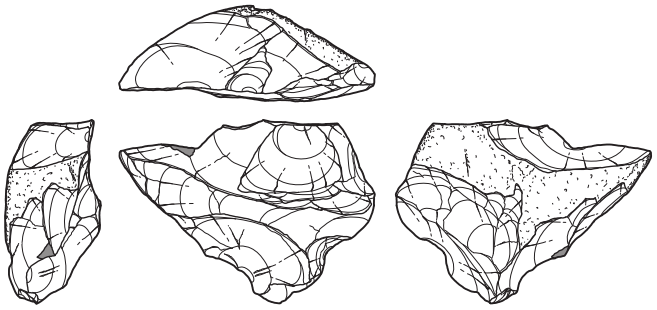
第214図　第Ⅷ文化層　南西谷部 出土石器実測図（13）



244　（接合 173）
石器ブロック 27
接合資料
ホルンフェルス

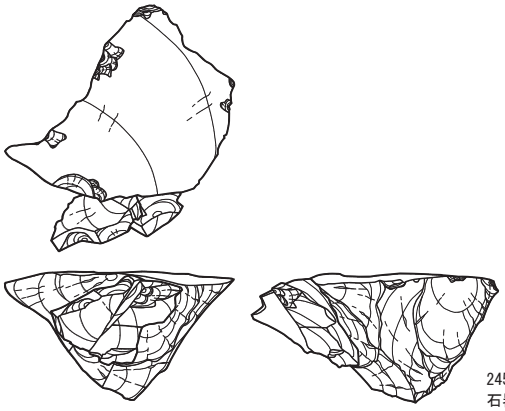
244b　（接合 173）
石器ブロック 27
剥片　17448
ホルンフェルス

244c　（接合 173）
石器ブロック 27
剥片　17232
ホルンフェルス

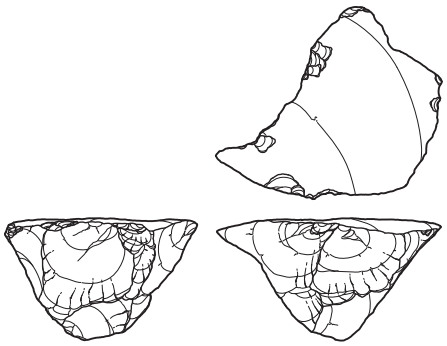


244a　（接合 173）
石器ブロック 27
石核　17415
ホルンフェルス

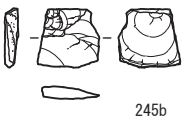
244d　（接合 173）
石器ブロック 27
剥片　17428
ホルンフェルス



245　（接合 89）
石器ブロック 28
接合資料
珪質頁岩



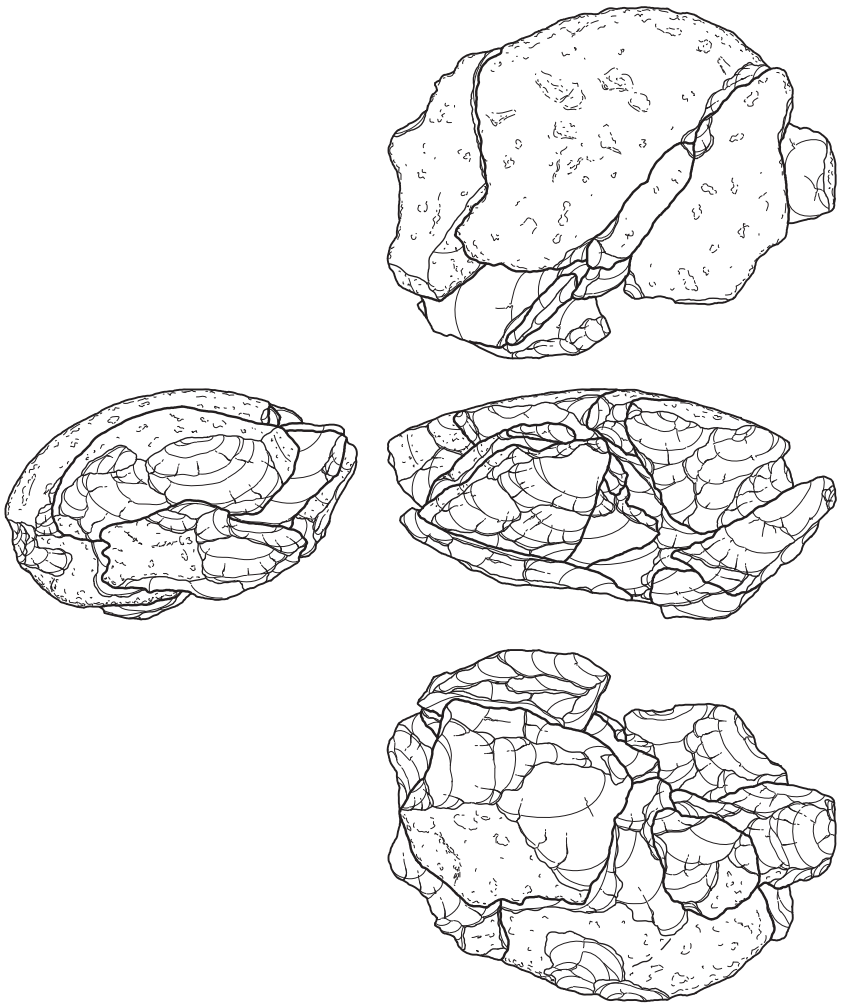
245a　（接合 89）
石器ブロック 28
石核　19006
珪質頁岩



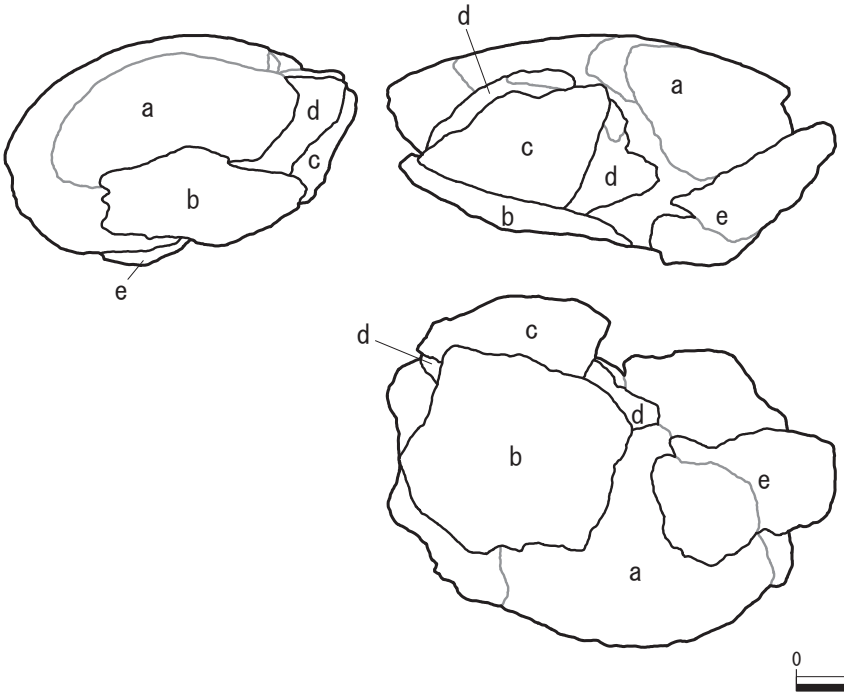
245b　（接合 89）
石器ブロック 28
剥片　18953
珪質頁岩

245c　（接合 89）
石器ブロック 28
剥片　18844+19075
珪質頁岩

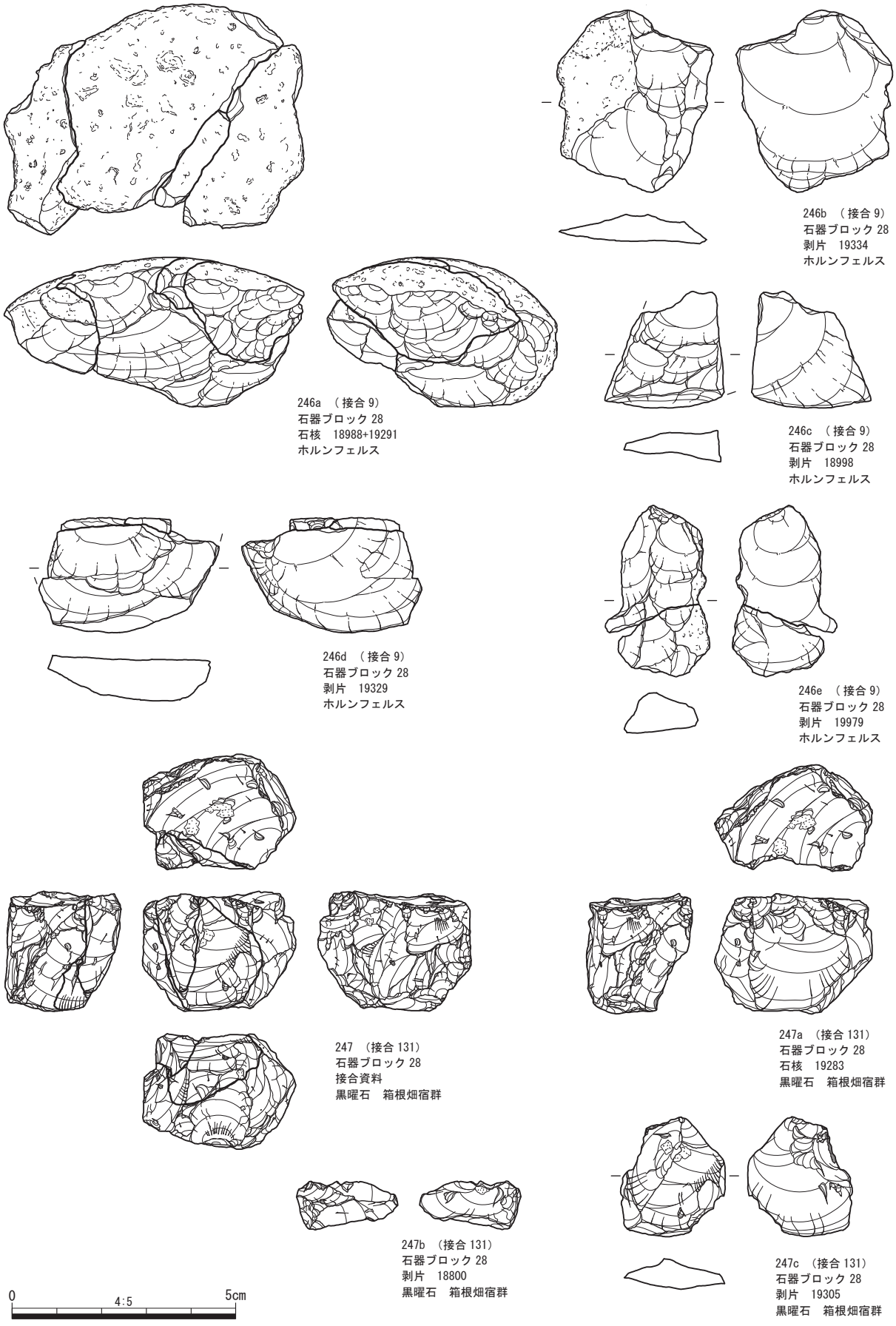
第215図　第Ⅷ文化層　南西谷部 出土石器実測図（14）



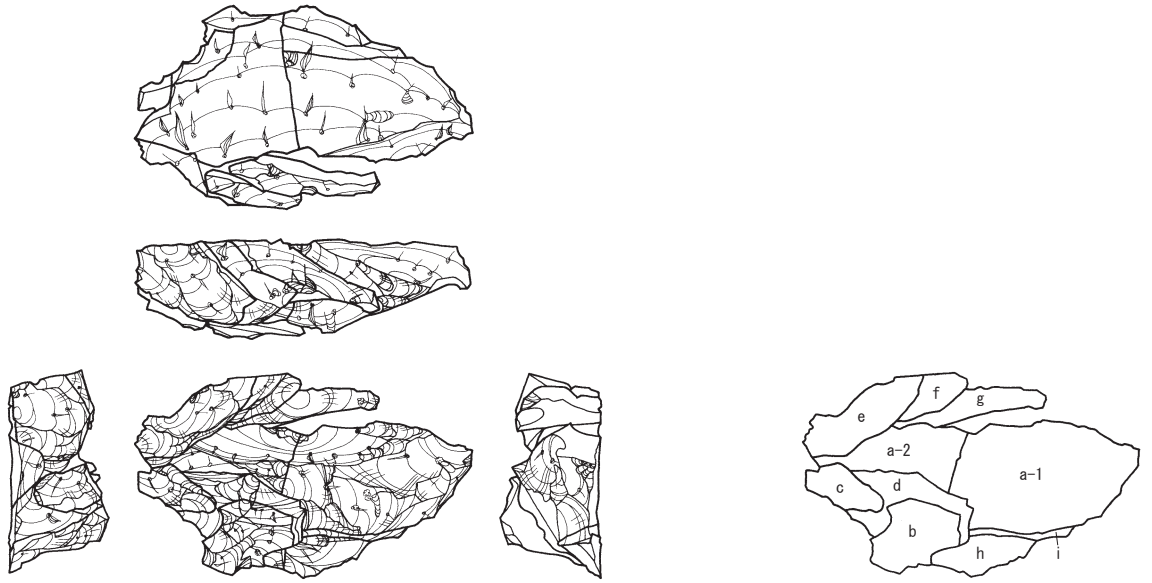
246 （接合 9）
石器ブロック 28
接合資料
ホルンフェルス



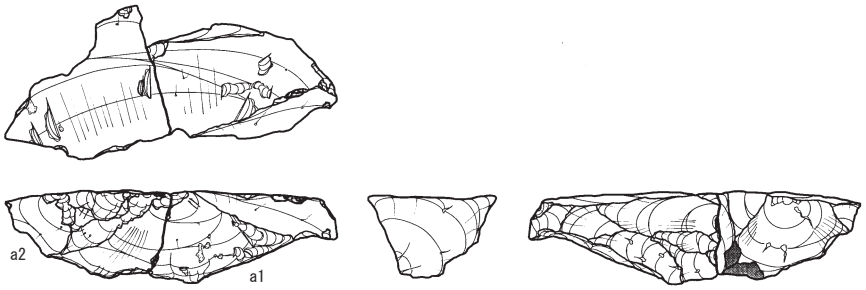
第216図　第Ⅷ文化層　南西谷部 出土石器実測図（15）



第217図　第Ⅷ文化層　南西谷部 出土石器実測図（16）

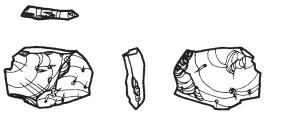


248　（接合 125）
石器ブロック 27・28
接合資料
黒曜石　箱根畑宿群

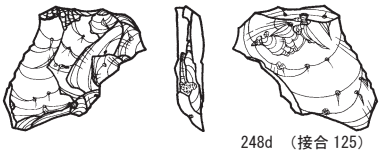


248a　（接合 125）
石器ブロック 27・28
石核　17146+18895
黒曜石　箱根畑宿群

248b　（接合 125）
石器ブロック 27
剥片　17315
黒曜石　箱根畑宿群



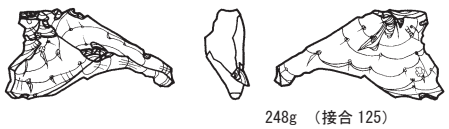
248c　（接合 125）
石器ブロック 27
剥片　19472
黒曜石　箱根畑宿群



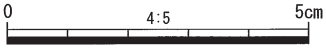
248d　（接合 125）
石器ブロック 27
剥片　17332
黒曜石　箱根畑宿群

248e　（接合 125）
石器ブロック 27
剥片　17250
黒曜石　箱根畑宿群

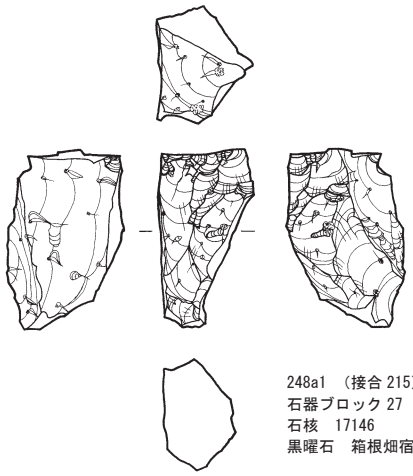
248f　（接合 125）
石器ブロック 27
剥片　17335
黒曜石　箱根畑宿群



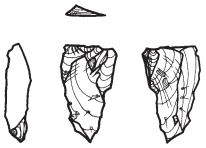
248g　（接合 125）
石器ブロック 27
剥片　18630
黒曜石　箱根畑宿群



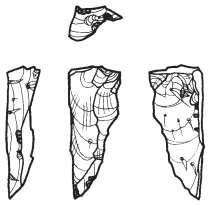
第218図　第Ⅷ文化層　南西谷部 出土石器実測図（17）



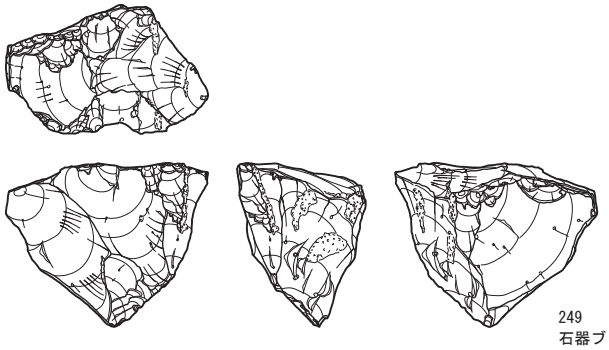
248a1　（接合 215）
石器ブロック 27
石核　17146
黒曜石　箱根畑宿群



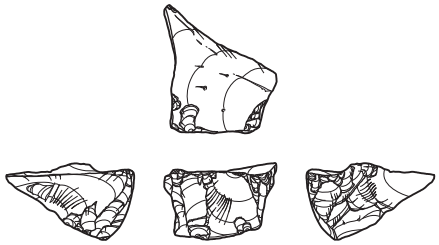
248h　（接合 215）
石器ブロック 27
剥片　18527
黒曜石　箱根畑宿群



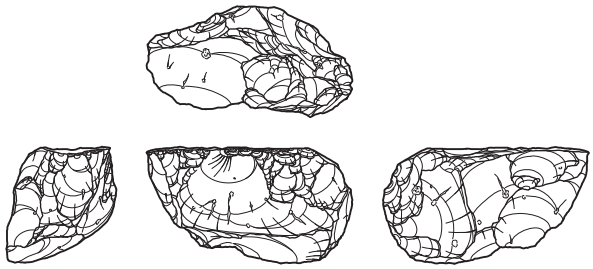
248i　（接合 215）
石器ブロック 28
剥片　18884
黒曜石　箱根畑宿群



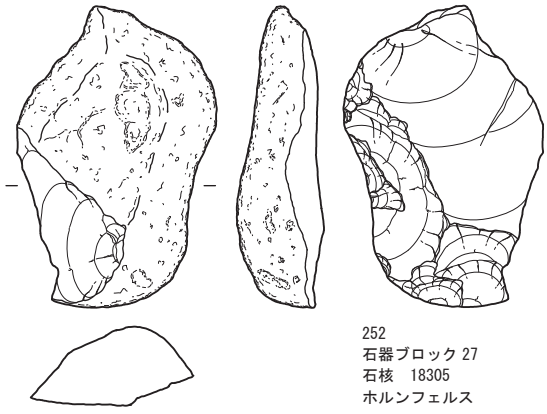
249
石器ブロック 28
石核　19308
黒曜石　蓼科冷山群



250
石器ブロック 28
石核　18890
黒曜石　蓼科冷山群

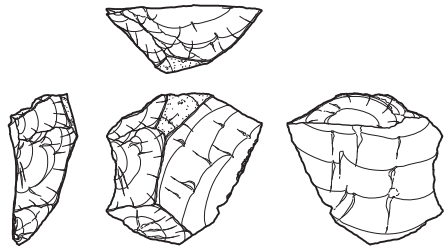


251
石器ブロック 28
石核　18991
黒曜石　箱根畑宿群

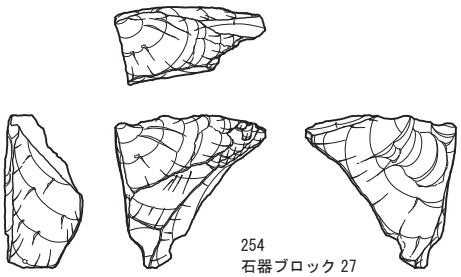


252
石器ブロック 27
石核　18305
ホルンフェルス

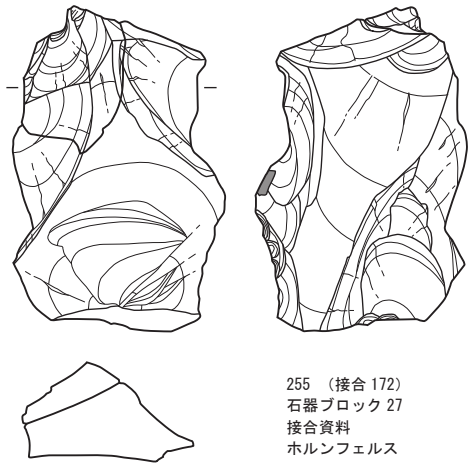
第219図　第Ⅷ文化層　南西谷部 出土石器実測図（18）



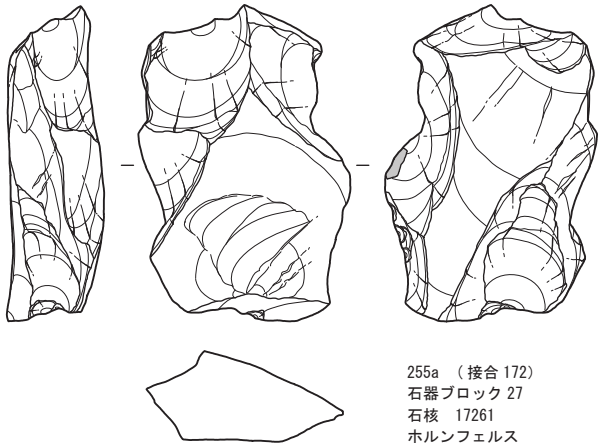
253
石器ブロック 28
石核　19140
黒曜石　蓼科冷山群



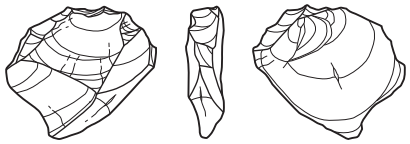
254
石器ブロック 27
石核　17379
黒曜石　蓼科冷山群



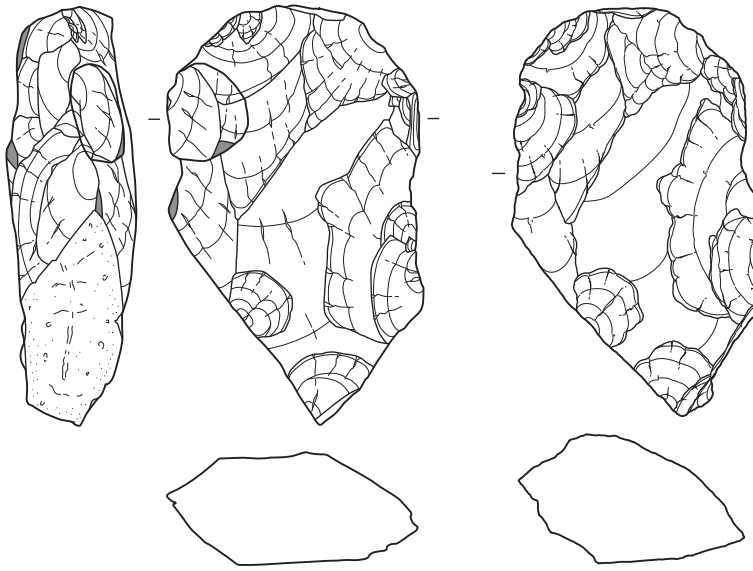
255　（接合 172）
石器ブロック 27
接合資料
ホルンフェルス



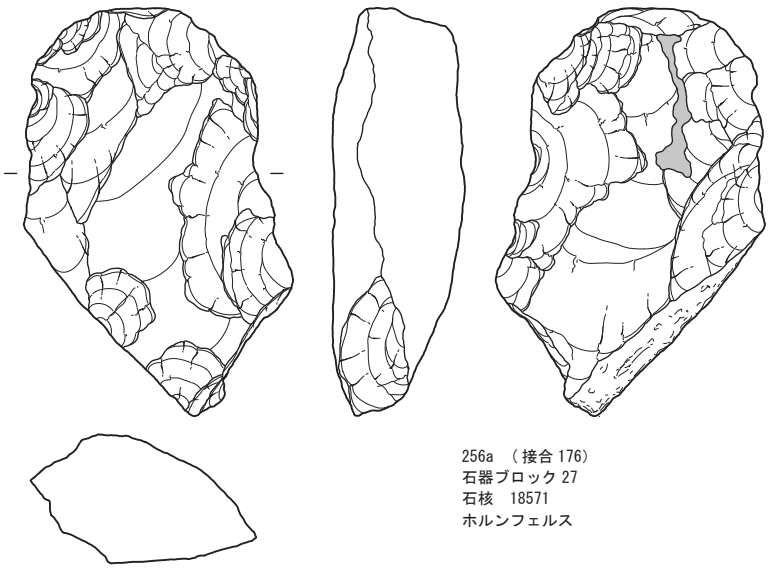
255a　（接合 172）
石器ブロック 27
石核　17261
ホルンフェルス



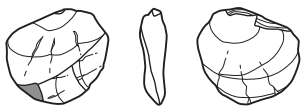
255b　（接合 172）
石器ブロック 27
剥片　17314
ホルンフェルス



256　（接合 176）
石器ブロック 27
接合資料
ホルンフェルス

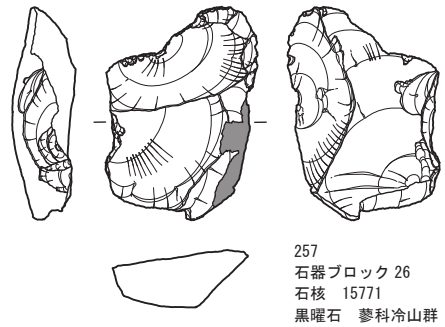


256a　（接合 176）
石器ブロック 27
石核　18571
ホルンフェルス

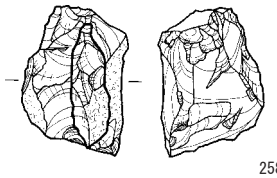


256b　（接合 176）
石器ブロック 27
剥片　17277
ホルンフェルス

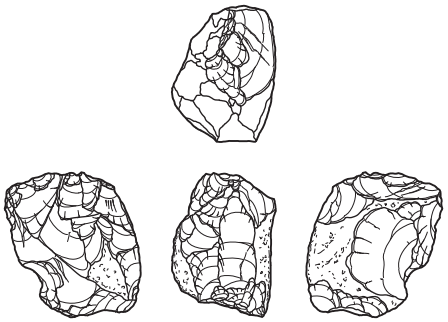
第220図　第Ⅷ文化層　南西谷部 出土石器実測図（19）



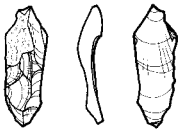
257
石器ブロック 26
石核　15771
黒曜石　蓼科冷山群



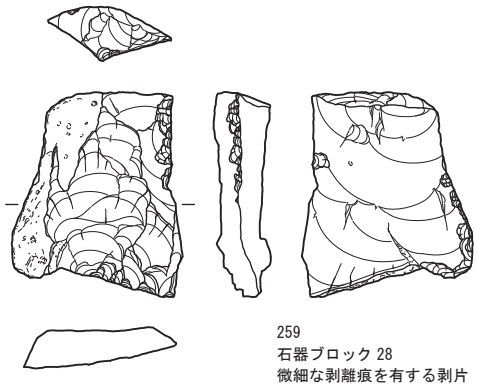
258　（接合 178）
石器ブロック 28
接合資料
黒曜石　天城柏峠群



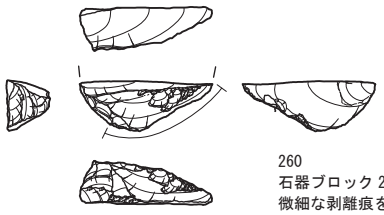
258a　（接合 178）
石器ブロック 28
石核　18842
黒曜石　天城柏峠群



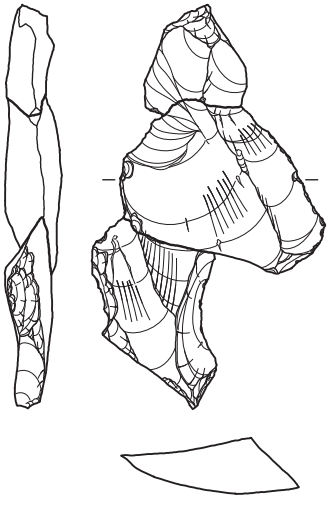
258b　（接合 178）
石器ブロック 28
剥片　19972
黒曜石　天城柏峠群



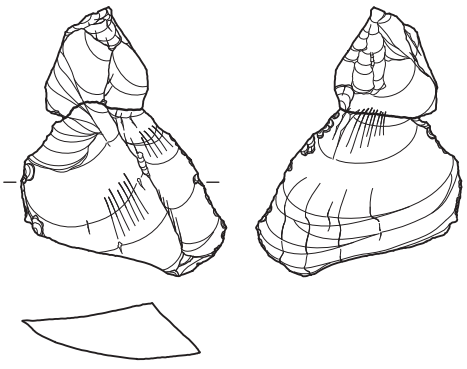
259
石器ブロック 28
微細な剥離痕を有する剥片　19278
黒曜石　天城柏峠群



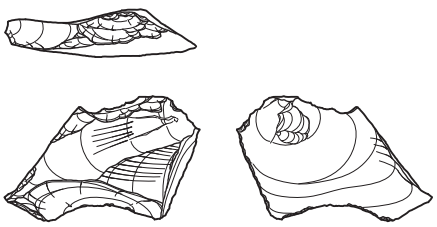
260
石器ブロック 27
微細な剥離痕を有する剥片　17399
黒曜石　蓼科冷山群



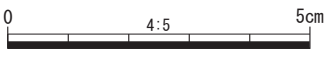
261　（接合 117）
石器ブロック 25・26
接合資料
黒曜石　蓼科冷山群



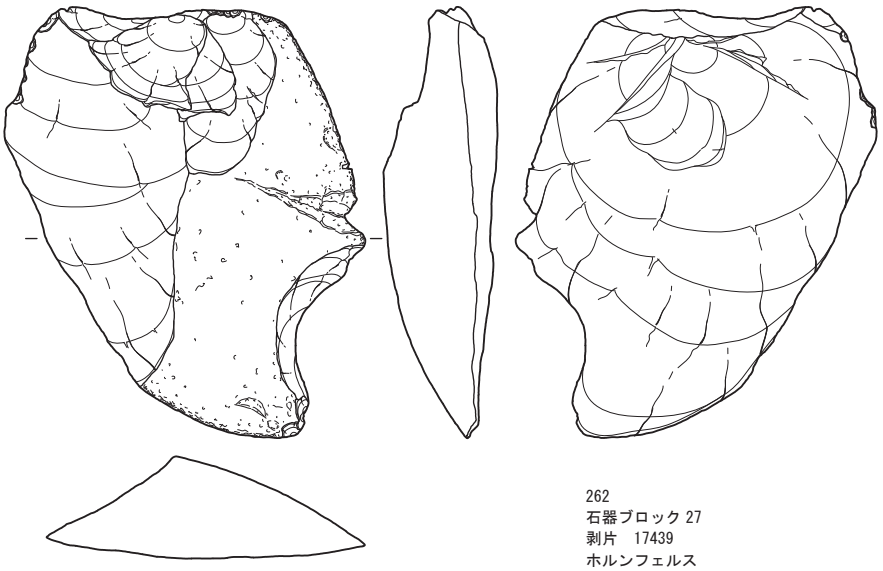
261a　（接合 117）
石器ブロック 25・26
微細な剥離痕を有する剥片　17889+18024
黒曜石　蓼科冷山群



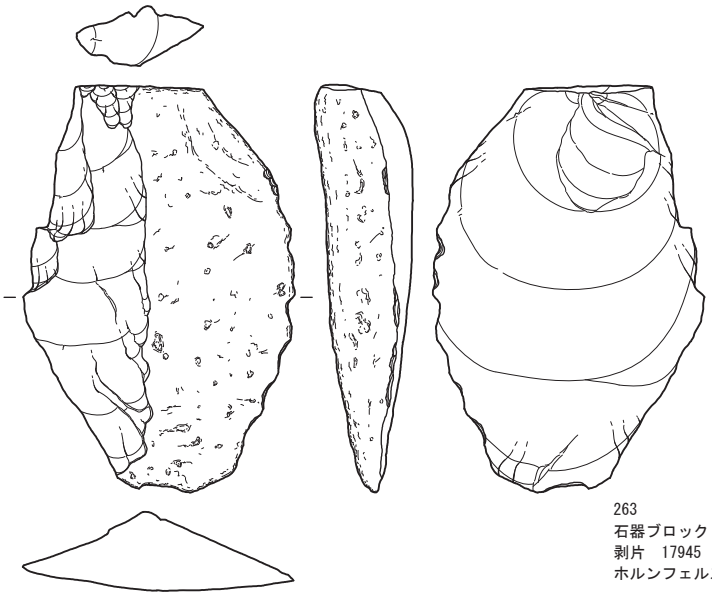
261b　（接合 117）
石器ブロック 26
剥片　15558
黒曜石　蓼科冷山群



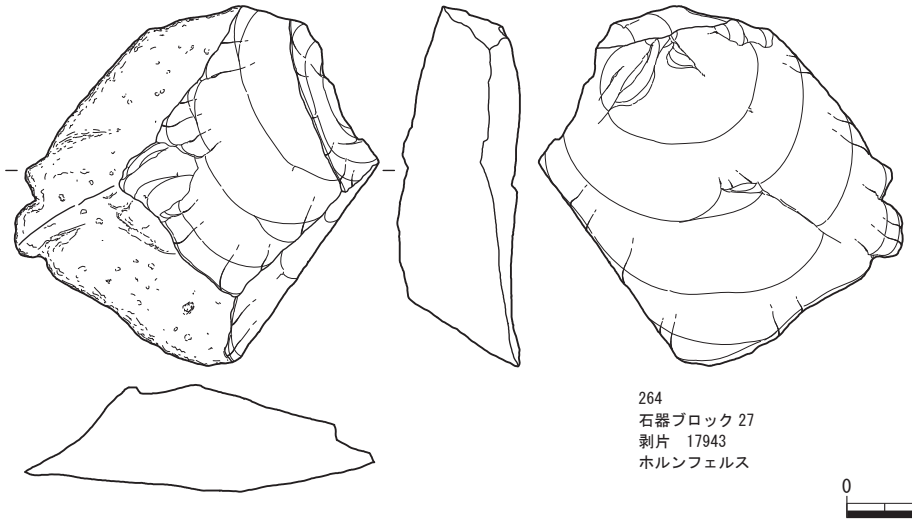
第221図　第Ⅷ文化層　南西谷部 出土石器実測図（20）



262
石器ブロック 27
剥片　17439
ホルンフェルス



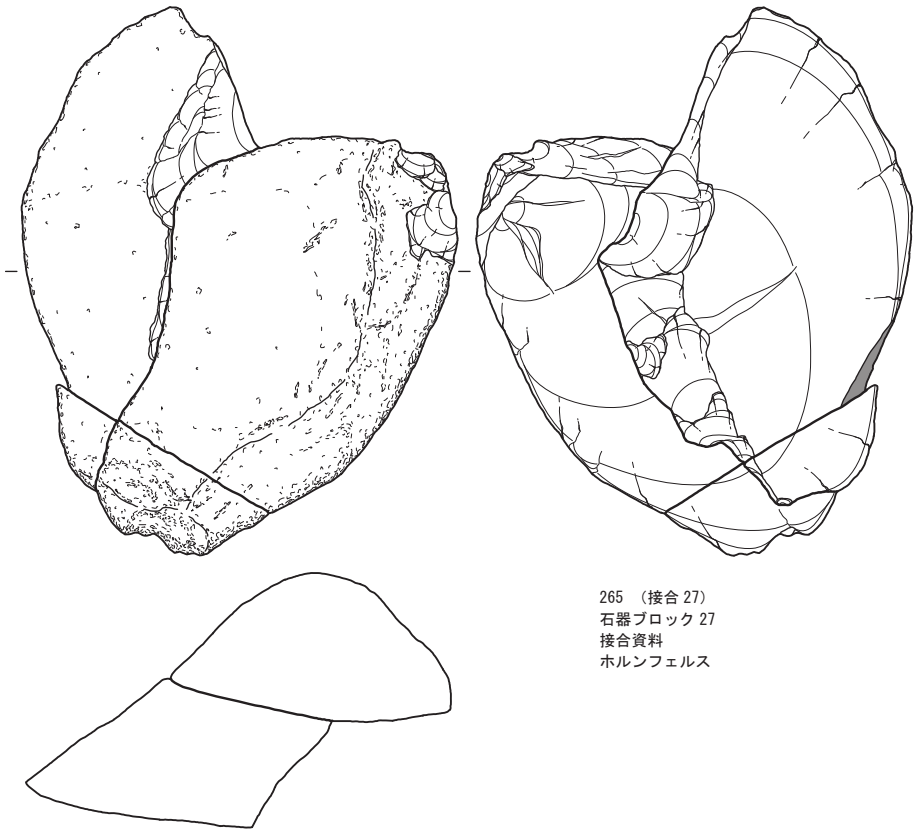
263
石器ブロック 27
剥片　17945
ホルンフェルス



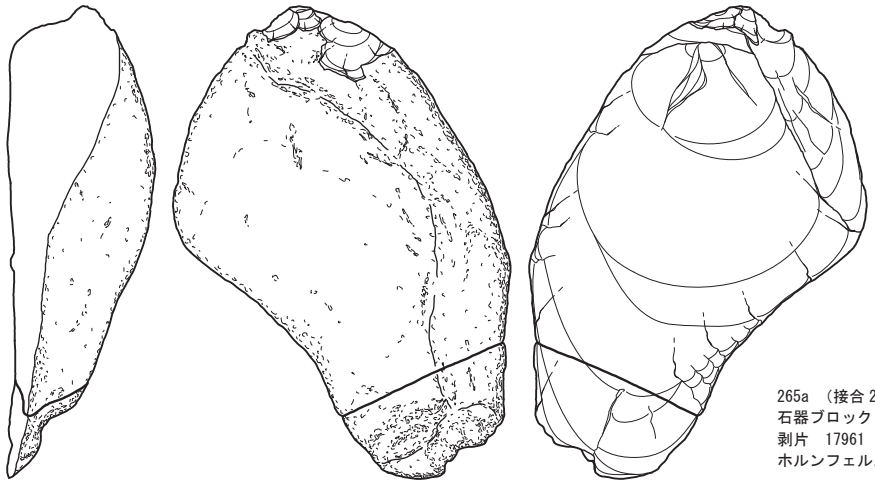
264
石器ブロック 27
剥片　17943
ホルンフェルス

0　1:2　5cm

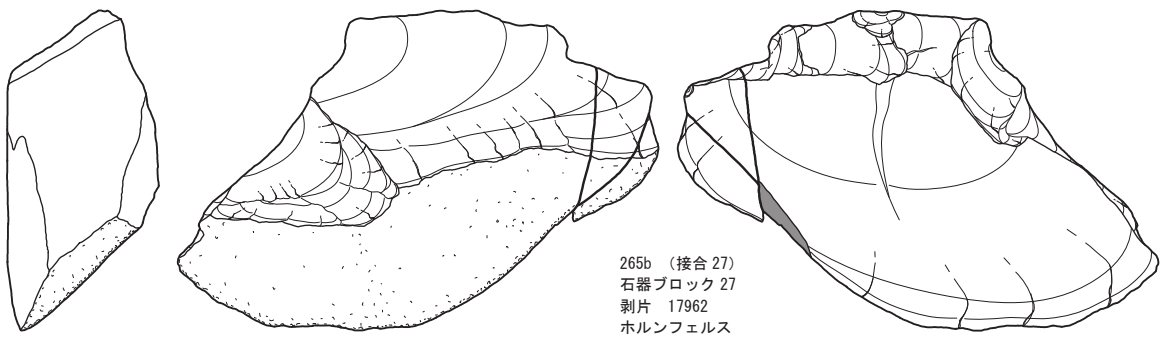
第222図　第Ⅷ文化層　南西谷部 出土石器実測図（21）



265　（接合 27）
石器ブロック 27
接合資料
ホルンフェルス



265a　（接合 27）
石器ブロック 27
剥片　17961
ホルンフェルス



265b　（接合 27）
石器ブロック 27
剥片　17962
ホルンフェルス

0　1:2　5cm

第223図　第Ⅷ文化層　南西谷部 出土石器実測図（22）

報　告　書　抄　録

ふ　り　が　な	ひがしのいせきに　だいにとうめいなんばーひゃくよんじゅうさんちてん　きゅうせっきじだい～じょうもんじだいそうそうきへん　だいいちぶんさつ
書　　名	東野遺跡Ⅱ　第二東名No.143地点　旧石器時代～縄文時代草創期編　第１分冊
副　書　名	第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シ　リ　ー　ズ　名	静岡県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第45集
編　著　者　名	柴田亮平・勝又直人
編　集　機　関	静岡県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23番20号　　TEL 054－262－4261㈹
発　行　年　月　日	2014年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
東野遺跡 確認調査その１	静岡県駿東郡 長泉町東野 字八分平269－2他	22342		35° 10′ 9″	138° 52′ 54″	20000925 ～ 20010330	1,116	確認調査
東野遺跡 本調査Ⅰ期						20011220 ～ 20020331	3,308	記録保存調査
東野遺跡 確認調査その２						20020801 ～ 20020925	186	確認調査
東野遺跡 本調査Ⅱ期						20020902 ～ 20030319	6,759	記録保存調査
東野遺跡 本調査Ⅲ期						20030401 ～ 20040319	13,475	記録保存調査
東野遺跡 本調査Ⅳ期						20040412 ～ 20060310	15,792	記録保存調査
東野遺跡 本調査Ⅴ期						20070918 ～ 20071105	851	記録保存調査

所収遺跡	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東野遺跡	集落	旧石器時代	石器ブロック20基・礫群206基・配石54基・炭化物集中40基・土坑36基	ナイフ形石器・角錐状石器・尖頭器・細石器・スクレイパー・石刃など	調査区南部の第Ⅲ黒色帯から谷部に沿って土坑列が検出された。
		縄文時代草創期		有舌尖頭器・尖頭器	

要　約	調査区南部では、第Ⅲ黒色帯下部で谷部に沿った土坑列が検出された。このように配置された土坑は、世界的に見ても類例が殆ど確認できない。当時の生活復元を試みる上で、貴重な資料である。また、第Ⅰ黒色帯～休場層直下黒色帯にかけて、南西谷部で大量の礫群が検出された。生活における谷部の利用を考える上で、こちらも貴重な資料である。

静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第45集

東野遺跡Ⅱ

第二東名№143地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

長泉町－13
（第１分冊）

平成26年３月31日発行

編集・発行　静岡県埋蔵文化財センター
〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23－20
TEL　054－262－4261 ㈹
FAX　054－262－4266
印　刷　所　みどり美術印刷株式会社
〒410-0058　沼津市沼北町２丁目16番19号
TEL　055－921－1839 ㈹